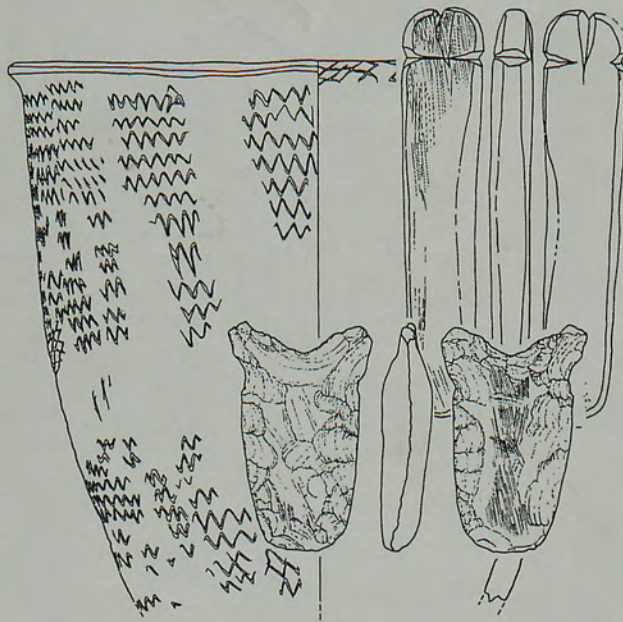


熊本県文化財調査報告第148集

# 無田原遺跡

—県営農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

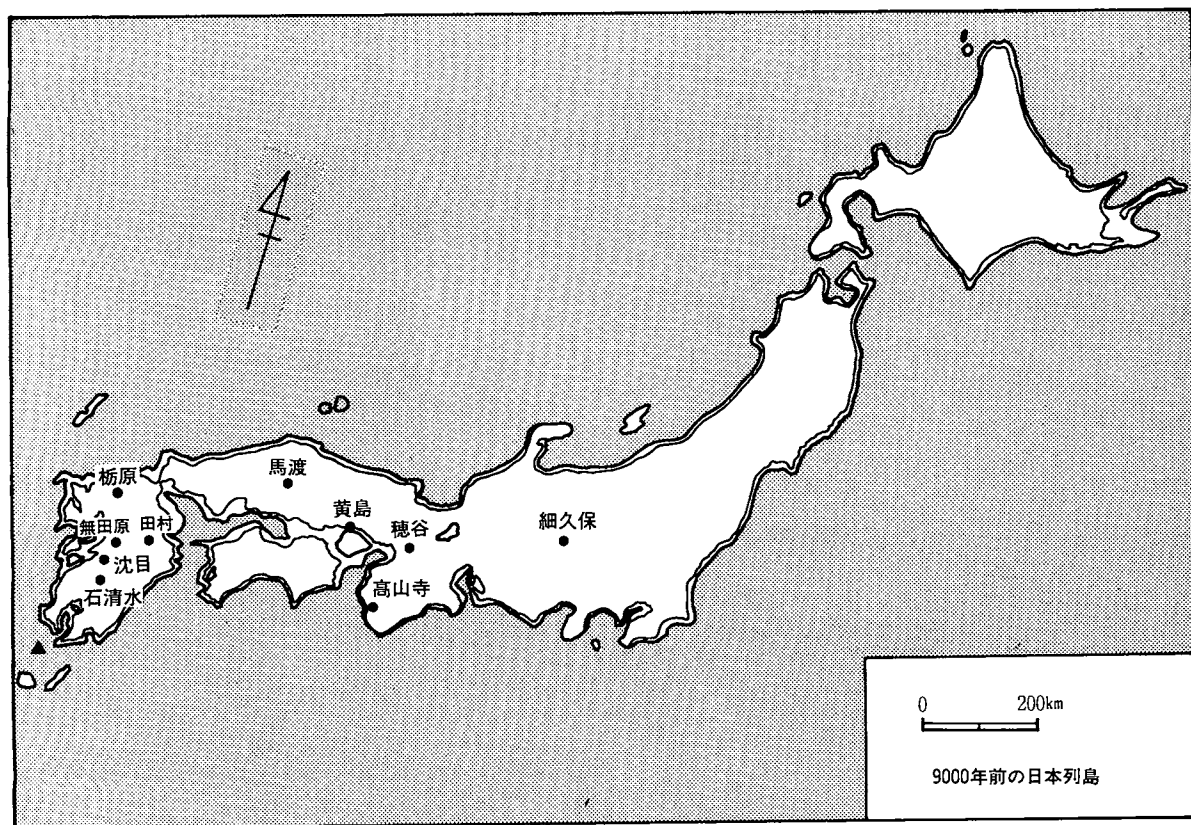


1995.3

熊本県教育委員会

む た ばる い せき  
無 田 原 遺 跡

—熊本県菊池郡旭志村大字麓所在の遺跡—



1995.3

熊本県教育委員会

## 序 文

農業の近代化をめざす県営農業農村整備事業は、県下各地で実施されていますが、施工面積が広範囲におよぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきています。熊本県教育委員会としましては、その文化財の取扱いについて、事前に地元や農政部局と協議し、保存できるものについては極力保存に努めていますが、やむを得ず破壊される場合には発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

ここに報告する菊池郡旭志村無田原遺跡の発掘調査は、平成元年度県営土地改良事業に伴って実施したものであります。県指定史跡「無田原遺跡」に隣接する部分でもあり、保存と調査という両面からその取扱いを慎重に検討しましたが、確認調査の結果、遺溝・遺物の遺存状況は芳しいものではなく、設計変更等の協議を経て、今回の発掘調査に至りました。

調査の結果、先土器時代から弥生時代までの、多種多様な遺溝や遺物が出土しました。中でも、縄文時代早期（8000年前）の「男性器形石製品」と呼ばれる資料は、全国的にも類例が少なく、当時の精神生活を考える上で貴重な資料だと思われれます。こうした調査成果を報告するにあたり、この成果が学術的研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財愛護などに役立てられることを願ってやみません。

最後に、埋蔵文化財の発掘調査に、御協力いただいた県農政部、県菊池事務所耕地課、旭志村、旭志村教育委員会および地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成7年3月31日

熊本県教育長 東 坂 力





## 例 言

1. 本書は、県営土地改良事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 発掘調査は、熊本県菊池郡旭志村大字麓字馬糞塚に所在する無田原遺跡が対象で、県農政部の依頼を受けて、熊本県教育委員会がおこなった。
3. 遺物の整理は、熊本県文化財収蔵庫でおこなった。なお、遺物の保管も文化財収蔵庫である。
4. 遺跡の本調査は、平成元年度に実施し、整理・報告書作成は、平成5・6年度におこなった。
5. 本書は、調査・遺跡・成果・総括ごとに章をかえ、また、古い時代から順に節をかえて記載している。
6. 本書の地形図は、県農政部から提供を受けたものをもとにして、作成した。
7. 現地調査での実測および写真撮影は、木崎康弘がおこなった。遺構の製図は、中田弥生・丹生英里でおこなった。遺物の実測は、主に木崎が、そして、土器の一部を木下俊江・中田がおこない、製図は石器を木崎、土器を木下・中田がおこなった。遺物の写真は、木崎が撮影した。
8. 本書の執筆は、木崎がおこなった。
9. 本書の編集は、熊本県教育委員会で木崎がおこなった。

## 凡 例

1. 現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。

炉穴	10分の1	抉入石器	3分の2
集石	10分の1	石錐	3分の2

また、本書収録の際には以下の縮尺となった。

炉穴	20分の1	楔形石器	3分の2
集石	20分の1	打製石斧	3分の2
		石錘	3分の2
		有溝砥石	3分の2
		磨石・敲石	3分の2
		石皿・台石	3分の2
		二次加工ある不定形石器	3分の2
		使用痕ある剥片	3分の2
		石製品	3分の2
		石核	3分の2
2. 遺構の方位は、磁北である。
3. 出土遺物の番号は、各挿図ごとに1番から付した。なお、縮尺は、次のとおりである。

土器	3分の1		
石器			
石鏃	原寸		
尖頭器	原寸		
尖頭石器	原寸		
削器	3分の2		
4. 出土遺物の解説は本文中に記したが、縄文時代早期の石器法量については計測表に一括掲載した。

# 本文目次

序文	
例言・凡例	
第 I 章 調査の概要	
第 1 節 調査に至る経緯	1
1. 調査の契機	1
2. 事業照会と予備調査の経過	1
3. 発掘調査の進捗	1
4. 発掘調査の組織	1
第 2 節 調査の方法と経過	3
第 II 章 遺跡の概要	
第 1 節 遺跡の環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	6
第 2 節 遺跡の概要	12
1. 史跡（県指定）無田原遺跡の概要	12
2. 調査対象無田原遺跡の概要	15
第 3 節 遺跡の層位と包含層	15
第 III 章 調査とその成果	
第 1 節 先土器時代の遺物	17
1. 遺物の出土層位と位置、そしてその意義	17
2. 先土器時代の資料	17
第 2 節 縄文時代草創期の遺物	17
1. 遺物の出土層位と位置、そしてその意義	17
2. 縄文時代草創期の資料	17
第 3 節 縄文時代早期の遺構と遺物	20
1. 遺構とその位置	20
① 炉穴	20
② 集石	20
③ 礫群	24
④ 遺構の位置の特徴	24
2. 土器とその分布	26
① 押型文土器 格子目文土器とその分布	26
楕円文土器とその分布	33
山形文土器とその分布	131
異種押型文併用土器とその分布	164

② 押型文・捺糸文併用土器	175
③ 捺糸文土器	183
④ 条痕土器	210
⑤ その他の土器とそれぞれの分布	222
3. 石器とその分布	222
① 石鏃	224
② 尖頭器	224
③ 尖頭石器	224
④ 削器	228
⑤ 抉入石器	228
⑥ 石錐	228
⑦ 楔形石器	228
⑧ 打製石斧	228
⑨ 石錘 礫石錘	228
有溝石錘	255
⑩ 有溝砥石	228
⑪ 磨石・敲石	228
⑫ 石皿・台石	255
⑬ 二次加工ある不定形石器	255
⑭ 使用痕ある剝片	255
⑮ 石製品	255
⑯ 石核	259
4. 赤変礫とその分布	259
5. まとめ	261
第4節 弥生時代前期の遺物	265
1. 遺物の出土層位と位置	265
2. 弥生時代前期の資料	265
第IV章 総括	
1. 縄文時代早期の集落構成	267
2. 沈目式土器と石清水式土器—中九州西部押型文土器編年に関する予察—	268
3. 石器組成からみる食物獲得活動の特徴	276
4. 無田原遺跡の石製品が語るもの—縄文時代早期の祭祀行為の一側面—	278

参考文献

遺跡詳録表

## 挿 図 目 次

第 1 図	周辺地形図	2	第37図	橿円文土器 8～10実測図	51
第 2 図	地形断面図	6	第38図	橿円文土器11分布図	53
第 3 図	無田原遺跡周辺遺跡分布図	8	第39図	橿円文土器12分布図	54
第 4 図	史跡無田原遺跡の遺構及び遺物	13	第40図	橿円文土器13分布図	55
第 5 図	無田原遺跡	14	第41図	橿円文土器11～13実測図	56
第 6 図	基本土層図	16	第42図	橿円文土器14分布図	58
第 7 図	先土器時代石器実測図	17	第43図	橿円文土器15分布図	59
第 8 図	爪形文土器実測図	17	第44図	橿円文土器16分布図	60
第 9 図	先土器時代石器分布図	18	第45図	橿円文土器17分布図	61
第10図	爪形文土器分布図	19	第46図	橿円文土器18分布図	62
第11図	縄文時代早期遺構配置図	21	第47図	橿円文土器14～18実測図	63
第12図	炉穴実測図	22	第48図	橿円文土器19分布図	65
第13図	集石実測図	23	第49図	橿円文土器20分布図	66
第14図	縄文時代早期礫分布図	25	第50図	橿円文土器21分布図	67
第15図	縄文時代早期土器分布図	27	第51図	橿円文土器22分布図	68
第16図	格子目文土器分布図	28	第52図	橿円文土器23分布図	69
第17図	格子目文土器 1 分布図	29	第53図	橿円文土器19～23実測図	70
第18図	格子目文土器 1 実測図	30	第54図	橿円文土器24分布図	71
第19図	格子目文土器 2 分布図	31	第55図	橿円文土器25分布図	72
第20図	格子目文土器 3 分布図	32	第56図	橿円文土器26分布図	73
第21図	格子目文土器 2・3, その他実測図	33	第57図	橿円文土器27分布図	74
第22図	橿円文土器分布図	35	第58図	橿円文土器28分布図	75
第23図	橿円文土器 1 分布図	36	第59図	橿円文土器24～28分布図	76
第24図	橿円文土器 2 分布図	37	第60図	橿円文土器29～31分布図	78
第25図	橿円文土器 1・2 実測図	38	第61図	橿円文土器32～34分布図	79
第26図	橿円文土器 3 分布図	39	第62図	橿円文土器29～34実測図	80
第27図	橿円文土器 4 分布図	40	第63図	橿円文土器35～39分布図	82
第28図	橿円文土器 3・4 実測図	41	第64図	橿円文土器40・41分布図	83
第29図	橿円文土器 5 分布図	42	第65図	橿円文土器35～41実測図	84
第30図	橿円文土器 5 実測図	43	第66図	橿円文土器42～44分布図	87
第31図	橿円文土器 6 分布図	45	第67図	橿円文土器45～49分布図	88
第32図	橿円文土器 7 分布図	46	第68図	橿円文土器42～49実測図	89
第33図	橿円文土器 6・7 実測図	47	第69図	橿円文土器50～56分布図	90
第34図	橿円文土器 8 分布図	48	第70図	橿円文土器50～56実測図	91
第35図	橿円文土器 9 分布図	49	第71図	橿円文土器57～66分布図	93
第36図	橿円文土器10分布図	50	第72図	橿円文土器57～66実測図	94

第73図	橿田文土器67～70分布図	95	第113図	山形文土器 3～5 実測図	139
第74図	橿田文土器71～75分布図	96	第114図	山形文土器 6・7 分布図	140
第75図	橿田文土器67～75実測図	97	第115図	山形文土器 8 分布図	141
第76図	橿田文土器76～87分布図	100	第116図	山形文土器 6～8 実測図	142
第77図	橿田文土器76～87実測図	101	第117図	山形文土器 9～12分布図	144
第78図	橿田文土器88～100分布図	102	第118図	山形文土器 9～12実測図	145
第79図	橿田文土器88～100実測図	103	第119図	山形文土器13～17分布図	147
第80図	橿田文土器101～103分布図	104	第120図	山形文土器18・19分布図	148
第81図	橿田文土器101～103実測図	105	第121図	山形文土器20分布図	149
第82図	橿田文土器その他実測図	106	第122図	山形文土器13～20実測図	150
第83図	橿田文土器その他実測図	107	第123図	山形文土器21～23分布図	152
第84図	橿田文土器その他実測図	108	第124図	山形文土器24分布図	153
第85図	橿田文土器その他実測図	109	第125図	山形文土器25・26分布図	154
第86図	橿田文土器その他実測図	110	第126図	山形文土器21～26実測図	155
第87図	橿田文土器その他実測図	111	第127図	山形文土器27～30分布図	156
第88図	橿田文土器その他実測図	112	第128図	山形文土器31～34分布図	157
第89図	橿田文土器その他実測図	113	第129図	山形文土器27～34実測図	158
第90図	橿田文土器その他実測図	114	第130図	山形文土器35～43分布図	160
第91図	橿田文土器その他実測図	115	第131図	山形文土器35～43実測図	161
第92図	橿田文土器その他実測図	116	第132図	山形文土器44～53分布図	163
第93図	橿田文土器その他実測図	117	第133図	山形文土器44～53実測図	164
第94図	橿田文土器その他実測図	118	第134図	山形文土器その他実測図	165
第95図	橿田文土器その他実測図	119	第135図	山形文土器その他実測図	166
第96図	橿田文土器その他実測図	120	第136図	山形文土器その他実測図	167
第97図	橿田文土器その他実測図	121	第137図	山形文土器その他実測図	168
第98図	橿田文土器その他実測図	122	第138図	山形文土器その他実測図	169
第99図	橿田文土器その他実測図	123	第139図	山形文土器その他実測図	170
第100図	橿田文土器その他実測図	124	第140図	山形文土器その他実測図	171
第101図	橿田文土器その他実測図	125	第141図	山形文土器その他実測図	172
第102図	橿田文土器その他実測図	126	第142図	異種押型文併用土器分布図	173
第103図	橿田文土器その他実測図	127	第143図	異種押型文併用土器 1 分布図	174
第104図	橿田文土器その他実測図	128	第144図	異種押型文併用土器 1, その他分布図	175
第105図	橿田文土器その他実測図	129	第145図	押型文・撚糸文併用土器分布図	176
第106図	橿田文土器その他実測図	130	第146図	押型文・撚糸文併用土器 1 分布図	177
第107図	山形文土器分布図	132	第147図	押型文・撚糸文併用土器 2 分布図	178
第108図	山形文土器 1 分布図	133	第148図	押型文・撚糸文併用土器 3 分布図	179
第109図	山形文土器 2 分布図	134	第149図	押型文・撚糸文併用土器 1～3 実測図	180
第110図	山形文土器 1・2 実測図	135	第150図	押型文・撚糸文併用土器 4・5 分布図	181
第111図	山形文土器 3・4 分布図	137	第151図	押型文・撚糸文併用土器 4・5, その他実測図	182
第112図	山形文土器 5 分布図	138			

第152図 撚糸文土器分布図	184	第192図 抉入石器分布図	230
第153図 撚糸文土器 1～3 分布図	186	第193図 削器実測図	231
第154図 撚糸文土器 1～3 実測図	187	第194図 削器・抉入石器実測図	232
第155図 撚糸文土器 4～6 分布図	188	第195図 石錐分布図	233
第156図 撚糸文土器 7・8 分布図	189	第196図 楔形石器分布図	234
第157図 撚糸文土器 4～8 実測図	190	第197図 打製石斧分布図	235
第158図 撚糸文土器 9～12分布図	191	第198図 石錐・楔形石器・打製石斧実測図	236
第159図 撚糸文土器13・14分布図	192	第199図 礫石錘分布図	237
第160図 撚糸文土器 9～14実測図	193	第200図 有溝石錘分布図	238
第161図 撚糸文土器15～17分布図	195	第201図 礫石錘・有溝石錘実測図	239
第162図 撚糸文土器18分布図	196	第202図 有溝石錘実測図	240
第163図 撚糸文土器15～18実測図	197	第203図 有溝砥石分布図	241
第164図 撚糸文土器19・20分布図	198	第204図 有溝砥石実測図	242
第165図 撚糸文土器21～25分布図	199	第205図 磨石・敲石分布図	243
第166図 撚糸文土器19～25実測図	200	第206図 磨石・敲石実測図	244
第167図 撚糸文土器26～28分布図	201	第207図 磨石・敲石実測図	245
第168図 撚糸文土器26～28実測図	202	第208図 磨石・敲石実測図	246
第169図 撚糸文土器その他実測図	203	第209図 磨石・敲石実測図	247
第170図 撚糸文土器その他実測図	204	第210図 石皿・台石分布図	248
第171図 撚糸文土器その他実測図	205	第211図 石皿・台石実測図	249
第172図 撚糸文土器その他実測図	206	第212図 石皿・台石実測図	250
第173図 撚糸文土器その他実測図	207	第213図 二次加工ある不定形石器分布図	251
第174図 撚糸文土器その他実測図	208	第214図 使用痕ある剥片分布図	252
第175図 撚糸文土器その他実測図	209	第215図 二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片 実測図	253
第176図 条痕土器分布図	211	第216図 石製品分布図	254
第177図 条痕土器 1・2 分布図	212	第217図 石製品実測図	255
第178図 条痕土器 3～5 分布図	213	第218図 石核分布図	256
第179図 条痕土器 1～5 実測図	214	第219図 石核実測図	257
第180図 条痕土器 6～14分布図	216	第220図 石核実測図	258
第181図 条痕土器 6～14実測図	217	第221図 石核実測図	259
第182図 条痕土器その他実測図	218	第222図 赤変礫分布図	260
第183図 条痕土器その他実測図	219	第223図 弥生時代前期資料分布図	264
第184図 類「手向山式土器」分布図	220	第224図 弥生時代前期土器・石製品実測図	265
第185図 無文土器分布図	221	第225図 縄文時代早期集落のモデル	268
第186図 類「手向山式土器」・無文土器実測図	222	第226図 無田原遺跡出土押型文土器の諸類型	272
第187図 縄文時代早期石器分布図	223	第227図 周辺遺跡出土押型文土器の編年	273
第188図 石鏃分布図	225	第228図 沈日式土器（左）と石清水式土器（右）の 標式土器	274
第189図 尖頭石器分布図	226	第229図 男性器形石製品・磨製異形石製品・剥片製	
第190図 石鏃・尖頭器・尖頭石器実測図	227		
第191図 削器分布図	229		



## 表 目 次

第1表 調査行程表.....	4	第4表 石器計測表.....	262・263
第2表 遺跡地名表.....	9～11	第5表 早期前半編年表.....	276
第3表 石器組成表.....	224		

## 図 版 目 次

図版1 遺跡遠景(カラー)		図版11	
図版2		1. 2号集石下部土坑(東より)	
1. 土層堆積状況(カラー)		2. 2号集石下部土坑(南より)	
2. 先土器時代の調査状況(カラー)		図版12	
図版3		1. 3号集石(石組炉)検出状況	
1. 1号集石(カラー)		2. 3号集石(石組炉)本体	
2. 1号集石(カラー)		図版13	
3. 1号炉穴検出状況(カラー)		1. 3号集石(石組炉)本体	
図版4		2. 男性器形石製品出土状況	
1. 1号炉穴土層断面(カラー)		図版14先土器時代石器・縄文時代早期石鏃・尖頭器	
2. 2号炉穴検出状況(カラー)			
3. 2号炉穴焼土露出状況(カラー)		図版15縄文時代早期尖頭石器	
図版5		図版16縄文時代早期削器	
1. 調査風景		図版17縄文時代早期削器・抉入石器	
2. 遺物出土状況		図版18縄文時代早期石錐・楔形石器・二次加工ある不定形石器	
図版6		図版19縄文時代早期礫石錐・有溝石錐	
1. 遺物出土状況		図版20縄文時代早期石製品	
2. 調査区から阿蘇外輪山をのぞむ		図版21	
図版7		1. 格子目文土器1	
1. 調査区から阿蘇外輪山をのぞむ		2. 楕円文土器1	
2. 1号炉穴完掘状況(東から)		図版22	
図版8		1. 楕円文土器3	
1. 2号炉穴検出状況		2. 楕円文土器4	
2. 2号炉穴焼土面露出状況		図版23	
図版9		1. 楕円文土器5	
1. 2号炉穴完掘状況(東から)		2. 楕円文土器6	
2. 2号炉穴完掘状況(北から)		図版24	
図版10		1. 楕円文土器7	
1. 2号集石		2. 楕円文土器8	
2. 2号集石			

図版25

1. 楕円文土器 9
2. 楕円文土器10

図版26

1. 楕円文土器11
2. 楕円文土器12

図版27

1. 楕円文土器13
2. 楕円文土器14

図版28

1. 楕円文土器16
2. 楕円文土器17

図版29

1. 楕円文土器18
2. 楕円文土器19

図版30

1. 楕円文土器21
2. 楕円文土器23

図版31

1. 楕円文土器28
2. 楕円文土器第86図22

図版32

1. 山形文土器 1
2. 山形文土器 2

図版33

1. 山形文土器 3
2. 山形文土器 4

図版34

1. 山形文土器 5
2. 山形文土器 6

図版35

1. 山形文土器 7
2. 山形文土器 8

図版36

1. 山形文土器 9
2. 山形文土器10

図版37

1. 山形文土器11
2. 山形文土器12

図版38

1. 山形文土器13
2. 山形文土器17

図版39

1. 山形文土器23
2. 押型文・撚糸文併用土器 1

図版40

1. その他の押型文・撚糸文併用土器

# 第 I 章 調査の概要

## 第 1 節 調査に至る経緯

### 1. 調査の契機

農業の近代化を目的とした農業農村整備事業の増加に伴い、全国的に埋蔵文化財の調査が多く実施されるようになった。農地が対象となるだけあって、対象事業の面積が広大であり、必然的にその調査面積も、広い範囲に及ぶことになる。

今回、報告する熊本県菊池郡旭志村無田原遺跡は、この県営土地改良事業に伴うものである。その事業は、二つある。一つは、農地そのものを整備する目的の畑地帯総合土地改良事業であり、もう一つはそれらの農地へのアクセスを効率的におこなう「広域農道」の事業である。

農地整備のための事業は、県営畑地帯総合土地改良事業で、その地区名を鞍岳東部地区と呼ぶ。熊本県農政部が旭志村からの要請を受けて、昭和62年度（1987年度）に着工した事業である。

アクセス効率化の事業は、菊池北部地区広域営農団地農道整備事業という。昭和50年度に着工され、現在に至っている。その起点は、菊池市古川にあり、旭志村森林組合のところで国道325号線を横切り、終点を七城町の県道菊池・豊田線とする。

### 2. 事業照会と予備調査の経過

熊本県文化課は、毎年、開発部局に対して、次年度の事業照会をおこなっている。そうした照会をもとにして、予備調査をおこない、極力その保存に努めながら、設計の関係で埋蔵文化財が影響を受ける部分について本調査を実施するのである。

昭和63年度、農政部から多くの事業計画が提出された。この中に、県営畑地帯総合土地改良事業（鞍岳東部地区）と菊池北部地区広域営農団地農道整備事業があった。遺跡台帳との照合の結果、この事業地区に隣接して県指定史跡「無田原遺跡」があることがわかった。その後、現地踏査を実施して無田原遺跡の広がりや旭志村側の事業地区にのびているこ

とを確認。その結果を農政部局へ通知し、確認調査の実施を求めた。また併せて、当地が県指定史跡「無田原遺跡」と同じ遺跡だということも伝え、その取り扱いを確認調査後に協議することになった。

確認調査は、昭和63年度末に実施し、その結果、包含層の存在と深度、事業地内での遺跡の範囲を確認した。また、遺構や遺物包含層は、ゴボウ作りに伴う幾筋もの深くて長い溝によって壊されていて、良好な状況にないことも知った。こうした結果を踏まえて、発掘調査が必要である旨の通知を農政部局へおこない、設計変更等の協議をおこなった。

### 3. 発掘調査の進捗

事業照会、台帳照合、そして確認調査。こうした流れをとおして、確認した遺跡の範囲と最終的に確定した調査範囲は、第 1 図に示したとおりである。

本調査は、2回にわけて実施した。平成1年7月～9月までが第1次、平成1年12月～平成2年3月までが第2次である。第1次は、用排水路とその西側の面工事部、第2次は、残りの面工事部である。

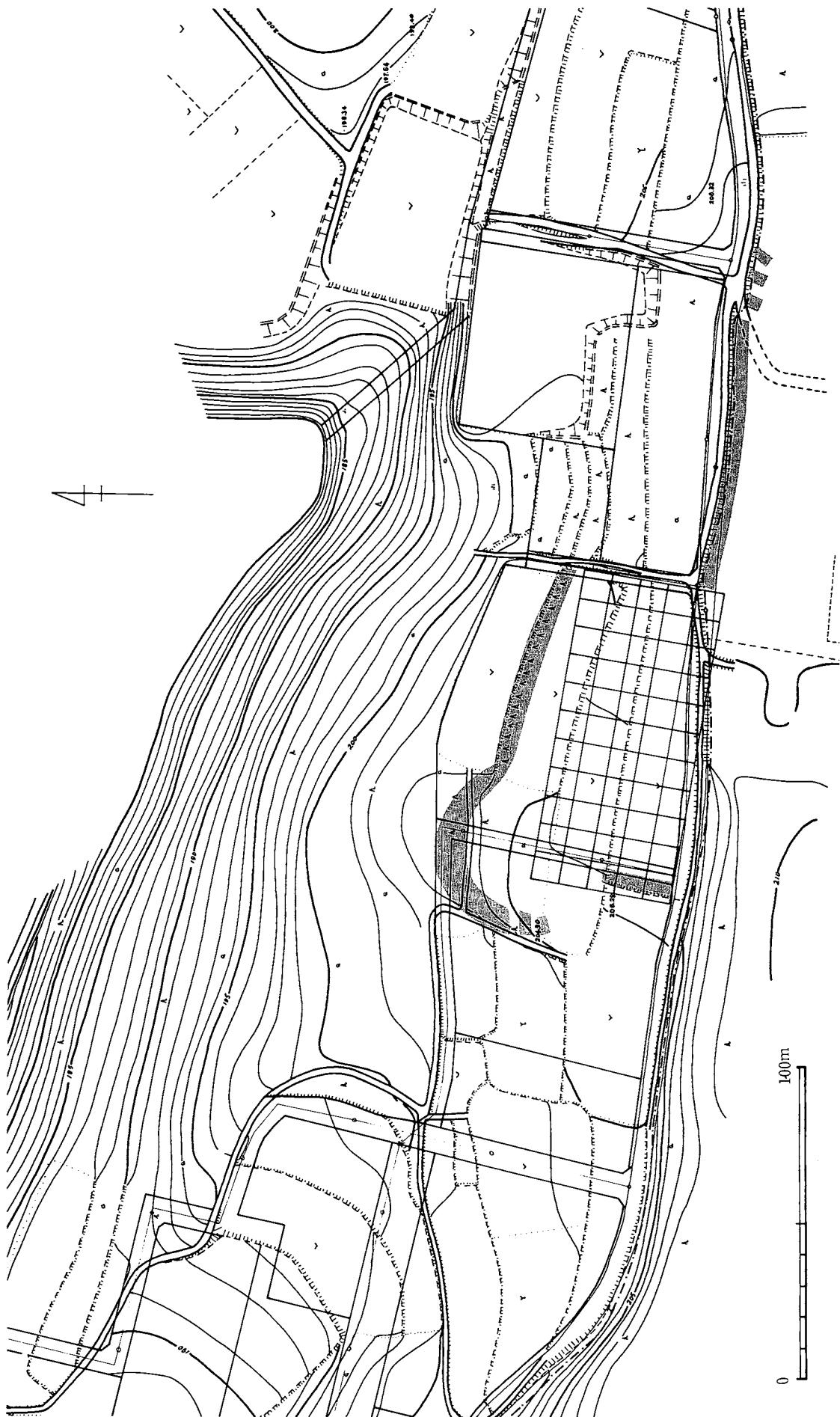
### 4. 発掘調査の組織

〔予備調査、昭和63年度〕

調査責任者 江崎 正（文化課長）  
隈 昭志（課長補佐）  
調査総括 松本健郎（調査第一係長）  
調査担当 木崎康弘（文化財保護主事）  
調査事務局 林田敏嗣（課長補佐）  
松崎厚生（主幹・経理係長）  
上村裕司・泉野順子（主事）

〔本調査、平成元年度〕

調査責任者 江崎 正（文化課長）  
隈 昭志（教育審議員・課長補佐）  
調査総括 松本健郎（調査第一係長）  
調査担当 木崎康弘（文化財保護主事）  
寺本 優（臨時職員）  
調査事務局 中川義孝（課長補佐）



第1図 周辺地形図

上村忠道（経理係長）

上村裕司・泉野順子（主事）

#### 調査協力者

三島 格（肥後考古学会長）・緒方勉（大津町瀬田裏遺跡調査会）・鈴木喬（旭志村史編纂委員長）・山崎純男（福岡市教育委員会）・富田絃一（熊本市立熊本博物館）・清田純一（城南町歴史民俗資料館）・戸高真知子（宮崎県埋蔵文化財センター）

#### 調査作業員

米田ミヨ子・谷田タマエ・谷田ツルヨ・米田ハツ子・出田ミツ子・村上カズエ・工藤千歳・工藤京子・米田孝義・米田繁男・工藤清子・本田とも子・石原チズヨ・松岡春義・工藤幸男・谷田ムツミ・真弓カズエ・稲葉トシ子・本田トシ子・出口ミサヲ・出口チズエ・出田ミツ子・岩崎朝雄・木村安人・三池ヤスコ・木村洋子・松岡キミ子・青木レイ子・犬賀貞子・芹川ちずえ・芹川てい子・岩根ますみ・下田スヤ子・東ミツ子・下田セツ子

〔整理・報告書作成、平成5年度・6年度〕

調査責任者 大塚昌信（平成5年度文化課長）

桑山裕好（平成6年度文化課長）

平野芳久（平成5年度教育審議員）

丸山秀人（平成6年度課長補佐）

調査総括 鳥津義昭（主幹・調査第一係長）

調査担当 木崎康弘（文化財保護主事）

木下俊恵・中田弥生・丹生英里（嘱託）

調査事務局 松崎厚生（平成5年度課長補佐）

白井哲哉（平成6年度課長補佐）

木下英治（主幹・経理係長）

高濱保子（参事）高宮優美（主任主事）

調査指導員 大塚達郎（東京大学）

#### 調査協力者

三島 格（肥後考古学会長）・清田純一（城南町歴史民俗資料館）・緒方勉（日本考古学協会）・中村五郎（日本考古学協会）

#### 整理作業員

荒牧陽子・今福英子・上村孝子・宇野玲子・小山正子・河崎節子・後藤ちず子・水本寿美子・山内洋子・山野孝子・山本友子・尾方マサミ・今村幸枝・吉本清子・重永照代

## 第2節 調査の方法と経過

本調査は、先にも述べておいたように、第1次と第2次にかけて実施した。第1次調査は、用排水路とその西側の面工事部を対象にし、平成1年7月から9月まで実施した。第2次調査は、残りの面工事部分で、平成1年12月から平成2年3月まで実施した。

調査は、重機による表土の取り除きから始めた。その後、その箇所の清掃をおこない、引き続いて実測図作成に給するための基準作りとして、トランシットを使用したグリッド設定をおこなった。設定したグリッドの一辺は、10mである。グリッド設定は、座標軸のデータが判明している基準点が周囲に見当たらなかったために、任意におこなった。その際、基準の点を用排水路のセンター杭にし、調査区の地形にあわせて南北軸をもとめた。そして、トランシットによって90°振って東西軸となした。

遺構には、炉穴と集石がある。それぞれの調査方法を示す。炉穴は、平面形を確認の後、土層堆積の状況を確認するためのセクション・ベルトを残して掘り始めた。次に、土層観察と土層断面図の作成、そして写真撮影をし、その後にベルトを取り除いて、平面図及び断面図を完成させる。集石は、まず礫を残して余分な土を除去する。その後、礫の集積状況を写真撮影し、平面図を作成する。平面図完成後は、見通し断面図を作成しながら礫を除去する。下部構造としての石組みが存在する場合には、その石組みを露呈させて、その平面図と見通し断面図を作成し、写真撮影をおこなう。最終的には、下部構造である土坑の実測・写真撮影をおこなって、一連の調査が終了するのである。実測図の縮尺率は、10分の1である。

包含層の調査では、各グリッドを単位として、掘り下げをおこなう。その後、平板・レベルを使って、出土位置と深度を計測し、記録していった。その縮尺は、20分の1である。

写真は、モノクロとカラーライドの2種類で撮影した。その方向は、主軸に平行して1景、それに直行させて1景を原則とした。

次に、調査の経過を月別に表示していこう。

【第1次調査】

7月は、発掘調査開始である。梅雨時でもあり、それほど調査は進行しなかった。この月の主な作業内容は、重機による表土の除去、調査区の清掃、そして調査区の掘削であった。

8月に入り、調査は順調となった。1号集石の実測、出土遺物の地点記録など、調査は日々進んでいく。なお、この部分は、用排水路の対象地区であり、発掘をさらに深く進める必要があった。従って、人力ではあるが、さらに深い面にまで、掘削を進めていった。

9月は、発掘深度をさらに深くしていった。そして、まったく遺物の出土が無いということを確認して、ひとまず予定の地区の調査を終了した。

【第2次調査】

12月は、その下旬に調査を再開した。したがって、調査は、7月の表土除去後に放置した調査区に、枯れたセイタカアワダチソウがうっそうとしていたので、その除去と清掃に終始した。そして、一部では掘削作業をおこなった。

1月は、8日から調査を再開した。掘削作業と並行してグリッド設定をおこなった。後半は、掘削した部分の遺物について、取り上げをおこなった。ま

た、2号集石の図面作成と写真撮影をおこなった。遺物出土状況の写真撮影もおこなった。この月の来跡者には、大津町瀬田裏遺跡を調査している緒方勉氏がいる(30日)。主に、瀬田裏遺跡の出土遺物について教示いただき、無田原遺跡の調査の参考になった。

2月は、調査区の掘り下げ、そして1号炉穴の発掘とセクション写真から開始した。そして、すぐに2号炉穴の調査へと移行した。また、遺物の取り上げも毎日おこなっている。旭志村教育委員会社会教育課より3名の来跡あり(7日)。3号集石の実測、写真撮影もおこなった。なお、28日には、この遺跡の代表的な遺物の一つである「男性器形石製品」が出土した。

3月は、調査を終わる月である。したがって、調査終了のための残務整理も調査と共に必要な作業であった。5日には、磨製異形石製品(トロトロ石器)が出土した。2月28日に出土した「男性器形石製品」と共に、文化課へ木崎が持参する。この月の来跡者は、旭志村史編纂委員の鈴木喬氏・富田紘一氏、城南町歴史民俗資料館清田純一氏、宮崎県埋蔵文化財センター戸高真知子氏がある。特に、戸高真知子氏には、出土した赤変礫とベンガラの関係についての木崎の見解に対する意見を伺った。

第1表 調査行程表

月	7月	8月	9月	12月	1月	2月	3月					
調査対象時代	縄文時代早期		先土器時代	縄文時代草創期								
	弥生時代前期			縄文時代早期								
備考	表土剥ぎ	縄文時代早期の調査開始 弥生時代前期の遺物出土	1号集石の調査	先土器時代碎片2点出土	調査の中断	調査区の清掃 調査の再開	1号集石の調査	緒方勉氏来跡 2号集石・1号・2号炉穴の調査	縄文時代草創期の遺物出土	男性器形石製品の出土 鈴木喬・富田紘一氏来跡	戸高真知子・清田純一氏来跡 磨製異形石製品の出土	調査終了



## 第II章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の環境

#### 1. 地理的環境

活火山、阿蘇は、37～26万年以来、4回の大噴火を繰り返しながら、その様相を様変わりさせてきた。その過程は、37～26万年の阿蘇1、15万年前の阿蘇2、10万年前の阿蘇3、8万年前の阿蘇4であり、こうした大噴火の結果が、現在のカルデラ地形を形成したのである。ただし、それ以後の噴火には大規模なものが無いので、その最後の大噴火の年代約8万年前以後、中央火口丘の形成を経て、その雄姿はここ数万年間で形造られて来たということになる。はるか数万年以降、霊峰阿蘇の峰々は、常に人びとの眼差しを一身に集めながら、悠々にして喧々として噴煙を立ちのぼらせ、孤高の存在として中九州に君臨してきたのである。

九州島は、地形的に大きく四つに区分される。すなわち、福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地、大分県・熊本県北半の中部火山地域、宮崎県・熊本南半の中部山地、そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の四地域である。特に、火山島である九州にあっては、中部火山地域と南部火山地域は、九州の地形を何らかの形で決定づけた火山地帯でもあり、火山噴火をとおして、人びとの畏敬を一身に集める地域でもある。今回、報告する無田原遺跡は、これらの地域の中で中部火山地域に位置し、しかも、その中でその存在を誇示し続けている阿蘇山中にある。

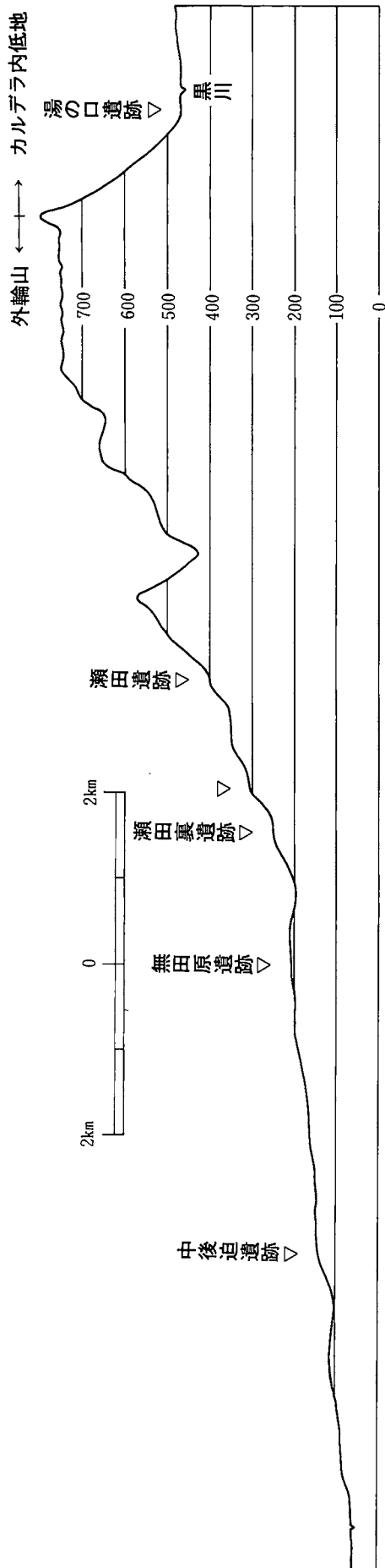
阿蘇は、巨大なカルデラ式火山である。その容姿は、現在噴煙を上げている中央火口丘、その南と北に広がる肥沃な低地、そしてその中央火口丘と低地をめぐる外輪山によって成り立っている。こうした三様は、それなりに人びととの関わりを変えながらも一つの構造物となり、現代でも人びとの目を楽しませている。例えば、中央火口丘は、今でも生き続け、信仰の対象となっている火口を中心に「仏の涅槃像」と称された山容を呈し、低地一面を埋め尽くした雲海の上に浮かぶことがある。また、中央火口

丘や外輪山上から展望する低地もまた、多量の水を含んで、四季折々の色を変えて絶景であり、外輪山もまた、たくさんの溪谷と深い森を湛えて人びとを包み込んでいる。まさに、阿蘇は、豊富な水、豊かな緑を通して太古以来の人びとの生活を保証してきたのである。

一方、阿蘇の外輪山は、熊本県はもとより、宮崎県や大分県にもまたがる、広大な丘陵でもある。その外輪山から幾筋ものびる尾根線は、しだいに傾斜を緩くしながら、あるものは高原地帯へと移行したり、あるものは平地部の台地へとつながっていく。例えば、外輪山の北麓、東麓、南麓は高原地帯であり、西麓では、急激に標高を下げながら平地部へ至っている。そして、こうした尾根やそれから派生する高原・台地部には先土器時代以来の多くの遺跡が群集している。それは、豊富な水、豊かな緑に裏打ちされたもので、阿蘇周辺がいかに生活に適した風土を持っていたかを窺わせるものである。

阿蘇外輪山の西側は、急激に標高を落としながら平野部へと至るといえるように、急傾斜な地形に特徴がある。本来、こうした場所は、人びとの生活に適さない地形であり、ここ阿蘇外輪山も例外ではない。ただし、傾斜地の途中途中で傾斜が緩くなった平坦部が見られる場合には、生活空間として利用されているようで、例えば、瀬田遺跡や瀬田裏遺跡は、そうした遺跡の一つとして挙げられる。なお、無田原遺跡は、上記した遺跡の立地とは異なり、外輪山と台地部との境付近、麓の遺跡の一つである(第2図)。

無田原遺跡は、阿蘇外輪山を源とする河川の流域、しかもその上流域に位置している。この河川の流れは、自らが浸食してできた谷間を通りながら、合志川本流、さらには菊池川、そして有明海へと注ぎ込むのである。そして、その過程で、流れは次々に変化する人びとの生きざまを写しながら、下流へ下流へと至る。無田原遺跡は、そのもっとも初現的な地に位置している。



第2図 地形断面図

## 2. 歴史的環境 (第3図)

無田原遺跡の周辺では多くの遺跡が発見されている。特に、縄文時代以降の遺跡は多く、その内容も豊富である。以下、先土器時代を手始めに、時代ごとの簡単な紹介を行っていきたい。

### 先土器時代

無田原遺跡の周辺では、あまり多くの遺跡は発見されてもいないし、その調査例も無い。その数少ない中で遺跡を挙げれば、旭志村湯舟原遺跡がある。遺跡では、ナイフ形石器と三稜尖頭器が表面採集されている。無田原遺跡では、先土器時代の石器が発掘されているが、湯舟原遺跡は無田原遺跡の近隣にある遺跡である。今後、この周辺の調査を進めれば、多くの遺跡が発見されることは間違いない。また、阿蘇の外輪山上では、大矢野原遺跡群や菊池川上流域遺跡群、阿蘇外輪北麓遺跡群からは、多くの遺跡が発見されているが、阿蘇の外輪山に展開した先土器時代遺跡として、上記二つの遺跡をみることもできようか。

### 縄文時代

早期から晩期まで、多くの遺跡が確認されているし、その調査例もある。以下、時期ごとにそれぞれの遺跡を挙げていこう。

早期では、大津町瀬田裏遺跡、中後迫遺跡、大津町～旭志村ワクド石遺跡、大津町～旭志村無田原遺跡で発掘調査が成されている。瀬田裏遺跡は、押型文土器の時期の長方形の石組み遺構や配石遺構、石組み炉、集石などが多く検出された遺跡として全国的に著名である。また、注口を持つ壺形の押型文土器が出土したことで広く知られている。その他、多量の土器や石器に混じって、磨製異形石器品(トロトロ石器)や「岩偶」などの石製品も出土していて、遺構の数や内容、遺物の数や内容から、この周辺の拠点的な遺跡である可能性が高い。また、中後迫遺跡でも多量の遺構や遺物が出土していて、拠点的な遺跡の可能性が高い。ただし、その内容が前記した瀬田裏遺跡のものとは異なっているので、当時の集落の性格からすれば、この両者には何らかの性格の違いがあるものと思われる。

前期から中期、無田原遺跡周辺では、大津町瀬田

遺跡（轟B式）、同町中後迫遺跡（曾畑式）、西原村桑鶴土橋遺跡（曾畑式）、旭志村桜ヶ水遺跡（曾畑式）、大津町日向遺跡（曾畑式・阿高式）、旭志村西原遺跡（曾畑式・阿高式）、同村南桜ヶ水遺跡（阿高式）、大津町～旭志村ワクド石遺跡（阿高式）、大津町七野尾遺跡（阿高式）、合志町御手洗遺跡（船元式）がある。

この時期の遺跡は、その前後の時期と比べても、その発見例は少なく、しかも大規模な遺跡が少ないのが特徴である。ただし、目を無田原遺跡周辺から宇城地方にまで拡大すると、例えば宇土市轟貝塚、同市曾畑貝塚ないしその隣接遺跡（多数の貯蔵穴が検出されている）、城南町阿高貝塚、同町黒橋貝塚、小川町大坪貝塚などの、貝塚遺跡を見出せるので、そうした観点で遺跡の所在を考えなければならないのかもしれない。つまり、これは、遺跡立地の特徴とかかわってくる問題であり、無田原遺跡周辺に遺跡が少ないという問題をあまり単純化して解釈すべきものでもなさそうだ。

後期から晩期では、様相が一変し、遺跡が多くなり、しかも大規模な集落が各所で見られるようになる。特に、後期末から晩期の前半では、その傾向が顕著である。例えば、大津町～旭志村ワクド石遺跡、泗水町三万田東原遺跡、七城町大久保遺跡、旭志村伊坂・上の原遺跡、菊池市天城遺跡は、その規模が比較的大型のものである。中でも、ワクド石遺跡、三万田東原遺跡、大久保遺跡では、土偶や玉類、それに土器作りを証明する焼成粘土塊などが出土するなど、特徴的である。おそらく、拠点的な集落であろう。これに対して、伊坂・上の原遺跡や天城遺跡では、前記した遺跡から出土するような土偶・玉類・焼成粘土塊は出土しない。集落の規模も前記したものと比べれば、やや小型となり、やや趣を異にした集落のようである。

晩期末、それは夜臼式土器が流行した時期であるが、無田原遺跡の近くでも遺跡が確認されている。例えば、大津町水の上遺跡は、当該期の支石墓としては、県内でも類数が少なく、著名である。ただし、集落遺跡を含め、それほど多くの遺跡がみられるわけではない。

### 弥生時代以降

弥生時代中期の遺跡として、特徴的なものは、銅銚2本が出土した大津町大松山遺跡、甕棺墓の遺跡で須玖式が出土した合志町陣の内遺跡、高柳遺跡、中林西原遺跡、黒髪式の菊池市長田狐塚遺跡、合志町轟遺跡、両型式が出土した旭志村湯舟原遺跡、泗水町富納遺跡、古閑原遺跡、合志町宮の原遺跡などがある。また、旭志村ヒララ石遺跡、藤尾遺跡、菊池市立石遺跡、大津町立石遺跡は、支石墓の遺跡である。

弥生時代後期の遺跡は多いが、調査された主な遺跡としては、旭志村伊坂・上の原遺跡、大津町日向遺跡、西弥護免遺跡、西合志町弘生原遺跡がある。中でも西弥護免遺跡の調査は、その集落のほぼ全域が対象となり、多くの情報を得ている。

古墳時代の遺跡として、無田原遺跡の周辺には、大津町馬糞塚古墳など小円墳はあるが、前方後円墳などの規模の大きい古墳はみられない。ただし、旭志村たばこ石遺跡、桜ヶ水遺跡、南桜ヶ水遺跡、五十町遺跡、大津町～旭志村ワクド石遺跡、大津町瀬田裏遺跡など、阿蘇外輪山の裾野から麓にかけては集落遺跡は小規模ではあるが多数分布している。その遺跡の性格を知る上でも、この周辺の遺跡をさらに詳細に知る必要があるようだ。

奈良・平安時代の遺跡では、石製の帯金具が採集されている旭志村湯舟遺跡が著名である。遺跡は、河川の上流域近くに位置しているので、用水管理に関係する何らかの役所が存在していたと推定できるかもしれない。しかし、こうした例はあるにしても、無田原遺跡周辺では当該期の遺跡の数は概して少ない。ただし、大津町の真木（マキ）という地名に見られるように、官牧の存在を想定する意見もあり、当時の重要な地域の一つである可能性は高い。今後、阿蘇外輪山の裾野から麓にかけての遺跡には、牧経営に直接的にも間接的にも関わった人びとの集落が隠されているのかもしれない、その意味で注意が必要であろう。



第3図 無田原遺跡周辺遺跡分布地図

第2表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代					備考
			縄一縄文 (早一早期 前一前期 中一中期 後一後期 晩一晩期)	弥一弥生	古一古墳	奈一奈良	平一平安	
1	ワクド石遺跡	菊池郡大津町杉水	縄(早・前・中・後・晩)弥・古					靱跡ある土器
2	加恵城跡(正光寺跡)	菊池郡七城町加恵	中					中世丘城 菊池18外城の一つ
3	蛇塚古墳	〃 亀尾	古					前方後円墳 古墳の上に馬渡城あり
4	長明寺坂古墳群	〃 林原	古					円墳3基
5	亀尾横穴	〃 亀尾	古					
6	上鶴頭遺跡	〃 上鶴頭	平					官衙跡
7	岩瀬横穴群	〃 亀尾	古					横穴数基 須恵器一括
8	岩瀬チョウ塚古墳	〃 〃	古					小円墳 近くに円墳あり
9	木柑寺船形石棺	菊池市木柑子	古					段丘 崖突出部に露出
10	木柑寺フタツカ古墳	〃	古					西向前方後円墳 石人立つ
11	木柑寺横穴群	〃	古					菊池川南岸 数十基 普通型 風化
12	東浦田平横穴	〃	古					
13	大塚遺跡	菊池市長田	弥・古					弥生後期土器・土師器
14	大塚古墳	〃	古					前方後円形 後円部に金比羅社建つ
15	外園遺跡	〃	弥					竪穴 弥生期 土器・石器多数 貨泉出土
16	長田狐塚遺跡	〃	弥					黒髪式甕棺
17	長田遺跡	〃	弥					弥生期
18	狐塚遺跡	〃	古・平					土師器
19	水町遺跡	菊池市西寺	古・平					土師器
20	西寺辻遺跡	〃	弥・平					弥生期 住居跡 土師器包含
21	西寺辻遺跡	〃	弥・平					弥生式土器・土師器片散布
22	南園遺跡	〃	奈・平					布目瓦 土師器
23	南古閑遺跡	〃	弥					弥生期
24	新古閑遺跡	菊池郡七城町新古閑	弥・古					野辺田式土器・土師器 磨製石斧
25	深川遺跡	菊池市深川	縄(後)・古					条痕文・御領式・野辺田式土器・土師器出土
26	観音ノ本遺跡	〃	弥					弥生期
27	菊の池遺跡	〃	弥					城跡全域 弥生期 土師器片包含
28	北宮遺跡	菊池市北宮	弥					弥生期
29	深川古屋敷遺跡	菊池市深川	弥					弥生期
30	赤星宮の前遺跡	菊池市赤星	平					土師器
31	赤星ヤンボシ塚古墳	〃	古					現在墳丘なし 横穴複式 同所に馬糞塚石棺復元
32	赤星福土・水溜遺跡	〃	平					
33	マユミノ横穴	菊池市今	古					
34	天城神社古墳	菊池市赤星	古					円墳
35	天城遺跡	〃	縄(晩)・弥					縄文・弥生式土器
36	妙見後田横穴群	菊池市森北	古					須恵器一括出土
37	妙見後田横穴群	〃	弥					須恵器一群出土
38	モトドリ山横穴群	〃	弥					横穴4基
39	立石支石墓	〃	弥					支石墓
40	森北落水古墳	〃	古					小円墳 石槌あり 勾玉出土
41	城山遺跡	菊池市赤星	縄・弥					縄文・弥生期を含む
42	平町横穴群	菊池郡泗水町住吉	古					横穴群
43	土平横穴群	菊池郡旭志村辨利	古					
44	高永遺跡	〃 新明	縄(後)・古					縄文・古墳期 御領式土器・須恵器
45	南住吉遺跡	菊池郡泗水町住吉	弥・古					遠賀川式・須玖式甕棺 野辺田式土器・土師器
46	伊坂上の原遺跡	菊池郡旭志村伊坂	縄(後)・古					縄文・弥生期 御領式・野辺田式土器
47	西原遺跡	〃 川辺	縄(前・中)・古					縄文期 曾畑式・阿高式土器・須恵器
48	西原銅銚出土地	〃 〃	弥					
49	ヒララ石遺跡	〃 〃	縄(後)・弥					縄文・弥生期 摺消・縄文式土器 支石墓 石斧
50	柏木遺跡	〃 〃	縄(後)・弥					縄文・弥生期 摺消・縄文式・御領式土器
51	四郎丸遺跡	〃 〃	縄(後)・弥					縄文・弥生期 御領式・野辺田式土器
52	尾足原遺跡	〃 尾足	縄(後)・弥					縄文・弥生期 御領式・野辺田式土器
53	飛熊遺跡	菊池郡泗水町住吉	中					経筒
54	城山遺跡	〃 〃	平					藏骨器
55	城山A遺跡	〃 〃	縄(後)・平					西平式・御領式・野辺田式土器・土師器・須恵器
56	長塚古墳	〃 〃	古					
57	城山B遺跡	〃 〃	古・平					土師器・須恵器

第1節 遺跡の環境

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
58	飛熊城跡	菊池郡泗水町住吉	中	
59	城山C遺跡	〃 〃	縄(後)・中	条痕文・御領式土器・土師器・青磁器
60	備後塚古墳	〃 〃	古	
61	狐塚古墳	〃 〃	古	
62	下峯遺跡	〃 〃	弥	黒髪式・野辺田式土器 石包丁
63	住吉日吉神社遺跡	〃 〃	奈・平・中	須恵器・土師器 滑石釜 円面鏡
64	池上城跡	〃 〃	中	
65	日頭山宣頓寺跡・合志家の墓	〃 〃	中	
66	山王宮跡	〃 〃	中	
67	東駄銅城蔵骨器	〃 〃	奈・平	
68	南住吉古墳	〃 〃	古	石棺
69	富納遺跡	〃 富納	弥	須玖式・黒髪式土器 磨製石斧
70	硯町横穴群	〃 住吉	古	須恵器
71	今寺横穴群	〃 富納	古	横穴群
72	村吉遺跡	〃 吉富	平	蔵骨器 須恵器
73	鬼木製鉄跡	〃 永	平	鉾滓
74	福原遺跡	〃 〃	弥・古	野辺田式土器・土師器
75	藤巻遺跡	〃 〃	弥	甕棺
76	村吉古墳	〃 吉富	古	石棺
77	牛畑遺跡	〃 〃	古・中	須恵器・土師器・青磁器
78	古閑原遺跡	〃 〃	弥	須玖式・黒髪式土器 磨製石斧
79	三万田東原遺跡	〃 亀尾	古・奈・平	土師器
80	田島廃寺跡	〃 田島	奈・平	土師器・須恵器
81	陣塚遺跡	〃 〃	平	蔵骨器 須恵器
82	高江出分塚山古墳	〃 豊水	古	家形石棺
83	久米若宮古墳	〃 〃	古	
84	安国寺遺跡	〃 〃	中	瓦器 青磁器
85	富出分古墳	〃 吉富	古	箱式石棺
86	麦田遺跡	〃 豊水	古	土師器(野辺田式土器)
87	平町遺跡	〃 吉富	古・中	土師器 滑石釜
88	生坪塚山古墳	菊池郡西合志町合生	古	前方後円墳 長さ60cm 竪穴石室
89	塚口横穴群	〃 〃	古	
90	生坪古墳	〃 〃	古	箱式石棺を容する円墳
91	生坪石立(こくりゅう)古墳	〃 〃	古	小型家形石棺 朱三角文 女人骨 櫛
92	八反田遺跡	〃 〃	弥	甕棺 壺 埴 磨製石斧
93	八反田遺跡	〃 〃	古	
94	弘生原遺跡	〃 〃	弥・古	弥生期 野辺田式土器・土師器・須恵器
95	迫原ハマ古墳	〃 〃	古	円墳 箱式石棺 鉄鎌 文字ある土師器
96	迫原長塚(ちようづか)古墳	〃 〃	古	箱式石棺
97	高木原遺跡	〃 〃	縄(後)・奈	広範囲 縄文後期より奈良時代に及ぶ 出土品大量
98	西谷古墳	菊池郡泗水町福本	古	
99	福本遺跡	〃 〃	弥	八幡北側 重弧文土器
100	南原第1号古墳	〃 〃	古	箱式石棺
101	南原第2号古墳	〃 〃	古	
102	中林山遺跡	〃 〃	中	古塔碑群
103	後川辺(権現山)遺跡	菊池郡合志町栄	弥・古	野辺田式土器
104	ヤンボン塚古墳	〃 〃	古	
105	江良遺跡	菊池郡西合志町合生	古	野辺田式土器・土師器・須恵器片多数出土
106	小合志古墳	〃 〃	古	円墳 巨石横穴石室 副葬品多数
107	立割横穴群	〃 〃	古	横穴数基から成る
108	小合志原(おごうしばる)遺跡	〃 〃	縄(後)・平	縄文後期・土師器
109	中林西原遺跡	菊池郡合志町栄	弥	弥生期 須玖式土器
110	中林古墳	〃 〃	古	円墳2基
111	千経塚遺跡	〃 上庄	弥・平	弥生期 土師器・須恵器等
112	木瀬遺跡	〃 〃	弥	重弧文土器 石包丁
113	虚空蔵横穴	〃 〃	古	横穴
114	小園遺跡	〃 豊岡	縄(後)・弥	御領式・弥生式土器石器
115	宮の前遺跡	〃 上庄	弥	弥生期 須玖式・黒髪式土器・土師器
116	御手洗遺跡	〃 幾久富	縄(後)・平	縄文後期土器・御手洗式土器・土師器石器



番号	遺跡名	所在地	時代	備考
117	陣の内遺跡	菊池郡合志町幾久富	弥	須玖式・野辺田式土器 石包丁
118	野付(のつき)遺跡	〃 福原	縄(早)・弥	押型文・黒髪式甕棺
119	轟遺跡	〃 豊岡	弥	黒髪式甕棺
120	群山遺跡	〃 〃	平	蔵骨器
121	飯高山遺跡	〃 檜原	弥	弥生期
122	鬼石古墳	菊池市出田	古	
123	堂坂横穴群	〃	古	数基は一群の須恵器を出土 22基
124	古池城跡古墳	〃	古	横穴石室
125	亀の甲古墳	〃	古	石棺あり 土師器片多数出土
126	医者どん坂遺跡A	〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
127	医者どん坂遺跡B	〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
128	医者どん坂遺跡C	〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
129	小川遺跡	菊池郡旭志村辨利	縄(早)・弥	縄文・弥生期 押型文土器 石斧・石鏃・石匙 甕棺
130	松尾横穴群	〃 伊萩	古	約60穴 須恵器
131	岩下横穴群	〃 辨利	古	鉄鏃 刀子 環 土器
132	鶴ノ宮遺跡	〃 〃	古	土師器
133	平山古墳	〃 麓	古	箱式石棺
134	北受遺跡	〃 〃	縄(早)・古	縄文・古墳期 押型文土器 箱式石棺
135	高柳遺跡	〃 〃	弥	弥生期 須玖式土器 甕棺
136	湯船原遺跡	〃 〃	弥	弥生期 黒髪式石棺 須玖式土器
137	狐塚遺跡	〃 〃	平	歴史蔵骨品 鉄鏃
138	たばこ石遺跡	〃 〃	縄(後)・古	縄文・弥生・古墳期 御領式・野辺田式土器・土師器
139	桜ヶ水遺跡	〃 〃	縄(前)・古	縄文・弥生・古墳期 曾畑式土器 石斧・石刃 槍 鉄
140	南桜ヶ水遺跡	〃 〃	縄(前・中)・弥	縄文・弥生・古墳期 曾畑式・阿高式土器 石斧・石刃 槍
141	五十町遺跡	〃 〃	縄(後)・古	縄文・古墳期 御領式・野辺田式土器 箱式石棺 石刃
142	横道石棺群	〃 〃	古	
143	立石遺跡	菊池郡大津町矢護川	縄(後)・弥	積石塚6 石器
144	無田原遺跡	〃 〃	縄(早)・弥	縄文早期 押型文・条痕文土器 黒ノ目玉石片
145	御領原遺跡	〃 〃	縄(後・晩)・弥	縄文後期 西平式・御領式・野辺田式土器
146	カメキュウラ遺跡	菊池郡旭志村尾足	弥	野辺田式土器
147	面の平遺跡	〃 〃	弥・平	弥生期 土師器 車路跡
148	一尾刎(いちおぼる)2地点	菊池郡大津町矢護川	古(後)	
149	猿渡六地藏	〃 平川	中	
150	杉水上ノ原矢鏃遺跡	〃 杉水	縄(後)・弥	土師器・須恵器 石器
151	七野尾遺跡	〃 矢護川	縄(早・中・後・晩)・弥・古	縄文早～中～後晩・弥生期 土師器・須恵器 石器
152	馬糞塚古墳群	〃 〃	古	小円墳数基 人骨
153	向原遺跡	〃 真木	縄(前)・弥	石刃 野辺田式土器・土師器・須恵器
154	真木(祝屋敷)遺跡	〃 〃	縄・古	銅鏃2本出土(中細) 野辺田式土器供伴
155	ナギナタ遺跡	〃 平川	縄(後)・古	条痕文・御領式・野辺田式土器
156	水ノ山遺跡	〃 矢護川	縄(早・後)・弥・古	押型文・御領式・黒髪式・野辺田式土器 磨製石斧 支石墓
157	日向遺跡	〃 〃	弥	弥生中・後期 土器片
158	真木古墳	〃 真木	古	円墳
159	合志一族墓	〃 〃	中	
160	弥護山無動寺跡	〃 〃	平	平安前期創建の説 粘板岩円面硯片出土
161	人塚古墳	〃 古城	古	円墳
162	高尾野遺跡	〃 高尾野	弥・古	野辺田式土器包含
163	瀬田雨留尾遺跡	〃 瀬田	縄・弥・古	縄文・弥生・古墳期 寺跡(屋敷跡)
164	瀬田裏遺跡	〃 〃	縄(早・前)・古	縄文・古墳期
165	西弥護免遺跡	〃 大津	弥・古	弥生～古墳期
166	西嶽遺跡	〃 〃	弥・古	野辺田式土器包含 台付壺出土
167	大松山遺跡	〃 〃	弥	銅鏃2本出土(中広)
168	後迫横穴群	〃 〃	古	コの字型床・奥床を備える
169	中町横穴群	〃 〃	古	基数不明 形跡を留める程度
170	大津高校グラウンド遺跡	〃 〃	縄(早)・古	縄文期 大石鏃・石槍 土師器片少数
171	大津産業高実習地(南出口)遺跡	〃 室	弥	弥生式土器片(細)

## 第2節 遺跡の概要

### 1. 史跡（県指定）無田原遺跡の概要（第4図）

無田原遺跡は、大津町と旭志村とにまたがる遺跡である。今回の調査は、旭志村側の無田原遺跡が対象となったのであるが、古くからは大津町側の無田原遺跡が著名である。

無田原遺跡は、牟田平遺跡とも呼ばれ、昭和8年に井田九州男氏によって発見された。遺跡の重要性は、坂本経堯氏によってすぐに認められ、昭和9年に調査が実施された。その際、石が集積した状態が確認され、坂本氏は敷石住居跡ではないかという推定をおこなっている。この調査が最初の発掘調査である。

昭和48年、無田原遺跡一帯が茶畑となることになり、再び坂本氏と県立菊池高校郷土研究部による発掘調査がおこなわれることになった。その結果、押型文土器の時期の配石遺構が確認されたのである。こうした発掘結果は、特に注目を浴びることになり、その重要性が評価されての史跡保存という運びになった。

配石遺構は、調査区の中で10基が確認されたが、その数はさらに増えるものと予想された。ただし、こうした遺構が保存されるということになり、平面実測は5基、そしてその下部遺構については調査の対象とはならなかったという。

1号遺構は、1.65m×1.75mの円形を呈している。2号遺構は、2.0m×1.9mの円形である。3号遺構は、1.95m×2.1mの円形である。4号遺構は、不整形で、2.3m×1.7mの範囲に礫が分布している。5号遺構は、2.6m×2.0mの円形である。

こうした遺構について、富田紘一氏は、その特徴を「周囲に大きめの礫を環状に並べてい」る点が「礫がただ集められているのみ」の集石とは異なる点であると評価している(富田1988)。現時点で、この配石遺構の状況を現認することができないのが残念であるが、今日、この種の遺構は、大津町瀬田裏遺跡でも大小様々なものが確認されている。ただし、その状況は、無田原遺跡のものとは異なっているようにも思える。

無田原遺跡では、縄文時代早期の遺構・遺物の他、弥生時代前期の甕棺も検出されている。その数14基



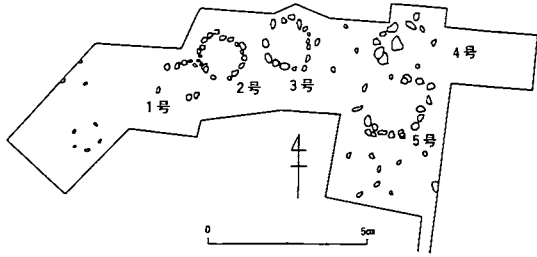


図3 牟田平（無田原）遺跡配石遺構分布図

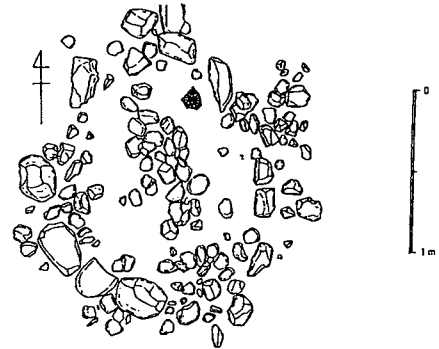
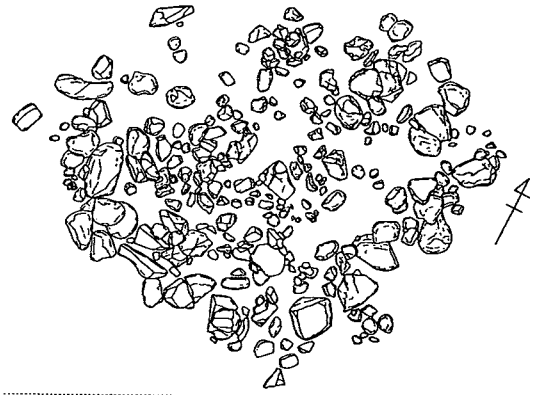


図4 牟田平（無田原）遺跡配石遺構実測図  
上 5号配石遺構、下 3号配石遺構

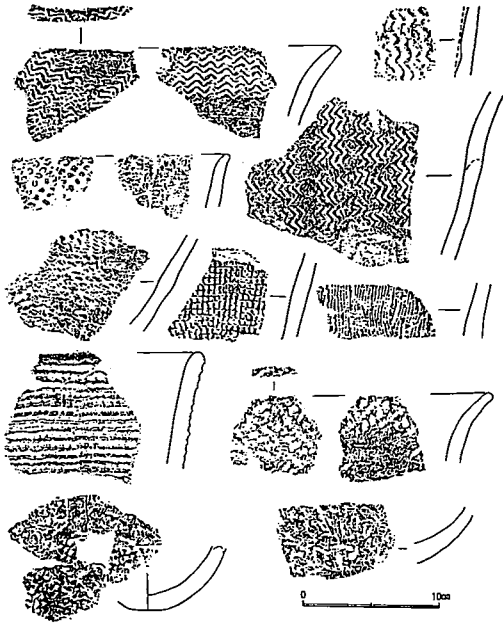


図5 牟田平（無田原）遺跡出土土器拓本

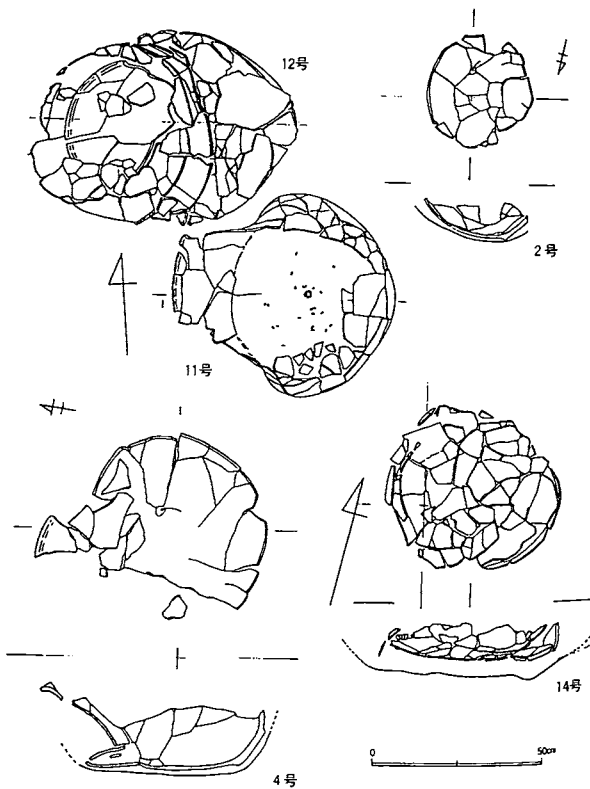


図23 牟田平（無田原）遺跡壘形出土状態実測図

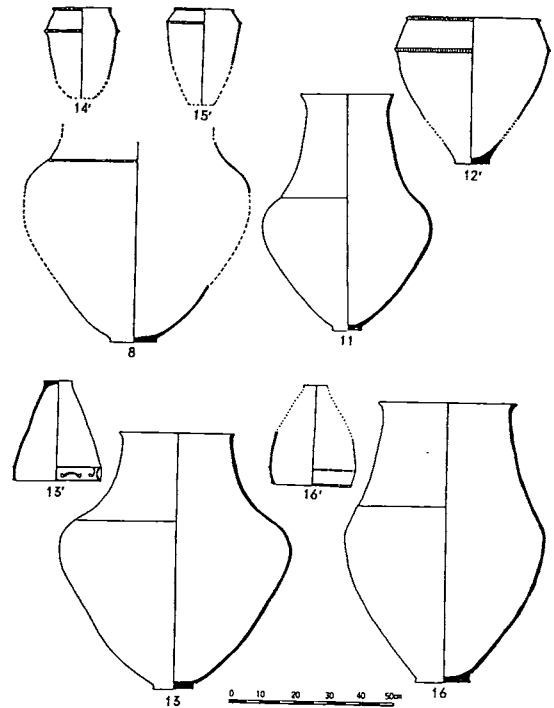
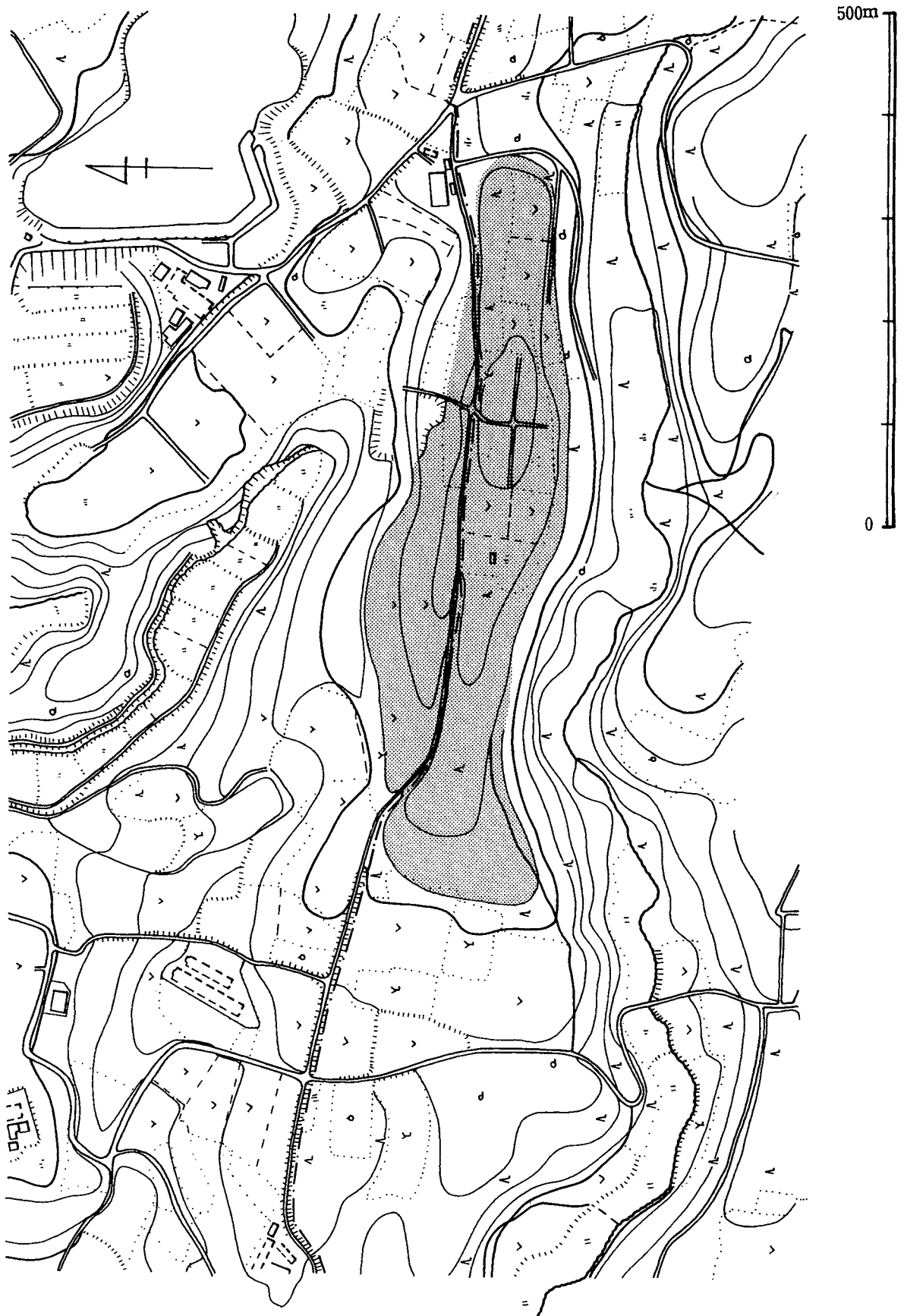


図24 出土壘形実測図（西沢氏報告より）

第4図 史跡無田原遺跡の遺構及び遺物



第5図 無田原遺跡

であった。

## 2. 調査対象無田原遺跡の概要（第5図）

今回調査した無田原遺跡は、熊本県菊池郡旭志村麓に所在している。前節でも見てきたように、立地する場所は、阿蘇外輪山の一角をなす鞍岳の麓、そこに源を発する二鹿来川と矢護川に挟まれた台地である。標高は、208mである。

発掘調査は、県営畑地帯総合土地改良事業鞍岳東部地区に伴って1989・1990年に実施された。その結果、先土器時代・縄文時代草創期・早期・弥生時代前期に関する資料が検出された。そこで、これらの調査成果を踏まえて、時代ごとの概要を示しておく。

先土器時代では、調査区の南隅で2点の碎片が検出された。その状況からブロックの北端を調査しただけであり、大津町側にその主体があるものと思われる。

縄文時代草創期の資料も同じで、爪形文土器数片が出土しているのみである。石器の出土もはっきりせず、その分布の中心は大津町側にあるものと考えられる。

早期では、炉穴・集石という遺構と、押型文土器・捺糸文土器・条痕土器などの土器類の他、それに伴う石器群が検出されている。炉穴は、2基がある。小型のものと大型のものがある。集石は、3基が検出されている。その構造としては、掘り込みという下部遺構を伴うもの2基、下部遺構を伴わない表面的なもの1基がある。遺物は、多量出土したが、幾条ものゴボウ穴が縦横に調査区を走っていて、当該期の遺物包含層を大きく破壊していた。したがって、遺物の包含状況は、あまり芳しいものとはいえなかった。

弥生時代前期は、遺物が出土するのみで、遺構はみられなかった。しかも出土した遺物は少なく、軟質の翡翠製の勾玉と管玉、そして甕形土器のみである。おそらく、その分布の主体は、調査区外である大津町側にあると予想される。

## 第3節 遺跡の層位と包含層

前節でも述べたように、無田原遺跡では、先土器時代・縄文時代草創期・早期・弥生時代前期の遺構や遺物が出土した。ここでは、遺跡で認識された自然層を提示し、それぞれの時期の遺物の包含位置について説明することにした（第6図）。

### 第I層（表土）

耕作土である。

### 第II層（黒色土）

いわゆる「黒ボク土」で、しまりが無い層。現地では畑地造成や耕作などによる削平の為、遺存状況は悪い。

### 第III層（明褐色土）

アカホヤ火山灰をたくさん含んだ層である。粒子が細かいが、しまりが無い。この層の上面が弥生時代前期の遺物包含位置である。

### 第IV層（黒褐色土）

粒子が細かく、しまりの強い層。この層の上部が縄文時代早期遺物の包含位置である。

### 第V層（暗褐色土）

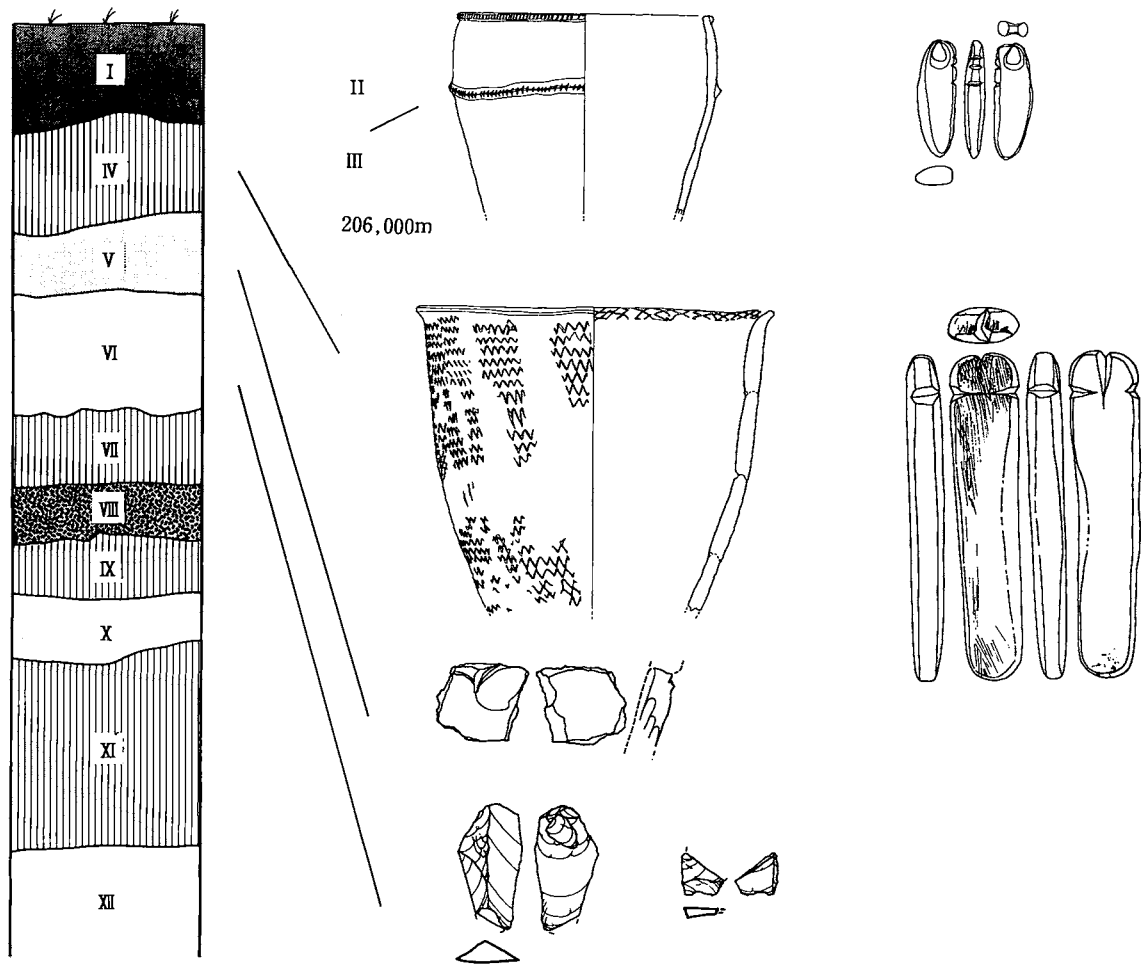
上層に比べると、しまりが弱くなる。粒子は、細かい。色調は、下位にいくにしたがって明るさを増していく。IV層とVI層との漸的な様相を呈する。この層は、縄文時代草創期の遺物包含層である。

### 第VI層（黄褐色粘質土）

熊本県下ではいわゆる「ハードローム層」と呼ばれている層である。粒子は細かくて強くしまり、やや粘性を帯びている。乾燥するとクラックが発達する。無田原遺跡では、この層の上部で先土器時代の石器が出土している。

### 第VII層（黒褐色粘質土）

所謂「黒色帯」である。土質は、上層とほぼ同じ



第6図 基本土層図

である。

**第VIII層（暗褐色粘質土）**

「暗色帯」である。その主体をなす土の性質は、粒子が細かく、固くしまった層である。中に細かいパミスや火山ガラスを多く含んでいて、移植ゴテで削るとザクザクとした触感を受ける。層に入った火山堆積物は、始良Tn火山灰である。

**第IX層（黒褐色粘質土）**

所謂「黒色帯」である。土質は、第VII層とほぼ同じである。

**第X層（褐色粘質土）**

大津町から西原村にかけて見られる「赤色軽石」

（阿蘇草千里噴出物）が入る部分であるが、無田原遺跡では、それが見られなかった。この地域は、その分布域外となっているのだろう。土質は、上層とほぼ同じである。

**第XI層（黒褐色粘質土）**

所謂「黒色帯」である。土質は、上層とほぼ同じである。

**第XII層（黄褐色粘質土）**

色調がやや白っぽい黄褐色を呈する層である。上層からすると粘性が弱くなる。粒子がやや大きめなのであろうか、移植ゴテで削る際には、サクサクとした触感である。



## 第III章 調査とその成果

### 第1節 先土器時代の遺物

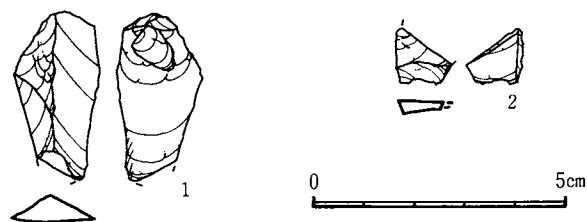
#### 1. 遺物の出土層位と位置、そしてその意義

先土器時代の資料としては、剥片と碎片2点であった。その出土位置は、第I章第3節のところで示しているように、第VI層である黄褐粘質土層の上位であった(第6図)。その出土層順から判断すれば、細石器文化に属するものと思われるが、そのことを示す関係資料の出土は無かった。

出土地点は、発掘調査区の南西隅であった(第9図)。こうした出土地点の状況から、この時代関係の資料の中心部は、調査区外、しかも今回調査した場所の南側にあるということが類推される。そういう意味では、当該期のブロックの北端が調査対象となっただけで、どれほどの成果でもないということになる。ただし、無田原遺跡での調査において、この時代の資料が確認されたことは初めてである。そういう意味では、出土資料の量や質以上に、今回の調査は意義あるものと思われる。

#### 2. 先土器時代の資料(第7図)

1は、剥片である。石材は、頁岩である。打面は、二枚による複剝離面で、打面調整は無く、頭部の調整もみられない。先端部を欠出する。2は、碎片である。石材は、黒曜石である。打面部を失っているので、詳細はわからない。



第7図 先土器時代石器実測図

### 第2節 縄文時代草創期の遺物

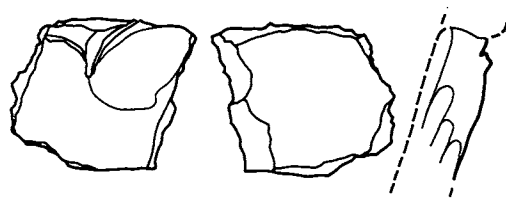
#### 1. 遺物の出土層位と位置、そしてその意義

縄文時代草創期の資料としては、爪形文土器1点があった。その出土層位は、第I章第3節のところで示しているように、第V層である暗褐色土層であった(第6図)。ただし、関係資料が無かったために、この土器がどのような石器群を伴うものかは明らかにできなかった。現在のところでは、細石器関係の資料は1点も出土していないので、石鏃を中心とした石器群の可能性が高い。

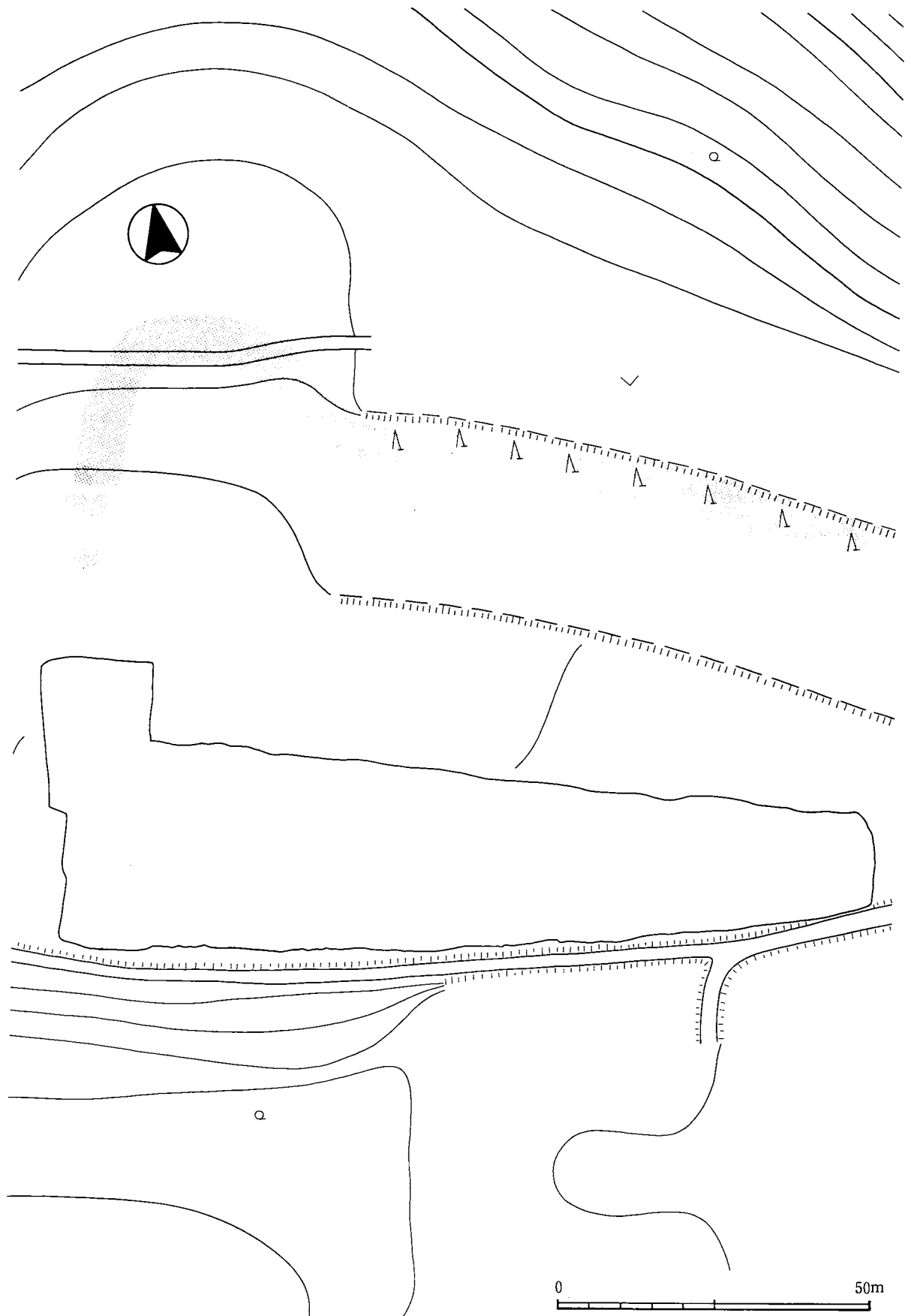
出土地点は、発掘調査区やや北西よりであった(第10図)。資料は、単独での出土であり、その広がりや推察できるものではなかった。おそらく、今回調査した場所の北側に分布の中心があるのだろう。そういう意味では、今回の調査は、分布域の北のはずれを対象にただけで、どれほどの成果も無かったことになる。ただし、前節でも述べておいたように、無田原遺跡での調査において、この時期の資料が確認されたことは初めてであり、出土資料の量や質以上に、意義あるものと思われる。

#### 2. 縄文時代草創期の資料(第8図)

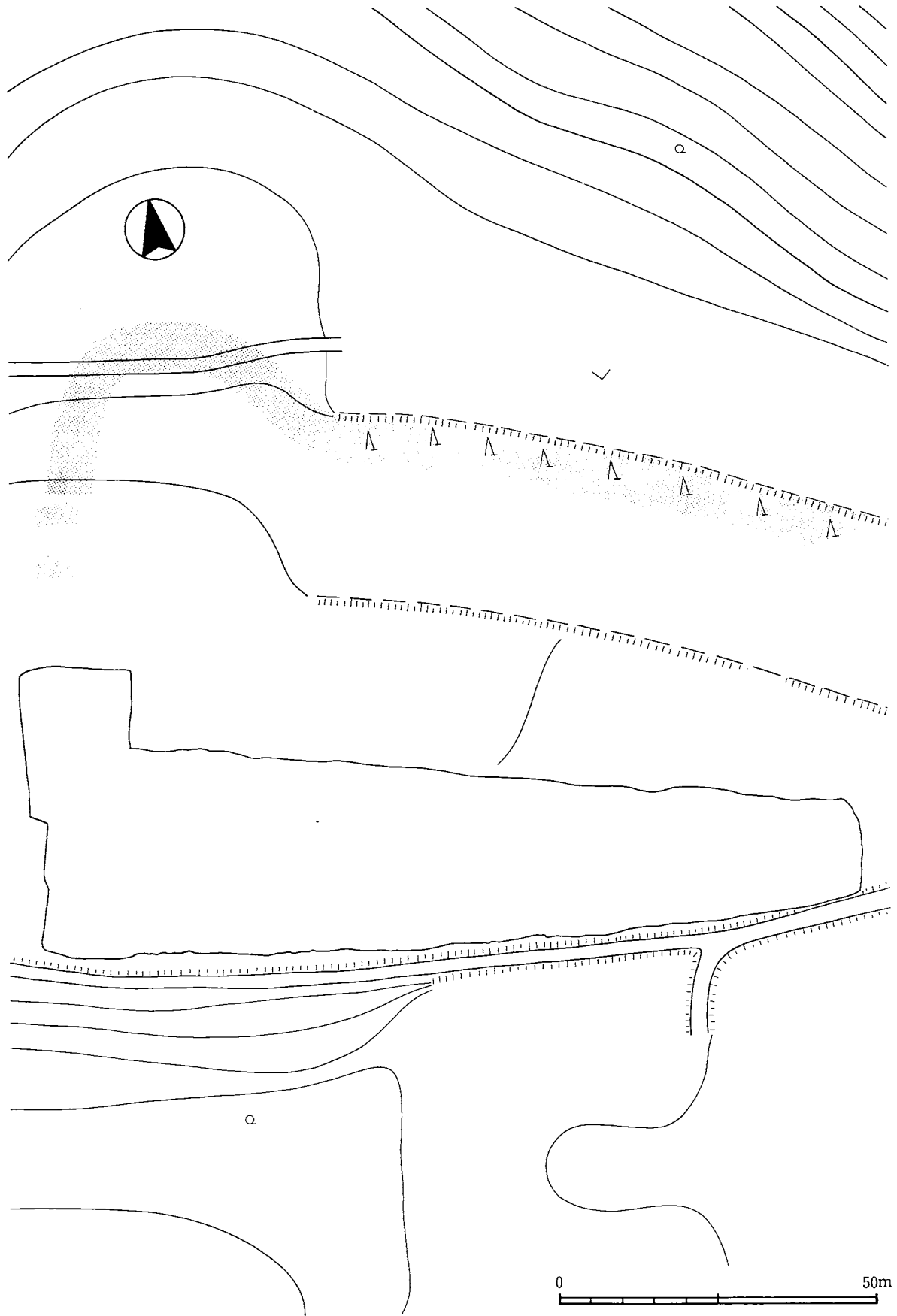
関係資料は、先に述べておいたように爪形文土器1点のみである。土器は堅緻で、焼成の状況は良好である。器面の文様では、一つの爪の痕跡と爪形施文の際に付けられた指頭押捺の痕跡が観察される。文様の状況から判断すれば、南九州でみられるこの時期の土器とは異なり、北九州のものに類似している。



第8図 爪形文土器実測図(2/3)



第9図 先土器時代石器分布図



第10図 爪形文土器分布図

### 第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構と遺物は、鬼界カルテラを給源とするアカホヤ火山灰層（第Ⅲ層）下、第Ⅳ層である黒褐色土層中から出土した。遺物の包含状況は、芳しくなかった。それは、当地がゴボウ畑となっていた関係上、深く掘られた幅20cm弱の溝が縦横に走っており、それによって包含層が破壊されている部分も多かったためである。ただし、検出された遺構は、破壊を被りながらも、遺存した部分もあってその復原は可能である。また、ゴボウの溝幅以下の遺構は、見られなかったため、遺構はほとんどのものが残っていたものと判断される。もし、欠落しているとするならば、溝幅以下の遺構で、しかもその溝にすっぽりと納まっていたもののみであろう。いずれにしても、認識可能な遺構は、ほぼ100%検出したと思っている。

なお、今回の調査で得られた成果は、炉穴2基、集石3基の遺構、押型文土器・捺糸文土器・条痕土器・手向山式土器などの早期土器とそれに伴う石器・石製品などの遺物群であった。以下、遺構、そして遺物という順番で説明を進めていこう。

#### 1. 遺構とその位置（第11図）

遺構の種類とその数は、炉穴2基、集石3基であった。

炉穴は、調査区の南、しかも東よりに2基がみられた。その位置関係は、20mの距離を置いて、東側のものが1号、西側のものが2号である。

集石は、2号炉穴に近接して検出された2号集石を除き、ほとんどが調査区の西側に偏って検出された。それぞれの遺構の位置は、1号が南西隅で、2号が2号炉穴の近く、3号が1号よりも北東へ10m離れた部分であった。

##### ① 炉穴（第12図）

###### 1号炉穴

小型の炉穴である。ゴボウ穴によって長軸側の両端が破壊されている。推定される遺構の大きさと平面形態は、長軸0.42m、短軸0.35mの楕円形で、断面形は、深さ0.11mの皿形を呈する。

###### 2号炉穴

大型の炉穴である。ゴボウ穴5条によって破壊されている部分もあるが、その全体像を知る上には支障がない程度であった。平面形態は、楕円形を呈し、長軸2.00m、短軸1.53m、深さ0.48mを測る。断面形は、舟形を呈している。炉穴の中には多量の焼土が残されていた。図中で示した網部は、その範囲である。

この遺構の使用法を推定する痕跡も残されていた。それは、南壁の下部に見られるもので、著しく焼け、しかもやや抉れた状態をとっていた。つまり、この部分が直接に強い火力を受けていたことになる。おそらく、焚口を北にして、南壁近くで焚いていたものであろう。

##### ② 集石（第13図）

###### 1号集石

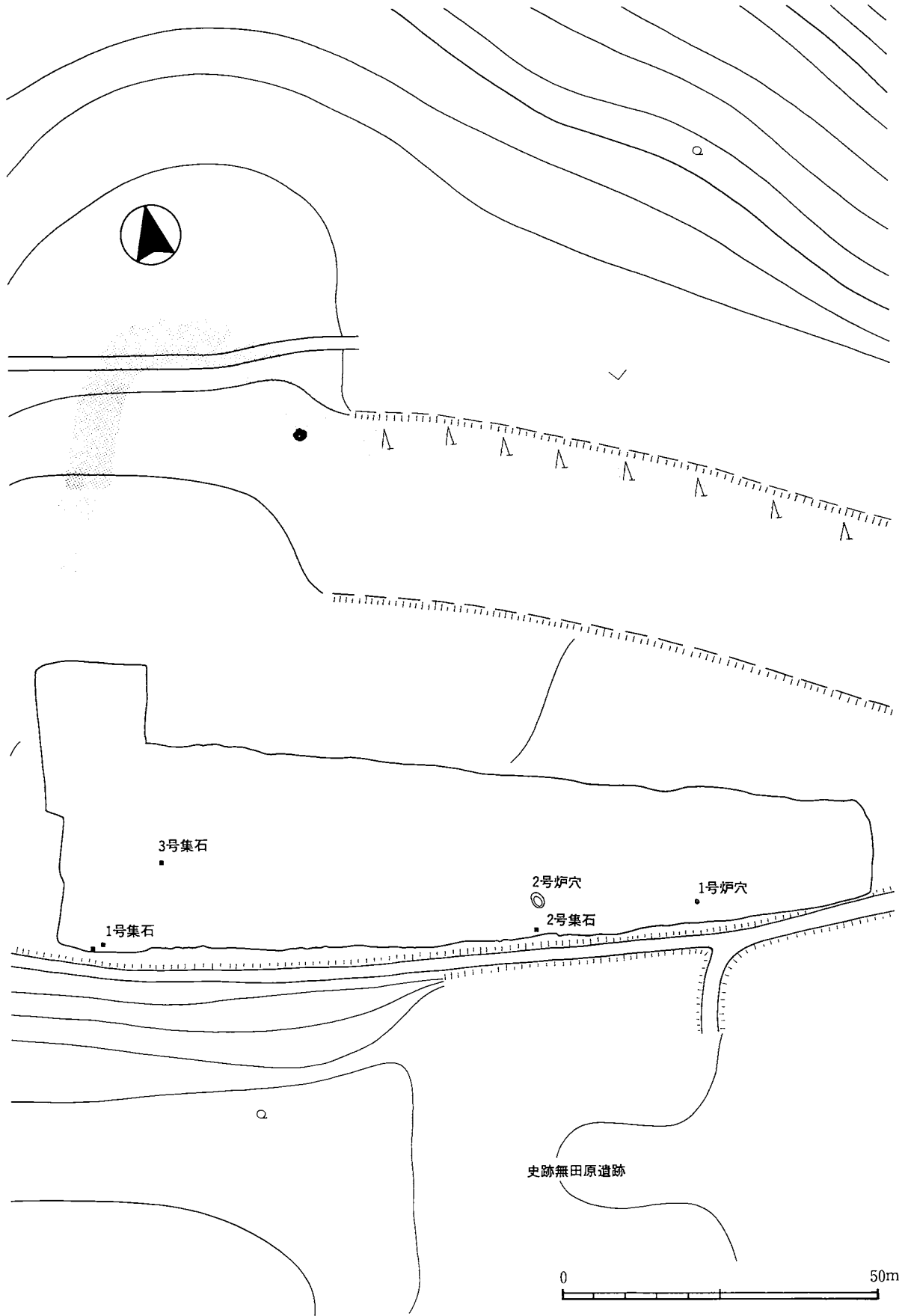
近接する二つの石の群を一括して、1号集石と呼んだ。この二つの石の群は、異なった遺構であるという見方もあろうが、検出されている場所が近接し、しかも両者を区別できるほどの明確な理由が見つからなかった。したがって、本報告では、北側のものをa、南側のものをbと呼んでおきたい。

aは、大小13個の円礫を重ね合わせることで構成された集石である。石はいずれも焼けている。ただし、円形で深い掘り込みを伴って検出される石組み炉とは異なっている。

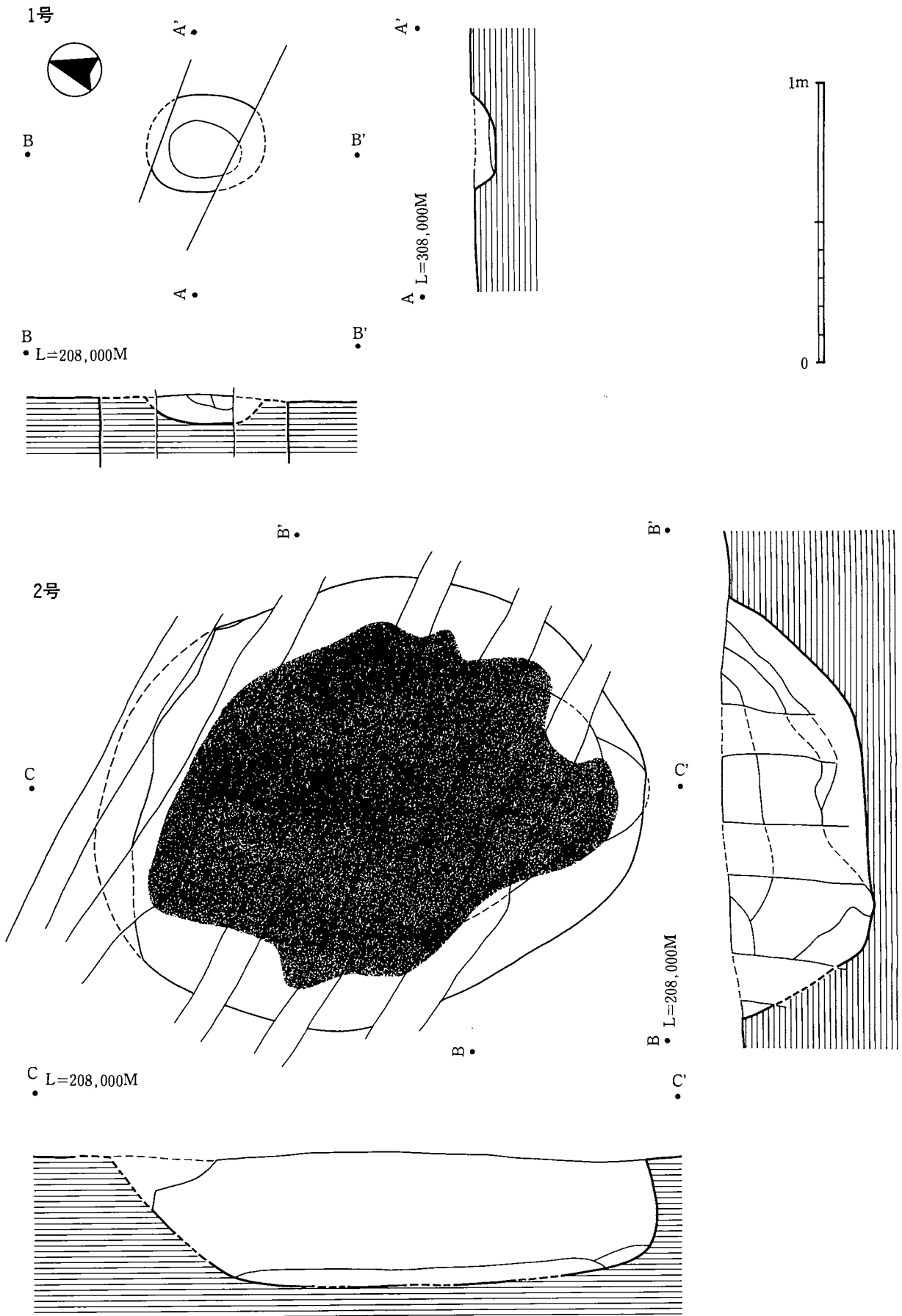
bは、環状に石のまとまりが見られるもの、大小19個の円礫や角礫によって構成されている。その礫の範囲は、長軸1.1m、短軸0.92mという楕円形を呈し、環の幅は0.2～0.3mである。ただし、遺構の南側の一部は、道路開削の際に破壊されているので、その形態や規模は、あくまでも推定上である。なお、こうした環状の礫配置については、御堂島正・上本進二両氏によって霜柱の作用によっておこりうるという研究（1987）が提示されているので、こうしたことを考慮に入れる必要がある。

###### 2号集石

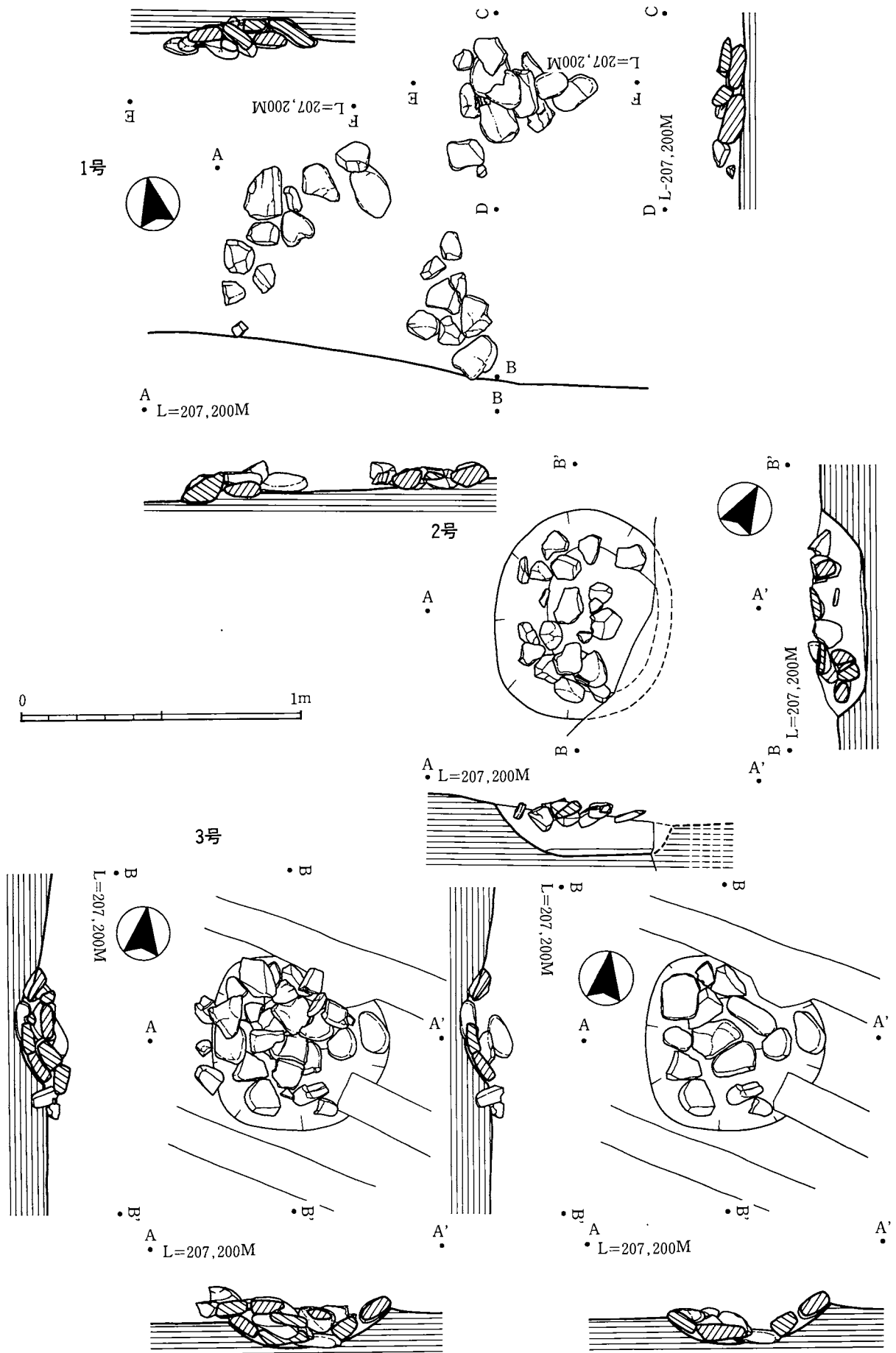
東側がゴボウ穴によって破壊された状態で検出された。この集石は、浅い土坑とその中に入った24個の円礫・角礫によって構成される。土坑内を礫によ



第11図 縄文時代早期遺構配置図



第12図 炉穴実測図



第13図 集石実測図

っていっぱい充たして検出される集石とは様態を異にしている。推定される遺構の大きさと平面形態は、長軸0.75m、短軸0.63mの楕円形で、断面形は、深さ0.16mの皿形である。

いずれの礫も火を受けていたが、底面に受熱の形跡は見られなかった。

### 3号集石

土坑の底面に偏平な円礫を配した構造から石組み炉と呼ばれる種類の遺構である。二箇所がゴボウ穴によって破壊された状態で検出されたが、その破壊の程度は僅かであった。

現状で、石組みを構成する礫は、12個であるが、一部破壊を受けているので、実際には15～16個の礫が使用されていたものと推定される。いずれも受熱の状況を呈していた。炉内には、19個の礫が入っていたが、整然とした石積みの状況は見られなかったので、竈構造の石組み炉ではなさそうである。

土坑は、不整ではあるが円形を呈している。計測すると、直径0.63～0.70m、深さ0.18mを測る。断面形は、皿形である。

残念ながら、礫の焼成程度の特徴など、この遺構の使用方法を類推するための明確な痕跡は見出せなかった。ただし、配された礫の傾斜など、遺構の構造には、何らかの特徴がある。それは、南北方向の断面形と東西方向のそれとから読み取れる事実である。つまり、北、南、西の配石の傾きと東の配石の傾きが異なり、東の方が急なのである。そのことから、この炉の焚き口が西側にあることを知れるのである。

### ③ 礫群 (第14図)

炉穴や集石のほか、無田原遺跡では多量の礫が調査区全域から出土している。実は、これらの礫を幾つかのまとまりとして認識し、そのまとまりを一つ一つの礫群と呼称できる場合もあり、こうした傾向が見出せるのかどうかを調査の段階で考えてみた。しかし、その出土状況は、それほど顕著な偏在の傾向をみせず、調査区全域に散在する傾向であった。したがって、今回の調査では、礫の分布状況を一括して提示することに止めることにした。ただし、こうした図面から読み取れる重要な事実も判明してい

る。これは、本来ならば調査段階で気付く必要があったのだが、――。

礫の分布状況を一目すれば、特徴的な傾向に気付く。それは、礫出土域の臨界が、大きく二つの波を伴って見出せることである。調査区中央の南端を波底、その両側に大きく迫り出す礫分布の空白区、そして、西側に深く入り込む礫の分布域である。つまり、調査区には、南側に入り込む礫の分布域と北へ迫り出す空白域が波形に存在するのである。それは、とりもなおさず、畑地となった現状では知りえない本来の地形的な特徴を表すものである。

畑地開墾の結果、地形的に高い部分の礫は削り取られ、削平を免れた部分の礫は残されたのである。そして、そのことは、今回の調査区には、二つの谷地形と二つの尾根地形があったことを示してもいて興味深い。

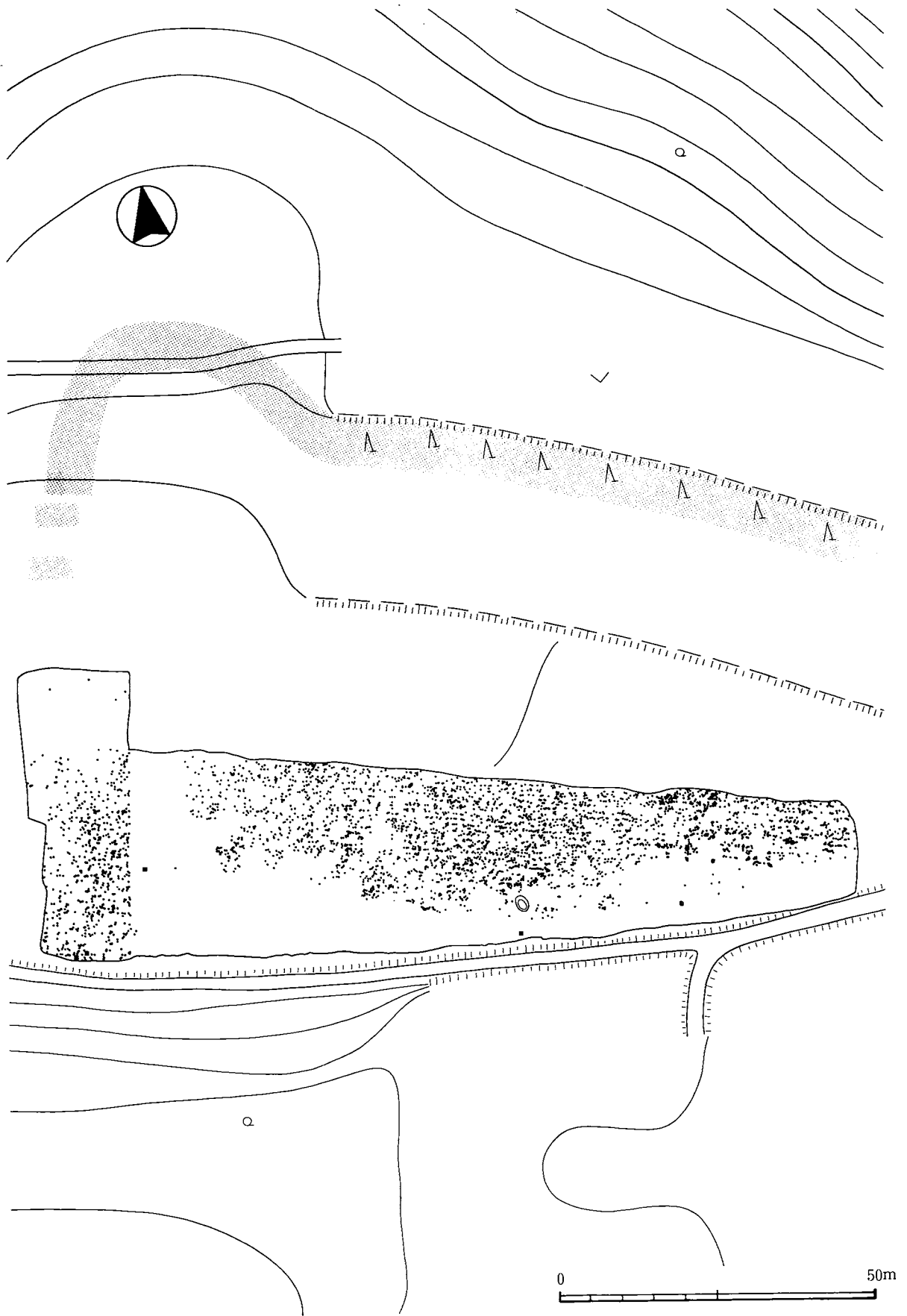
### ④ 遺構の位置の特徴

今回の調査は、遺構の位置と本来の地形的特徴を併せて考えさせてくれたという意味では意義深いものであった。見てみよう。

先に示したように、礫の臨界分布は、南側に入り込む礫の分布域と北へ迫り出す空白域が交互にうねるという波形に存在する特徴を示していた。つまり、調査区には小さい谷地形と小さい尾根地形が本来存在していたのである。ただし、これは、畑地開墾に伴う掘削の結果であり、けっして人びとの行動様式の結果を表すものでないことをおさえておく必要がある。

そうした目で遺構の分布を見てみると、遺構が残されている部分は、ほとんどが浅い谷の頭、しかも礫の分布域に僅かに埋没する形にあることを知れるのである。調査区の西端にある集石、中央部とやや東側に偏った部分にある集石と炉穴がそれで、これが生活空間の中での人間ないしその集団の行動様式の一面を示すものかもしれない。ただし、尾根地形は、畑地開墾の結果、大きく削り取られているということからすれば、尾根部の遺構は消失したという可能性も否定できない。いずれにしても、縄文時代早期における集落と地形との関係を知る一つの素材となることは確かであり、今後、類例を集めていく





第14図 縄文時代早期礫の分布図

必要がある。

なお、県の史跡として指定された集石の分布域は、位置的には中央の谷部を南へ登った側にあることを付記しておく。

## 2. 土器とその分布 (第15図)

縄文時代早期に属するすべての土器の出土地点を示したのが第15図である。それを見ると、礫分布の所で知れたような事実が追認できる。それは、礫の臨界分布、南側に入り込む礫の分布域と北へ迫り出す空白域が交互にうねるといふ波形をとって存在する特徴である。つまり、調査区には小さい谷地形と小さい尾根地形が本来存在していたのである。

では、それぞれの土器文様の種類ごとに見ていくことにしよう。

### ① 押型文土器

押型文土器関係では、格子目文土器、楕円文土器、山形文土器、そして異なる種類の押型文が併用されている土器（以下、異種押型文併用土器と呼ぶ）がある。また、②として独立させて解説しようと思うが、押型文と燃糸文とが併用されている土器（以下、押型文・燃糸文併用土器と呼ぶ）もある。

#### 格子目文土器とその分布

分布は、出土点数が少なかったために、明確な偏在傾向をとらず、調査区の西端と東端を除いた範囲に散在した状況で検出された。そうした中で、その特徴を見出そうとすれば、調査区中央のやや東よりに大きなまとまりがありそうだ（第16図）。

出土した土器の個体識別をおこなって、三つの個体を認識した。それぞれを格子目文土器1、2、3と呼称する。以下、個体ごとに見てみよう。

#### 格子目文土器1（第17・18図）

格子目文土器の中で、もっとも出土点数が多い個体で、大小の破片13点が出土している。また、一個一個の破片が大きく、その全体の姿がある程度復元できる資料でもある。反転復元した口径は、28.2cmである。器高は、底部を欠損しているので不明だが、現存値では24cmほどである。

分布は、調査区の中央からすれば東側にあり、しかも調査区の北側に見られるようである。

文様は、表面と裏面口縁部の二箇所にある。施文方向は、表面が縦位で裏面口縁部が横位である。表面の文様は、二つの文様帯に分割できる。それは、上半部と下半部である。上半部では、文様施文の後に帯状の磨り消し手法が採られている。その手法の方向には横と縦があり、下半部との境が横、そしてその上は縦である。なお、縦位の磨り消しには法則性を見出すことはできない。文様そのものの特徴は、間延びしていて浅い雑な彫り込みの原体による、弱々しさにある。文様の単位は二つで、1.9cmの単位幅があり、原体の直径は6cmである。

土器は、底部から順に上へと積み上げる輪積み手法で製作されている。その粘土帯の幅は、6.6cmである。

土器は、輪積み手法で製作されている。その土器作りの実際を観察してみると、6.7cmないし4.6cmに輪積みした粘土帯を一時的な単位にして、乾いたら、また積み上げるという輪積み手法であることが判る。その痕跡として、粘土帯の上には凸形の剝離痕が、下には凹形剝離痕が残される。なお、胴部中位から上の単位幅は6.7cmで、その下位のものは4.6cmで、両者を比べると下位のものの幅が短いようだ。おそらくは、底部から胴部下位までは比較的短い単位で積上げと乾燥を繰り返し、上位になるとそれが長くなるという傾向があるのかもしれない。

#### 格子目文土器2（第19・21図1～9）

格子目文土器の中で出土点数が多い個体で、12点が出土している。ただし、破片は小さくて、その器形を復元することはできなかった。

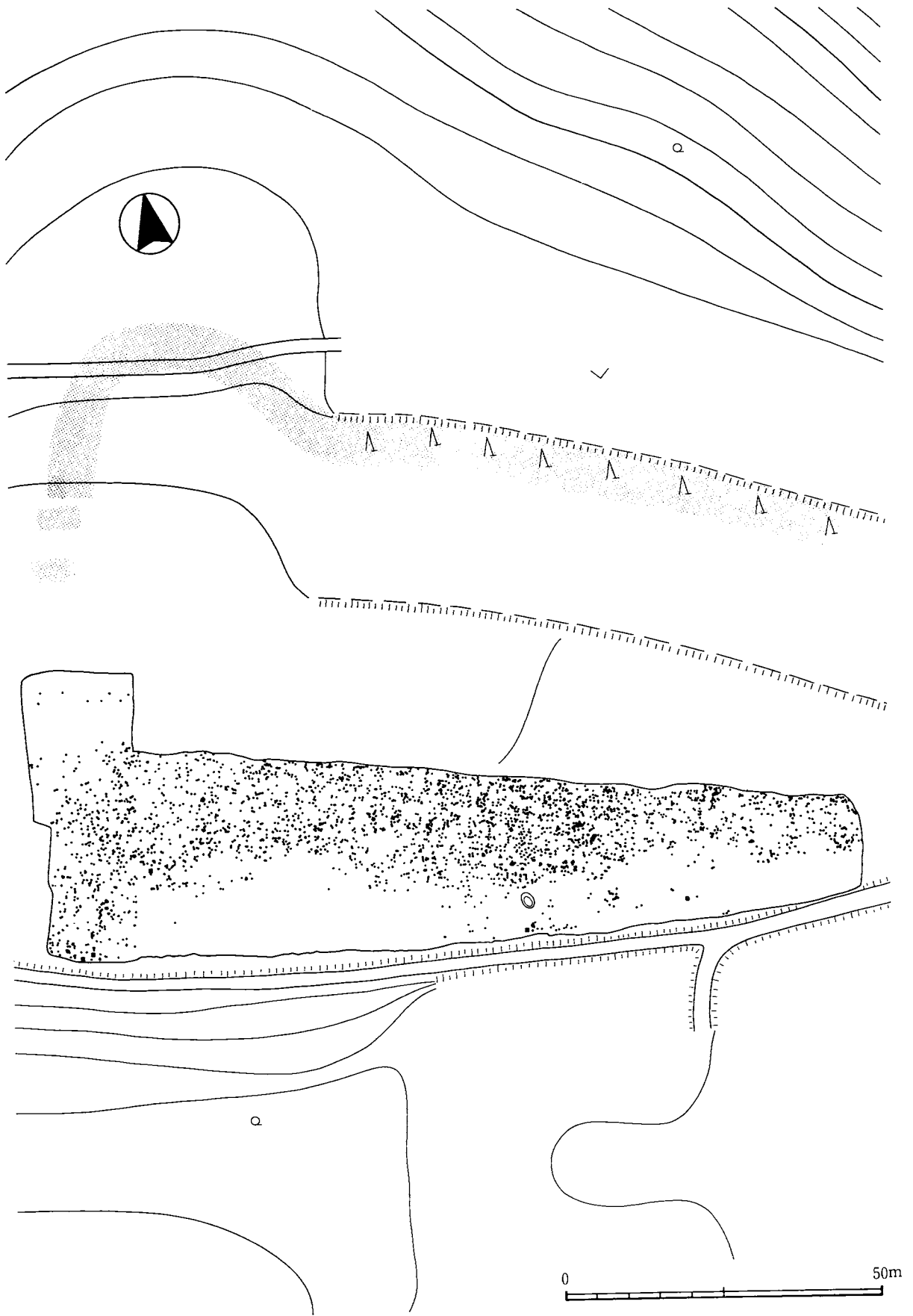
分布は、調査区の中央からすれば東側にあり、しかも調査区の中央近くにある。

文様は、表面と裏面口縁部の二箇所にある。表面は格子目文で、裏面口縁部には原体条痕が認められる。格子目文は、正方形を呈し、しっかりしたものである。

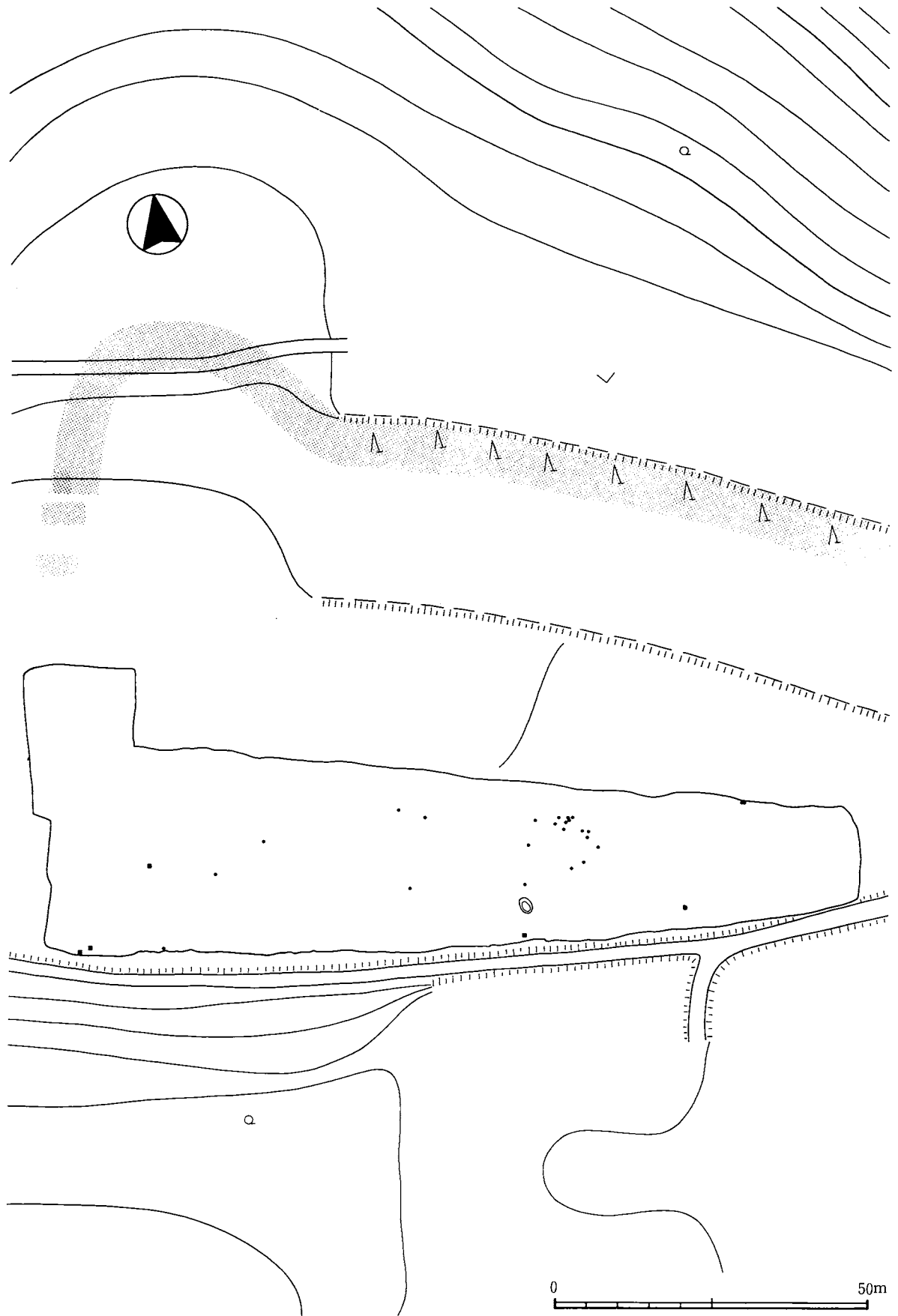
#### 格子目文土器3（第20・21図10～15）

小さい破片6点が出土している。その器形を復元することはできなかった。分布は、調査区の中央からすれば西に偏った部分にある。

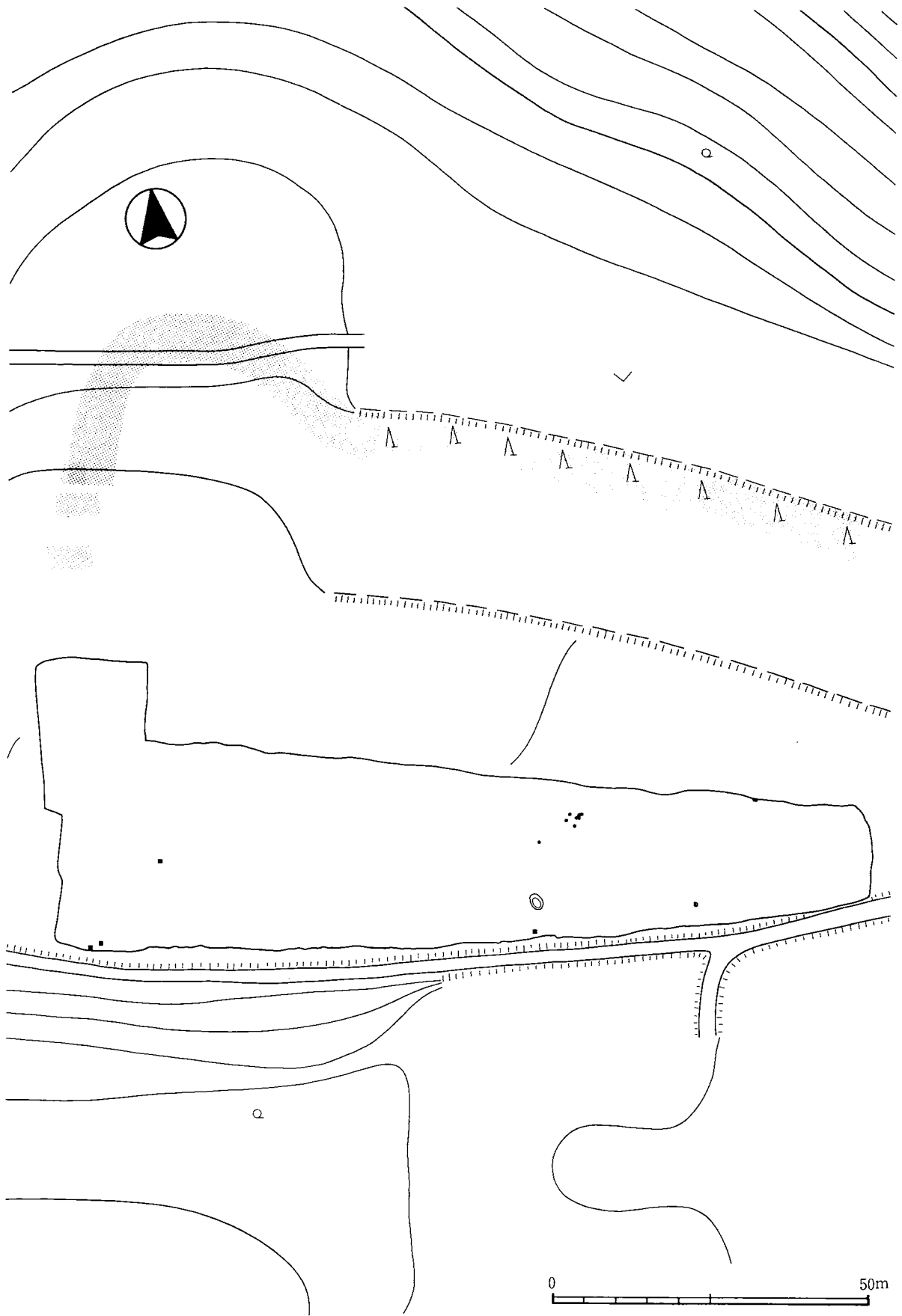
文様は、正方形を呈する格子目文であり、しっかりしたものである。口縁部の出土が無いので、その



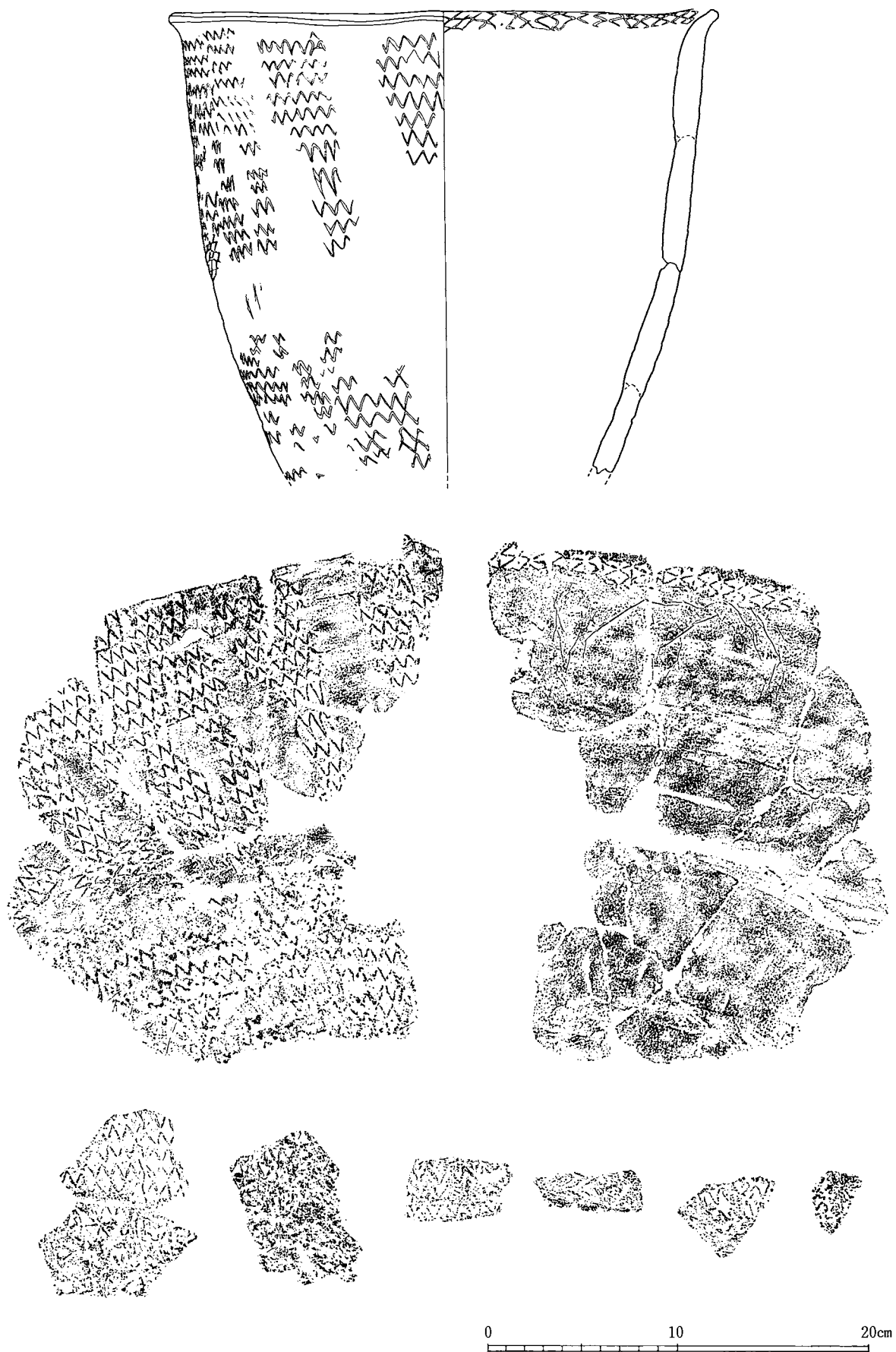
第15図 縄文時代早期土器分布図



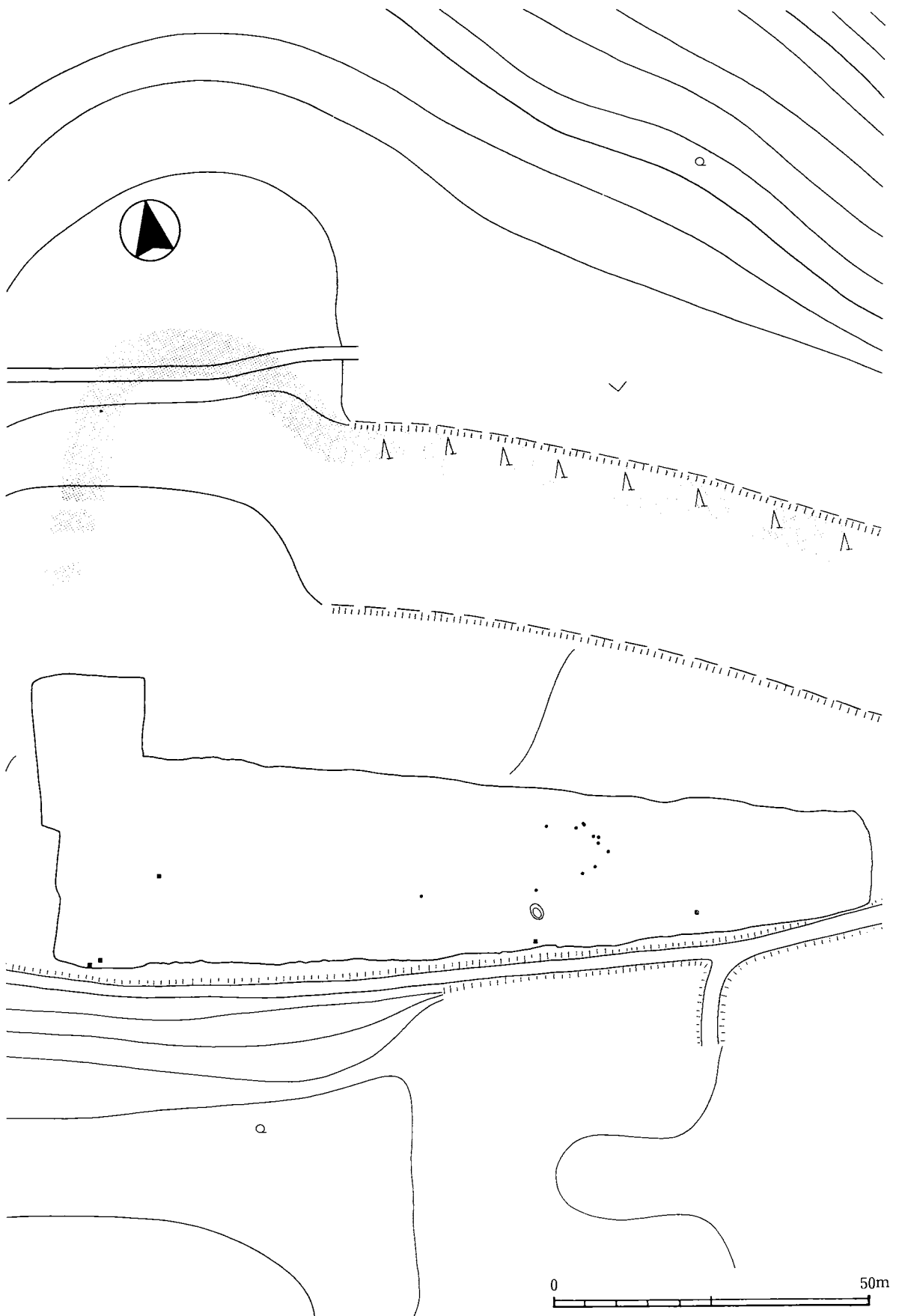
第16図 格子目文土器分布図



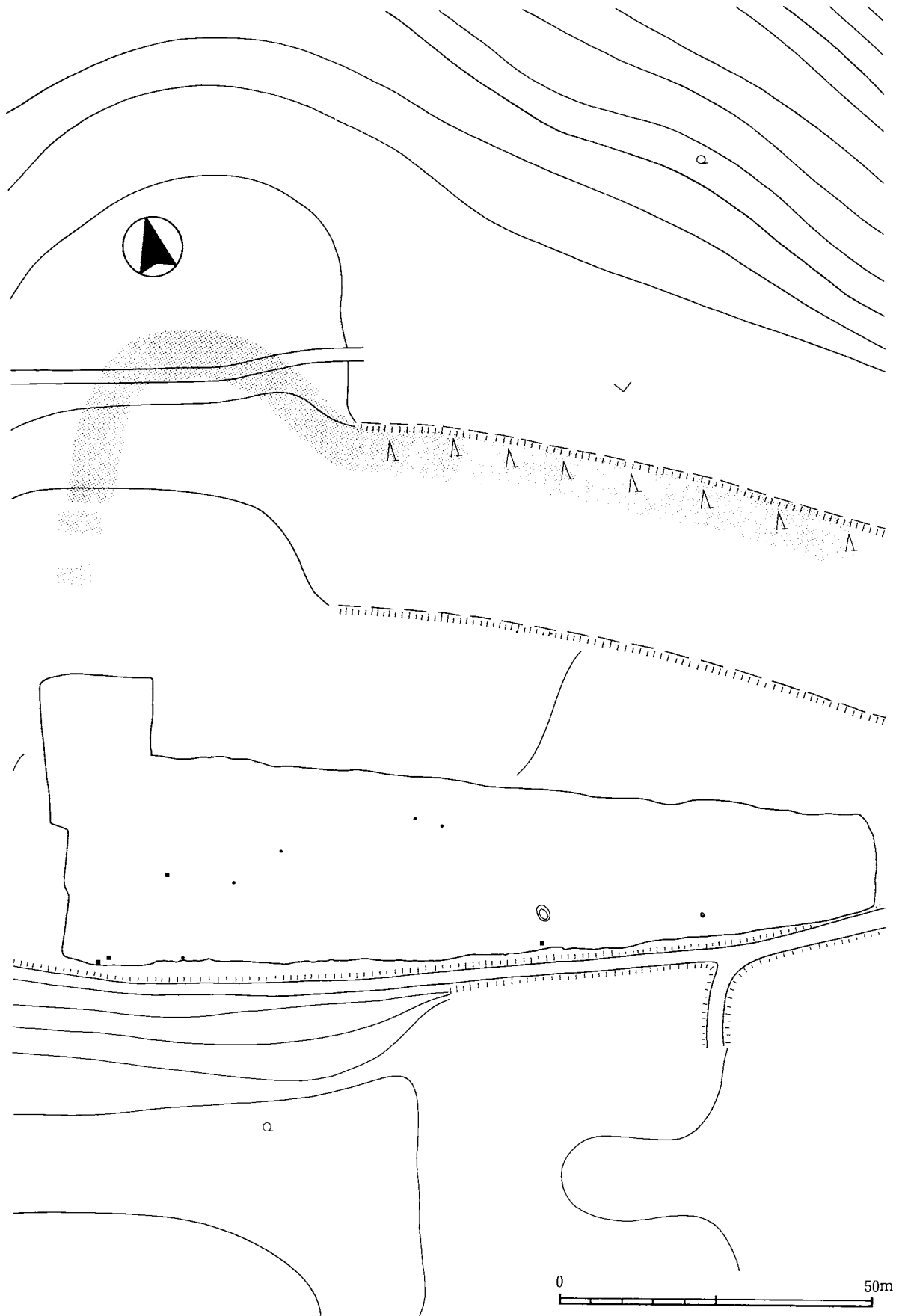
第17図 格子目文土器1分布図



第18図 格子目文土器1実測図



第19図 格子目文土器2分布図



第20図 格子目文土器3分布図



裏面の文様については不明である。ただし、格子目文土器2に似た文様の特徴を持っているので、原体条痕の可能性が高い。

製作手法は輪積みであろう。一つの粘土幅の単位を示す、凸形剝離面を持つ資料が1点(10)凹形剝離面の資料1点(13)出土している。

その他の格子目文土器(第21図16~25)

ここで提示しているものは、個体識別の結果、まとまりを見出せなかった土器である。資料点数が少なかったため、すべてを提示している。その数10点である。いずれも胴部破片で、底部近くのもものが1点ある(25)。

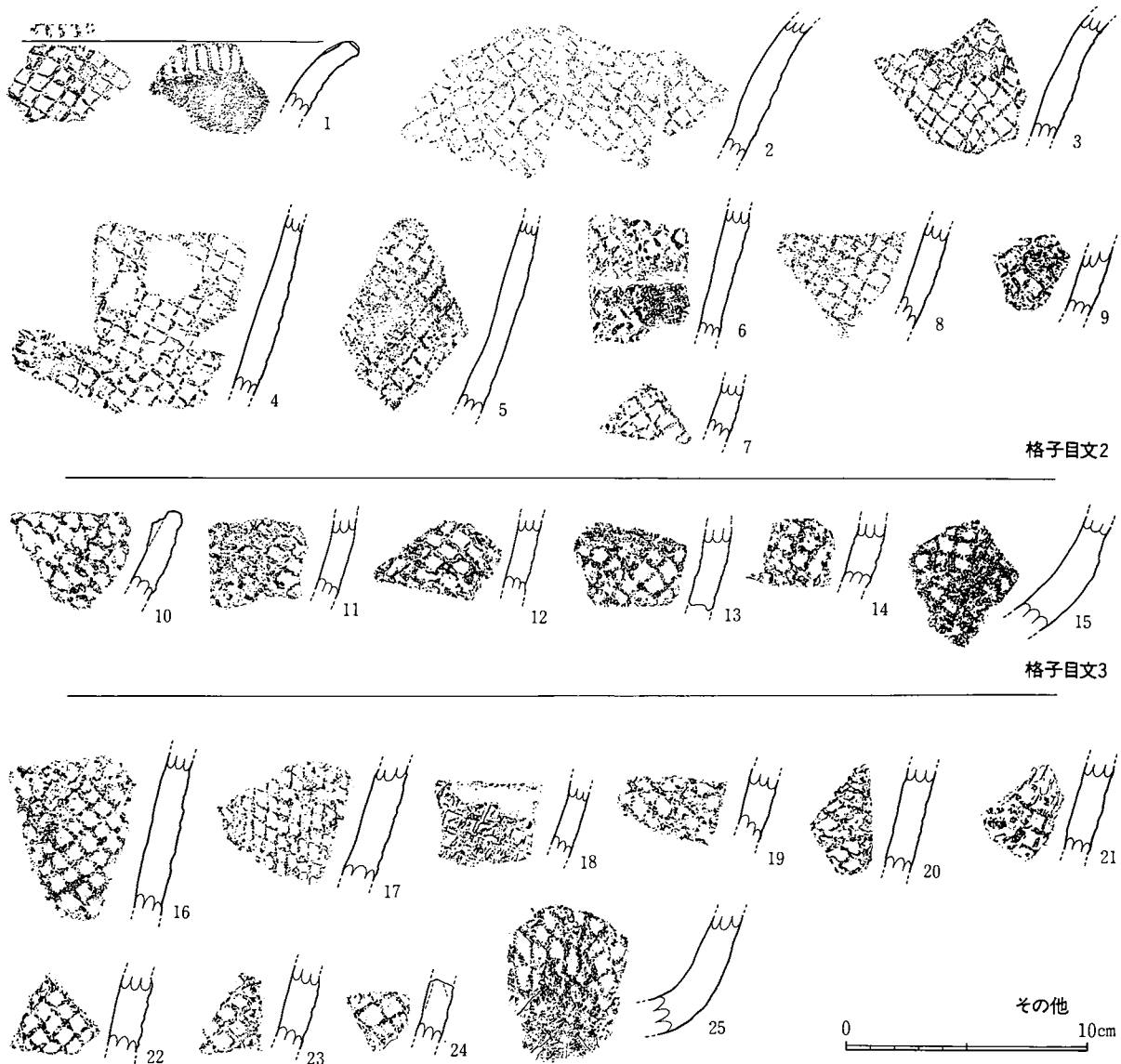
楕円文土器とその分布

分布は、調査区全域にみられる。ただし、調査区の西端ではその分布に希薄さが認められる。(第22図)。ひとまず、これを楕円文土器の偏在と考えておこう。

出土した土器の個体識別をおこなって、103の個体を認識した。それぞれを楕円文土器1~103と呼称する。以下、個体ごとに見てみよう。

楕円文土器1(第23・25図1~12)

楕円文土器の中では出土点数が多い個体で、16点が出土している。出土個体では口縁部の比較的大きな資料が出土しているが、胴部や底部までの接合資



第21図 格子目文土器2・3, その他実測図

料がみられず、その全体的な形を類推することは可能である。それによると、端部で急激に外反する口縁部、やや直線的な胴部上半、緩やかに弧を描く胴部下半という器形的な特徴であることがわかる。反転して復元した口径は、27.7cmである。また、器高は、不明である。底部の形状は、不明である。

分布は、大きく三つのまとまりで検出された。一つは中央部の北側と、その東と西の北側の二箇所である。

文様は、表面と裏面口縁部の二箇所にある。施文方向は、表面が縦位と斜位～横位で、裏面口縁部が横位である。表面の文様は、二つの文様帯に分割できそうだが、その明確な区画は、それを一つの器面で示す資料が無いためにできない。状況的には、縦位に施文される部位は、胴部上半部であり、下半部は斜位～横位であるようだ。

土器は、輪積み手法で製作されている。その単位を示す資料は1点ある(2)。それによると、一つの単位の粘土帯の幅は、7.7cmであり、およそ8cm前後に輪積みした粘土帯を一時的な単位にして、乾いたら、また積み上げるという輪積み手法であることが判る。

#### 楕円文土器2 (第24・25図13～22)

楕円文土器の中では、認識できた破片が10点であり、出土点数は多い方の個体である。ただし、どの破片も細かく、その全体像は復元できない。

分布は、調査区の中央にあり、しかも調査区の北側に偏っている。

文様は、比較的細かい楕円文である。また、文様帯の構成については、それぞれの部位資料の欠如によって不明である。ただし、個体には縦位施文のものと横位施文のもの二種があり、大きく二つの文様帯構成は存在しているようである。

#### 楕円文土器3 (第26・28図1～18)

破片は、18点がある。出土点数が多いわりには、破片そのものは細かく、口径復元は不可能であった。ただし、口縁部と胴部の破片があり、器形の類推は、可能である。それによると、わずかに外反する口縁部、やや直線的な胴部という器形的な特徴である。底部の形状は、不明である。

分布は、帯状に広がる。その範囲は、中央部の北端から南東方向に調査区西側までである。

文様は、表面と裏面口縁部の二箇所にある。施文方向は、表面が縦位と横位で、裏面口縁部が横位である。表面の文様は、二つの文様帯に分割できる。縦位に施文される部位は胴部上半部で、下半部は横位と考えられる。

土器は、輪積み手法で製作されている。その単位を示す資料は1点(14)ある。それによると、一つの単位の粘土帯の幅は、3cmである。およそ3cm前後に輪積みした粘土帯を一時的な単位にして、乾いたら、また積み上げるという輪積み手法であることが推定されるが、その一つの単位の幅については大小様々なものがあると考えられる。この他、輪積み手法の一端を示す資料として、凹形剝離面の資料(6・8・16)がある。

#### 楕円文土器4 (第27・28図19～33)

破片は、17点がある。ただし、破片そのものは細かく、口径復元は不可能であったが、口縁部と胴部の破片があり、器形の類推は、ある程度可能である。それによると、直線的に開く口縁部、直線的ないしやや丸みを持つ胴部という器形的な特徴である。底部の形状は、不明である。

分布は、帯状に広がる。その範囲は、調査区中央部にあり、斜めにのびている。また、やや間を置いて、調査区東側にも一群がある。

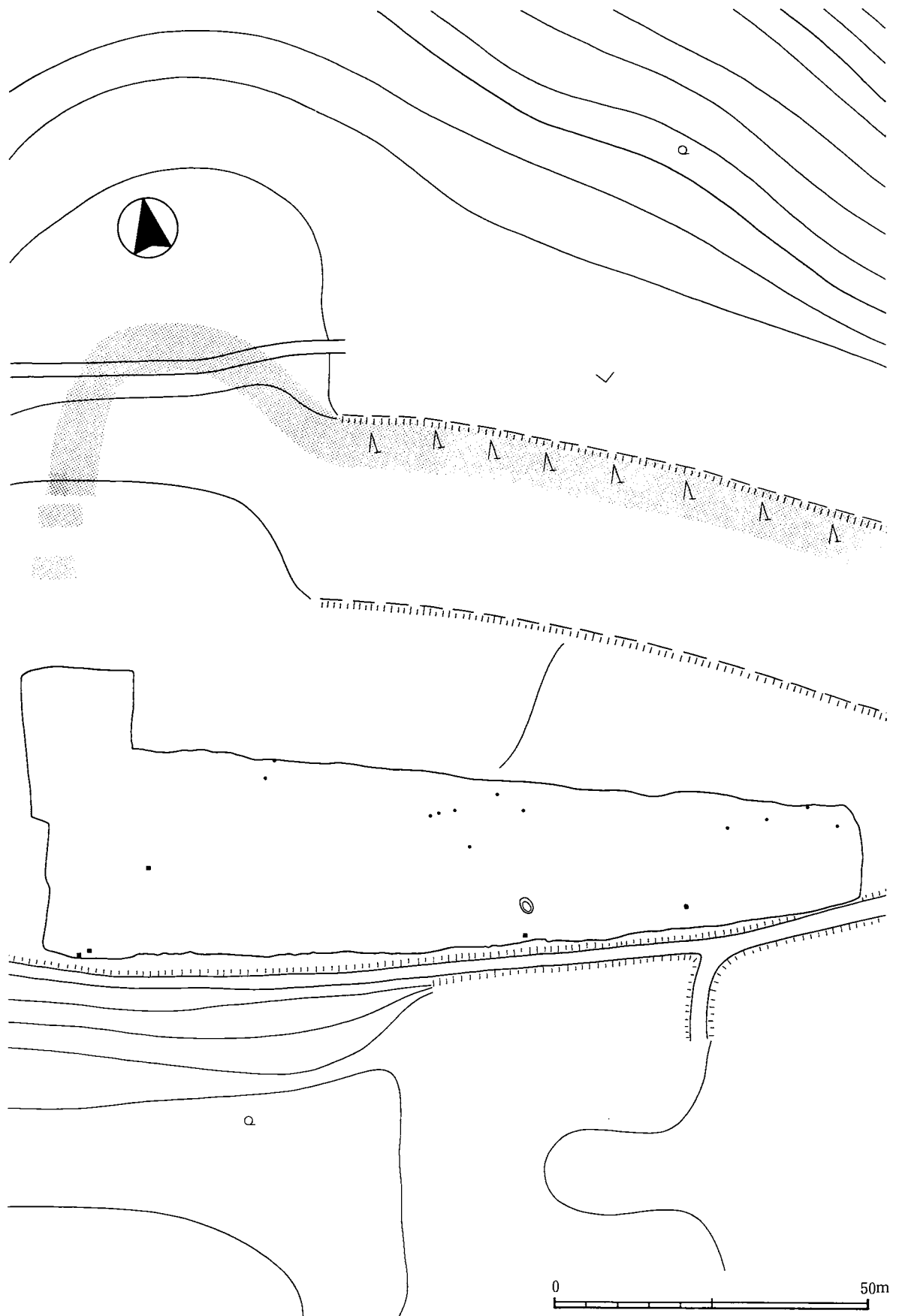
文様は、表面にある。施文方向は、縦位と横位である。しかも口縁部の破片には縦位の文様が、胴部の破片には縦位と横位の二種がある。このことから、表面の文様は、二つの文様帯に分割できるかもしれない。

#### 楕円文土器5 (第29・30図)

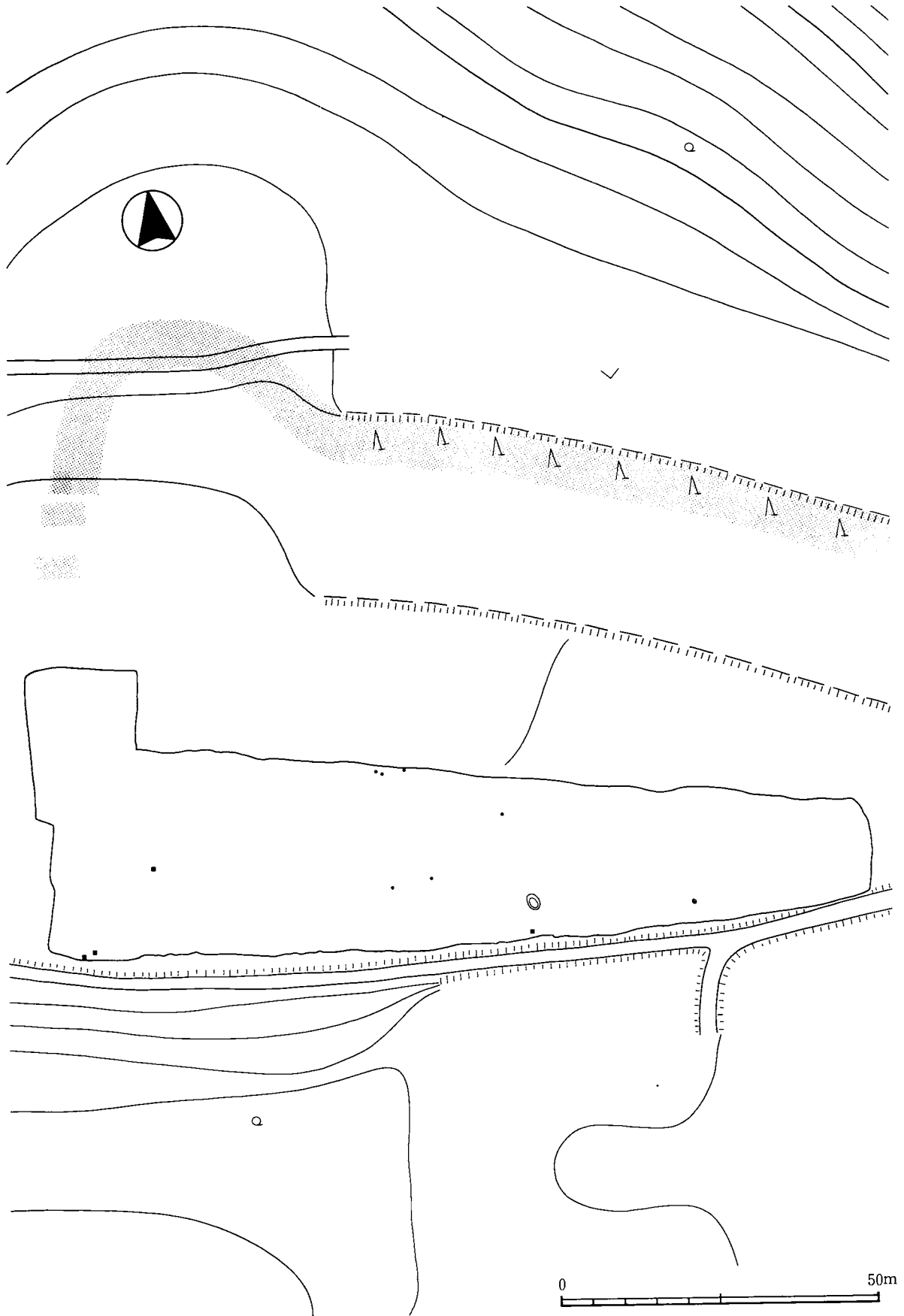
破片は、24点がある。ただし、破片そのものの大きさは、口径復元に耐えるものではなかった。しかし、そうはいつでも、口縁部と胴部の破片があり、器形の類推は、ある程度可能である。それによると、強く外反する口縁部、直線的ないしやや丸みを持つ胴部、そして丸みを持つ底部近くという器形的な特徴である。底部の形状ははっきりしないが、丸底の可能性はある。



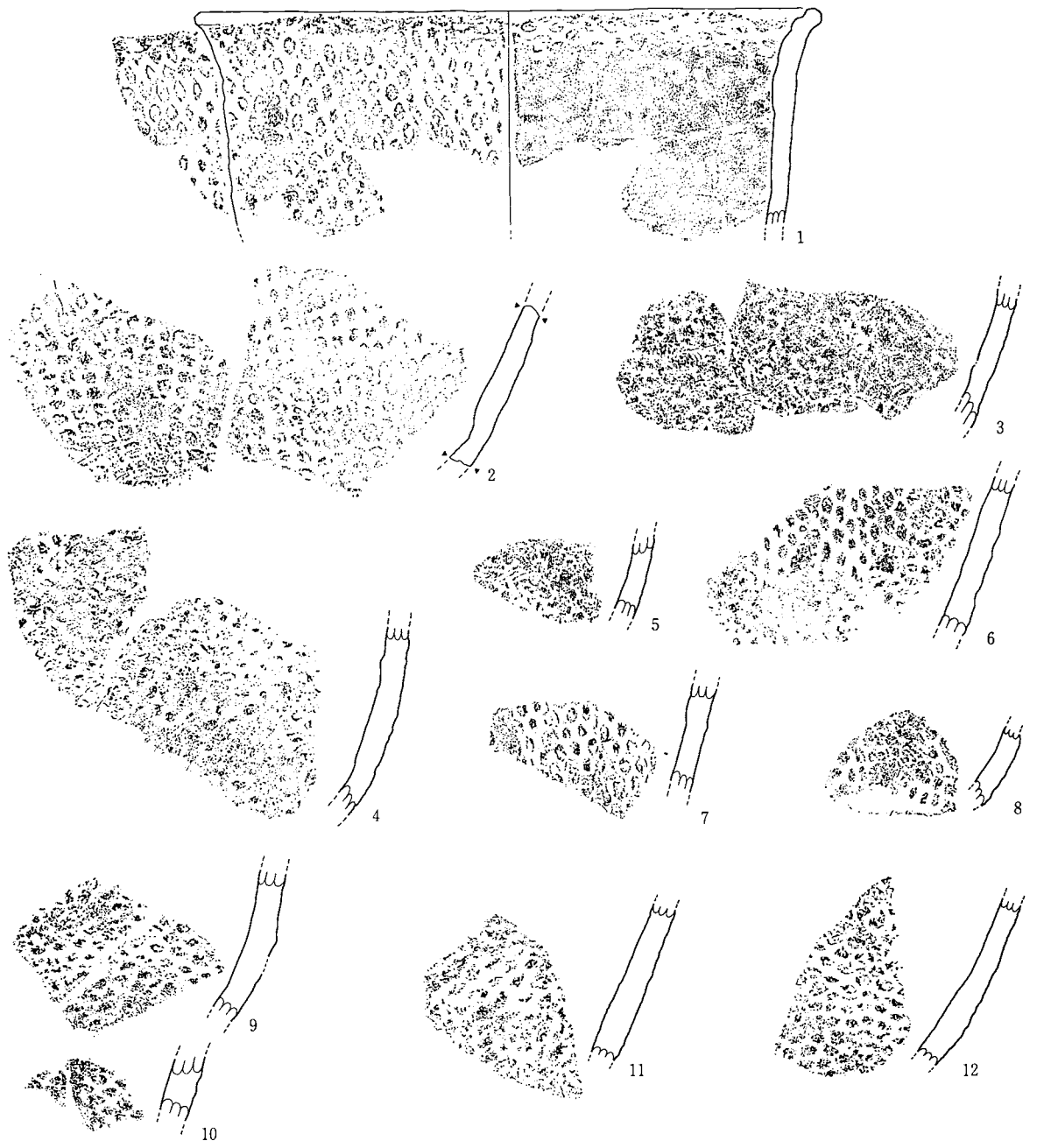
第22図 楕円文土器分布図



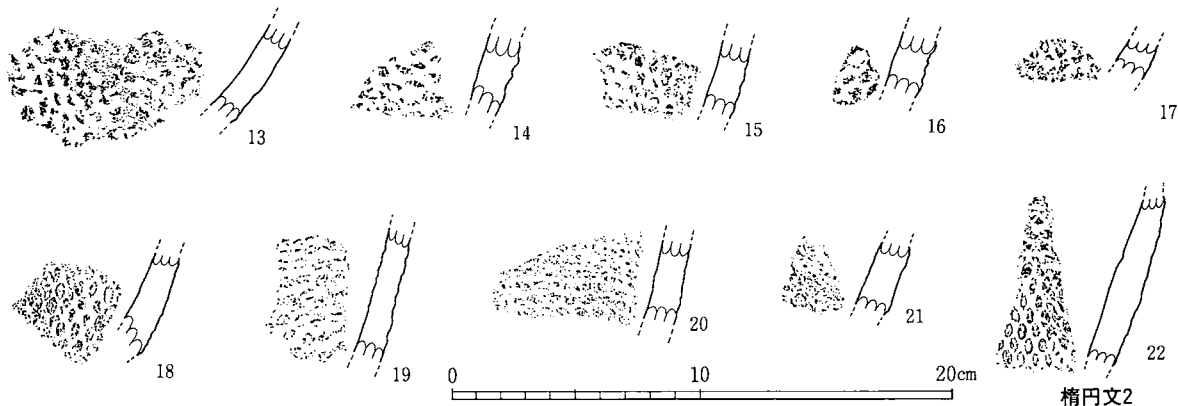
第23図 橢円文土器1分布図



第24図 楕円文土器2分布図

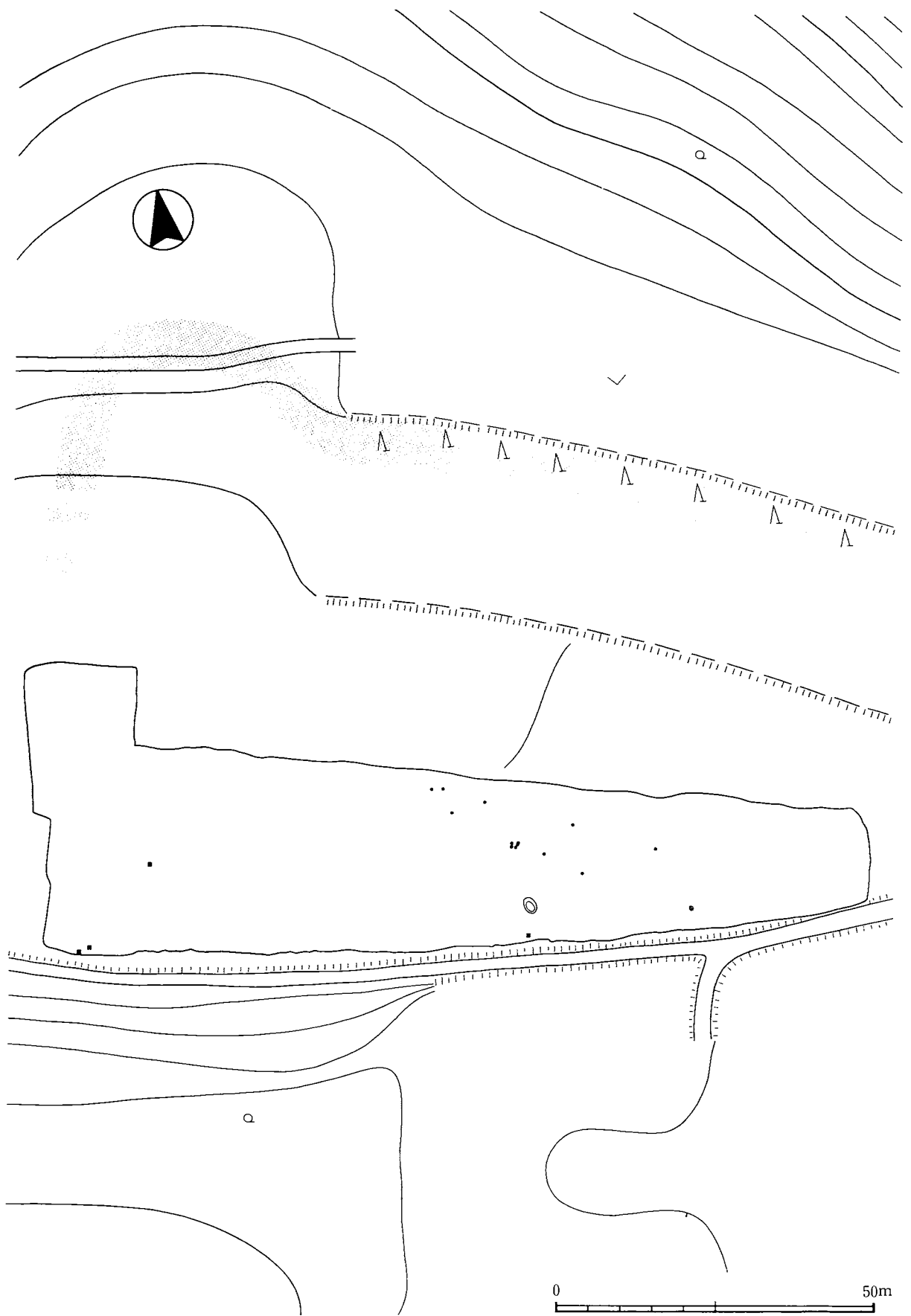


楕円文1

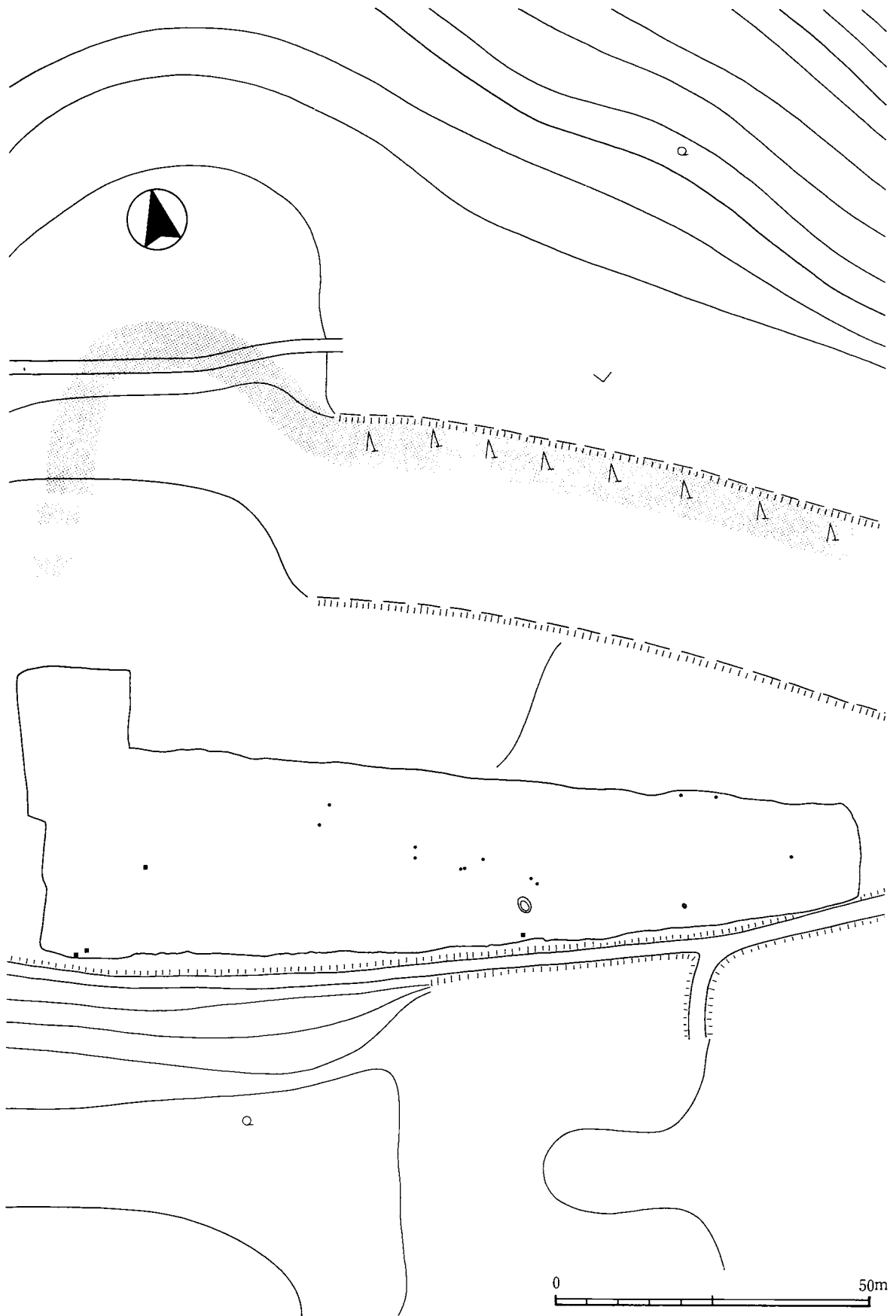


楕円文2

第25図 楕円文土器1・2実測図

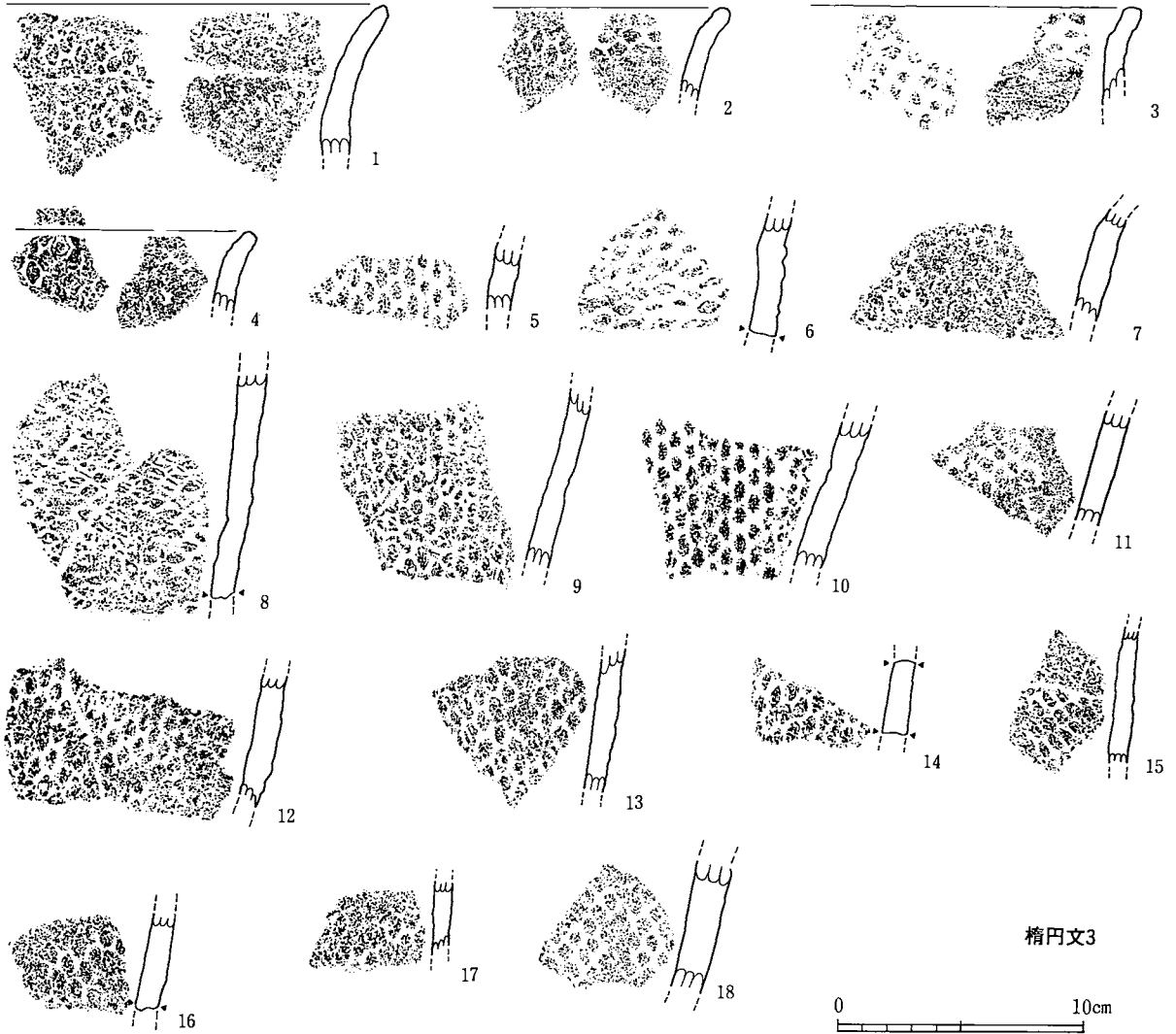


第26図 精円文土器3分布図

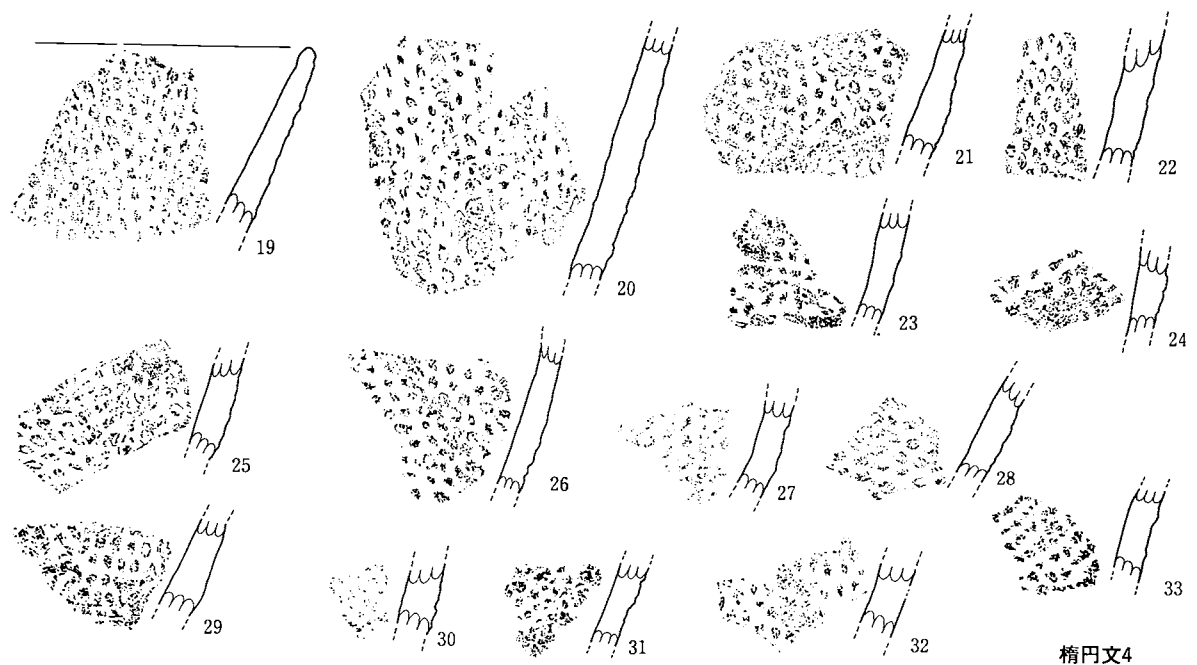


第27図 楕円文土器4分布図



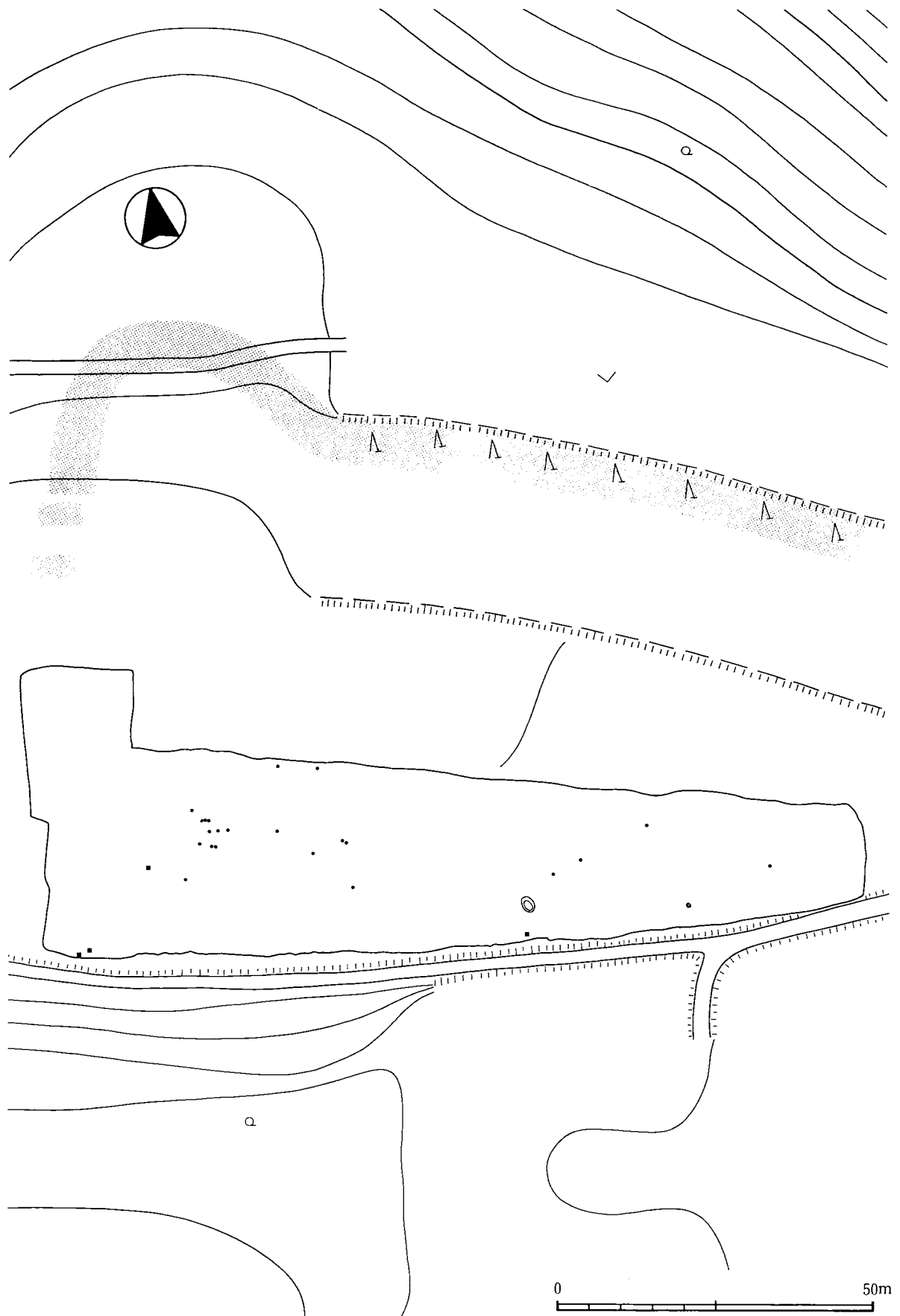


橢円文3

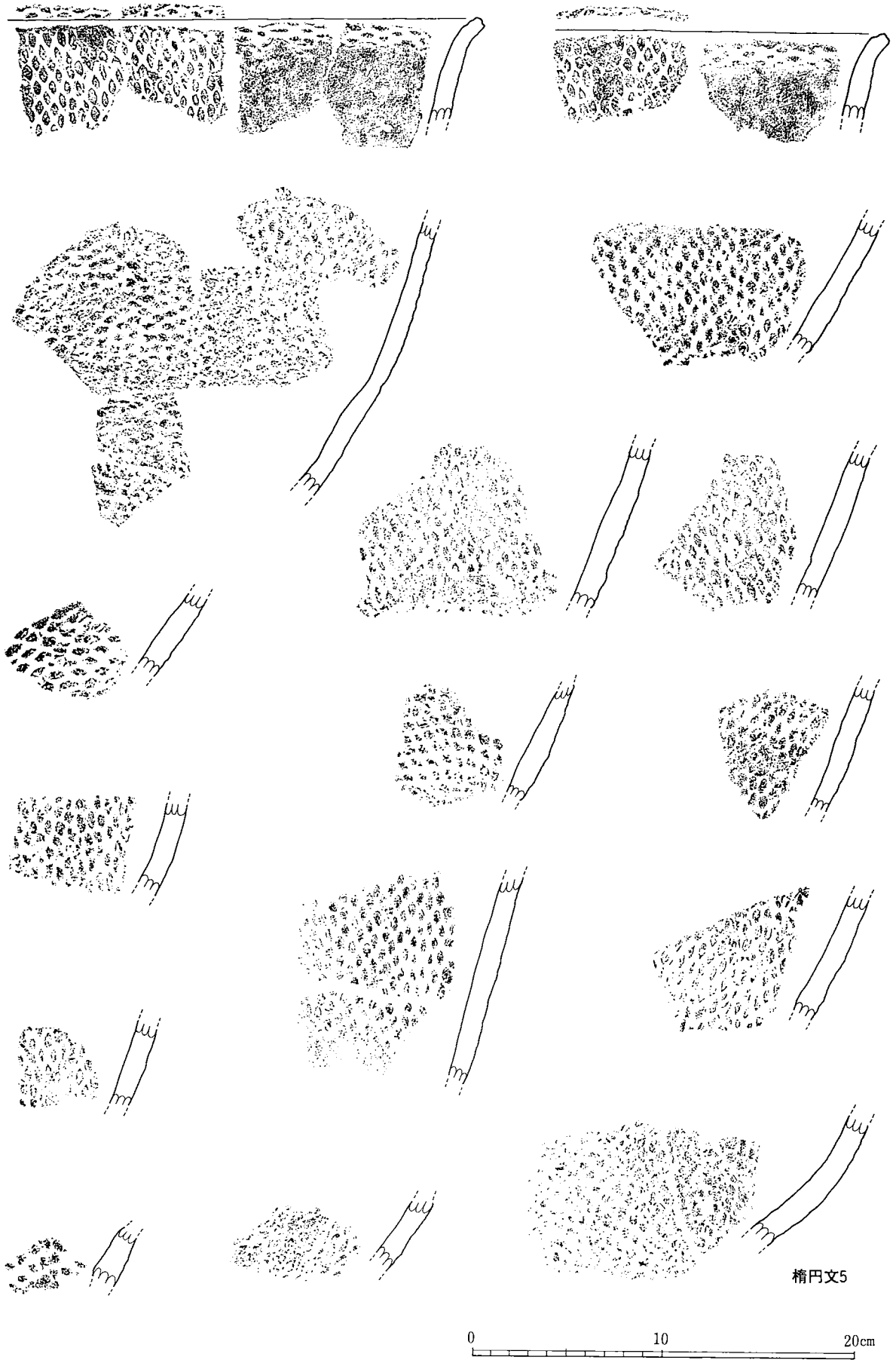


橢円文4

第28図 橢円文土器3・4実測図



第29図 精円文土器5分布図



第30図 楕円文土器5実測図

分布は、調査区全域に散らばった状況をとっている。しかも調査区の中央部には無く、その西と東に偏在する傾向があるようだ。

文様は、表面と裏面口縁部にある。施文方向は、表面が縦位と横位～斜位、裏面口縁部が横位である。さらに破片の部位による文様の方法をみてみると、文様帯の構成がある程度復元可能である。口縁部とその近くの胴部は縦位、胴部の大きな破片の上位には縦位、下位には横位、底部の近くでは縦位であった。こうしたことから、この土器の表面文様は、三つの文様帯に分割が可能である。縦位施文の口縁部～胴部上位、横位施文の胴部中位、縦位施文の胴部下位～底部である。

#### 楕円文土器 6 (第31・33図1～11)

破片は、12点がある。ただし、破片は小さく、出土した部位がすべて胴部の破片であり、器形の類推は不可能である。

分布は、調査区の西側で広く見られた。

文様の施文方向は、縦位と横位～斜位の二種類がある。おそらく、文様帯の違いによる施文方向の違いがあるものと予想される。ただし、どのような文様帯の構成をとるのかは判らない。

土器は、輪積み手法で製作されている。その単位を示す資料は2点ある。それによると、一つの単位の粘土帯の幅は、5.9cmと6.2cmであり、およそ6cm前後に輪積みした粘土帯を一時的な単位にして、乾いたら、また積み上げるという輪積み手法であることが判る。また、出土土器の中には、輪積み手法の一部を示す資料もある。一つは、凸形剥離面の資料(9)、もう一つは、凹形剥離面の資料(4)である。

#### 楕円文土器 7 (第32・33図12～28)

破片は、20点がある。ただし、破片は小さく、出土した部位がすべて胴部の破片であり、器形の類推は不可能である。

分布は、調査区の中央部を中心にして、その西側と東側に若干の量が認められた。

文様の施文方向は、縦位と横位～斜位である。さらに破片の部位による文様の方向をみてみよう。そうすれば、その文様帯の構成も復元可能である。例えば、17の資料を観てみると、次のことが判る。こ

の資料は、輪積み過程での乾燥単位を表す凹形剥離面が認められる資料で、それを下に置いた場合の文様方向を見ると、上に斜位が、下に横位の施文文様が観察されるのである。こうした特徴から、この土器の文様帯の構成は、上位に縦位ないし斜位施文の文様帯、下位に横位施文の文様帯となる可能性がある。ただし、口縁部付近の文様がどのような施文方向なのかは判らない。

土器製作は、輪積み手法でおこなわれている。それを示す資料は、25である。粘土帯の幅は、4.6cmで、おそらくこれが乾燥の単位となるものだろう。ただし、これまで見てきた資料(格子目文土器1)によると、その幅には部位による違いがあるので、そういうことからすると、土器の胴部下位の資料かもしれない。その他、土器製作の一端を示す資料も16・17という2点ある。凹形剥離面が観察される。

#### 楕円文土器 8 (第34・37図1～12)

破片は、13点がある。ただし、破片は小さく、出土した部位もすべて胴部の破片であり、器形の類推は不可能である。

分布は、調査区の中央部よりもやや東側に偏った状況であった。

文様の施文方向は、縦位と横位～斜位である。ただし、部位による文様の施文方向の違いは、出土している破片が小さいことに起因するのか、的確な資料が見当たらない。したがって、土器の文様帯の構成は、不明である。

胎土に、金雲母を多量に含んでいる。

#### 楕円文土器 9 (第35・37図13～19)

破片は、8点がある。ただし、破片は小さく、出土した部位もすべて胴部の破片であり、器形の類推は不可能である。

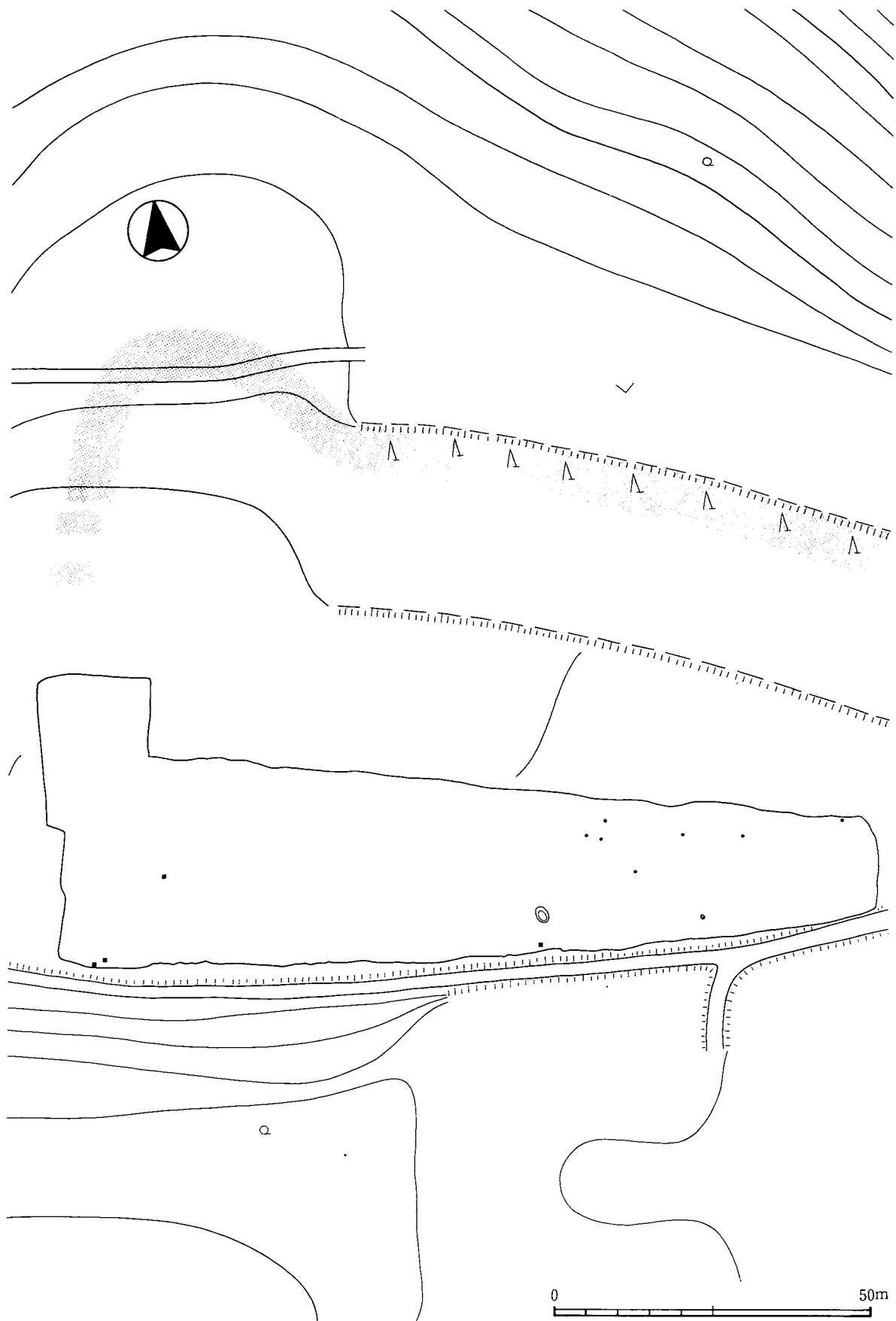
分布は、楕円文土器8と同様に、調査区の中央部よりもやや東側に偏った状況であった。

文様の施文方向は、縦位のみであるが、あくまでも限られた資料の範囲内であって、文様帯の違いによる施文方向の違いもあると予想される。

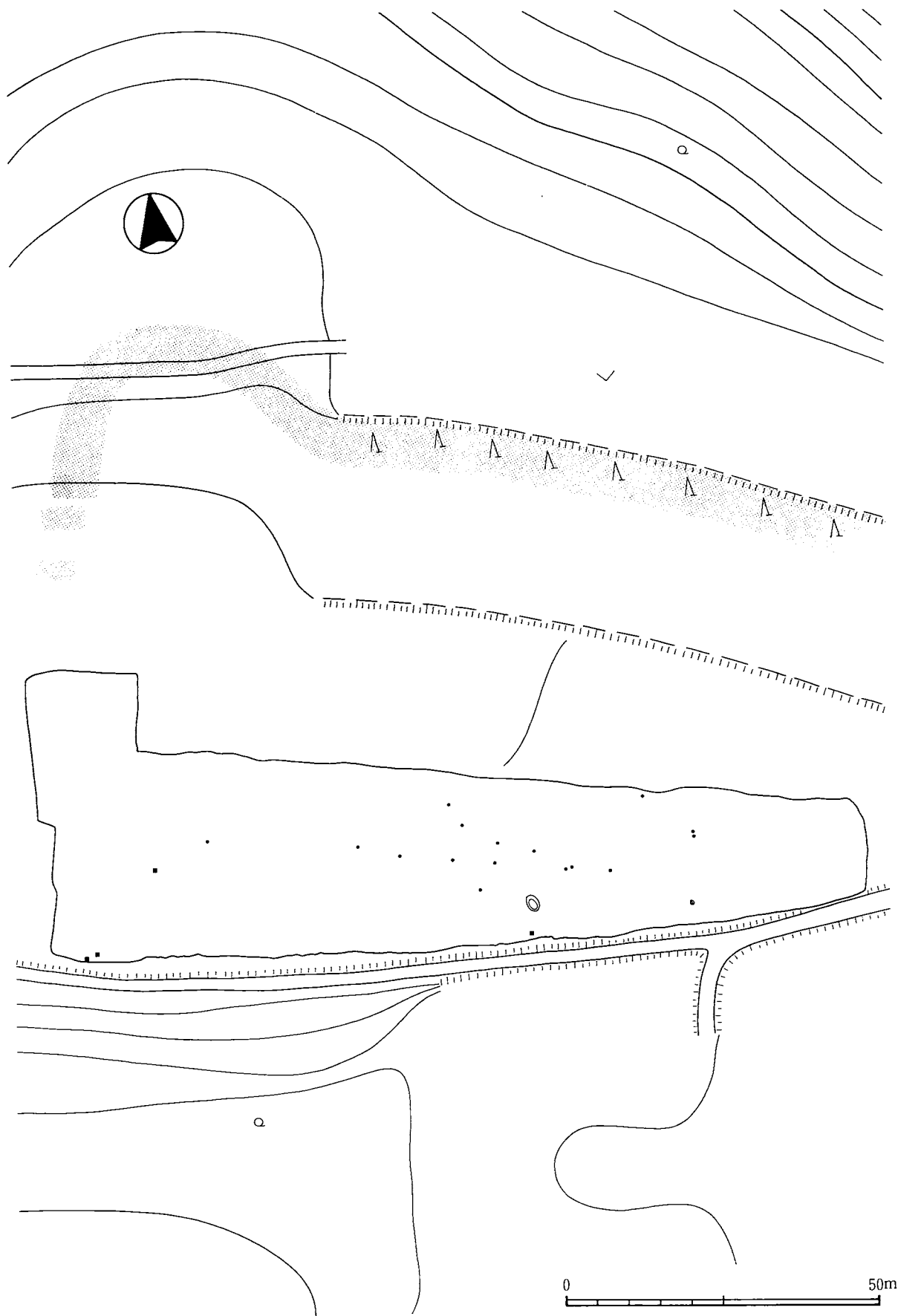
胎土に、金雲母を多量に含んでいる。

#### 楕円文土器10 (第36・37図20～33)

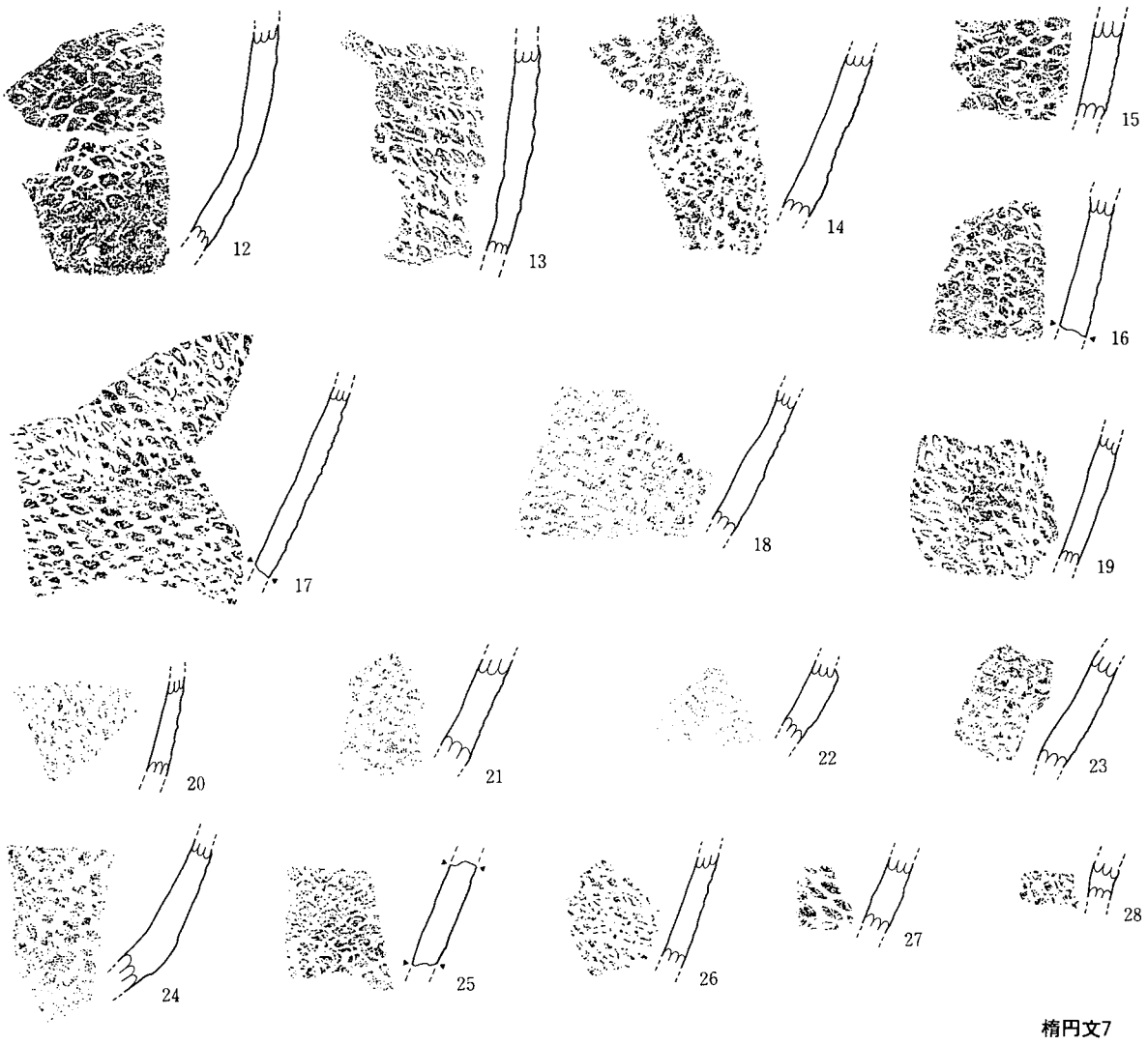
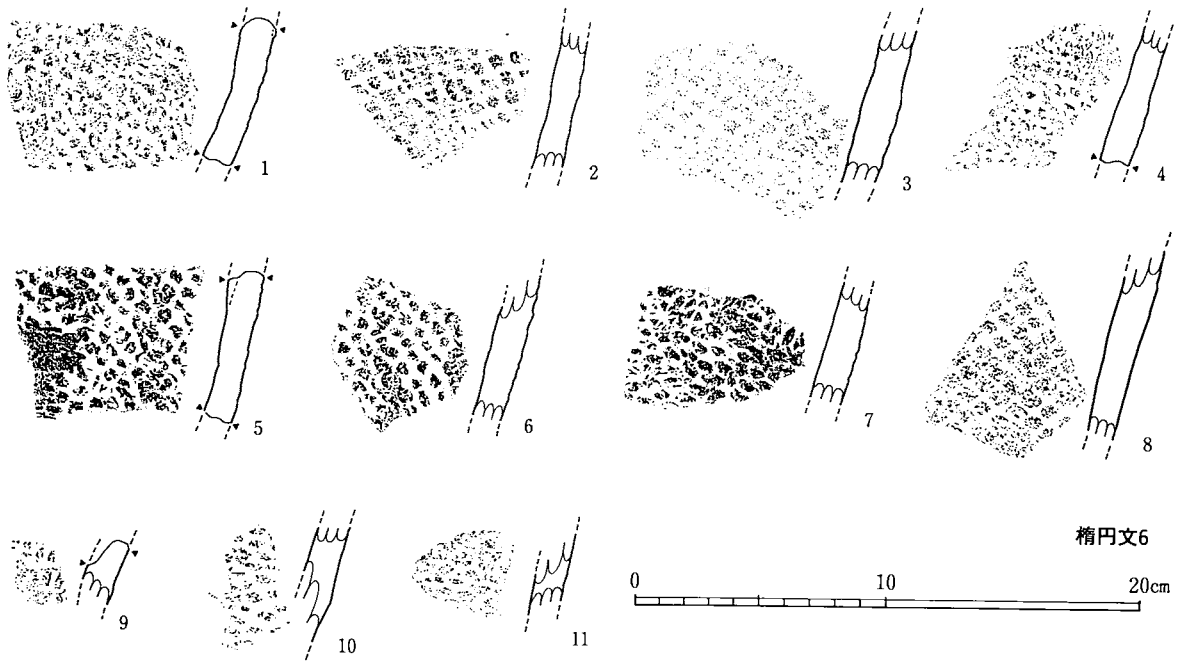
破片は、14点がある。ただし、口縁部の破片は小



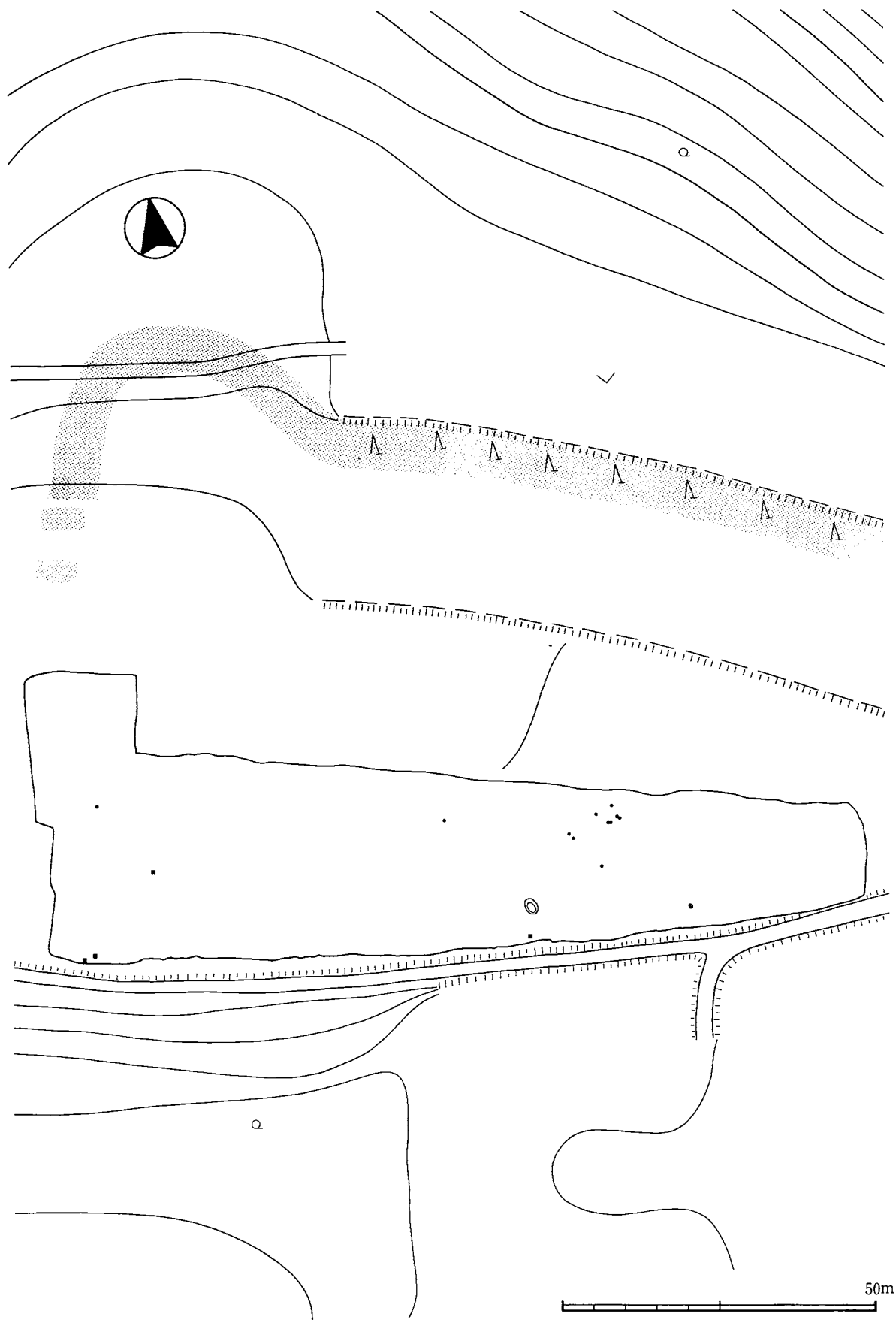
第31図 精円文土器6分布図



第32図 楢円文土器7分布図

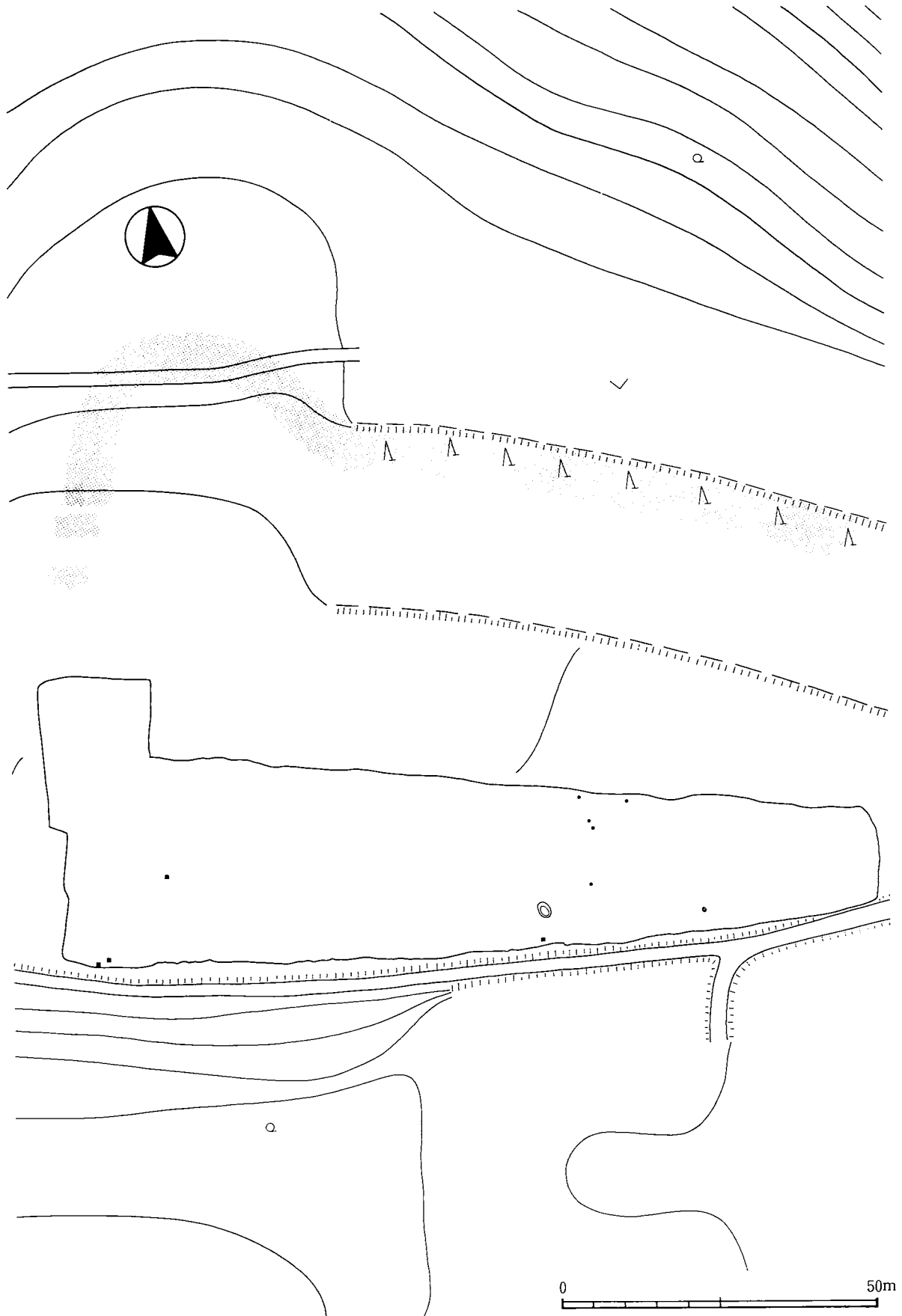


第33図 楕円文土器6・7実測図

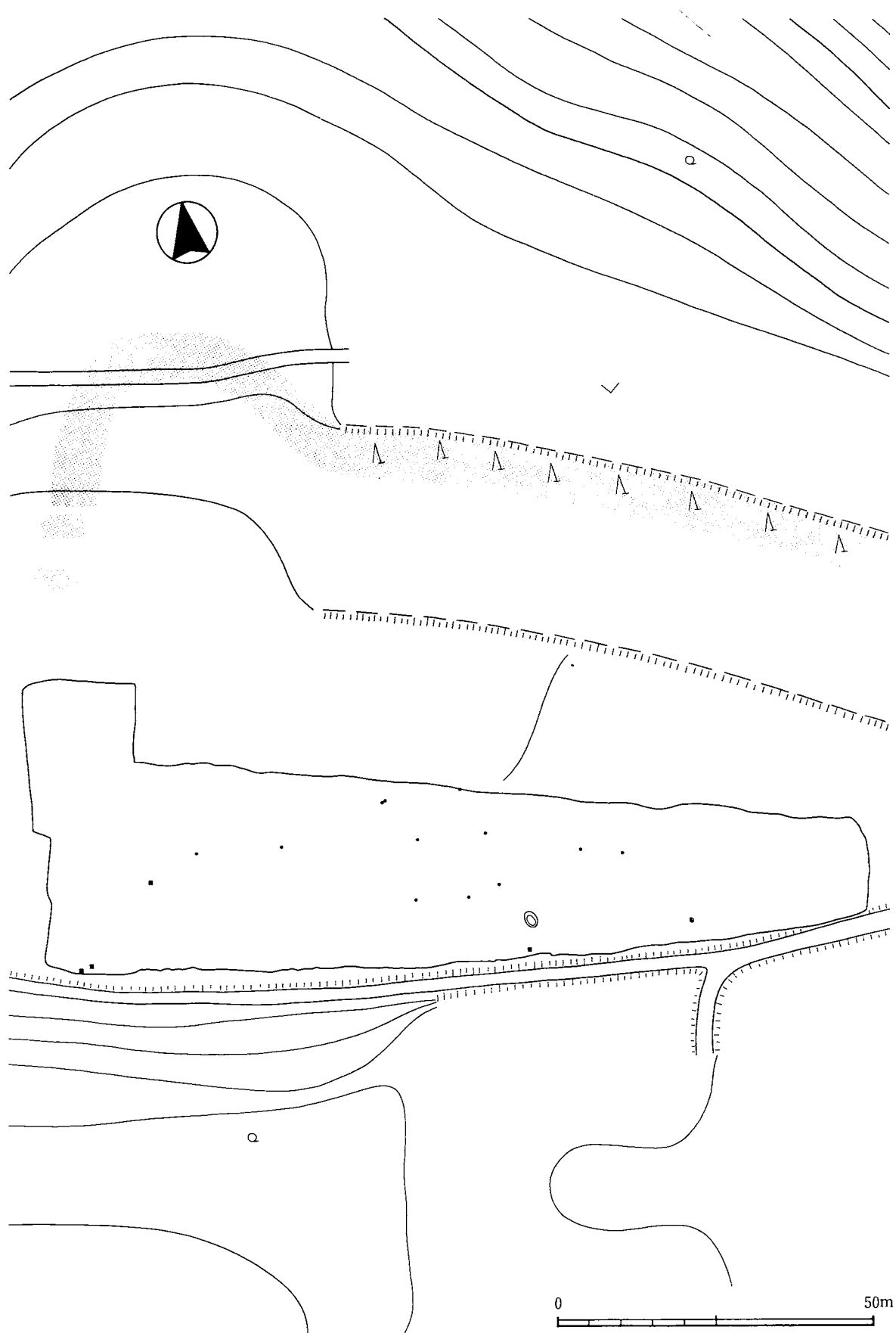


第34図 橢円文土器8分布図

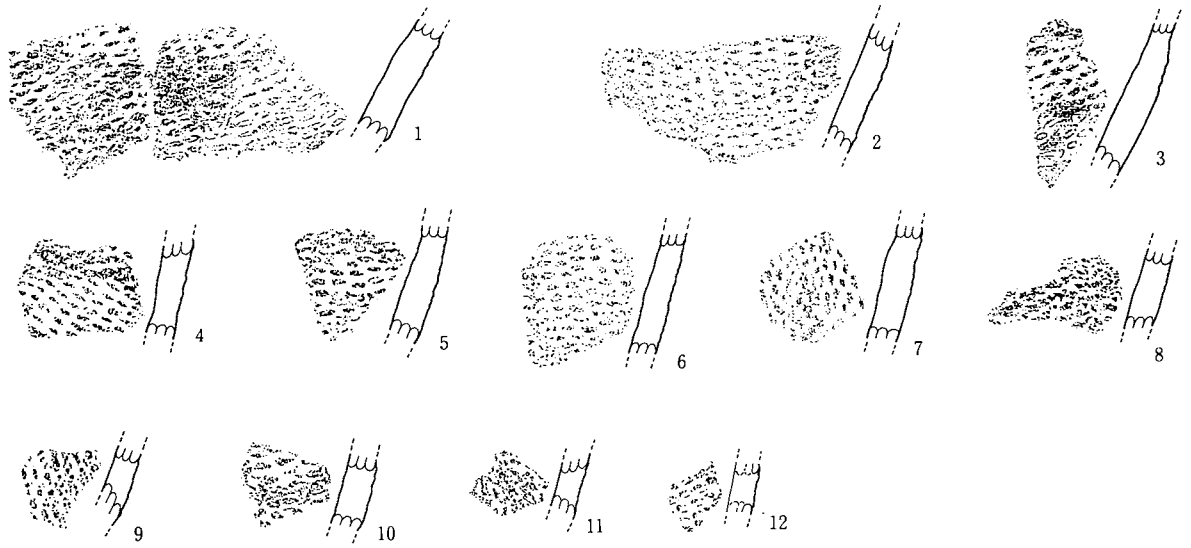




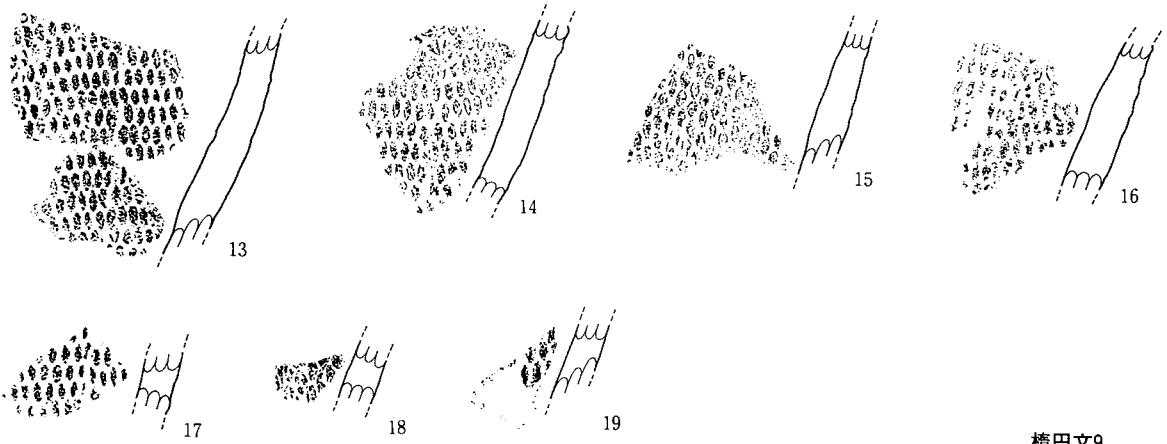
第35図 楕円文土器9分布図



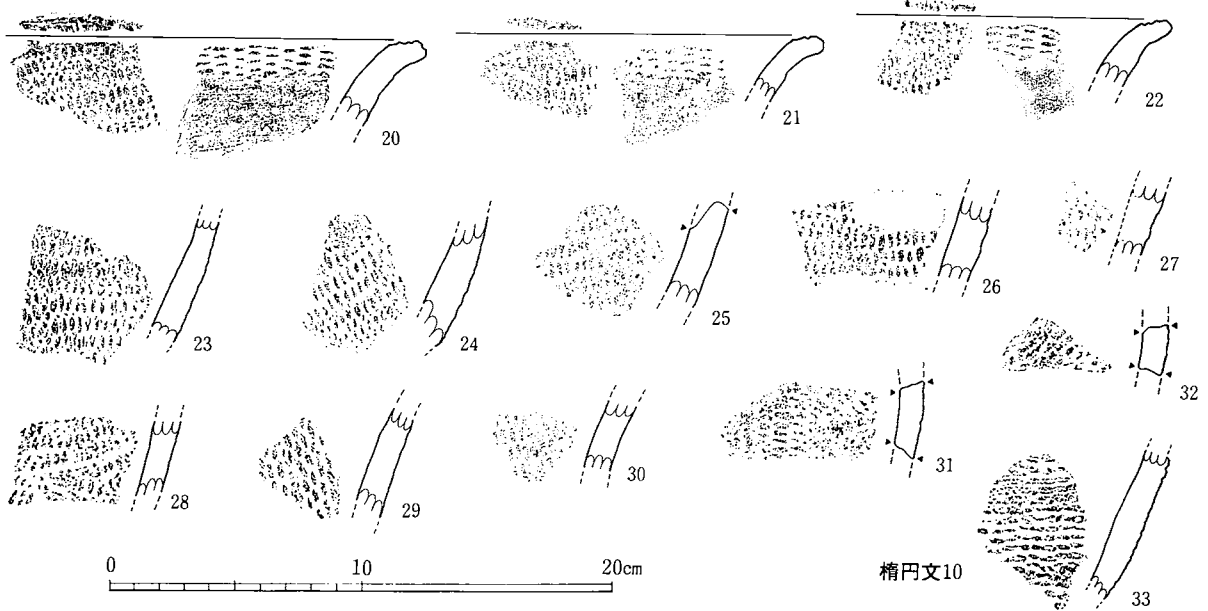
第36図 楕円文土器10分布図



楕円文8



楕円文9



第37図 楕円文土器8~10実測図

さく、口径復元は不可能であった。ただ、口縁部と胴部との破片があり、ある程度の器形の類推は可能である。おそらく、大きく外へ反る口縁部とやや丸みを帯びる胴部による構成の器形と想像される。

分布は、調査区の中央部を中心にして、その西と東に広がっている。しかもその状況は、密集というよりも散在的である。

文様の施文方向は、表面が縦位と横位～斜位、裏面が横位である。表面では口縁部付近で縦位～斜位、胴部のどこからか横位である。おそらく、この二つの違いは、文様帯の構成を暗示しているのだろう。つまり、この土器の文様帯は、表面に最低二つ、裏面に一つが存在していることになる。

土器製作は、輪積み手法でおこなわれている。それを示す資料は、2点ある(31・32)。粘土帯の幅は、2.6cmと1.7cmで、おそらくこれが乾燥の単位となるものだろう。ただし、これまで見てきた資料(格子目文土器1)によると、その幅には部位による違いがあるので、そういうことからすると、その幅は短いことから土器の胴部中位以下の資料かもしれない。そうであるなら、31の資料は、斜位と縦位の二つの方向の文様はその表面に残されていて、その中位近くにある可能性が指摘できる。この他、土器製作の一端を示す資料も25であるが1点ある。凸形剝離面が観察される。

胎土に、金雲母を多量に含んでいる。

#### 楕円文土器11(第38・41図1～5)

出土点数は、8点と少なかったが、口縁部から胴部上半までの接合資料があり、ある程度の器形復元が可能であった。それによると、端部で強く外反する口縁部、やや直線的ながらも膨らむ胴部上半という器形的な特徴であることがわかる。ただし、底部の形状は、不明である。

分布は、中央部よりもやや東よりに偏って、しかも散在した状況をとっている。

反転して復元した口径は、29.7cmである。また、器高は、不明である。

文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部の三箇所にある。施文方向は、表面が縦位で、口唇部が横位、裏面口縁部が横位である。この三つの施文部位は、

そのまま一つの文様帯となる。ただし、外面は、胴部上半部の資料であり、下半部は違った施文方向で、異なる文様帯となる可能性が高い。

#### 楕円文土器12(第39・41図6～15)

出土点数は、11点があった。出土資料としては、口縁部と胴部のものがあり、ある程度の器形復元は可能である。それによると、端部で強く外反する口縁部、やや直線的な胴部上半という器形的な特徴であることがわかる。ただし、底部の形状は、不明である。

分布は、中央部を中心にあるが、西側にも2点ほど出土している。分布の傾向は、散在的である。

反転して復元した口径は、37.8cmである。器高は、不明である。

文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部の三箇所にある。施文方向は、表面が縦位で、口唇部が横位、裏面口縁部が横位である。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。ただし、表面は、胴部上半部の資料であり、下半部は違った施文方向で、異なる文様帯となる可能性が高い。文様帯の構成では、15の資料が問題となる。それは、文様の施文の状態が間延びしているということである。おそらく、他の破片とは違った状態で施文されているはずであり、この資料は、口縁部周辺ではない部位が予想される。こうしたことを考え併せると、表面の文様帯構成は、口縁部周辺(縦位)、胴部上半部(横位)、下半部(縦位)による可能性が高い。

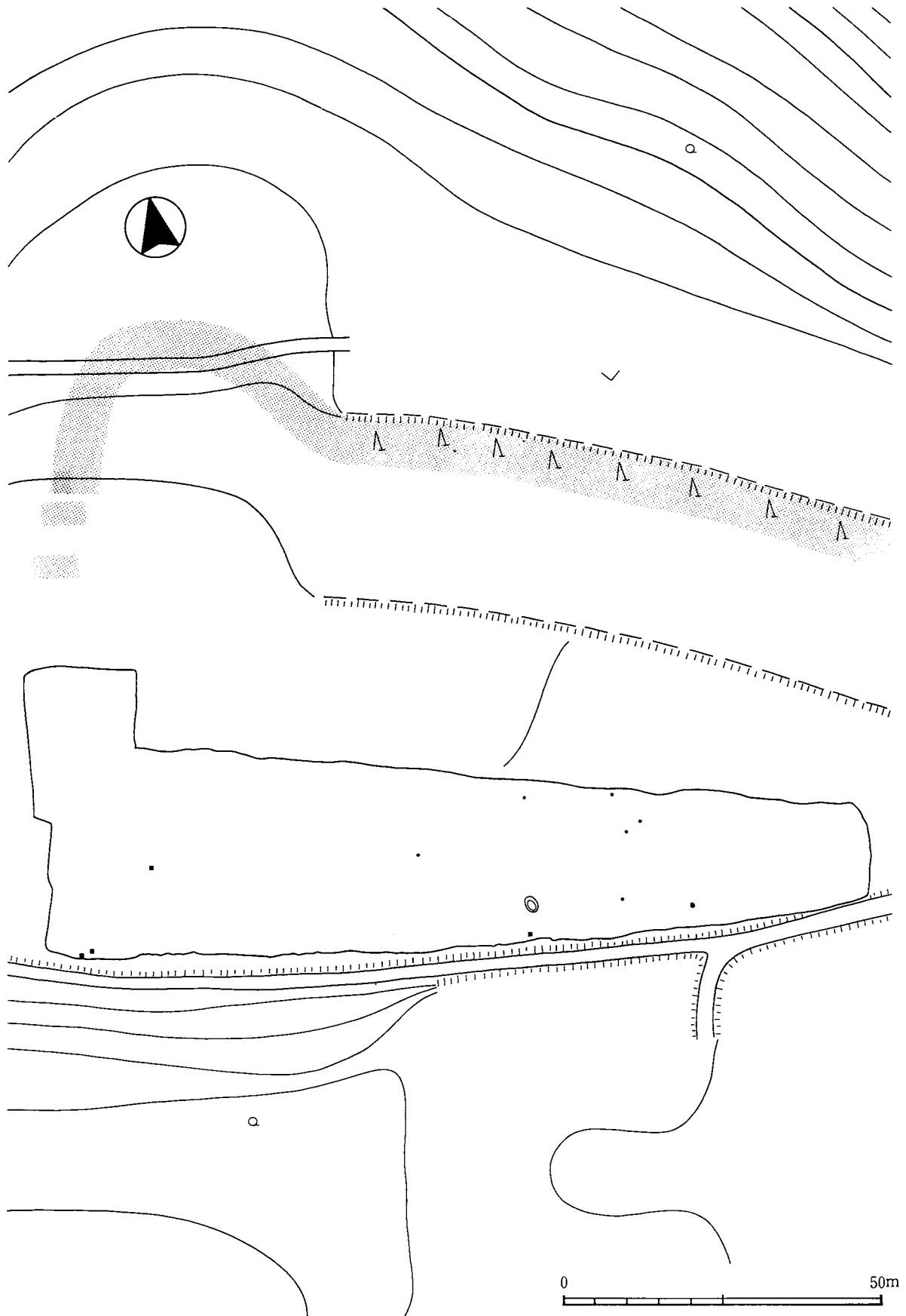
土器製作は、輪積み手法でおこなわれている。それを示す資料は、3点ある(7・9・13)。粘土帯の幅は、8cmと6cmと4.5cmで、おそらくこれが乾燥の単位となるものだろう。この他、土器製作の一端を示す資料も10で、凸形剝離面が観察される。

#### 楕円文土器13(第40・41図16～21)

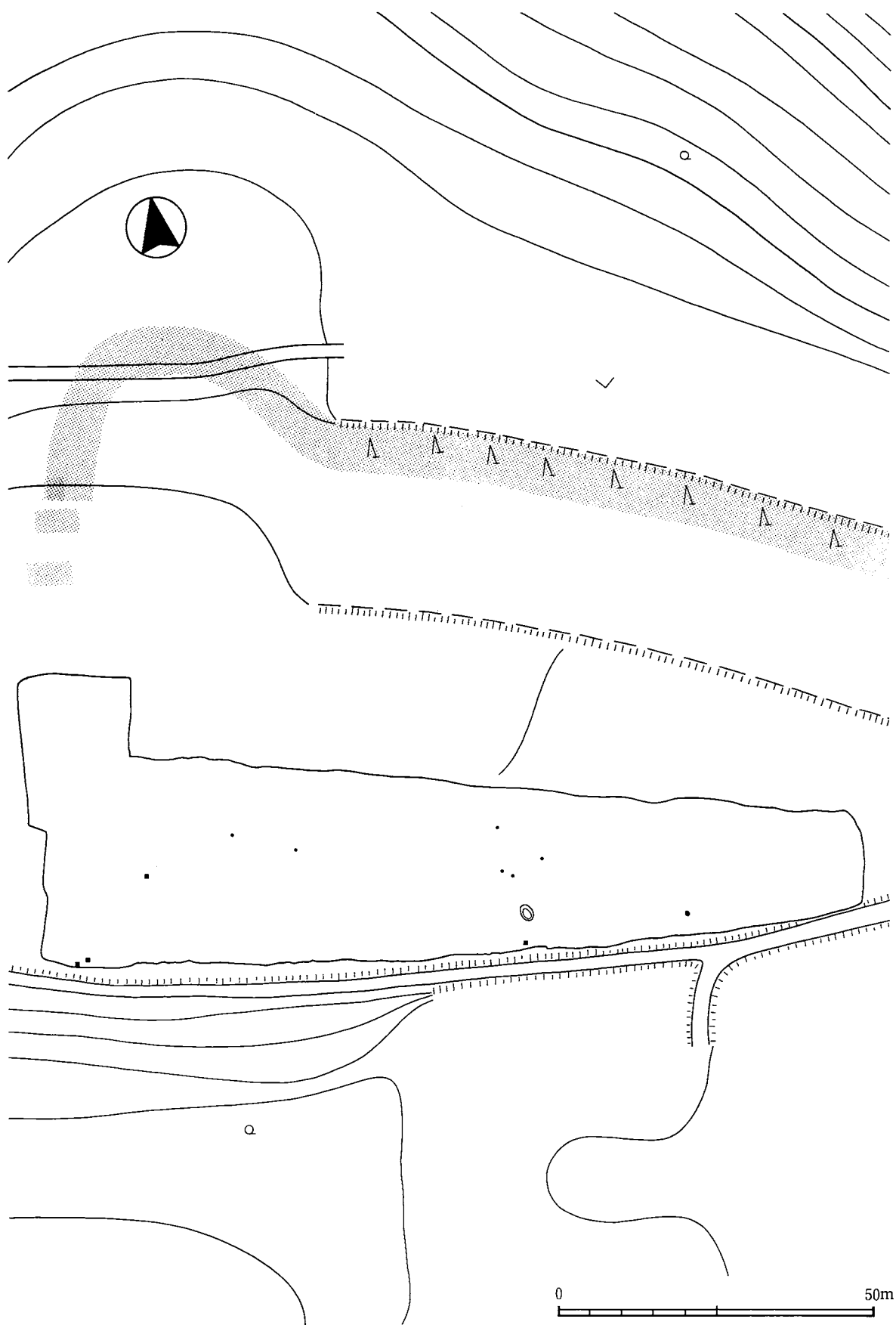
破片は、6点がある。ただし、口縁部の破片は小さくて、口径復元は不可能であった。ただ、口縁部と胴部との破片があり、ある程度の器形の類推は可能だ。おそらく、大きく弱く反る口縁部とやや丸みを帯びる胴部による構成の器形と想像される。

分布は、調査区の中央部よりも西側に散在している。

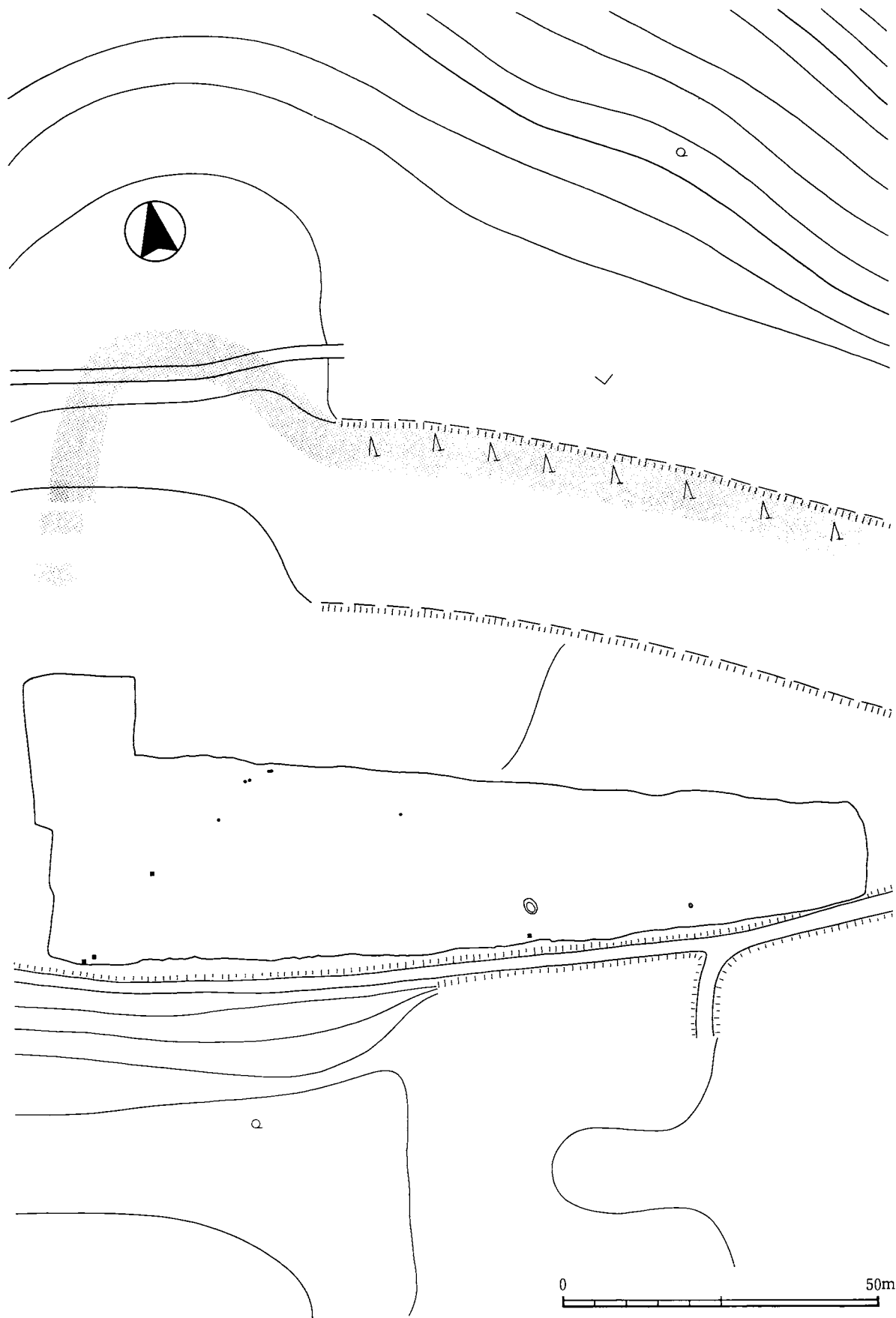
文様は、表面と口唇部と裏面にあり、表面は縦位の楕円文、口唇部は横位楕円文、裏面は原体条痕で



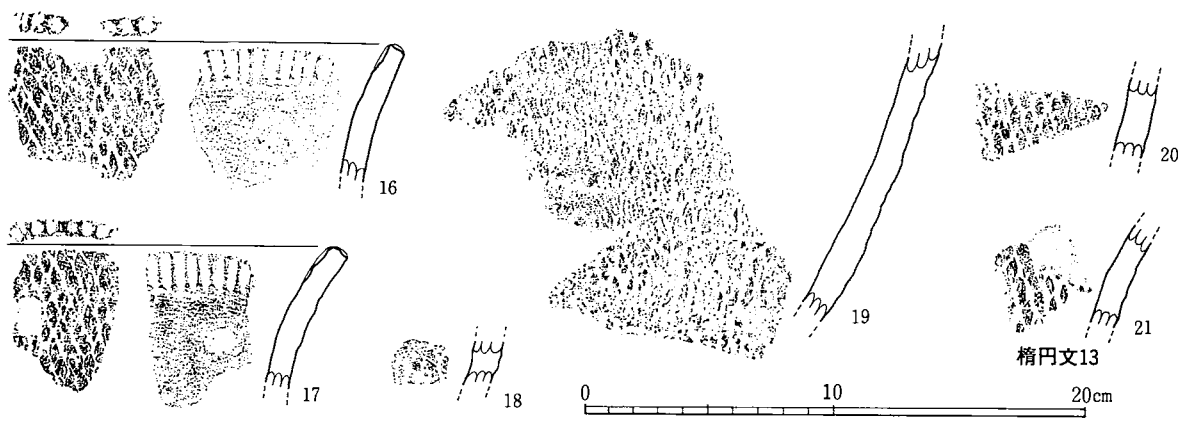
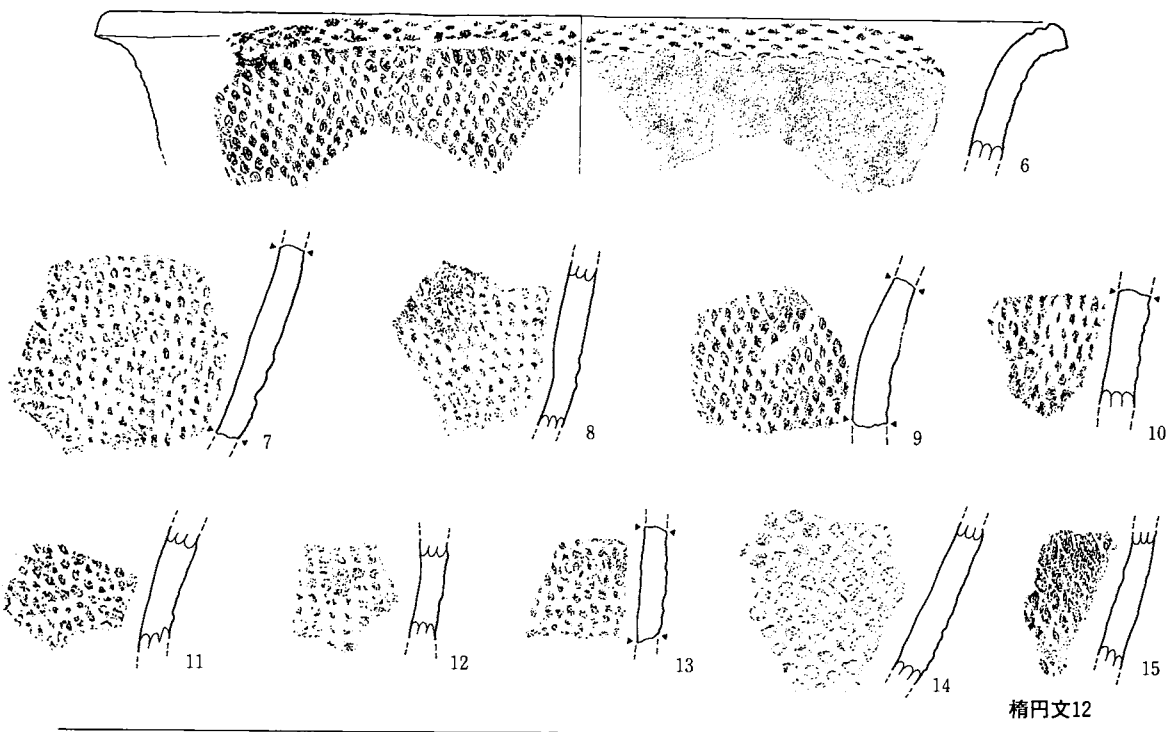
第38図 楕円文土器11分布図



第39図 楕円文土器12分布図



第40図 精円文土器13分布図



第41図 楕円文土器11~13実測図



あった。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。ただし、表面は、胴部上半部の資料であり、下半部は違った施文方向で、異なる文様帯となる可能性が高い。

**楕円文土器14 (第42・47図1)**

破片は5点で、口縁部と胴部上半の資料があり、ある程度の器形復元が可能であった。それによると、端部でわずかに外反する口縁部、やや直線的な胴部上半という器形的な特徴であることがわかる。ただし、底部の形状は、不明である。

分布は、調査区の中央部よりもやや東側に散在した状況である。

文様は、表面と口唇部と裏面にあり、表面は縦位の楕円文、口唇部は横位楕円文、裏面は横位楕円文であった。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。ただし、表面は、胴部上半部の資料であり、下半部は違った施文方向で、異なる文様帯となる可能性が高い。

**楕円文土器15 (第43・47図2～6)**

破片は5点で、口縁部と胴部の資料がある。これらの破片を勘案すれば、ある程度の器形復元が可能である。それによると、端部でわずかに外反する口縁部とやや直線的な胴部上半という器形的な特徴であることがわかる。ただし、底部の形状は、不明である。

分布は、調査区の中央部よりもやや東側にあり、南と北にそれぞれ分かれている。

文様は、表面と口唇部と裏面にあり、表面は縦位の楕円文、口唇部は横位楕円文、裏面は横位楕円文で薄い施文であった。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。ただし、表面は、胴部上半部の資料であり、下半部は違った施文方向で、異なる文様帯となる可能性が高い。それは、6の資料が暗示しているようである。

**楕円文土器16 (第44・47図7～11)**

破片は5点で、口縁部と胴部上半の資料がある。したがって、ある程度の器形復元が可能である。それによると、端部でわずかに外反する口縁部、やや直線的な胴部上半という器形的な特徴である。ただし、底部の形状は、不明である。

分布は、調査区の東側、それも北隅に近い所にある。

文様は、表面と口唇部と裏面にある。表面は、縦位の楕円文、口唇部は、横位楕円文、裏面は、横位楕円文であった。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。ただし、表面は、胴部上半部の資料で、下半部は違った施文方向の異なった文様帯となる可能性が高い。

**楕円文土器17 (第45・47図12～16)**

破片は、5点であった。それらは口縁部と胴部の資料で、それぞれを検討すれば、ある程度の器形復元が可能であった。つまり、端部で外反する口縁部、やや直線的な胴部上半という器形である。ただし、底部の形状は、不明である。

分布は、調査区の中央部、東端、西端近くという点在した状況である。

文様は、表面と口唇部と裏面にあり、表面は縦位と横位の楕円文、口唇部は横位楕円文、裏面は原体条痕であった。この三つの施文部位は、そのまま文様帯の基本となる。ただし、表面はさらに分割が可能で、口縁部近くの縦位施文、胴部下位の横位施文がある。その接触した部分の資料として16があり、その分割部分が明確である。

**楕円文土器18 (第46・47図17～21)**

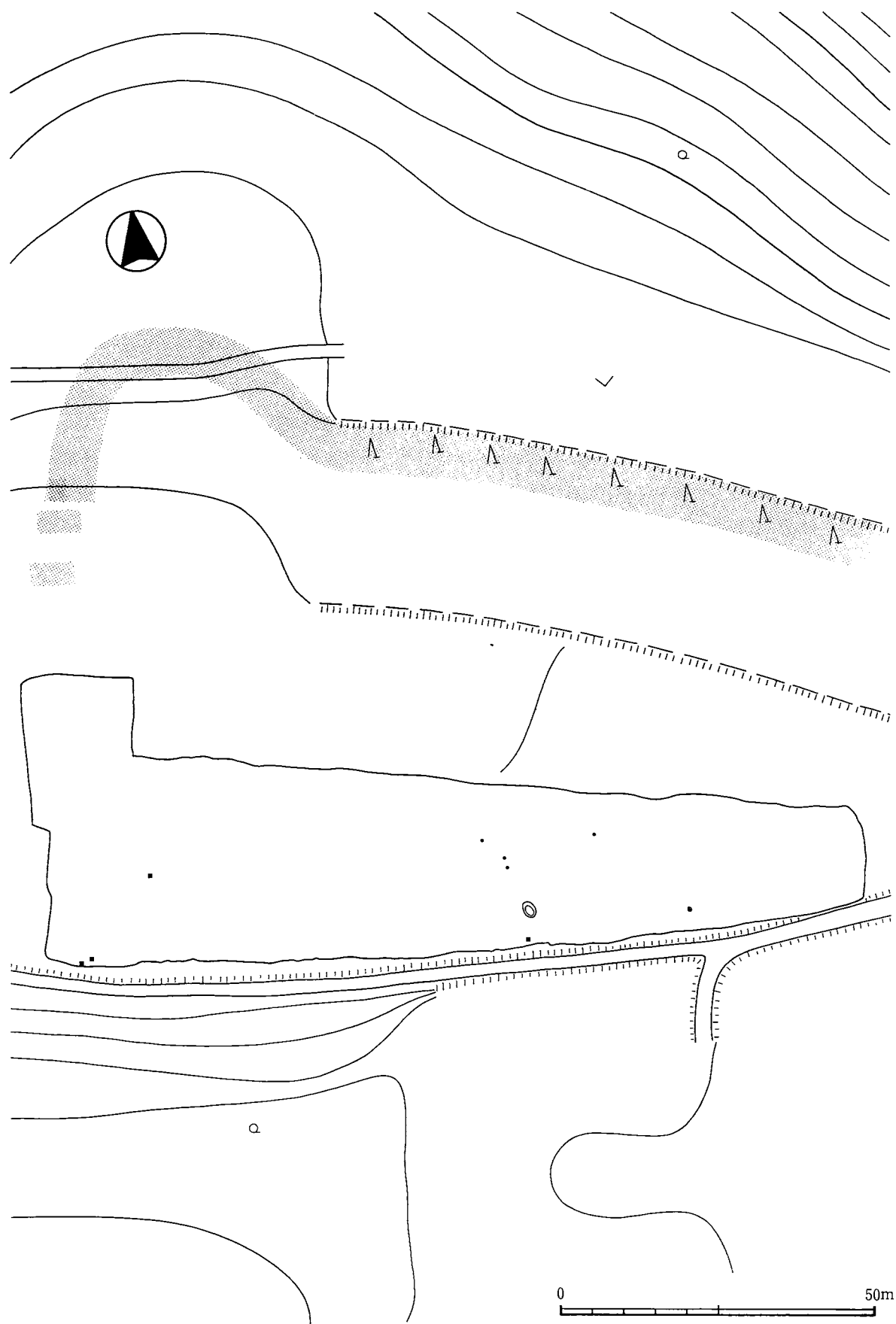
破片は、5点である。破片としては、口縁部と胴部上半がある。これらを考慮すれば、ある程度の器形復元が可能である。それによると、端部でわずかに外反する口縁部、やや直線的な胴部という器形的な特徴である。底部の形状は、不明である。

分布は、調査区の中央部とその東側に散在した状況である。

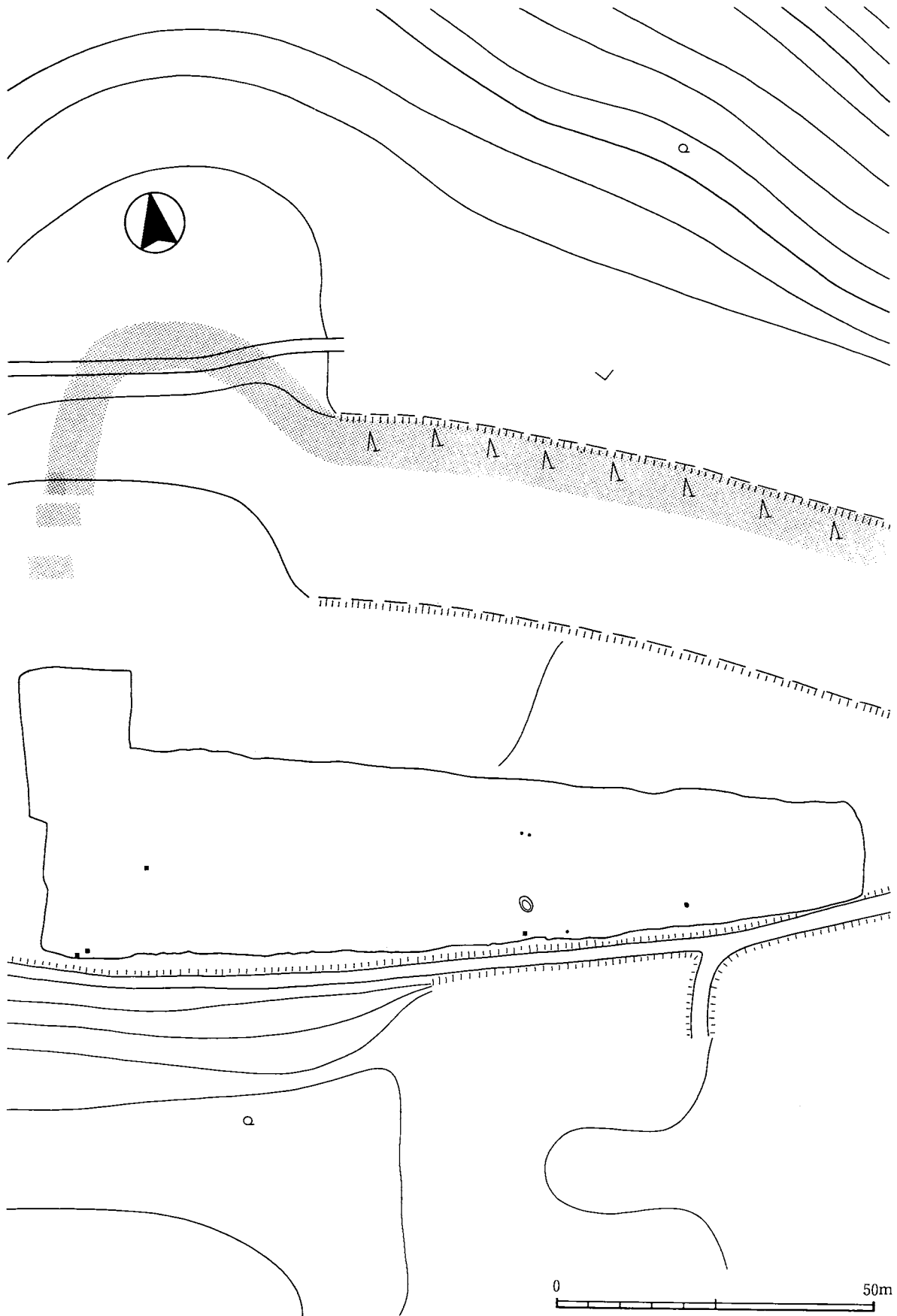
文様は、表面と口唇部と裏面にあり、表面は縦位の楕円文、口唇部は横位～斜位楕円文、裏面は横位楕円文であった。この三つの施文部位は、それぞれ異なる文様帯であるが、表面はさらに幾つかの文様帯に分割できそうである。それは、破片が細かくて明白ではないが、19の資料がその中間的な部位となるようだ。

**楕円文土器19 (第48・53図1)**

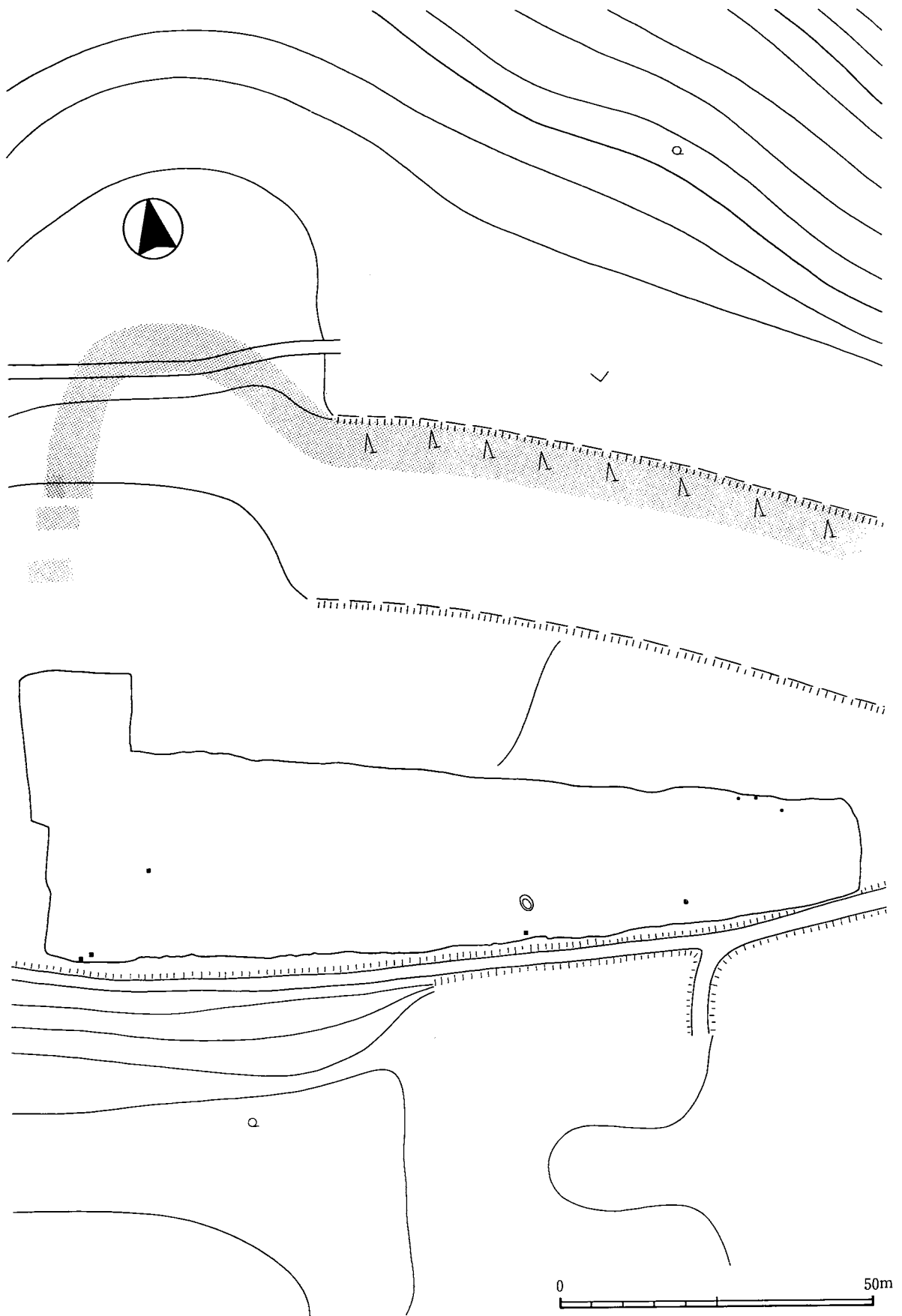
破片は8点で、しかもすべて接合した資料であった。その部位は、底部から胴部下位を中心とした所



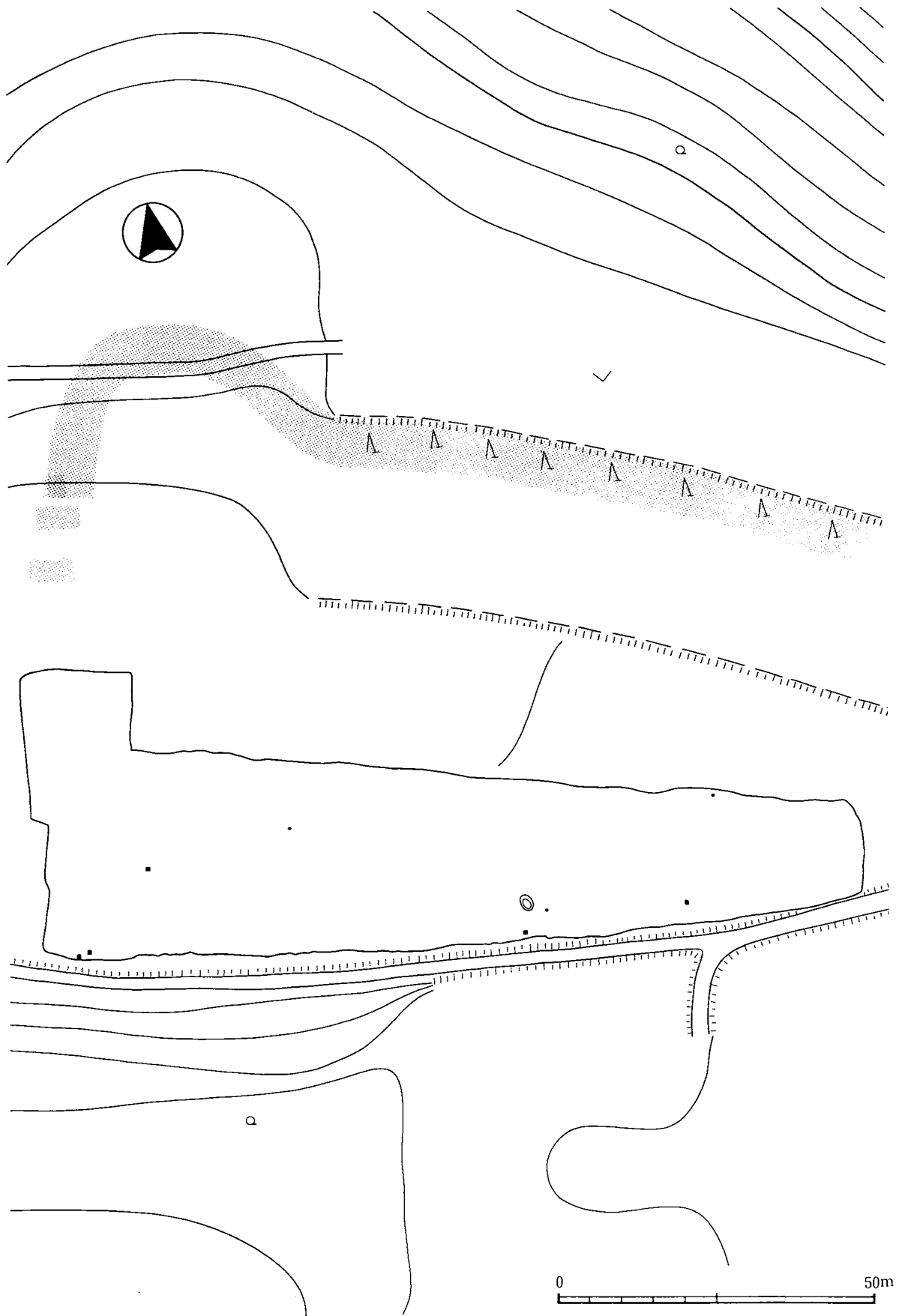
第42図 楕円文土器14分布図



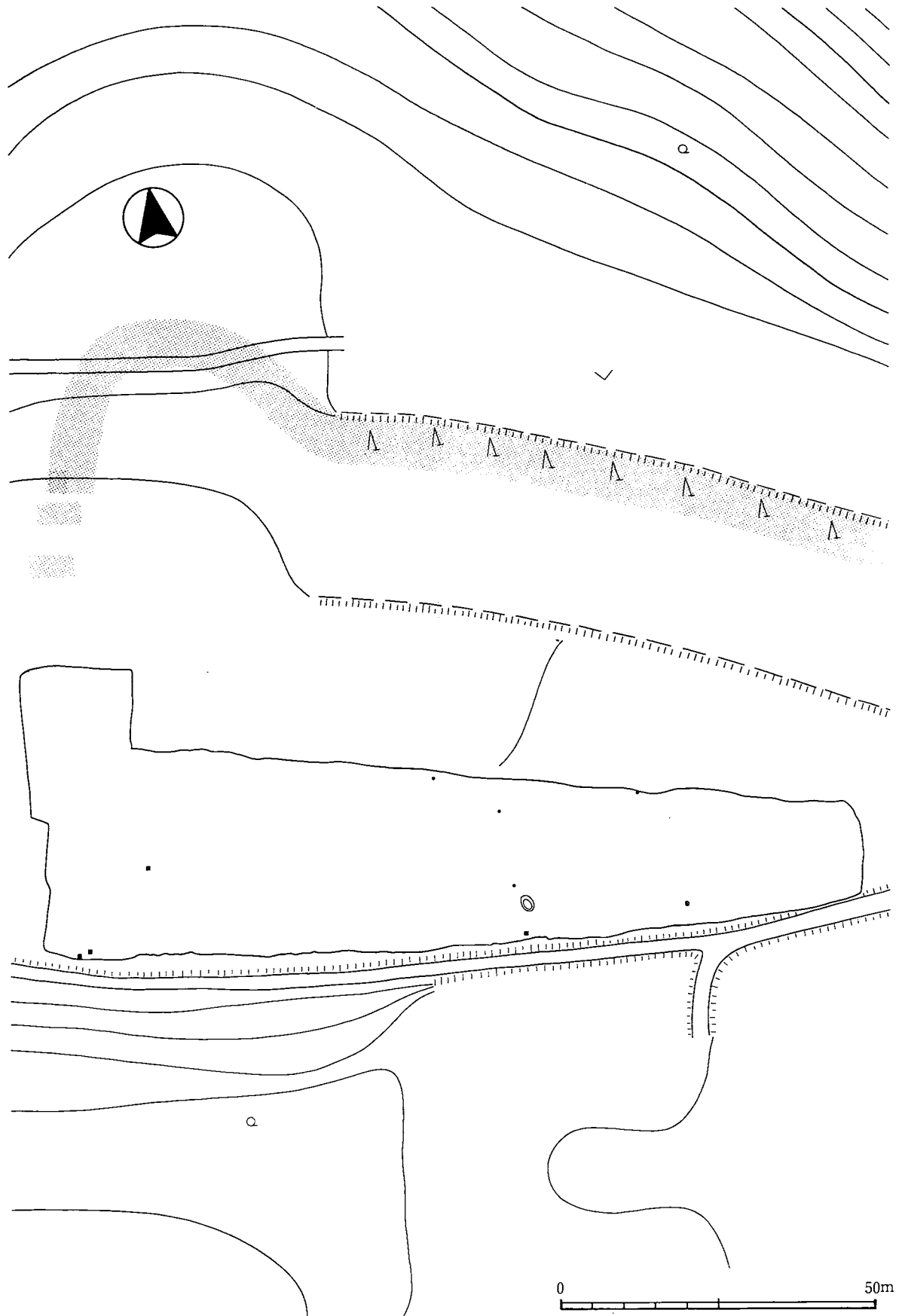
第43図 楕円文土器15分布図



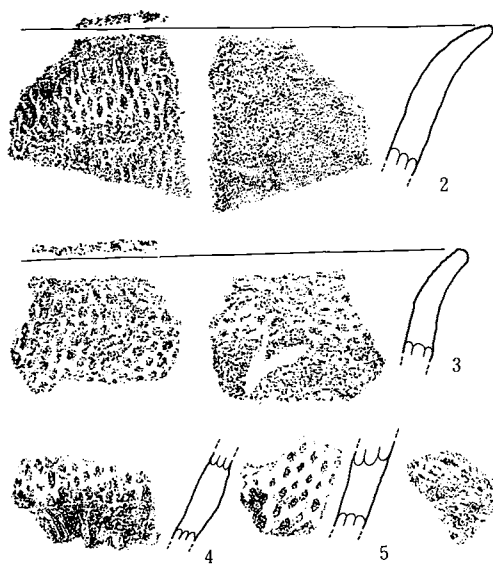
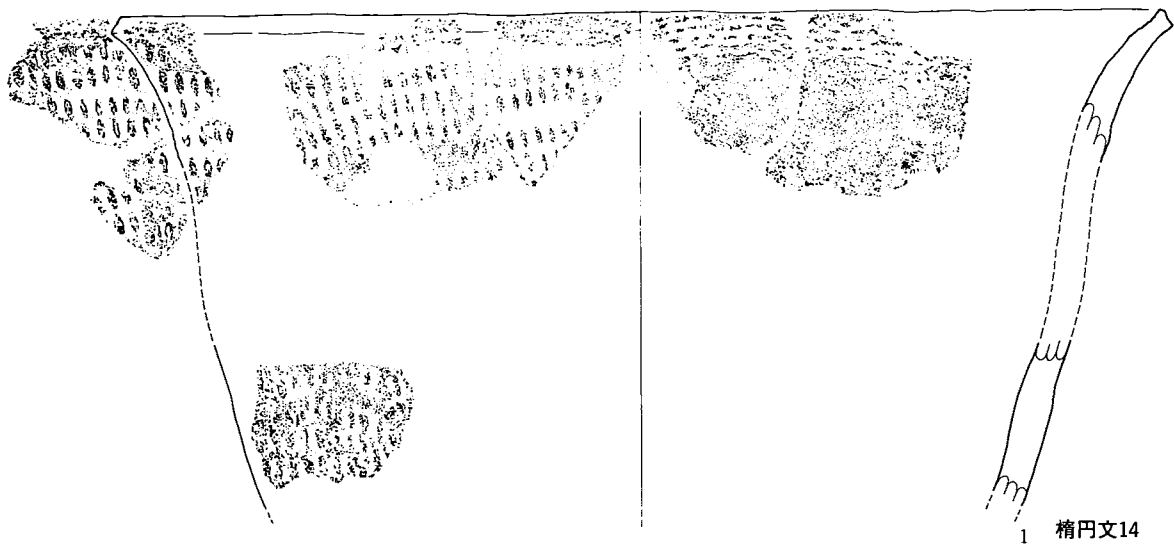
第44図 楕円文土器16分布図



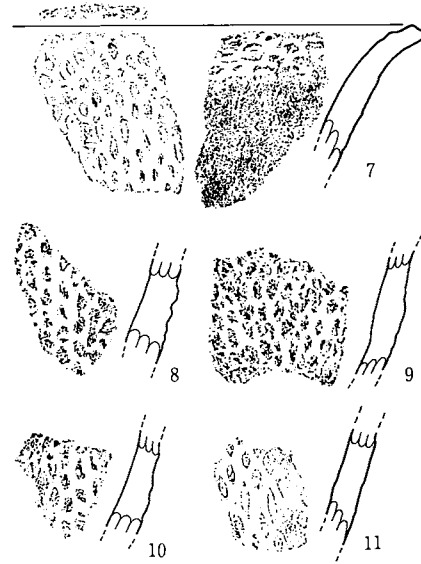
第45図 楕円文土器17分布図



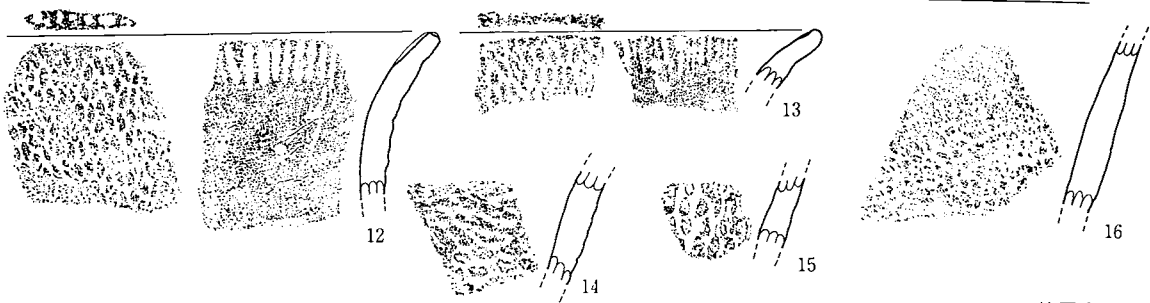
第46図 精円文土器18分布図



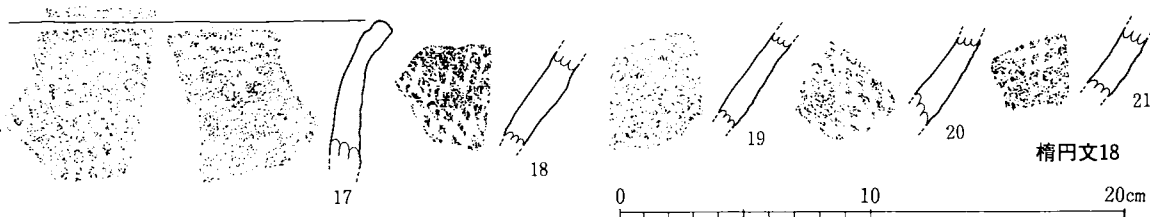
楕円文15



楕円文16



楕円文17



楕円文18

第47図 楕円文土器14~18実測図

で、底部の形態はやや平たい丸底である。

分布は、調査区の中央部、しかもその北端近くにある。

表面の文様は、現状でも二つの文様帯に区画できる。胴部下位の横位施文と底部近くの縦位施文である。

土器製作は、円形の粘土板製作の後、5.6cm、6.1cmという乾燥の単位での輪積み手法でおこなわれている。

#### 楕円文土器20 (第49・53図2～6)

破片は、5点である。破片としては、胴部と底部がある。ただし、それぞれの破片は、底部を除いてすべて小さいために、全体的な器形は不明である。底部は、丸みを持った尖底である。

分布は、調査区の中央部と西側に散在した状況である。

文様は、底部が横位施文が中心で、一部に縦位施文が観察され、胴部には横位施文と縦位施文が認められる。こうしたことから、表面の文様帯の構成は、複数であり、横位と縦位の繰り返しで施文されていたと思われる。

底部の資料(2)には、土器製作の単位を示す凸形剝離面が観察される。それによれば、輪積みによって3.3cmの高さに作られた後、一時的に乾燥し、次の輪積みを待つという手法で製作されている。

#### 楕円文土器21 (第50・53図7～11)

破片は、5点である。破片は小さく、しかもすべてが胴部であり、全体の器形を復元することは不可能である。

分布は、調査区の中央部にあり、散在した状況である。

文様は、縦位と横位の両施文方向がある。したがって、複数の文様帯の構成が表面にあると思われるが、その実際は不明である。

土器製作の単位を示す凸形剝離面が観察される資料が1点ある(8)。

#### 楕円文土器22 (第51・53図12～15)

破片は、4点である。破片は小さくて、すべてが胴部であり、全体の器形を復元できない。

分布は、調査区の東側で、散在している。

文様は、縦位と横位の両施文方向がある。したが

って、複数の文様帯の構成が表面にあると思われるが、その実際は不明である。

土器製作の単位を示す剝離面が観察される資料は3点ある(13～15)。その中で粘土帯の幅がわかるのは2点で、6.2cm(13)と3.6cm(15)である。

13の表面には、上の方に横位施文の文様があり、下には縦位のものがある。12は、縦位ないし斜位である。このことから、幅が狭い粘土帯は、土器の下部に位置するものであることが予想される。

#### 楕円文土器23 (第52・53図16～21)

破片は、6点である。破片は小さく、しかもすべてが胴部であり、全体の器形を復元することは不可能である。

分布は、調査区の東側で、散在していた。

文様は、斜位と横位がある。これからは、複数の文様帯の構成の存在を認められない。

土器製作の単位を示す凹形剝離面が観察される資料が1点ある(21)。

#### 楕円文土器24 (第54・59図1～6)

破片は、7点である。破片は小さく、しかもすべてが胴部であり、全体の器形を復元することはできなかった。

分布は、調査区の東端を中心にして、東側に点在した状況であった。

文様は、横位と縦位の両者がある。ただし、それぞれの個体の部位が定かでないので、どのような文様帯の構成をとるかは、判断できない。

土器製作の単位を示す凸形剝離面が観察される資料が1点ある(5)。

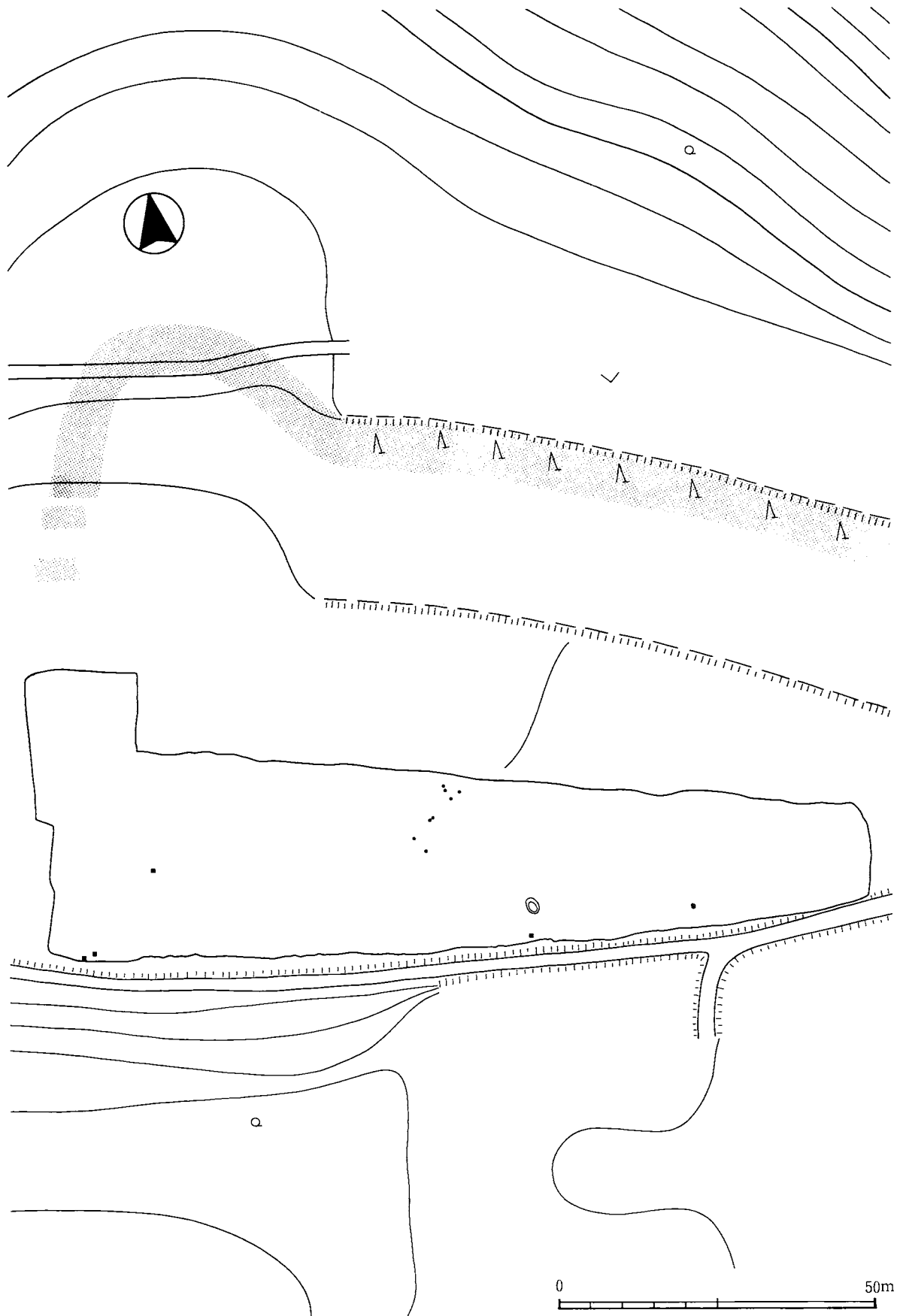
#### 楕円文土器25 (第55・59図7～9)

破片は、6点である。これらは、底部と胴部の破片で、破片は小さいが、底部を中心に接合した資料が多い。こうした資料を基にして、底部から胴部下半での器形復元は可能であった。底部は、丸底に近い形状である。胴部は、やや丸みを帯びた直線である。

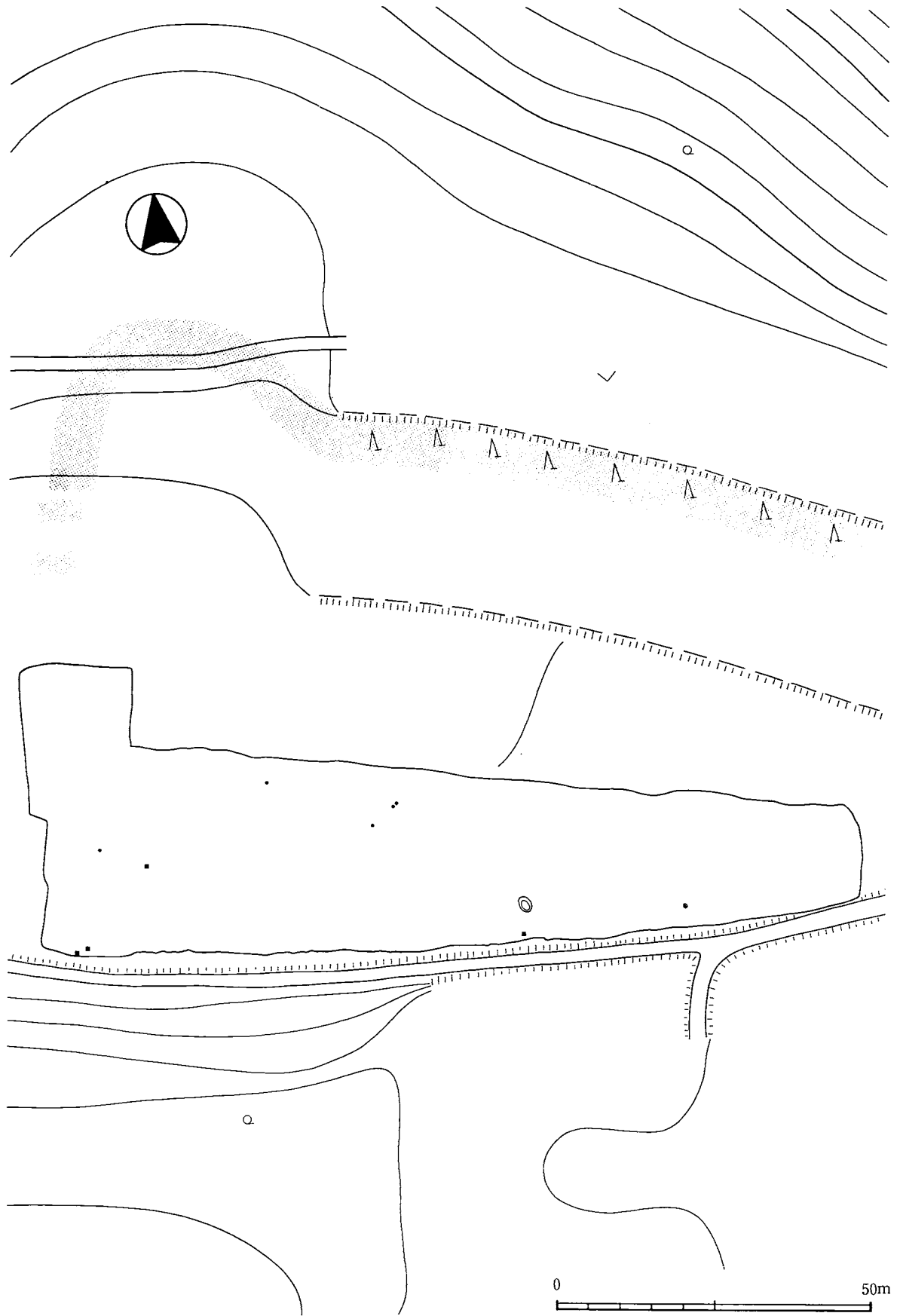
分布は、調査区の西側の南付近に点在した状況であった。

文様は、ほとんどがナデ消されていた状況を呈している。一部楕円文の特徴、一部山形文の特徴がみられて、その所属文様を判断できなかった資料である。

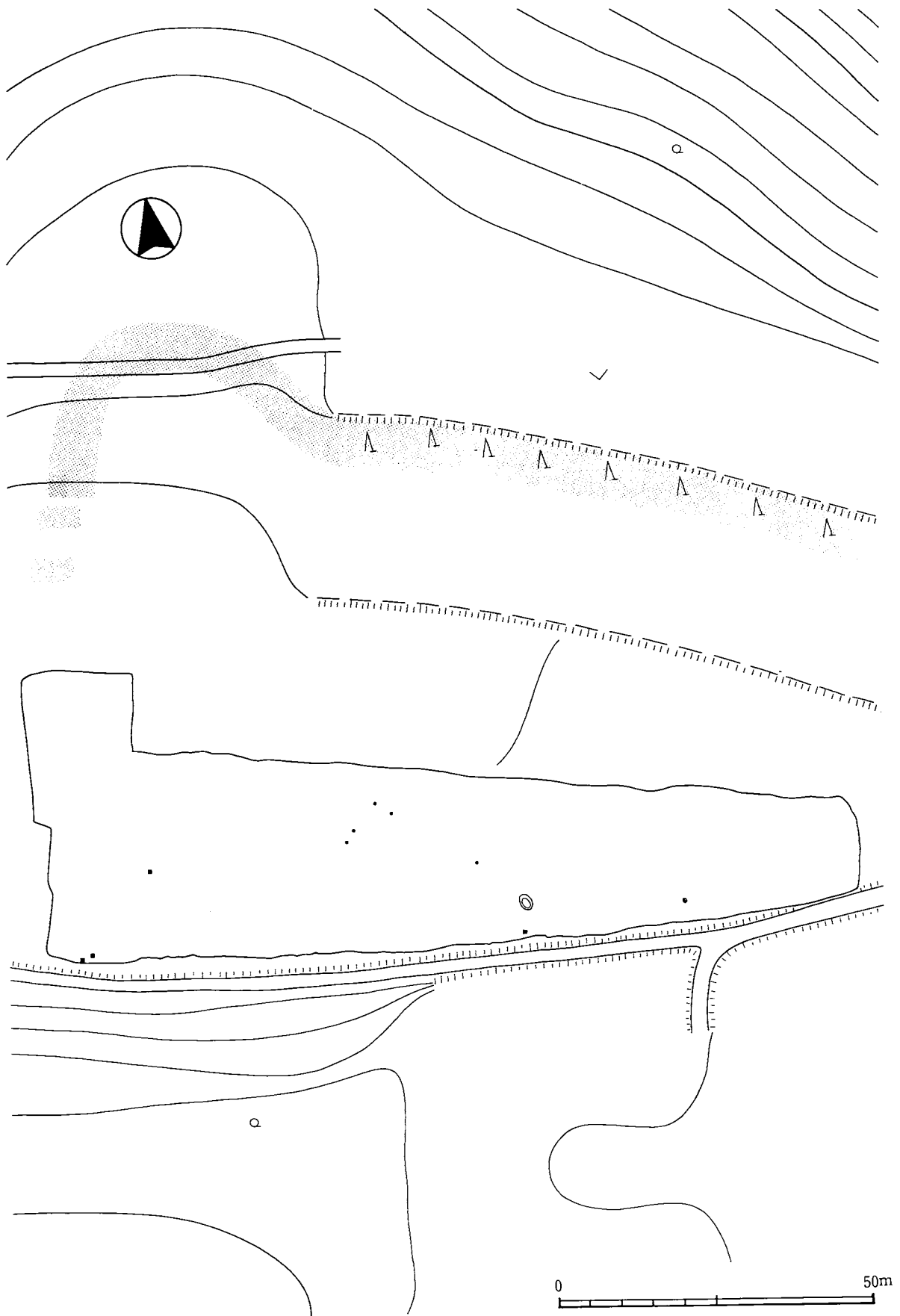




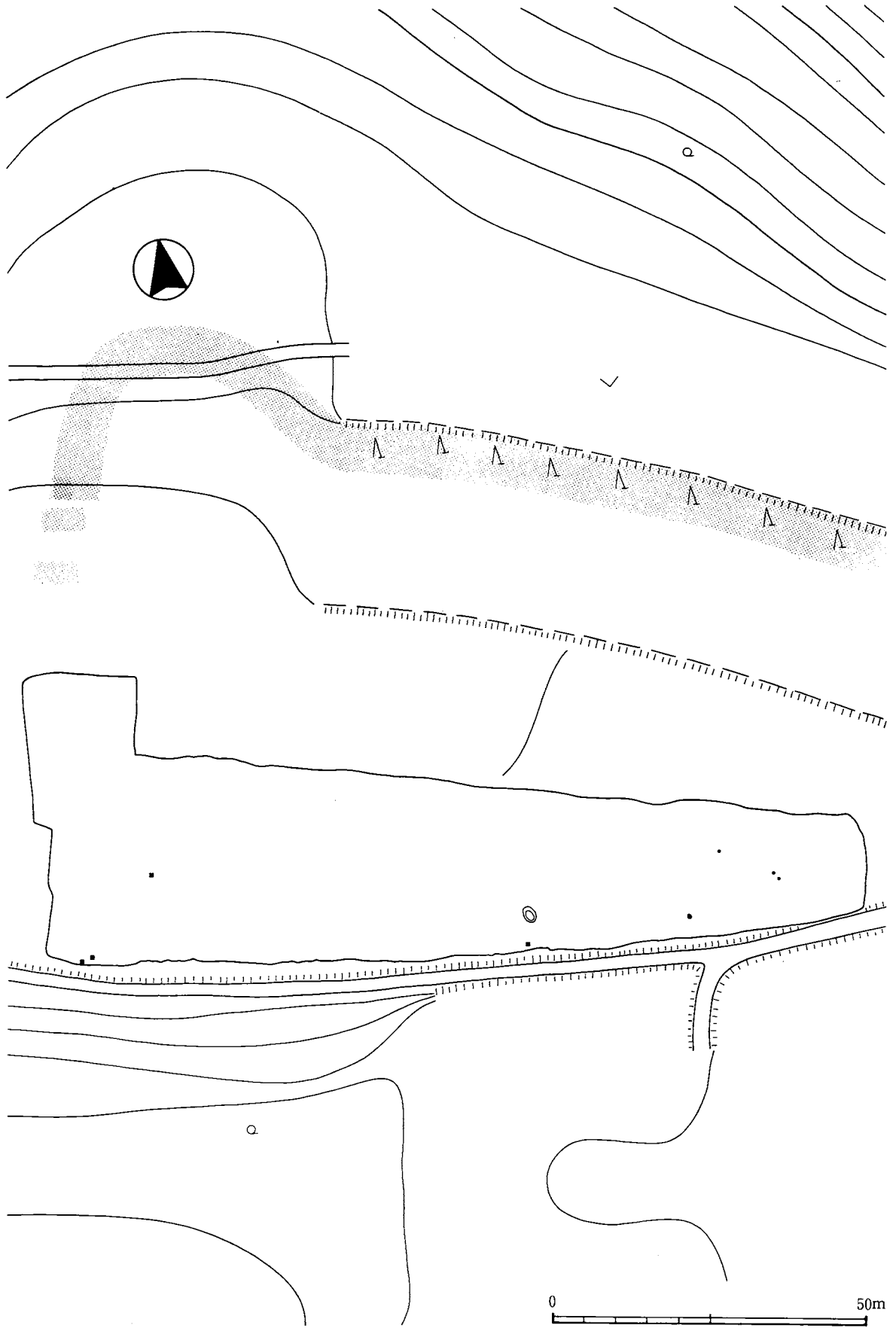
第48図 楕円文土器19分布図



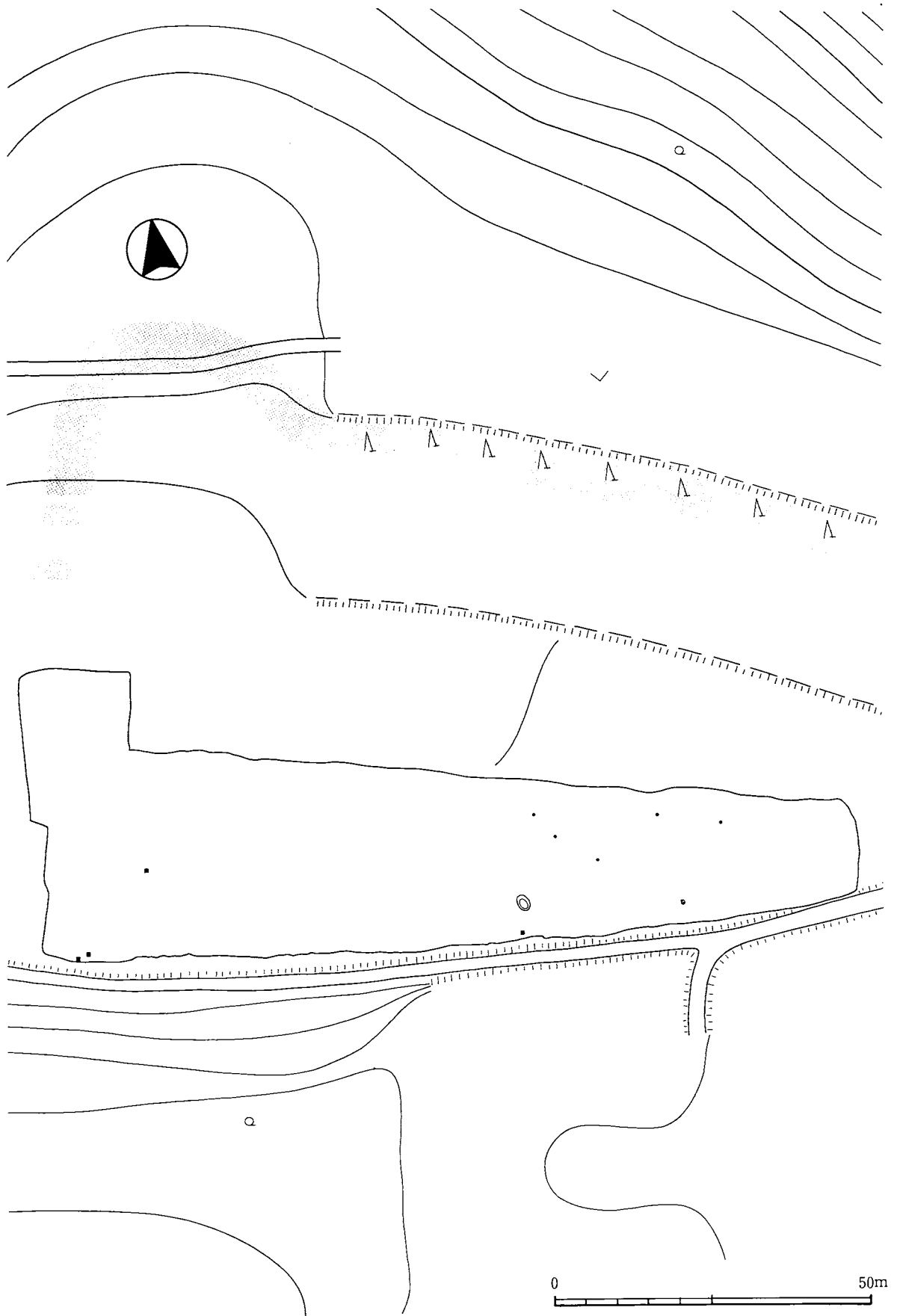
第49図 楕円文土器20分布図



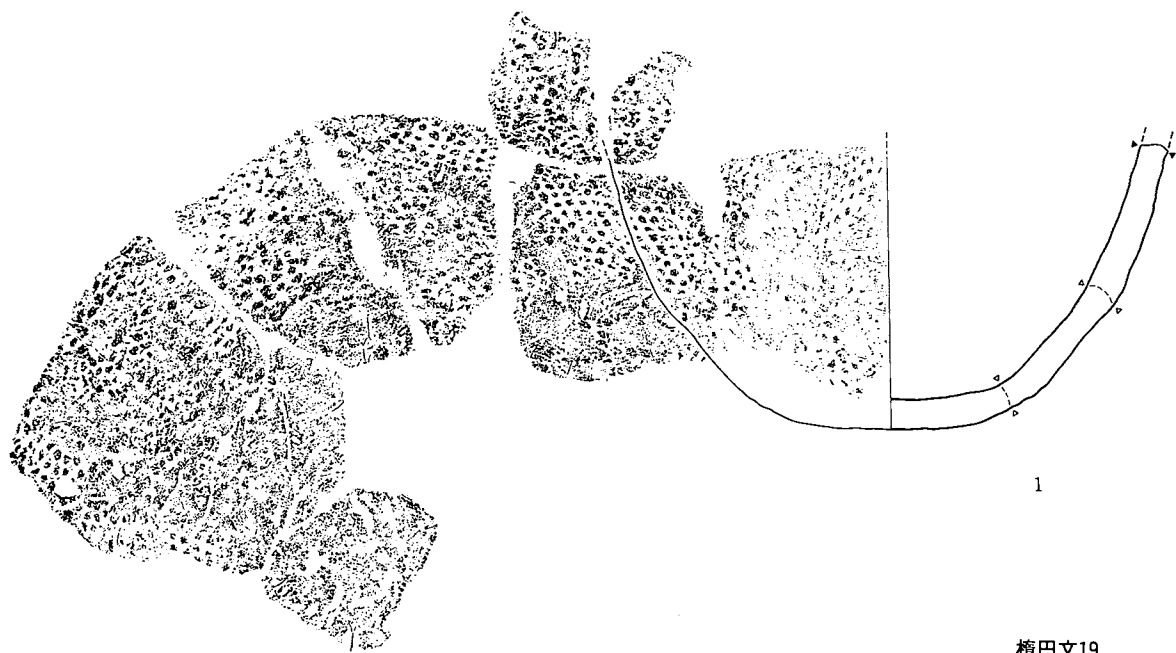
第50図 楕円文土器21分布図



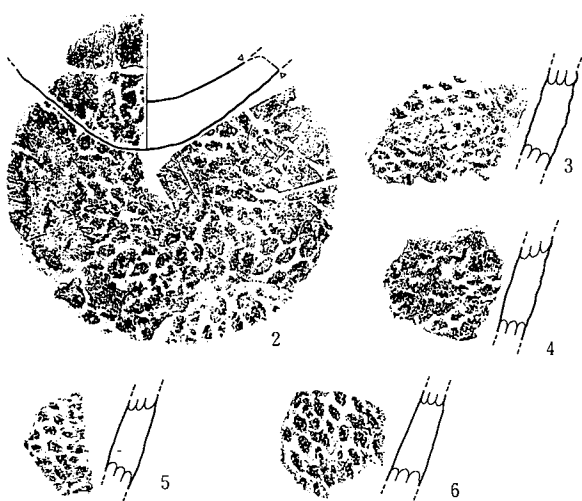
第51図 橢円文土器22分布図



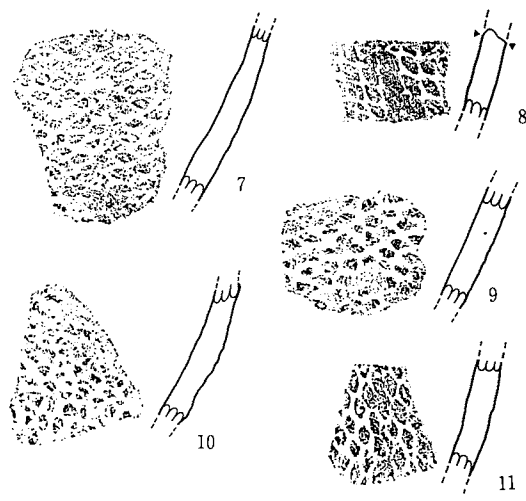
第52図 楕円文土器23分布図



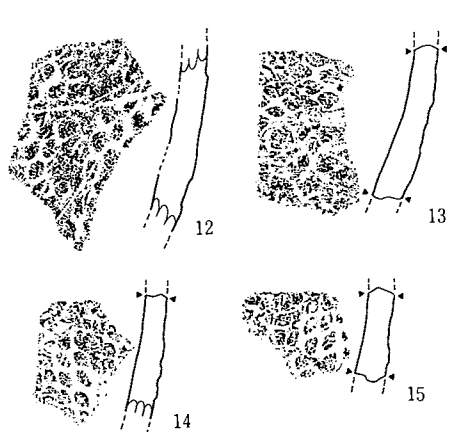
楕円文19



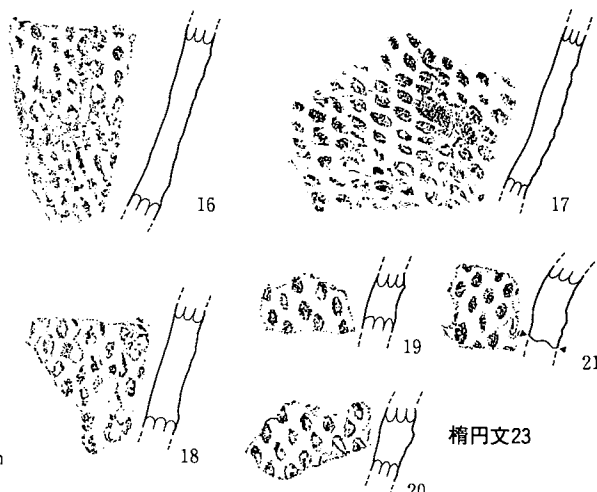
楕円文20



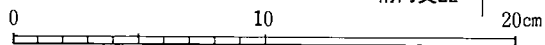
楕円文21



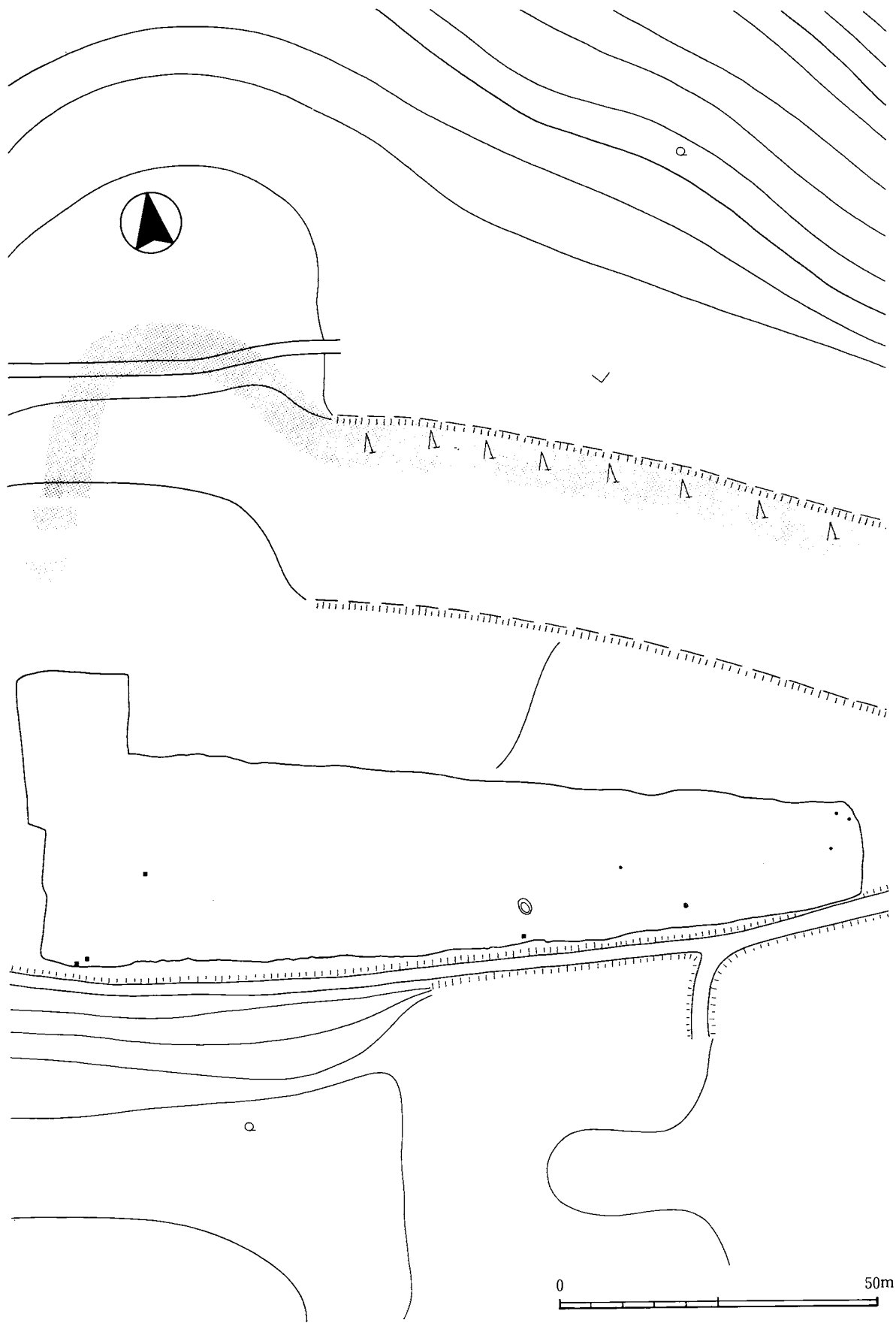
楕円文22



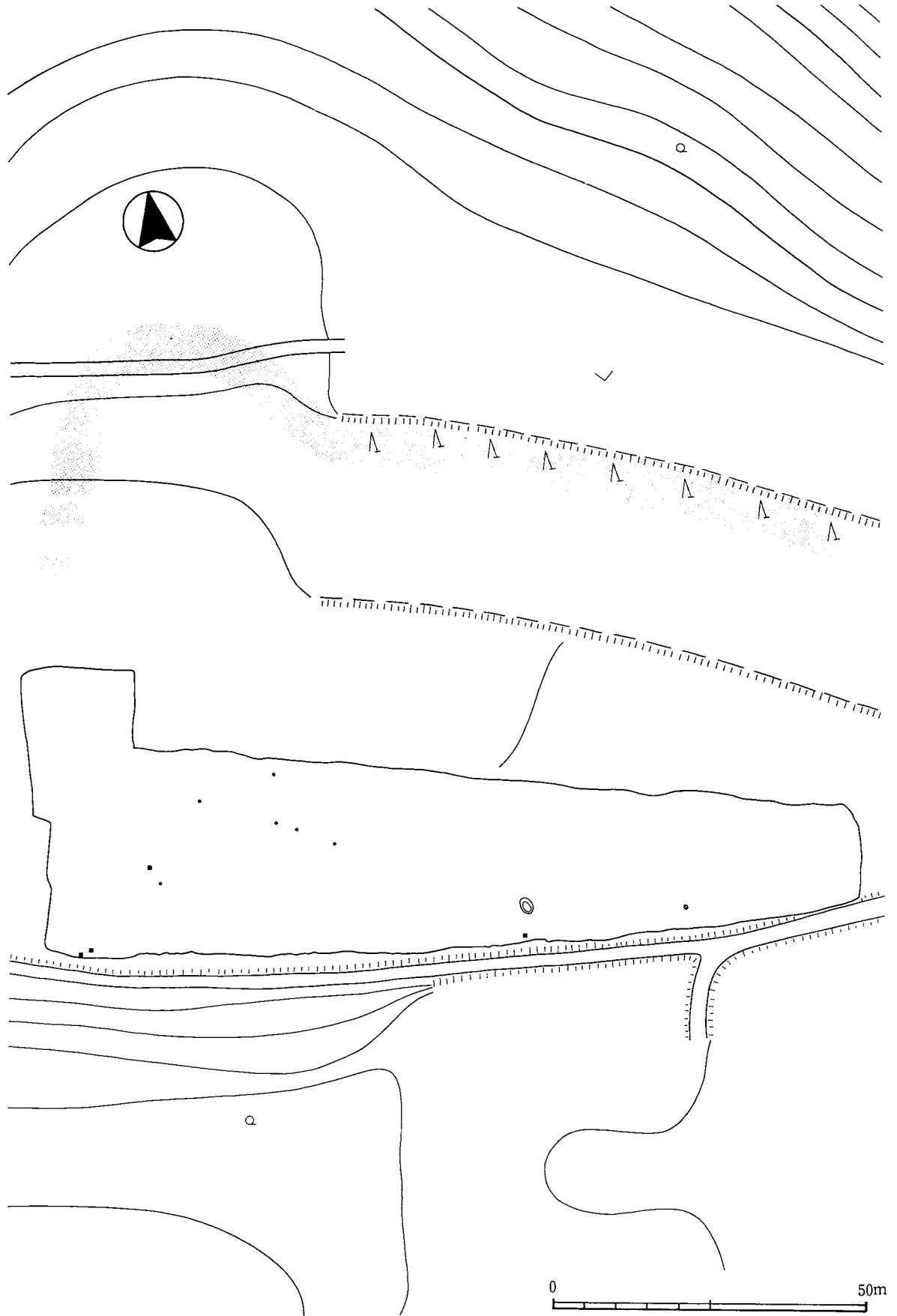
楕円文23



第53図 楕円文土器19~23実測図

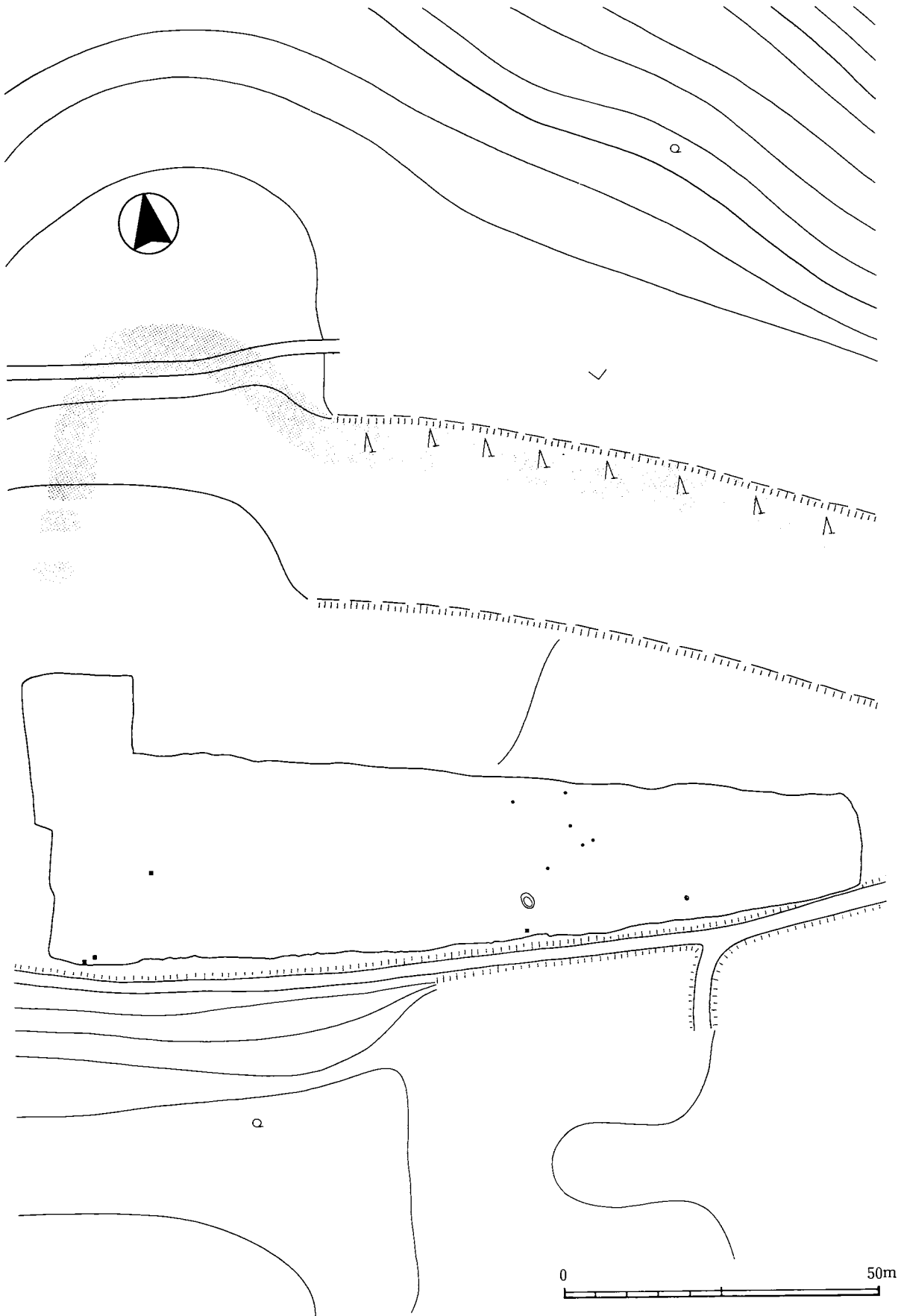


第54図 楕円文土器24分布図

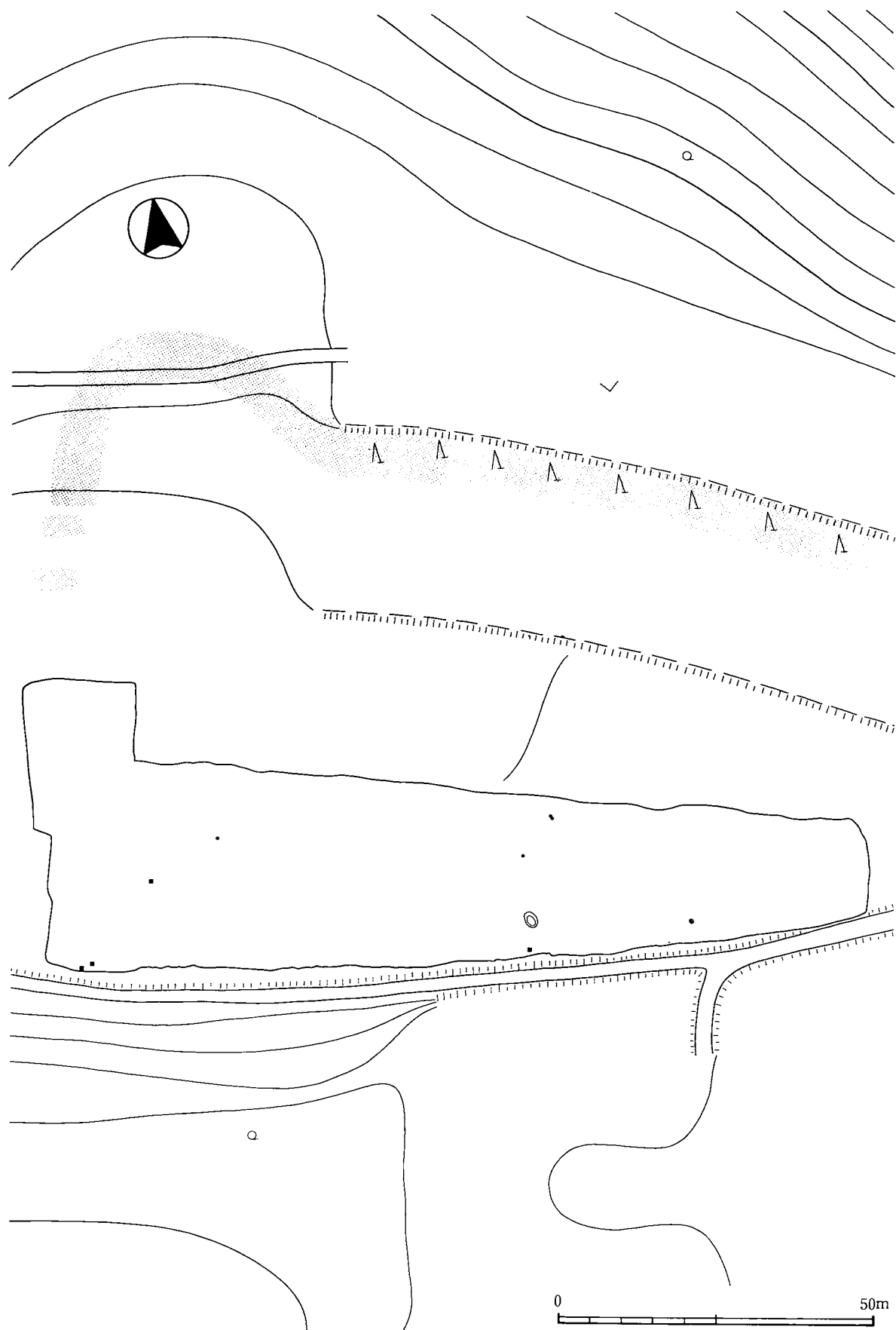


第55図 楕円文土器25分布図

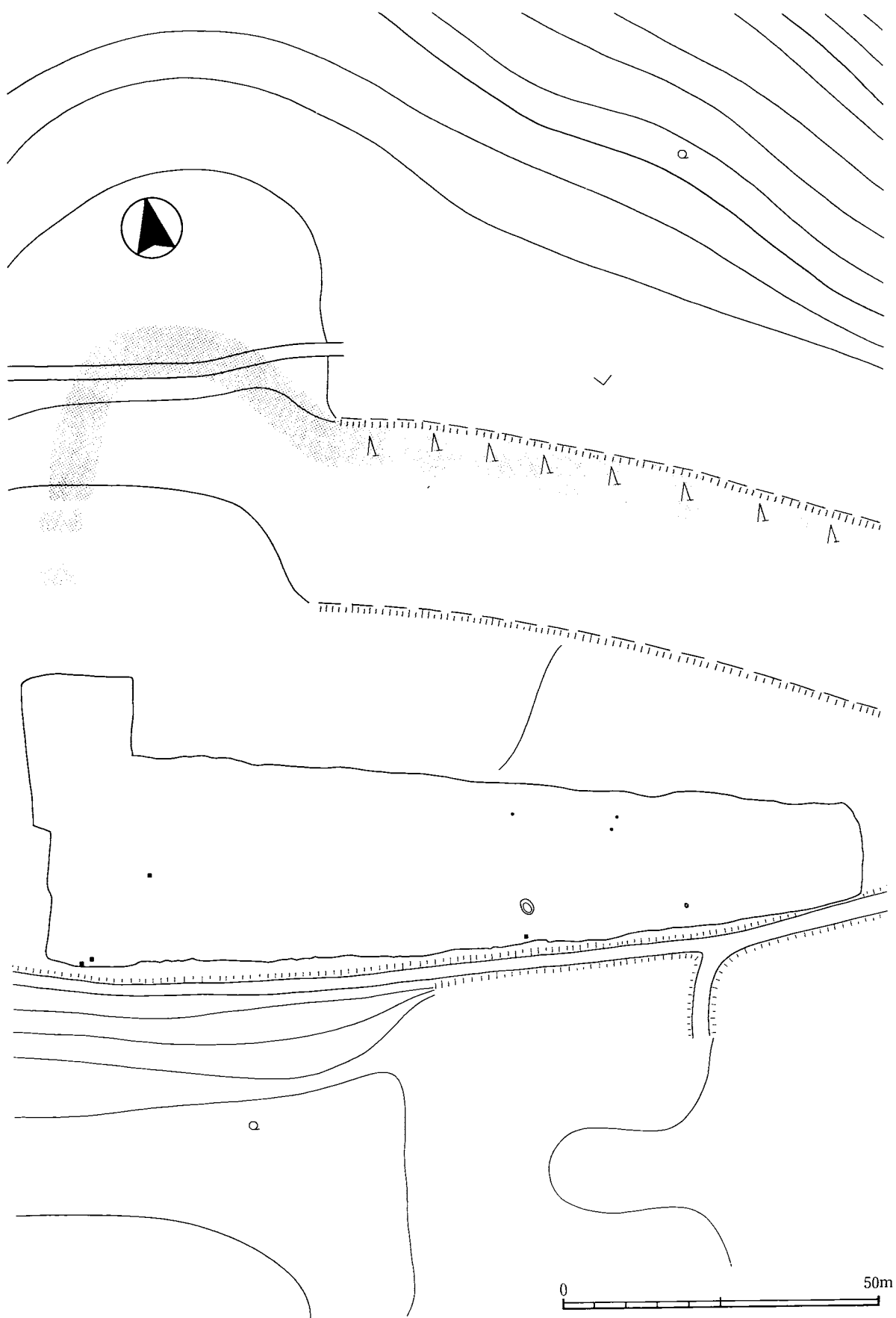




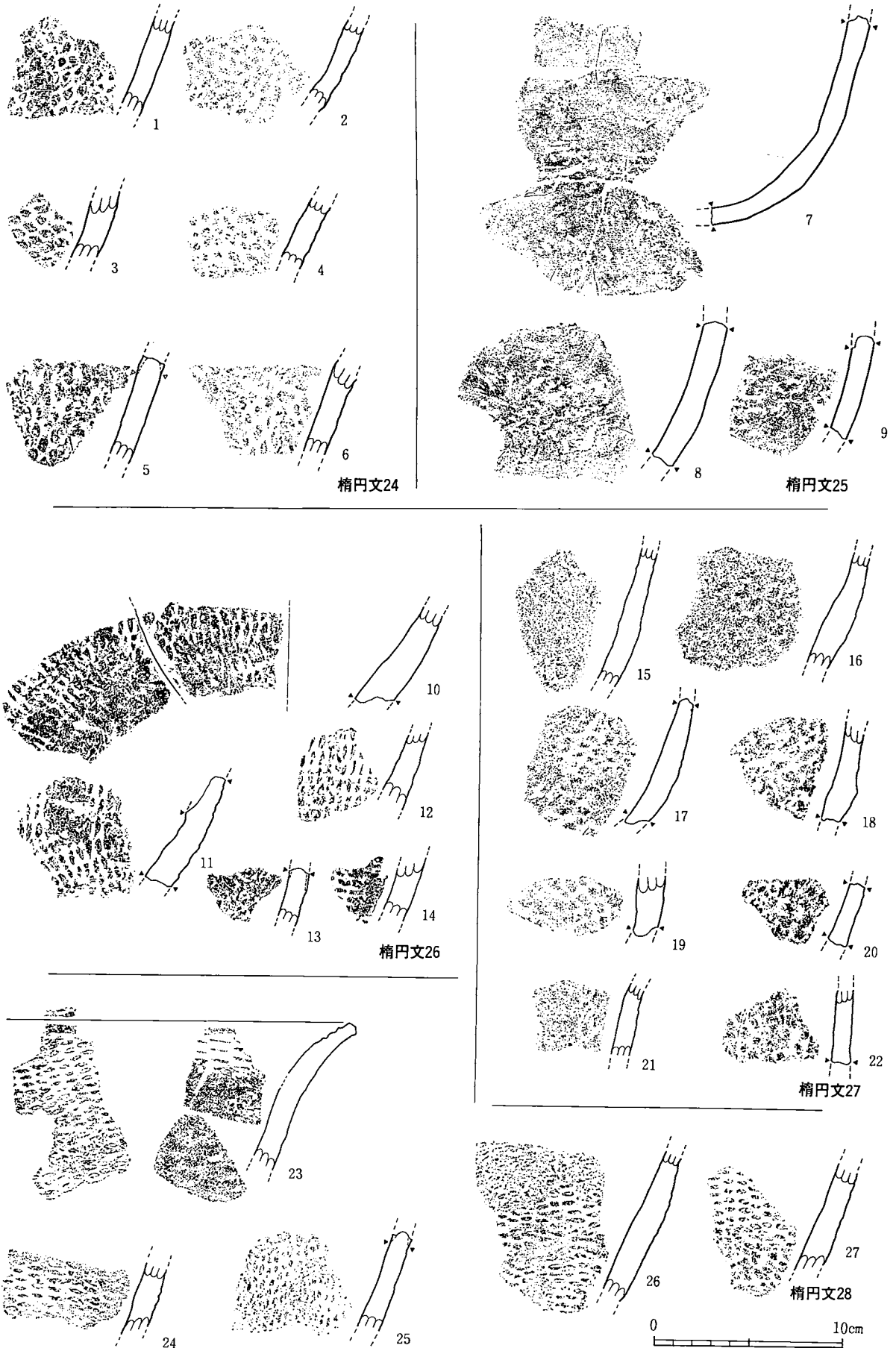
第56図 楕円文土器26分布図



第57図 楕円文土器27分布図



第58図 楕円文土器28分布図



第59図 桐円文土器24~28実測図

土器製作の単位を示す凸形ないし凹形剝離面が観察される資料が2点あった(8・9)。それぞれの幅は、7.8cmと5.2cmである。おそらく、その位置する部位が違うのであろう。

**楕円文土器26 (第56・59図10～14)**

破片は、5点である。これらは、底部近くと胴部の破片であるが、破片が小さくて、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の中央部のやや東側にある。

文様は、底部近くの破片に縦位施文、胴部に横位施文の文様がみられる。おそらく、底部近くが縦位の文様、その上が横位の文様という、文様帯の構成があるのだらう。

土器製作の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が観察される資料が1点あった(11)。その幅は、6.4cmである。この他、凹形剝離面のみの資料(10)、凸形剝離面のみの資料(13)も存在している。

**楕円文土器27 (第57・59図15～22)**

破片は、8点である。これらは、すべて胴部の破片で、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の中央部のやや東側そして、西側にある。

文様は、横位施文を中心にして、斜位のものもみられる。しかし、土器全体での文様帯を示す資料は存在しておらず、どのような文様帯の構成なのかは不明である。

土器製作の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が観察される資料が2点あった(17・20)。その幅は、6.8cm(17)と3.4cm(20)である。この両者の幅の違いは、その破片の部位の違いにあるようだ。この他、凹形剝離面のみの資料(18・19・22)も存在している。

**楕円文土器28 (第58・59図23～27)**

破片は、8点である。これらは、口縁部と胴部の破片である。それによると、やや弱く外反する口縁部と直線的な胴部による器形の特徴が知られる。

分布は、調査区の中央部のやや東よりにある。

文様は、口縁部周辺の破片に横位施文があり、胴部には縦位施文の文様がある。おそらく、これが文様帯の構成の実際であらう。なお、口唇部と裏面口

縁部にも横位の楕円文が残されている。

土器製作の単位を示す凸形剝離面が観察される資料が1点あった(25)。

**楕円文土器29 (第60・62図1～8)**

破片は、8点である。これらは、すべて胴部の破片で、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の東側にややまとまって出土している。

文様は、横位施文と縦位施文がある。しかし、土器全体での文様帯を示す資料は存在していないので、どのような文様帯の構成かは不明である。

**楕円文土器30 (第60・62図9～12)**

破片は、4点である。口縁部と胴部の破片である。これにより、器形の一部を推定することは可能である。それによると、やや弱く外反する口縁部、直線的ないし僅かに丸みを持つ胴部による構成の器形であると想像される。

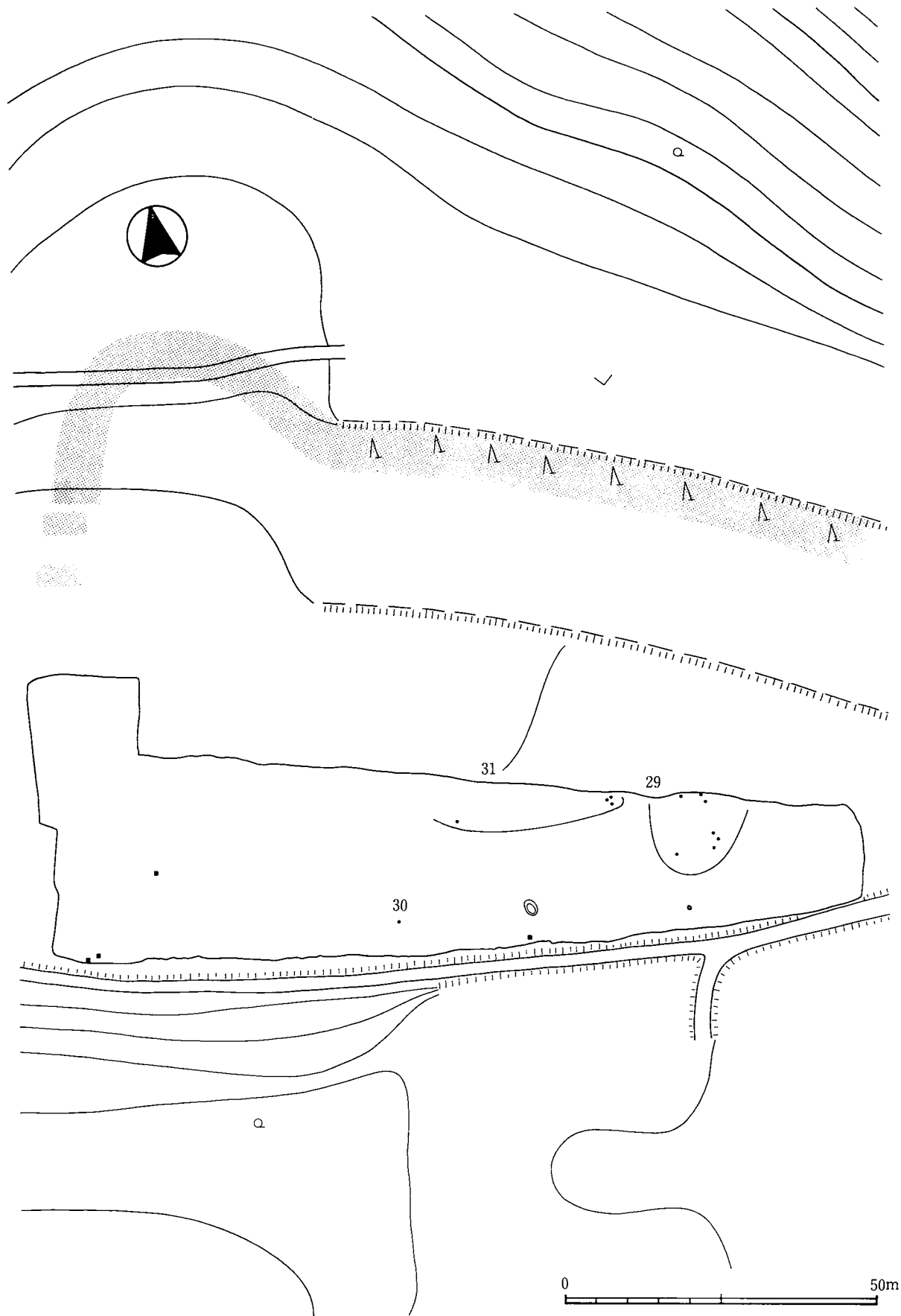
分布は、調査区の中央部にある。出土状態は、包含層中ないし攪乱された状況で、近接した場所から出土している。

文様は、表面、口唇部、裏面口縁部に見られる。表面では、口縁部近くが縦位施文で、胴部の破片には横位施文のものがみられる。口唇部は、横位施文である。裏面口縁部も横位施文の楕円文である。以上の文様の状態によって、この土器の文様帯構成がある程度予測できる。表面には、二つ以上の文様帯が存在する。縦位施文の口縁部周辺と、横位施文の胴部である。また、口唇部と裏面口縁部もそれぞれの文様帯である。

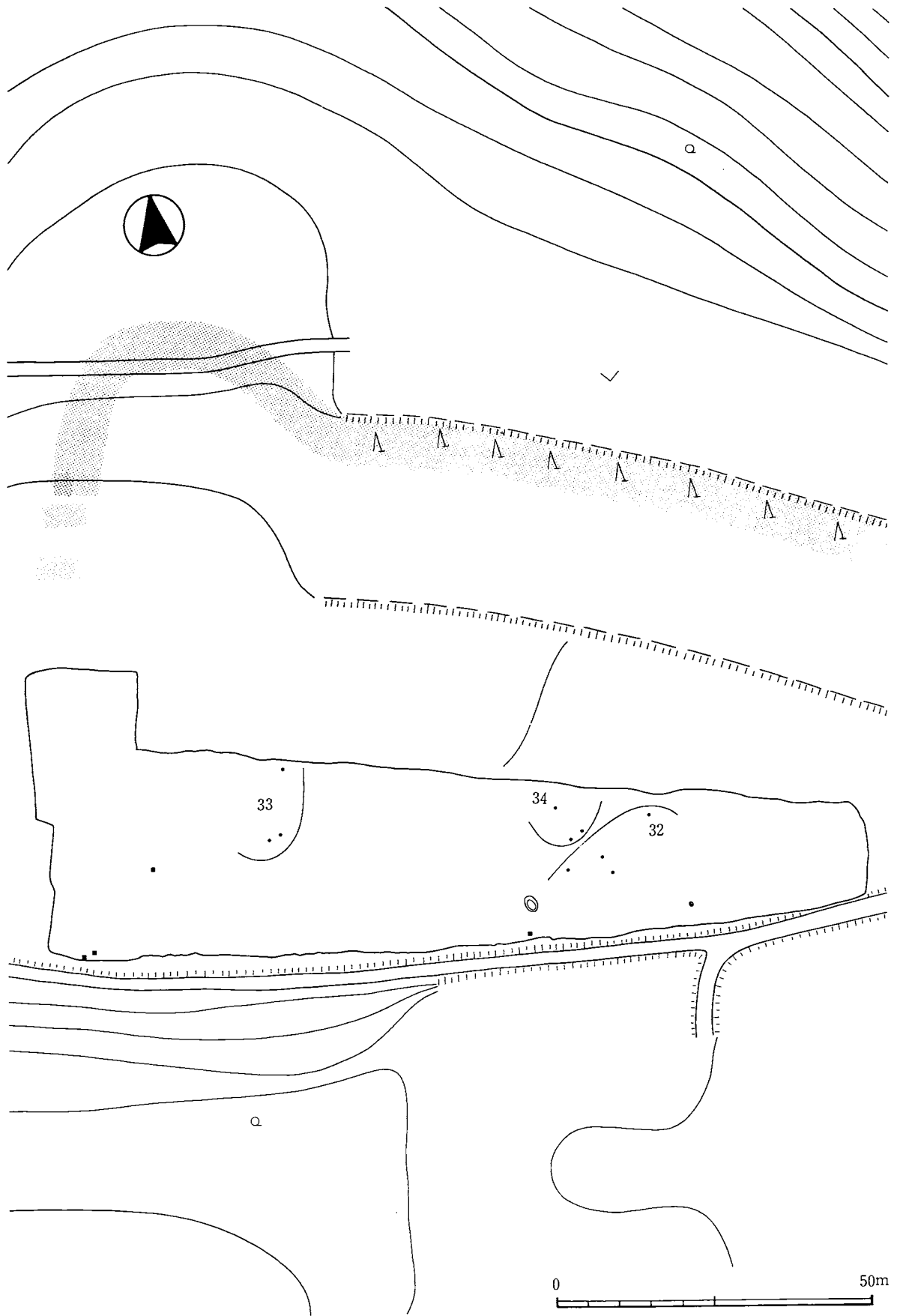
**楕円文土器31 (第60・62図13～16)**

破片は、6点ある。これらは、すべて胴部の破片であるが、この中には、3点の接合による大型のものがあって胴部の形を推定できるものがある。弱い弧を描いて丸みを持つ胴部がそれで、この他に外反ぎみの胴部、直線的な胴部がみられる。こうしたことから、その器形を推定すれば、口縁部近くでは外へ反った形を呈し、そのまま直線的な胴部、そしてすぐに丸みを持った胴部に移るとということが予想される。

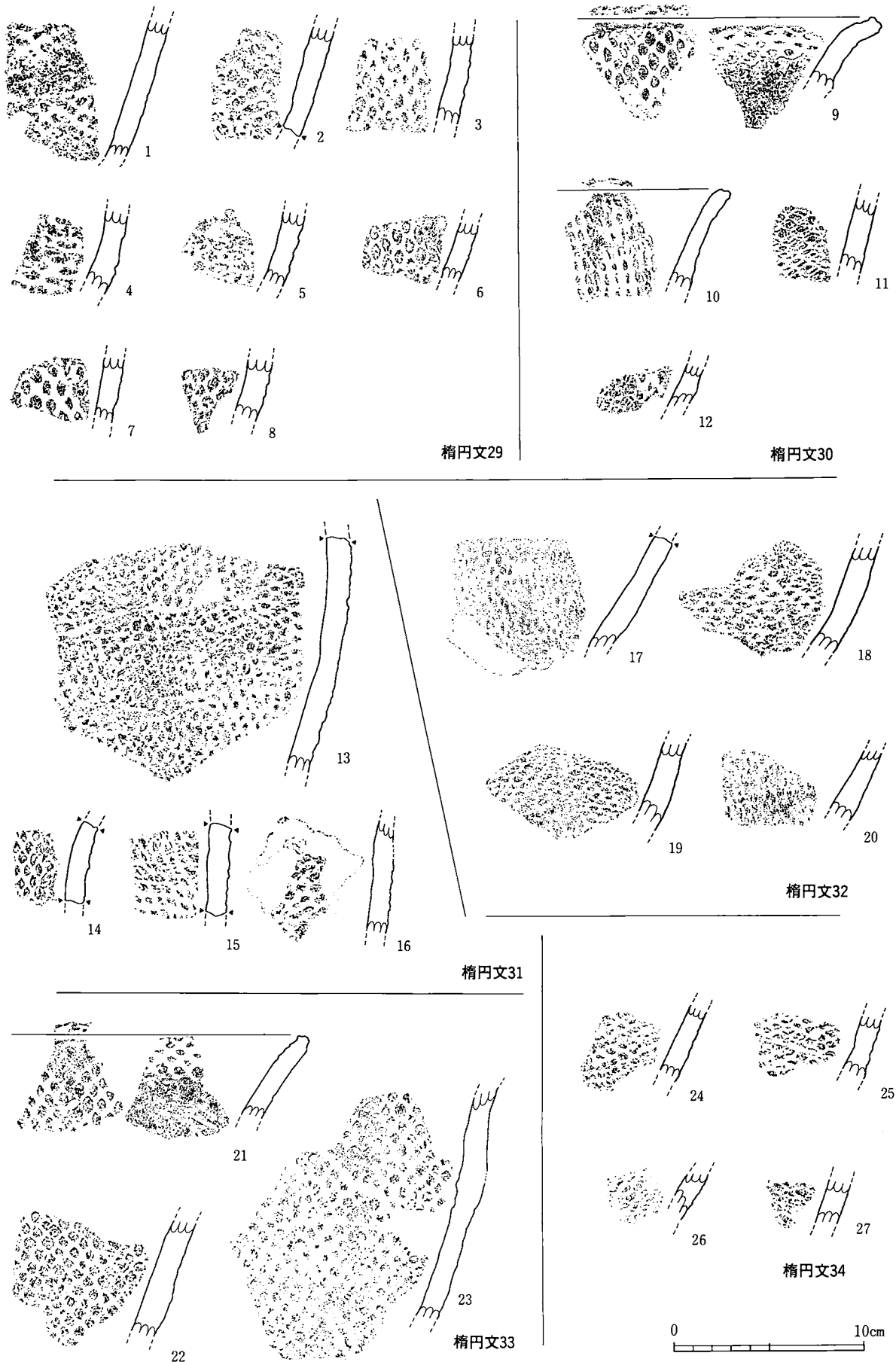
分布は、調査区のやや東側よりの北端にある。



第60図 楕円文土器29～31分布図



第61図 楕円文土器32~34分布図



第62図 楕円文土器29～34実測図



文様は、横位施文と縦位施文がある。しかし、土器全体での文様帯を示す資料は存在していないので、どのような文様帯の構成かは不明である。ただし、口縁近くの部位での表面では縦位施文が見られ、また、直線的な胴部破片には、横位の施文がみられることから、複数の文様帯の存在が予測できる。しかし、大型破片の表面を観察すると、その上端と下端が縦位、中位が横位ということの基本にした複雑な施文状況であることもわかり、単純な文様帯構成ではないことを窺わせる。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が観察される資料が2点あった(14・15)。その幅は、4.2cm(14)と4.8cm(15)である。この他、凸形剝離面だけの資料(13)も存在している。

#### 楕円文土器32(第61・62図17~20)

破片は、4点である。これらは、すべて胴部の破片で、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の東側にあり、分散している。

文様は、横位施文と縦位施文がある。しかし、土器全体での文様帯を示す資料は存在していないので、どのような文様帯の構成かは判らない。

土器製作の単位を示す凸形剝離面が観察される資料が1点あった(17)。

#### 楕円文土器33(第61・62図21~23)

破片は、4点である。口縁部と胴部の破片である。直線的に開く口縁部、直線的ないしやや丸みがある胴部である。ただし、これから器形の全体は復元できない。

分布は、調査区の西側にあり、それも北端で出土している。

文様は、表面、口唇部、裏面口縁部にある。表面は縦位施文、口唇部は横位施文、裏面口縁部は横位施文である。以上の文様の状態によって、この土器の文様帯構成がある程度予測できる。表面と口唇部と裏面口縁部の文様帯である。ただし、表面での複数の文様帯の存在は判らない。

#### 楕円文土器34(第61・62図24~27)

破片は、4点である。これらは、すべて胴部の破片で、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の東側にあり、ややまとまった状況で出土している。

文様は、横位施文と斜位施文がある。しかし、土器全体での文様帯を示す資料はないので、どのような文様帯構成をとるかは判らない。

#### 楕円文土器35(第63・65図1~4)

破片は、4点である。これらは、すべて胴部の破片であり、しかもすべて小破片だったために、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の中央部、そのやや西よりにある。包含層中、攪乱された状況で出土しているが、その出土地点は近接していた。

文様は、横位施文と斜位施文がある。しかし、土器全体での文様帯を示す資料はなかった。

#### 楕円文土器36(第63・65図5~8)

破片は、4点である。これらは、すべて胴部の破片で、しかも小破片だったために、その全体像の推定はできなかった。

分布は、調査区の西側にある。4点は、包含層中、攪乱された状況で出土しているが、それらの出土地点は近接していた。

文様は、横位施文のみである。

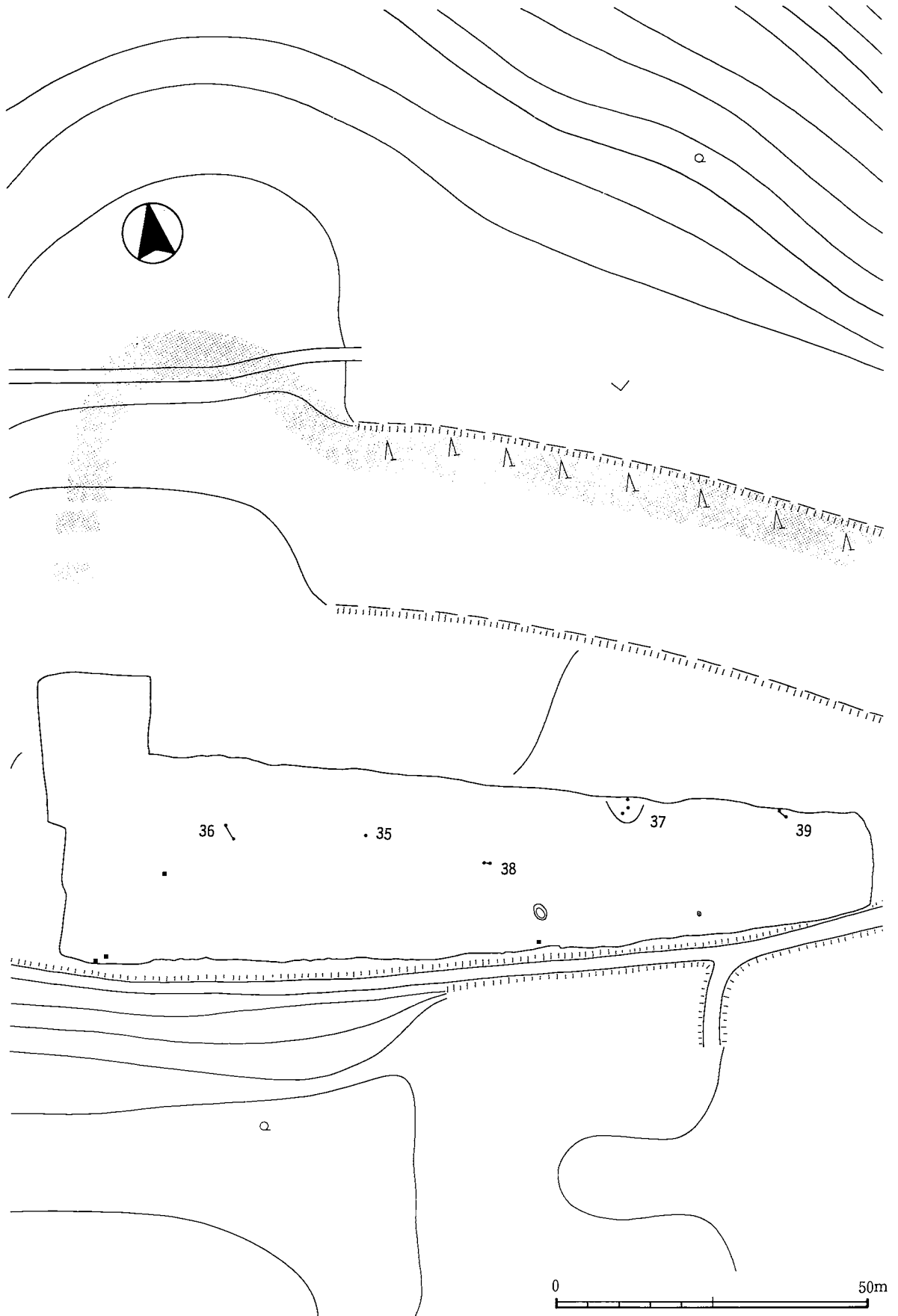
土器製作に係わる一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が観察される資料が1点あった(7)。その幅は、3.6cmである。この他、凸形剝離面だけの資料(5・8)も存在している。

#### 楕円文土器37(第63・65図9)

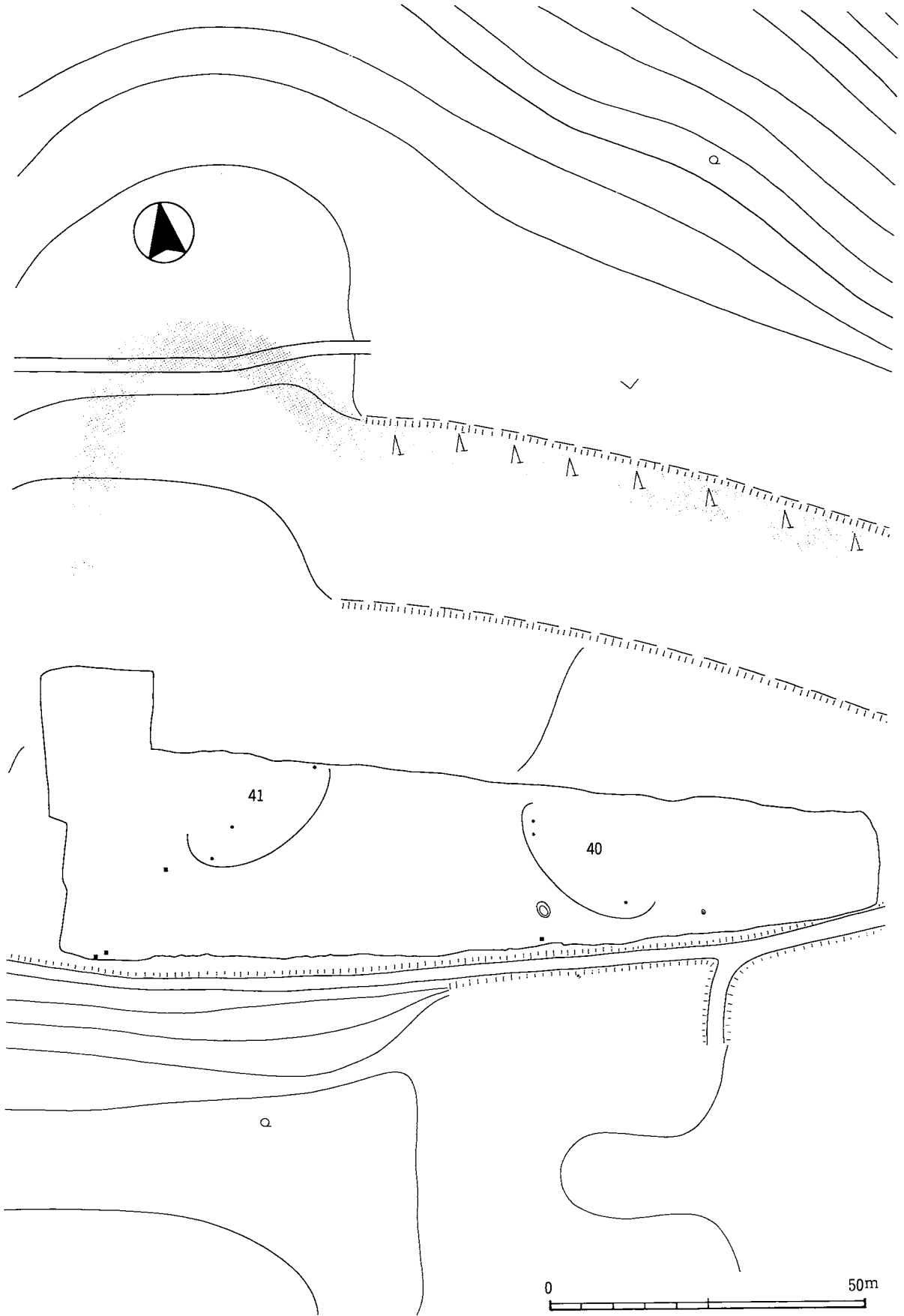
破片は、4点であるが、すべて接合することによって、その器形を復元することができた。それによると、その器形は口縁部がわずかに開いた、ボール状の浅鉢形を呈すると復元できた。

分布は、調査区の東側にあり、すべて近接した場所からの出土であった。

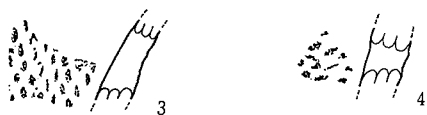
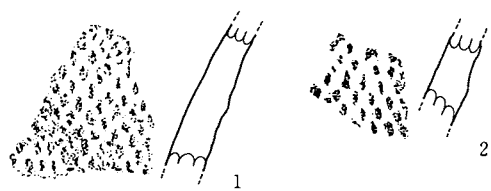
文様は、土器そのものが小さいために、複数の文様帯に分割できるものではなく、縦位と横位とが入り組んだ状況であった。ただし、口縁部では縦位、胴部では横位が基本となるようだ。裏面口縁部には、明確な文様は観察できないが、指頭の押捺が残されている。口縁部をやや外反させる際に残された痕跡であろうか。



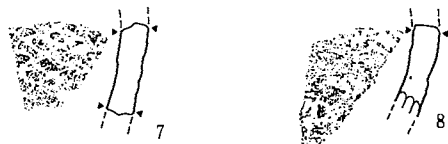
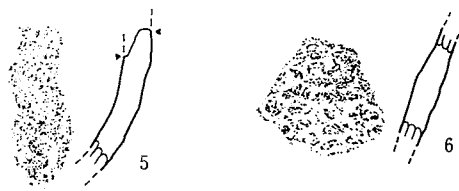
第63図 楕円文土器35~39分布図



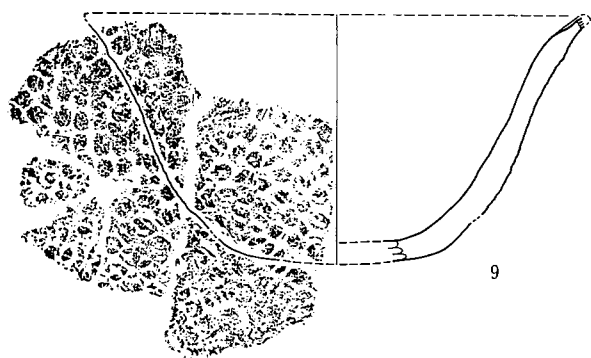
第64図 精円文土器40・41分布図



楢円文35



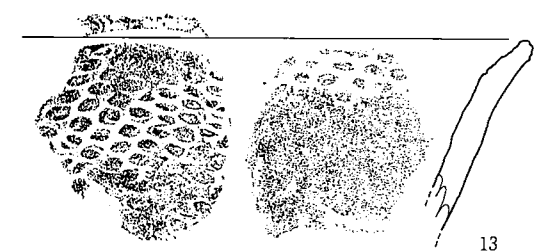
楢円文36



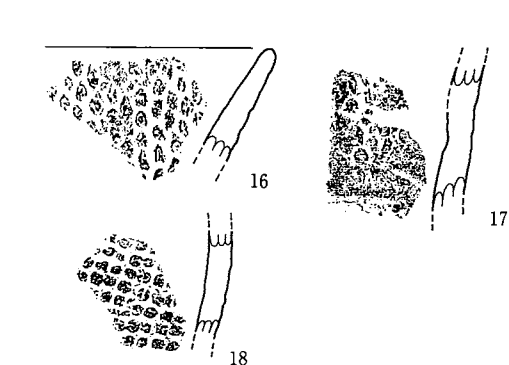
楢円文37



楢円文38



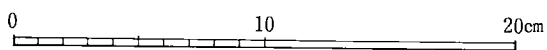
楢円文39



楢円文40



楢円文41



第65図 楢円文土器35~41実測図

楕円文土器38 (第63・65図10～12)

破片は、3点ある。これらは、口縁部と胴部の破片である。口縁部が強く外反することは判るが、この資料点数では、その全体の器形を推定することは不可能である。

分布は、調査区の中央にある。

文様は、いずれも斜位施文である。おそらく、胴部破片でも口縁部に近い部位であろう。文様帯の構成では、その実際を知ることはできないが、裏面口縁部と口唇部と表面の口縁部周辺は、それぞれ異なる文様帯とすることができよう。なお、文様の施文方向は、どれも斜位である。

楕円文土器39 (第63・65図13～15)

破片は、3点ある。いずれも口縁部の破片である。口縁部は、強く外反するものもあるが、弱いものもある。場所による若干の違いが存在するのかもしれない。

分布は、調査区の東端、しかも南端にある。

文様は、表面、口唇部、裏面口縁部にある。これらは、それぞれ異なった文様帯であろう。いずれも横位施文である。

楕円文土器40 (第64・65図16～18)

破片は、3点である。口縁部と胴部の破片で、口縁部が直線的に外反することがわかるだけである。

分布は、中央部のやや東よりにある。

文様は、表面口縁部で縦位施文、胴部で縦位施文と横位施文があり、口唇部と裏面口縁部は無文であった。

楕円文土器41 (第64・65図19・20)

破片は、4点ある。これらは、それぞれ2点づつが接合して、口縁部と胴部の破片となっている。口縁部は、直線的に開き、胴部は下部にいたると丸みを持つようになる。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、表面、口唇部、裏面口縁部にある。表面には、口縁部周辺に横位施文、その下の胴部が縦位施文の文様が残されている。口唇部は横位施文で、裏面口縁部も横位施文である。なお、文様帯は、表面が二つ以上に区別でき、口唇部と裏面口縁部がそれぞれ独立したものといえよう。

楕円文土器42 (第66・68図1～3)

破片は、3点である。これらは口縁部と胴部の破片であるが、その器形を復元するには資料不足である。分布は、すべて調査区の中央部にある。

文様は、口縁部、口唇部、裏面口縁部にある。口縁部は縦位施文、口唇部は横位施文、裏面口縁部は横位施文である。

楕円文土器43 (第66・68図4～6)

破片は、3点である。いずれも胴部の破片であり、その器形を復元するには資料不足である。

分布は、すべて調査区の中央部にあり、散在した状況であった。

文様は、横位施文と縦位施文の二つがある。このことから胴部には、二つ以上の文様帯が存在することが予想される。

土器製作の際の一時的乾燥の単位を示す、凹形剝離面のみの資料(6)も存在している。

楕円文土器44 (第66・68図7～9)

破片は、3点である。いずれも胴部の破片であり、その器形を復元するには資料不足である。

分布は、すべて調査区の西側から中央部に点在した状況であった。

文様は、横位施文と縦位施文の二つがある。このことから胴部には、二つ以上の文様帯が存在することが予想される。なお、この資料は、同じ土器に異なった原体での施文が行われている可能性を示すものとして注目される。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が観察される資料は2点ある(8・9)。その幅は、3.9cm×3.6cmである。また、凸形剝離面のみの資料(7)も存在している。

楕円文土器45 (第67・68図10～12)

破片は、3点である。いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の中央部にある。

文様は、横位施文と縦位施文の二つがある。このことから胴部には、二つ以上の文様帯が存在することが予想される。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が観

察される資料は1点あった(10)。その幅は、4.6cmである。

**橢円文土器46(第67・68図13~15)**

破片は、3点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の東側にある。

文様は、すべて横位施文である。

土器製作に関わる一時的な乾燥の単位を示す凹形剝離面のみの資料(15)も存在している。

**橢円文土器47(第67・68図16~18)**

破片は、3点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の中央にある。

文様は、すべて縦位施文で、破片の中には磨り消しによる縦位の無文帯がみられるものもある。文様として、橢円文の他、無文も存在している。

**橢円文土器48(第67・68図19~21)**

破片は、いずれも胴部の破片、3点である。

分布は、すべて調査区の東側にある。

文様は、横位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が観察される資料は2点で、4.8cm(19)と3.2cm(21)である。また、凹形剝離面を持つ資料(20)もある。

**橢円文土器49(第67・68図22~24)**

破片は、3点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の中央部にあり、そのやや東側にある。

文様は、縦位と横位施文である。

**橢円文土器50(第69・70図1~3)**

破片は、3点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の中央部、東側、西側という離れた状態であった。

文様は、縦位である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が、すべての破片に観察された。その幅は、6.4cm(1)、3.3cm(2)と2.5cm(3)である。

**橢円文土器51(第69・70図4~6)**

破片は、3点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の西側にある。

文様は、横位施文と縦位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が、1点(4)の破片で観察された。その幅は、4.4cmである。

**橢円文土器52(第69・70図7・8)**

個体識別の結果、認識できた破片は、2点で、口縁部から胴部の破片と胴部の破片である。

分布は、すべて調査区の西側にある。

文様は、表面が縦位施文、裏面口縁部が横位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が、1点(8)の破片で観察された。その幅は、6.3cmである。

**橢円文土器53(第69・70図9・10)**

破片は、3点である。口径復元できる口縁部の破片と胴部破片である。器形は、口縁が直線的に開く、ボールに類する浅鉢形である。口径は、27.4cmと復元できる。

分布は、すべて調査区の中央部、しかもその西側にある。

文様は、すべて縦位施文である。

**橢円文土器54(第69・70図11・12)**

破片は、3点で、すべて口縁部の破片である。

分布は、調査区の東端近くにある。

文様は、口縁部と口唇部と裏面口縁部にある。口縁部が縦位施文、口唇部と裏面口縁部が横位施文である。

**橢円文土器55(第69・70図13・14)**

破片は2点で、口縁部と胴部の破片である。

分布は、調査区の東端にある。

文様は、口縁部の破片では表面が縦位施文、口唇部が横位施文、裏面が横位施文で、胴部の破片には横位施文が観察される。

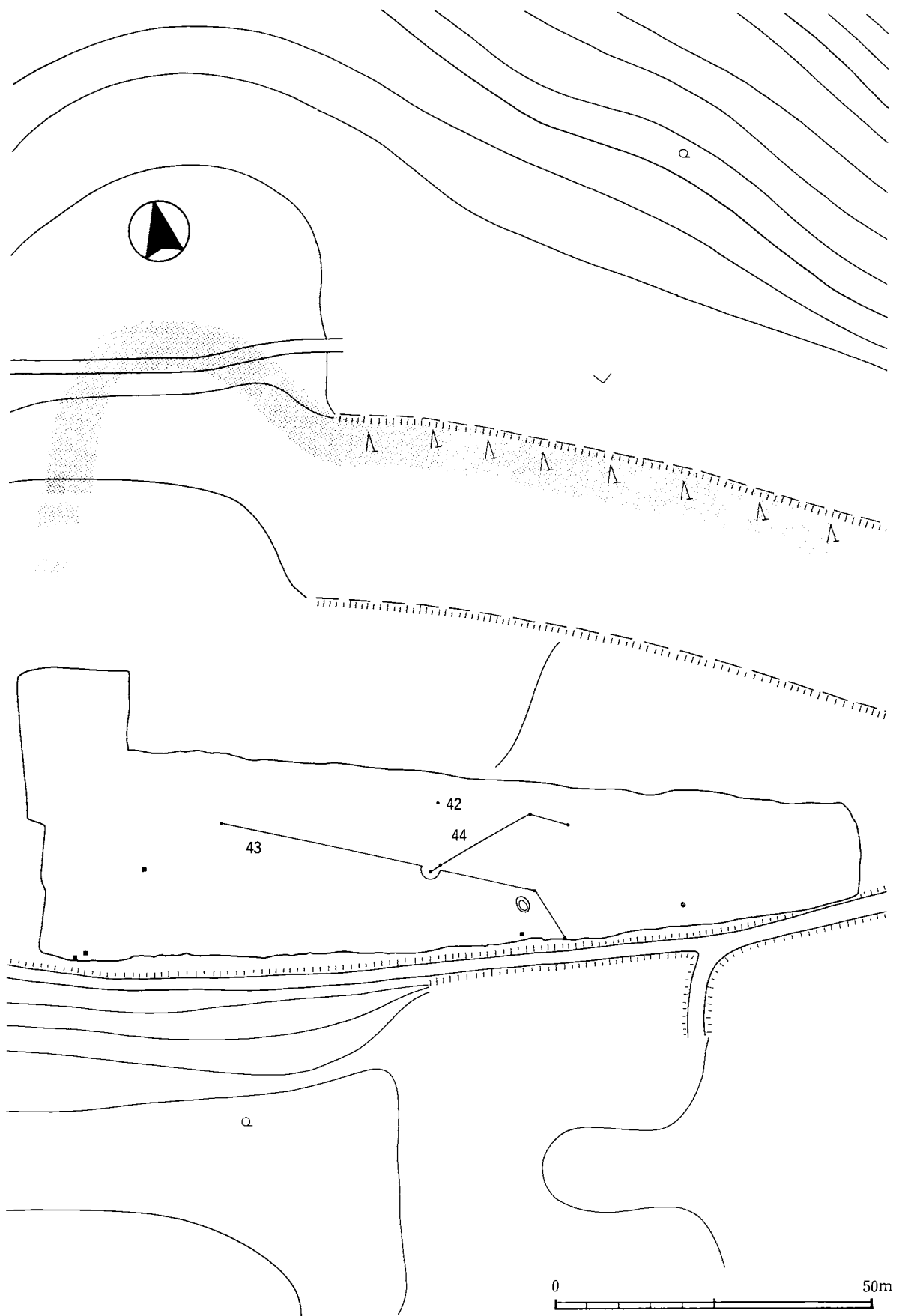
**橢円文土器56(第69・70図15・16)**

破片は2点で、口縁部と胴部の破片である。

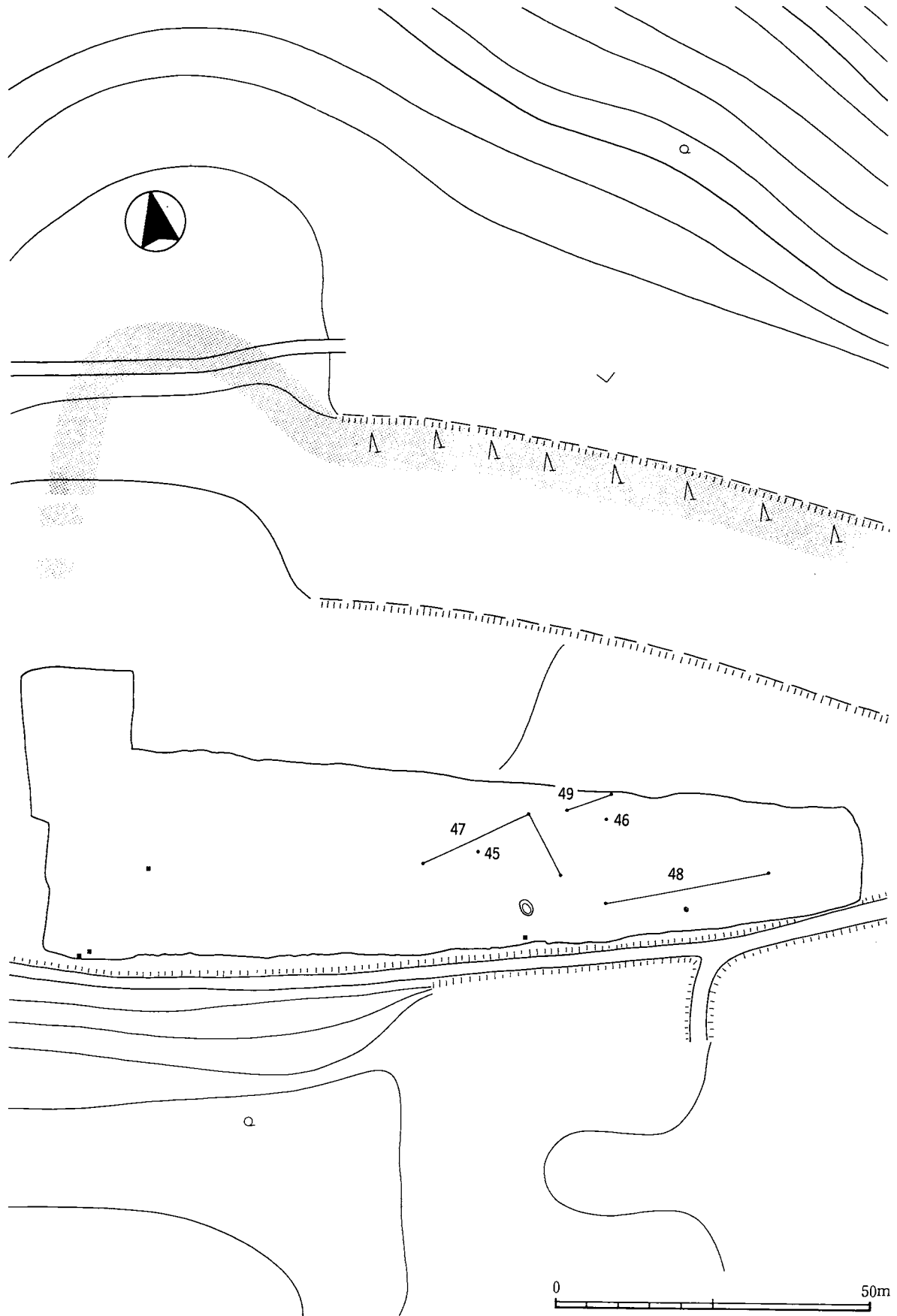
分布は、調査区の東側にある。

文様は、口縁部の破片では表面も裏面も横位施文で、胴部の破片は斜位施文である。

**橢円文土器57(第71・72図1・2)**

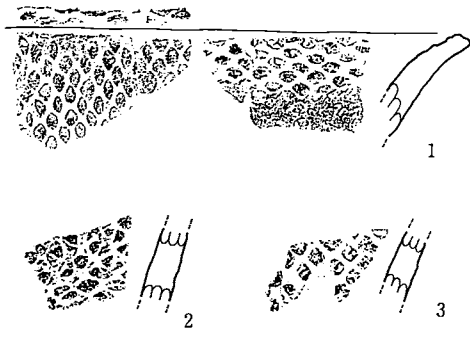


第66図 楕円文土器42~44分布図

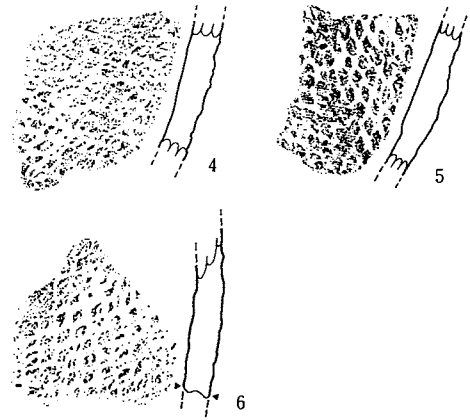


第67図 楕円文土器45~49分布図

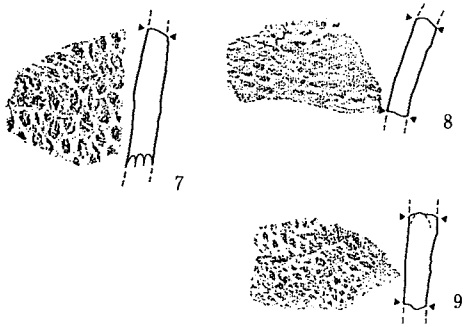




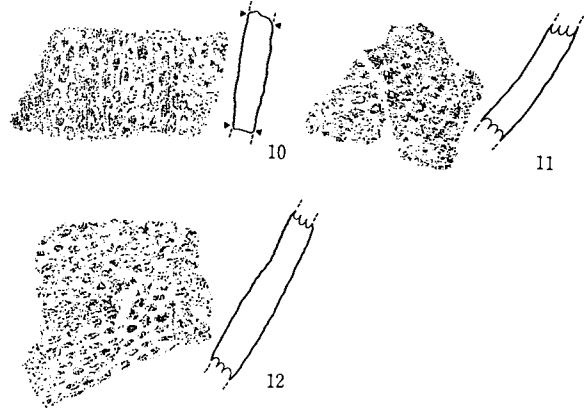
楕円文42



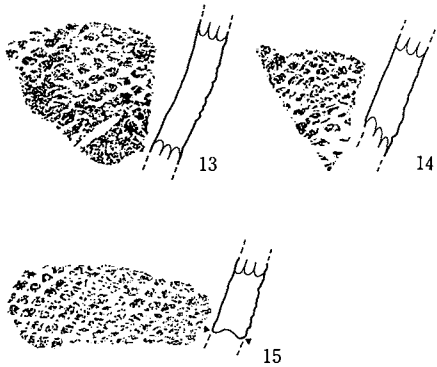
楕円文43



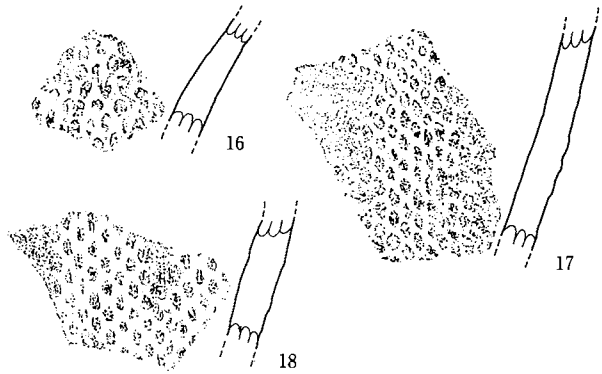
楕円文44



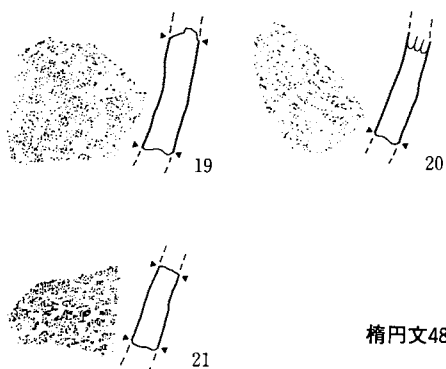
楕円文45



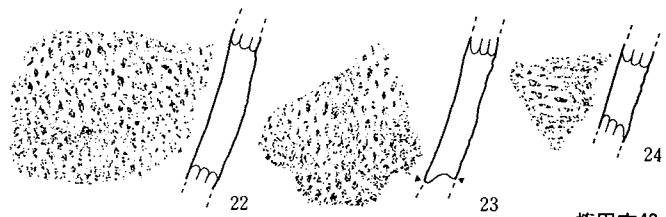
楕円文46



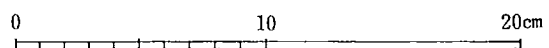
楕円文47



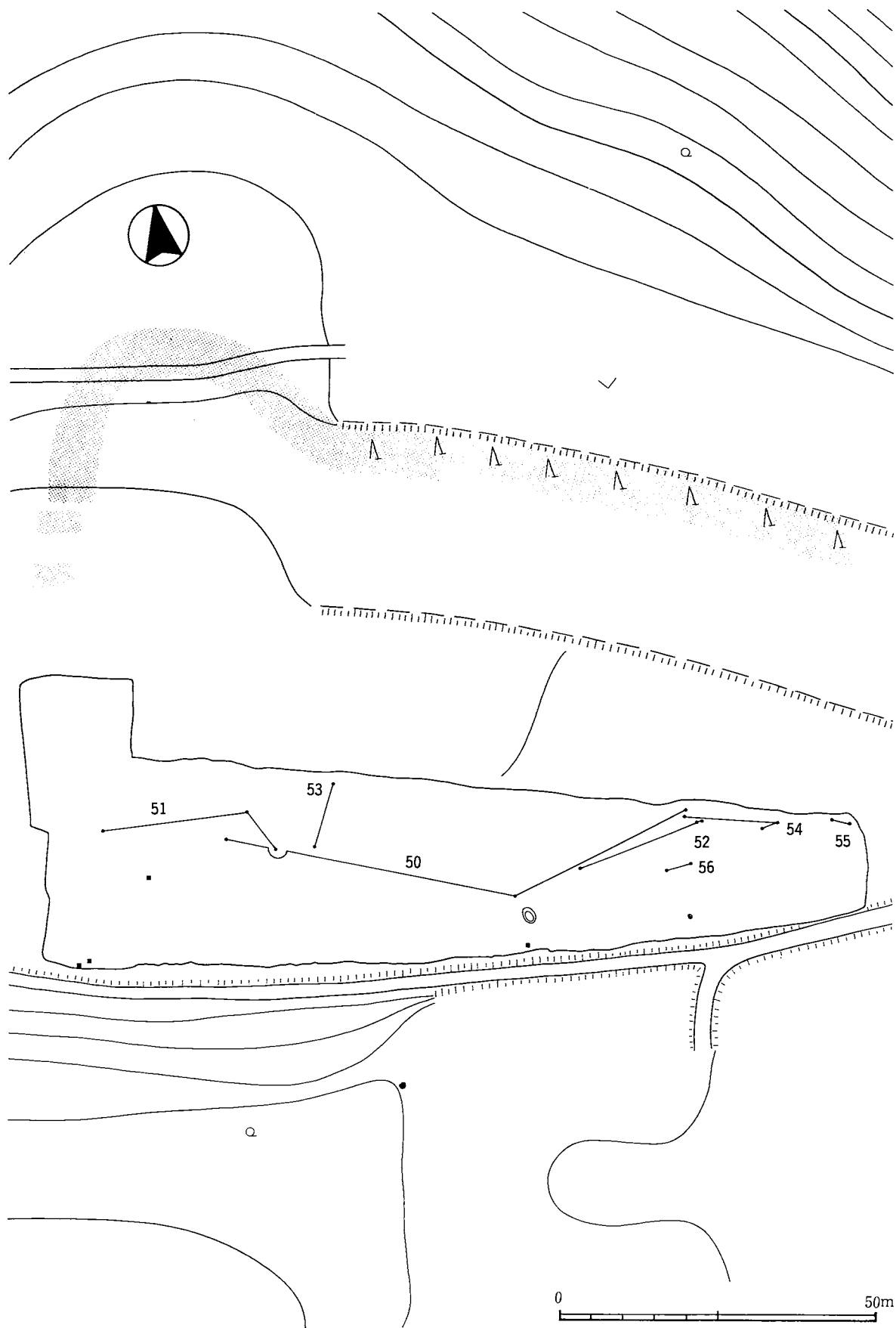
楕円文48



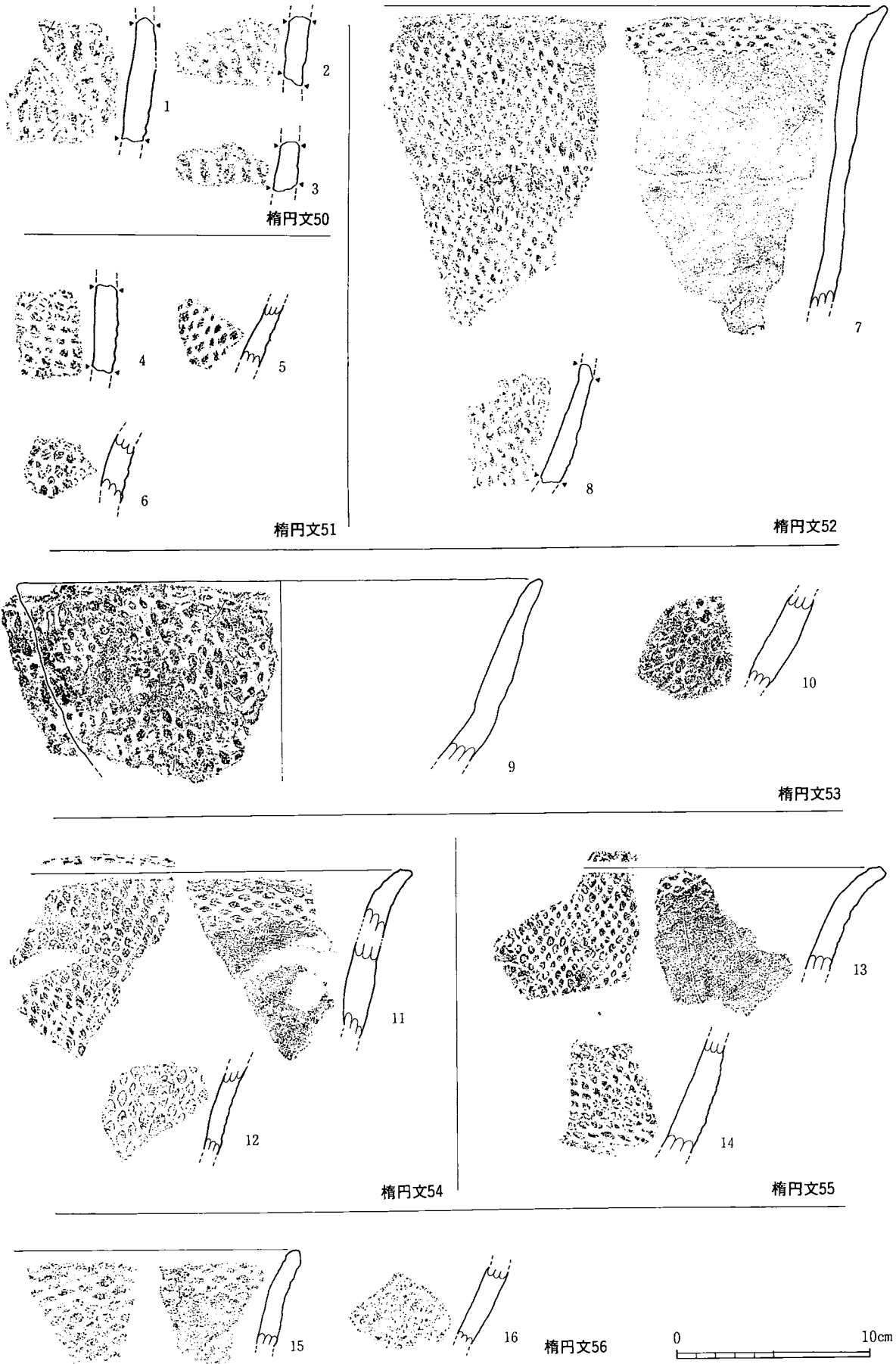
楕円文49



第68図 楕円文土器42~49実測図



第69図 楕円文土器50~56分布図



第70図 橢円文土器50~56実測図

破片は、3点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の中央部である。

文様は、いずれも縦位である。

**楢円文土器58 (第71・72図3・4)**

破片は、3点で、どれも胴部の破片である。

分布は、すべて調査区の西側にある。

文様は、いずれも横位施文である。

**楢円文土器59 (第71・72図5・6)**

破片は、2点で、胴部である。

分布は、すべて調査区の中央部の東側にある。

文様は、一つの破片には縦位施文と横位施文が、もう一つの破片には横位施文のみが観察される。

**楢円文土器60 (第71・72図7・8)**

破片は、2点で、胴部である。

分布は、すべて調査区の東側にある。

文様は、一つの破片には縦位施文と横位施文が、もう一つの破片には縦位施文のみが観察される。

**楢円文土器61 (第71・72図9・10)**

破片は、2点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の西端近くにある。

文様は、いずれも縦位施文である。

**楢円文土器62 (第71・72図11・12)**

破片は、2点で、胴部である。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、縦位と横位施文である。

**楢円文土器63 (第71・72図13・14)**

破片は、2点である。胴部の破片である。

分布は、すべて調査区の東側にあり、近接して検出されている。

文様は、いずれも横位施文である。

**楢円文土器64 (第71・72図15・16)**

破片は、2点である。胴部の破片である。

分布は、すべて調査区の東側にある。

文様は、縦位と横位施文である。

**楢円文土器65 (第71・72図17・18)**

破片は、2点である。その破片の部位は、底部に近い胴部である。

分布は、調査区の中央部のやや東よりにある。

文様は、横位施文である。

**楢円文土器66 (第71・72図19・20)**

破片は、2点である。いずれも底部の破片である。

底部の形状は、丸底である。

分布は、すべて調査区の東側にある。

文様は、縦位ないし横位施文である。

**楢円文土器67 (第73・75図1)**

破片は、2点で、それらは接合関係にある。部位は、底部に近い胴部である。

分布は、調査区の東側にある。

文様は、縦位施文である。

**楢円文土器68 (第73・75図2)**

破片は2点で、それらは接合している。部位は、胴部である。

分布は、調査区の中央にある。

文様は、横位施文である。

この資料には、凹形剝離面が観察される。

**楢円文土器69 (第73・75図3)**

破片は2点で、その接合資料である。その部位は、胴部である。

分布は、調査区の東側にある。

文様は、縦位施文である。

**楢円文土器70 (第73・75図4・5)**

破片は、2点で、その部位は、胴部である。

分布は、調査区の東側にあり、距離をおいた状況で検出されている。

文様は、縦位施文である。

**楢円文土器71 (第74・75図6・7)**

破片は、2点である。部位は、胴部である。

分布は、調査区の中央部とその東側にあり、それぞれ距離をおいた状況で検出されている。

文様は、縦位施文である。

**楢円文土器72 (第74・75図8)**

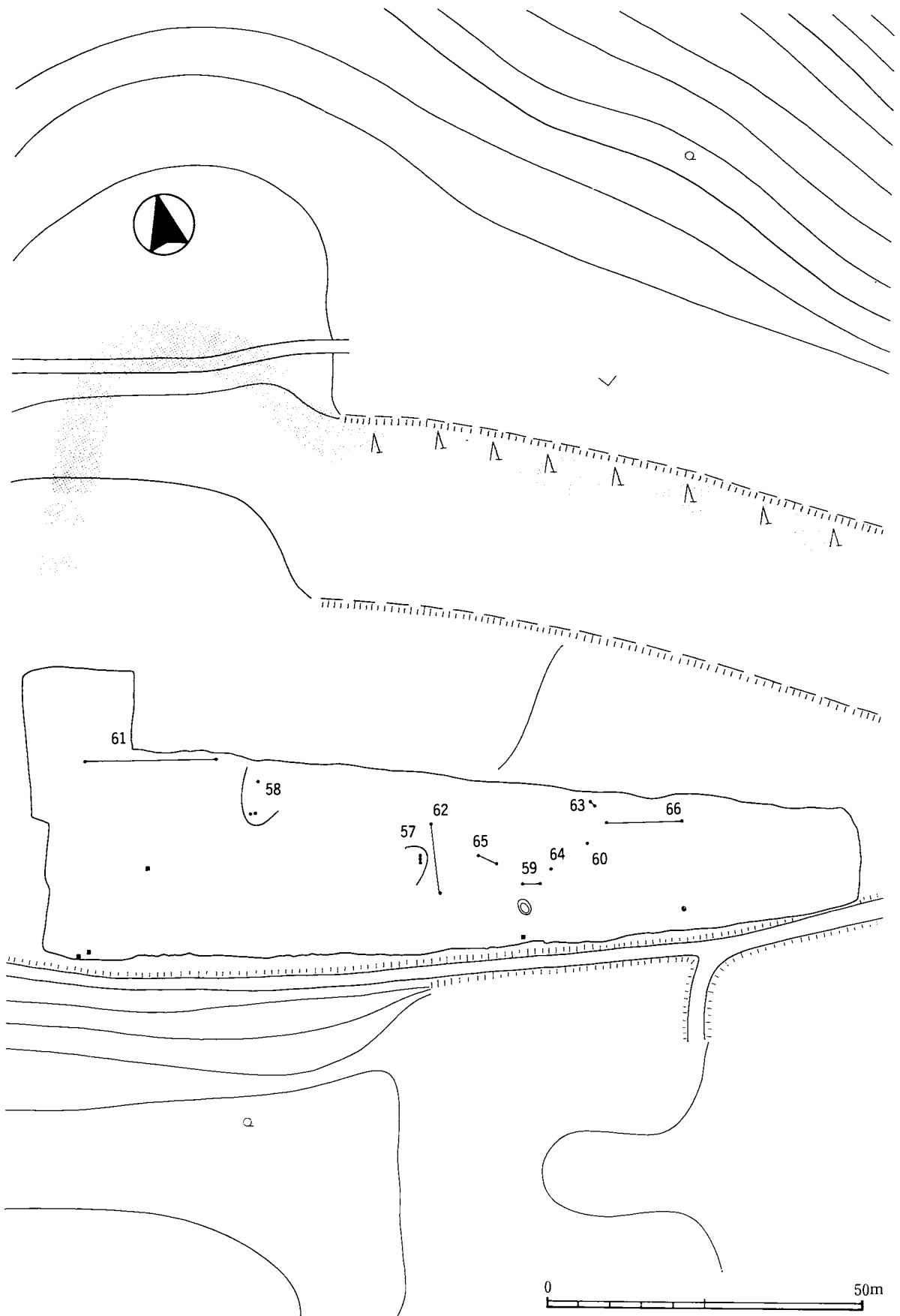
破片は2点であり、接合した資料である。その部位は、口縁である。

分布は、調査区の中央部と東端にあり、それぞれ距離をおいて検出されている。

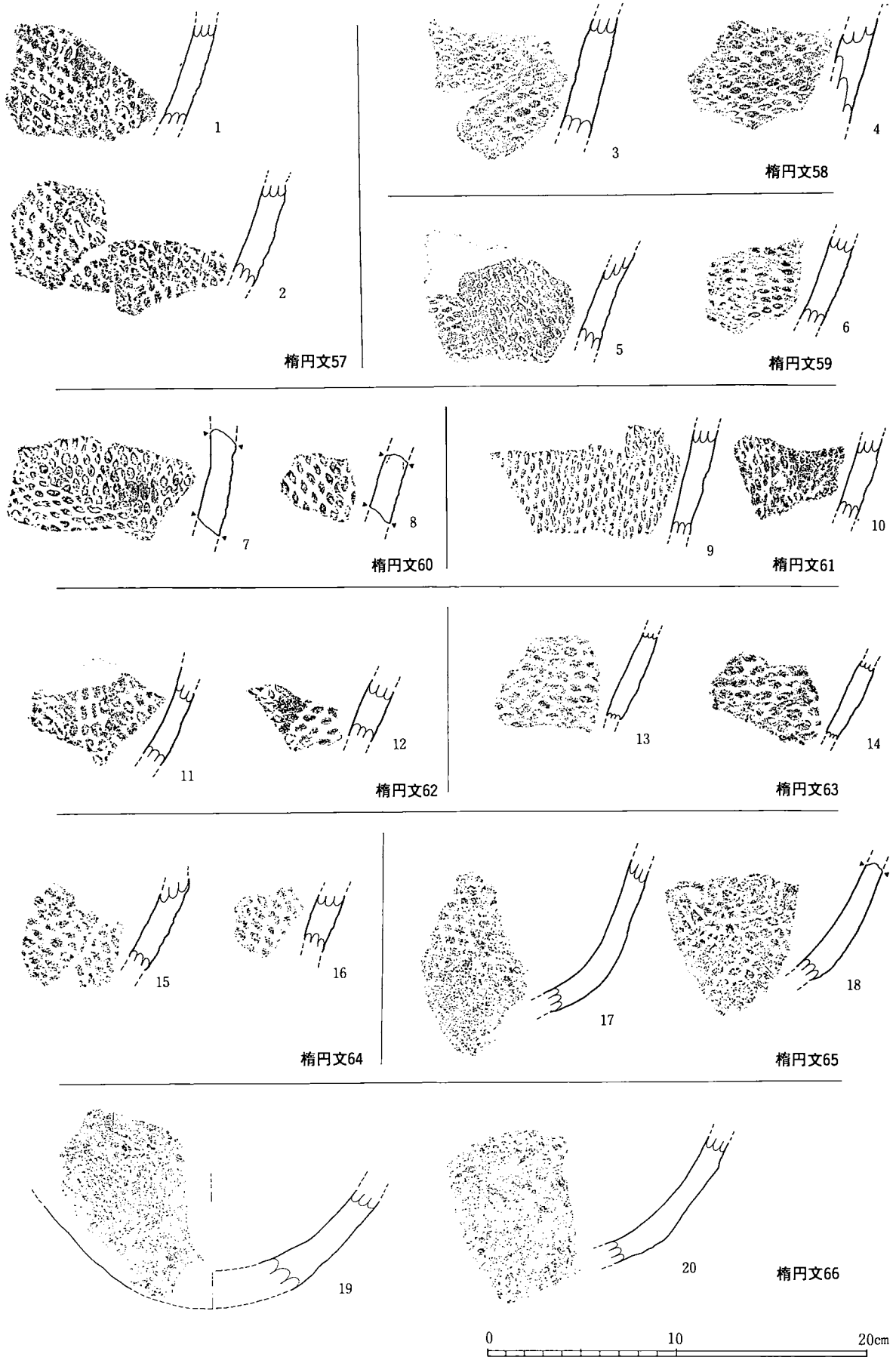
文様は、表面が縦位施文で、口唇部と裏面が横位施文である。

**楢円文土器73 (第74・75図9・10)**

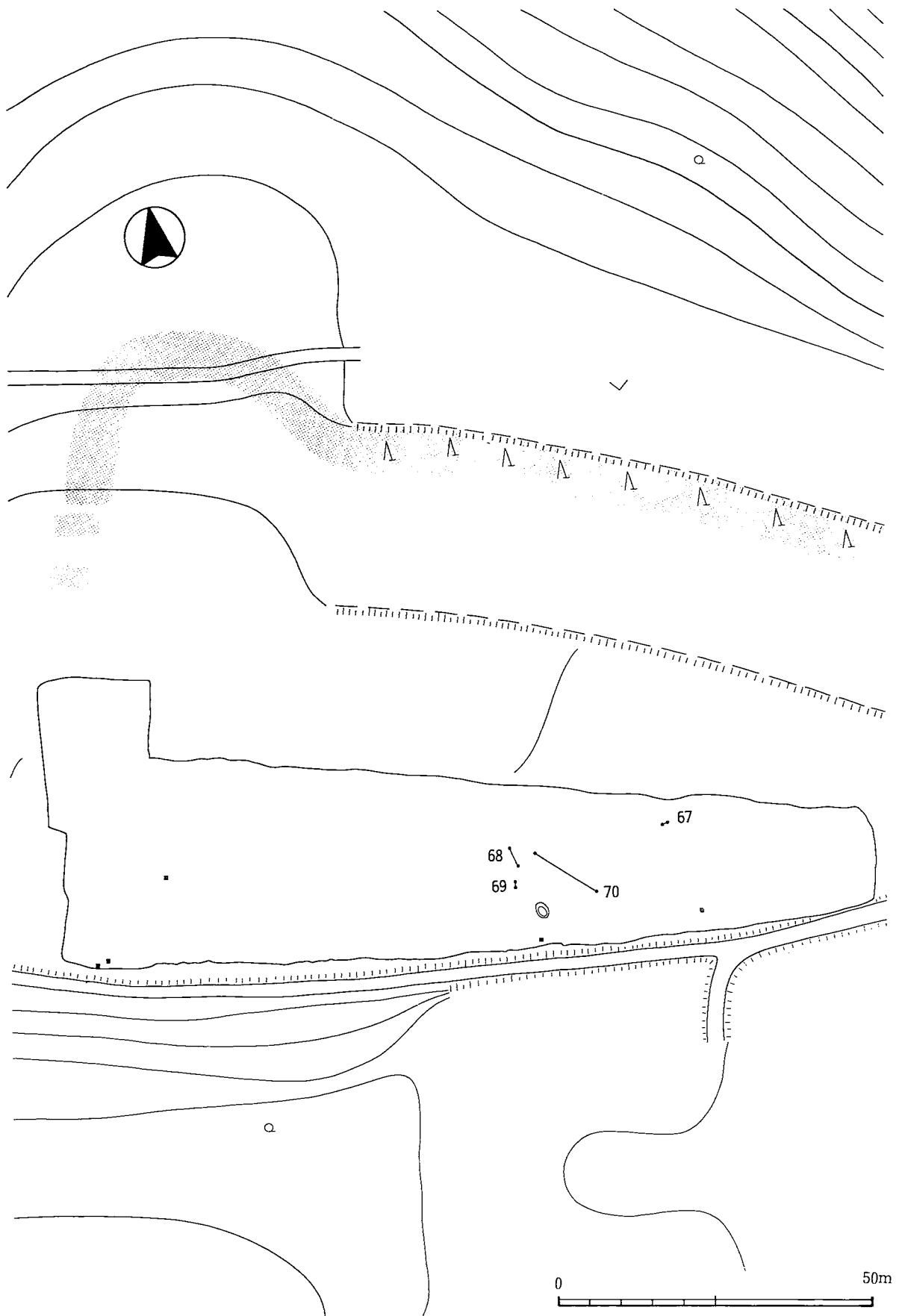
破片は2点である。その部位は、口縁部と胴部である。口縁部は、ほぼ直口する。



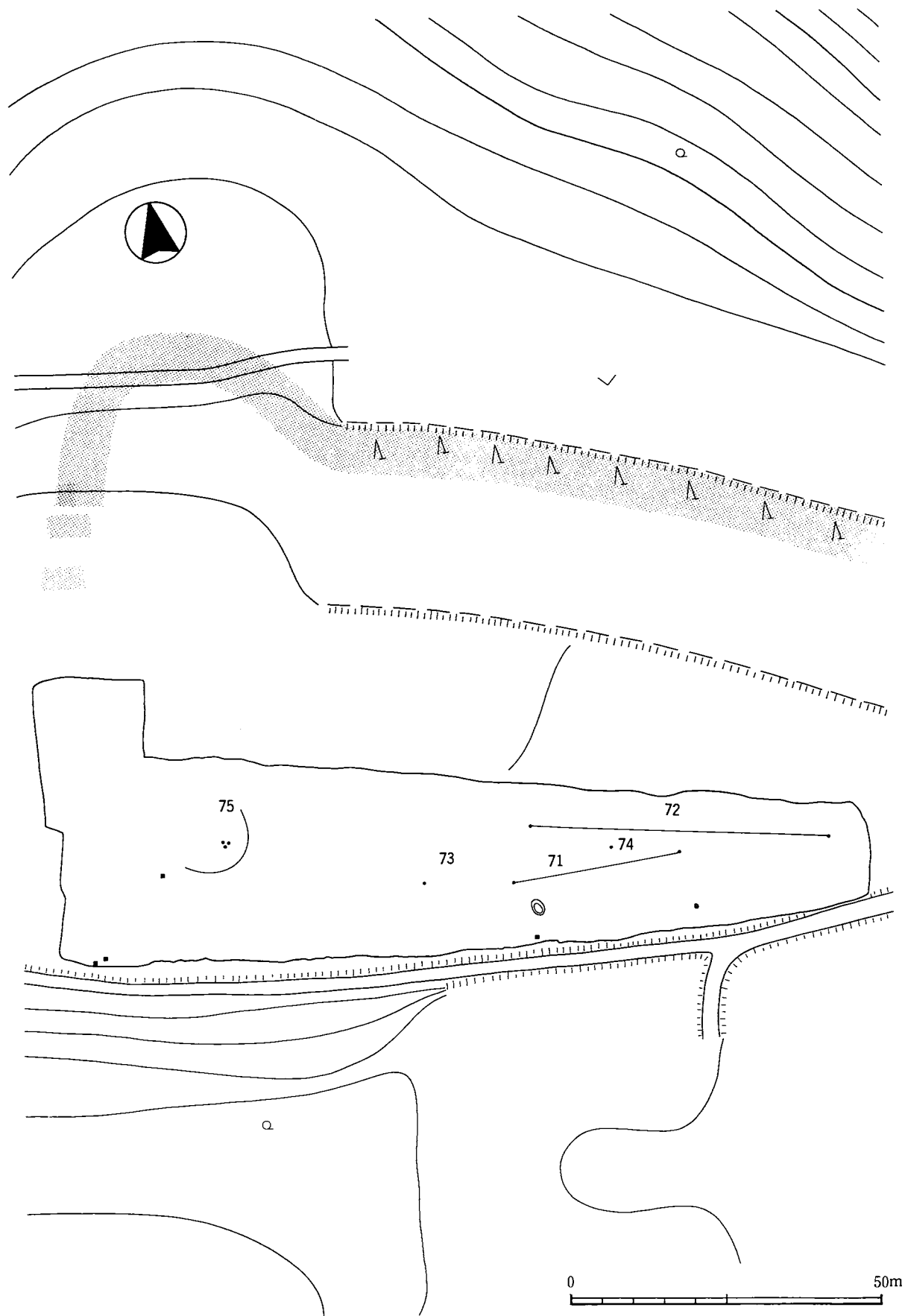
第71図 楢円文土器57~66



第72図 桐円文土器57~66実測図

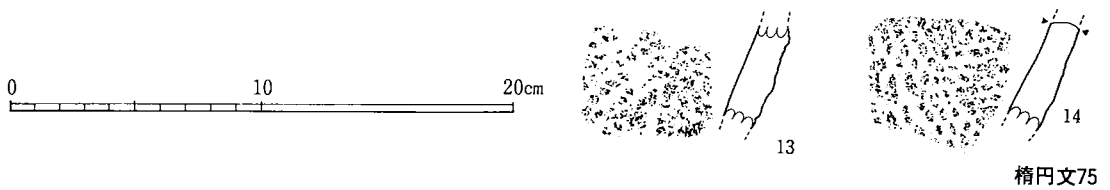
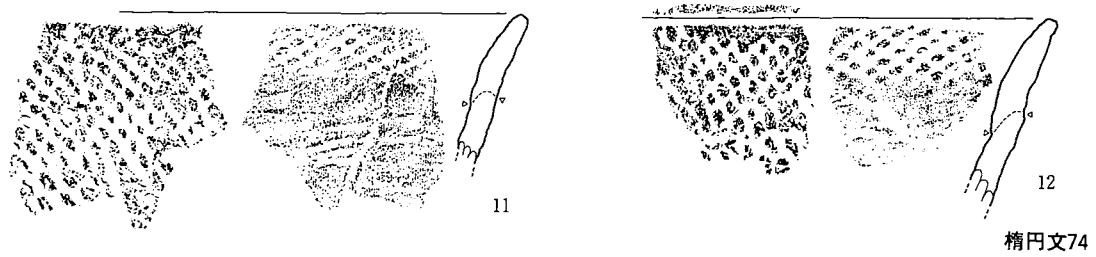
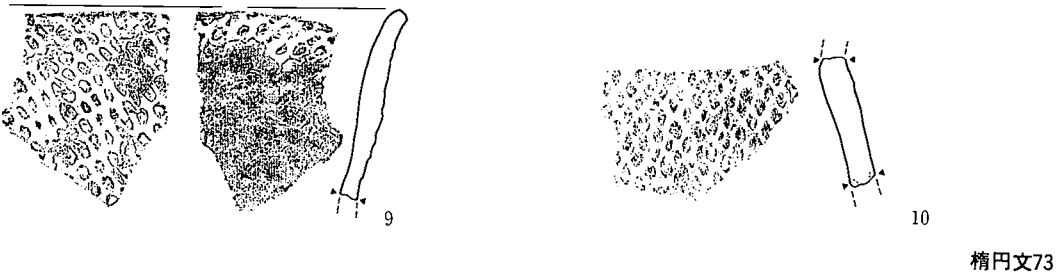
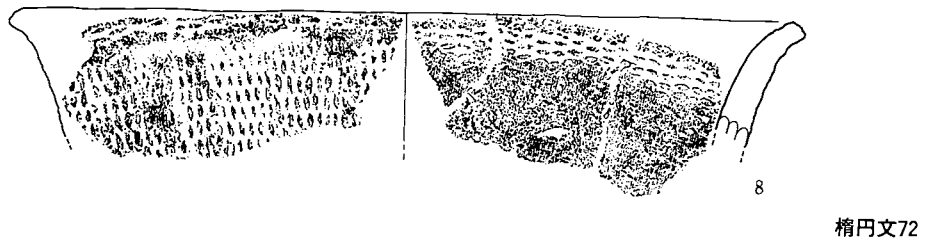
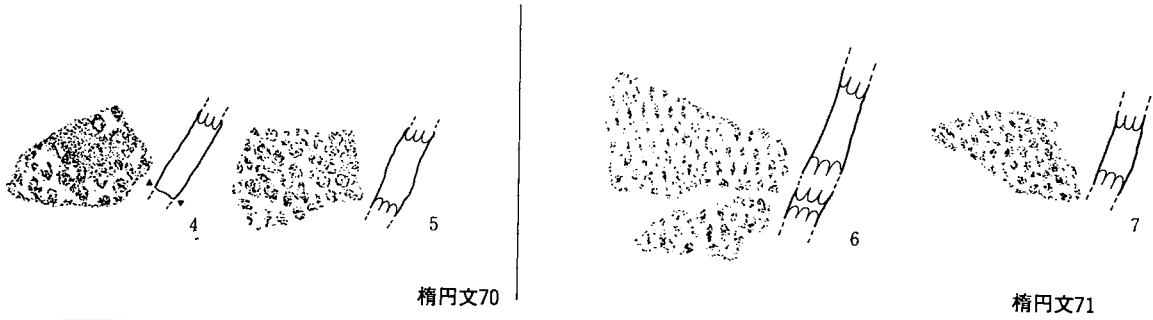
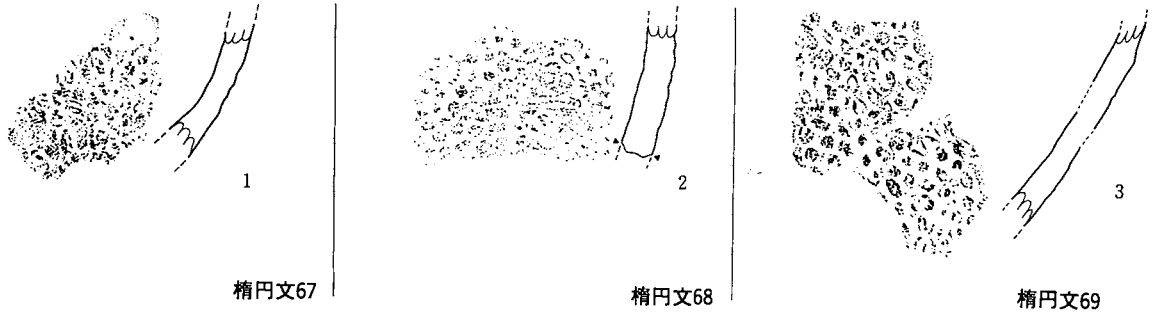


第73図 楢円文土器67~70分布図



第74図 楕円文土器71~75分布図





0 10 20cm

第75図 楕円文土器67~75実測図

分布は、調査区の中央部と東端にある。

文様は、口縁部の表面が斜位施文で、裏面が横位施文、胴部が縦位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す凸形と凹形剝離面の両者が、どの資料でも観察された。その幅は、それぞれ7.7cmと5.1cmである。

**楕円文土器74 (第74・75図11・12)**

破片は2点であり、接合した資料である。いずれも、口縁部である。

分布は、調査区の中央部のやや東側にある。

文様は、表面が縦位施文で、裏面が横位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す痕跡が観察された。その幅は、それぞれ3.3cmと3.8cmである。

**楕円文土器75 (第74・75図13・14)**

破片は2点であり、いずれも胴部である。

分布は、調査区の西側にあり、近接した状況であった。

文様は、縦位ないし横位施文である。

**楕円文土器76 (第76・77図1・2)**

破片は2点である。いずれも、口縁部である。

分布は、調査区の東側にある。

文様は、表面が縦位施文で、口唇部と裏面が横位施文である。

**楕円文土器77 (第76・77図3・4)**

破片は2点であり、いずれも胴部である。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、縦位と横位施文で、出土した個体はそれぞれ異なる文様帯であるようだ。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す痕跡として、凸形剝離面が観察される資料がある。

**楕円文土器78 (第76・77図5)**

破片は2点で、これらは接合資料にある。その部位は底部で、丸底を呈している。

分布は、調査区の中央部のやや東側にある。

文様は、全体にナテ整形がおこなわれており、一部に横位施文の楕円文が観察されるのみである。

土器は、輪積み手法で製作されているようで、そ

の乾燥の単位を示す痕跡である凸形剝離面が観察される。

**楕円文土器79 (第76・77図6)**

破片は3点であり、すべてが接合した資料である。その部位は、口縁部である。胴部は直線的で、口縁部に至って強く外反するという器形である。

分布は、調査区の東側にある。

文様は、表面が縦位施文で、口唇部と裏面が横位施文である。

**楕円文土器80 (第76・77図7・8)**

破片は2点ある。いずれも胴部で、底部に近いものも存在している。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、縦位と横位施文である。

**楕円文土器81 (第76・77図9・10)**

破片は2点である。いずれも胴部である。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、縦位施文である。

**楕円文土器82 (第76・77図11・12)**

破片は2点であり、いずれも胴部である。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、縦位と横位施文があり、出土した個体はそれぞれ異なる文様帯であるようだ。

土器は、輪積み手法で製作されているようで、一時的な乾燥の単位を示す痕跡として、凹型剝離面(11)と凸形剝離面(12)が観察される。

**楕円文土器83 (第76・77図13)**

破片は2点である。これらは接合関係にある。胴部である。

分布は、調査区の中央部である。

文様は、横位施文であるが、表面は強いナテ整形が認められる。

**楕円文土器84 (第76・77図14・15)**

破片は2点であり、いずれも胴部である。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、縦位と横位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その一時的な乾燥の単位を示す痕跡として、凸形剝離面と凹形剝離面が対となって残されている資料(幅4.1cm)がある。

楕円文土器85 (第76・77図16・17)

破片は、2点である。いずれも、胴部である。

分布は、調査区の中央部である。

文様は、横位施文と斜位施文である。

楕円文土器86 (第76・77図18・19)

破片は、2点である。いずれも、胴部である。

分布は、調査区の中央部である。

文様は、縦位施文である。

楕円文土器87 (第76・77図20・21)

破片は2点で、いずれも、胴部の破片である。

分布は、調査区の中央部のやや東側にある。

文様は、縦位施文である。

楕円文土器88 (第78・79図1・2)

破片は2点である。いずれも胴部下部の資料である。

分布は、調査区中央部の中やや東側にある。

文様は、縦位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されているのだろう。

2点ともに一時的な乾燥の単位を示す痕跡としての凹型剝離面が観察される。

楕円文土器89 (第78・79図3・4)

破片は、2点である。いずれも胴部の破片であった。

分布は、調査区の東側にある。

文様は、横位施文と斜位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。一時的な乾燥の単位を示す痕跡としての凸形剝離面が観察されるもの(3)と凹型剝離面が観察されるもの(4)がある。

楕円文土器90 (第78・79図5・6)

破片は、2点であった。いずれも胴部の破片である。

分布は、調査区中央の中やや西側にある。

文様は、縦位施文である。

楕円文土器91 (第78・79図7・8)

認識できた破片は、2点であった。いずれも胴部の破片である。

分布は、調査区西側にある。

文様は、横位施文と縦位施文である。

楕円文土器92 (第78・79図9・10)

破片は2点で、いずれも胴部の破片である。

分布は、調査区の東側、その北端にある。

文様は、横位施文と縦位施文である。また、施文

原体を異にする楕円文が同一の器面に観察されるものもある(10)。

楕円文土器93 (第78・79図11・12)

破片は、2点であった。いずれも胴部の破片である。

分布は、調査区中央部にあり、そのやや西側にある。

文様は、縦位と斜位施文がある。

土器は、輪積み手法で製作されている。いずれの資料にも、一時的な乾燥の単位を示す痕跡としての凸形剝離面と凹形剝離面が対となって残されている。その幅は、3.0cmと4.9cmである。

楕円文土器94 (第78・79図13・14)

破片は、2点である。いずれも、胴部下半部の資料である。

分布は、調査区の中央部、その東側にある。

文様は、斜位施文である。

楕円文土器95 (第78・79図15・16)

破片は、2点である。いずれも、胴部の破片である。

分布は、調査区の西端近くにある。

文様は、横位施文と縦位と横位が交錯したものがある。

楕円文土器96 (第78・79図17・18)

破片は2点で、いずれも、胴部の破片である。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、横位施文である。

楕円文土器97 (第78・79図19・20)

破片は、2点である。それぞれ口縁部と胴部の破片である。

分布は、調査区の西側にある。

口縁部の文様は、表面と口唇部と裏面にあり、表面は縦位施文、口唇部と裏面は横位施文である。胴部破片には、横位の楕円文が観察される。この結果、この土器の表面には二つ以上の文様帯が存在することが判る。

楕円文土器98 (第78・79図21・22)

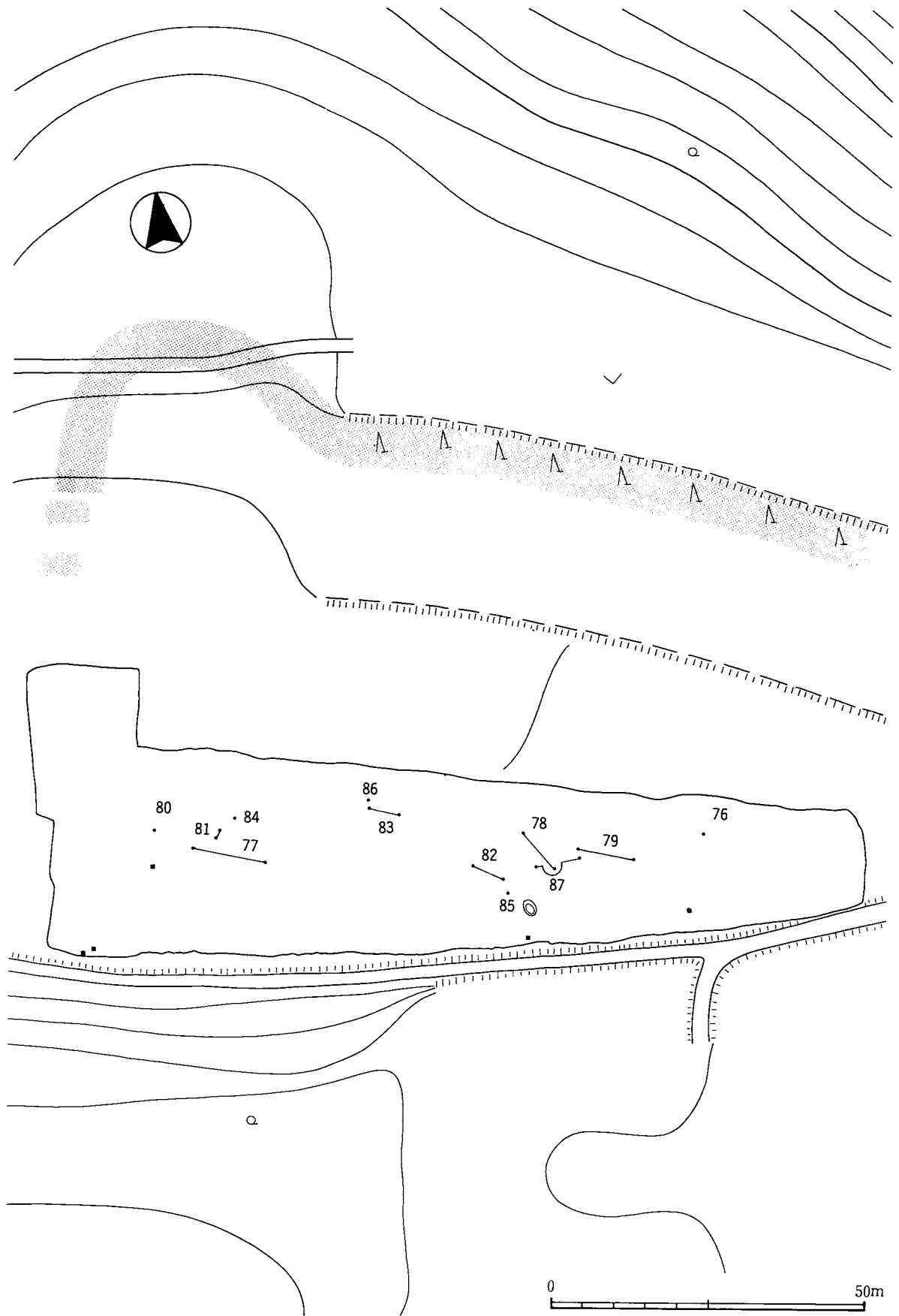
破片は、2点である。いずれも、胴部である。

分布は、調査区の中央部にあり、しかもその東側に位置している。

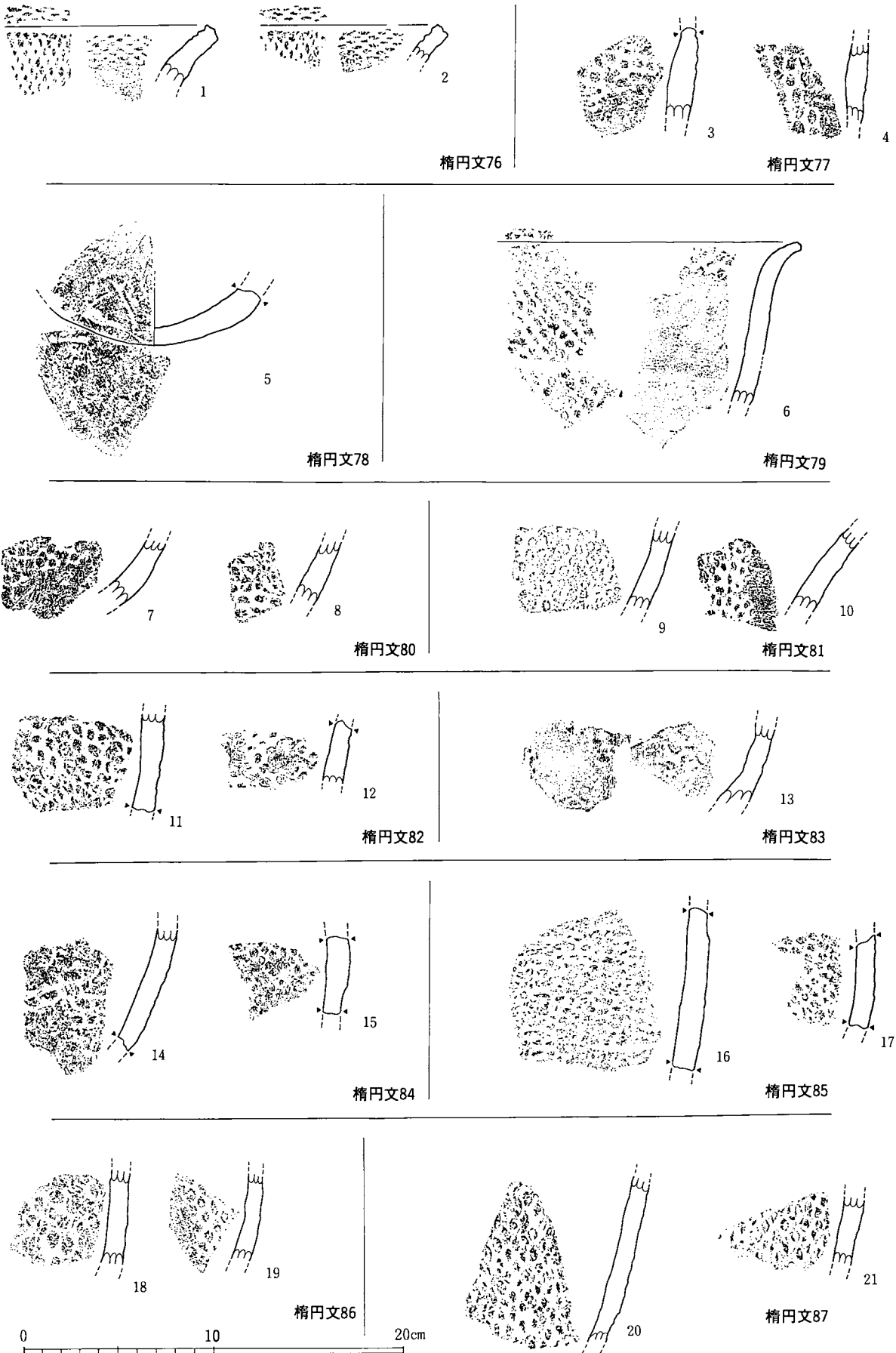
文様は、横位施文と縦位施文である。

楕円文土器99 (第78・79図23・24)

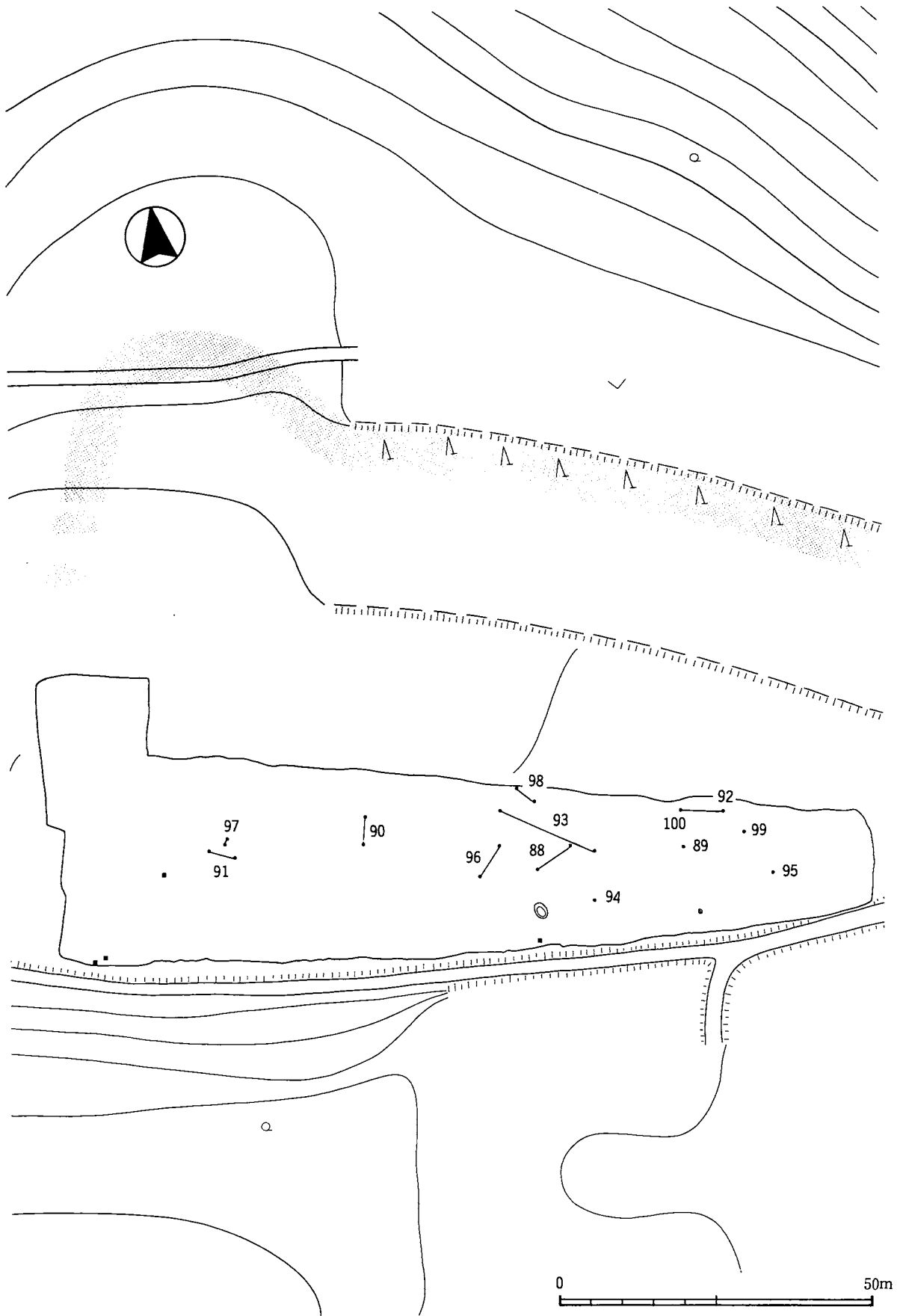
破片は、2点である。胴部である。



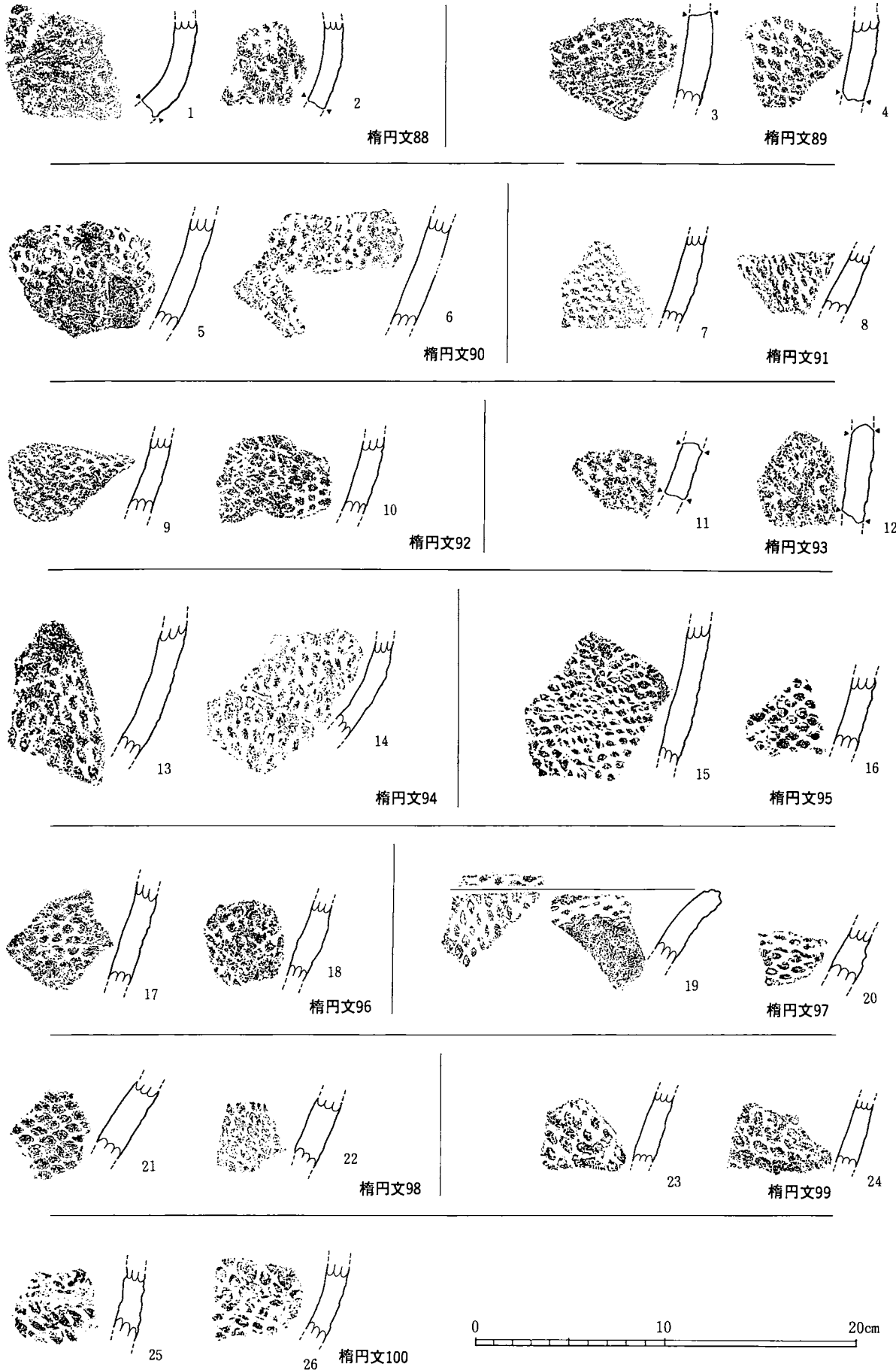
第76図 楕円文土器76~87分布図



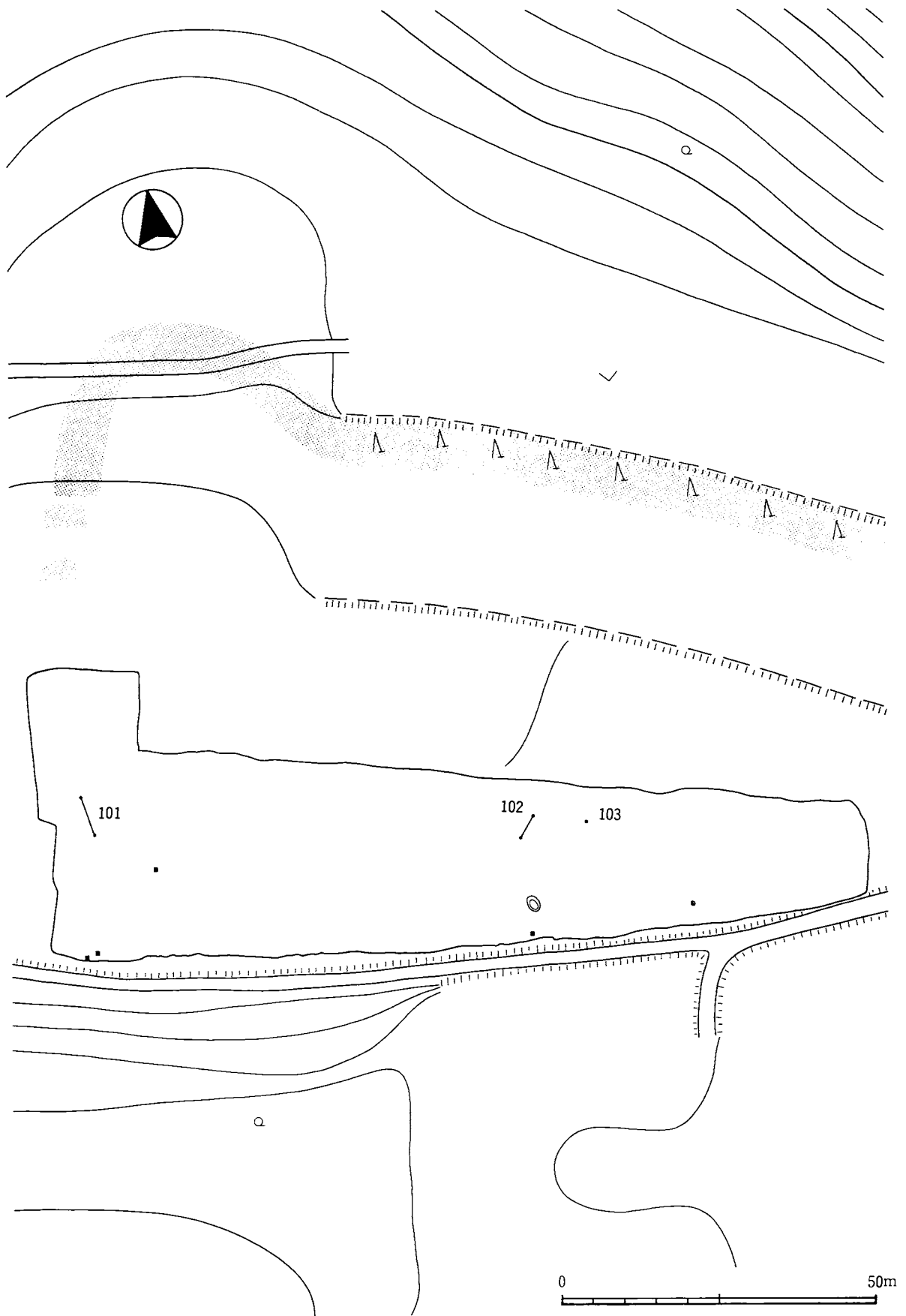
第77図 楢円文土器76~87実測図



第78図 楕円文土器88~100分布図



第79図 楕円文土器88~100実測図



第80図 楕円文土器101~103分布図



分布は、調査区の西端近くにある。

文様は、斜位施文である。

**楕円文土器100 (第78・79図25・26)**

破片には2点があった。どれも、胴部の破片である。

分布は、調査区の東側その北端にある。

文様は、縦位施文と斜位施文である。

**楕円文土器101 (第80・81図1)**

破片は2点で、この二つが接合している。胴部の破片である。

分布は、調査区の西端にある。

文様は、横位施文が観察される。

**楕円文土器102 (第80・81図2・3)**

破片は2点で、どれも、胴部の破片である。

分布は、調査区の中央部、その東側にある。

文様は、縦位施文と斜位施文である。

土器は、輪積み手法で製作されている。一時的な乾燥の単位を示す痕跡としての凸形剥離面と凹形剥離面が対となって残されている資料が1点ある(2)。その幅は、5.6cmである。

**楕円文土器103 (第80・81図4・5)**

破片は、2点である。いずれも、胴部である。

分布は、調査区の東側にある。

文様は、4の破片の上部に横位施文、下部に縦位施文で、5では横位施文である。これにより、この土器の表面には、二つ以上の文様帯が存在している

ことが判る。

**その他の破片 (第82図～第106図)**

個体識別によって103の個体別資料を認識することができた。ただし、その数は、出土点数からすれば、ほんの一部にすぎず、ほとんどはその識別ができない資料である。ここでは、こうした資料をできる限り提示することを眼目に置いた。

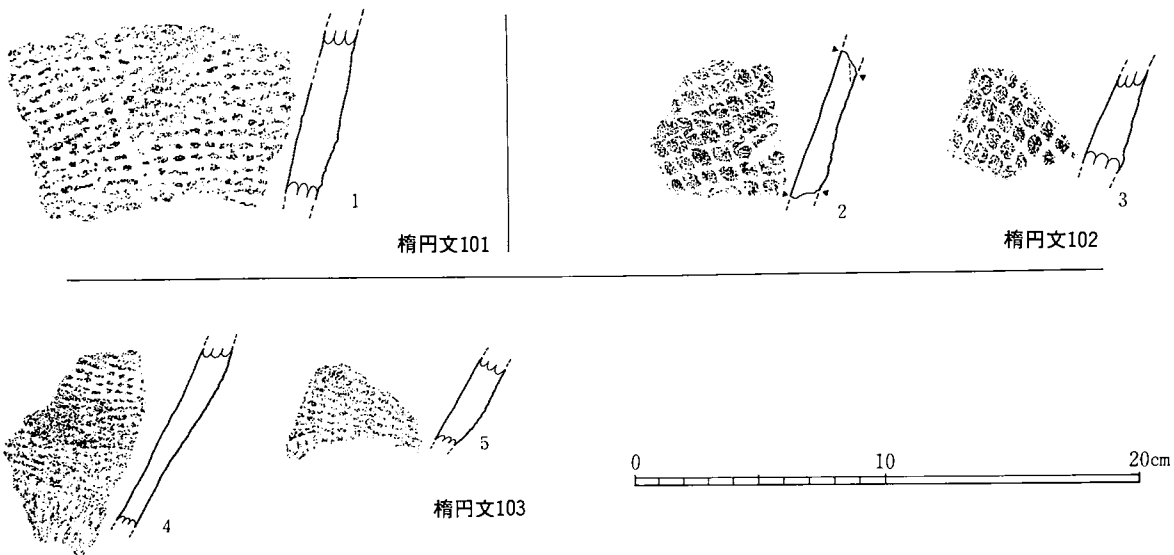
第82図から第87図13までは、口縁部ないしその周辺の部位の破片である。こうした資料の特徴を型式的な視点でもって抽出しようとするれば、以下の視点であろう。

①表面が縦位ないし斜位施文であるのか、横位施文であるのか。

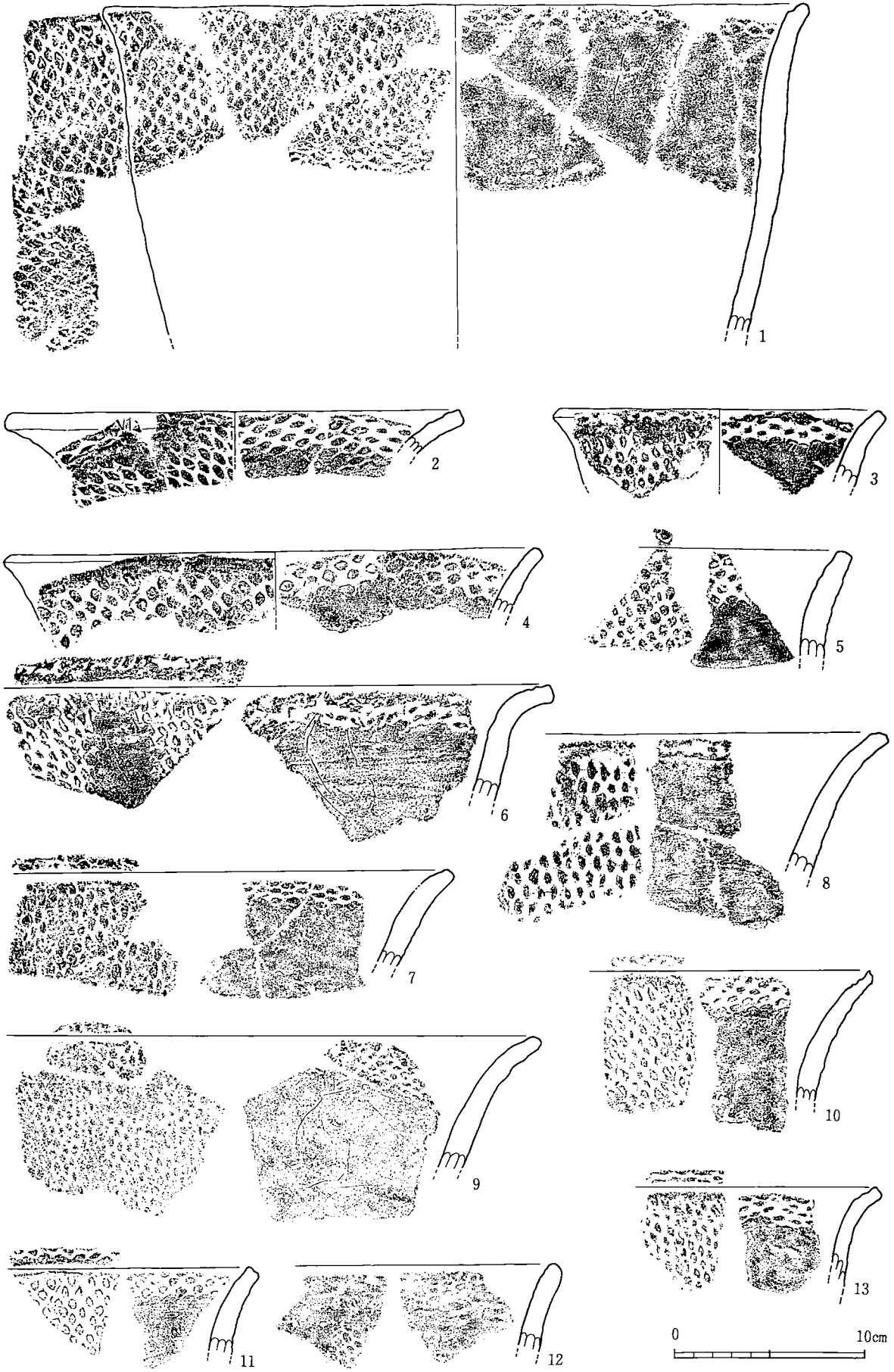
②裏面の文様が、楕円文であるのか、原体条痕であるのか、無文であるのか。

また、こうした特徴をさらに細かく観察することによって、さらに型式的な特徴を深く検討することが可能であろう。

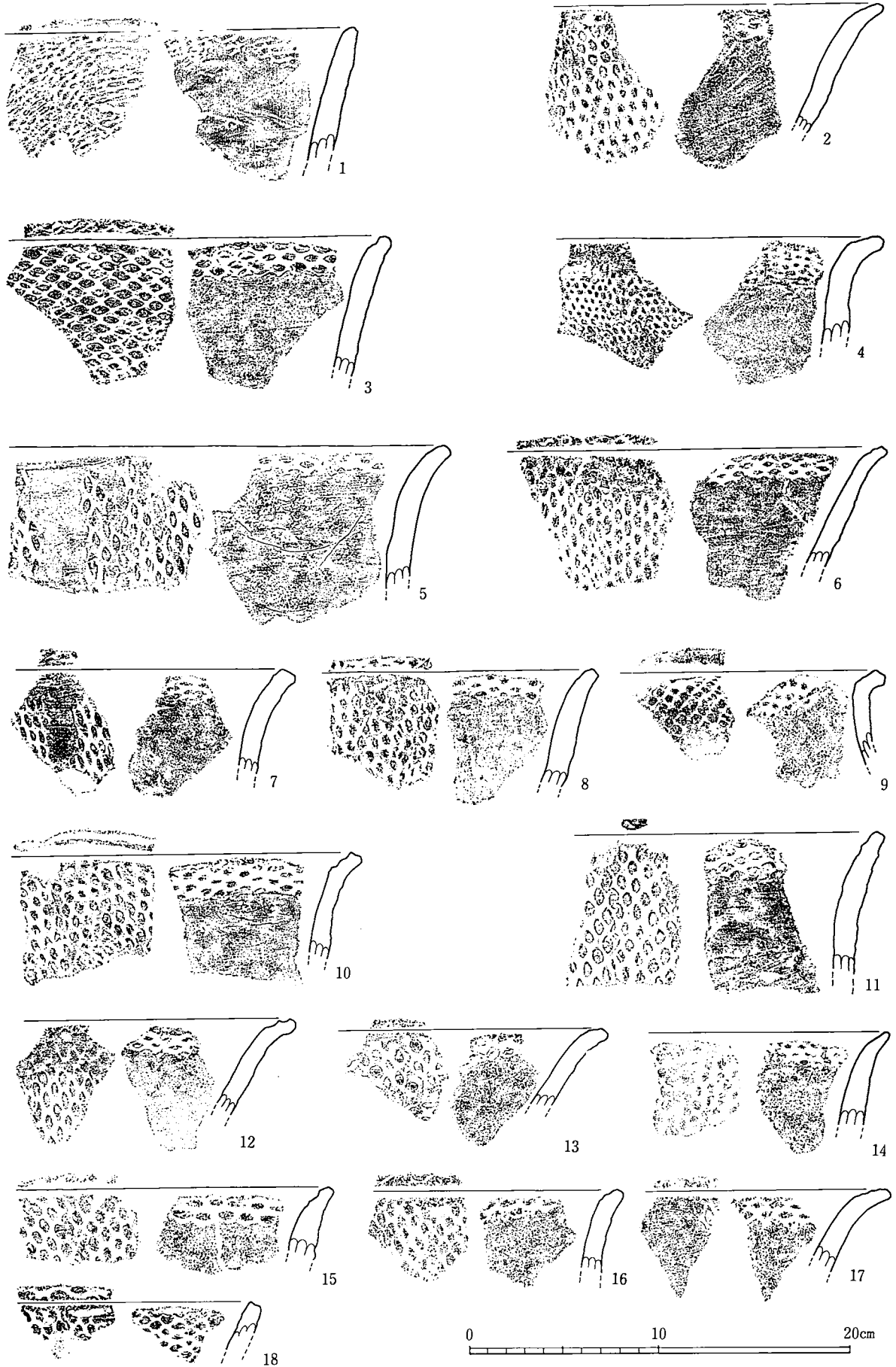
なお、出土した資料の中でも比較的大きく、その全体の器形が判断できる資料があった。これもあくまでも、複数の出土地点を持っているものを個体別資料として扱ったことによるもので、こうしたものも一つの個体として取り扱う必要があるかもしれない。例えば、第82図1や第86図22はそれである。特に、第82図1の資料は、その器形をある程度復元で



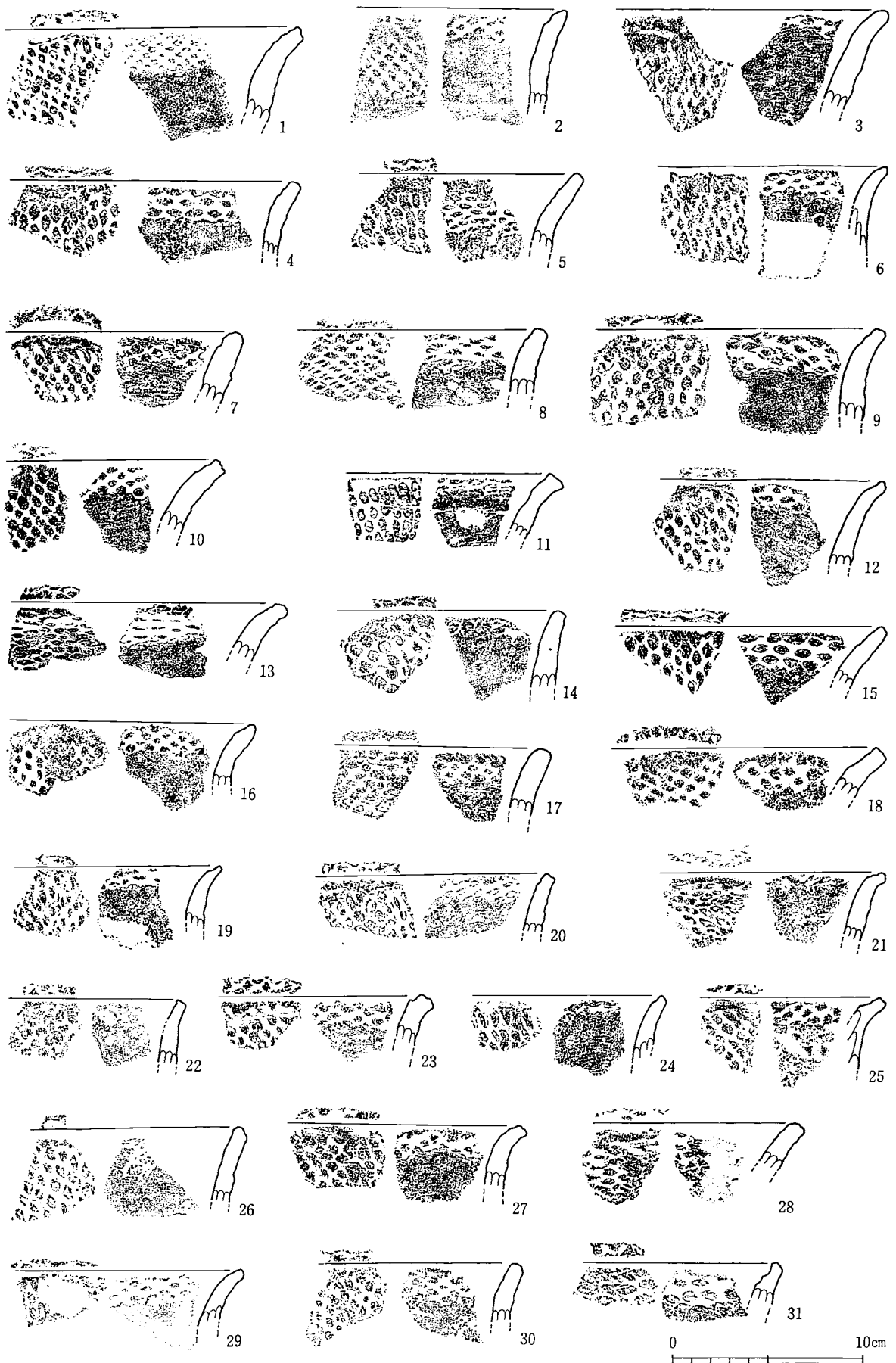
第81図 楕円文土器101～103実測図



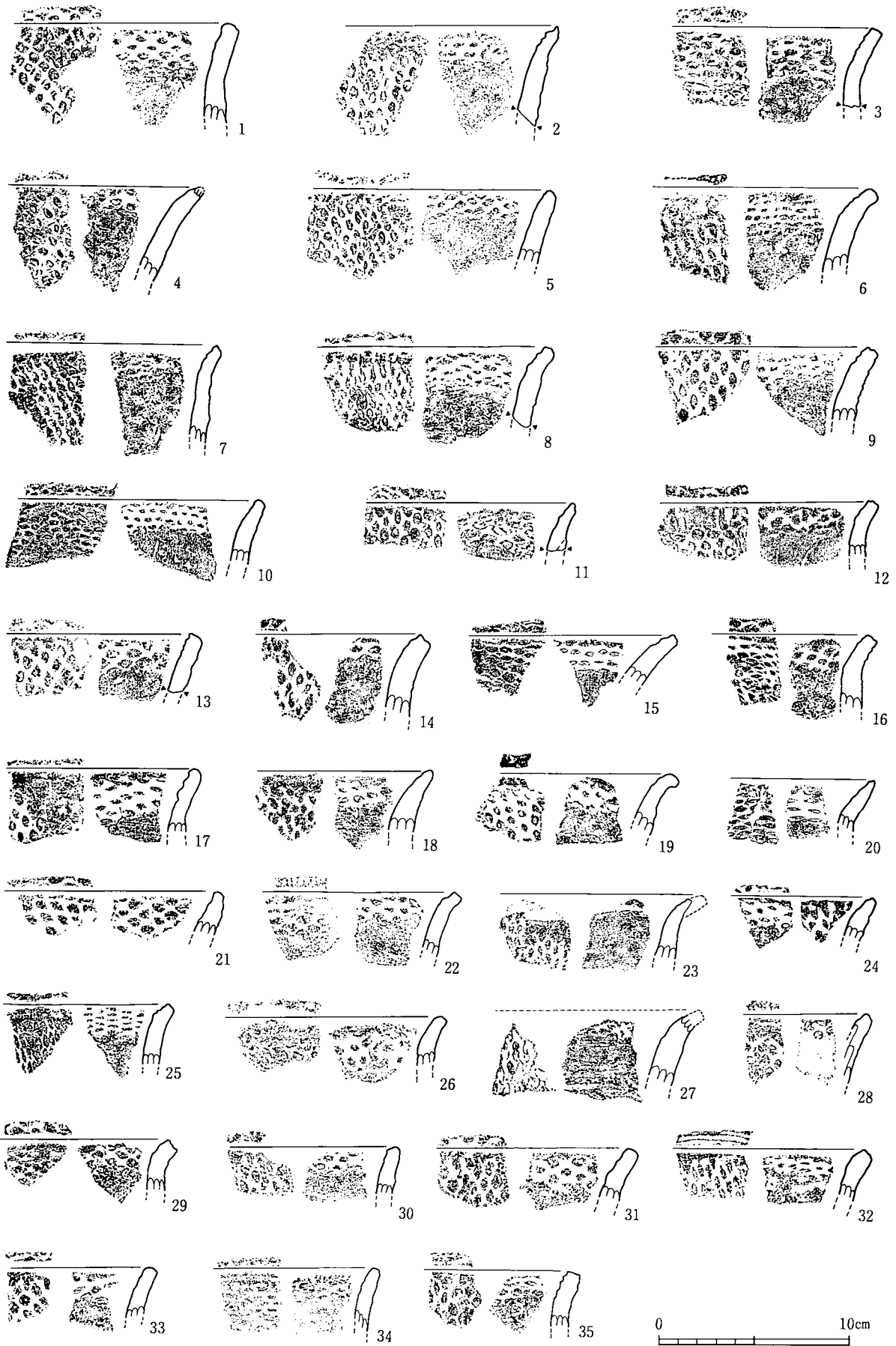
第82図 楕円文土器その他実測図



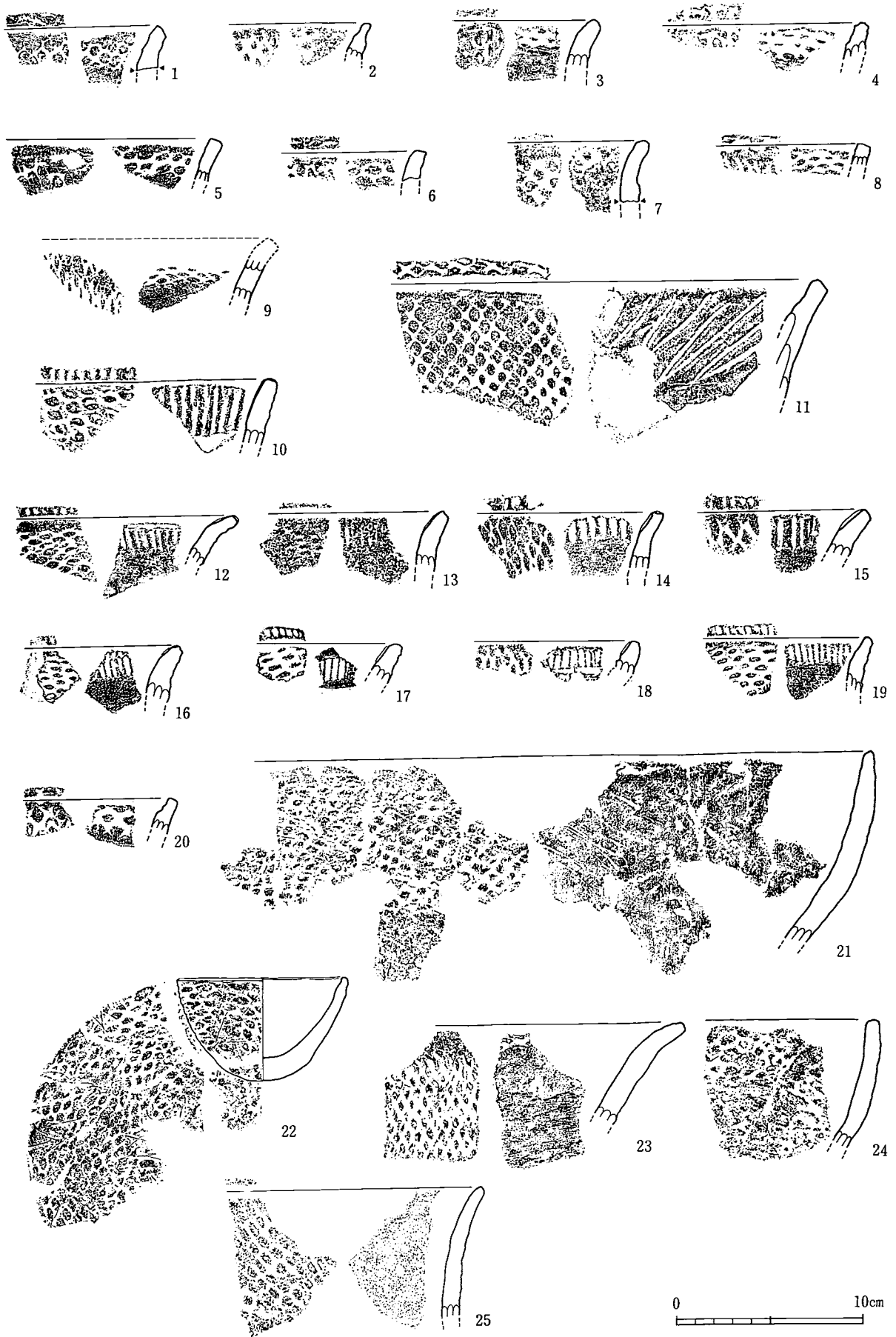
第83図 楕円文土器その他実測図



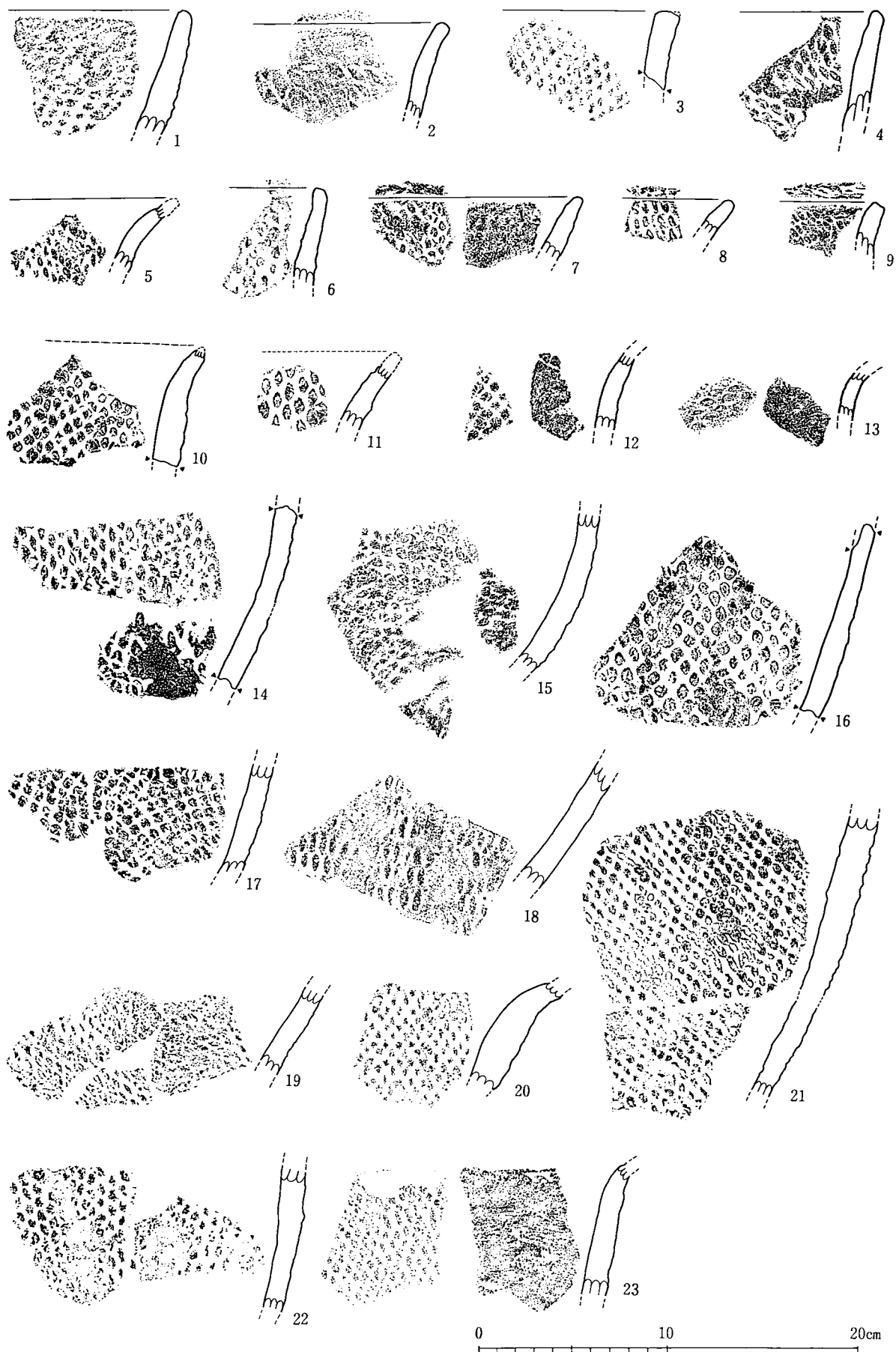
第84図 楕円文土器その他実測図



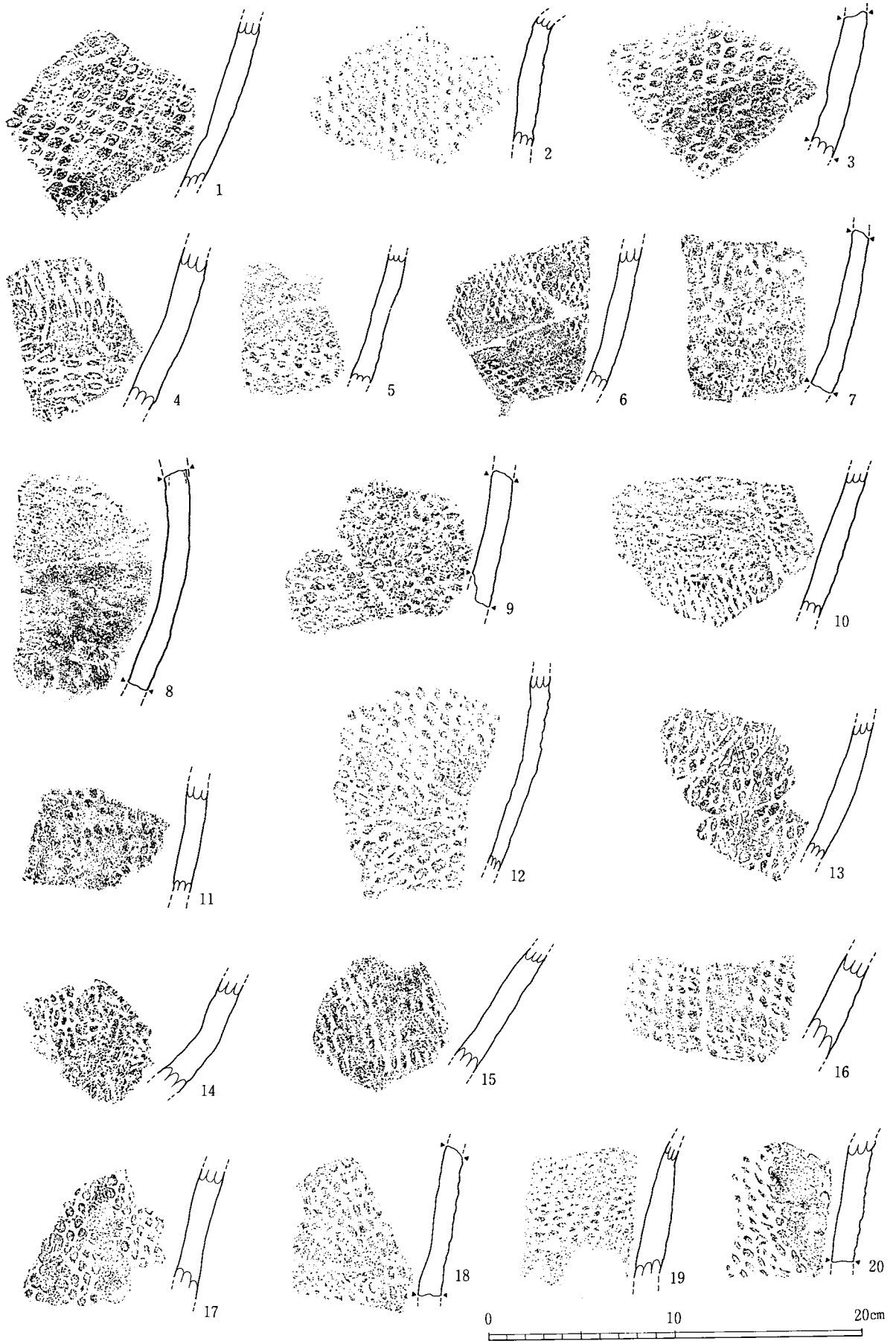
第85図 楕円文土器その他実測図



第86図 精円文土器その他実測図

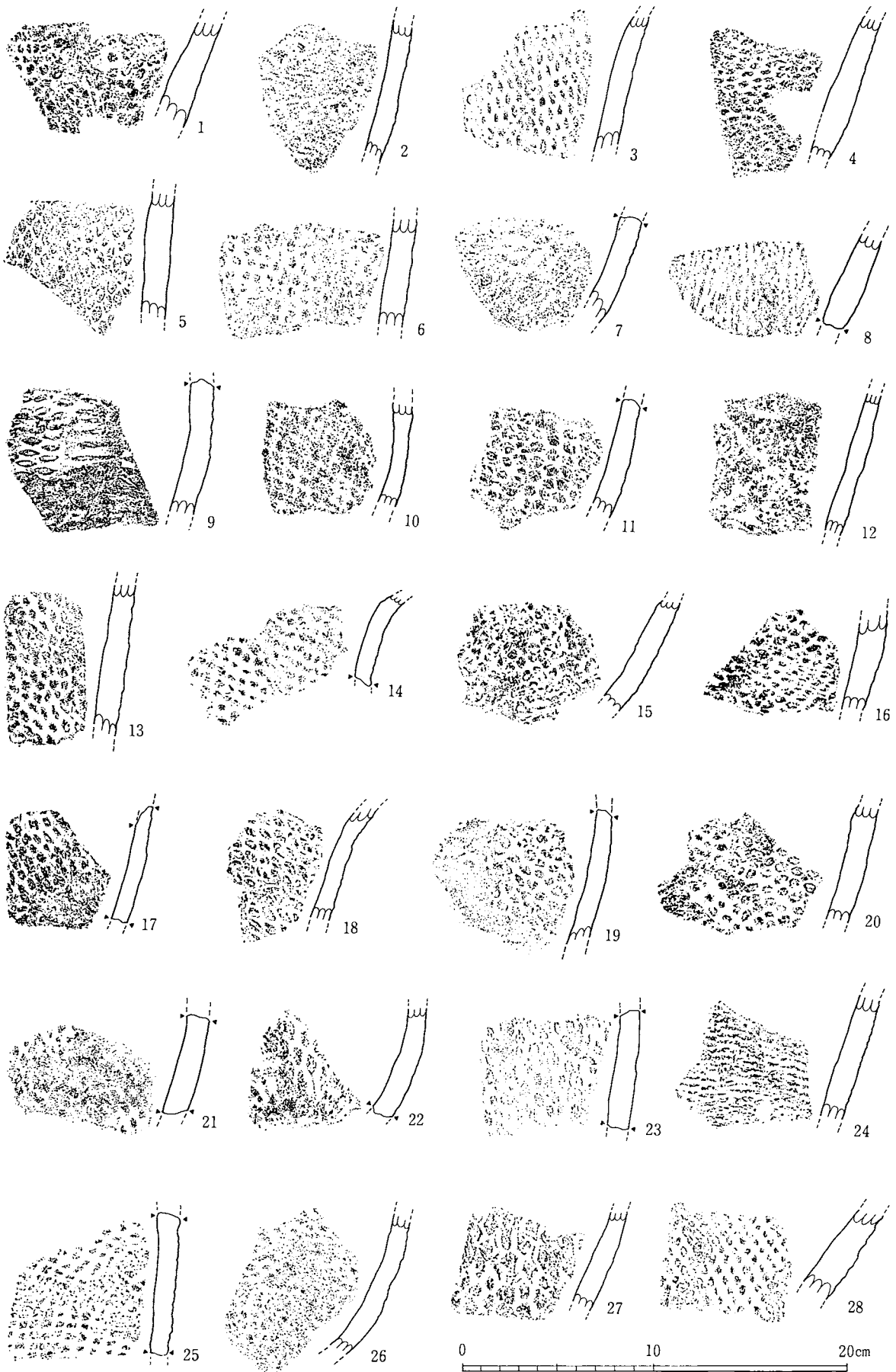


第87図 楕円文土器その他実測図

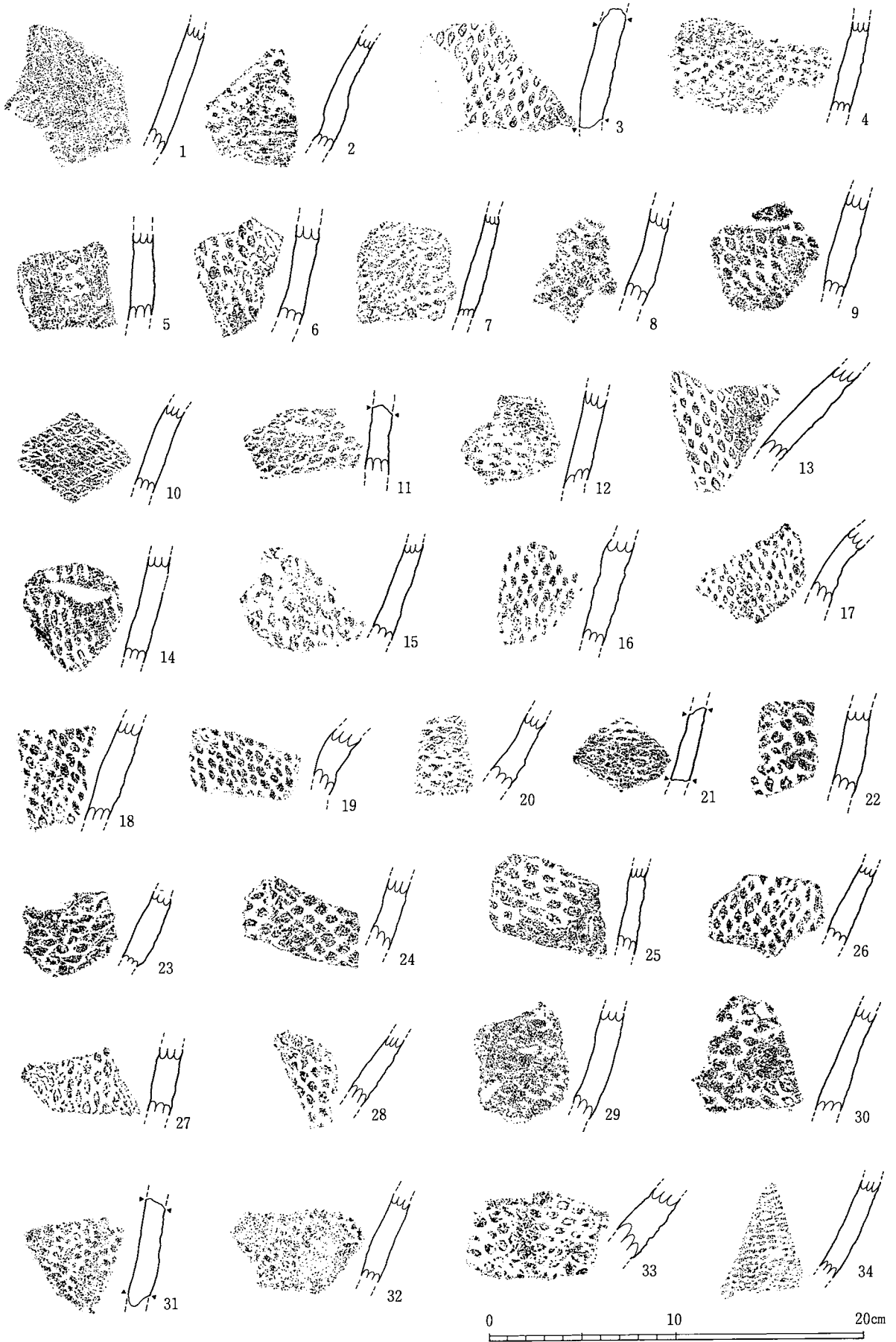


第88図 楕円文土器その他実測図

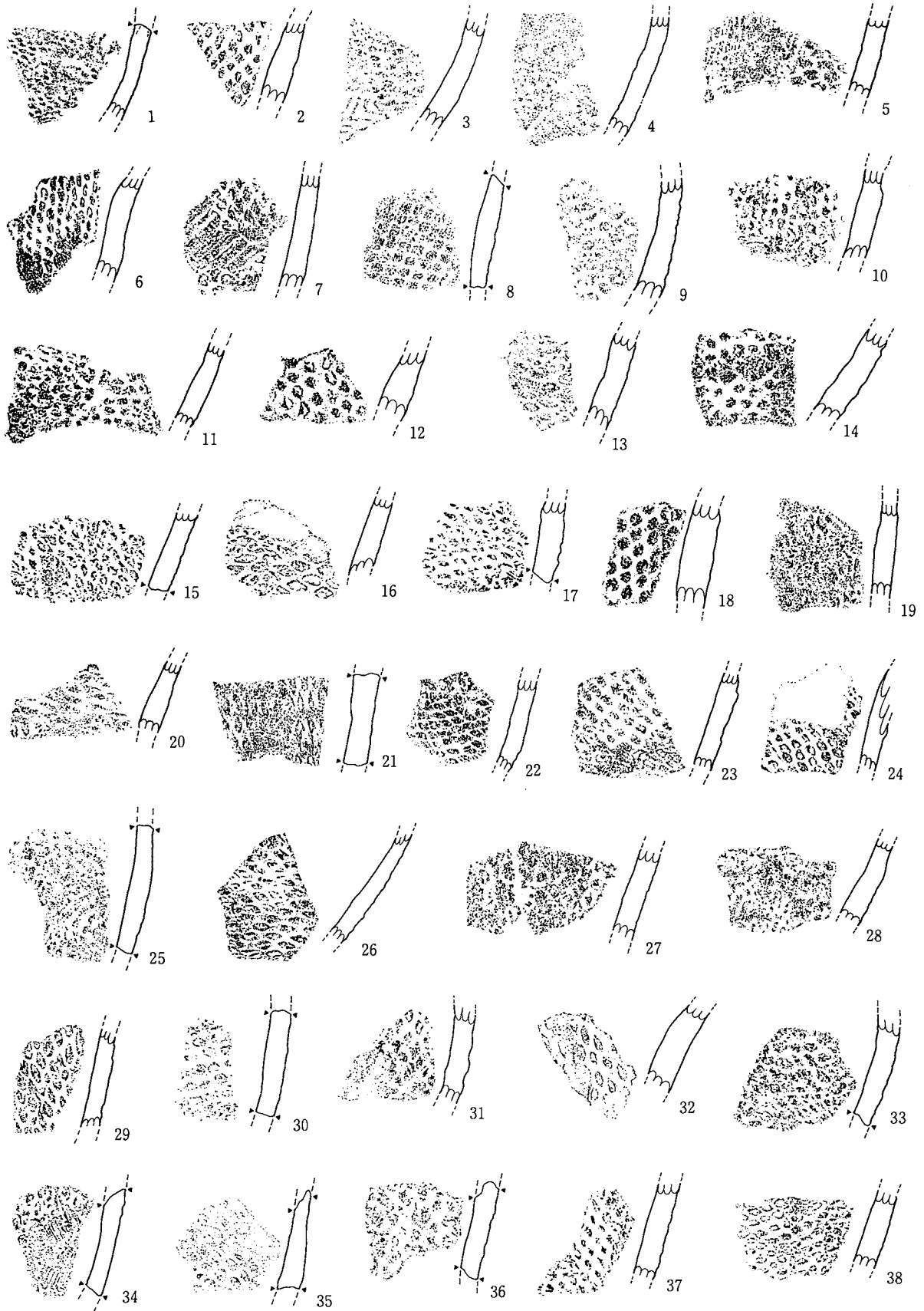




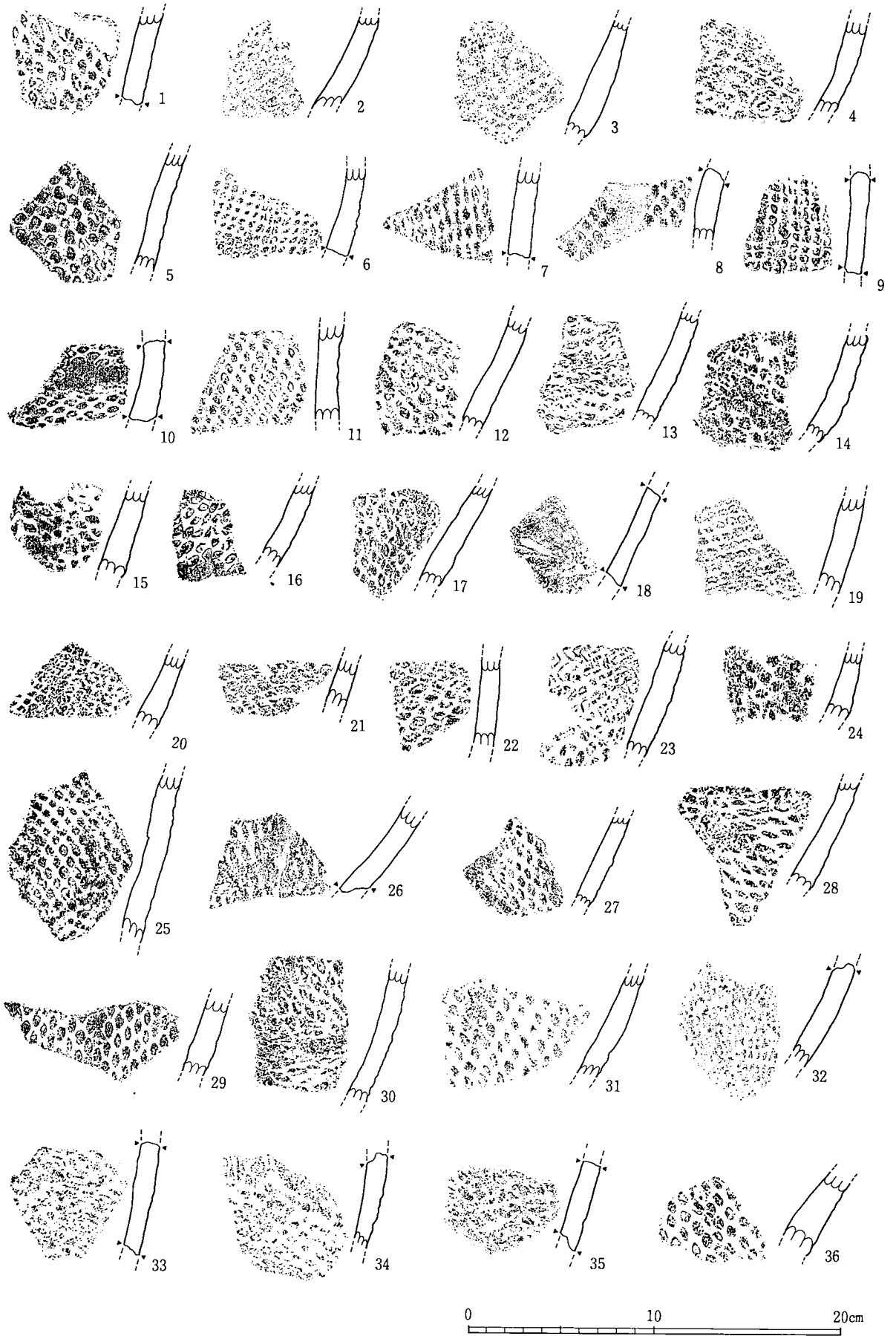
第89図 楕円文土器その他実測図



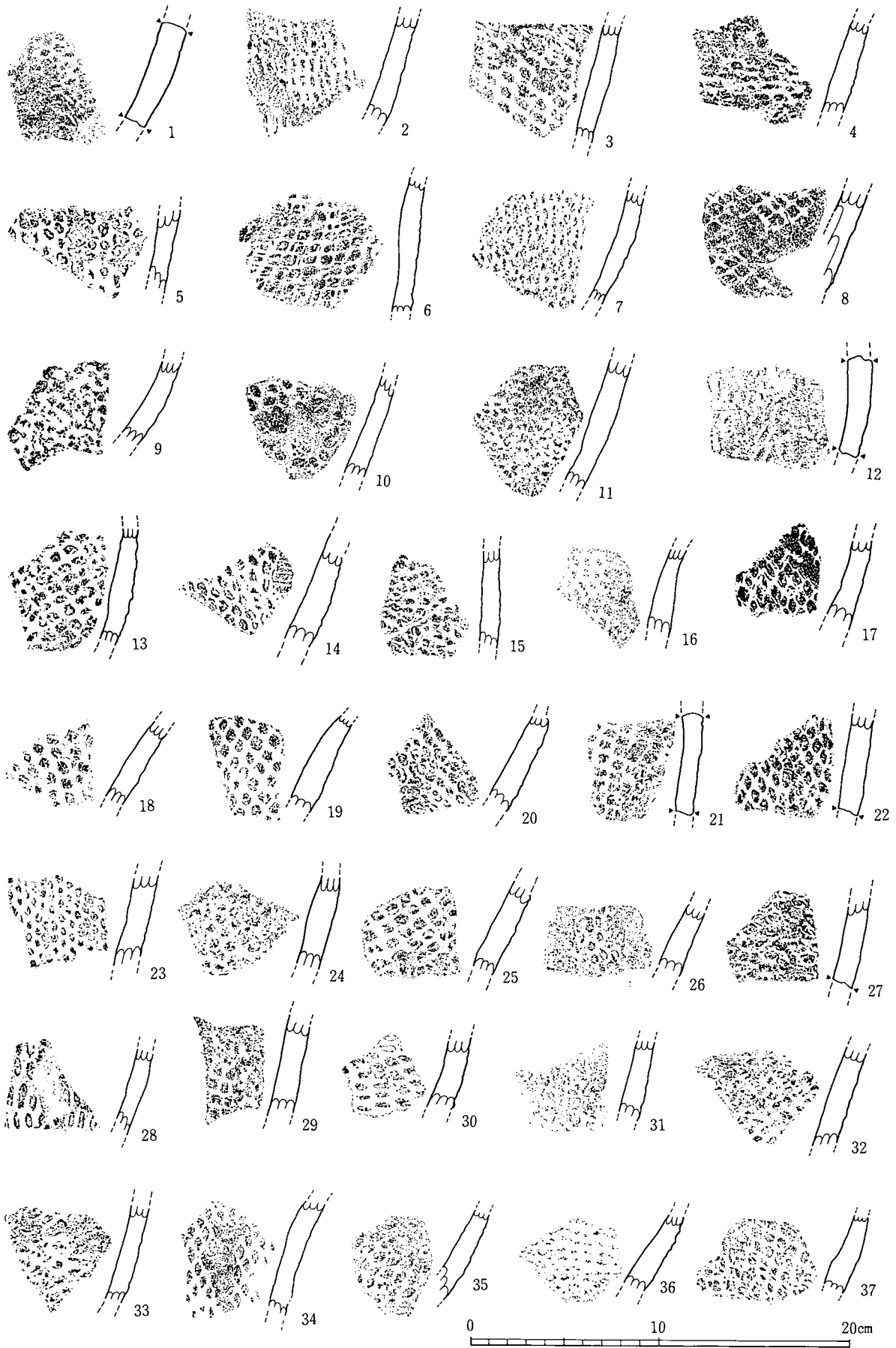
第90図 楕円文土器その他実測図



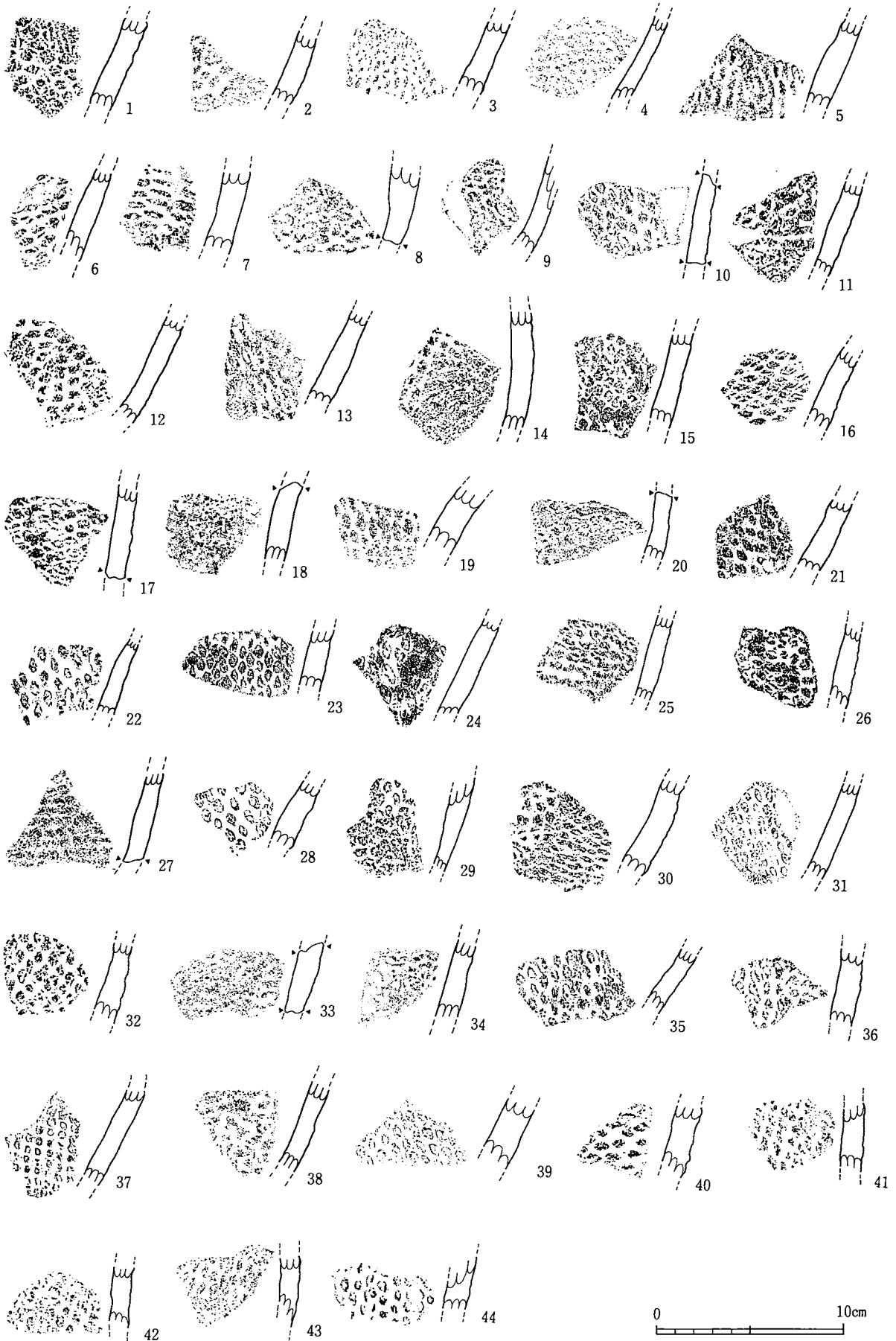
第91図 楕円文土器その他実測図



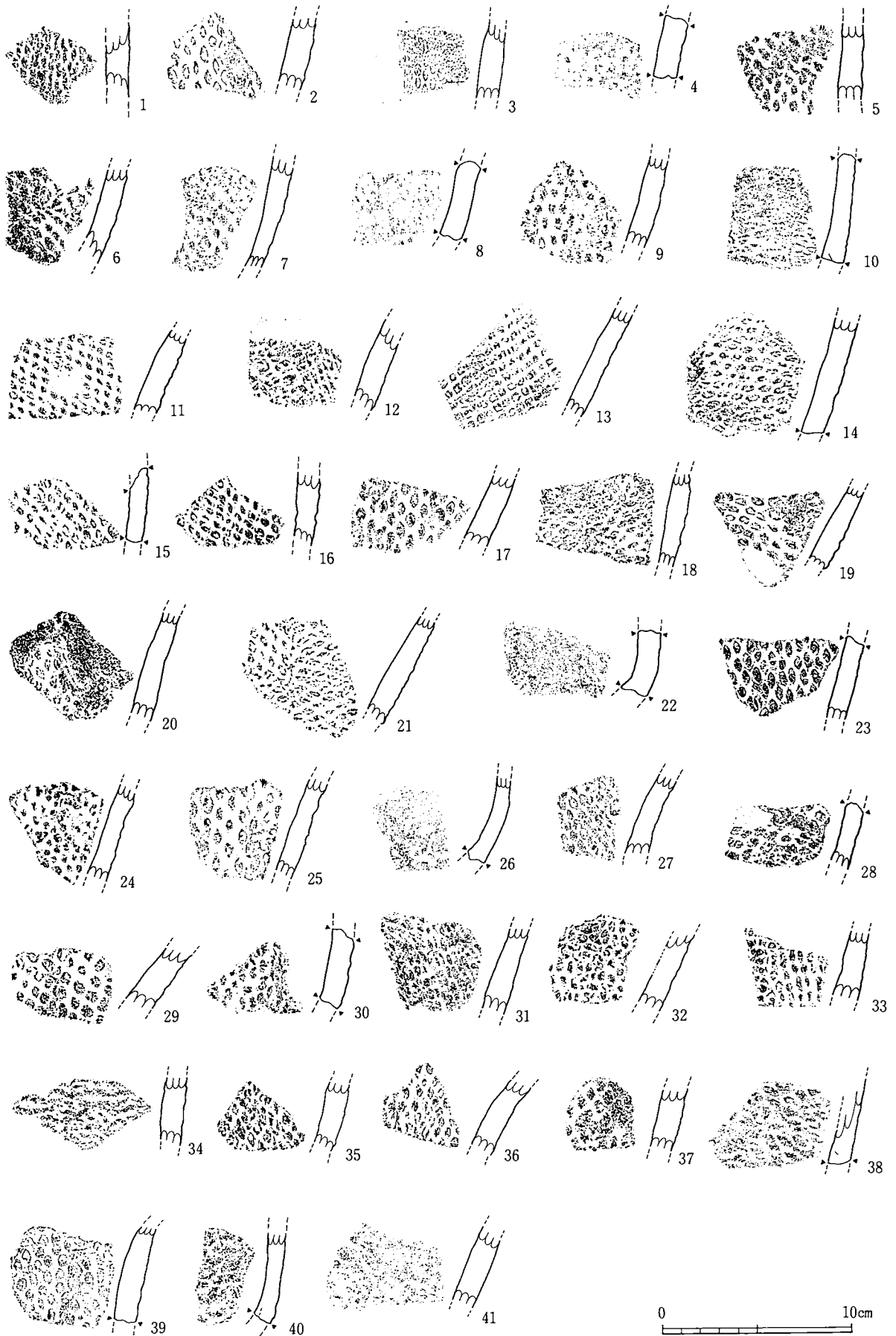
第92図 楕円文土器その他実測図



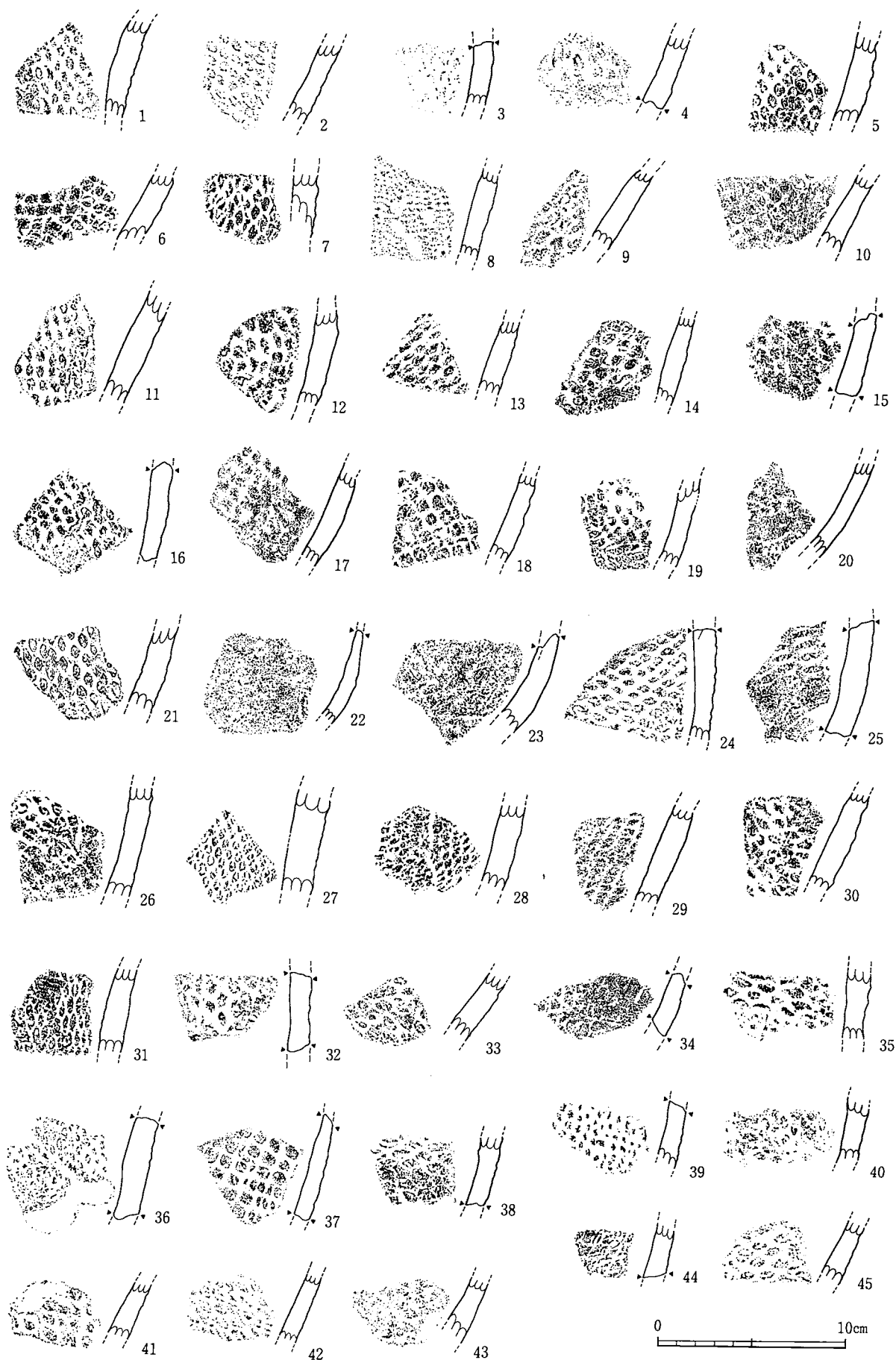
第93図 楕円文土器その他実測図



第94図 楕円文土器その他実測図

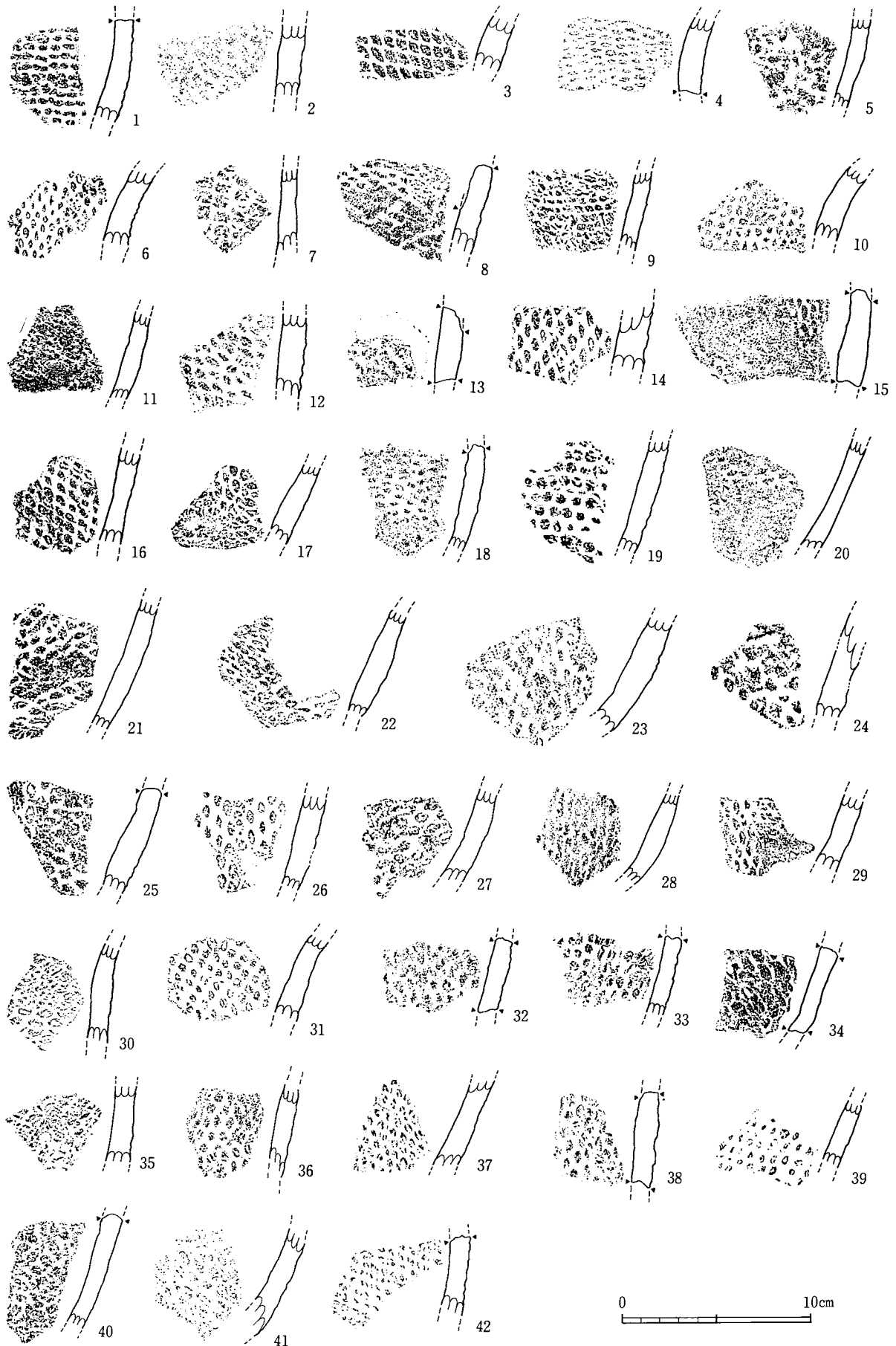


第95図 楕円文土器その他実測図

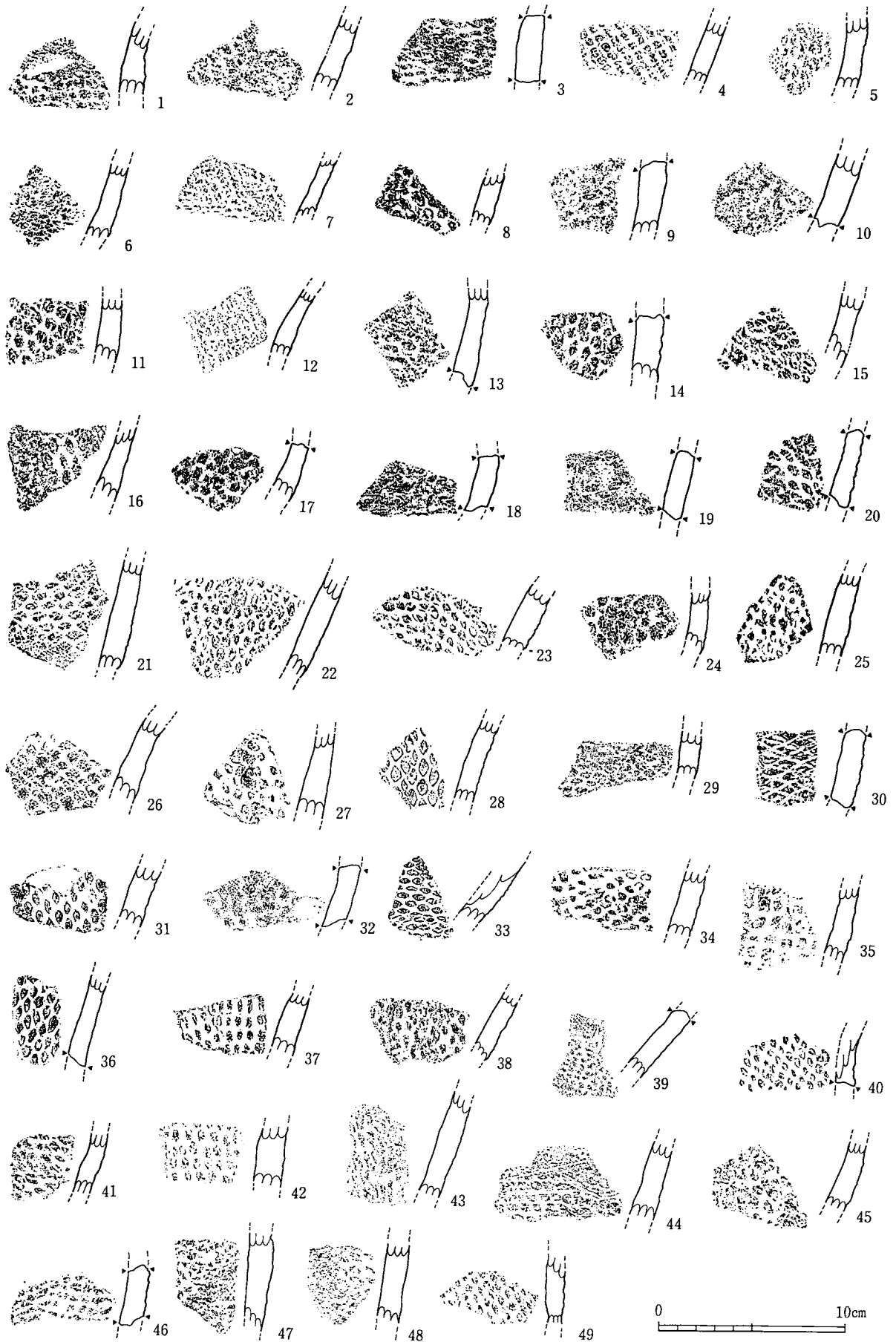


第96図 楕円文土器その他実測図

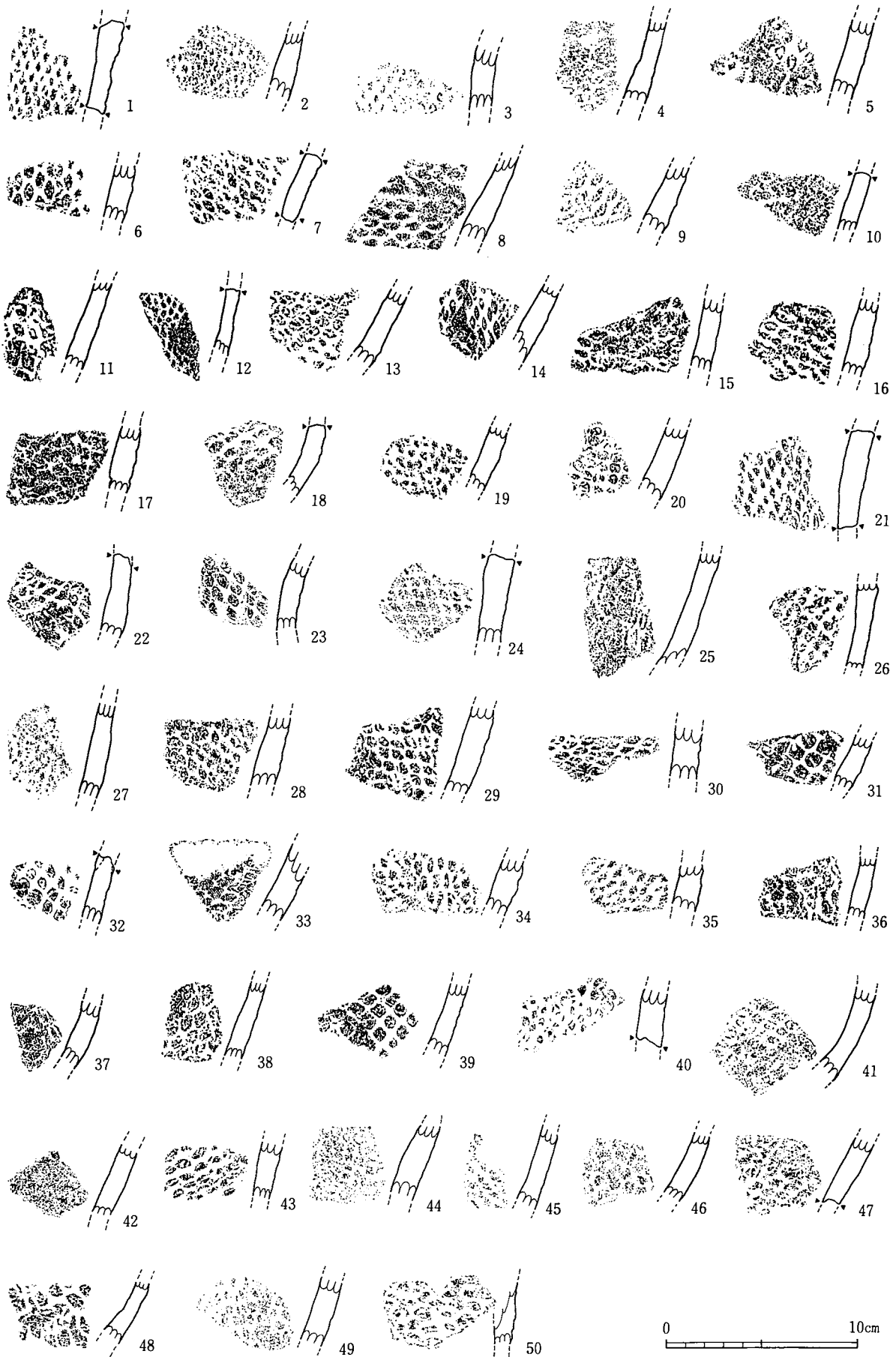




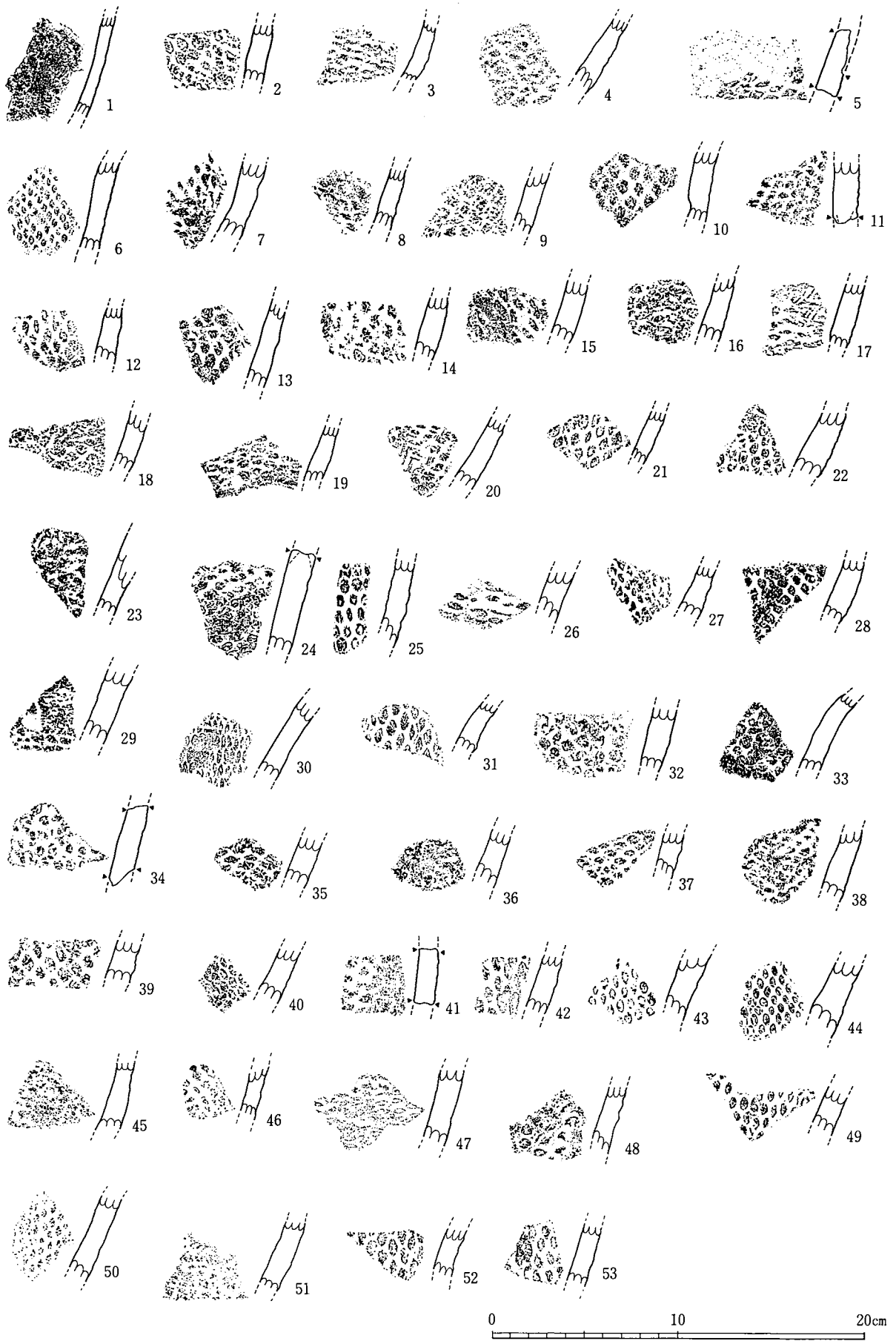
第97図 楕円文土器その他実測図



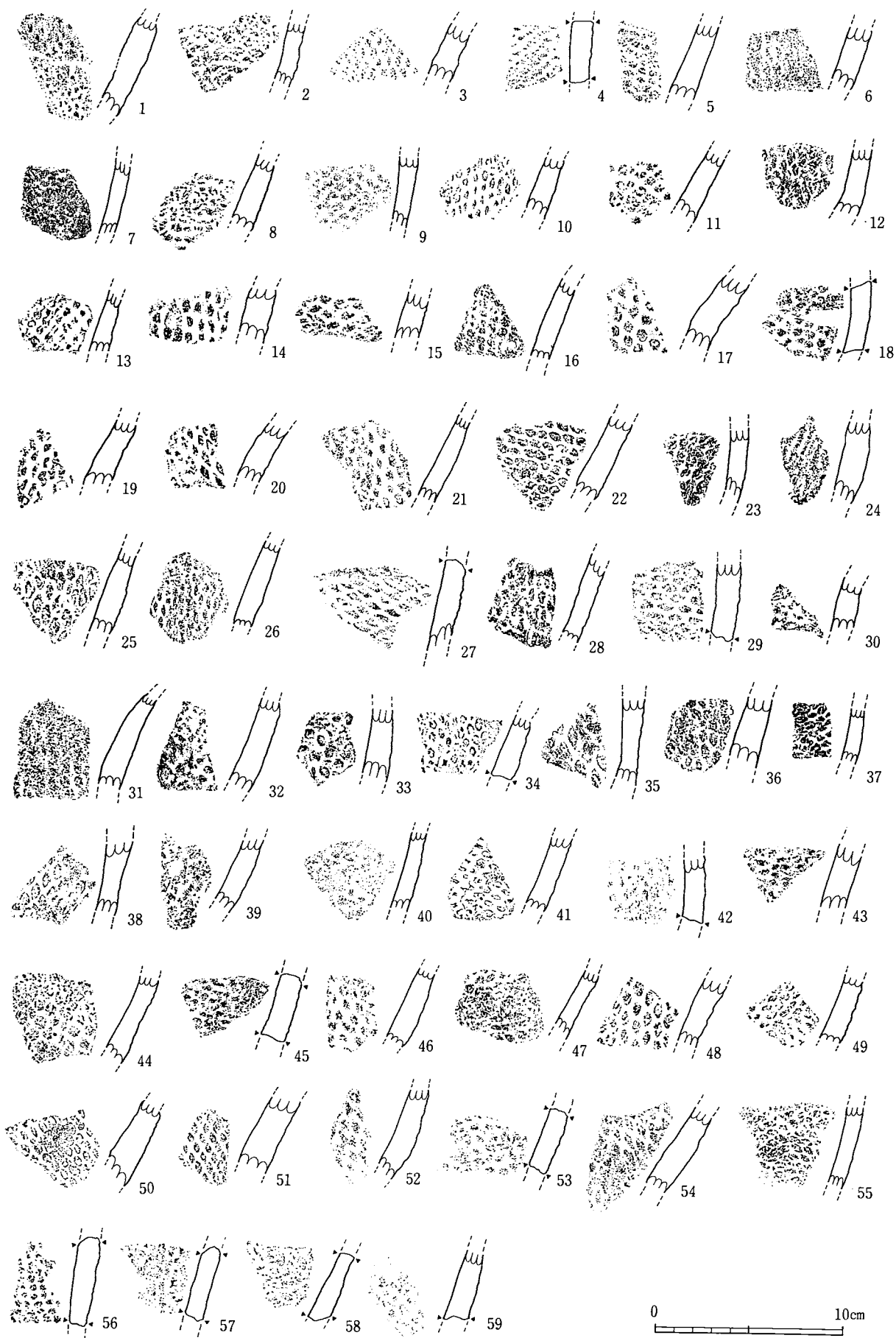
第98図 楕円文土器その他実測図



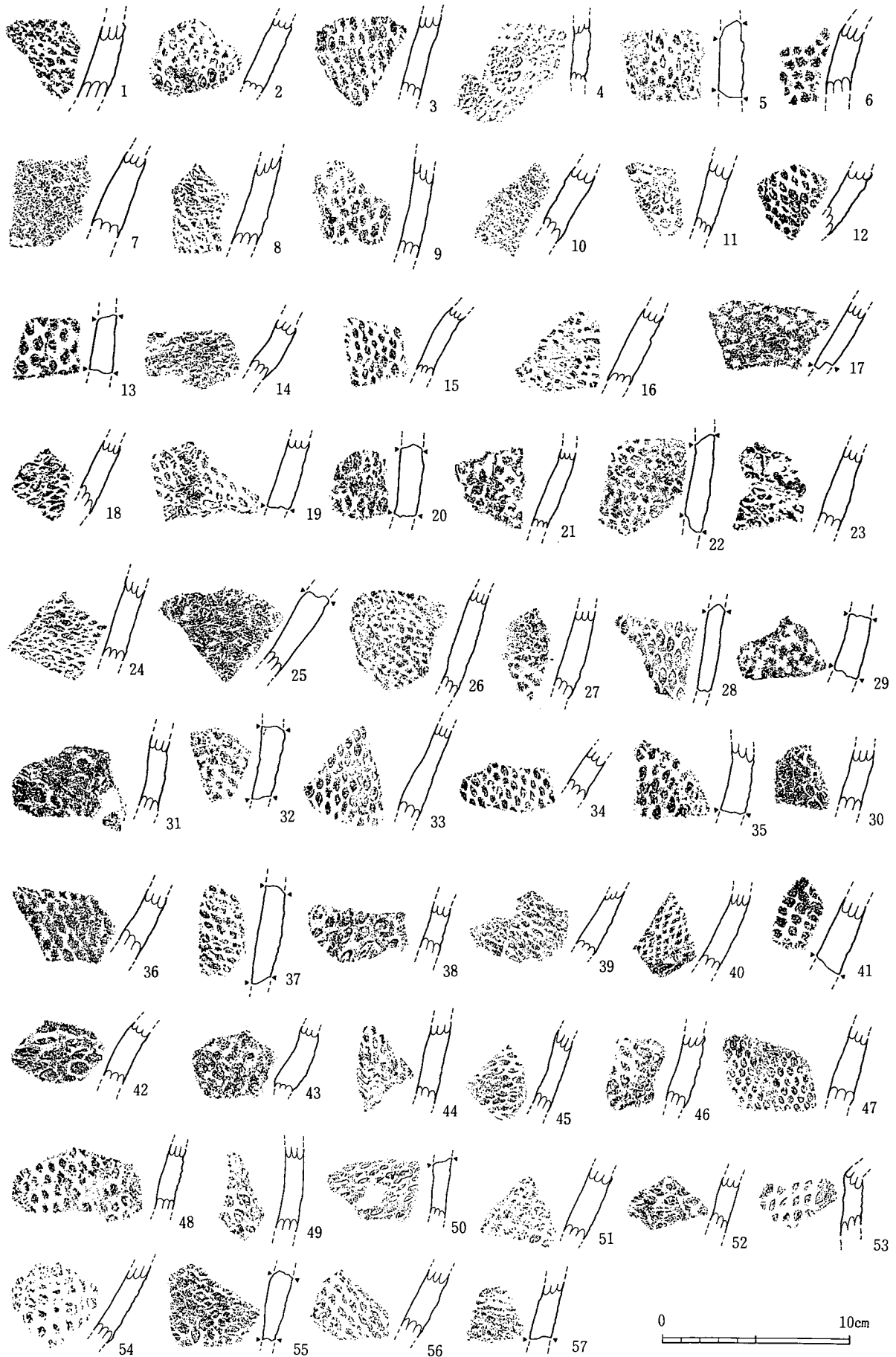
第99図 楕円文土器その他実測図



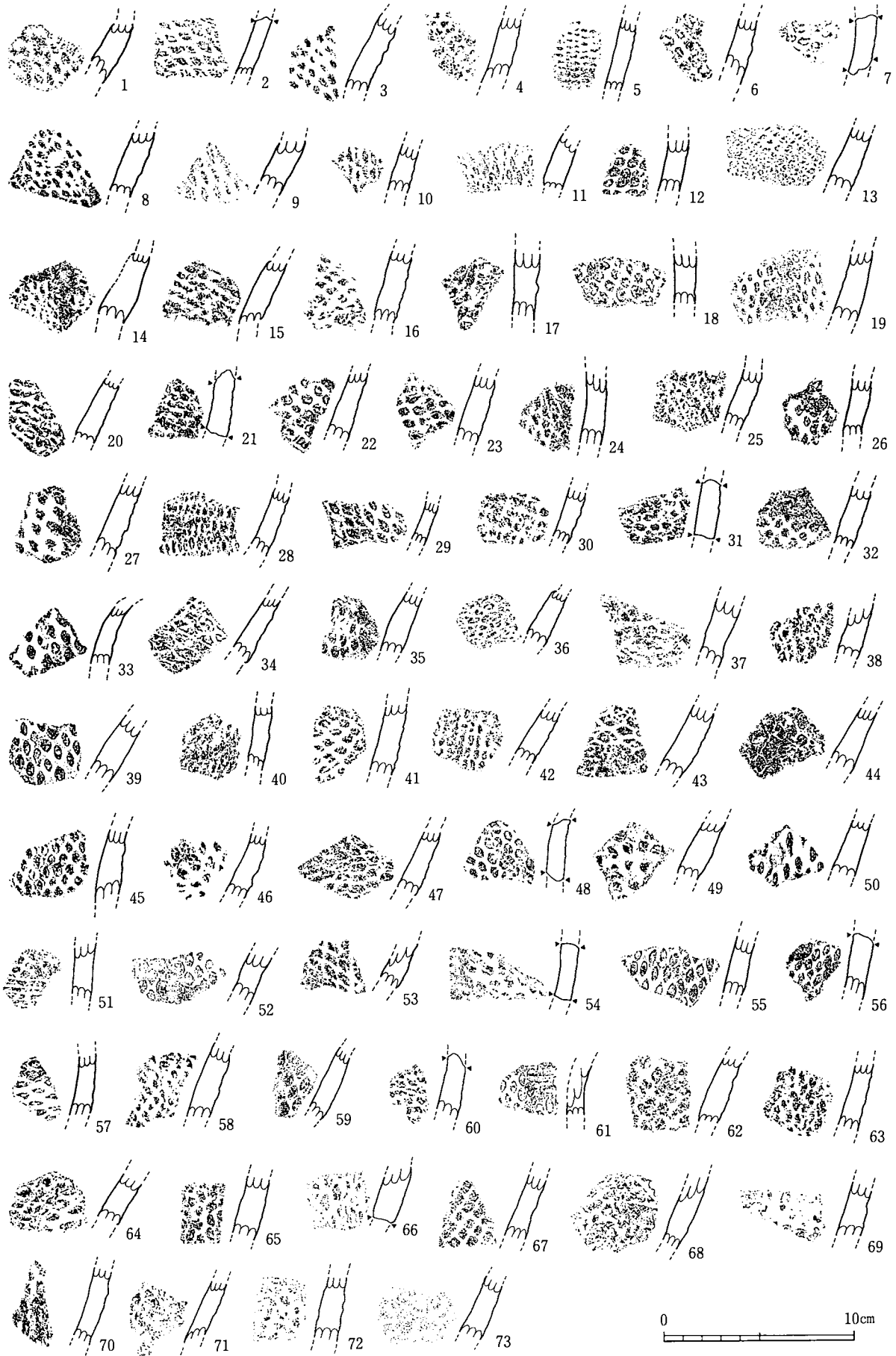
第100図 楢円文土器その他実測図



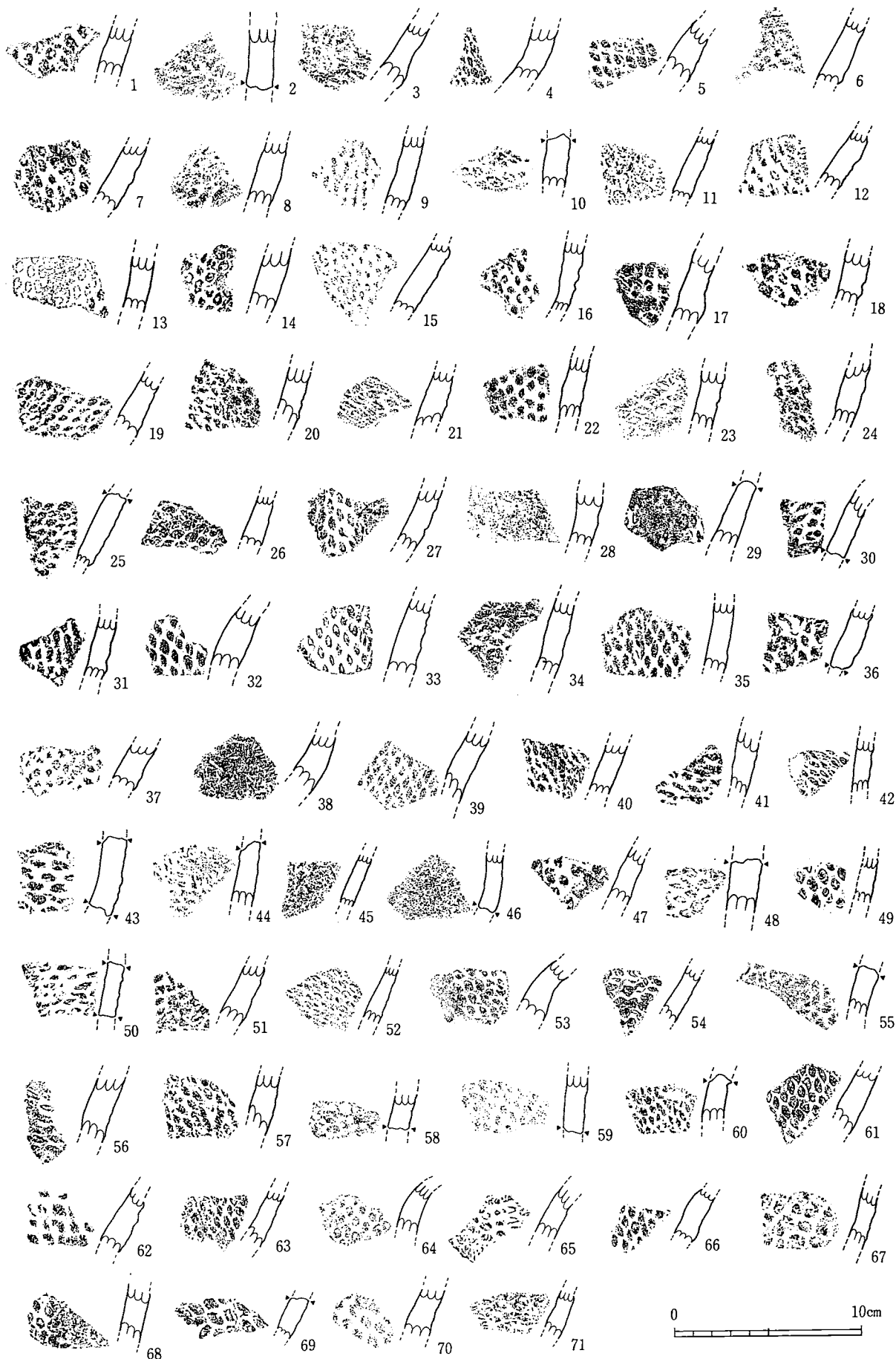
第101図 楕円文土器その他実測図



第102図 楕円文土器その他実測図

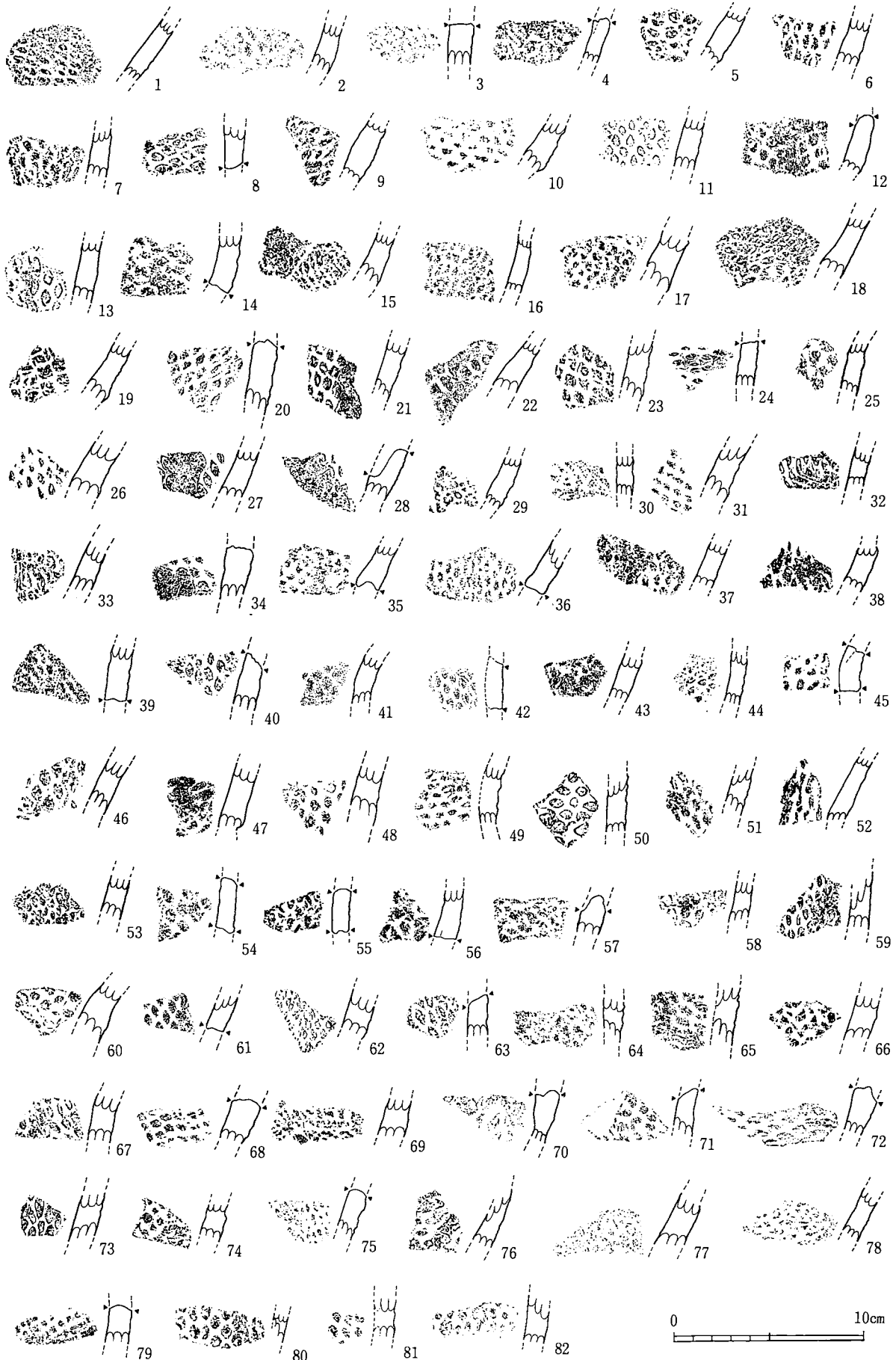


第103図 楕円文土器その他実測図



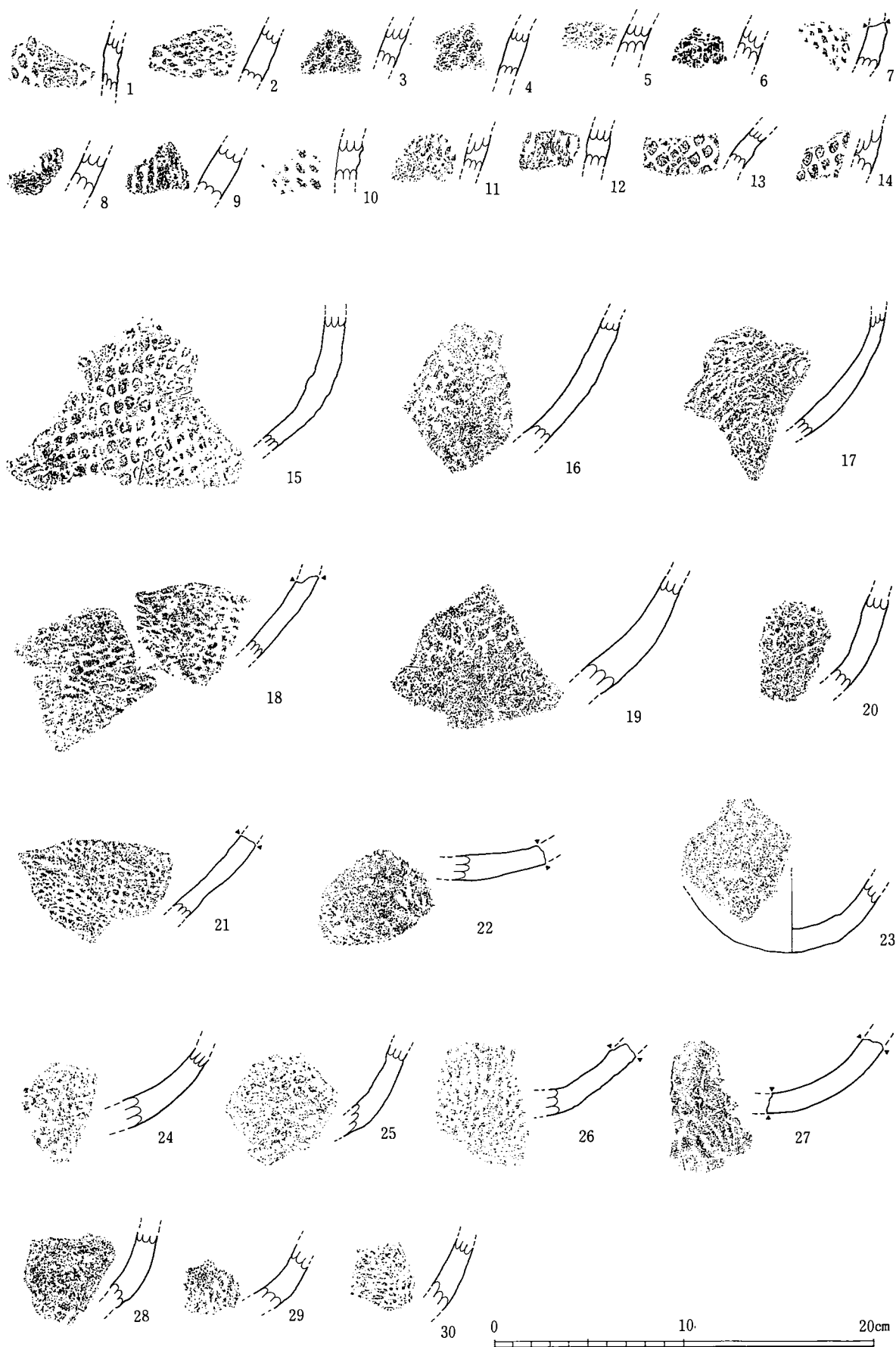
第104図 楕円文土器その他実測図





第105図 楕円文土器その他実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第106図 楕円文土器その他実測図

きるという意味で、特別に扱いたい。

出土地点は、調査区の中央部、しかもその東側にある。器形は、口縁部でわずかに外反し、胴部上部でやや膨らみ、以下は直線的になるという特徴である。文様帯は、表面に二つ以上、裏面に一つある。文様施文方向を勘案してそれを示すと、表面上位が縦位、同中位が横位であり、裏面は横位である。復元口径は、36.4cmである。

口縁部では、一時的な乾燥の単位を示す痕跡としての凸形剝離面と凹形剝離面が対となって残されている資料がある。その幅を見てみよう。1.5cmから6.4cmまでがあり、その多くは3cm台から4cm台である。

第87図14～第106図14は、胴部破片である。大小取り揃えて提示している。こうした資料を形式的に整理することはなかなか困難であるが、その中でいくつかの特徴を抽出することは可能である。それは、同じ器面に施文方向を違える文様が観察される場合である。また、磨り消しによる無文帯の存在も注意される。

胴部では、一時的な乾燥の単位を示す痕跡としての凸形剝離面と凹形剝離面が対となって残されている資料がある。その幅は、2.1cmから10.7cmまでがある。その多くは2cm台の後半から5cm台である。口縁部の幅と比較すると、胴部の方が若干長いようである。

底部ないしその周辺の部位の資料としては、第106図15～30を示している。どの資料も丸底ないしそれを予測させるものであった。

#### 山形文土器とその分布

分布は、調査区の西端でやや希薄さが認められるものの、調査区全域にみられる(第107図)。これが山形文土器の偏在であるが、楕円文土器のそれに近い状況である。

出土した土器の個体識別をおこなって、53の個体を認識した。そこで、これらを山形文土器1～53と呼称し、それぞれの個体ごとに見てみよう。

#### 山形文土器1(第108・110図1～31)

山形文土器の中では出土点数が多い個体で、30点が出土している。分布は、大きく三つのまとまりになる。一つは中央部東寄りから東側、中央部、西側

の北端の三箇所である。

出土個体では、口縁部から底部までの資料が出土しているが、すべての接合資料がみられない。したがって、その全体的な形を復元することは不可能である。ただし、断片的な資料を基にした推定は可能である。それによると、直線的ないし弱く外反する口縁部、直線的な胴部、そして底がやや平たい底部という器形的な特徴であることがわかる。

文様は、表面と口唇部、裏面口縁部の三箇所にある。施文方向は、表面が縦位と横位で、口唇部と裏面口縁部が横位である。表面の文様は、二つの文様帯に分割できる。ただし、同じ破片の中で示す資料が無いために、その明確な区画は、できない。状況的には、縦位施文の部位は、胴部上半部であり、下半部から底部にかけては横位であるようだ。

土器は、輪積み手法で製作されている。その単位は、凸形剝離面と凹形剝離面とがセットをなす資料であるが、それを示すものが2点ある(9・20)。それによると、一つの単位の粘土帯の幅は、5.4cmと4.3cmである。およそ4～5cm前後に輪積みした粘土帯を一時的な単位にして、乾いたら、また積み上げるという輪積み手法であることが判る。

#### 山形文土器2(第109・110図32～39)

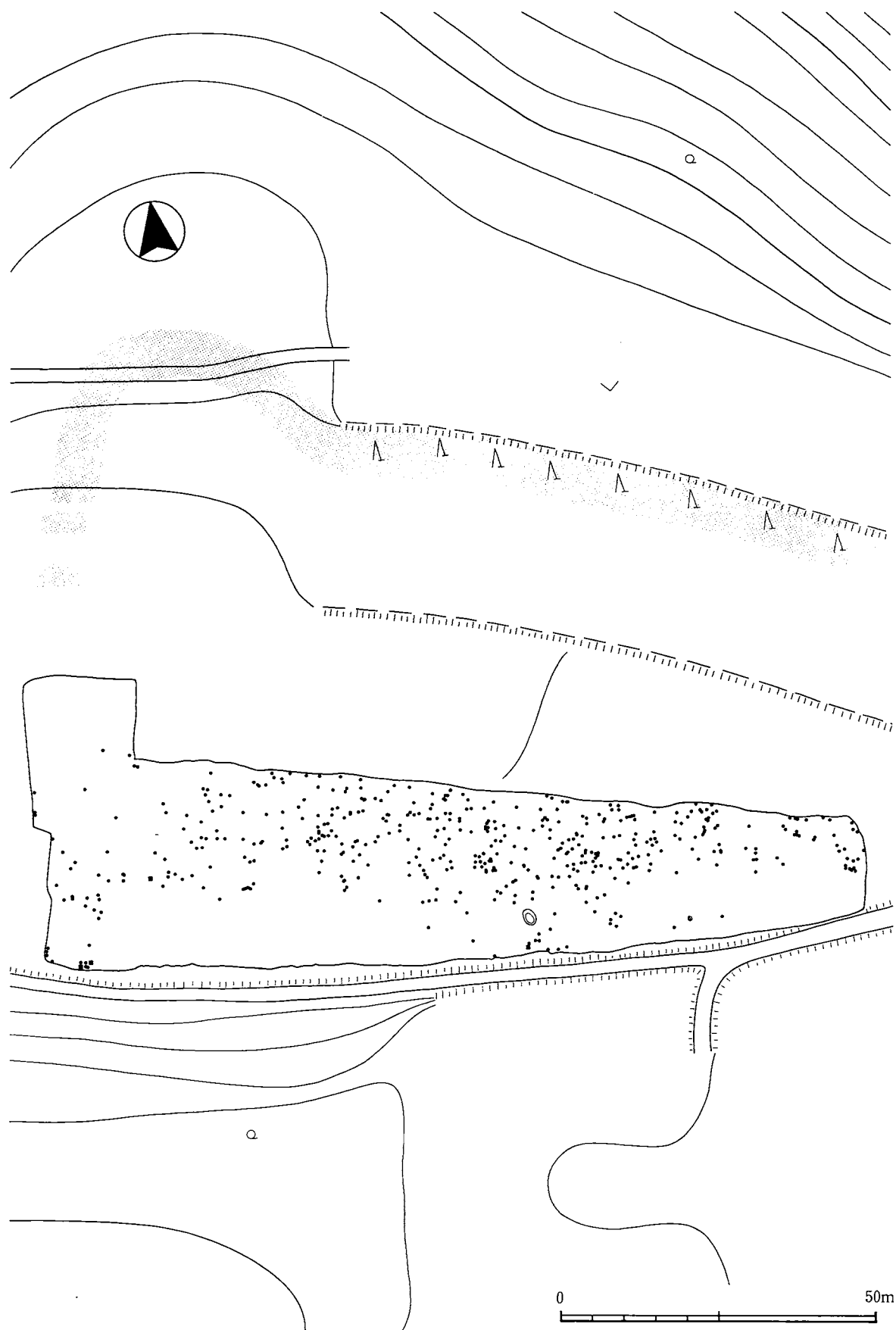
認識できた破片が8点である。口縁部付近で比較的大きな個体と胴部の資料である。こうした資料からその器形を復元すると、外に強く折れ曲がる口縁部、直線的な胴部という器形的な特徴であることがわかる。

分布は、調査区の東端の北側に偏っている。

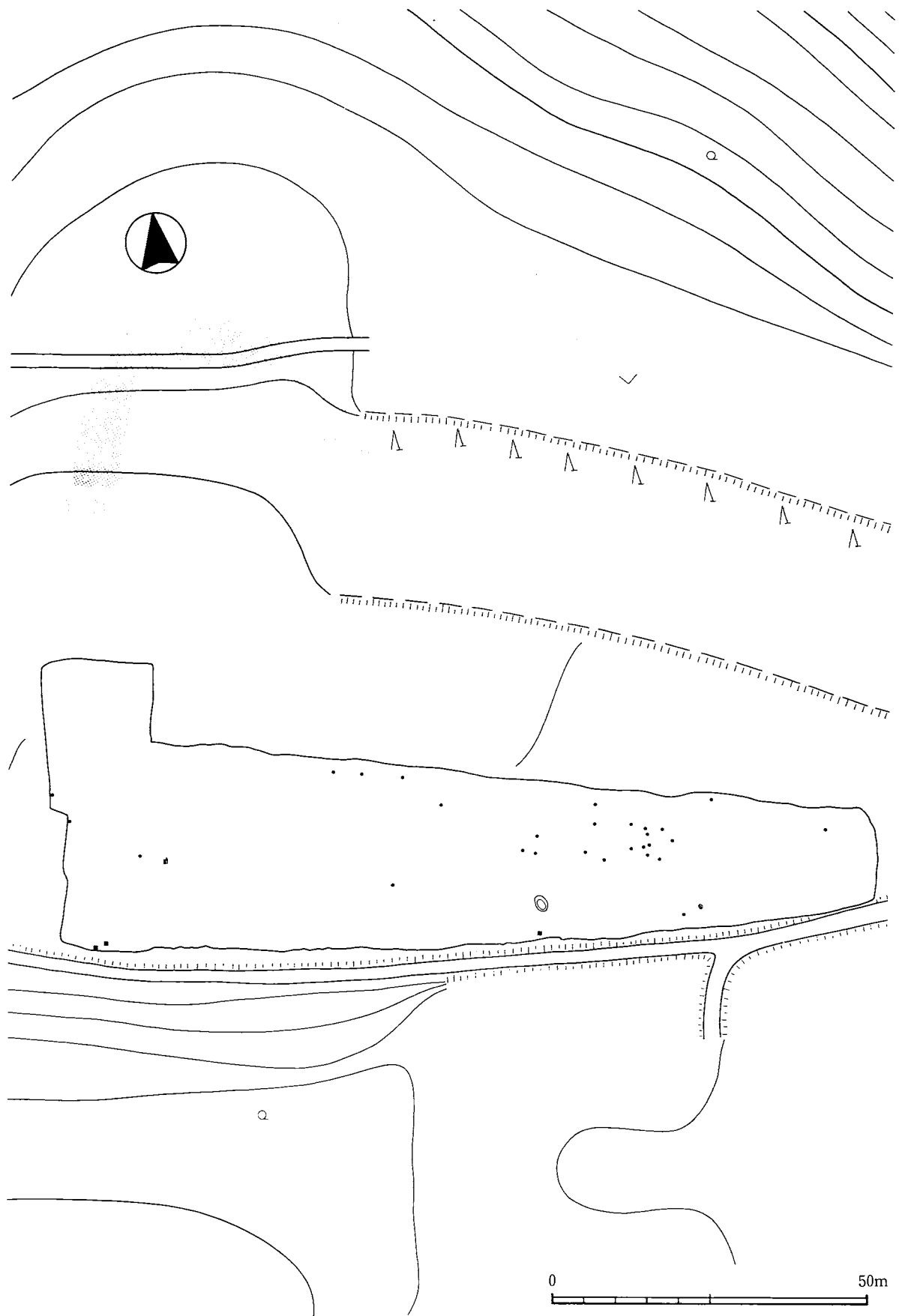
文様は、縦位施文の表面、横位施文の口唇部、横位施文の裏面口縁部にある。これらが、一つ一つの文様帯である。ただし、表面については、それを示す資料はないが、縦と横をたがいちがいにする複数の文様帯に分離できるものと思われる。なお、胴部下半に楕円文に近い文様が観察されるが、表面がナデによって不明確であり、ここで提示している。

土器は輪積み手法と考えられる。ただし、欠損のために凸形剝離面と凹形剝離面とがセットで見られるものはなかった。

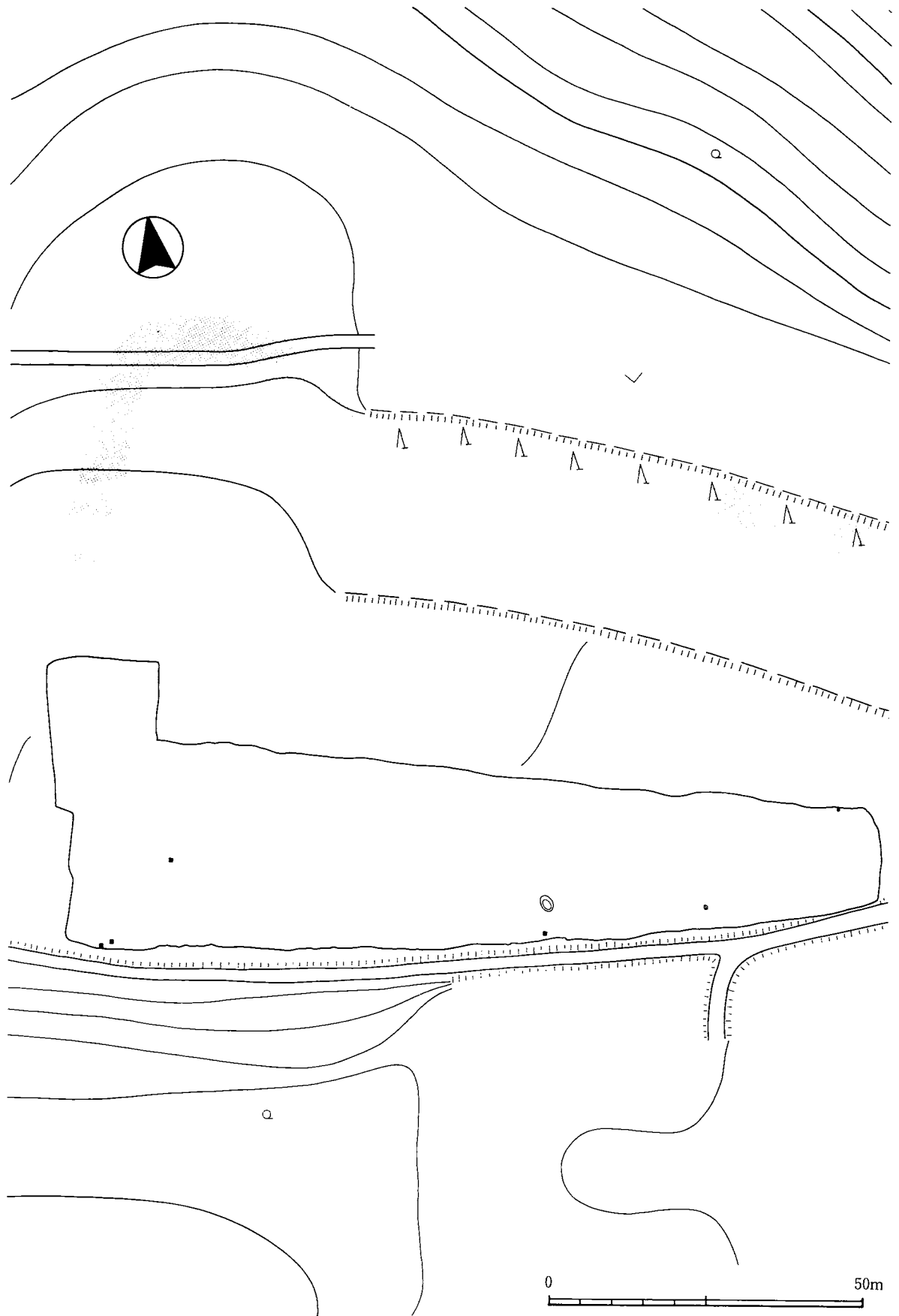
#### 山形文土器3(第111・113図1～9)



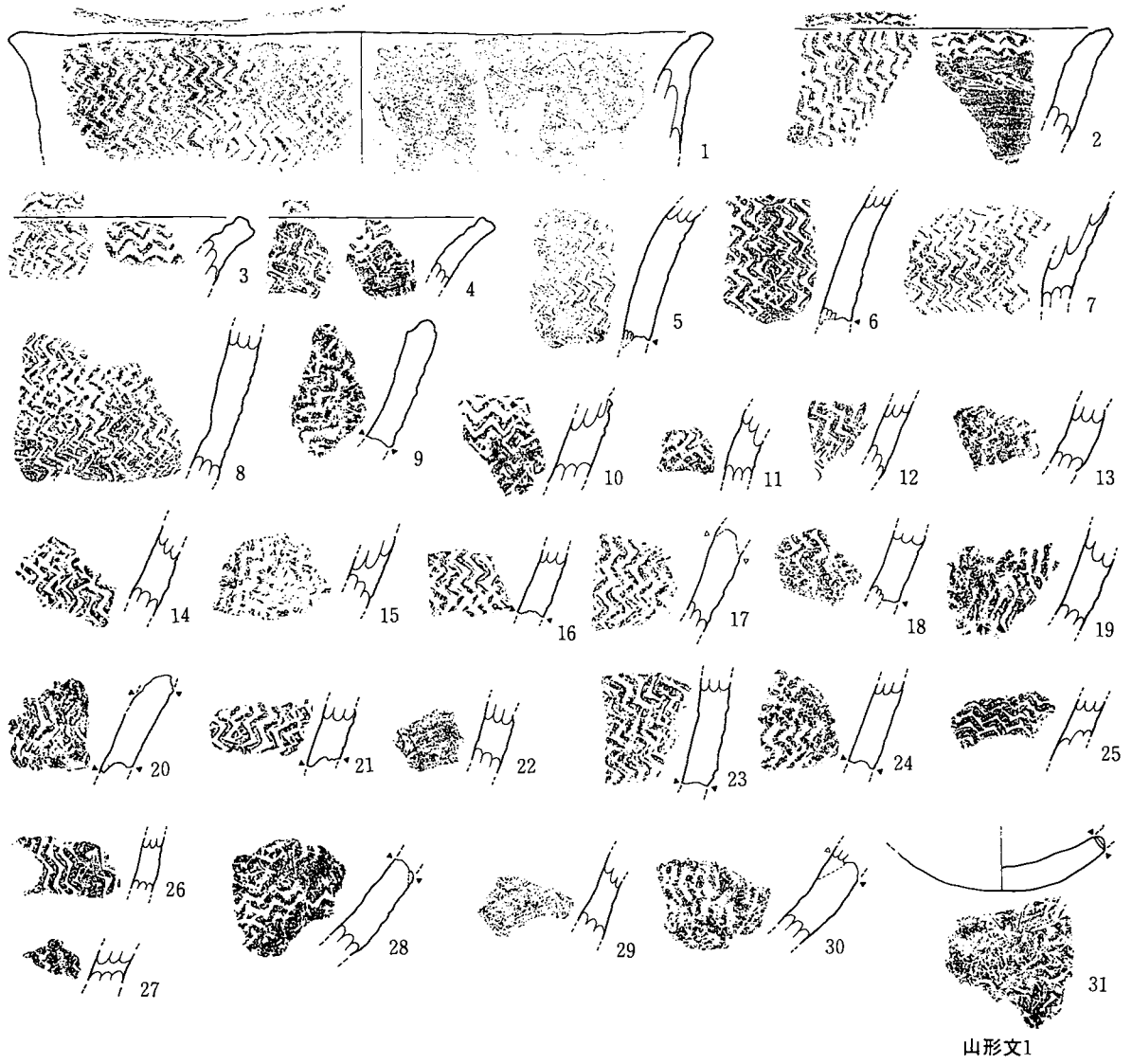
第107図 山形文土器分布図



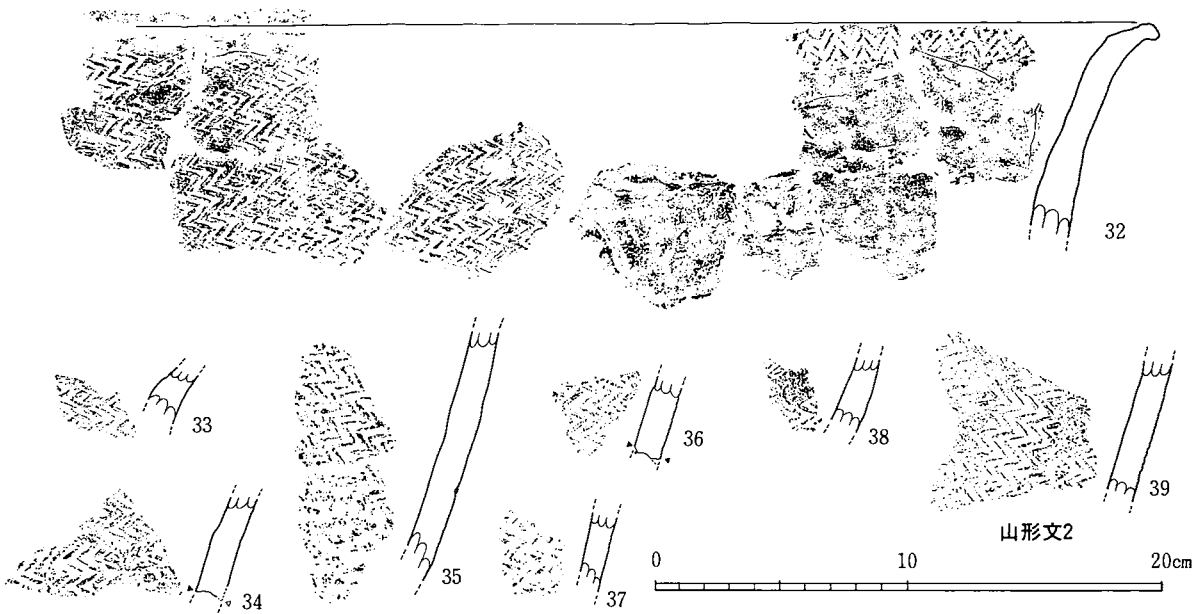
第108図 山形文土器1分布図



第109図 山形文土器2分布図



山形文1



山形文2

第110図 山形文土器1・2実測図

破片は、11点である。比較的大きな口縁部から胴部の破片と細かい胴部である。こうした資料を基にして器形を復元すると、わずかに外反する口縁部、やや直線的な胴部という器形的な特徴である。

分布は、中央部の北側にあり、散在していた。

文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部の三箇所にある。施文方向は、表面が縦位と横位で、口唇部と裏面口縁部が横位である。表面の文様は、二つの文様帯に分割できる。つまり、縦位に施文される胴部上半部と、横位施文の下半部である。

#### 山形文土器 4 (第111・113図10~12)

破片は、5点ある。ただし、口縁部と胴部の破片で、口縁部の推定口径は、21cmである。器形は、弱く外へ開く口縁部、直線的ないしやや丸みを持つ胴部である。

分布は、調査区中央部の東側で、その北端近くにある。

文様は、表面と裏面口縁部にある。施文方向は、表面が縦位で裏面口縁部が横位である。

土器は、輪積み手法で製作されている。その単位の幅は、口縁部と凹形剝離面とがセットをなす資料によると、8.3cmであった。

#### 山形文土器 5 (第112・113図13~24)

破片は、13点がある。口縁部と胴部の破片である。破片そのものの大きさは、口径復元に耐えるものではなかったが、器形の類推は、ある程度可能である。それによると、強く外反する口縁端部、直線的ないしやや丸みを持つ胴部という器形的な特徴である。

分布は、調査区中央部を中心にして西と東に広がっている。

文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部にある。施文方向は、表面が横位と縦位、口唇部と裏面口縁部が横位である。これらは、それぞれ独立した文様帯であるが、表面は、さらに複数の文様帯に区画される。口縁部を中心とした横位施文の部位と、その下にくる縦位施文の部位である。

#### 山形文土器 6 (第114・116図1~6)

破片は、7点がある。口縁部と胴部の破片であったが、口径復元に耐えるものではなかった。ただし、器形の類推は、ある程度可能である。それによると、

強く折れる口縁端部、直線的な胴部という器形的な特徴である。

分布は、調査区の中央部にある。

文様の施文方向は、表面では縦位と横位、口唇部と裏面口縁部では横位である。また、表面の文様では、磨り消しによる無文帯が縦位にのび、その下に横位の文様帯がくる(4)という構成である。

#### 山形文土器 7 (第114・116図7~13)

破片は、7点である。ただし、破片は小さかったが、出土した部位が口縁部と胴部の破片であったので、ある程度の器形類推は可能である。それによると、強く外反する口縁部と直線的な胴部であるようだ。

分布は、調査区の中央部にあるが、一部調査区の西端にも広がりが認められた。

文様の施文方向は、表面が縦位、口唇部と裏面口縁部が横位である。

#### 山形文土器 8 (第115・116図14~28)

破片は、16点がある。ただし、出土した部位はすべて胴部であるので、器形の類推は不可能である。

分布は、調査区の中央部を中心にして、一部その西側に認められた。

文様の施文方向は、縦位と横位がある。ただし、部位による文様の施文方向の違いは、出土している破片が小さいことに起因するのか、的確な資料が見当たらない。よって、土器の文様帯構成は、不明である。

#### 山形文土器 9 (第117・118図1~5)

破片は、5点がある。ただし、破片は小さいが、出土した部位には、口縁部と胴部があり、器形類推はある程度可能であった。それによると、強く外側へ折れる口縁部端部、直線的な胴部という器形が想像される。

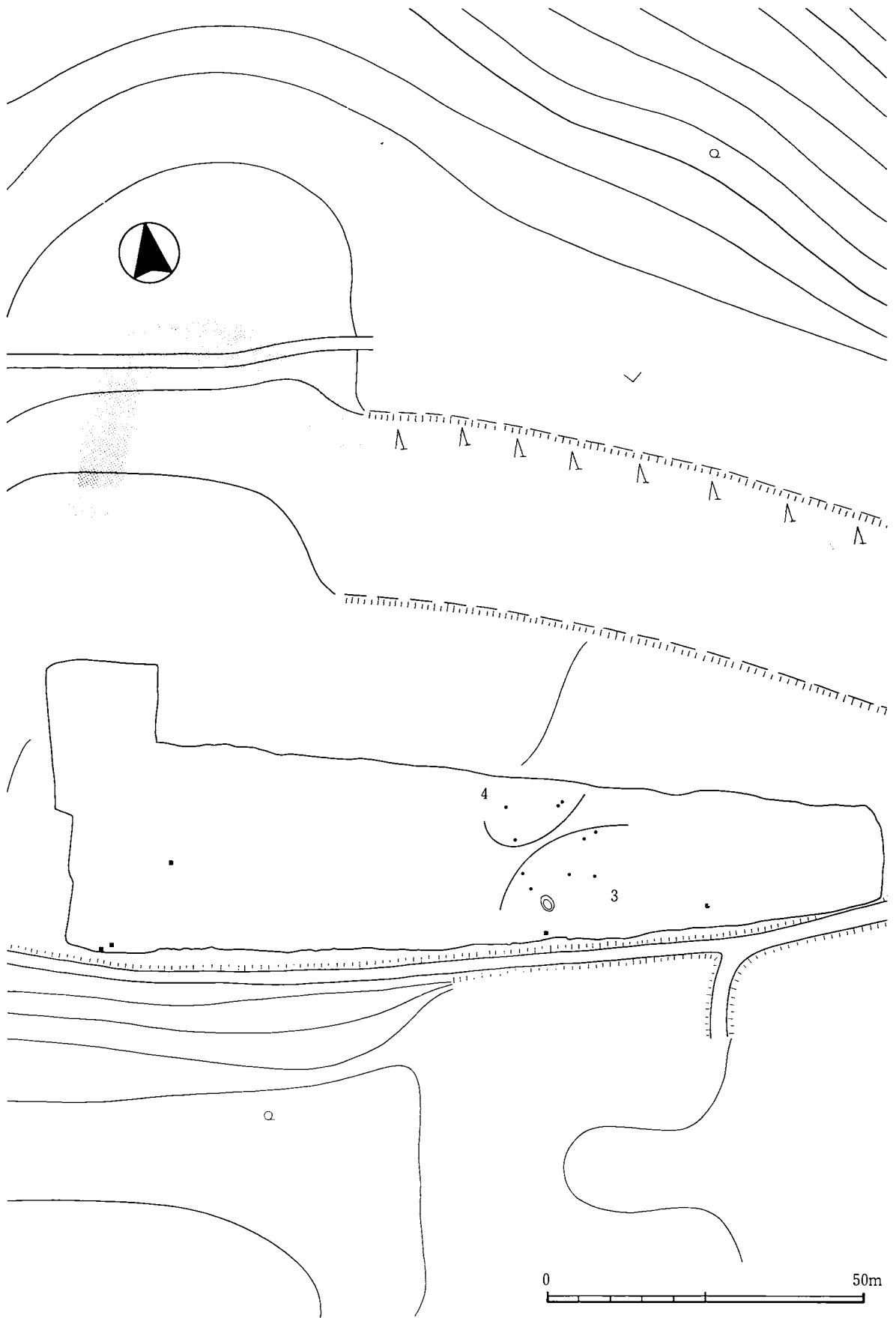
分布は、調査区の東側と西側にある。

文様の施文方向は、表面が縦位、口唇部と裏面口縁部が横位で、これらが、一つ一つの文様帯となっている。また、表面には、資料が少なく推測の域を出ないが、文様方向を交互に違える文様帯が存在すると考えられる。

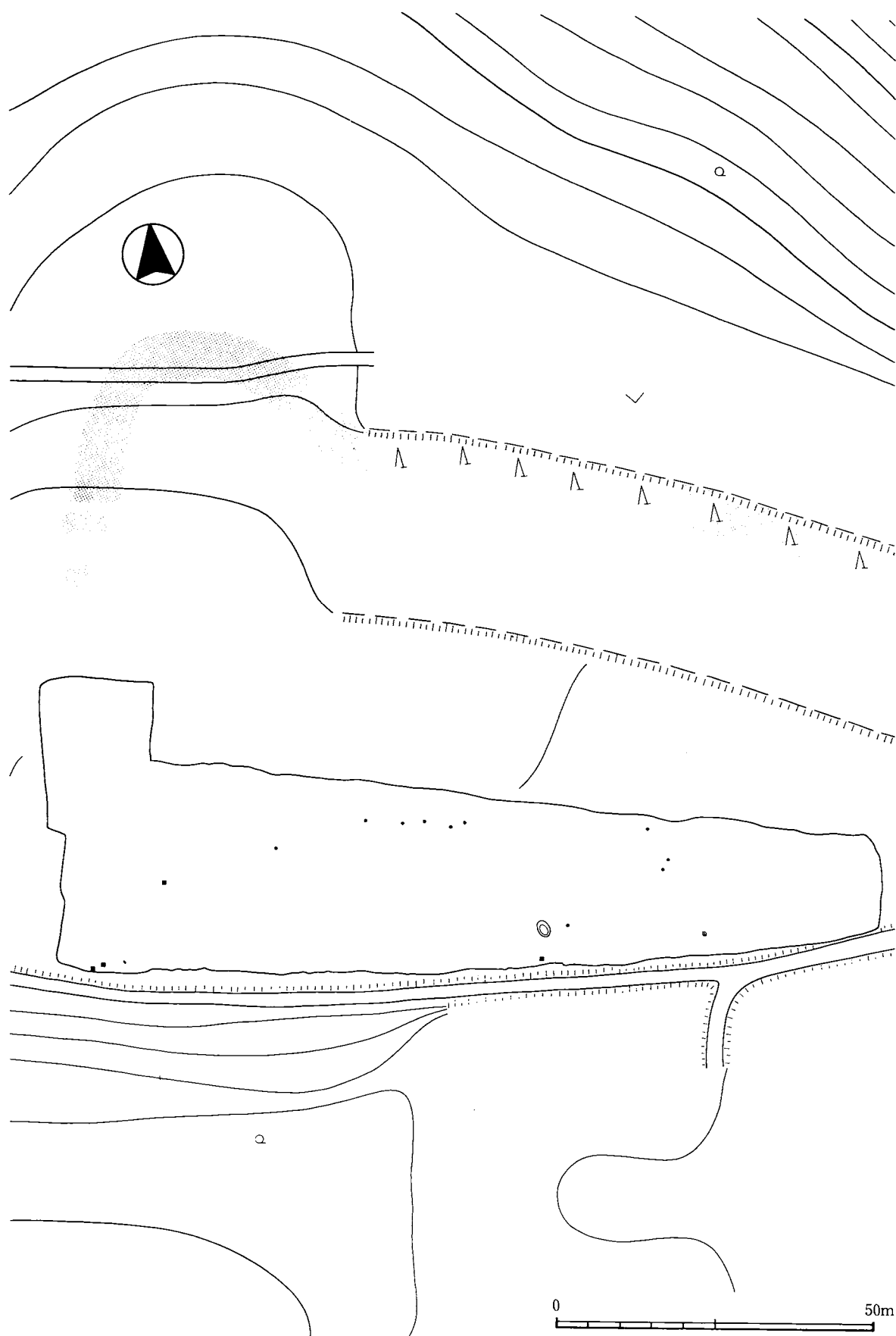
#### 山形文土器10 (第117・118図6~8)

破片は、3点である。この個体は小型の土器で、

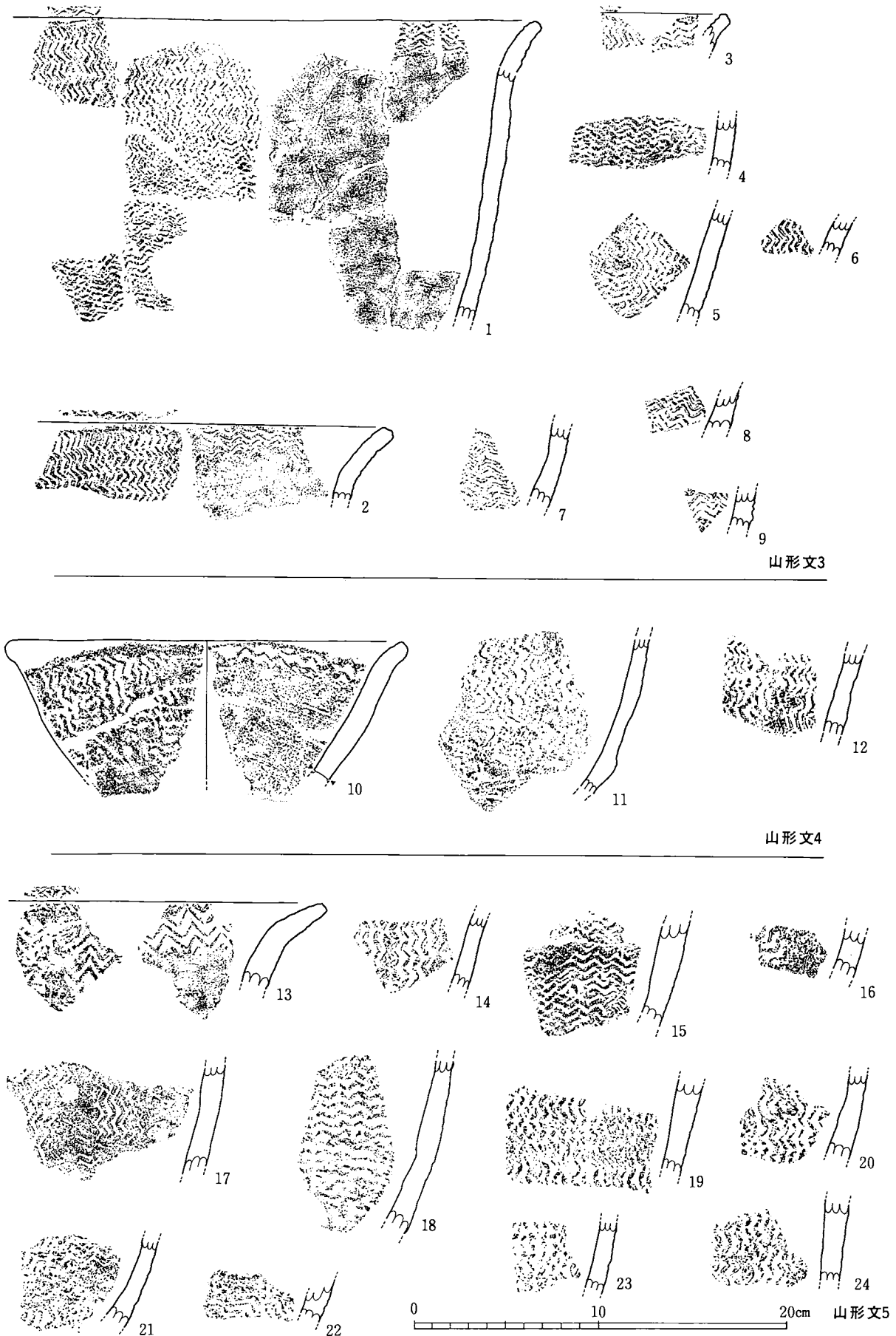




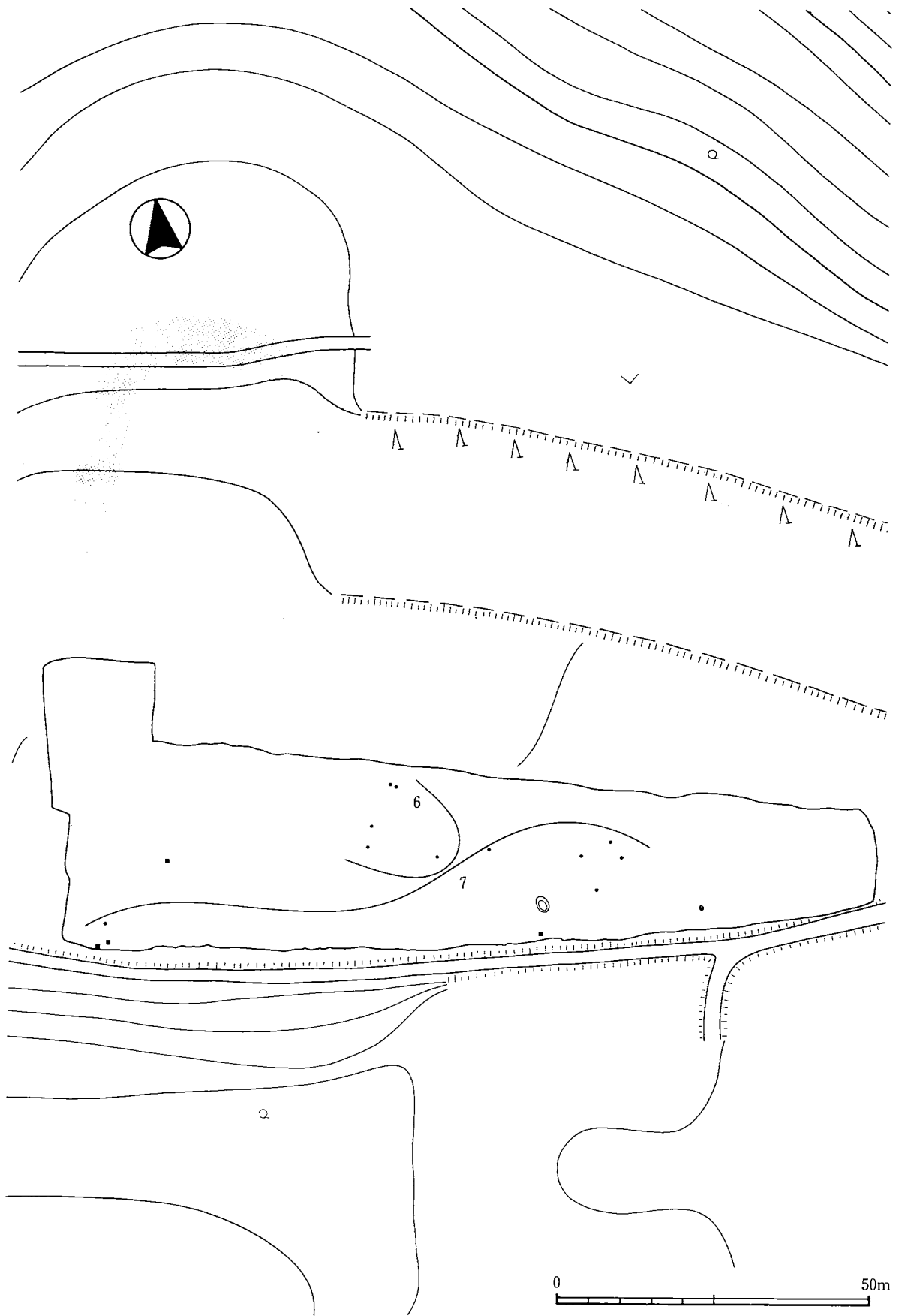
第111図 山形文土器3・4分布図



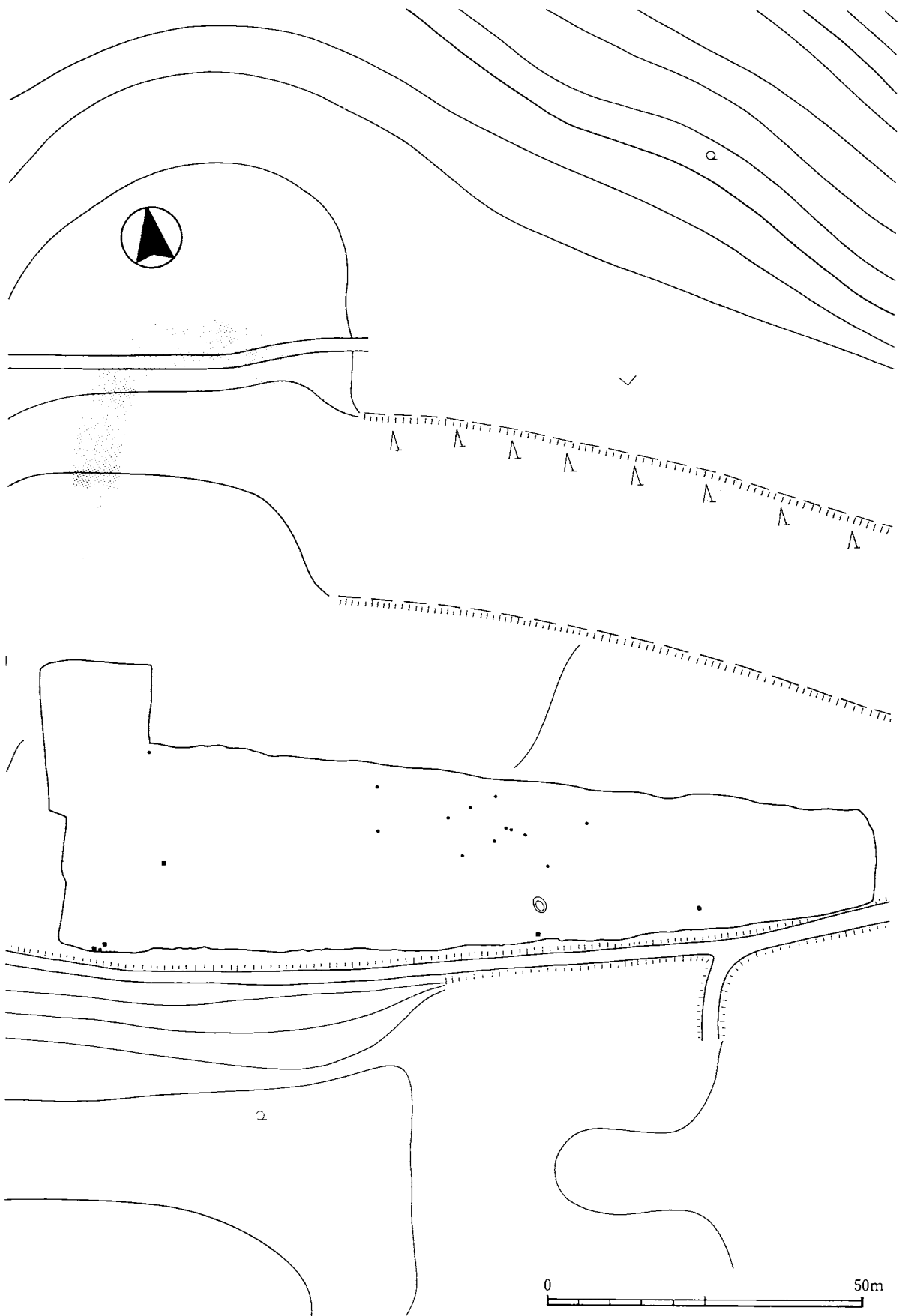
第112図 山形文土器5分布図



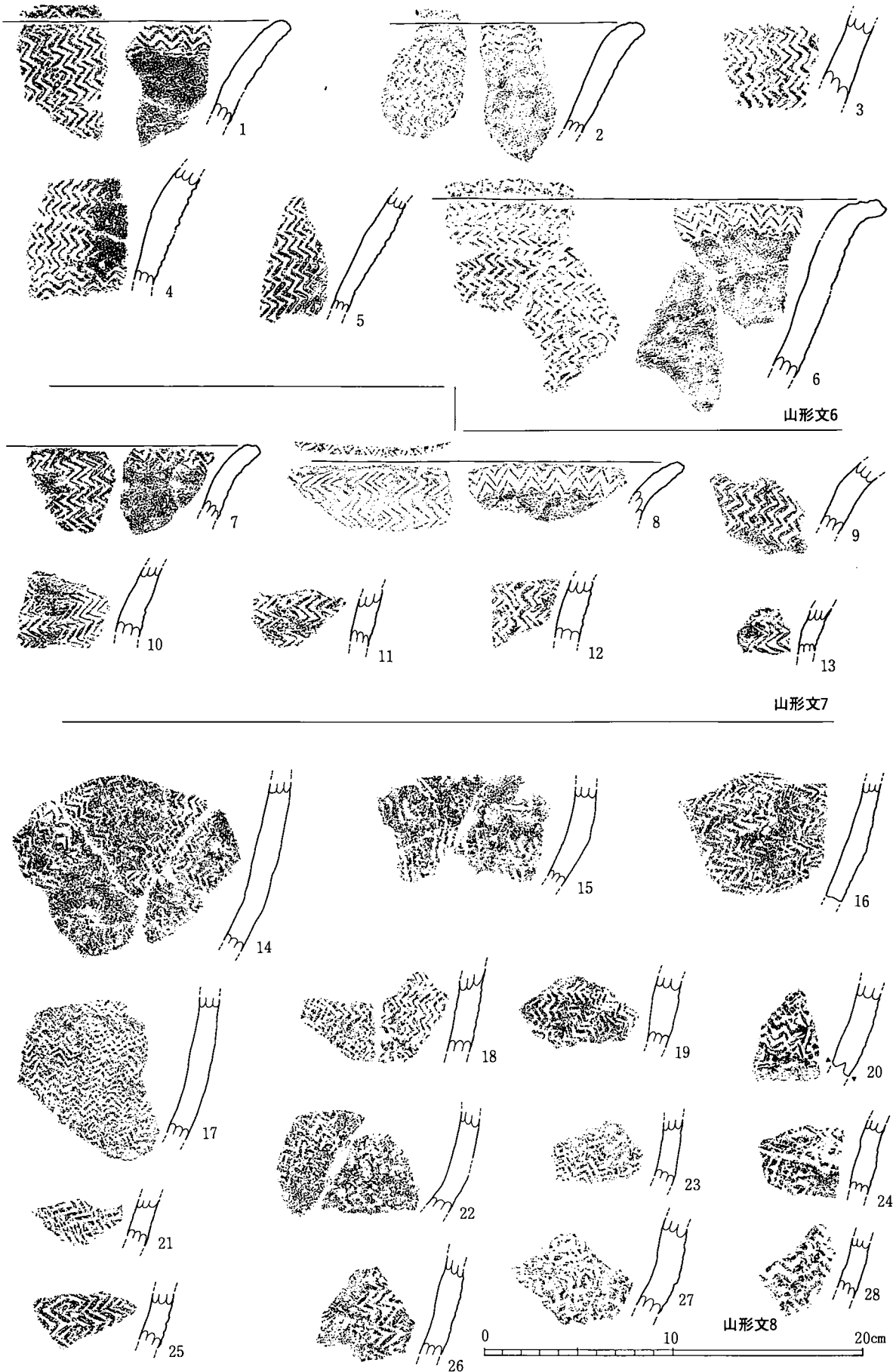
第113図 山形文土器3~5実測図



第114図 山形文土器6・7分布図



第115図 山形文土器8分布図



第116図 山形文土器6~8実測図

少量の資料であっても、器形の類推は容易である。それによれば、わずかに外反する口縁部、直線的に底部へ至る胴部、そして丸底である。口縁部の復元口径は、11.9cmで、復元器高は、10.4cmである。

分布は、調査区の西側にある。

文様の施文方向は、表面、口唇部、裏面といずれの部位も横位である。また、上記施文部位が、そのまま一つの文様帯でもある。

輪積み技法を示す資料として、1点がある(8)。これは、凹形剝離面を残す資料である。

#### 山形文土器11(第117・118図9～11)

出土点数は、3点と少なかった。しかし、口縁部と胴部の破片があり、ある程度の器形復元は可能であった。それによると、強く外反してのびる口縁部、直線的な胴部という器形であることがわかる。

分布は、中央部の北端にある。

文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部の三箇所にある。施文方向は、表面が横位と縦位で、口唇部と裏面口縁部が共に横位である。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となり、さらに表面は、胴部上半から口縁部までの横位施文部位と、胴部下半の縦位施文部位という二つの文様帯が分割される。

#### 山形文土器12(第117・118図12～18)

出土点数は、7点であった。出土資料としては、口縁部と胴部があり、ある程度の器形復元は可能である。それによると、端部で外反する口縁部、直線的な胴部上半という器形的な特徴である。

分布は、調査区の東端が中心で、西側にも1点存在している。

文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部の三箇所にある。施文方向は、表面が縦位と横位で、口唇部と裏面口縁部が横位である。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯だが、表面は、さらに二つ以上の文様帯に区分される。それは、口縁部から胴部上半の縦位施文部位、その下の胴部の横位施文部位である。

#### 山形文土器13(第119・122図1・2)

個体識別の結果、認識できた破片は、2点である。口縁部と胴部の破片で、口径復元はできなかったが、ある程度の器形の類推は可能である。おそらく、大

きく反る口縁部と直線的な胴部による構成の器形と想像される。

分布は、調査区の東側、しかもその北端にみられる。

文様は、表面と口唇部と裏面口縁部にあり、表面は縦位施文、口唇部と裏面口縁部は横位施文であった。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。ただし、表面は、胴部上半部の資料であり、下半部は違った施文方向で、異なる文様帯の可能性が高い。

#### 山形文土器14(第119・122図3～6)

破片は5点で、口縁部と胴部の資料であった。いずれの資料も細かいが、器形復元は可能だ。それによると、端部でわずかに外反する口縁部、やや直線的な胴部上半という器形的な特徴である。

分布は、調査区の中央部と西側に離れて存在している。

文様は、表面と口唇部と裏面口縁部にあり、表面は縦位と横位、口唇部と裏面口縁部は横位であった。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。さらに、表面は、縦位施文の口縁部近く、横位施文のその下の部位という、異なる文様帯に分離できる。

#### 山形文土器15(第119・122図7～11)

破片は5点で、口縁部と胴部の資料がある。これらの破片はいずれも細かったが、それぞれの特徴を勘案すれば、ある程度の器形復元が可能である。それによると、端部は直線的に開き、また直線的な胴部という器形的な特徴であることがわかる。

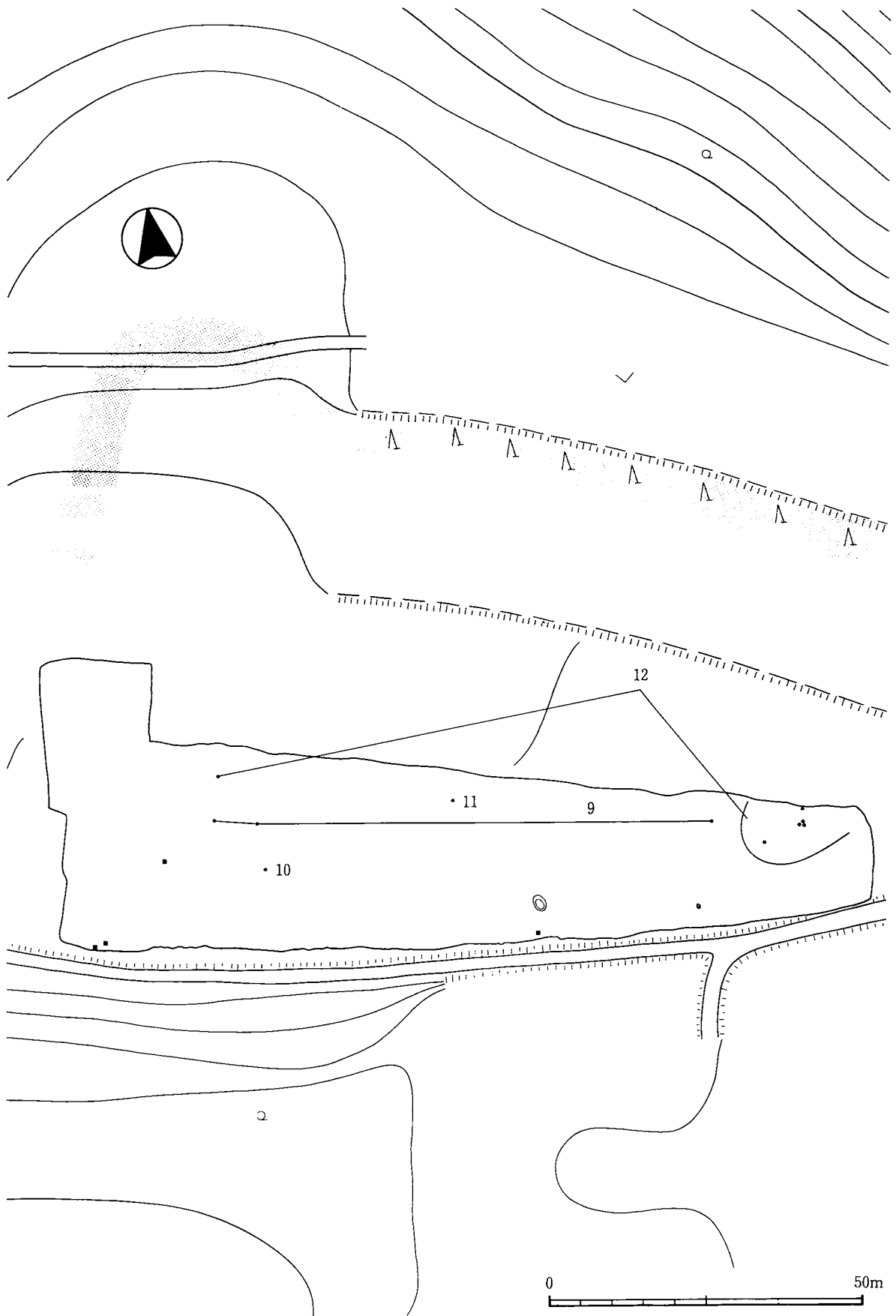
分布は、調査区中央部よりもやや東側にある。

文様は、表面のみにある。さらに、表面は、口縁部近くの縦位施文部位とその下の横位施文部位という、最低二つの文様帯に分離される。

#### 山形文土器16(第119・122図12・13)

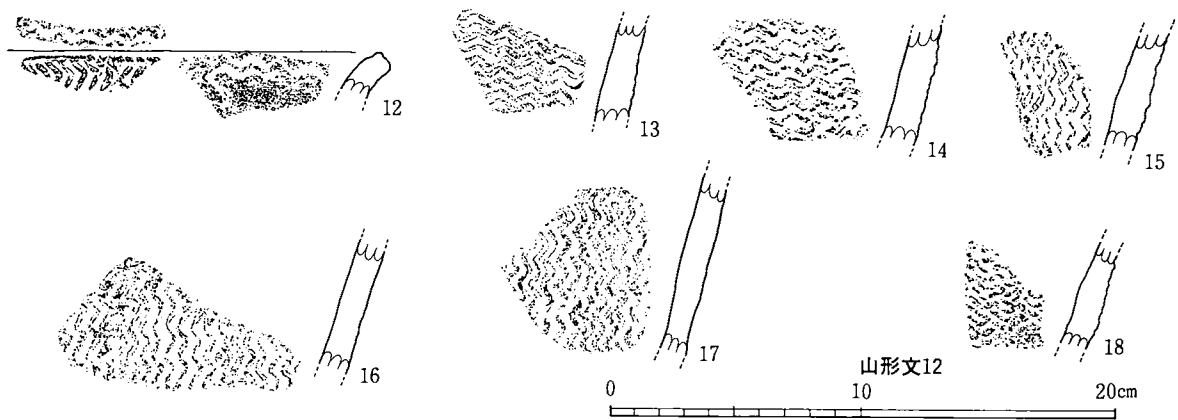
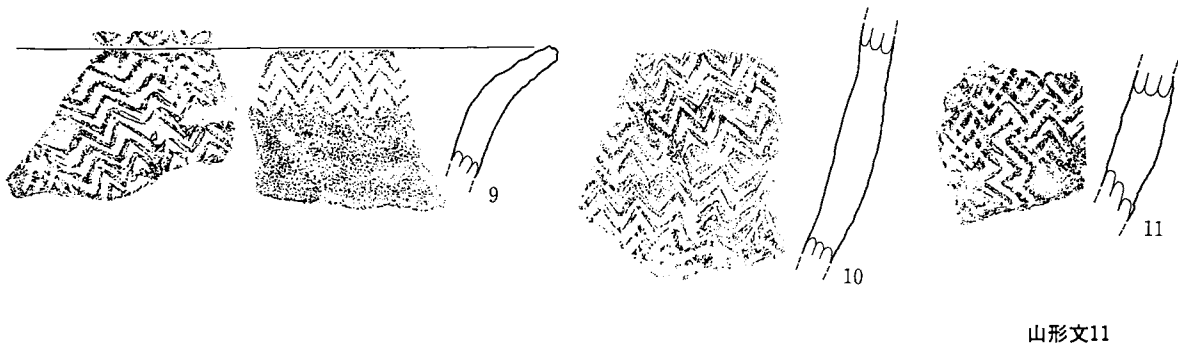
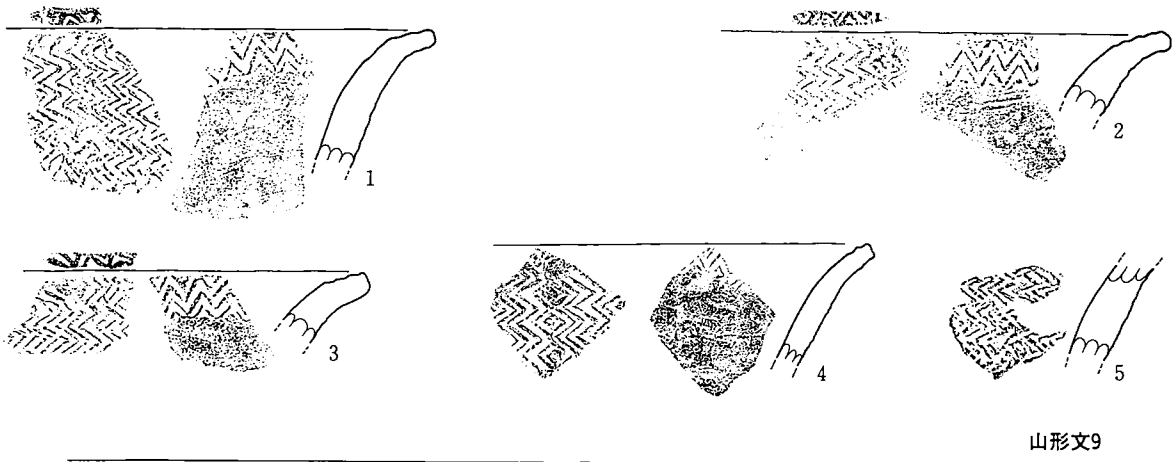
破片は2点で、口縁部および胴部上半の資料があった。この二つの資料を基にすれば、ある程度の器形復元は可能である。それによると、端部でわずかに外反する口縁部、やや丸みを持つ胴部という特徴である。

分布は、調査区の東側で、しかも北隅に近い所にある。



第117図 山形文土器9~12分布図





第118図 山形文土器9~12実測図

文様は、表面と口唇部と裏面口縁部にある。表面は縦位施文、口唇部と裏面は横位施文であった。この三つの施文部位は、そのまま一つ一つの文様帯となる。

#### 山形文土器17 (第119・122図14~17)

破片は、4点である。破片としては、口縁部と胴部がある。これらを考慮すれば、ある程度の器形復元が可能である。それによると、端部でわずかに外反する口縁部、直線的な胴部という特徴であることがわかる。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、表面と口唇部と裏面口縁部にあり、表面は縦位の山形文、口唇部と裏面口縁部は横位山形文である。この三つの施文部位は、それぞれ異なる文様帯である。

#### 山形文土器18 (第120・122図18~20)

破片は、4点であった。それらは口縁部と胴部の資料で、それぞれを検討すれば、ある程度の器形復元が可能であった。つまり、端部で直線的に開く口縁部、直線的な胴部という器形である。

分布は、調査区の中央部、その東端に点在した状況である。

文様は、表面と口唇部と裏面口縁部にある。表面は、縦位や横位の山形文で、口唇部と裏面口縁部は、横位の原体条痕であった。この三つの施文部位は、そのまま一つの文様帯となる。なお、外面の文様は、短い周期で上下に縦位施文と横位施文とが繰り返すという特徴があり、この繰り返しがどのような文様帯の構成と結びつくのかは、この資料では明らかでない。

土器は、輪積み手法で製作されているが、その痕跡としては、1例のみに、凹形剝離面が観察される(20)。

#### 山形文土器19 (第120・122図21・22)

破片は、2点である。その部位は、底部と胴部である。この二つの資料を使って器形を復元すれば、直線的に開く口縁部、丸みを持つ胴部ということになるだろう。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、表面と口唇部、そして裏面口縁部にある。

表面は縦位施文、口唇部と裏面口縁部は横位施文で、これらはそれぞれ異なる文様帯である。

#### 山形文土器20 (第121・122図23~25)

破片は、3点である。破片としては、口縁部と胴部があり、ある程度の器形は類推できる。それによれば、大きく外反する口縁部、直線的な胴部ということがわかる。

分布は、調査区の西側に散在した状況である。

文様は、表面、口唇部、裏面口縁部にある。これが、一つ一つの文様帯であろう。表面の文様は、縦位施文の山形文で、口唇部と裏面口縁部は横位施文の山形文であった。

#### 山形文土器21 (第123・126図1)

破片は、2点で、その接合資料である。口縁部で、その端部は強く外反している。

分布は、調査区の西端にある。

文様は、表面、口唇部、裏面口縁部にある。その施文方向は、表面が縦位、口唇部と裏面口縁部が横位である。

#### 山形文土器22 (第123・126図2・3)

破片は、3点で、中2点は接合している。その部位は、胴部上半から口縁部近くまでのものと位置不明の胴部であった。器形は、口縁部が弱く外反し、胴部上半では直線的となっている。

分布は、調査区の中央部、その西側にある。

文様は、表面と裏面口縁部に観察されていて、口唇部は欠損のためにその有無は確認できなかった。その施文方法は、表面が縦位、裏面口縁部が横位である。

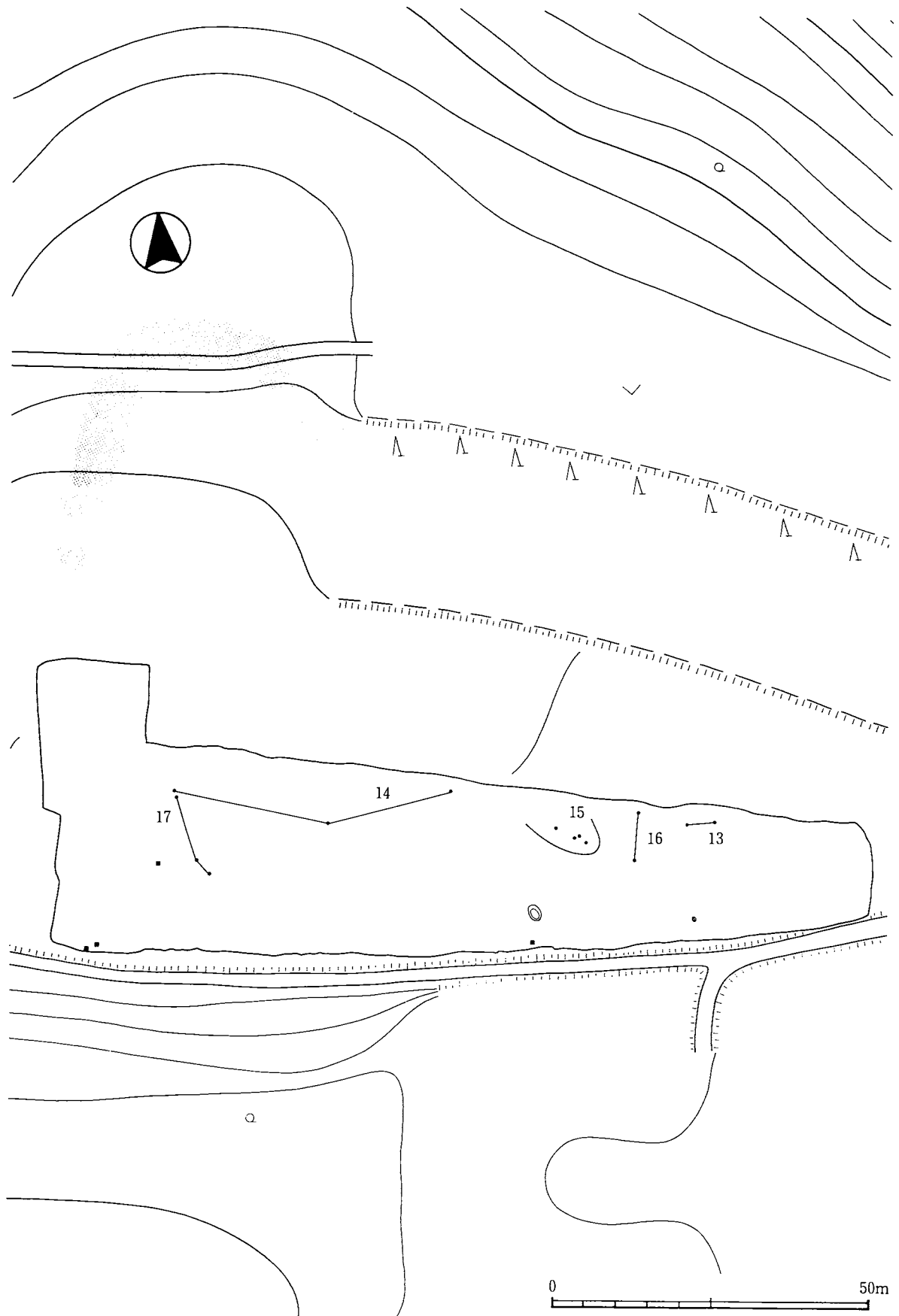
#### 山形文土器23 (第123・126図4・5)

破片は6点で、接合によって二つにまとめられた。一つは口縁部近くの部位、もう一つは胴部である。器形は、弱く外反する口縁部と直線的な胴部上半によって構成されている。

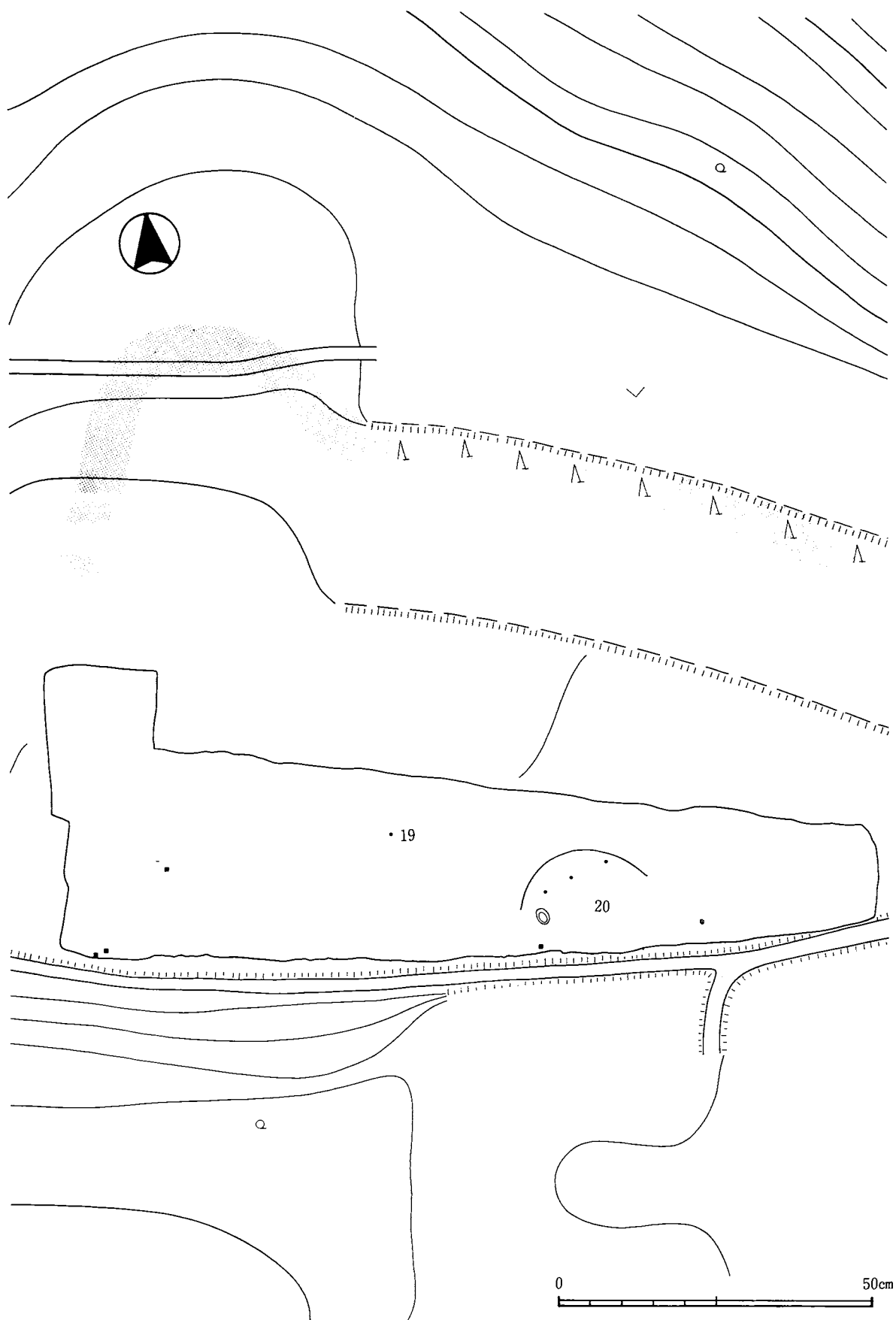
分布は、調査区の西側と中央部の東側の二つにまとまって、そしてそれぞれが隔絶した状況で認められた。

文様は、表面と裏面口縁部に観察されていて、口唇部は欠損のためにその有無は確認できなかった。その施文方法は、表面が縦位、裏面口縁部が横位である。

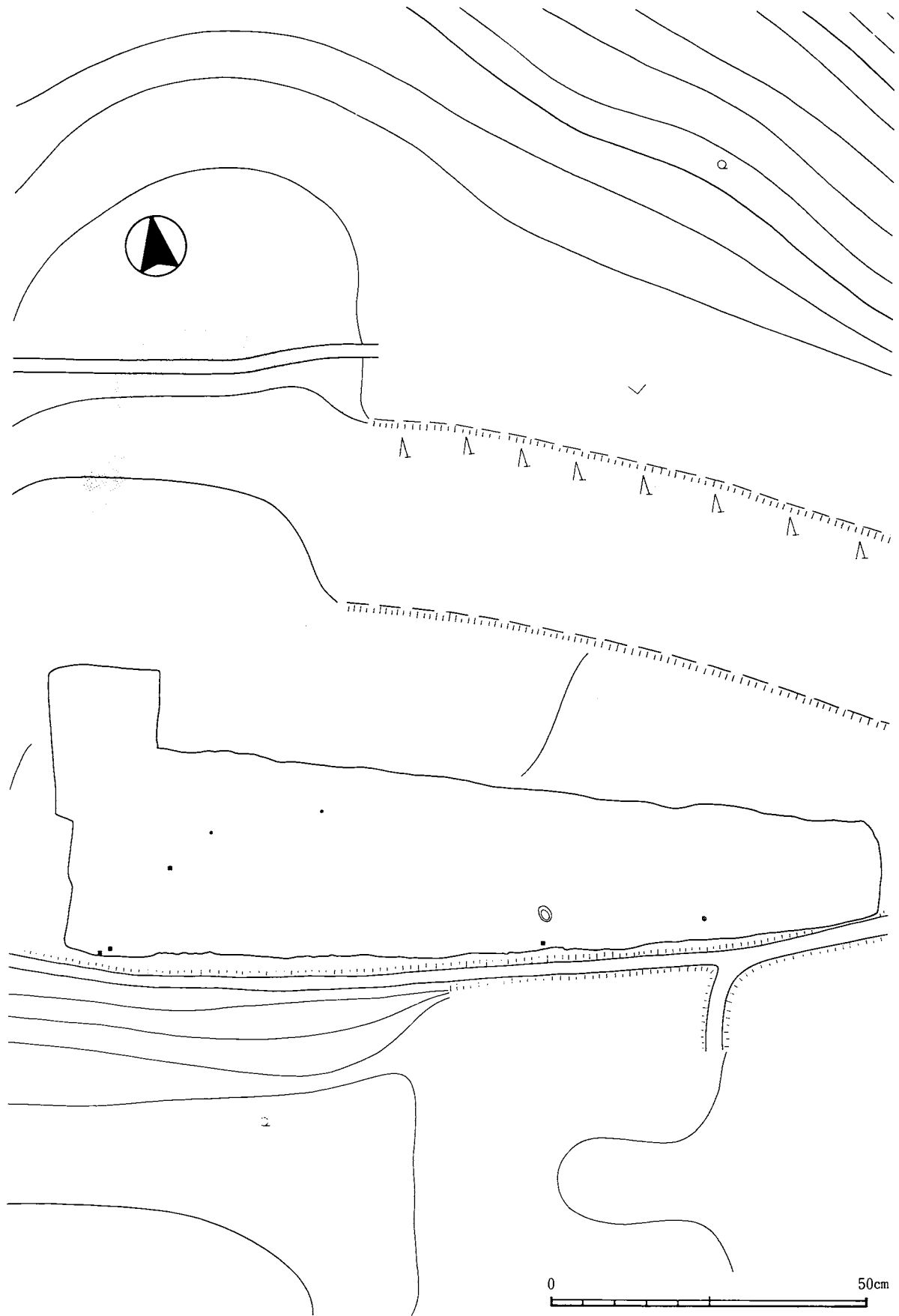
#### 山形文土器24 (第124・126図6~10)



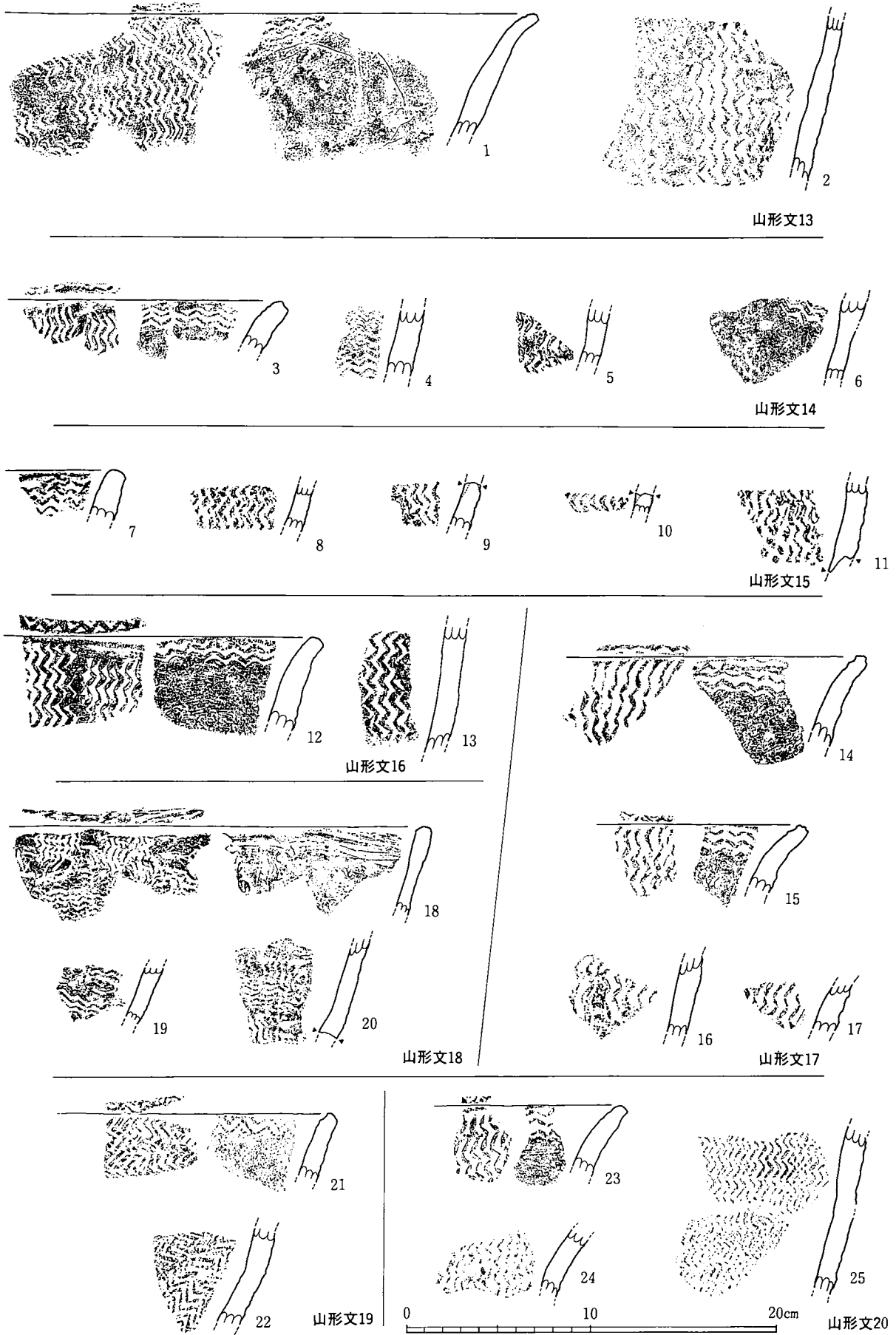
第119図 山形文土器13~17分布図



第120図 山形文土器18・19分布図



第121図 山形文土器20分布図



第122図 山形文土器13~20実測図

破片は、6点である。いずれも胴部なので、全体の器形を復元することはできなかった。

分布は、調査区の中央部から西端まで、散在した状態で広がっていた。

文様は、横位と縦位の両者がある。ただし、それぞれの部位が定かでないので、どのような文様帯の構成をとるかは、判らない。

#### 山形文土器25 (第125・126図11~17)

破片は、7点である。いずれも、胴部の破片のため、器形復元は可能であった。

分布は、調査区の西側にあり、散在した状況であった。

文様は、横位と縦位の二つがある。おそらく、部位の違いによる施文方向があるのだろうが、その構成については定かでない。

土器は、輪積み手法で製作されている。その土器製作の単位である凸形剝離面が1点の資料(15)で観察されたのみである。

#### 山形文土器26 (第125・126図18~21)

破片は、4点である。どれも胴部の破片である。

破片は小さくて、その全体形は判らない。

分布は、調査区の中央部のやや東側にある。

文様は、縦位施文と斜位施文がみられる。ただし、同じ破片でこの二つがいっしょに観察されるものは無いので、表面における細かい文様帯の構成は不明である。

#### 山形文土器27 (第127・129図1~4)

破片は、4点である。すべて胴部の破片のため、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の中央部、その東側、中央、そして西側に点在していた。

文様は、縦位施文と横位施文がある。その構成を示す資料として1がある。それによると、上部が縦位施文、下部が横位施文である。

#### 山形文土器28 (第127・129図5~8)

破片は、4点である。これらは、いずれも胴部の破片である。したがって、全体の器形を推定することはできない。

分布は、調査区の東側にあり、どれも比較的近い位置関係で検出されている。

文様は、縦位施文のみであるが、実際には横位施文の部位も存在するであろう。

#### 山形文土器29 (第127・129図9~11)

破片は、8点である。これらは、すべて胴部の破片で、その全体の形を推定することはできない。ただし、比較的大きめの胴部下半の資料(9)がある。それによると、胴部下半から底部へは、大きく丸みを持って移行することを窺わせる。

分布は、調査区の中央部、その北端にある。

文様は、横位施文と縦位施文がある。しかし、同じ器面の中に二つの文様が見られる資料が無いため、どのような文様帯の構成をとっているのかは不明である。

#### 精円文土器30 (第127・129図12~15)

破片は、4点である。いずれも胴部の破片であり、器形の一部を推定することはできなかった。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、縦位施文と横位施文がある。しかし、この二つの文様で、どのような文様帯の構成をとっているのかは不明である。

#### 山形文土器31 (第128・129図16~19)

破片は、4点あった。これらは、すべて胴部の破片であり、しかも小破片であったために、その器形推定は不可能であった。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、横位施文と縦位施文がある。しかし、あくまでも断片資料であり、文様帯の構成等は不明である。

#### 山形文土器32 (第128・129図20~22)

破片は、3点である。すべて胴部の破片で、しかも小さい破片であるため、その全体の形を推定することはできない。

分布は、調査区の中央部にある。

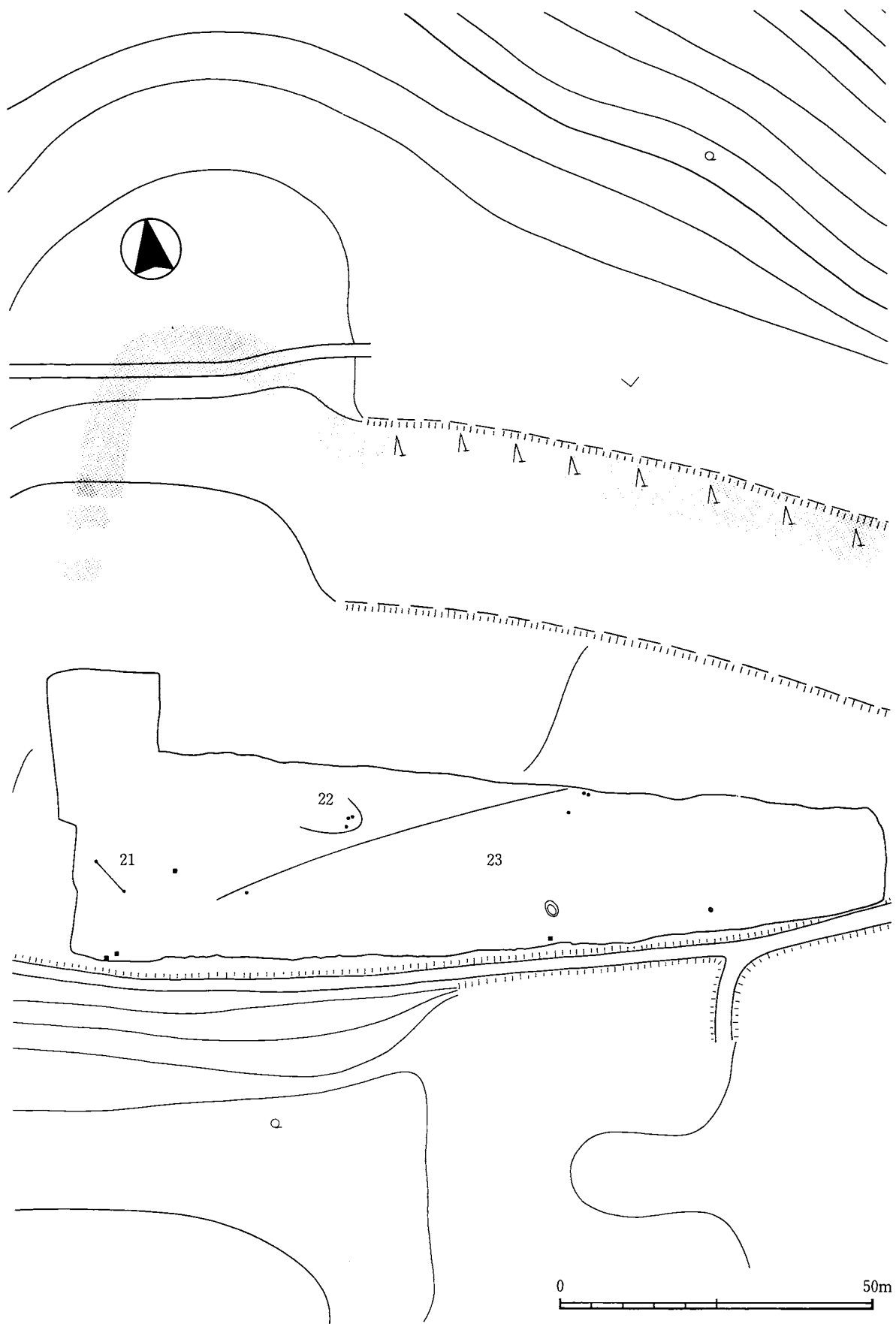
文様は、横位施文と縦位施文があるが、文様帯の構成を示す資料は存在していない。

#### 山形文土器33 (第128・129図23~25)

破片は、3点である。いずれも胴部の破片であるために、器形全体の復元はできなかった。

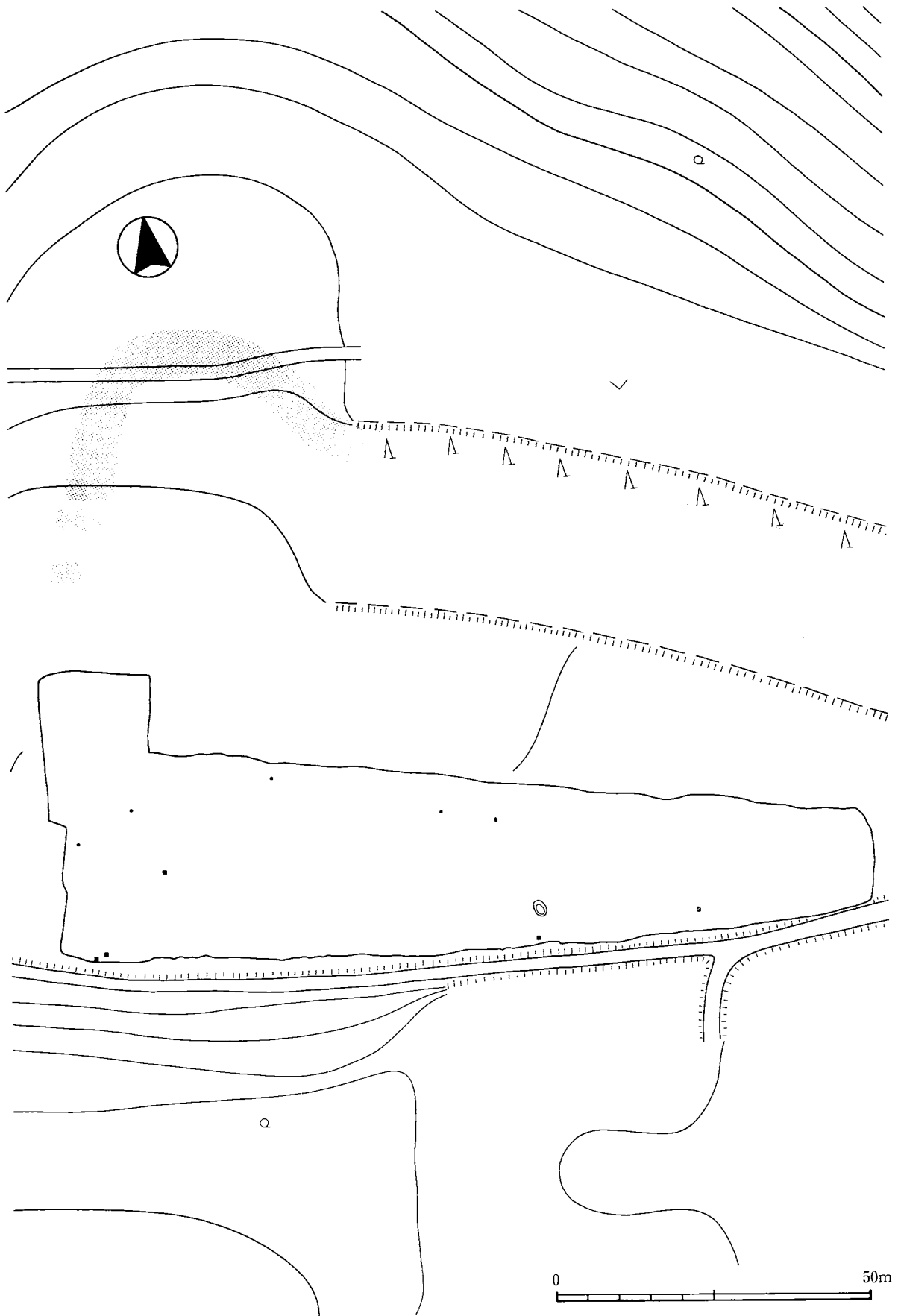
分布は、調査区の中央部西側にある。

文様は、縦位施文のみであるが、おそらくは部位

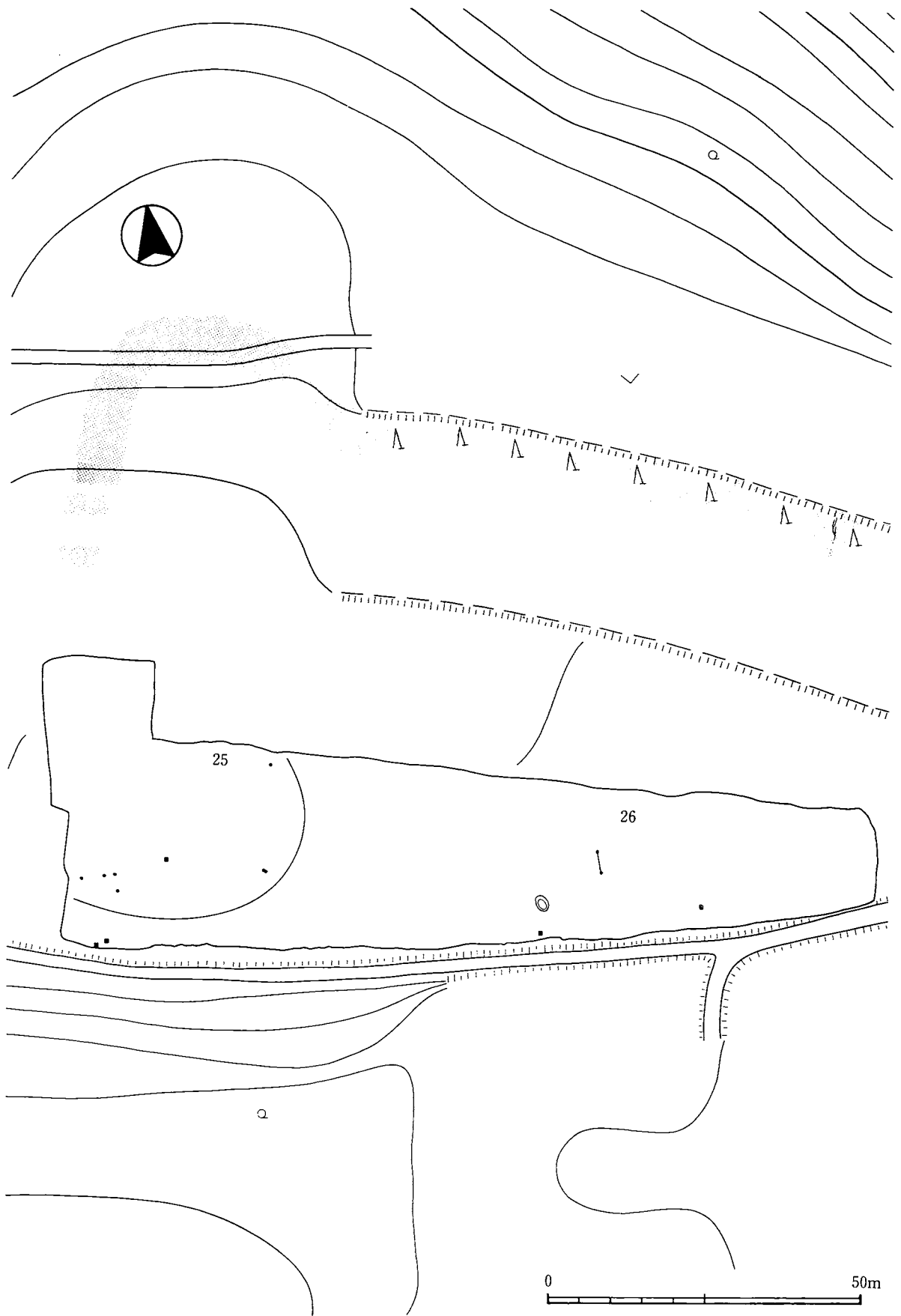


第123図 山形文土器21~23分布図

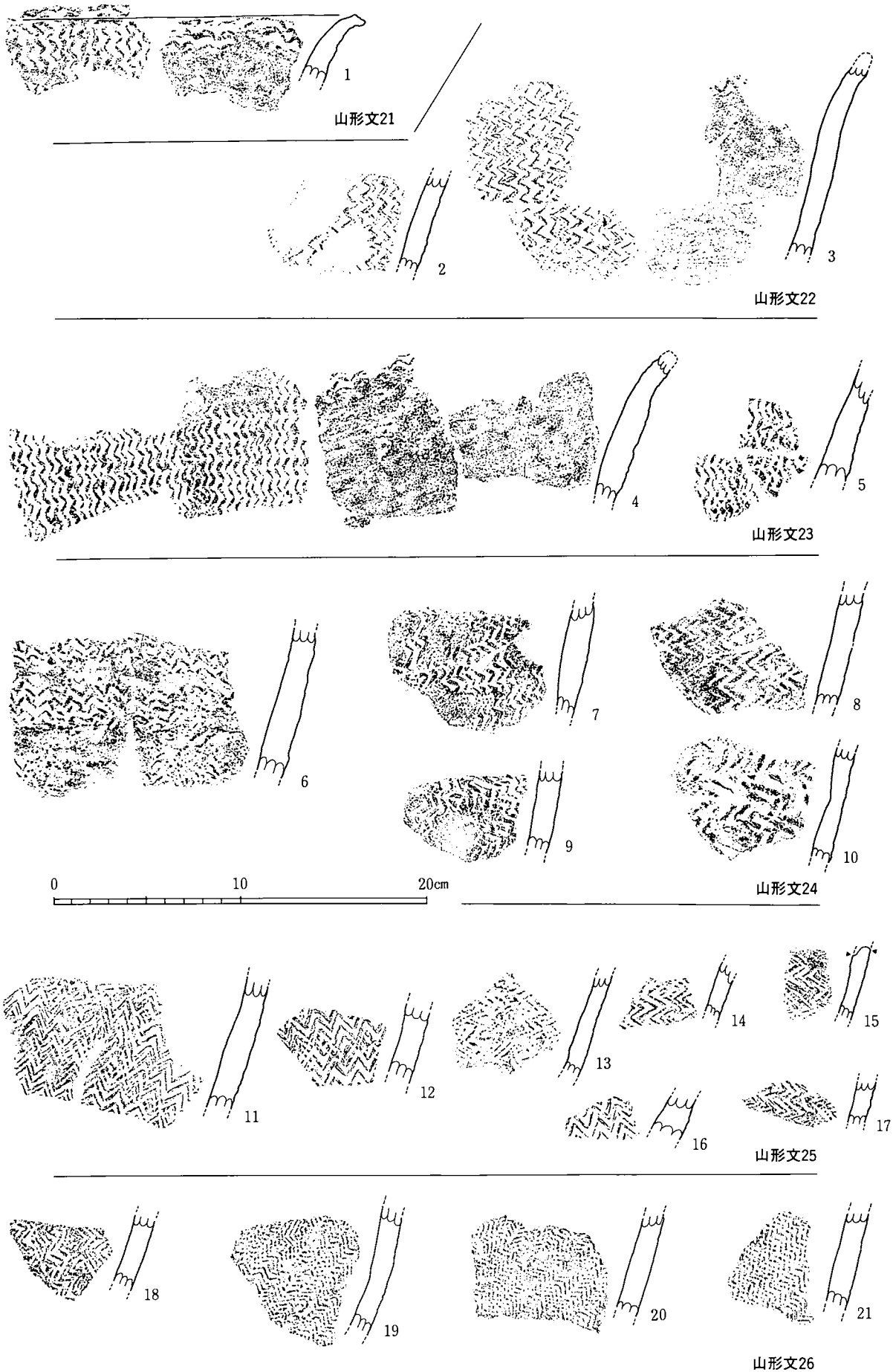




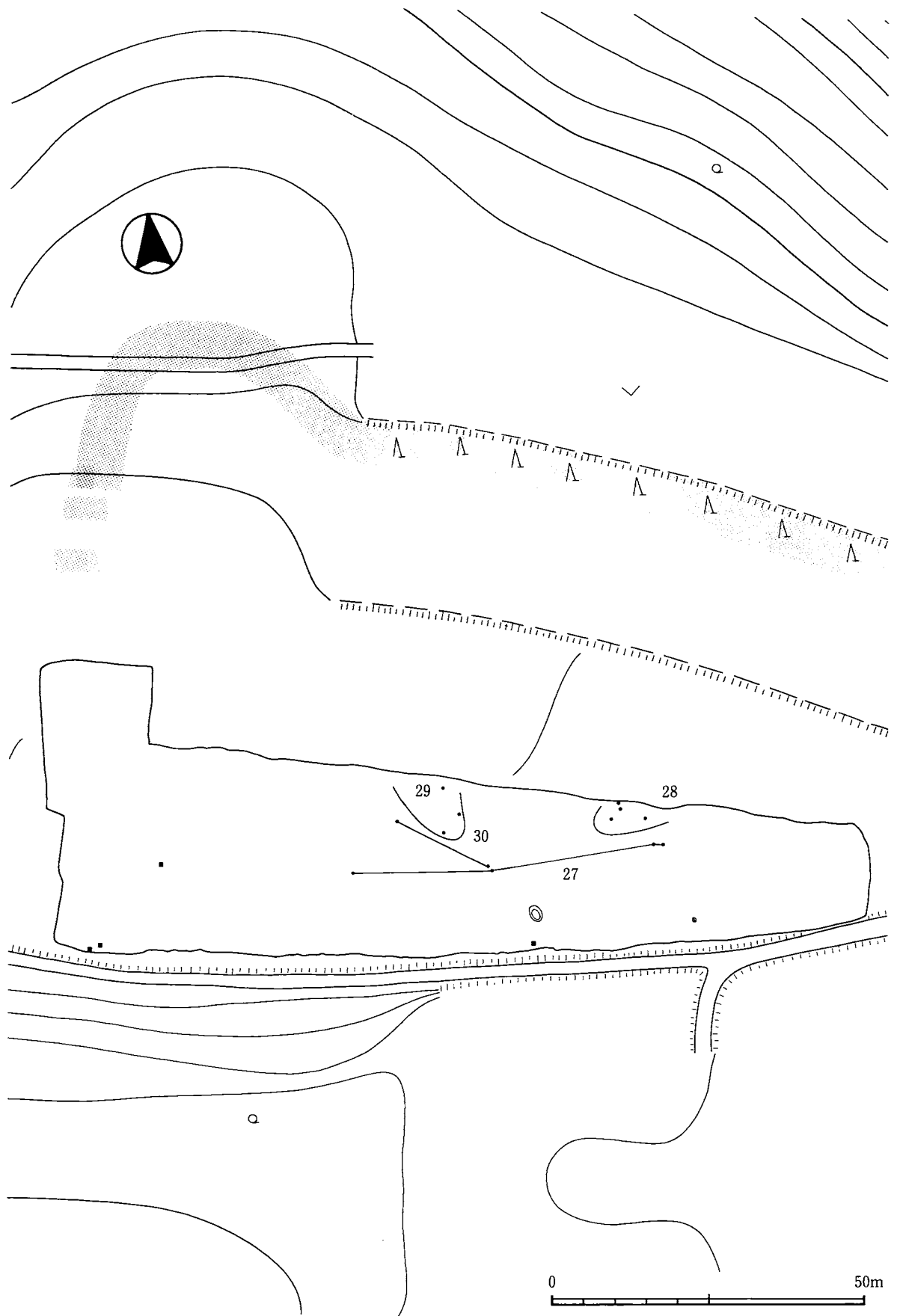
第124図 山形文土器24分布図



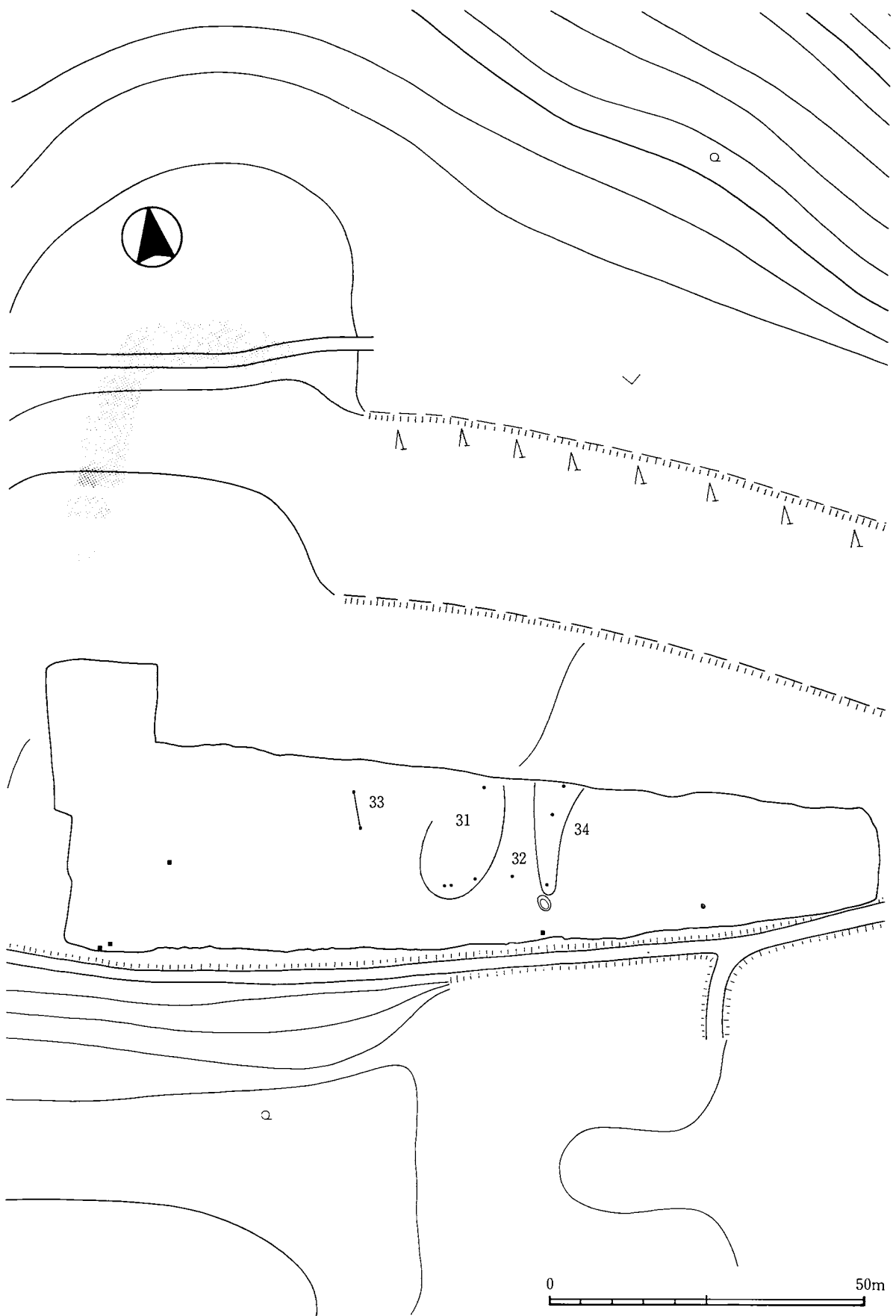
第125図 山形文土器25・26分布図



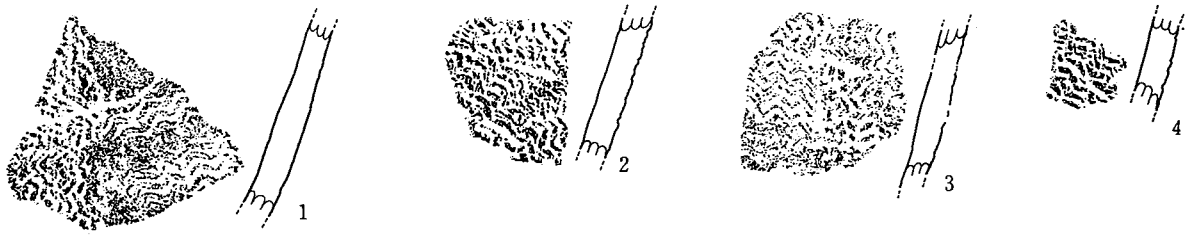
第126図 山形文土器21~26実測図



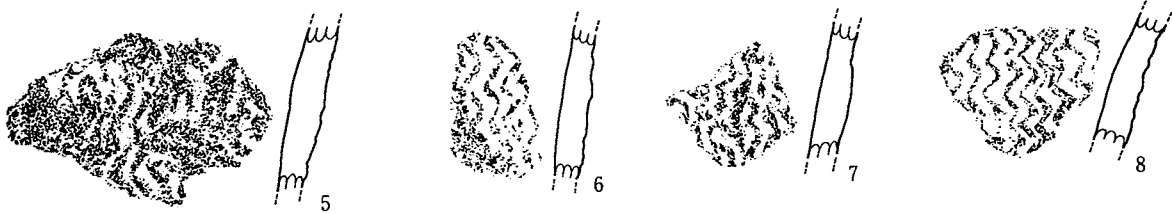
第127図 山形文土器27~30分布図



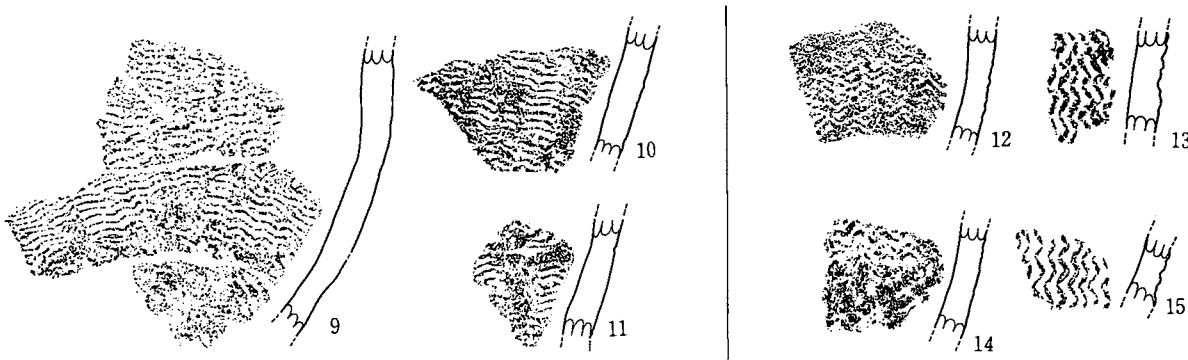
第128図 山形文土器31~34分布図



山形文27

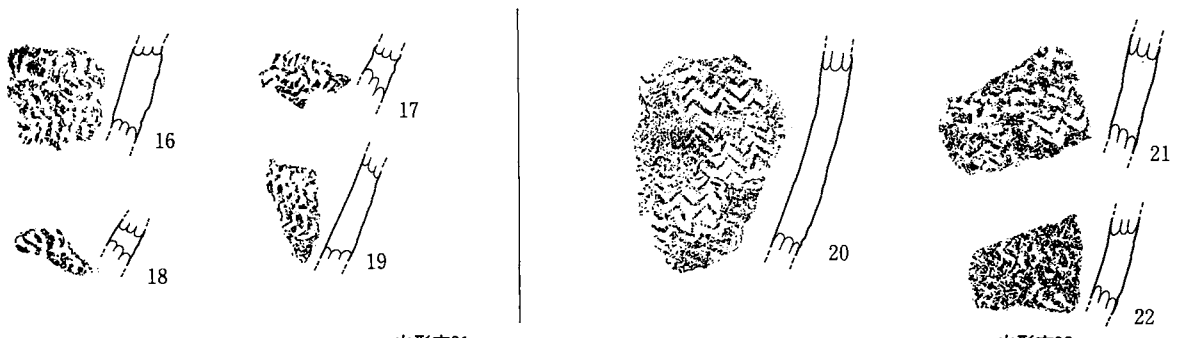


山形文28



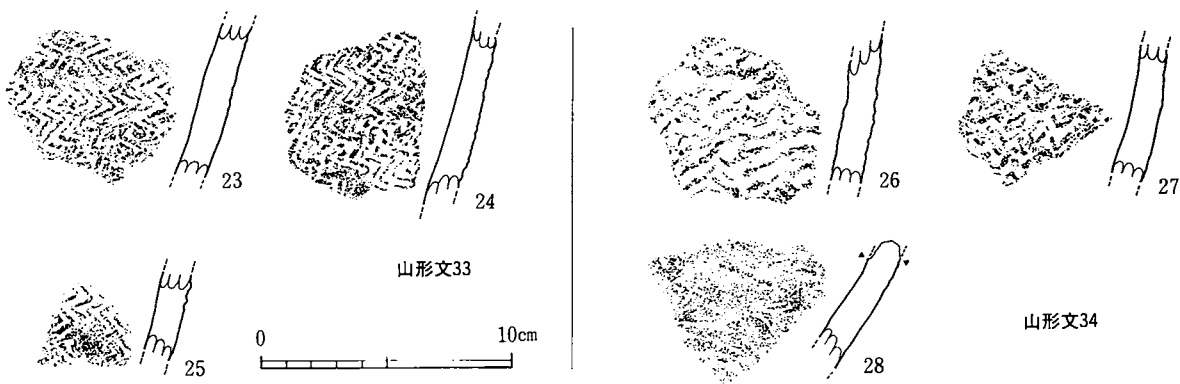
山形文29

山形文30



山形文31

山形文32



山形文33

山形文34

第129図 山形文土器27~34実測図

が違う部分では横方向の施文も存在していると予測できる。

山形文土器34 (第128・129図26～28)

破片は、3点である。これらは、すべて胴部の破片であった。

分布は、調査区の中央部の東側にある。

文様は、横位施文のみである。ただし、部位が違う部分では横方向の施文も存在していると予測できる。

山形文土器35 (第130・131図1～3)

破片は、3点である。これらは、すべて胴部の破片であり、しかもすべて小さい破片だったために、その全体形の推定はできなかった。

分布は、調査区の東側、しかもその北端にあり、比較的近距离でまとまっていた。

文様は、縦位施文のみであるが、おそらくは施文方向を違える部位が存在するであろうから、横位施文も存在するはずである。

山形文土器36 (第130・131図4～6)

破片は、3点である。これらは、すべて胴部の破片で、しかも小破片だったために、その全体像は判らない。

分布は、調査区の東側と西側にある。

文様は、横位施文のみであるが、一部に斜位施文を観察できた。ただし、これが一つの文様帯の主体をなす文様なのかどうかは不明である。

山形文土器37 (第130・131図7)

破片は3点で、すべて接合している。ただし、全体の器形は破片の大きさがそれに耐えうるものではなく、不明である。

分布は、調査区の東端にあり、すべて近接した場所からの出土であった。

文様は、縦位施文のみである。しかし、施文方向が異なる文様帯が存在するだろうから、横位施文が存在するはずである。

山形文土器38 (第130・131図8)

破片は4点、すべて接合している。ただし、器形は不明である。

分布は、調査区の東側、その北端にまとまって認められた。

文様は、いずれも縦位施文である。おそらく、こ

の資料は、胴部破片の中でも口縁部に近い部位であろうから、この部位よりも下の部分は横位施文となると予想される。

山形文土器39 (第130・131図9・10)

破片は、2点ある。その断面形から10が口縁部に近い部分、9がその下という推定が可能である。こうしたことを考え合わせれば、口縁部では外反し、胴部中位ではやや丸みをもつようになるという器形が推定される。

分布は、調査区の西端にある。

文様は、いずれも縦位施文である。ただし、胴部下での文様は、横位施文が予想される。

山形文土器40 (第130・131図11・12)

破片は、2点である。いずれも胴部下半と考えられる。

分布は、中央部の中央にある。

文様は、いずれも縦位施文である。なお、文様帯の構成等については、この資料から予測することはできない。

山形文土器41 (第130・131図13・14)

破片は、2点ある。いずれも胴部破片で、小破片であった。

分布は、調査区の中央部西側にある。

文様は、すべて縦位施文である。ただし、文様帯を異にする他の部位には横位施文もあると考えられる。

山形文土器42 (第130・131図15・16)

破片は、2点である。いずれも胴部の破片で、小さい破片であった。

分布は、すべて調査区の東側、その北端と南端にある。

文様は、すべて縦位施文である。

山形文土器43 (第130・131図17・18)

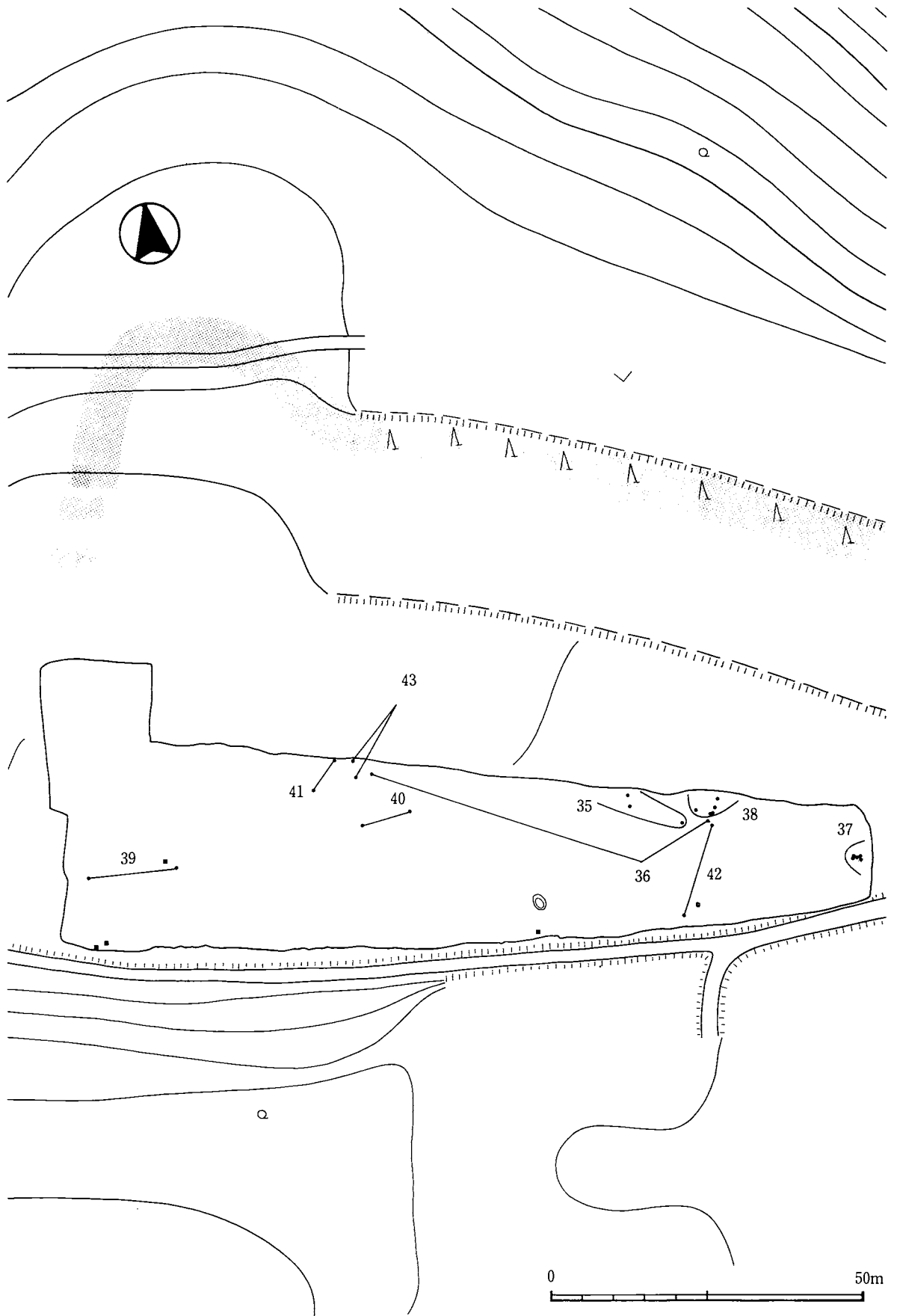
破片は、2点である。いずれも胴部の破片であり、その器形復元のためには小さすぎる。

分布は、すべて調査区の西側にあり、その北端にみられた。

文様は、斜位施文である。

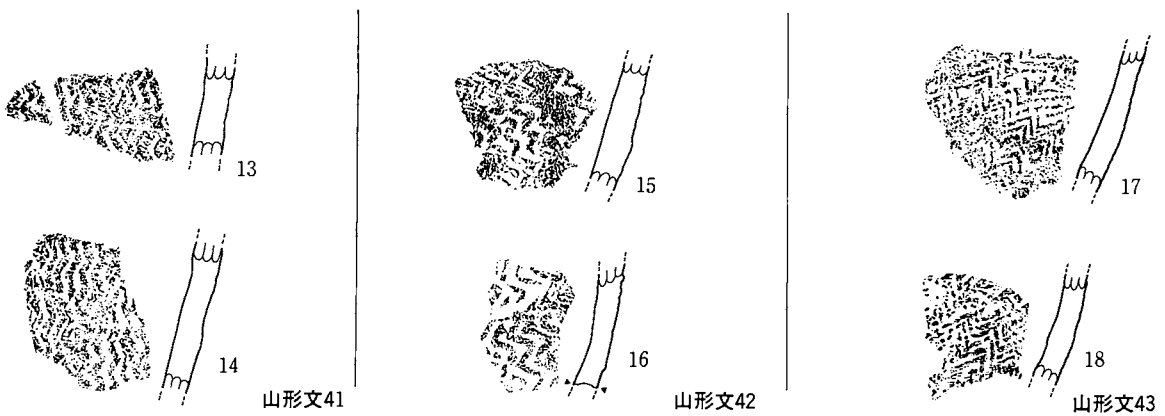
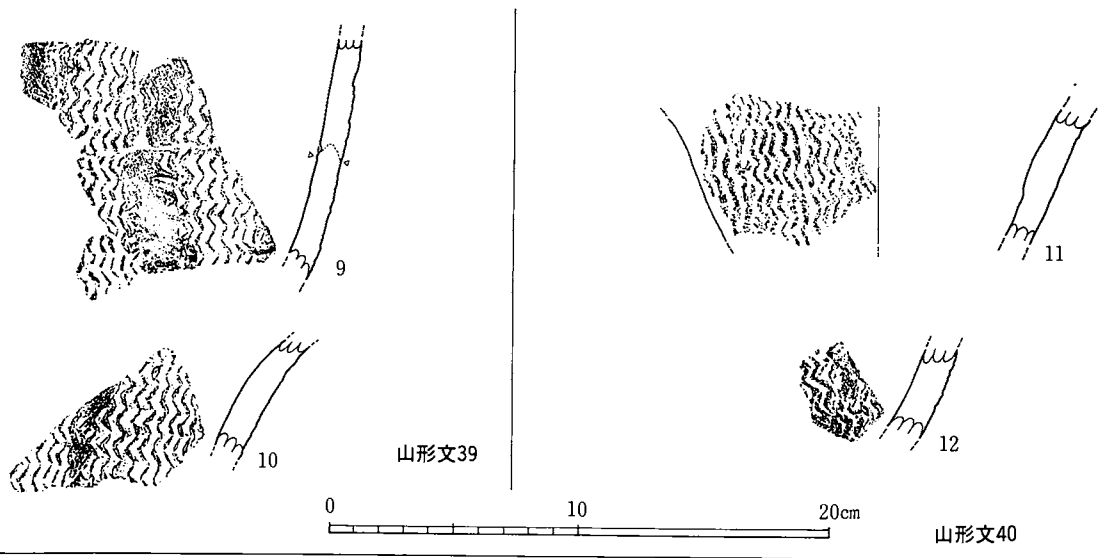
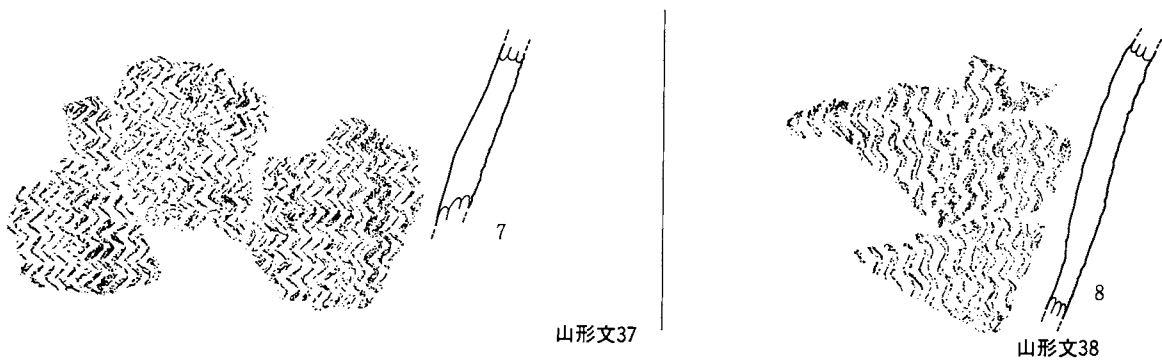
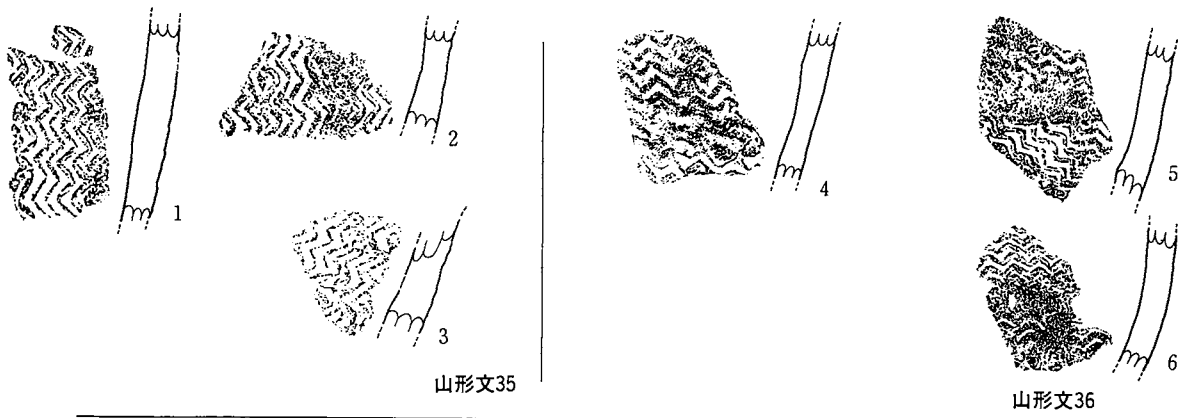
山形文土器44 (第130・131図1・2)

破片は、2点である。いずれも胴部の破片であり、その器形を復元するには資料不足である。



第130図 山形文土器35~43分布図





第131図 山形文土器35~43実測図

分布は、調査区の中央部、その北端にあった。

文様は、横位施文であるが、異なる部分には縦位施文が存在しているかもしれない。

山形文土器45 (第132・133図3・4)

破片は、2点で、いずれも胴部の破片である。

分布は、すべて調査区の東側にある。

文様は、縦位施文である。

山形文土器46 (第132・133図5・6)

破片は2点で、胴部の破片であった。

分布は、調査区の東端にある。

文様は、すべて横位施文である。

山形文土器47 (第132・133図7・8)

破片は2点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の西端、しかもその南端にある。

文様は、すべて縦位施文である。

山形文土器48 (第132・133図9・10)

破片は、いずれも胴部の破片にあたり、2点である。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、横位施文である。

山形文土器49 (第132・133図11・12)

破片は、胴部2点であった。

分布は、すべて調査区の中央部にあり、その西側である。

文様は、横位施文である。

山形文土器50 (第132・133図13・14)

破片は2点で、胴部の破片である。

分布は、すべて調査区の西端にある。

文様は、縦位施文である

山形文土器51 (第132・133図15・16)

破片は、3点で、いずれも胴部である。

分布は、すべて調査区の西側にある。

文様は、横位ないし斜位であり、それが同一破片内で交錯している資料もある。おそらく、この資料は、文様施文方向を違える二つの文様帯の境付近に位置するものであろう。

山形文土器52 (第132・133図17)

破片は2点で、提示している資料はそれが接合したものである。胴部の破片である。

分布は、すべて調査区の西側、しかもその北端に

ある。

文様は、縦位施文である

山形文土器53 (第132・133図18・19)

破片は3点で、部位は、胴部と底部である。

底部形状は、底が凸レンズ状に膨らんだ平底である。まず凸レンズ状の粘土板を作って乾燥させ、その後に輪積みを進めるという手順を物語る資料である。底径は、4.9cmである。

分布は、すべて調査区の中央部、しかもその北端にある。

文様は、胴部が横位施文である。また、底部近くは縦位施文で、その上にはすぐに横位施文がきてもいる。ただし、これらの資料からこの土器の文様帯の構成を知ることは不可能である。

その他の破片 (第134図～第141図)

個体識別を通して、53の個体別資料を認識できた。しかし、これらは出土した山形文土器の破片の中の一部にすぎない。ここでは、こうした識別作業の過程で認識できなかったものについて、その提示をおこなうことにしたい。

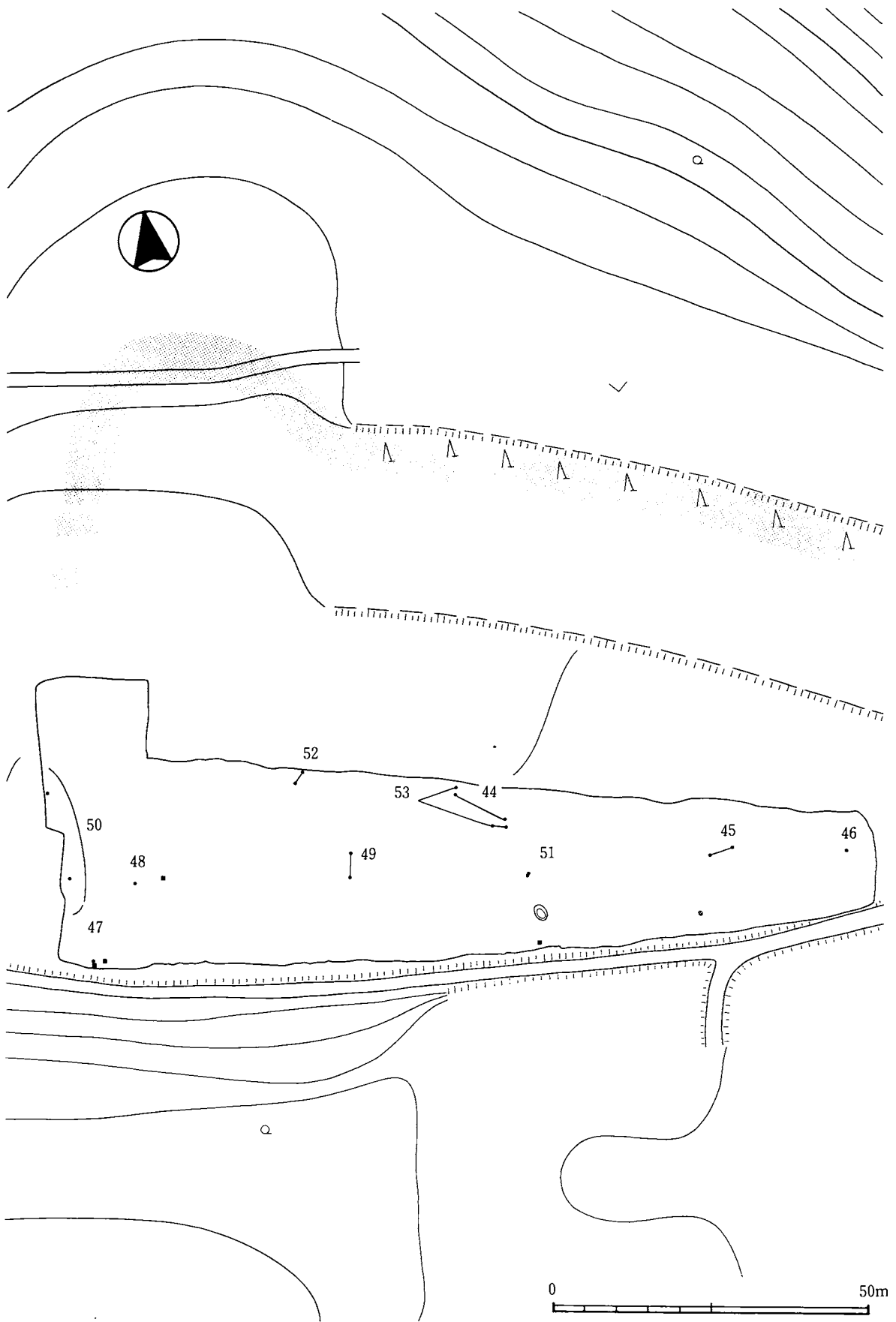
第134図から第136図31までは、口縁部の破片である。こうした資料の特徴を型式学的な視点で抽出しようとするれば、以下の視点があろう。

①表面の施文方向が、縦ないし斜めなのか、横なのか。または、それらが組合わさっているのか。

②裏面の文様には、山形文があるのか、原体条痕があるのか、または無文なのか。また、それぞれの文様がどういった様子なのか。

こうした視点をもって、ここで提示した山形文土器をみると、一部に横位の表面文様があったり、裏面が原体条痕や無文の土器だったりするが、そのほとんどは、表面が縦位ないし斜位施文、裏面が横位の山形文という特徴を備えている。これを、この資料群の主体的な型式的特徴とみなそう。そして、それに付属する形で、表面が横位施文ないしそれに近い斜位施文で、裏面に原体条痕を持つ型式の土器や、裏面が無文の型式の土器があるようだ。なお、こうしたそれぞれの型式群をどのように理解するかは、次の章に譲ろう。

一時的な乾燥の単位を示す痕跡として、凹形剝離



第132図 山形文土器44～53分布図

面を残す破片がある。口縁部では、この端部と剝離面とがセットとなっている。したがって、その幅を測ることにより、土器製作上の乾燥単位が判ることになる。こうした痕跡は、3点でみとめられ、その幅は3.6cmと4.2cm（2点）であった。

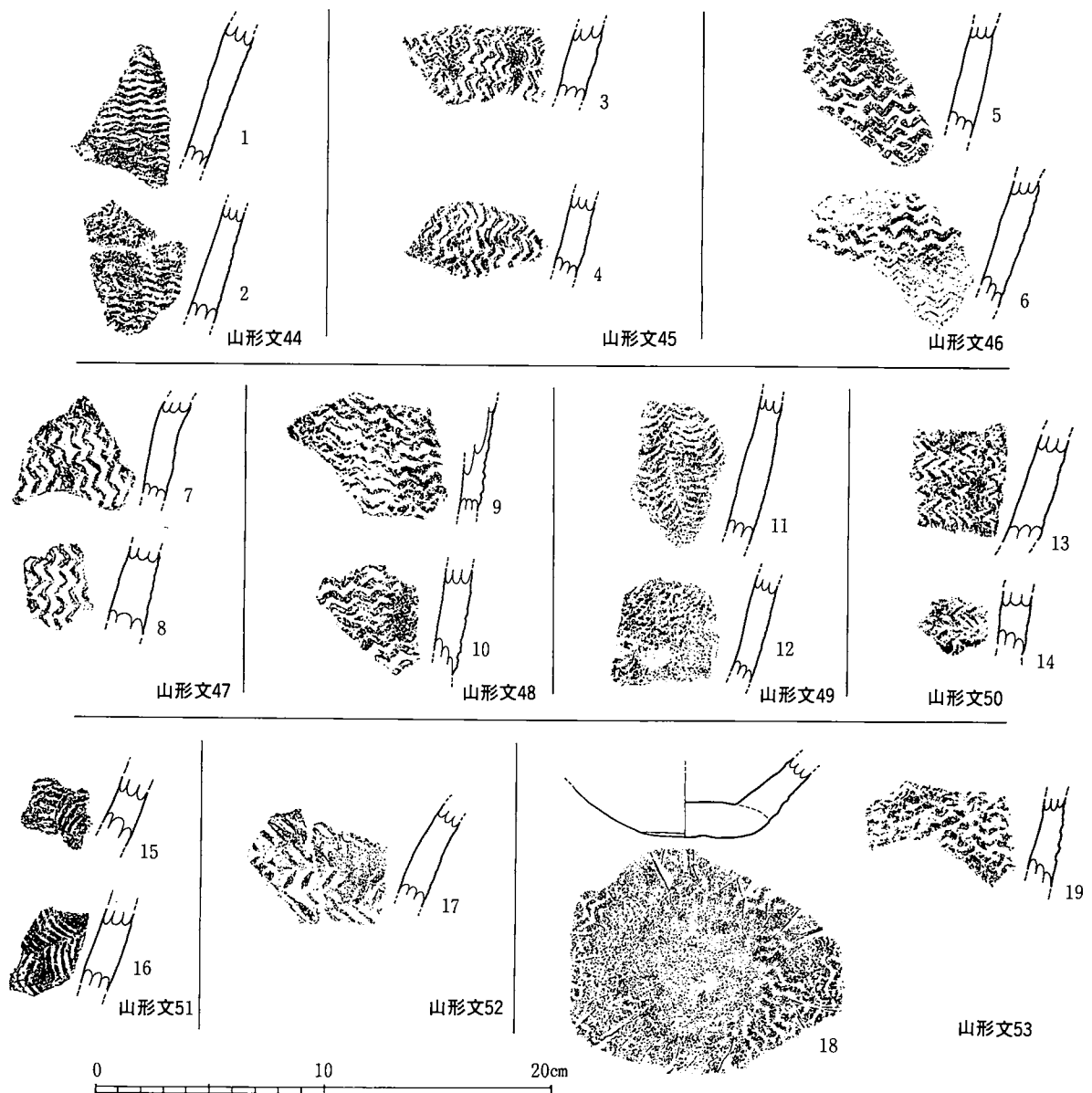
第136図32～第141図56は、胴部の破片である。大小取り揃えて提示しているが、これらを型式的に整理するとなるとなかなか困難である。そうした中で、何らかの特徴を抽出しようとすれば、磨り消しの技法を使って無文帯を縦に走らせる土器が存在する。ただし、これは量的にまとまった資料ではないので、主要な視点とはならないだろう。

一時的な乾燥の単位を示す痕跡として、胴部では凸形剝離面と凹形剝離面とがセットとなって、一つの破片に残されている資料がある。こうした資料は、ここで提示している中では2点ある。その幅は、5.1cmと6.9cmである。

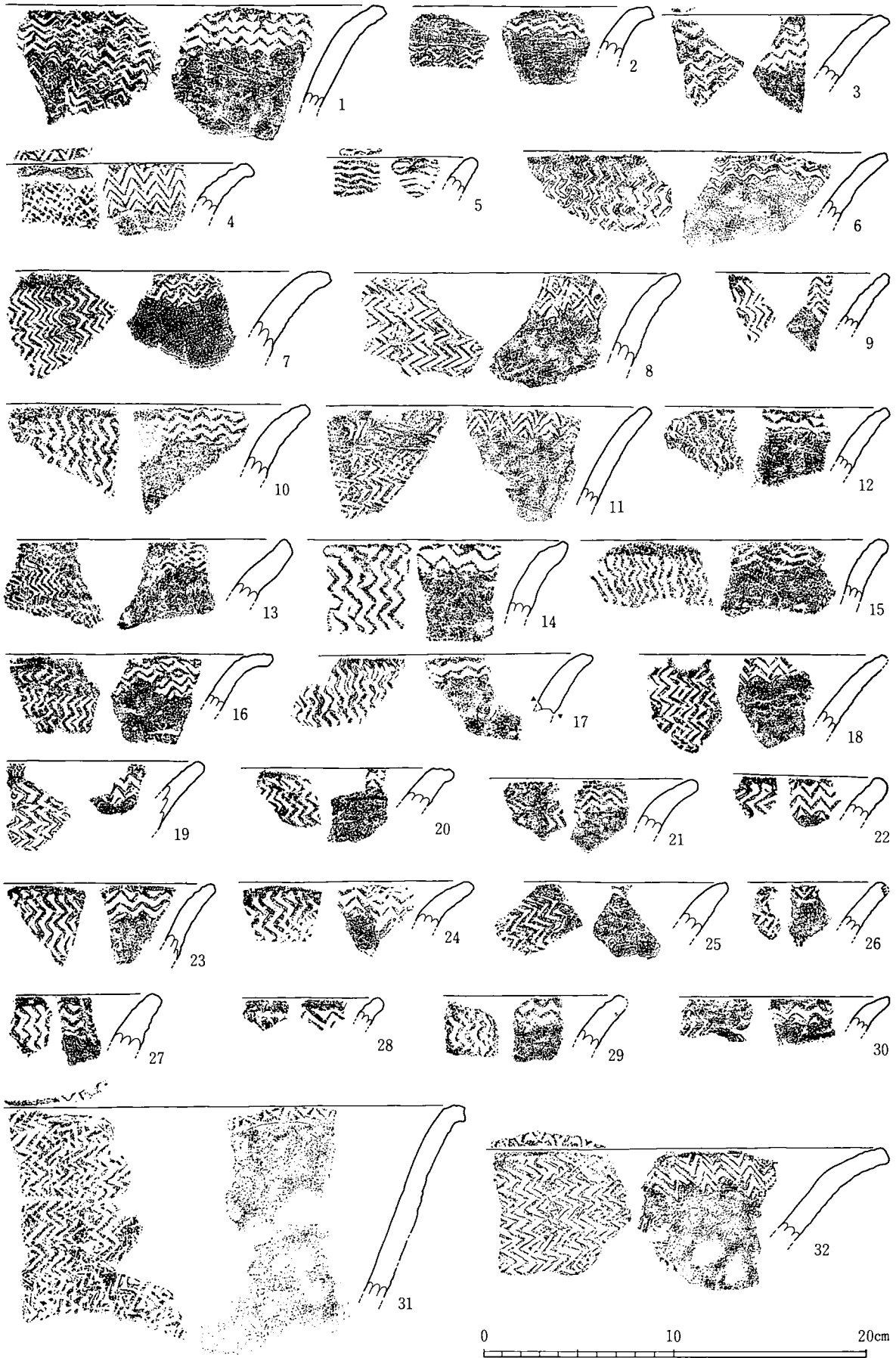
底部関係の資料は、第141図57～63である。どの資料も丸底である。ただし57は、平底の可能性が高い。

#### 異種押型文併用土器とその分布

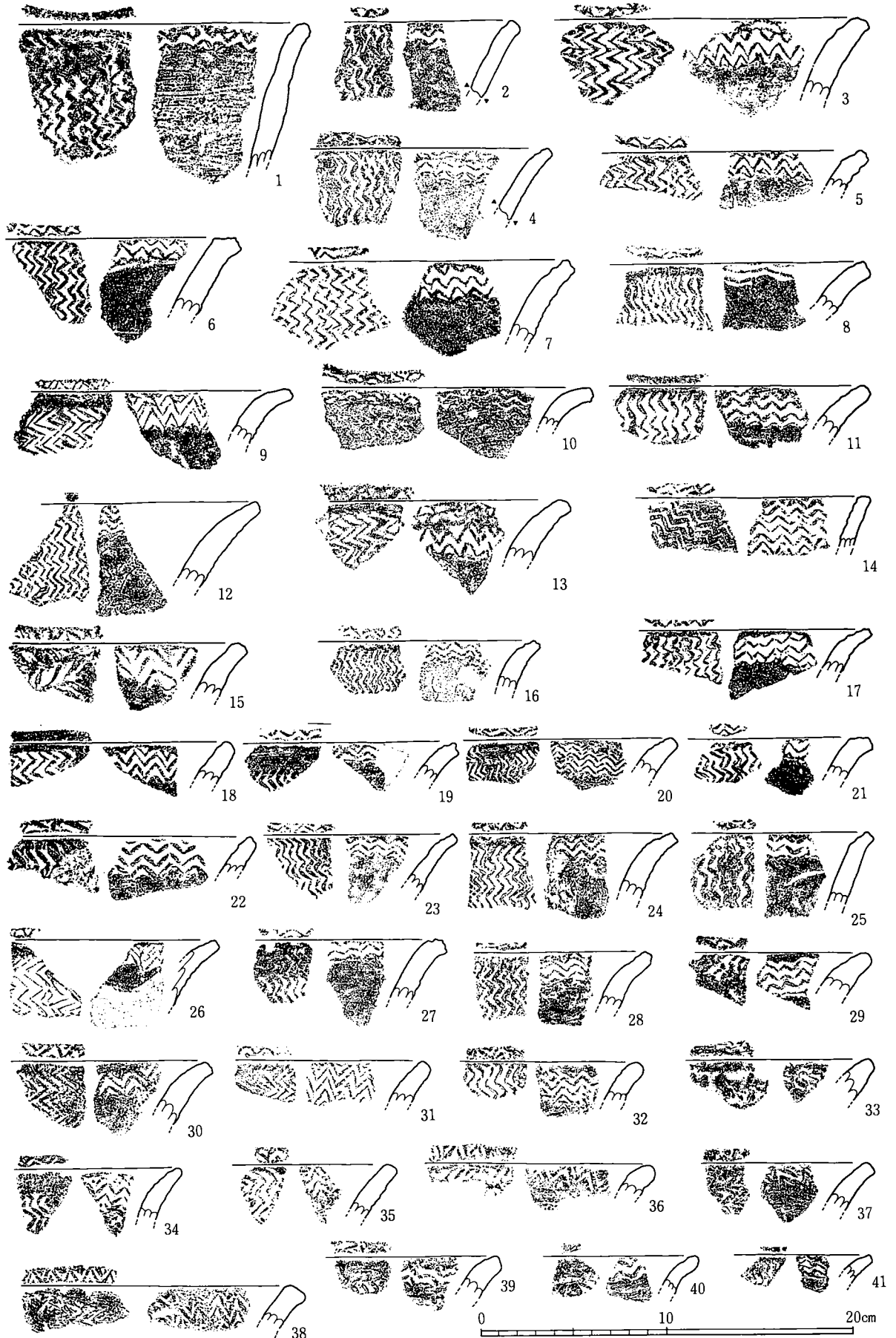
この土器は、異なる種類の押型文が同じ土器の中で併用されているものである。分布は、調査区に点在した状況で、何らの集中も看取できなかった（第142図）。



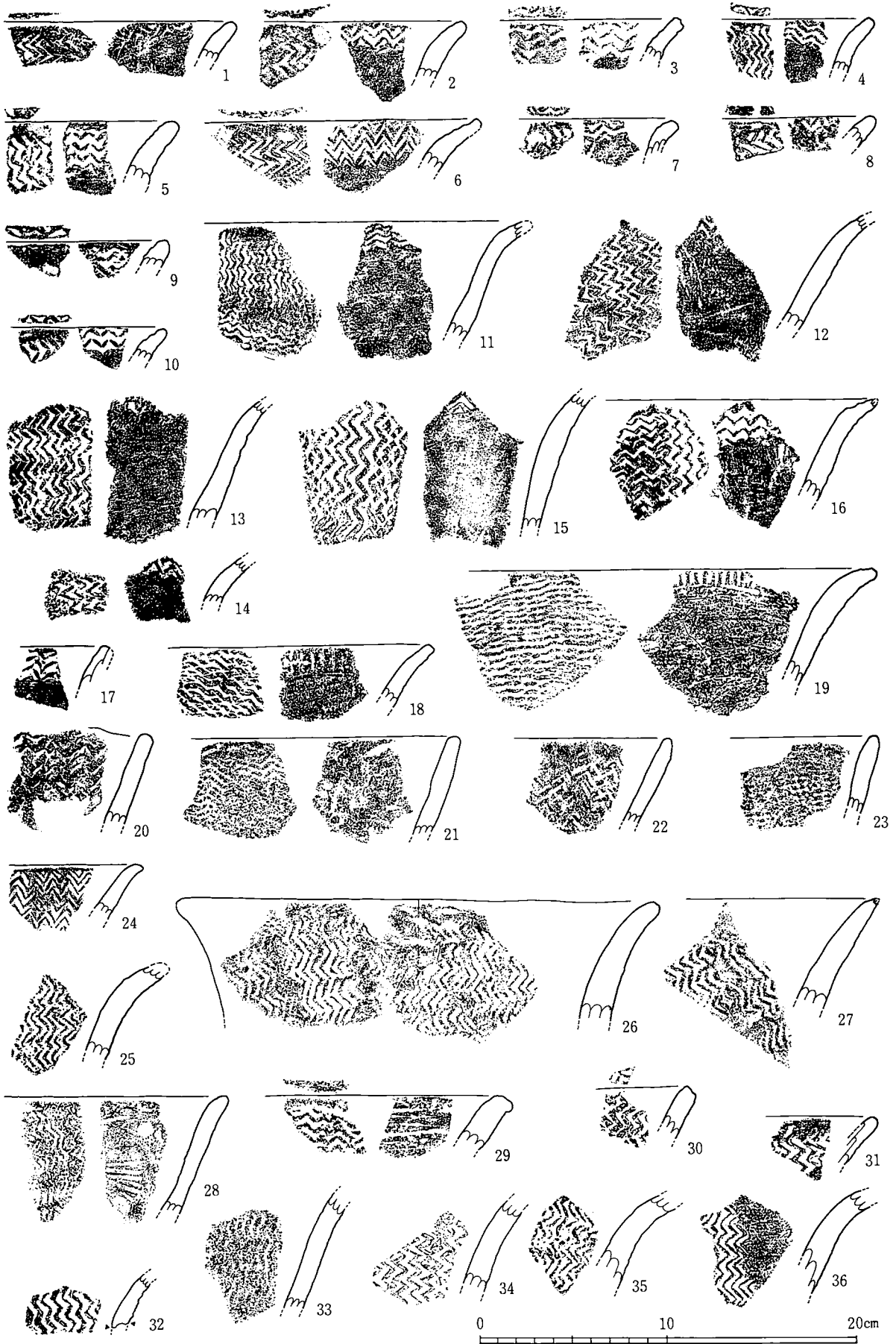
第133図 山形文土器44～53実測図



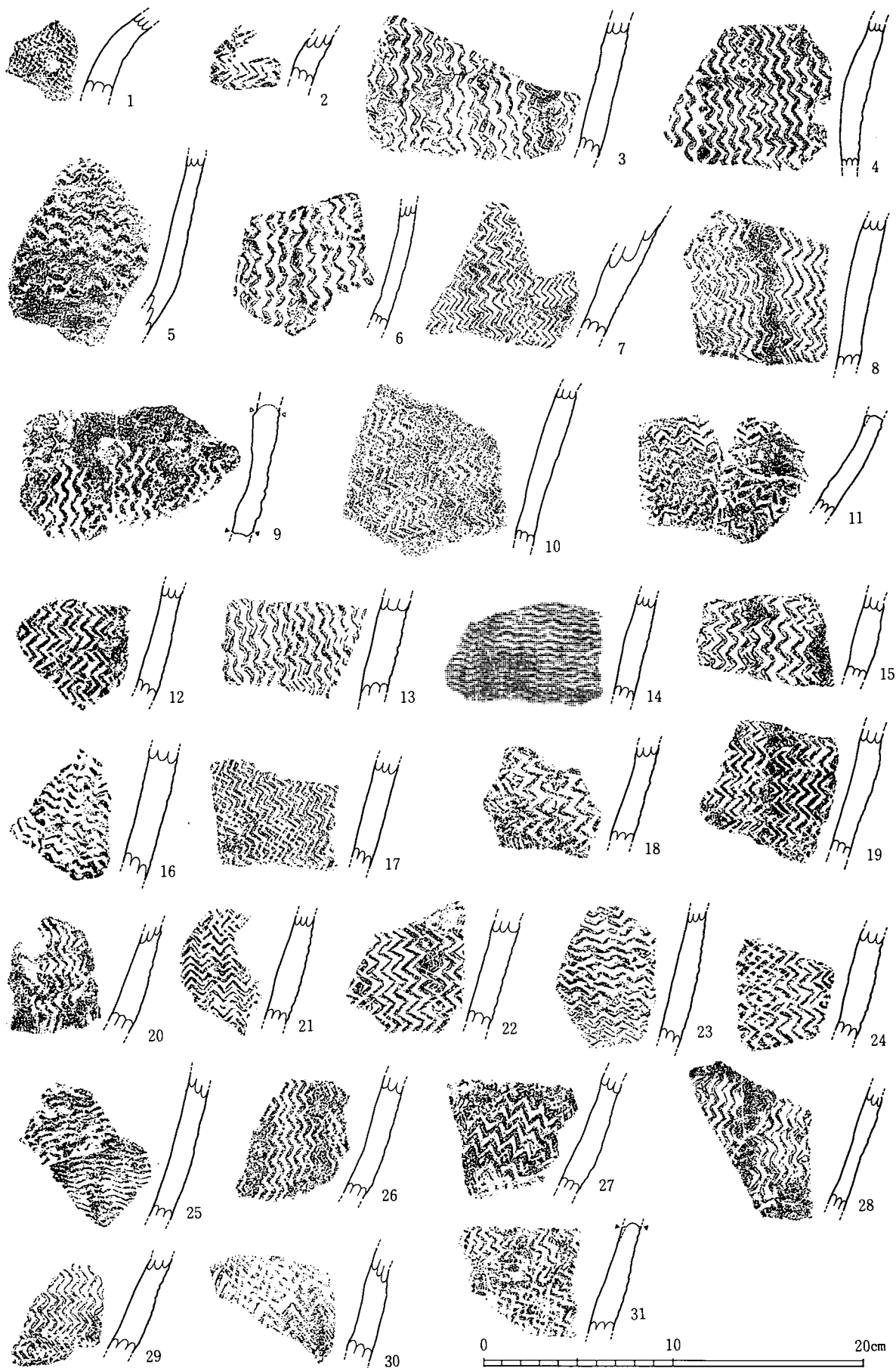
第134図 山形文土器その他実測図



第135図 山形文土器その他実測図

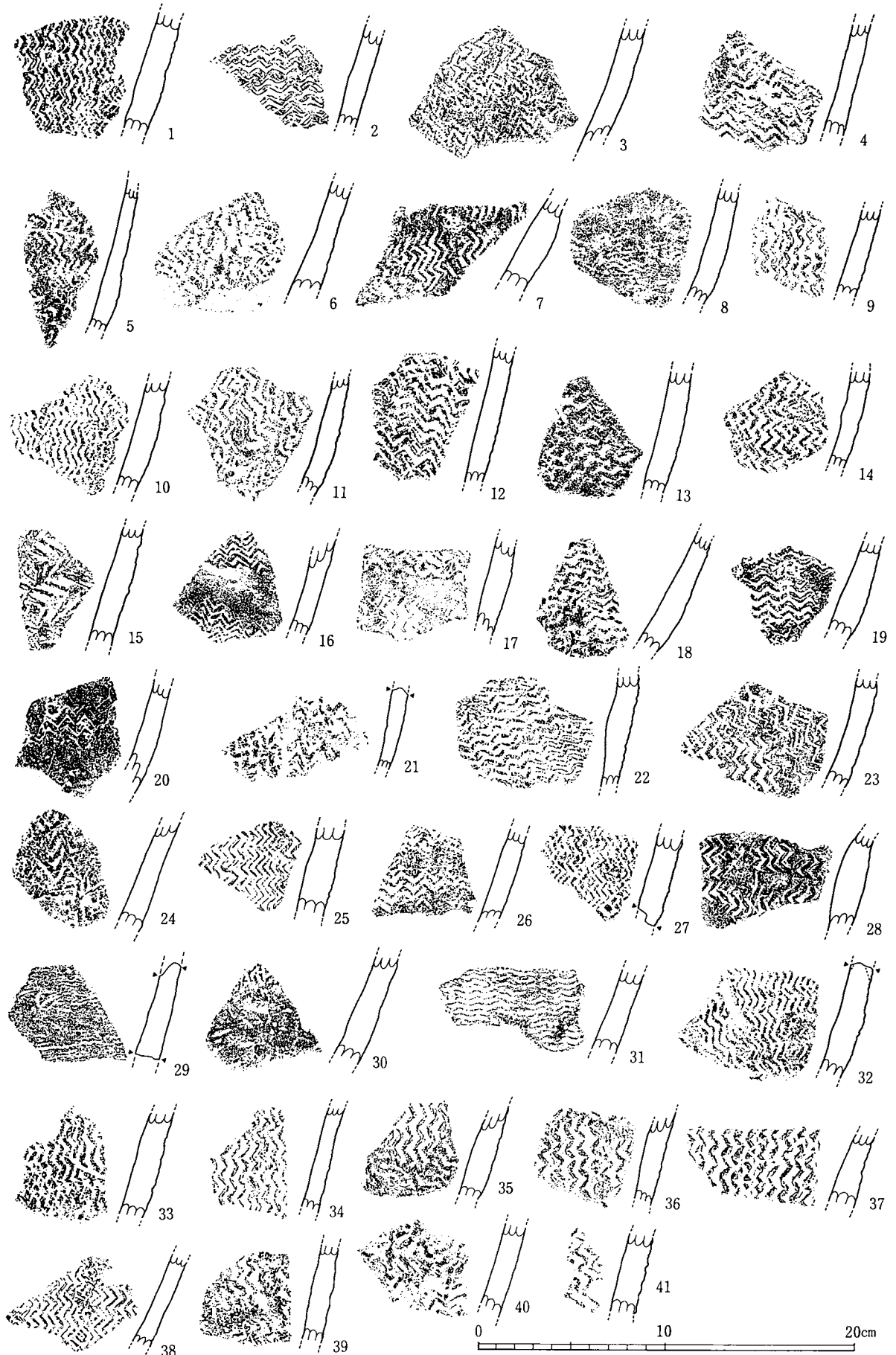


第136図 山形文土器その他実測図

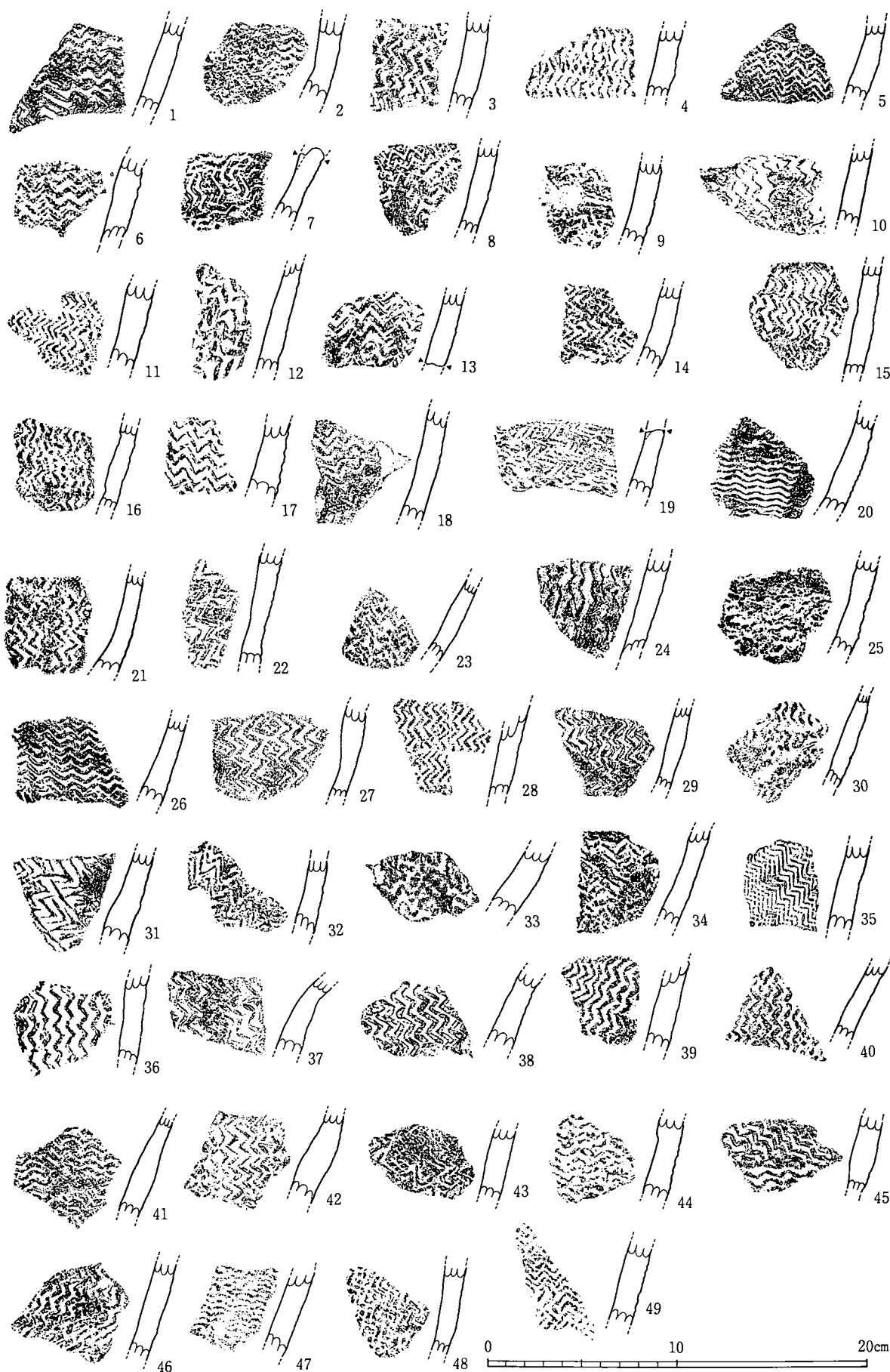


第137図 山形文土器その他実測図

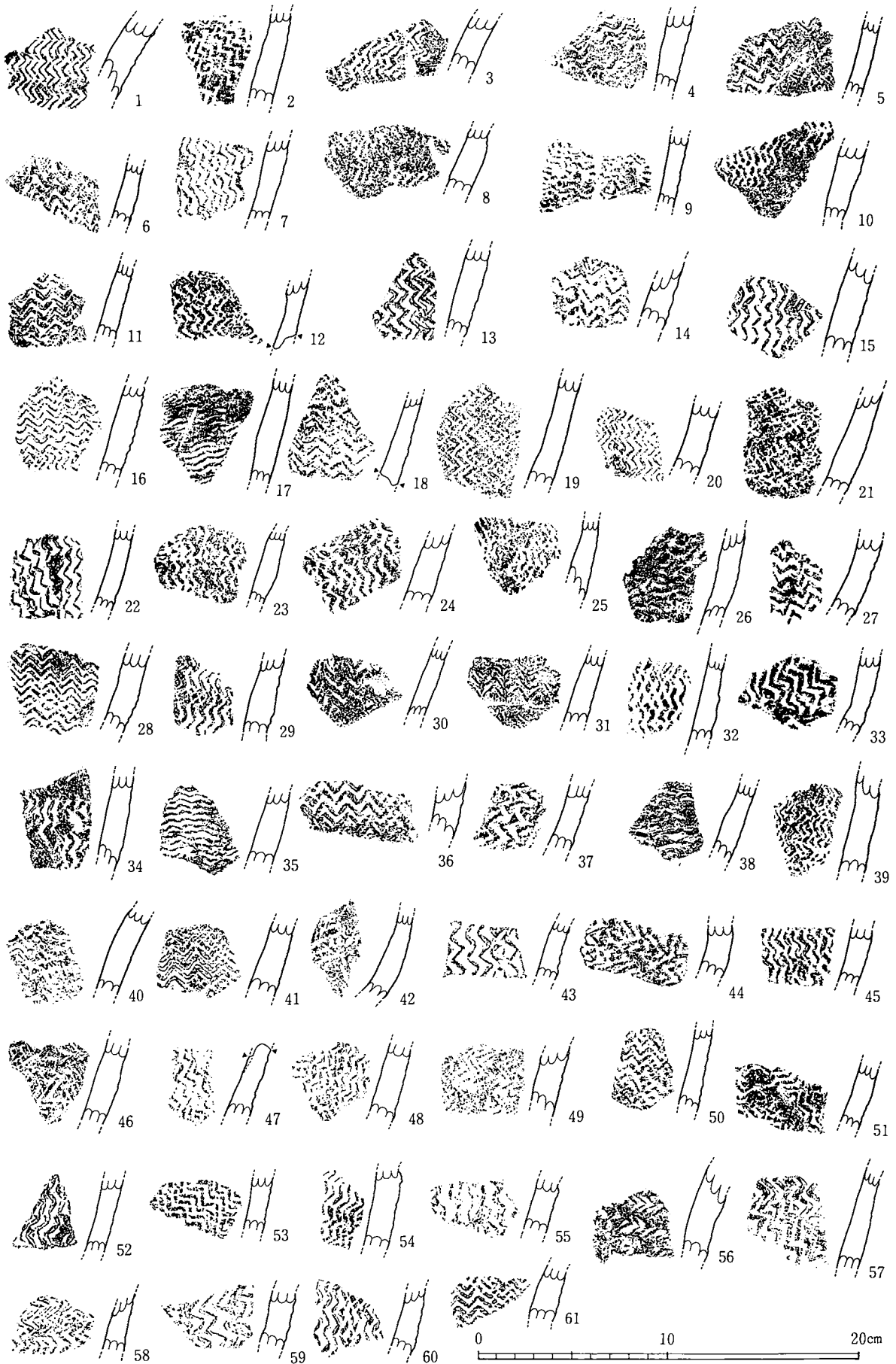




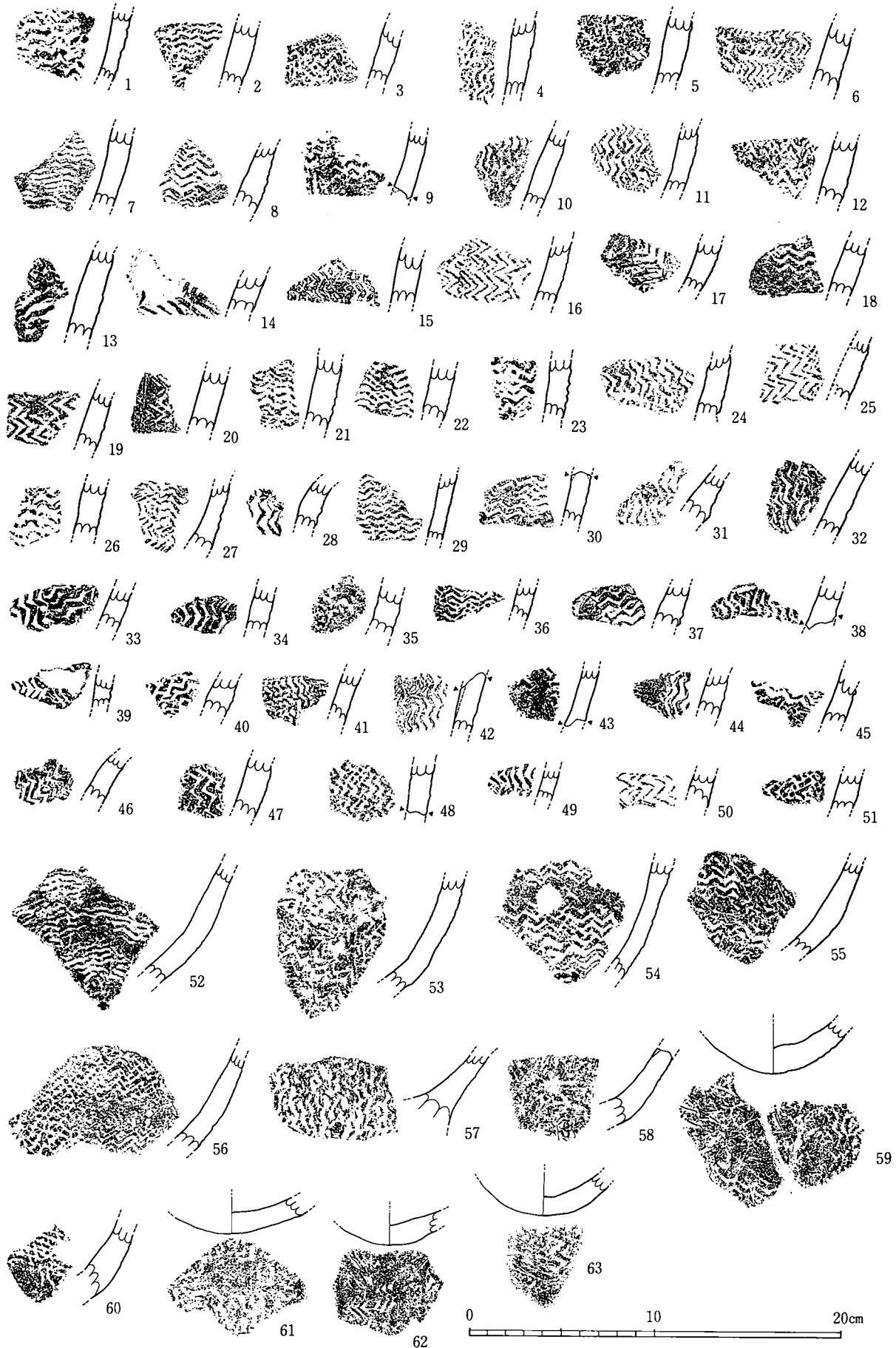
第138図 山形文土器その他実測図



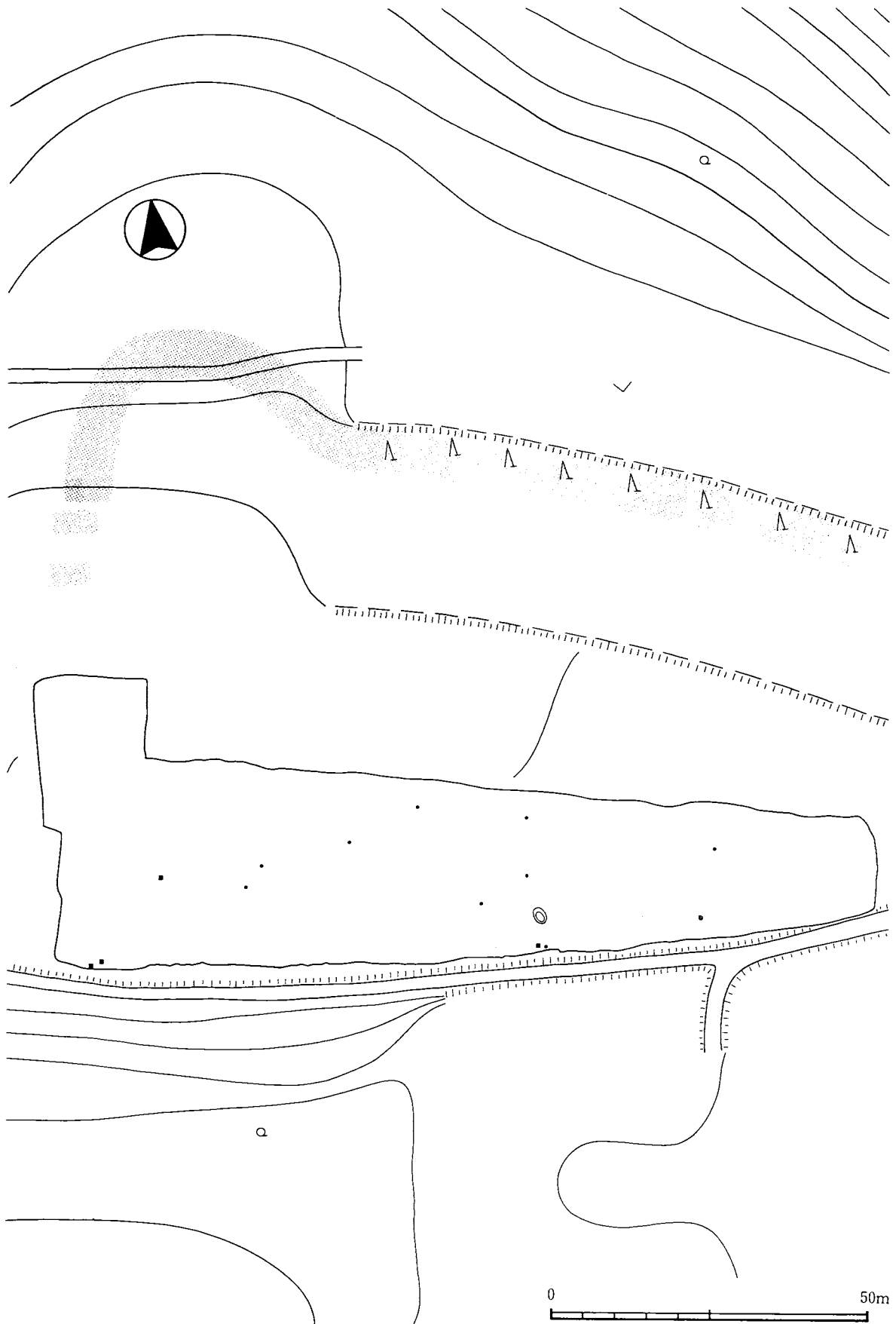
第139図 山形文土器その他実測図



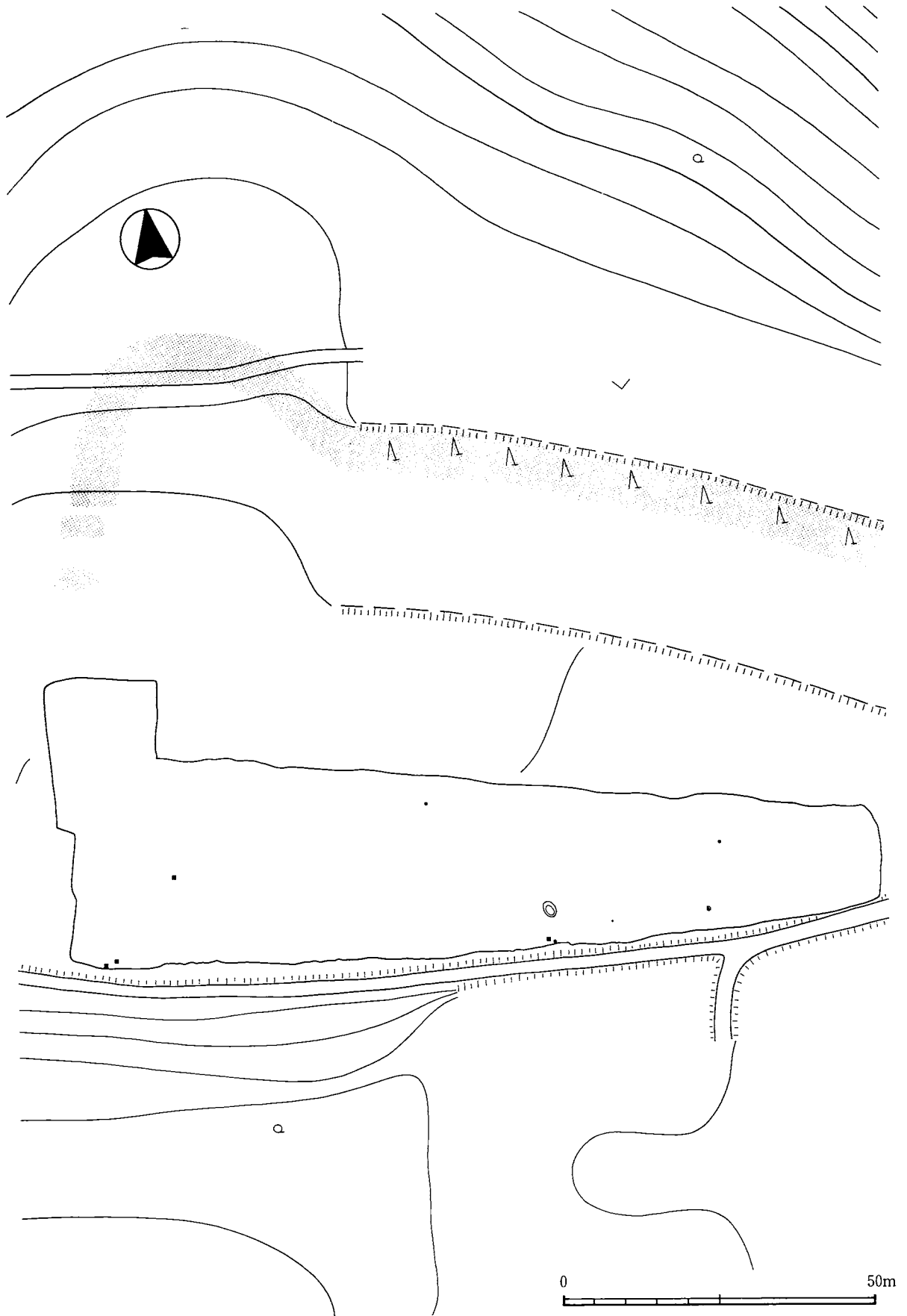
第140図 山形文土器その他実測図



第141図 山形文土器その他実測図



第142図 異種押型文併用土器分布図



第143図 異種押型文併用土器1分布図

出土した土器の個体識別をおこなったが、一つの個別別資料しか認識できなかった。それは裏をかえせば、識別できなかった破片の数だけ個別別資料があるということでもあろうか。

異種押型文併用土器 1 (第143・144図 1～3)

個体識別の結果、認識できたのは3点であった。いずれも胴部である。

分布は、中央部と東側にある。

文様は、楕円文と山形文との併用である。ただし、同じ破片の中で文様の違いによる文様帯の区分を示す資料は、2で交錯しているものもあるが、基本的には見られない。

土器は輪積み手法で製作されている。その痕跡は、凸形剝離面と凹形剝離面とがセットになるが、その幅を測ってみると、5.7cmであった。

その他の破片 (第144図 4～10)

4～6, 10は、口縁部の破片である。表面には斜位の楕円文、裏面口縁部には山形文が施文されてい

る土器(4・6・10)。また、5は、表面には縦位楕円文、裏面口縁部には横位山形文がみられる。

7～9は、胴部の破片である。7の文様は、上部で横位の山形文、下部で縦位の楕円文である。8の表面には、山形文と楕円文が交錯して施文されている。9も同様に交錯した文様ではあるが、8よりは整合的である。

② 押型文・捺糸文併用土器

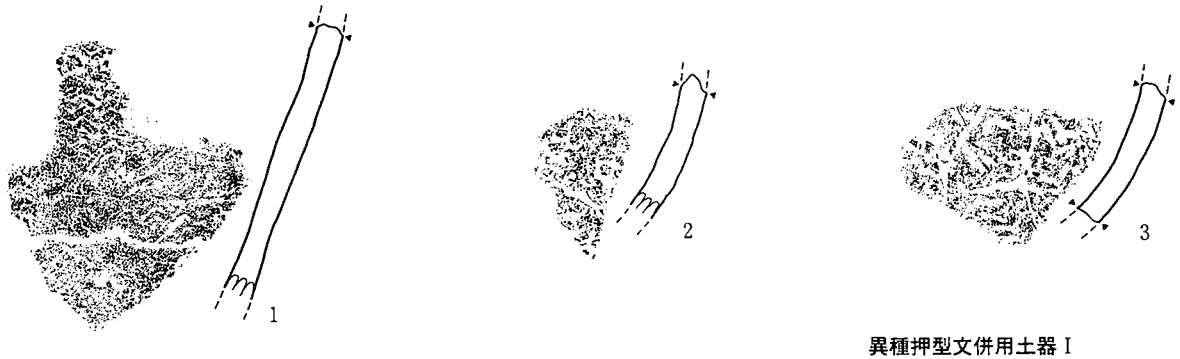
この土器は、押型文と捺糸文が同じ個体の中で併用されている土器である。分布は、調査区の全域に散在した状況で出土している(第145図)。

出土した土器の個体識別をおこない、5つの個別別資料を認識した。

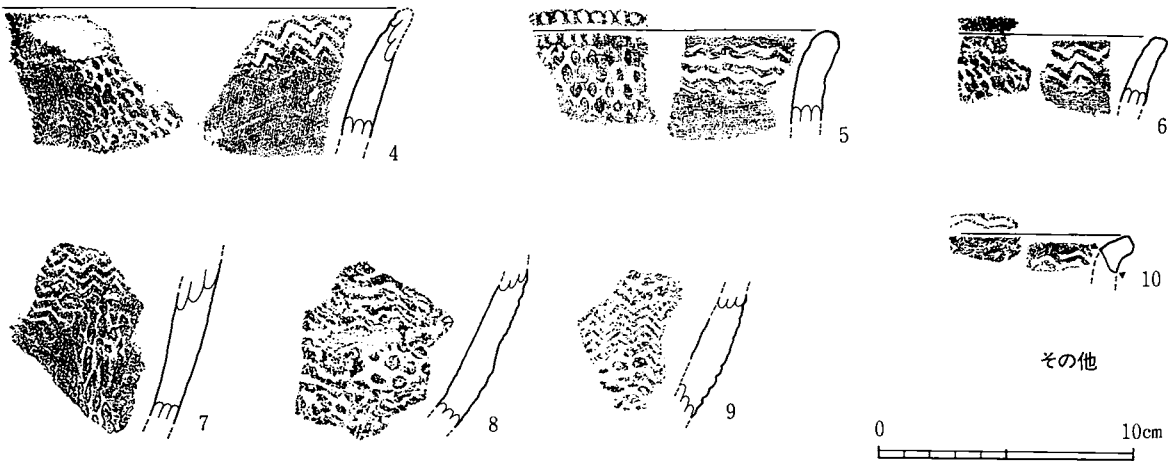
押型文・捺糸文併用土器 1 (第146・149図 1～9)

破片は、11点であった。その部位は、口縁部と胴部である。器形は、口縁部が強く外反し、胴部が直線的ないしやや丸みを持つという特徴である。

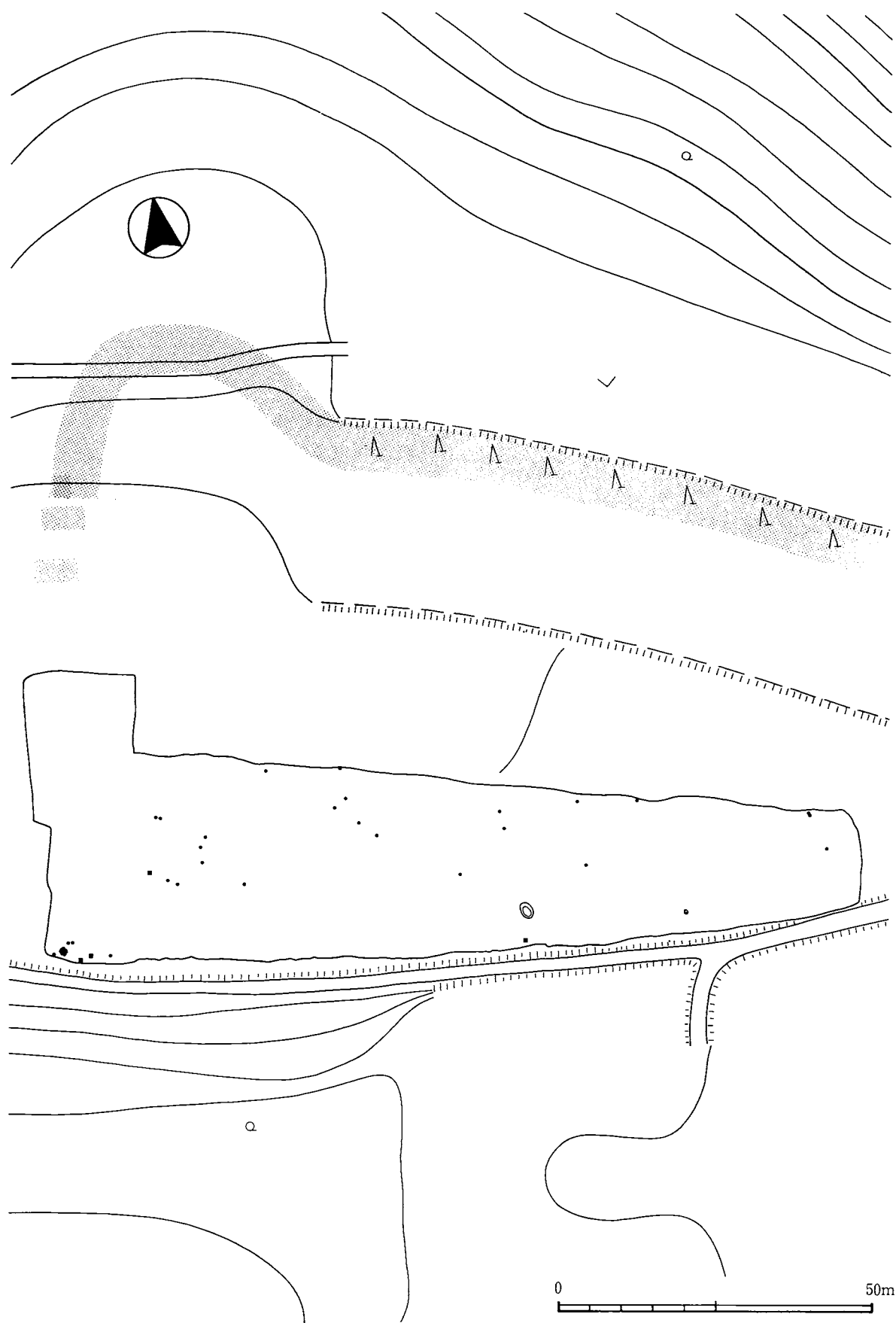
分布は、調査区の西半分に広く散在した状況で広



異種押型文併用土器 I

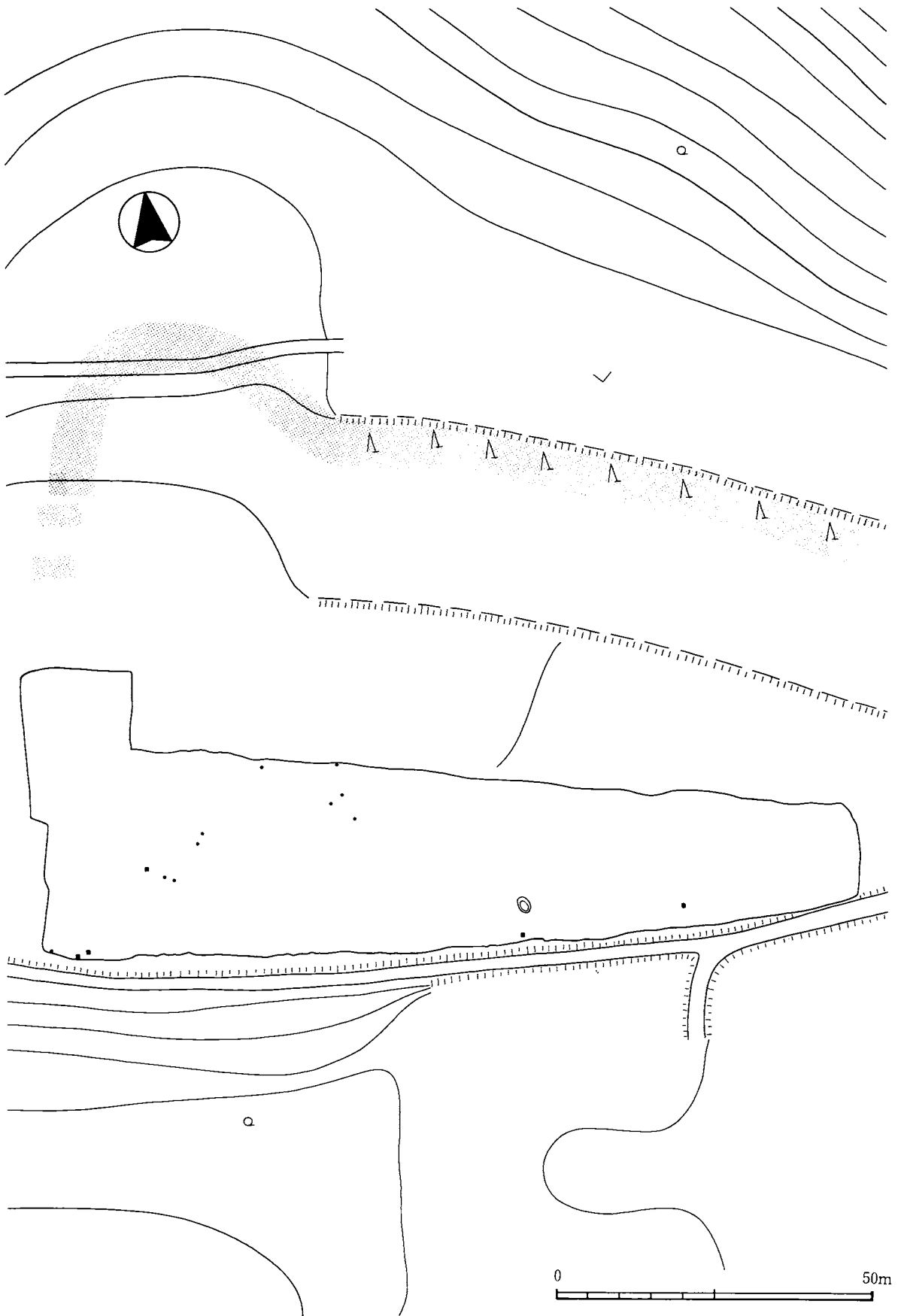


第144図 異種押型文併用土器1・その他分布図

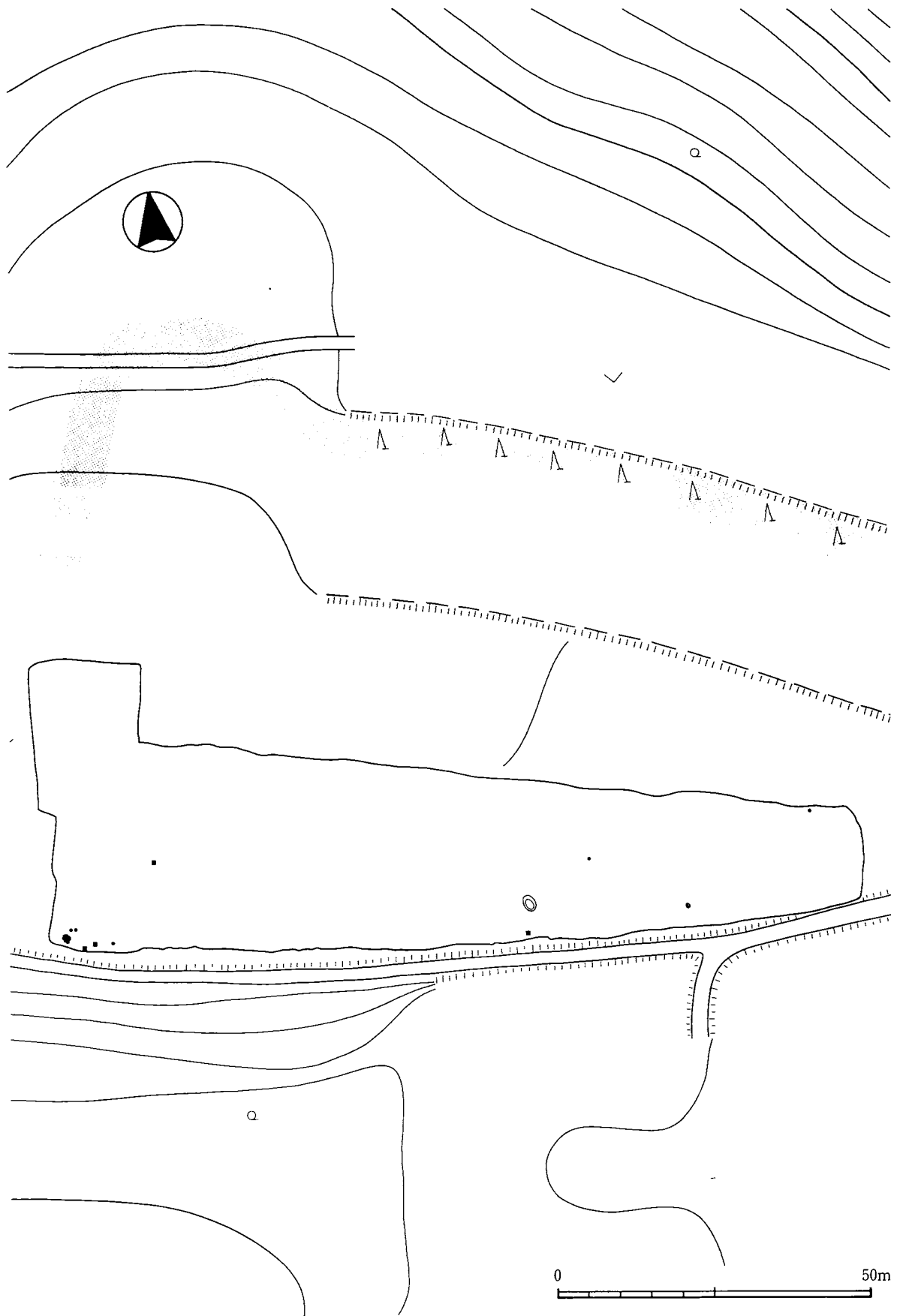


第145図 押型文・撚糸文併用土器分布図

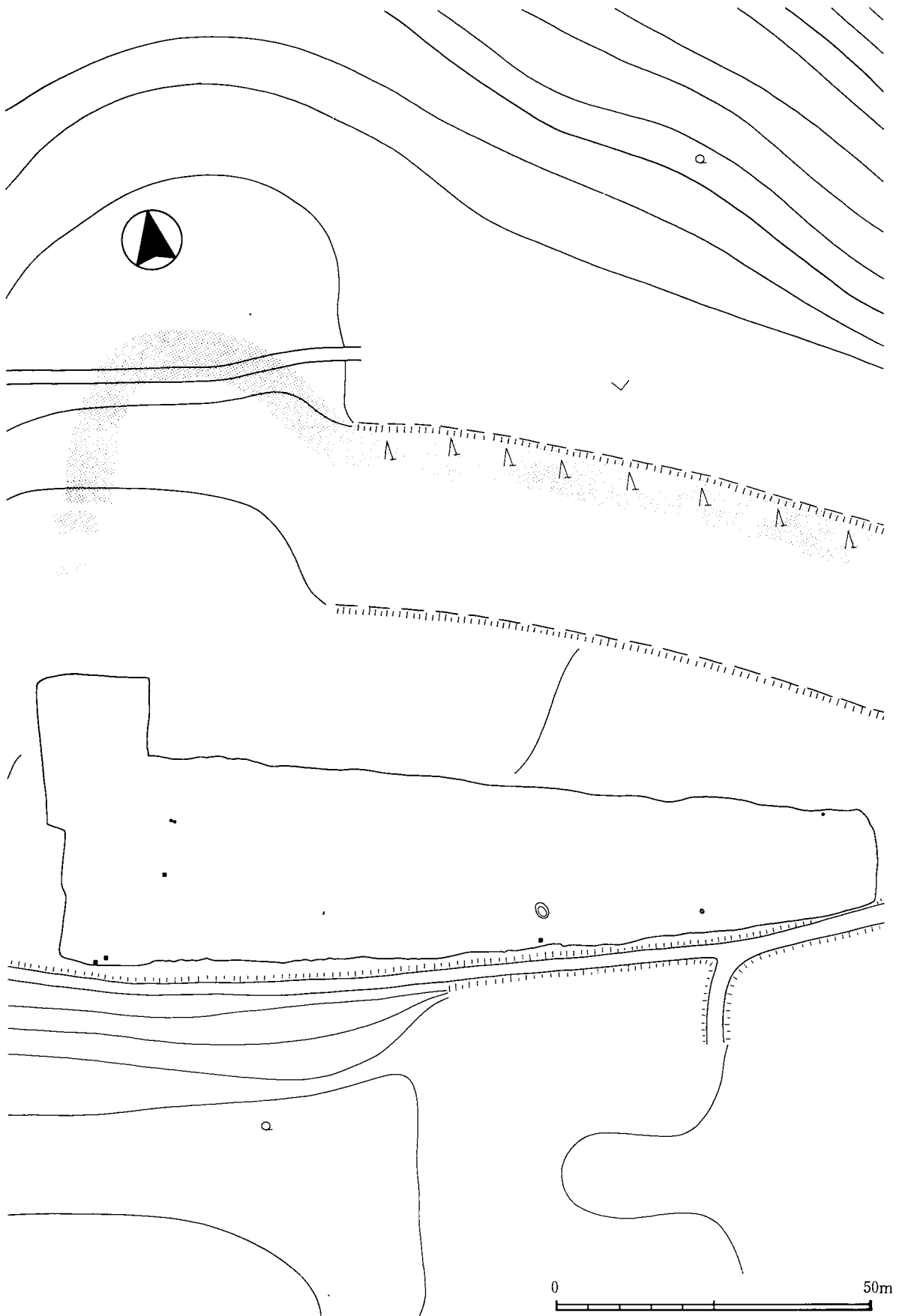




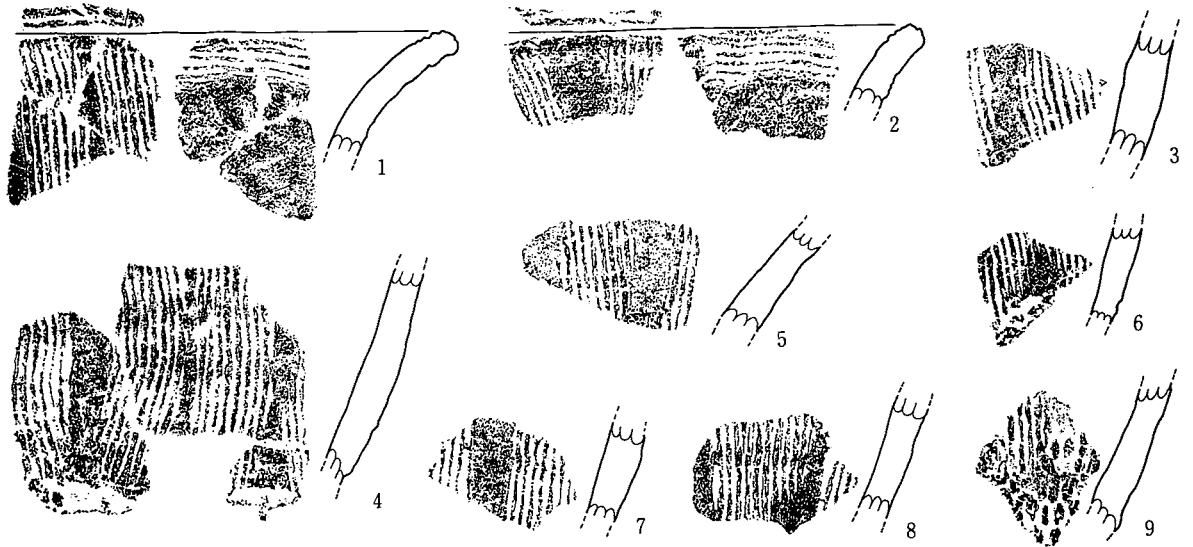
第146図 押型文・撚糸文併用土器1分布図



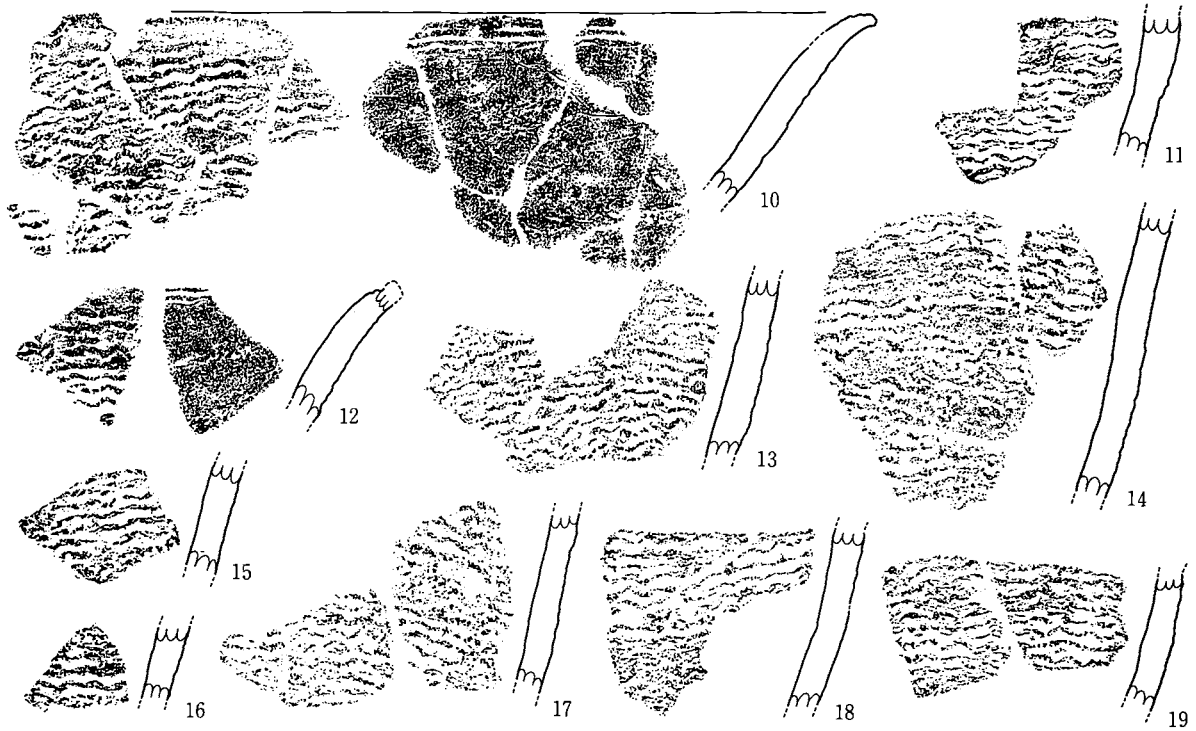
第147図 押型文・撚糸文併用土器2分布図



第148図 押型文・撚糸文併用土器3分布図



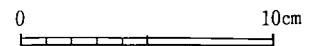
押型文別種文様併用1



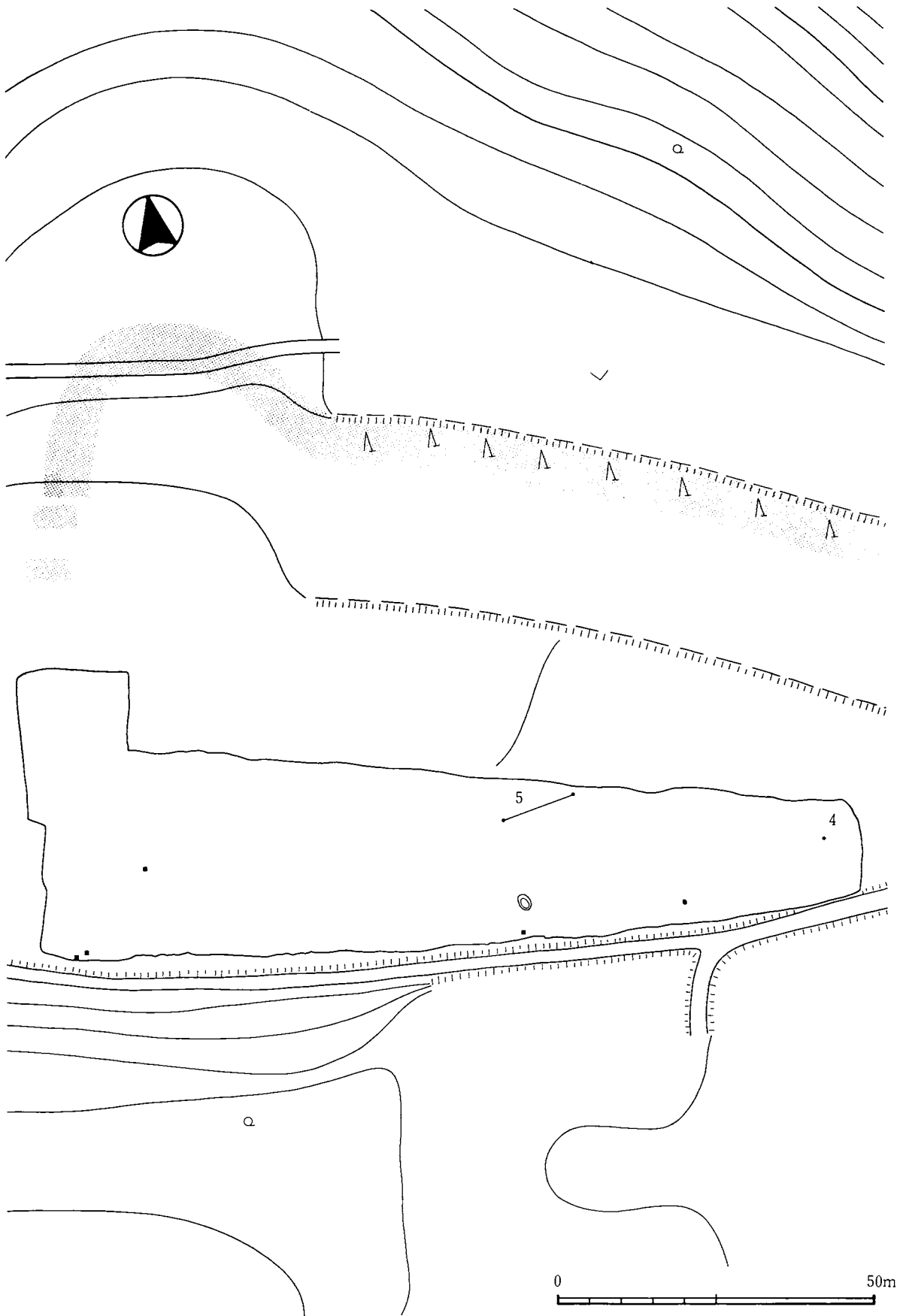
押型文別種文様併用2



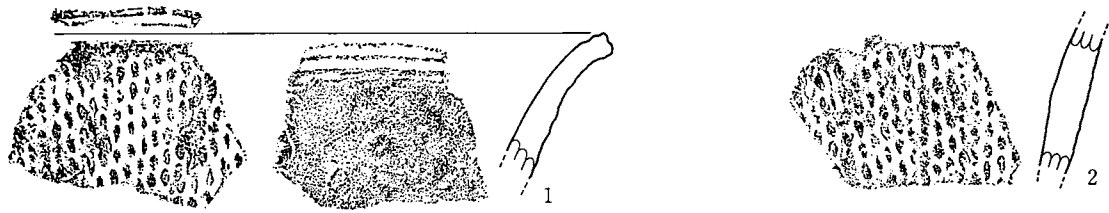
押型文別種文様併用3



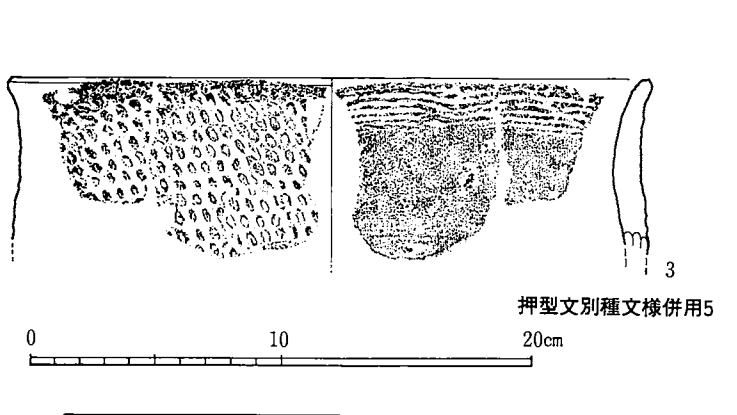
第149図 押型文・捺糸文併用土器1~3実測図



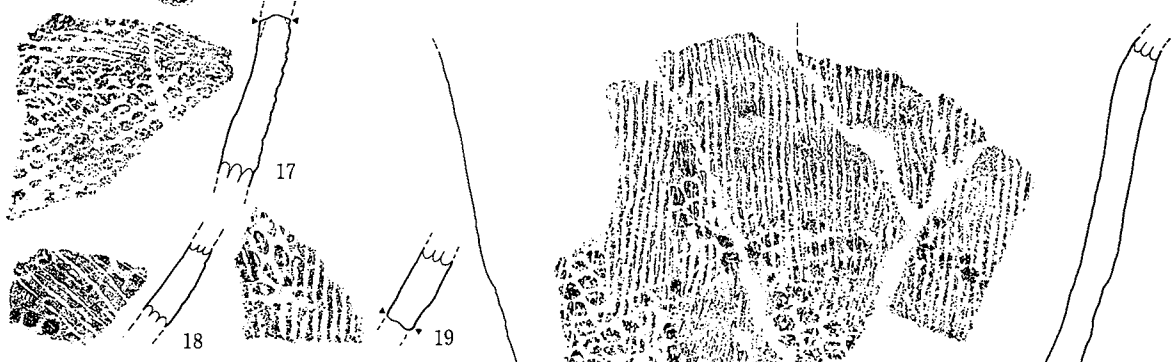
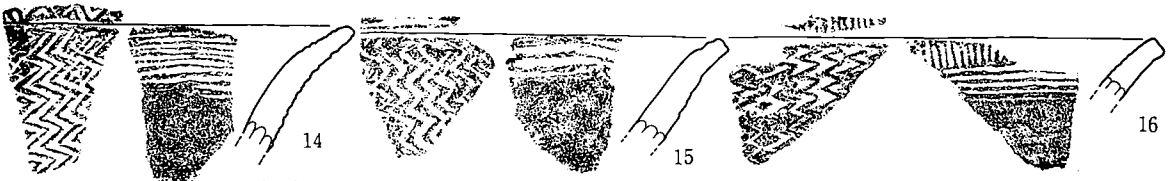
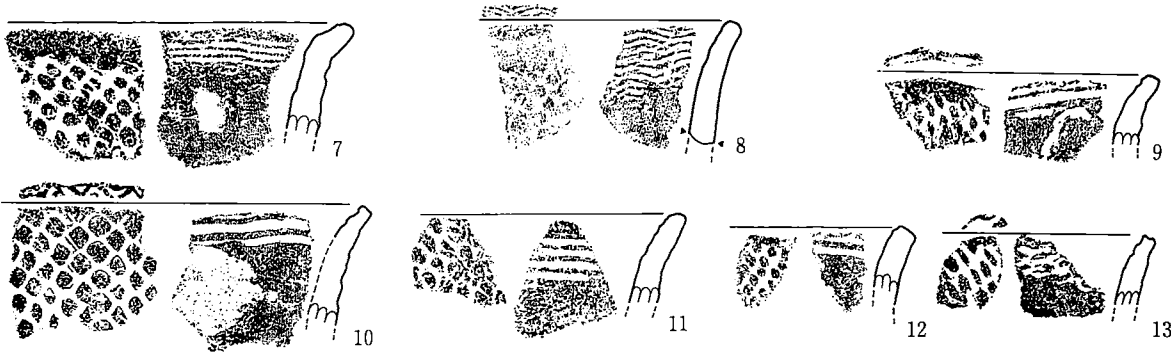
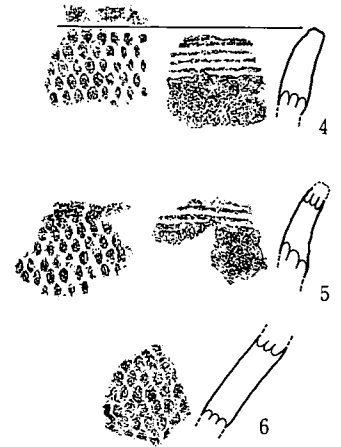
第150図 押型文・燃糸文併用土器4・5分布図



押型文別種文様併用4



押型文別種文様併用5



その他

第151図 押型文・捺糸文併用土器4・5その他

がっていた。

表面、口唇部、裏面口縁部に文様が見られる。表面には、撚糸文と楕円文がみられる。胴部上半から口縁部にかけては縦位の撚糸文、下部には縦位の楕円文がみられる。口唇部と裏面口縁部には横位の撚糸文がある。

**押型文・撚糸文併用土器 2 (第147・149図10～19)**

破片は、18点であった。出土した部位は、口縁部と胴部である。器形は、口縁部が真っ直ぐに開き、胴部が直線的ないしやや丸みを持つという特徴である。

分布は、調査区の西端、しかもその南端にまとまった状況をとっていた。

表面、裏面口縁部に文様が見られる。表面には横位施文の山形文、裏面口縁部には横位施文の撚糸文がみられる。なお、表面には横位施文の山形文のみしかなく、表面の文様帯は、施文方向を違える複数の文様帯には分割できない。

**押型文・撚糸文併用土器 3 (第148・149図20・21)**

破片は3点で、中2点が接合した。その部位は、口縁部と胴部である。器形は、口縁部がわずかに外反し、胴部が直線的にのびるという特徴である。

分布は、調査区の西側と東側にある。

表面、裏面口縁部に文様が見られる。表面には縦位施文の楕円文、裏面口縁部には横位施文の撚糸文がみられる。

**押型文・撚糸文併用土器 4 (第150・151図1・2)**

個体識別の結果、認識できたのは2点であった。出土した部位は、口縁部と胴部である。わずかに外反する口縁部と直線的にのびる胴部である。

分布は、調査区の東端にある。

表面、裏面口縁部に文様が見られる。表面には縦位施文の楕円文、裏面口縁部には横位施文の撚糸文がみられる。

**押型文・撚糸文併用土器 5 (第150・151図3)**

破片は2点で、接合している。出土した部位は、口縁部である。器形は、口縁部がわずかに外反し、胴部中位でやや膨らむという特徴である。復元口径は、25.4cmである。

分布は、調査区の中央部にある。

表面、裏面口縁部に文様が見られる。表面には縦

位施文の楕円文、裏面口縁部には横位施文の撚糸文がみられる。

**その他の破片 (第151図4～21)**

4・5・7～16は、口縁部の破片である。表面に縦位楕円文、裏面口縁部に横位撚糸文が施文されている土器(4・5・7～13)と、表面に縦位山形文、裏面口縁部に横位撚糸文がみられる土器(14・15)、そして表面に縦位山形文、裏面口縁部に原体条痕と横位撚糸文がみられる土器(16)がある。

6・17～21は、胴部の破片であるいずれも楕円文と撚糸文が併用されている土器である。21の土器のように、撚糸文と楕円文とが上下に文様帯を違えて見られるものがある。

**③ 撚糸文土器**

分布は、調査区の西端でやや希薄さが認められるものの、調査区全域でまんべんなくみられた(第152図)。したがって、何か意味のある偏在傾向をとらないのが、撚糸文土器の分布傾向ということになる。

出土した土器の個体識別をおこなって、28の個体を認識した。そこで、これらを楕円文土器1～28と呼称し、それぞれの個体別資料を見てみよう。

**撚糸文土器 1 (第153・154図1～2)**

4点が出土している。その部位は、口縁部周辺と胴部である。その器形的特徴は、強く外反する口縁部、直線的な胴部である。復元口径は、 cmである。

分布は、調査区の西側、それもやや南に偏った所にある。その傾向は、比較的まとまった状態にあるようだ。

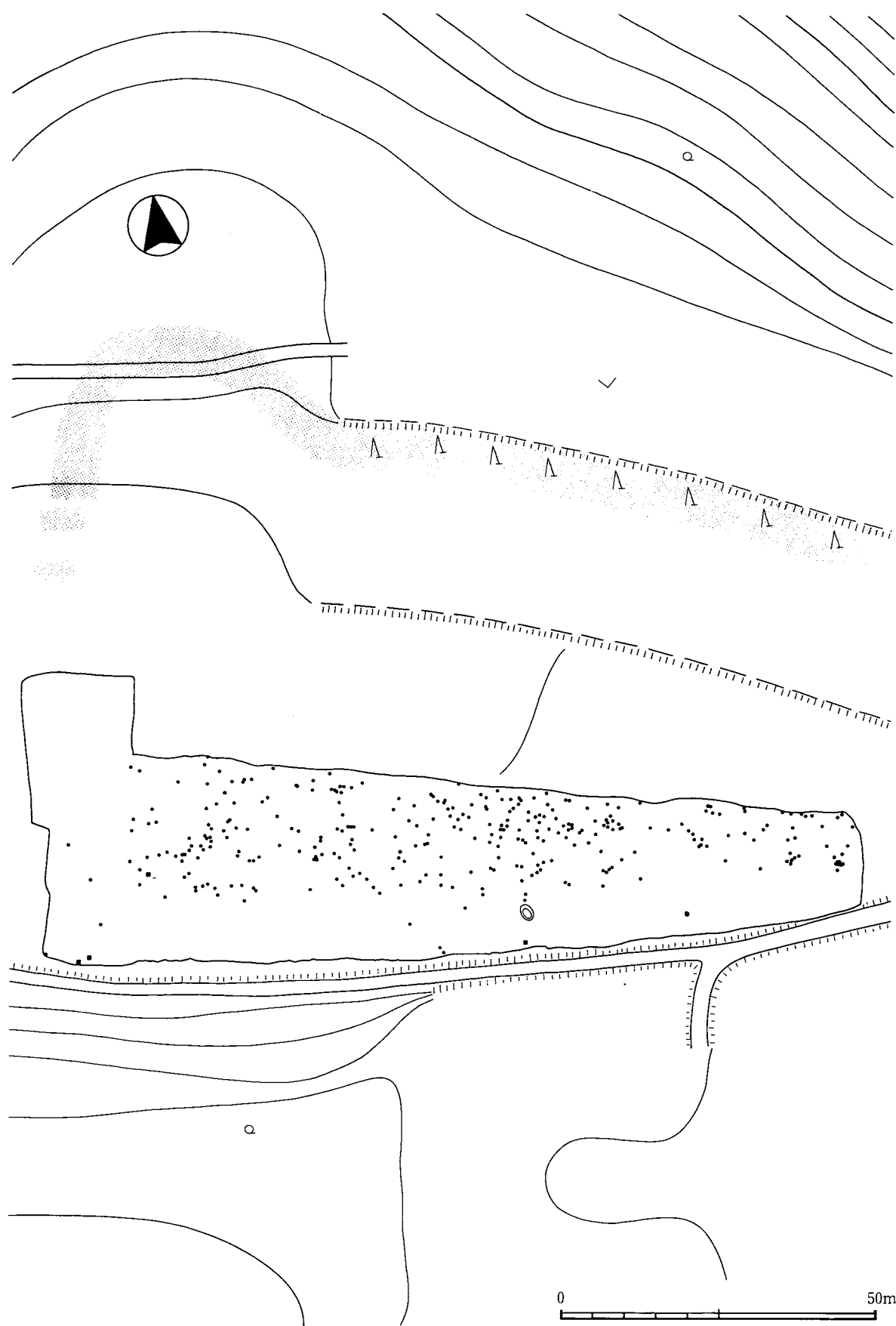
文様は、表面と裏面口縁部にある。施文方向は、いずれも横位である。

**撚糸文土器 2 (第153・154図3～7)**

同一個体と認識できた破片は、6点である。その部位は、口縁部と胴部である。こうした資料からその器形を復元すると、直線的に開く口縁部、直線的な胴部である。

分布は、調査区の東側にある。その傾向は、広い範囲に点在するという状況である。

文様は、縦位施文の表面、横位施文の口唇部、横位施文の裏面口縁部にある。これらを、一つ一つの文様帯と認識しておこう。



第152図 燃糸文土器分布図



**燃糸文土器 3 (第153・154図8・9)**

同一個体と認識できた破片は、4点である。いずれも大きな破片で、口縁部から胴部上部、胴部中位付近である。破片は大きく、器形復元が容易である。それによると、口縁部で急に強く折れ曲がって外反し、胴部は直線的という器形である。

分布は、中央部の中央にある。

文様は、表面と裏面口縁部の二箇所にある。施文方向は、表面が縦位で、裏面口縁部が横位である。

**燃糸文土器 4 (第155・157図1～3)**

破片は、3点ある。口縁部と胴部の破片であるが、器形の復元はできない。

分布は、調査区中央部にある。

文様は、表面と口唇部、そして裏面口縁部にある。施文方向は、表面が縦位で口唇部と裏面口縁部が横位である。

**燃糸文土器 5 (第155・157図4～6)**

資料は、3点である。口縁部と胴部の破片であるが、器形の類推は、不可能であった。

分布は、調査区東側にある。その傾向は、散在的である。

文様は、表面と裏面口縁部にある。施文方向は、表面が縦位、裏面口縁部が横位である。

**燃糸文土器 6 (第155・157図7・8)**

個体識別の結果、3点を同一個体と認識した。いずれも口縁部から胴部上部にかけてのものである。器形は、弱く外反する口縁部、直線的な胴部という特徴である。復元口径は、26.1cmである。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、表面と裏面口縁部にある。その施文方向は、いずれも横位である。

**燃糸文土器 7 (第156・157図9・10)**

同一個体として認識できた破片は、2点である。部位は、口縁部と胴部で、その器形は、弱く外反する口縁部、直線的な胴部という特徴である。

分布は、調査区の中央よりもやや西側にあり、その北端である。

文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部にある。その施文方向は、表面が縦位、口唇部と裏面口縁部が横位である。

土器は、輪積み手法によって製作されているが、その乾燥の単位は、口縁部では7.4cmである。

**燃糸文土器 8 (第156・157図11)**

資料は、3点である。その部位は、口縁部から胴部上半である。口縁部で強く外へ折れ曲がり、胴部に至ると直線的になる。こうした特徴が器形にみられる。

分布は、調査区の中央部にあり、それもやや東によった場所である。

文様は、表面と裏面口縁部にある。その施文方向は、表面が縦位、裏面口縁部が横位である。

**燃糸文土器 9 (第158・160図1・2)**

破片は、2点である。いずれも口縁部である。その器形は、弱く外反する口縁部、直線的な胴部上半である。

分布は、調査区の中央部、その北側にある。

文様の施文方向は、表面が横位、裏面口縁部が横位である。

輪積み手法で土器は製作されている。その乾燥の単位は、口縁部付近で5.7cmである。

**燃糸文土器10 (第158・160図3・4)**

資料は、2点ある。いずれも口縁部で、弱く外反している。

分布は、調査区の中央部にあり、それもやや東によった場所である。

文様の施文方向は、表面が縦位、裏面口縁部が横位である。

**燃糸文土器11 (第158・160図5)**

出土点数は2点で、接合している。その部位は、口縁部である。端部で弱く外反している。

分布は、調査区の西側にある。

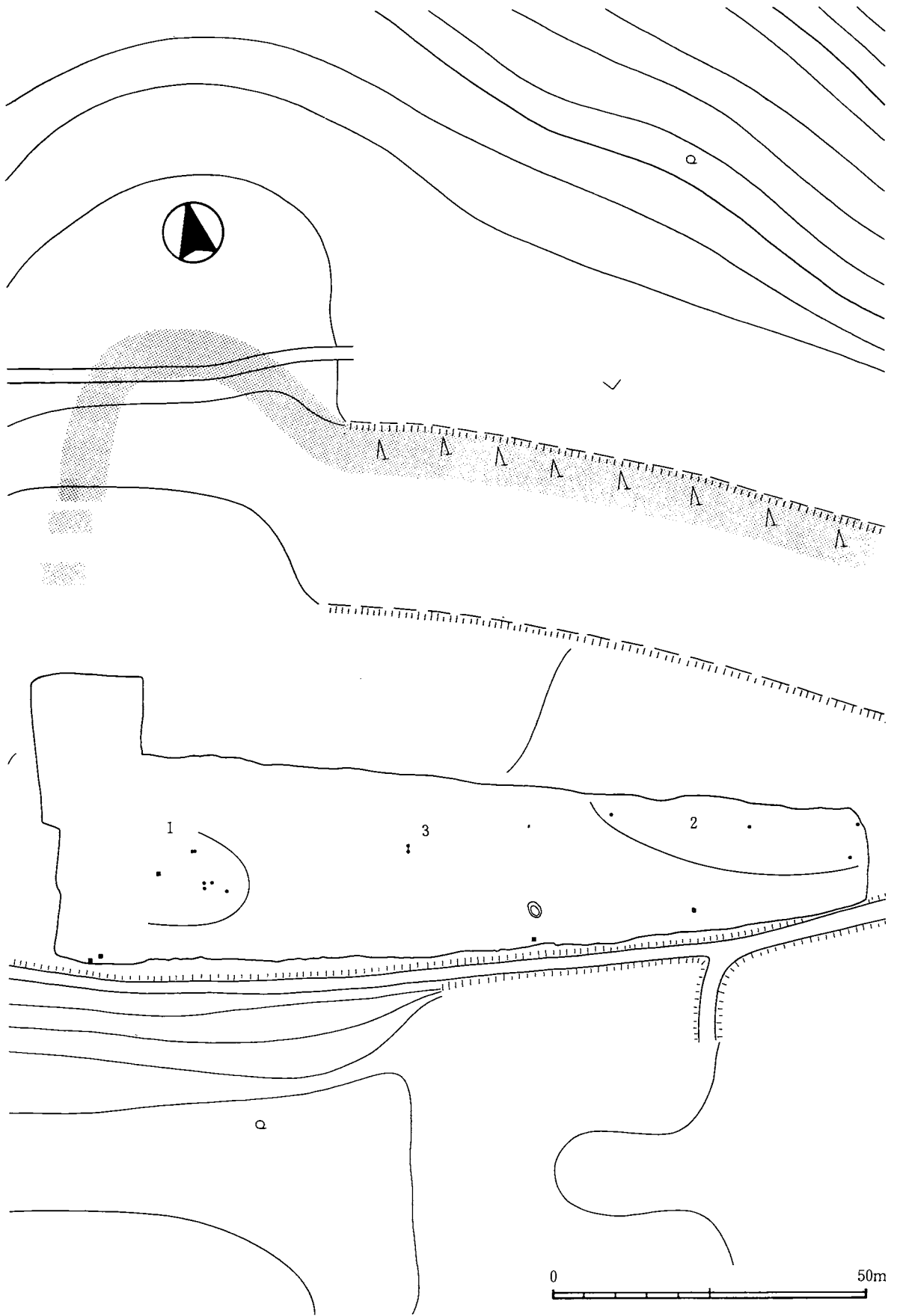
文様は、表面、口唇部そして裏面口縁部の三箇所にある。施文方向は、表面が縦位で、口唇部と裏面口縁部がともに横位であった。

**燃糸文土器12 (第158・160図6)**

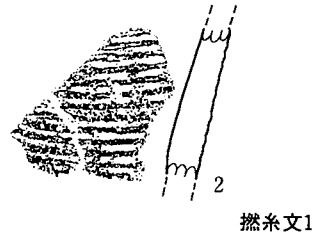
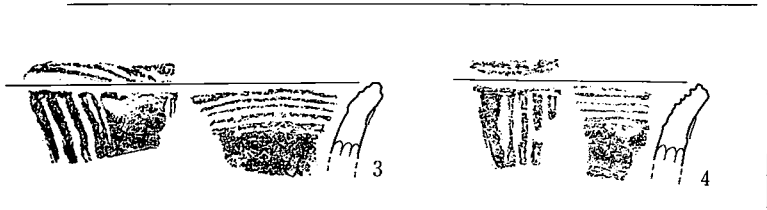
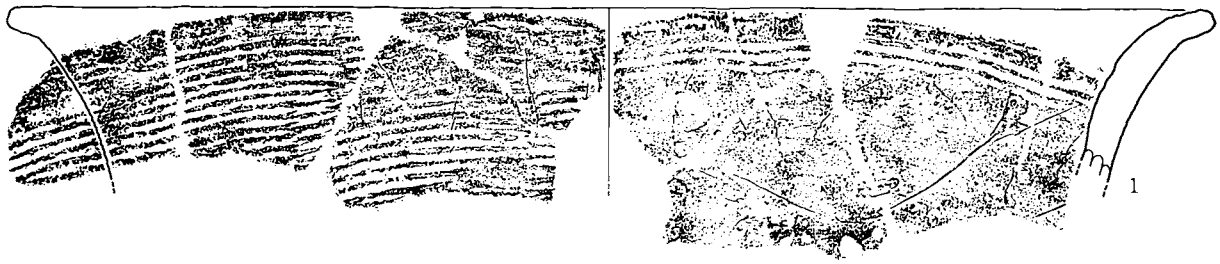
出土点数は、2点であった。その部位は、口縁部で、直線的に開いた形状である。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、表面と裏面口縁部の二箇所にある。その施文方向は、表面が縦位で、裏面口縁部が横位である。



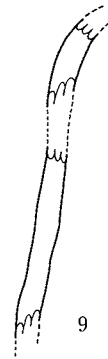
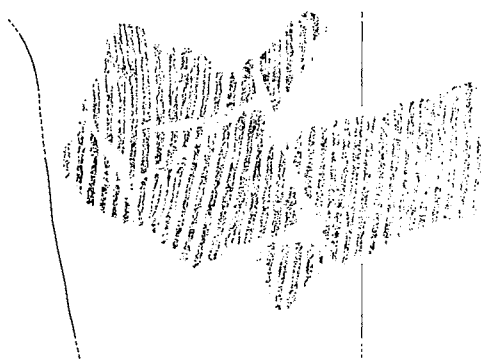
第153図 燃糸文土器1~3分布図



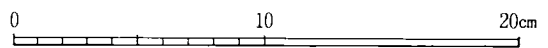
燃糸文1



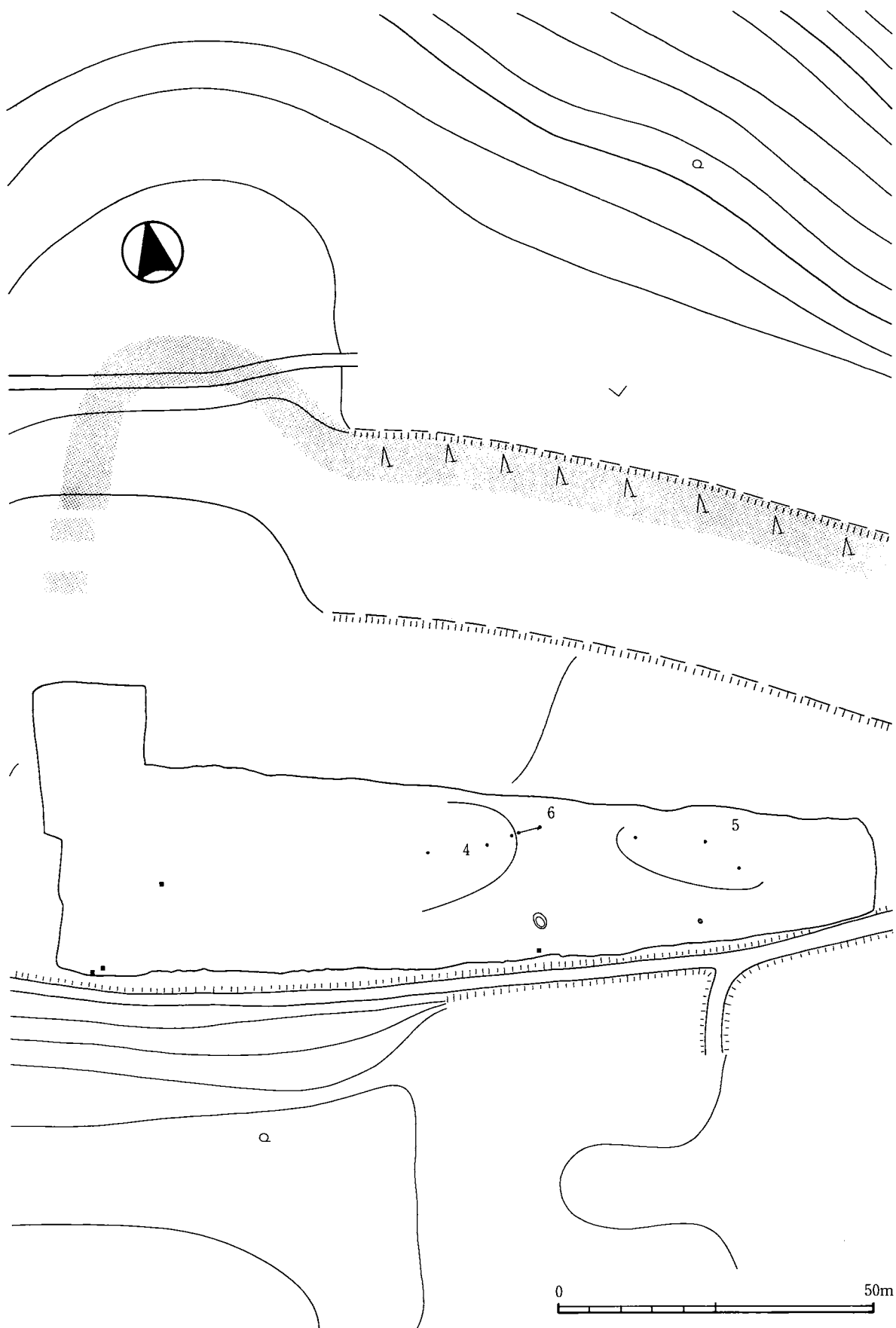
燃糸文2



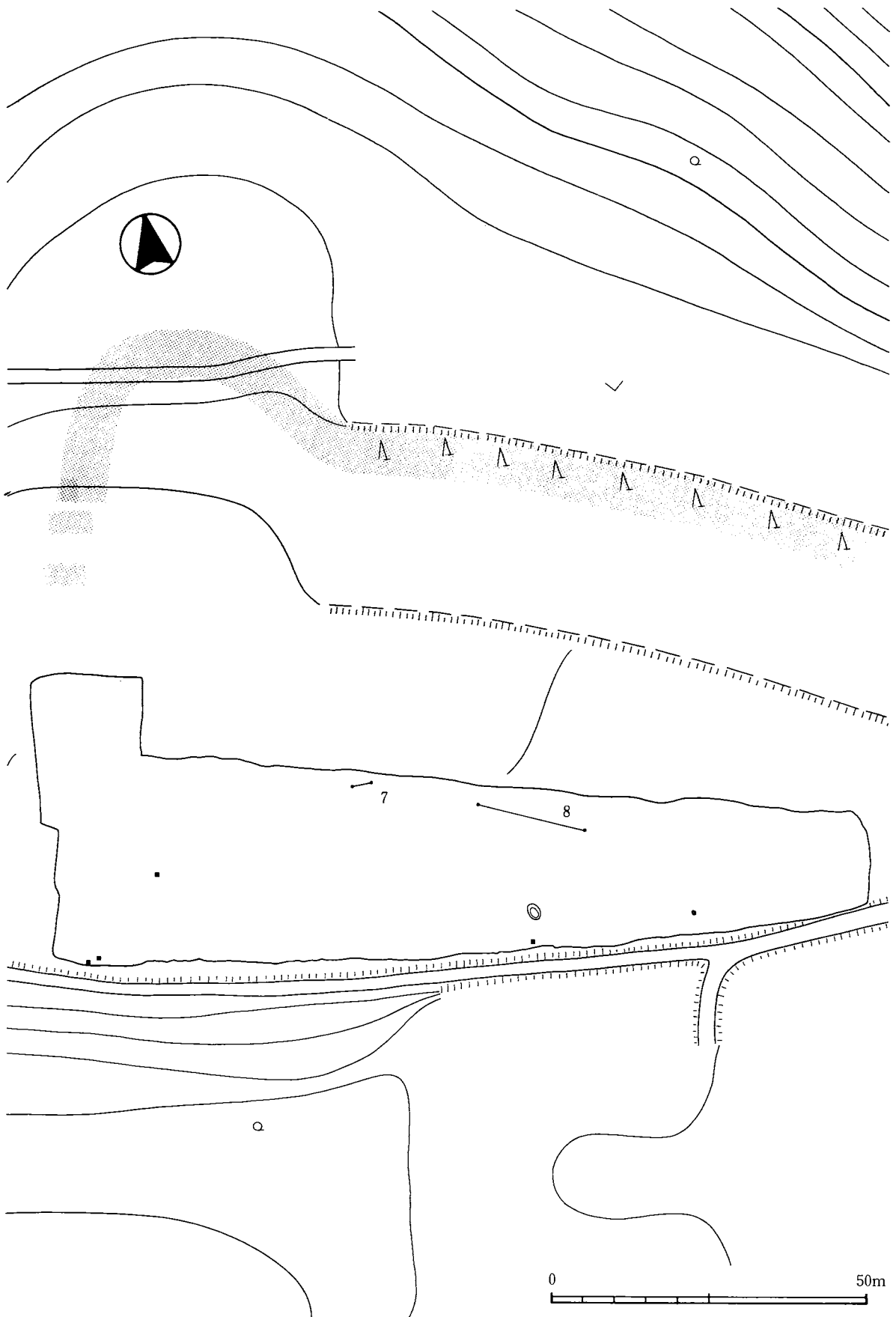
燃糸文3



第154図 燃糸文土器1~3実測図



第155図 燃糸文土器4~6分布図



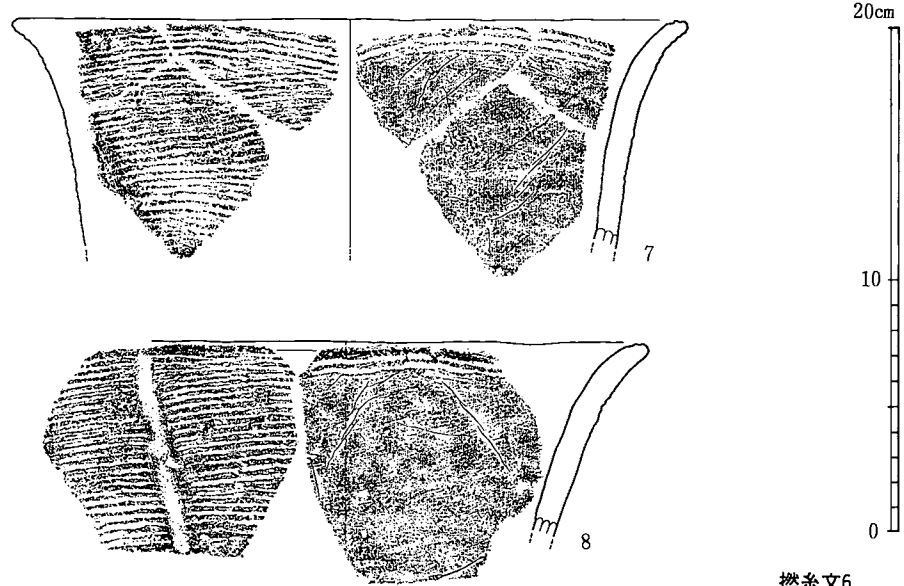
第156図 燃糸文土器7・8分布図



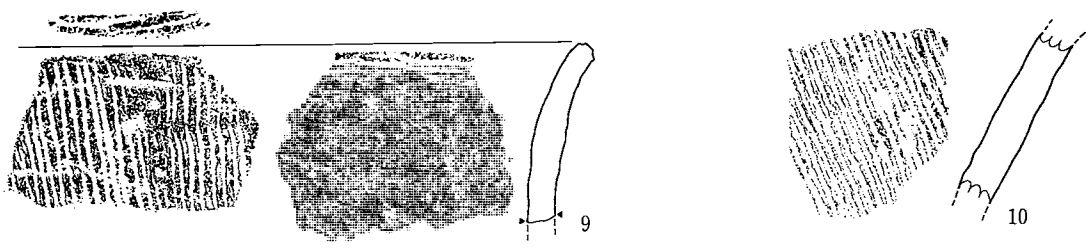
撚糸文4



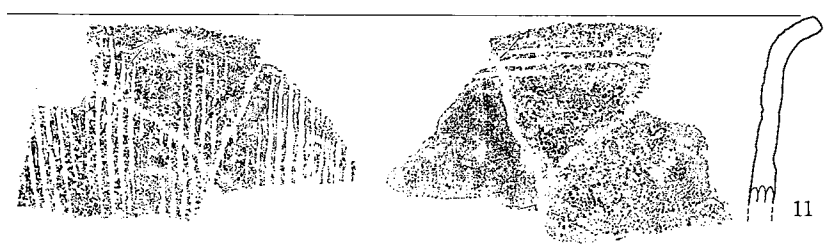
撚糸文5



撚糸文6

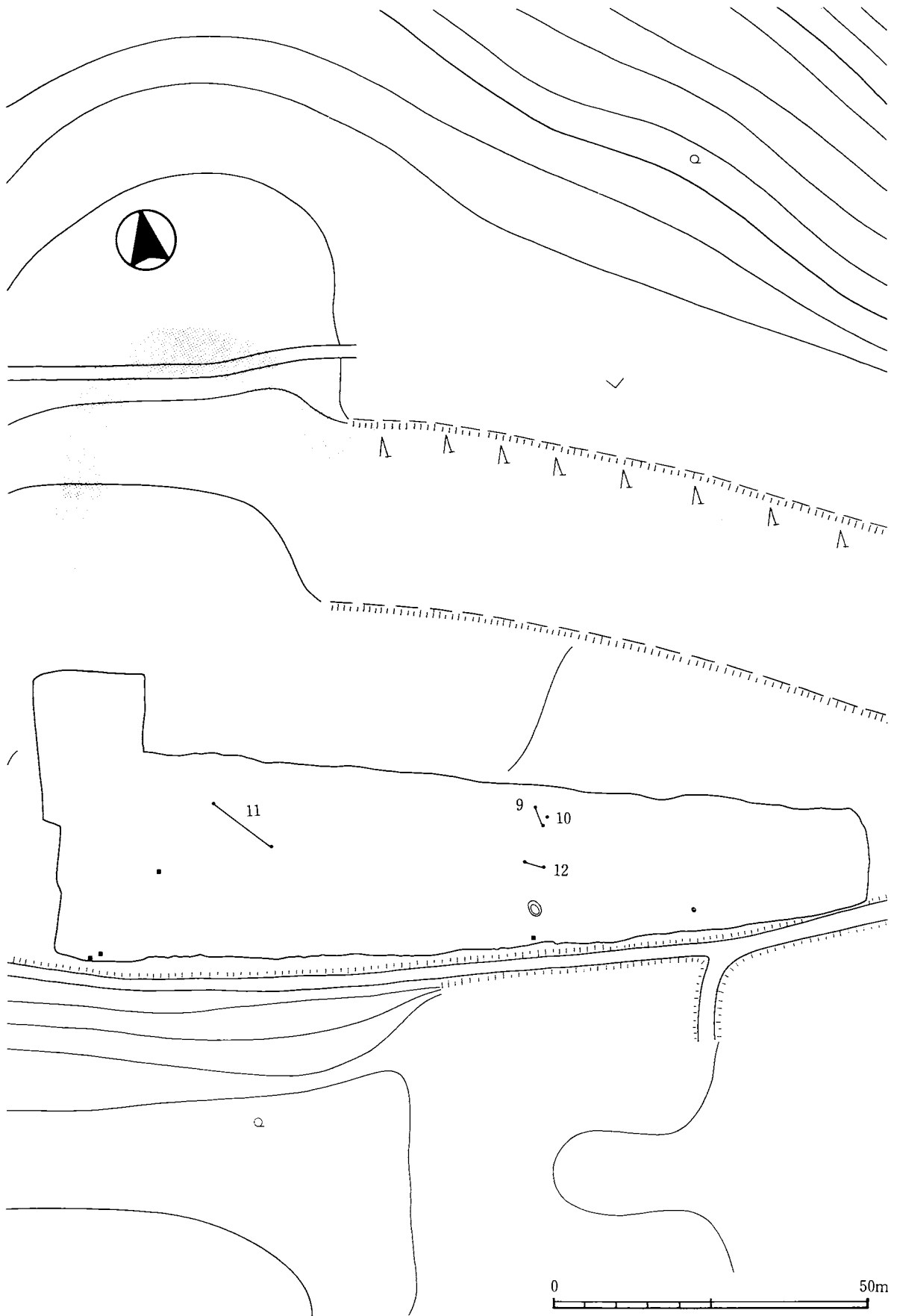


撚糸文7

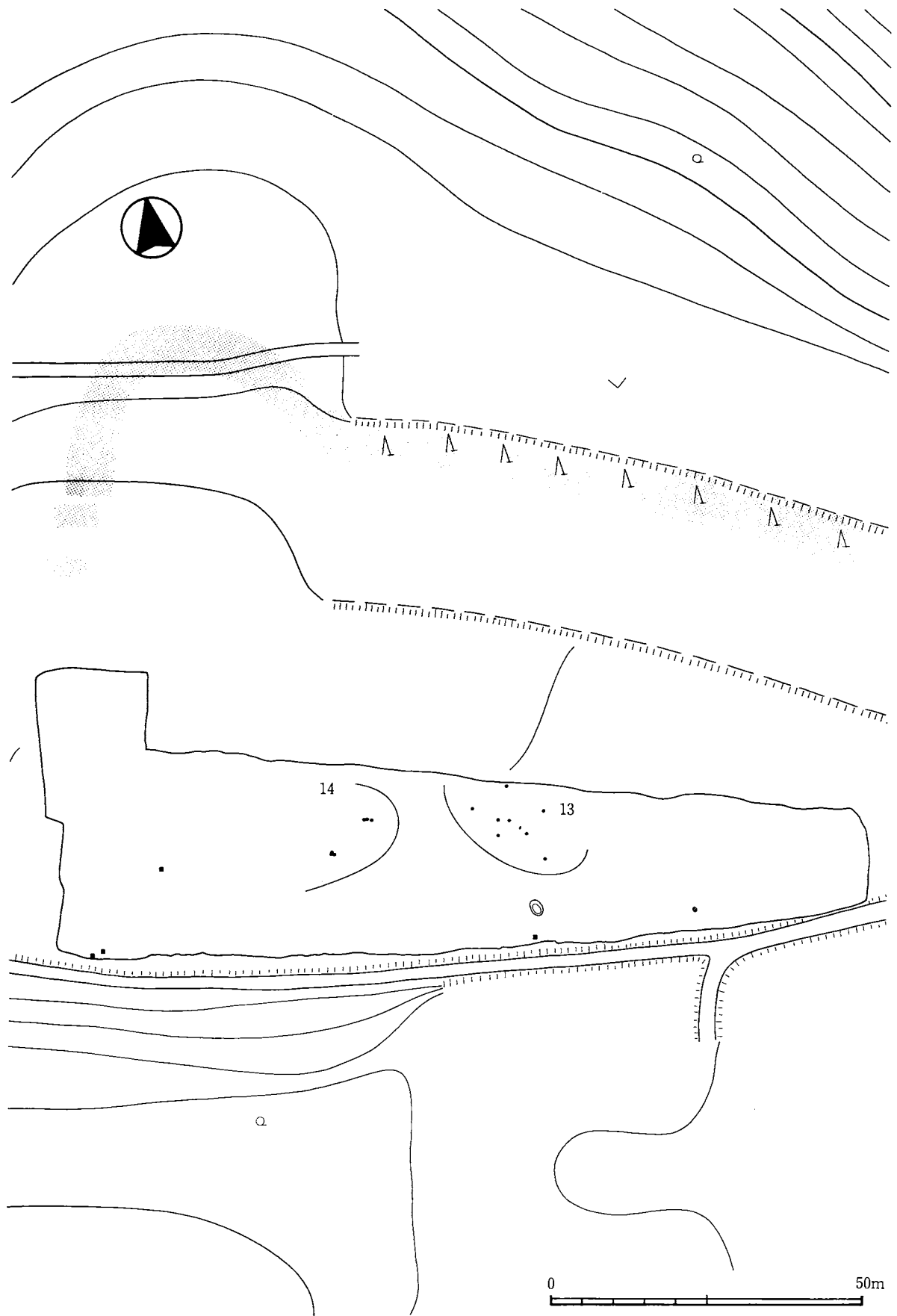


撚糸文8

第157図 撚糸文土器4~8実測図



第158図 撚糸文土器9~12分布図

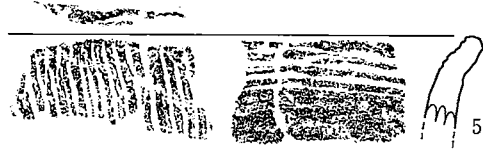


第159図 撚糸文土器13・14分布図





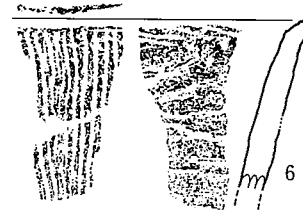
撚糸文9



撚糸文11

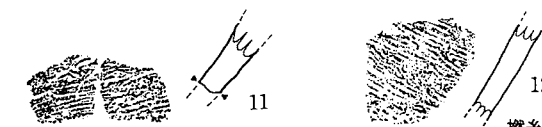
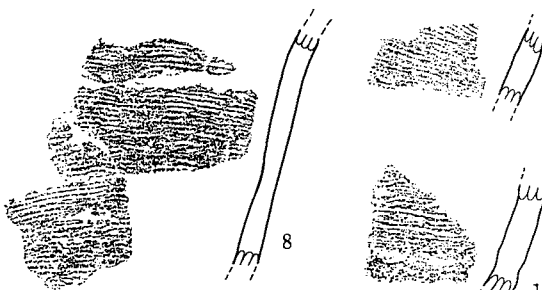


撚糸文10

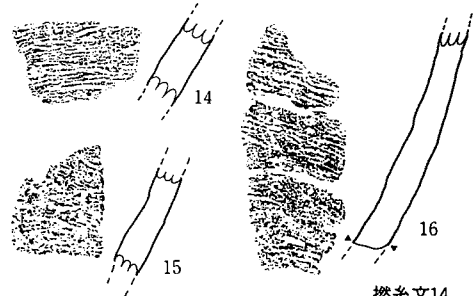
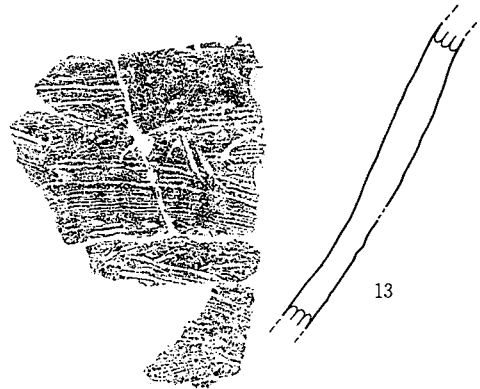


撚糸文12

0 10 20cm



撚糸文13



撚糸文14

第160図 撚糸文土器9~14実測図

**撚糸文土器13 (第159・160図7～12)**

個体識別の結果、認識できた破片は、9点である。いずれも胴部の破片であった。

分布は、調査区の中央部にある。比較的好くまとまった位置で出土している。

文様は、横ないし斜めに施文されている。

**撚糸文土器14 (第159・160図13～16)**

破片は8点で、胴部の資料であった。その器形は、直線的である。

分布は、調査区の中央部、しかもやや西側にあり、まとまって出土している。

文様は、横ないし斜めの施文である。

**撚糸文土器15 (第161・163図1～3)**

同一個体として認識できた破片は、7点である。いずれも胴部の破片で、直線的であるが、やや丸みをもった器形である。

分布は、調査区東側にあり、どの破片も近接して出土している。

表面の文様は、二つの文様帯に分離される。上部は縦位施文であり、下部は横ないし斜めの施文である。

**撚糸文土器16 (第161・163図4～8)**

破片は、7点である。部位は、胴部と底部で、胴部は直線的で、底部の形状は丸底であった。

分布は、調査区の中央部、その全域に散らばっていた。

文様の方向では、底部付近で縦位施文、その上には横位施文がくる。

**撚糸文土器17 (第161・163図9～11)**

3点を同一個体として認識した。いずれも胴部である。

分布は、調査区の東側にあり、その西端と東端に離れて出土している。

文様は、二つの施文方向がある。縦位と横位であり、表面では二つ以上の文様帯があるようだ。

**撚糸文土器18 (第162・163図12～14)**

同一個体として認識できた破片は、4点であった。いずれも胴部である。

分布は、調査区の東側、その北端近くに点在していた。

文様は、縦位の施文である。

**撚糸文土器19 (第164・166図1～5)**

認識できた破片は、5点である。その部位は、すべて胴部である。

分布は、調査区の中央部、しかもその北側に点在していた。

文様は、横、縦、斜めに施されていた。

**撚糸文土器20 (第164・166図6～9)**

4点で、いずれも胴部であった。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、横位、縦位、斜位施文である。

**撚糸文土器21 (第165・166図10～12)**

3点を個別別資料として認識した。その部位は、すべて胴部である。

分布は、調査区の中央部から西側にかけて、その北端近くにあった。

文様は、横位施文である。

**撚糸文土器22 (第165・166図13)**

同一個体としては、2点を認識できたが、その接合資料である。

分布は、調査区の東側、その北端にある。

文様は、縦位施文である。

**撚糸文土器23 (第165・166図14・15)**

3点を同一個体として認識した。中2点は接合している。破片の部位は、胴部、しかもその下半部近くである。

分布は、調査区の東側、その北側にある。

文様は、縦位施文である。

**撚糸文土器24 (第165・166図16・17)**

個別別資料としては、2点を認識できた。いずれの破片も胴部である。

分布は、調査区の中央部にあった。

文様は、横位施文である。

**撚糸文土器25 (第165・166図18・19)**

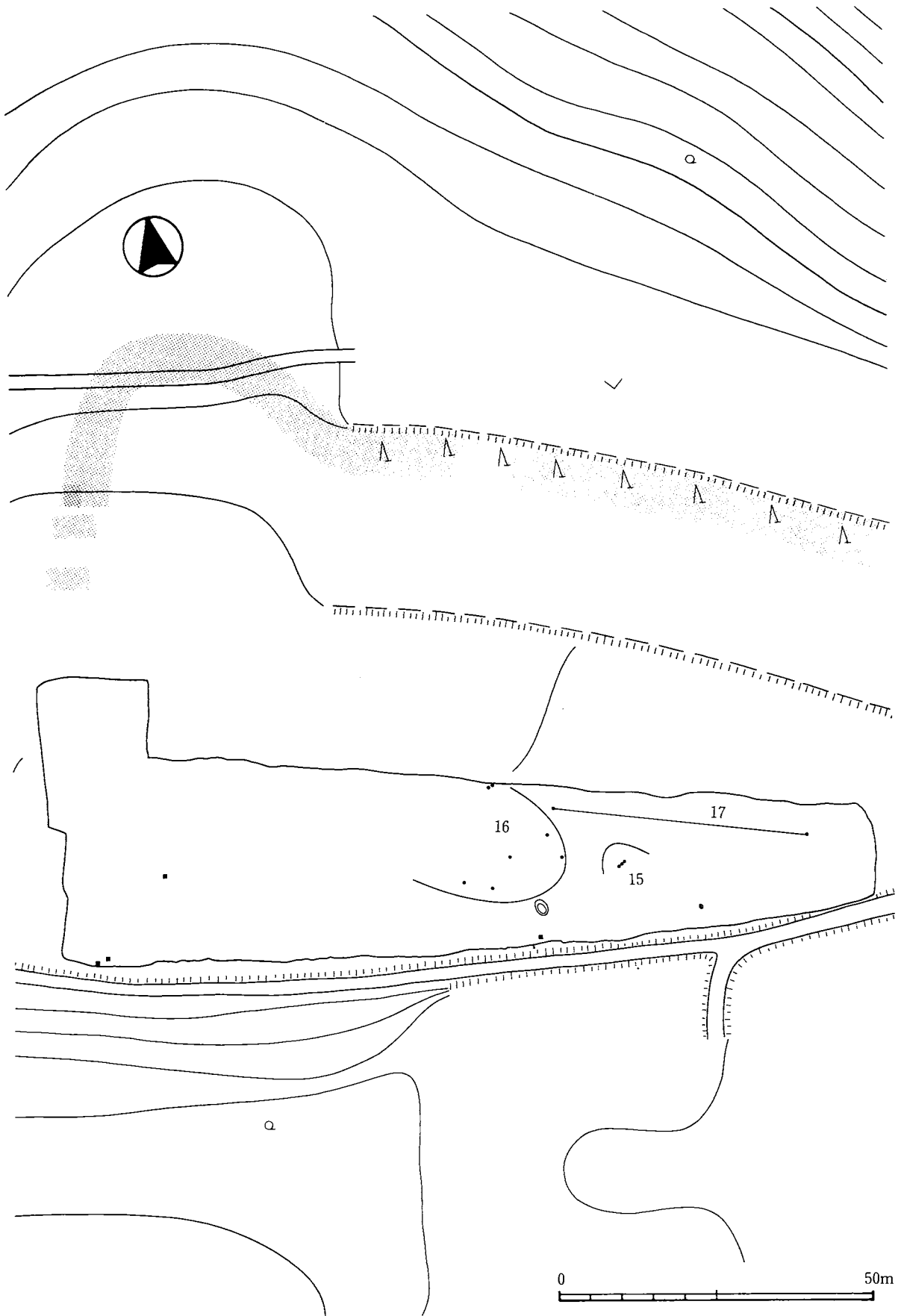
4点を抽出した。いずれも胴部下半の破片であった。

分布は、調査区の中央部から東側にかけての広い範囲にあった。

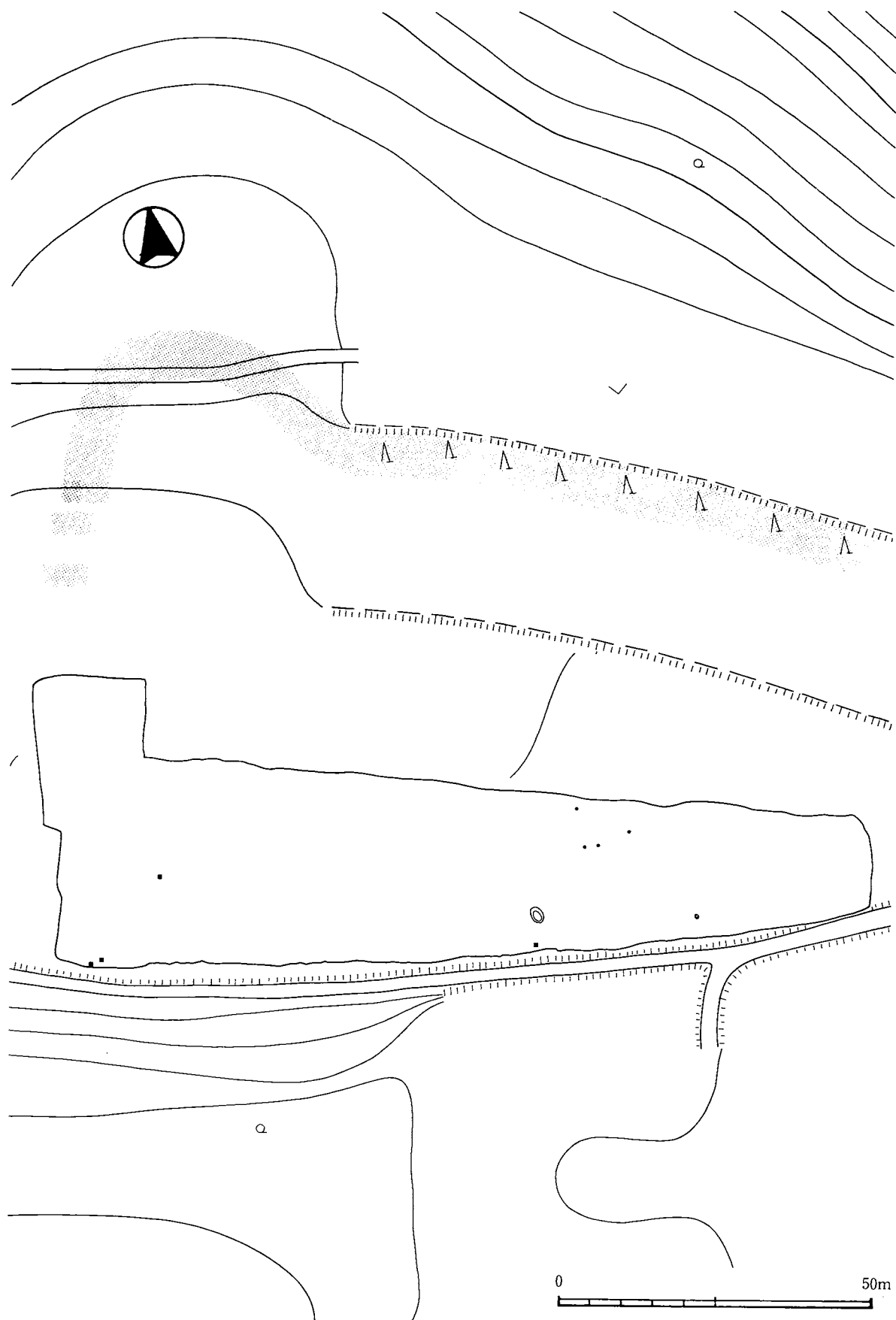
文様は、縦位施文である。

**撚糸文土器26 (第167・168図1～4)**

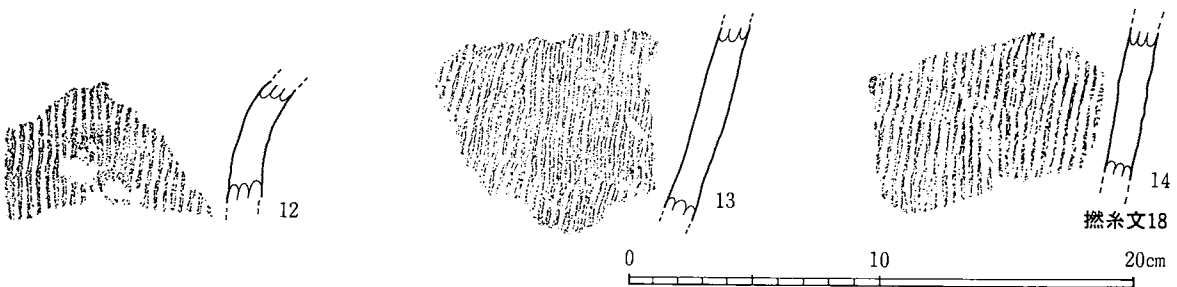
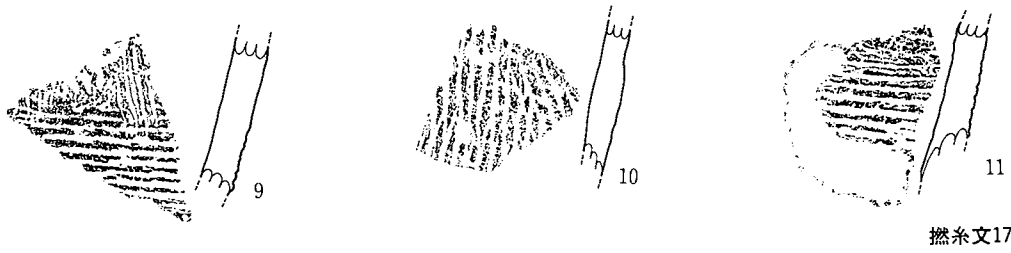
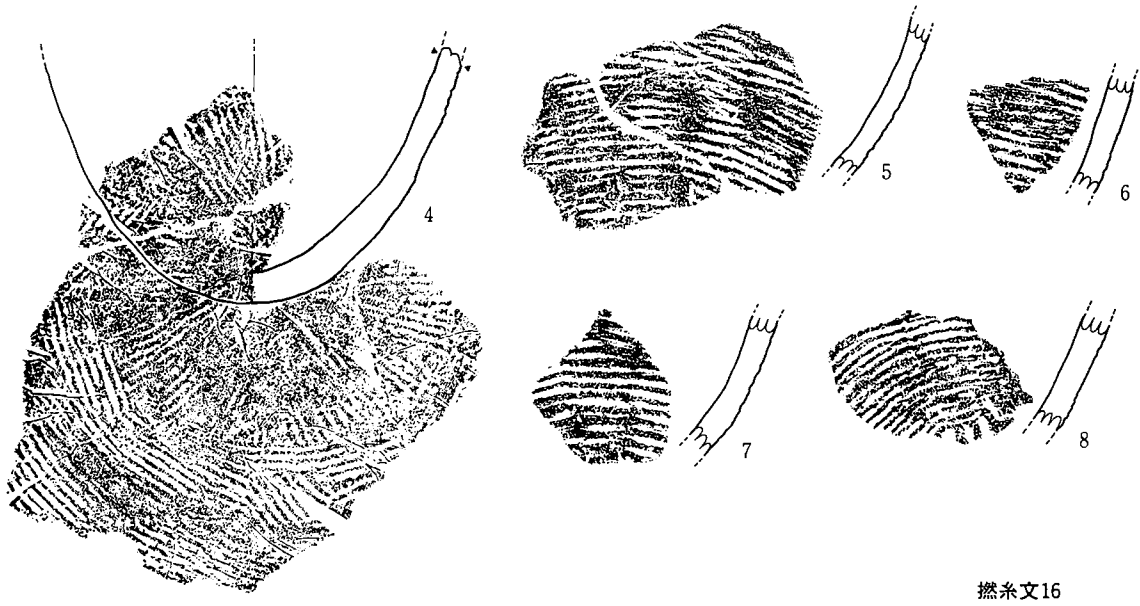
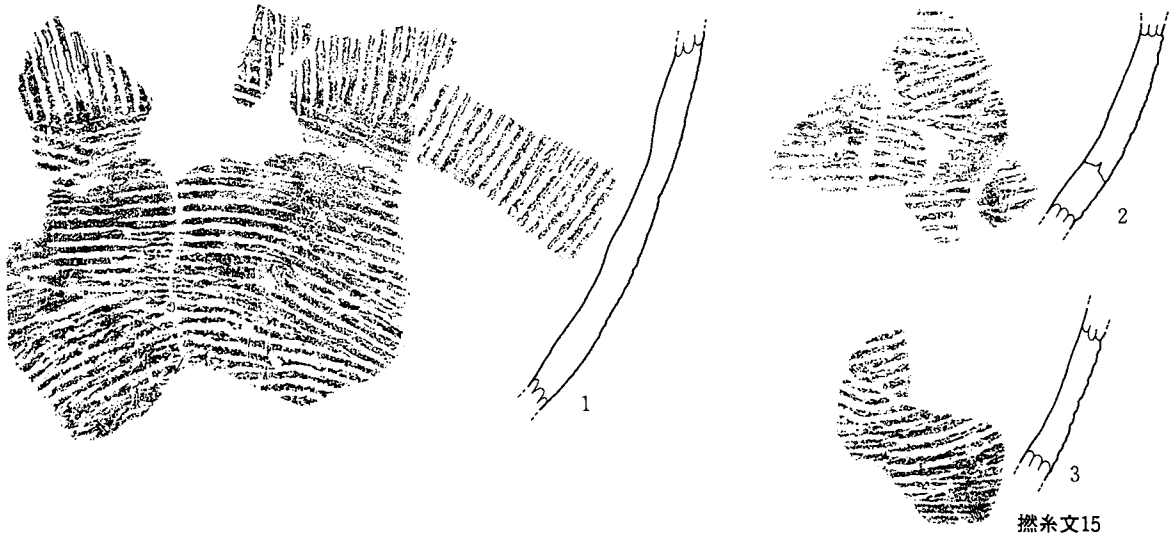
4点を認識して抽出した。いずれも胴部の破片である。



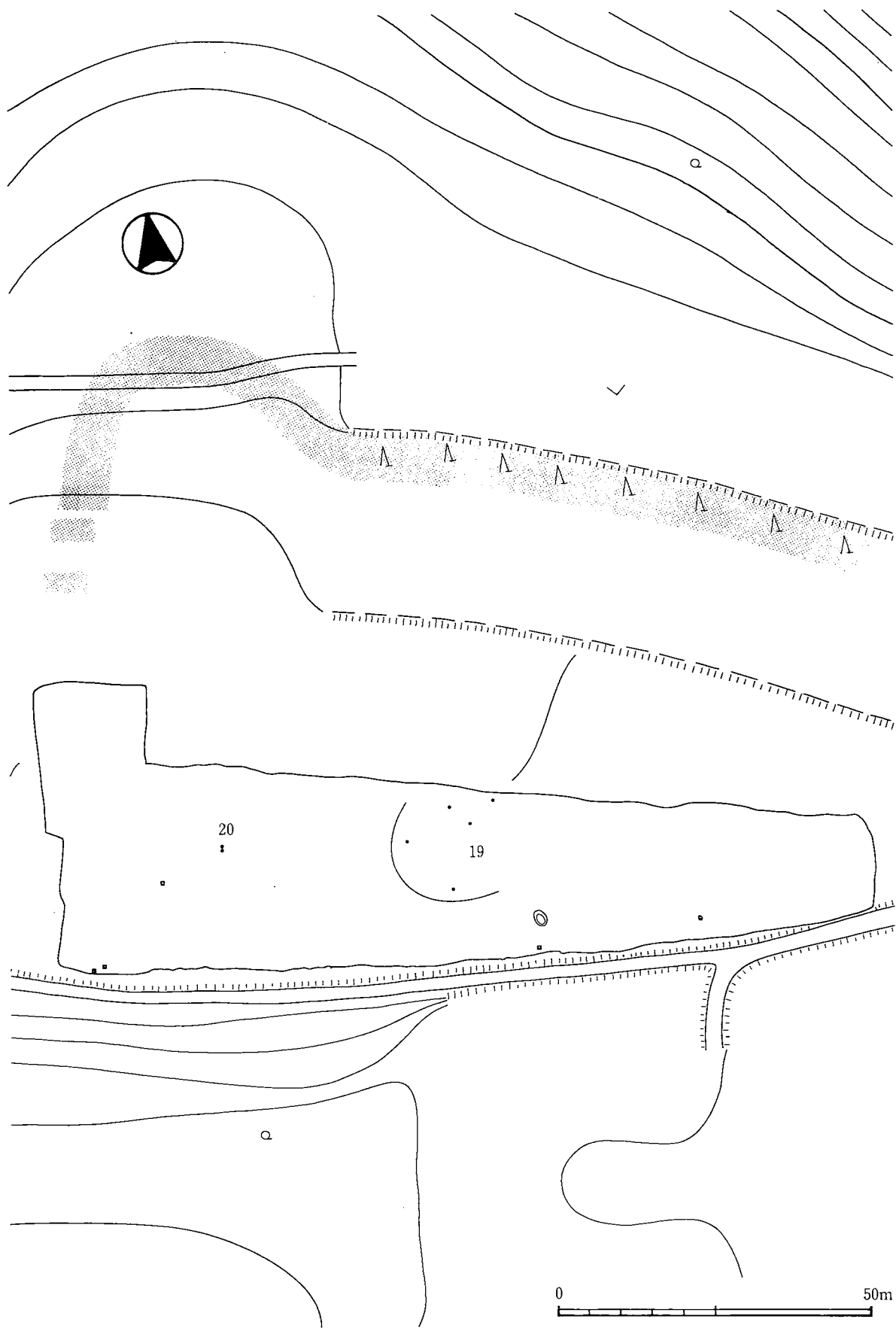
第161図 燃糸文土器15~17分布図



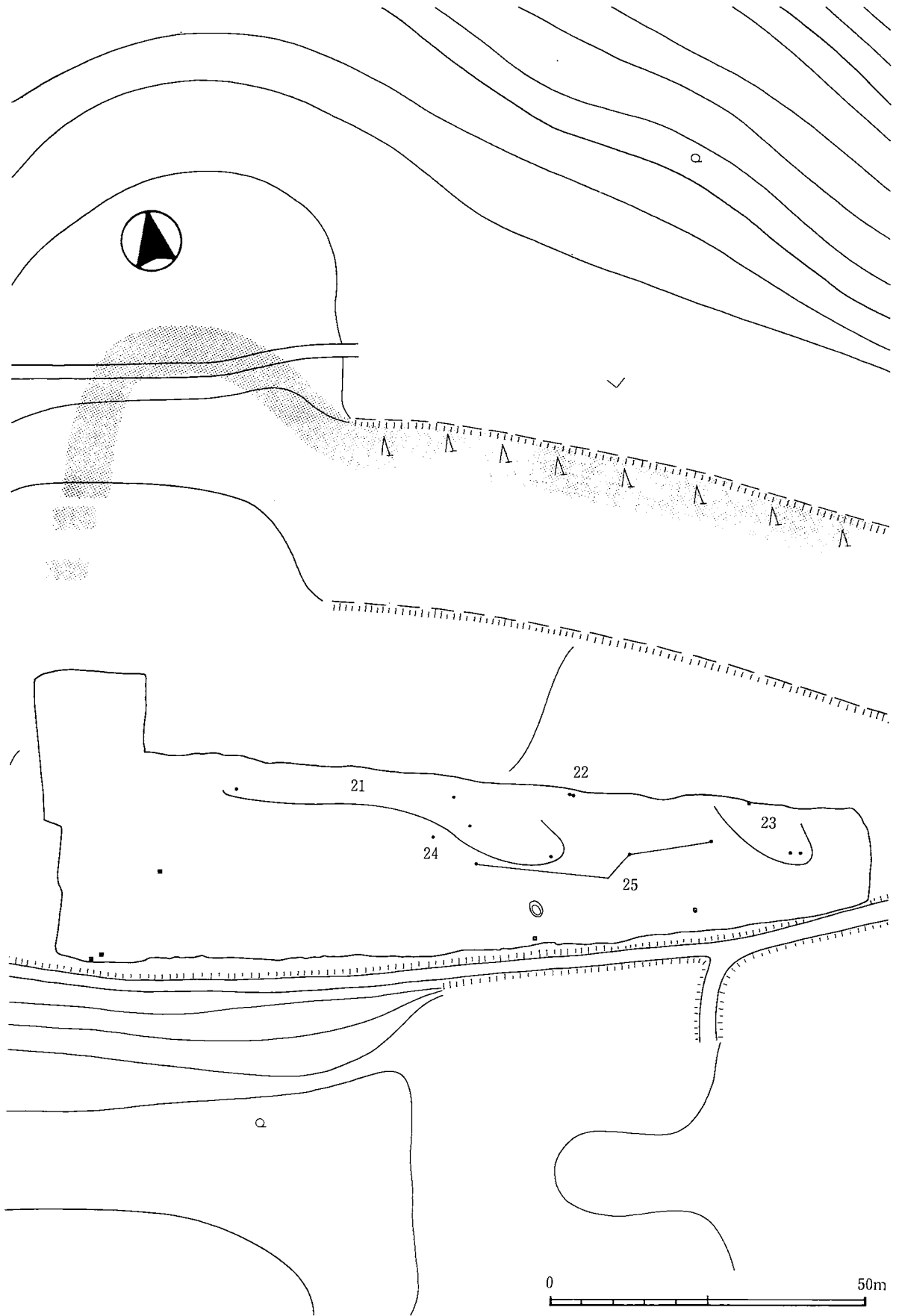
第162図 撚糸文土器18分布図



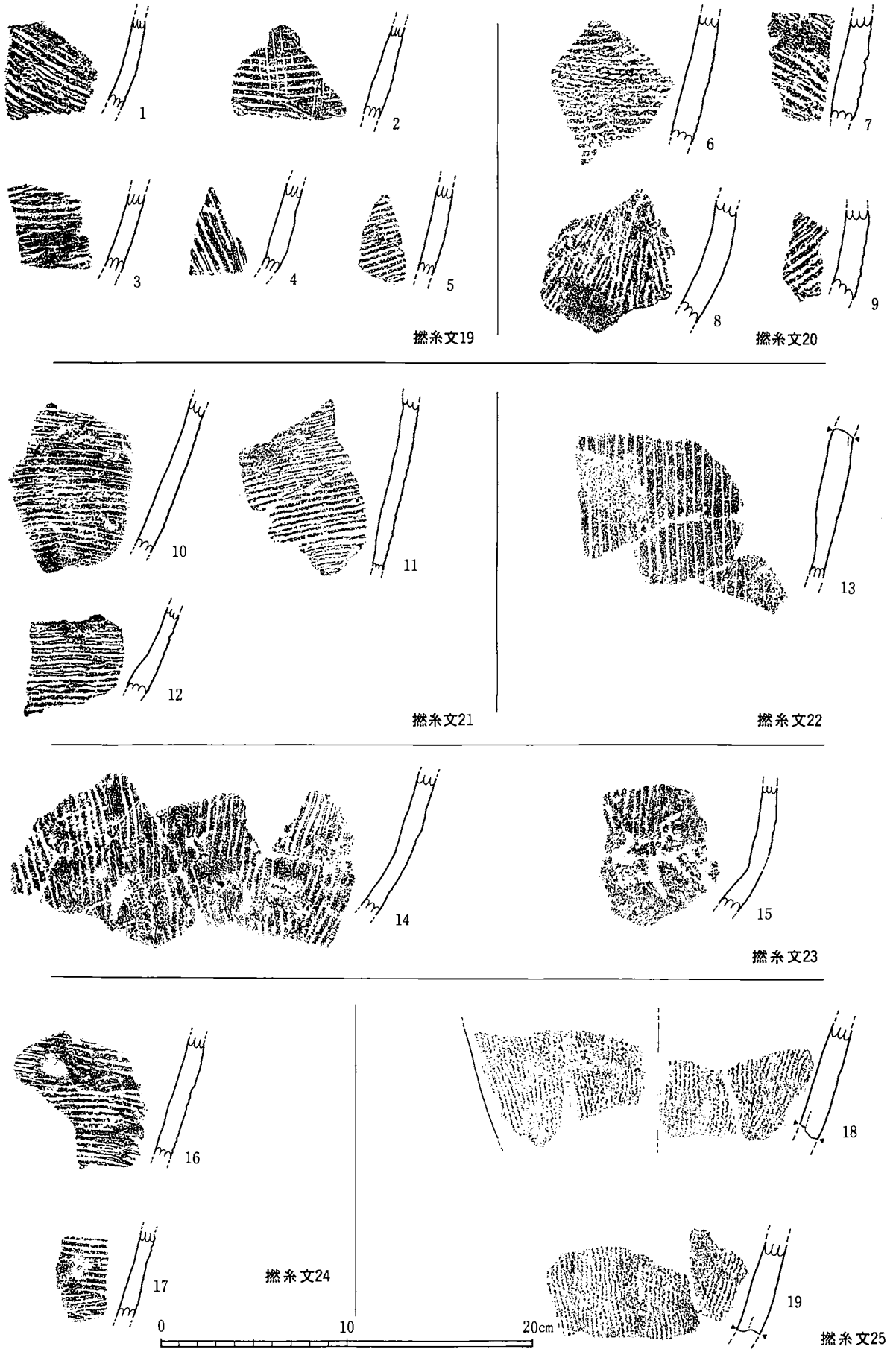
第163図 燃糸文土器15~18実測図



第164図 撚糸文土器19・20分布図

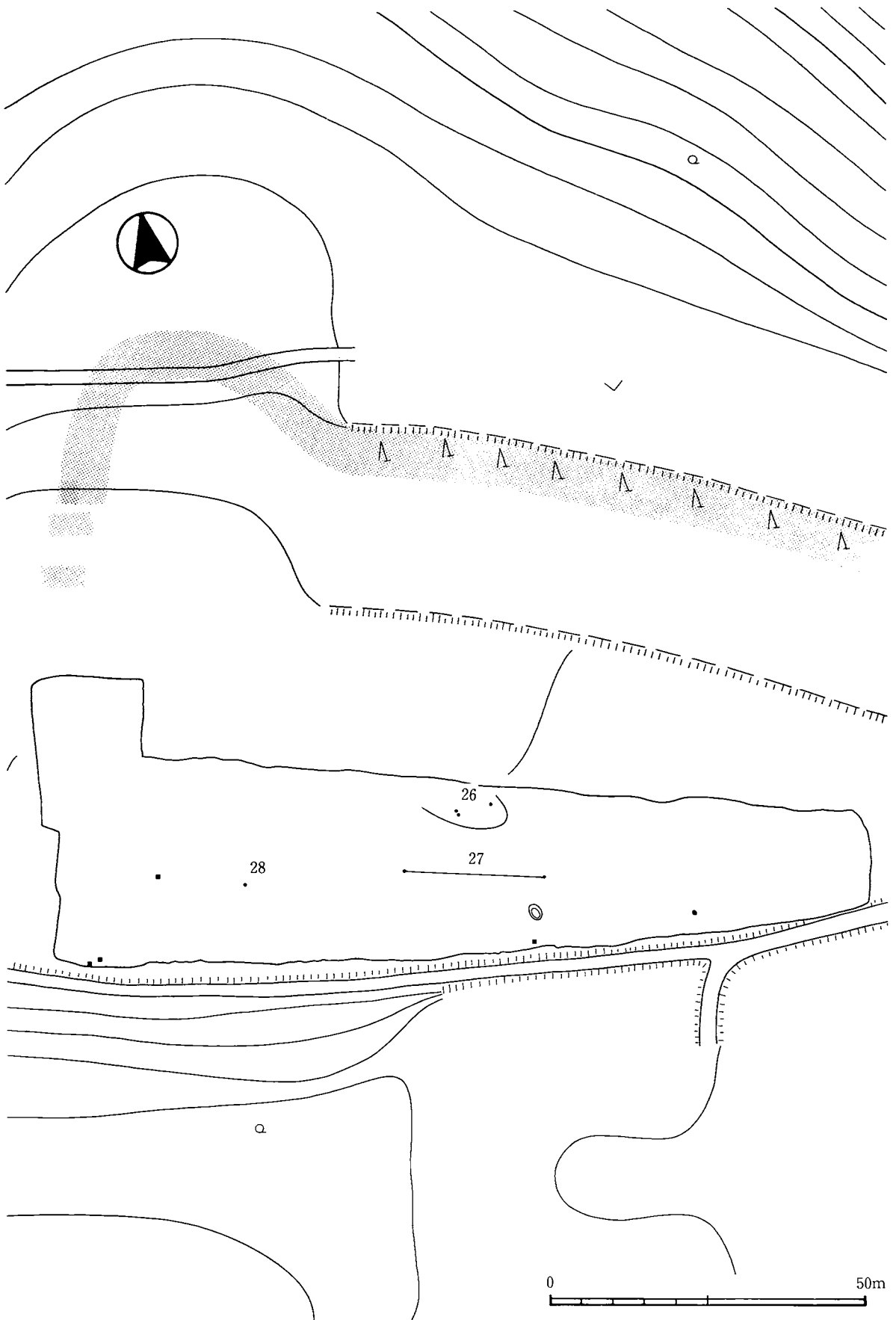


第165図 燃糸文土器21~25分布図



第166図 燃糸文土器19～25実測図





第167図 燃糸文土器26~28分布図

分布は、調査区の中央部、その北端近くにあり、お互いに近接した位置関係にあった。

文様は、編目の撚糸文である。その施文方向は、縦位と横位である。

**撚糸文土器27 (第167・168図5～9)**

個体識別で5点の資料を同一個体と認識した。すべて胴部の破片である。

分布は、調査区の中央部にある。

文様は、編目の撚糸文である。その施文方向は、縦位と横位である。

**撚糸文土器28 (第167・168図10・11)**

2点を抽出できた。いずれも胴部破片である。

分布は、調査区の西側にある。

文様は、編目の撚糸文である。その施文方向は、縦位と横位である。

**その他の破片 (第169図～第175図)**

個体識別を通して、28の個体別資料を認識できたが、それは、あくまでも出土資料の一部にすぎない。ここでは、こうした識別作業の過程で認識できなかったものについて、その資料提示をおこなうことを目的としている。

第169図から第171図15までは、口縁部の破片であ

る。これらの資料を型式学的に分類しようとするれば、以下の視点が考えられる。

①平行撚糸文なのか、編目撚糸文なのか。

②表面の施文方向が、縦ないし斜めなのか、横なのか。

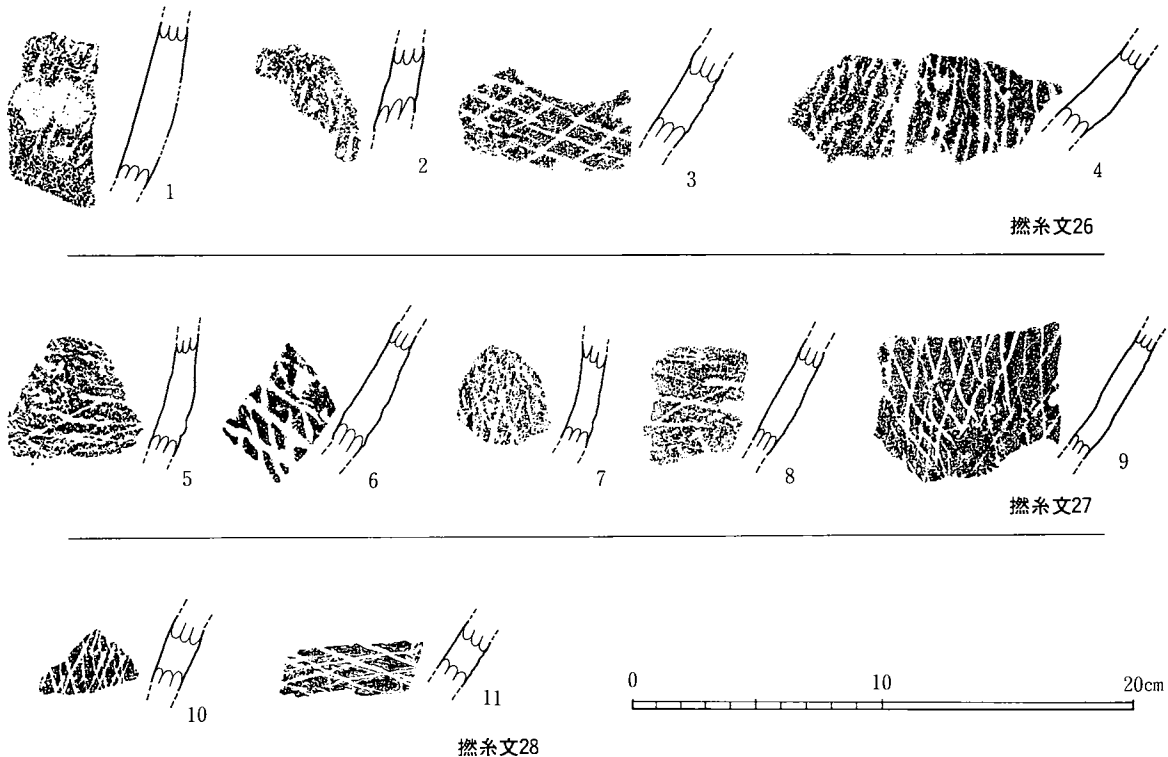
③裏面の文様には、撚糸文があるのか、原体条痕があるのか、または無文なのか。また、それぞれの文様を併用しているのか。

こうした視点をもって、ここで提示した撚糸文土器をみて、その分類を試みてみよう。

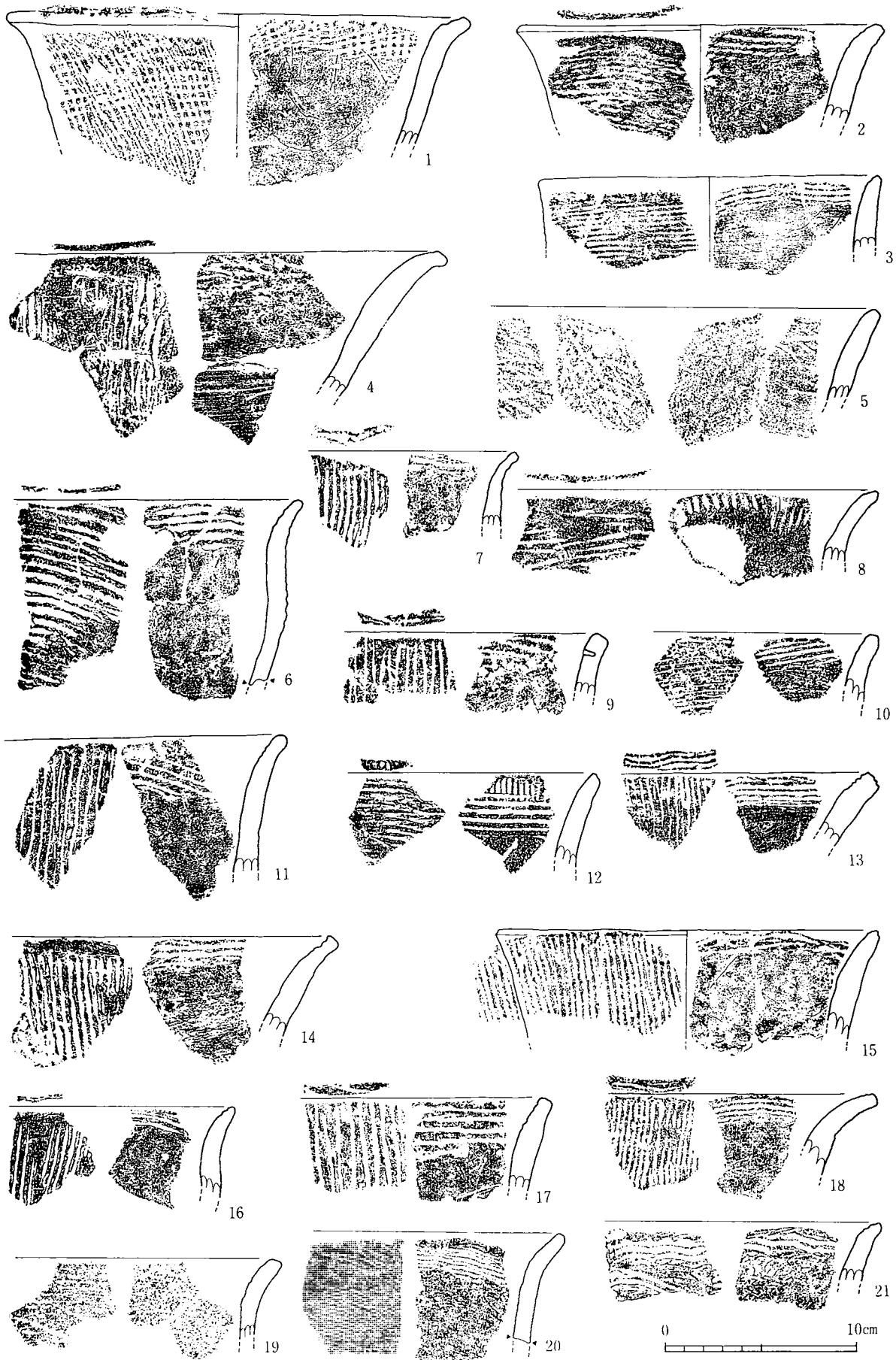
一つ目には、縦位の平行撚糸文が表面に、また裏面には横位の撚糸文が施された土器がある。もっとも出土点数の多い土器である。それをあげてみよう。第169図4・7・11・13～18・第170図2・3・7・9・12・13・15・22～25・27・28・30・32・34・第171図5・6・9・10・12がそれである。

二つ目には、横位の平行撚糸文が表面に、また裏面には横位の撚糸文が施された土器がある。第169図2・3・6・10・19～21・第170図4・16・19・20・26・29・第171図4がそれである。

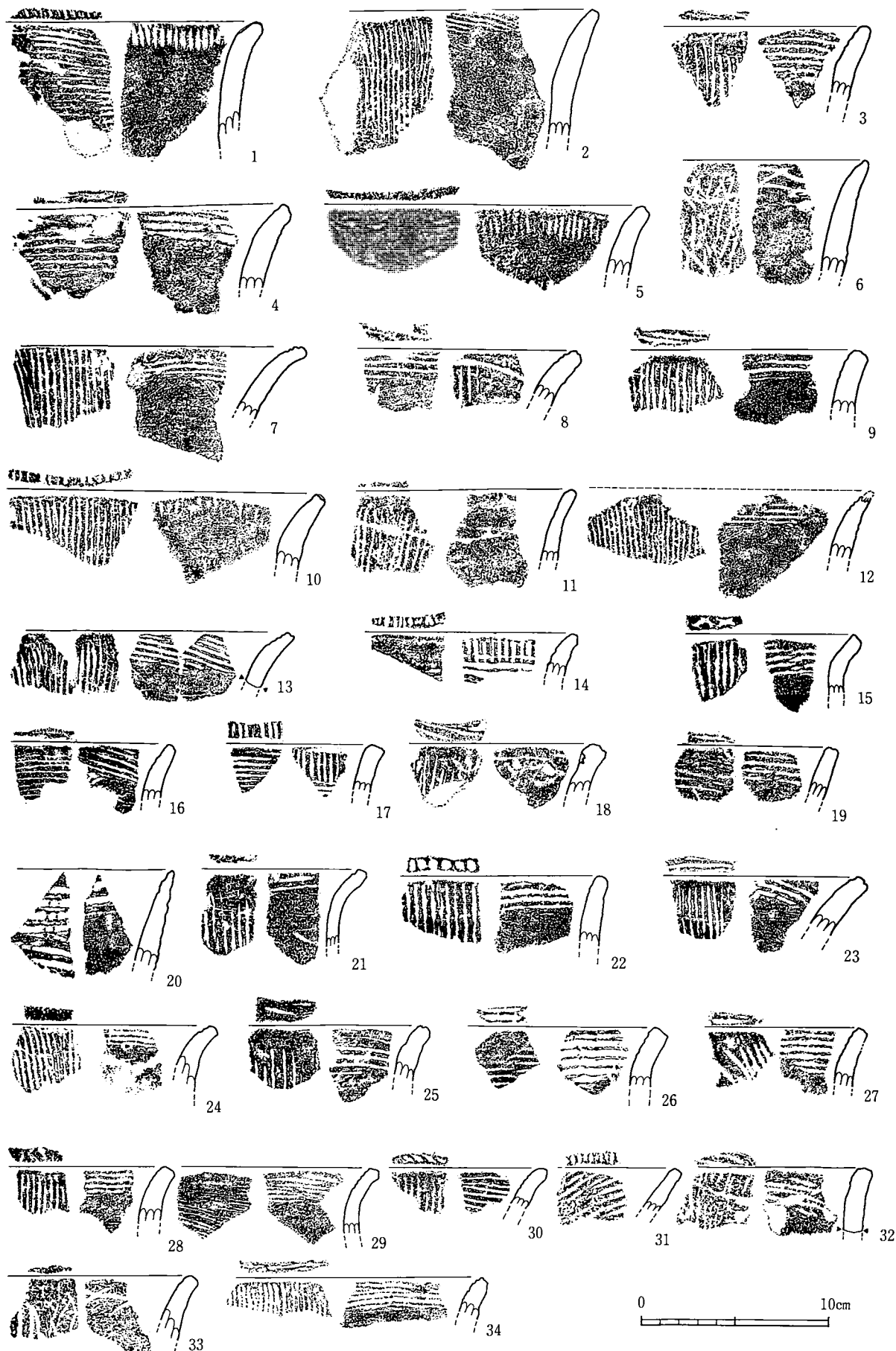
三つ目には、横位の平行撚糸文が表面に、また裏面には原体条痕が施された土器がある。第169図8・



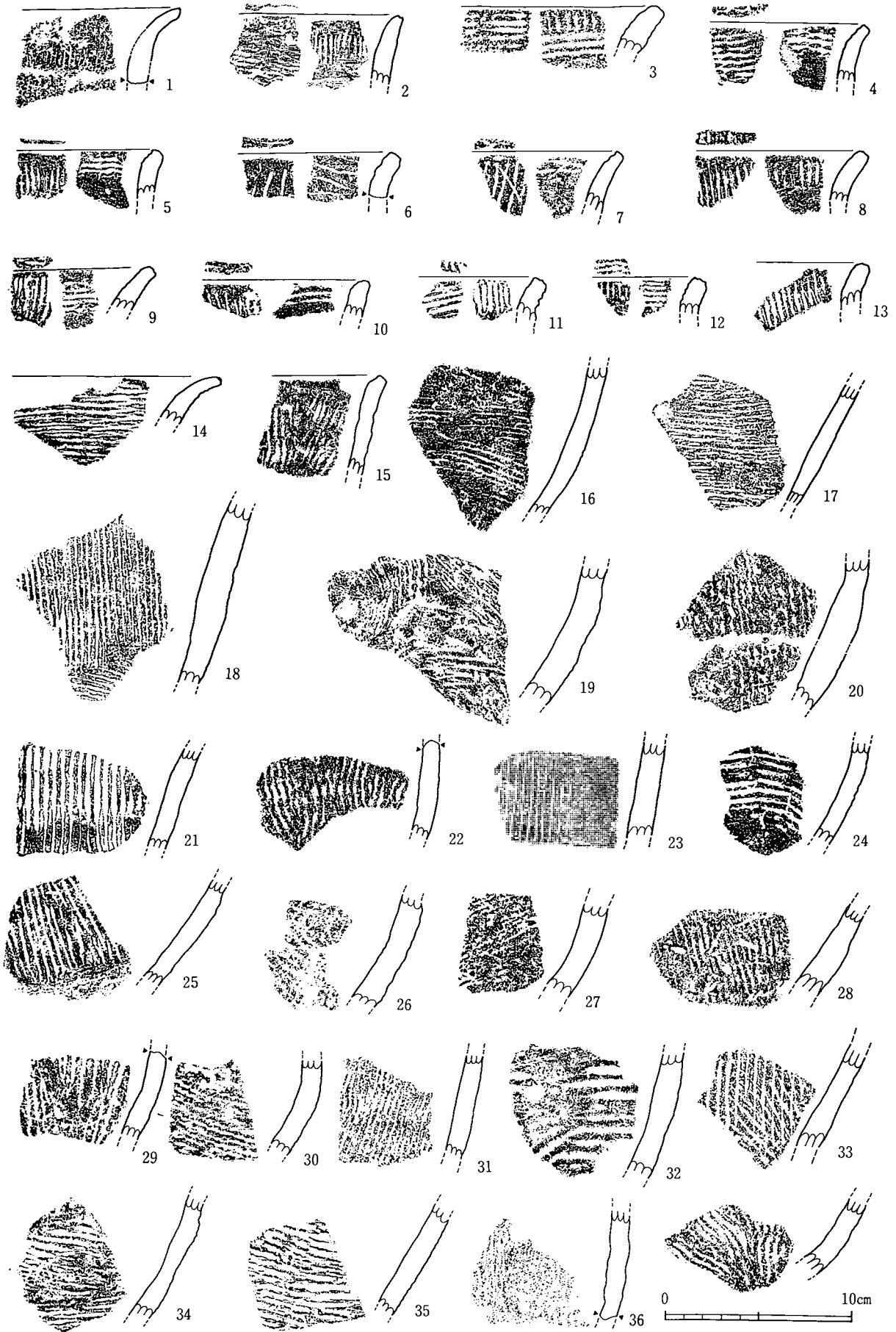
第168図 撚糸文土器26～28実測図



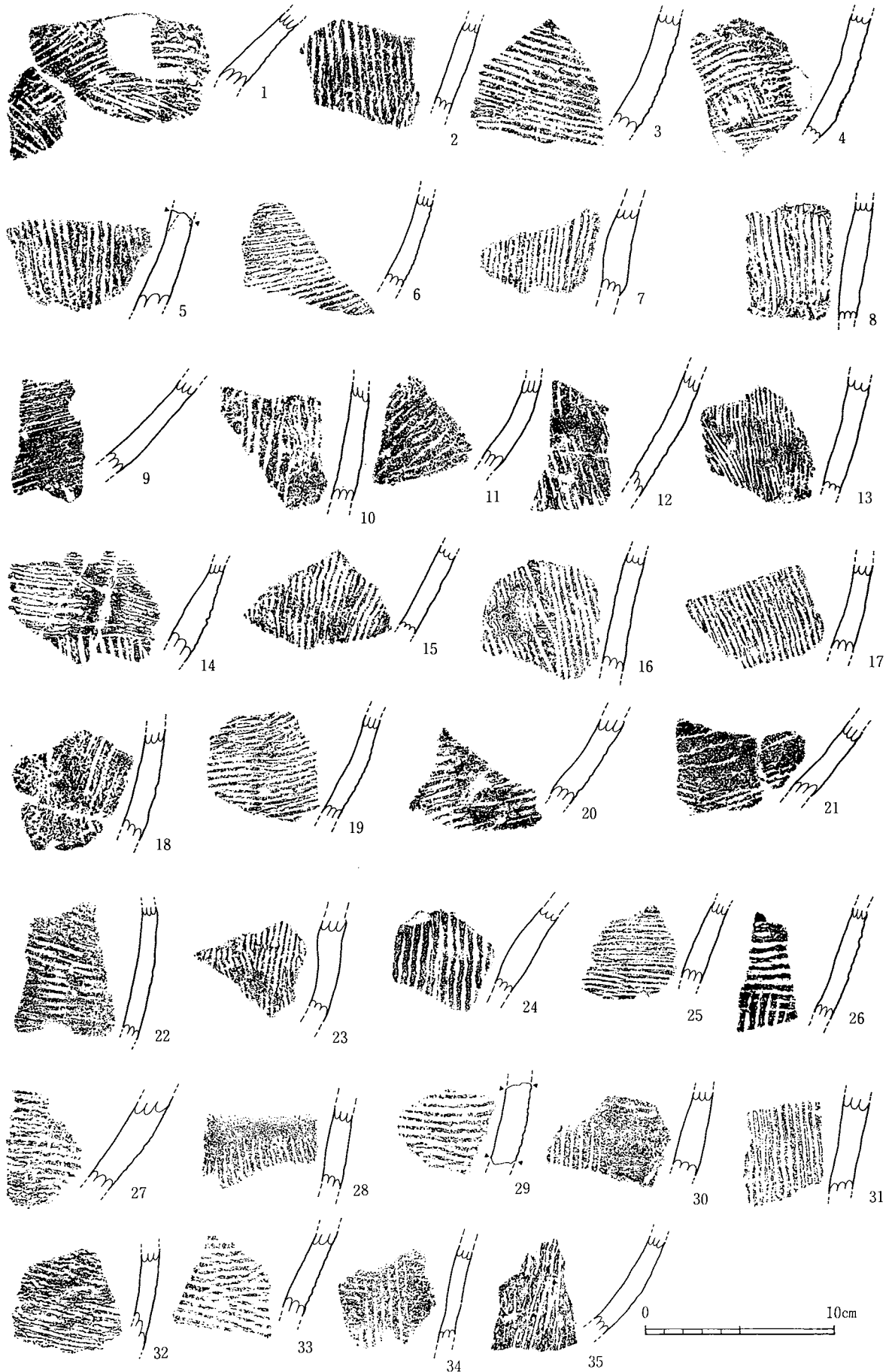
第169図 燃糸文土器その他実測図



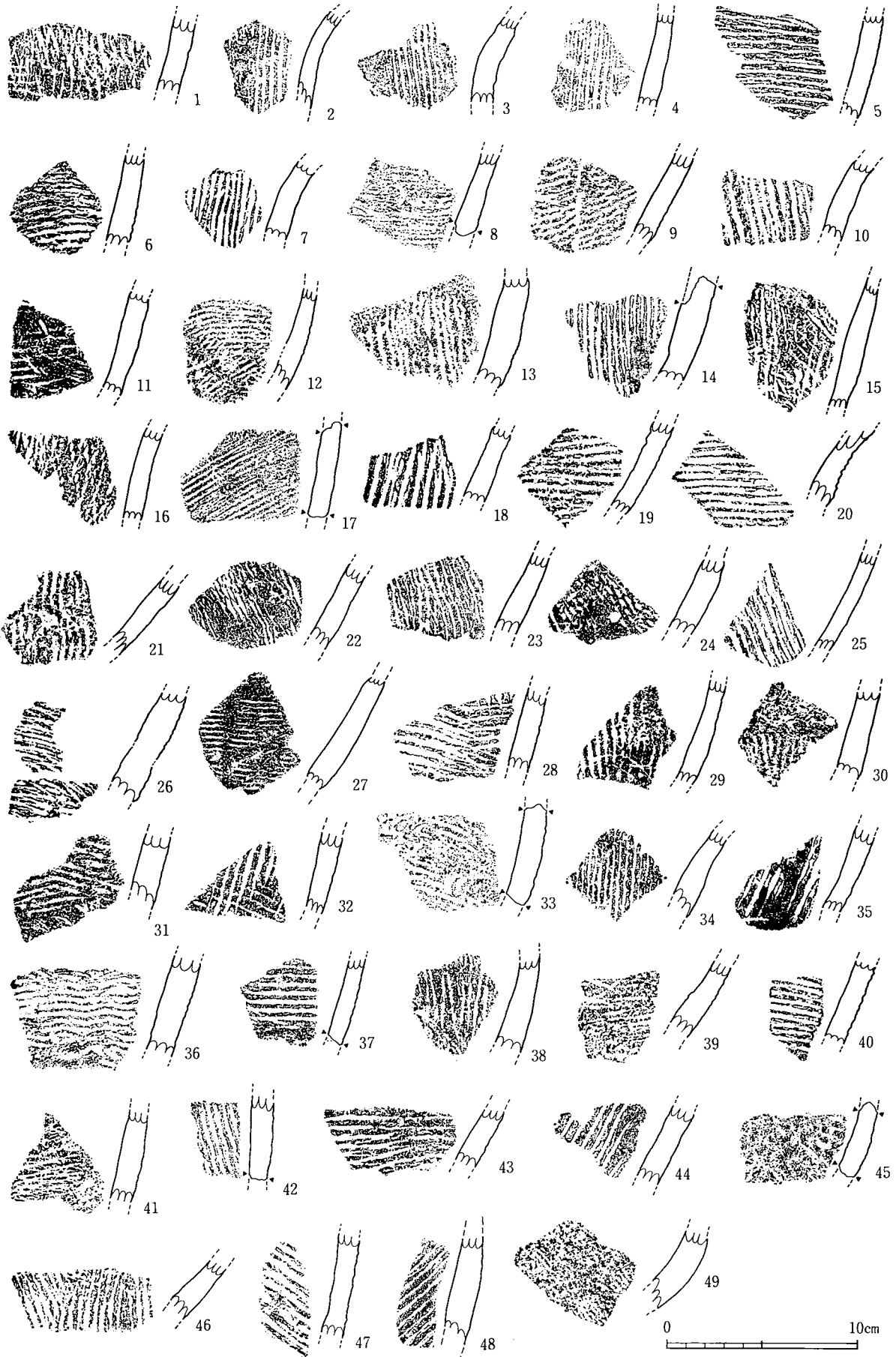
第170図 燃糸文土器その他実測図



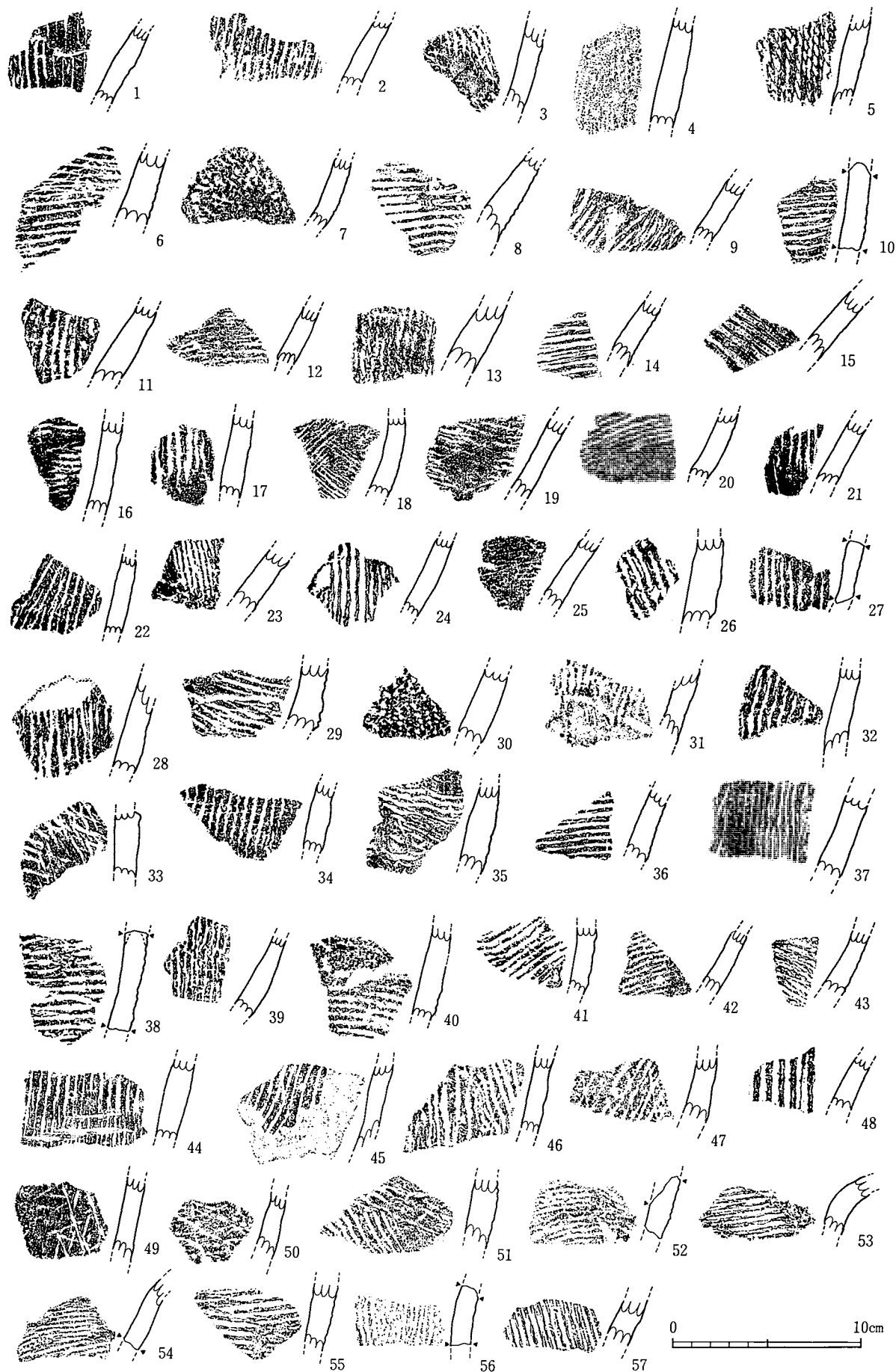
第171図 撚糸文土器その他実測図



第172図 燃糸文土器その他実測図

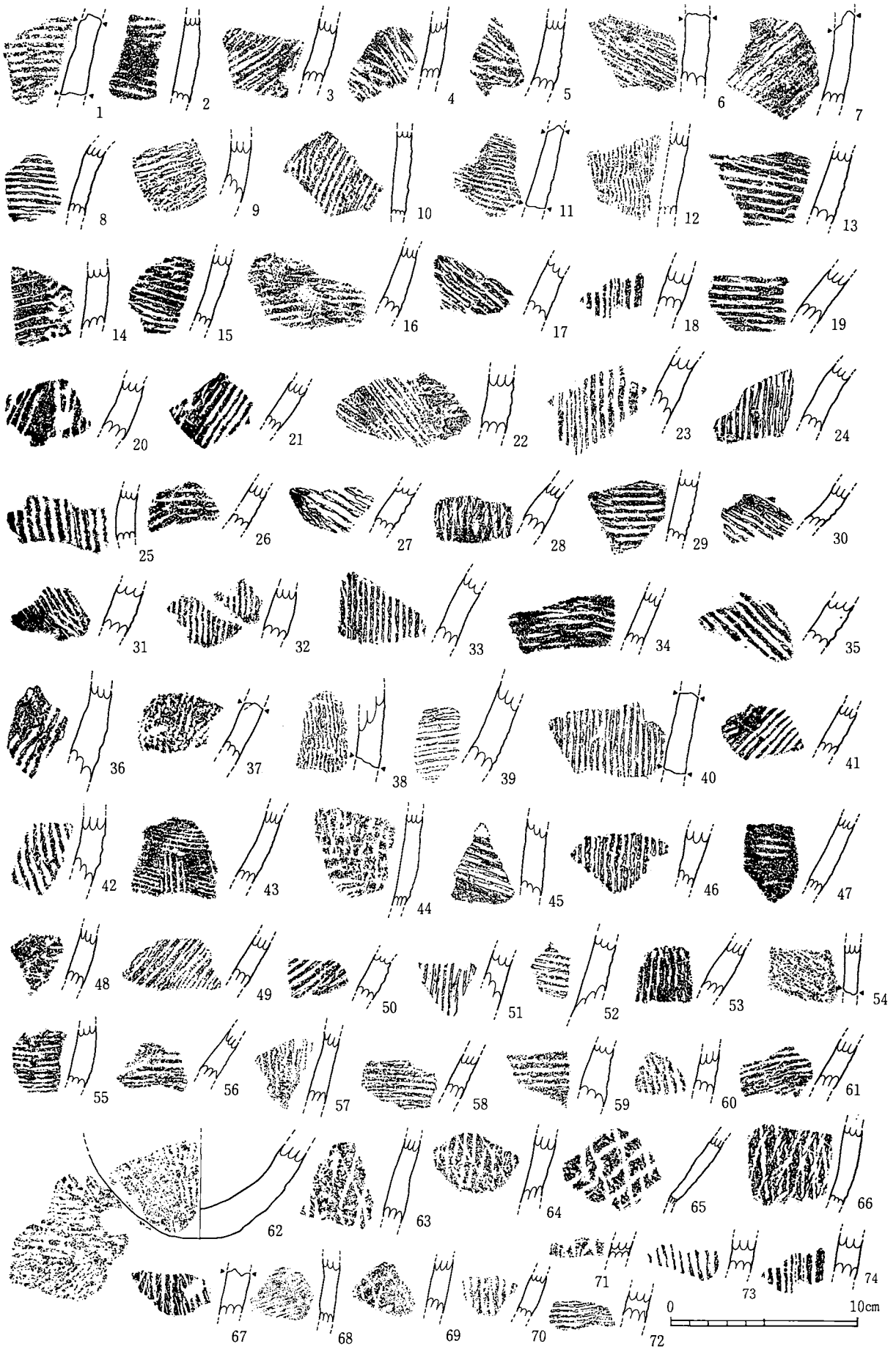


第173図 撚糸文土器その他実測図



第174図 撚糸文土器その他実測図





第175図 撚糸文土器その他実測図

第170図1・5・第171図11がそれである。

四つ目には、横位の平行撚糸文が表面に、また裏面には原体条痕と撚糸文とが施された土器がある。

第169図12・第170図14・17・第173図3がそれである。

五つ目には、横位の平行撚糸文が表面に、また裏面には縦位の撚糸文が施された土器がある。第170図8がそれである。

六つ目には、表面が縦位の平行撚糸文、裏面に刺突文がみられるもので、第169図9・第170図18である。

七つ目には、裏面に文様が無い土器である。表面が縦位の平行撚糸文のものは第171図13・15で、横位の平行撚糸文のものは第170図31・第171図14であった。

八つ目には、編目の撚糸文が施されている土器である。第169図1・5・第170図6・33・第171図7がそれである。

以上である。

さて、こうして分類された撚糸文土器であるが、この中でもっとも資料数が多いのが、一つ目のものと二つ目のものである。したがって、この二種の資料群をこの遺跡の主體的な型式の特徴とみなせよう。そして、それに付属する形で、三つ目以降の土器群があるということになる。なお、こうしたそれぞれの型式群は、ひとまず、時期差の可能性が高いと認識しておこう。

第171図16～第175図61・63～74は、胴部の破片である。大小取り揃えて提示しているが、これらを形式的に整理するとなるとなかなか困難である。そうした中で、何らかの特徴を抽出しようとするれば、平行撚糸文と編目撚糸文といった特徴がある。

一時的な乾燥の単位を示す痕跡として、胴部では凸形剝離面と凹形剝離面とがセットとなって、一つの破片に残されている資料がある。こうした資料は、ここで提示している中では2点ある。その幅は、3.1cm、3.2cm、3.3cm、4.0cm、4.2cm、4.3cm、4.4cm、4.5cm、4.5cm、5.1cm、5.3cm、5.4cmである。

底部関係の資料は、第175図62である。丸底である。

#### ④ 条痕土器

貝殻等による条痕が器面にみられる土器がある。これを、文様とみなすのか器面調整の痕跡とするのかは、意見が別れるところであり、今後も議論を必

要とする問題である。ただし現時点では、私は、確かに、文様として認識すべきものもあるが、特に表面に関しては器面調整の意味が強く、その判別が明確ではない場合があると考える立場である。そういう意味から、ここでは、「文」という字をはずして、「条痕土器」と呼称している。

分布は、調査区のほぼ全域にみられるが、調査区の東端と西端でやや希薄である(第176図)。

出土した土器の個体識別をおこなった結果、14の個体を認識した。そこで、これらを条痕土器1～14と呼称し、それぞれの個体別資料をしてみることにしよう。

#### 条痕土器1(第177・179図1・2)

5点を同一個体として認識した。底部を欠いているが、反転復元によってその器形の全体をある程度推定することができた。それによると、口縁部で弱く外反し、胴部中位でわずかに膨らむ器形である。また、胴部全体は、やや丸みを持っている。復元口径は、21.9cmである。

分布は、調査区の西側、それも北端に偏った所にある。その傾向は、散在的である。

条痕等は、表面と口唇部、そして裏面口縁部にある。表面は条痕で、その方向は、胴部上半が横、胴部下半が縦である。口唇部は、刻みである。裏面口縁部は、押型文土器などでみられるような原体条痕様のもので、表面の条痕と同じものでつけられている。縦位である。

#### 条痕土器2(第177・179図3～9)

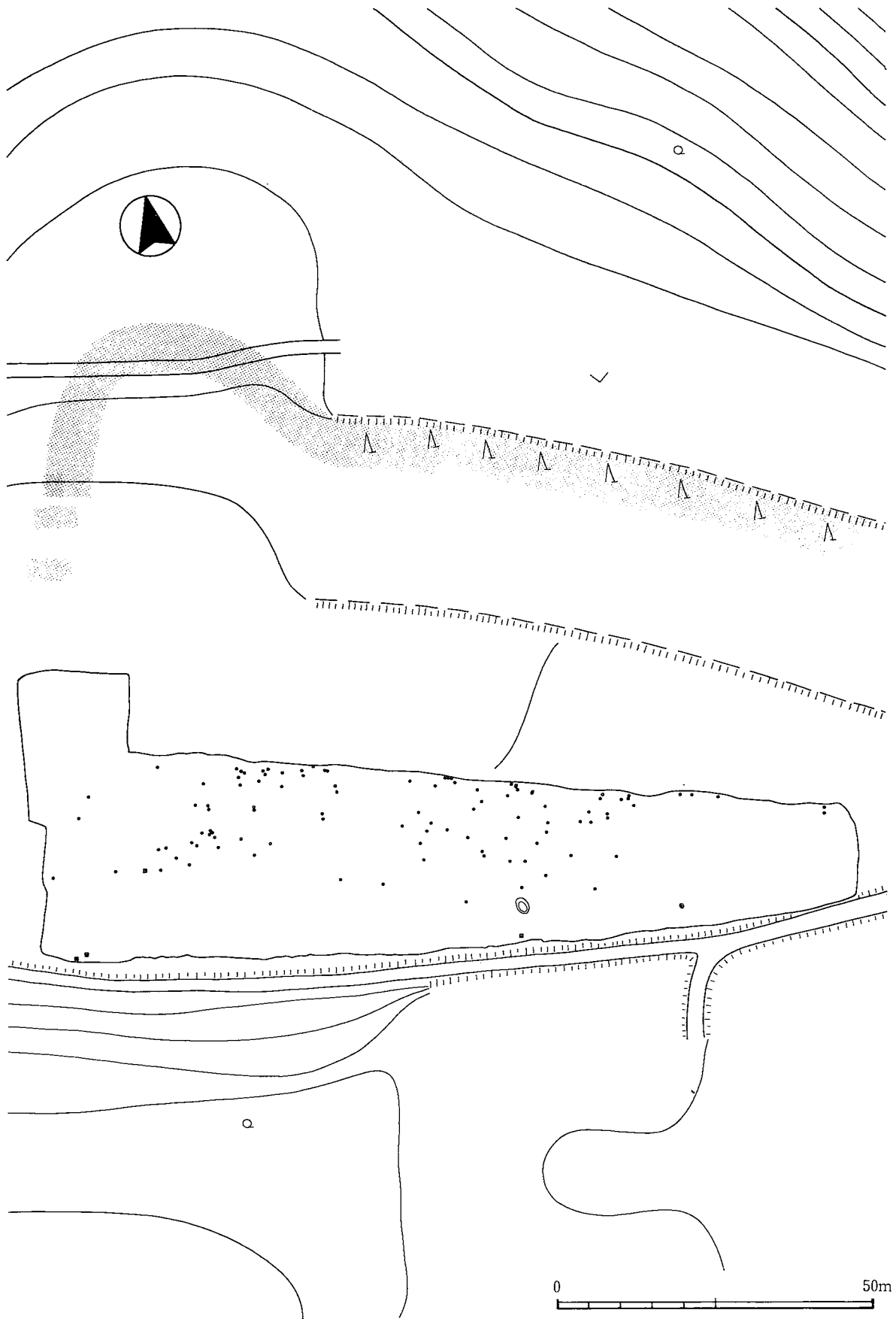
個体別資料として認識できた破片は、7点である。その部位は、口縁部と胴部である。こうした資料からその器形を復元すると、端部で強く外反する口縁部、やや丸みを持つ胴部である。

分布は、調査区の西側にあり、しかも広い範囲に点在するという状況にあった。

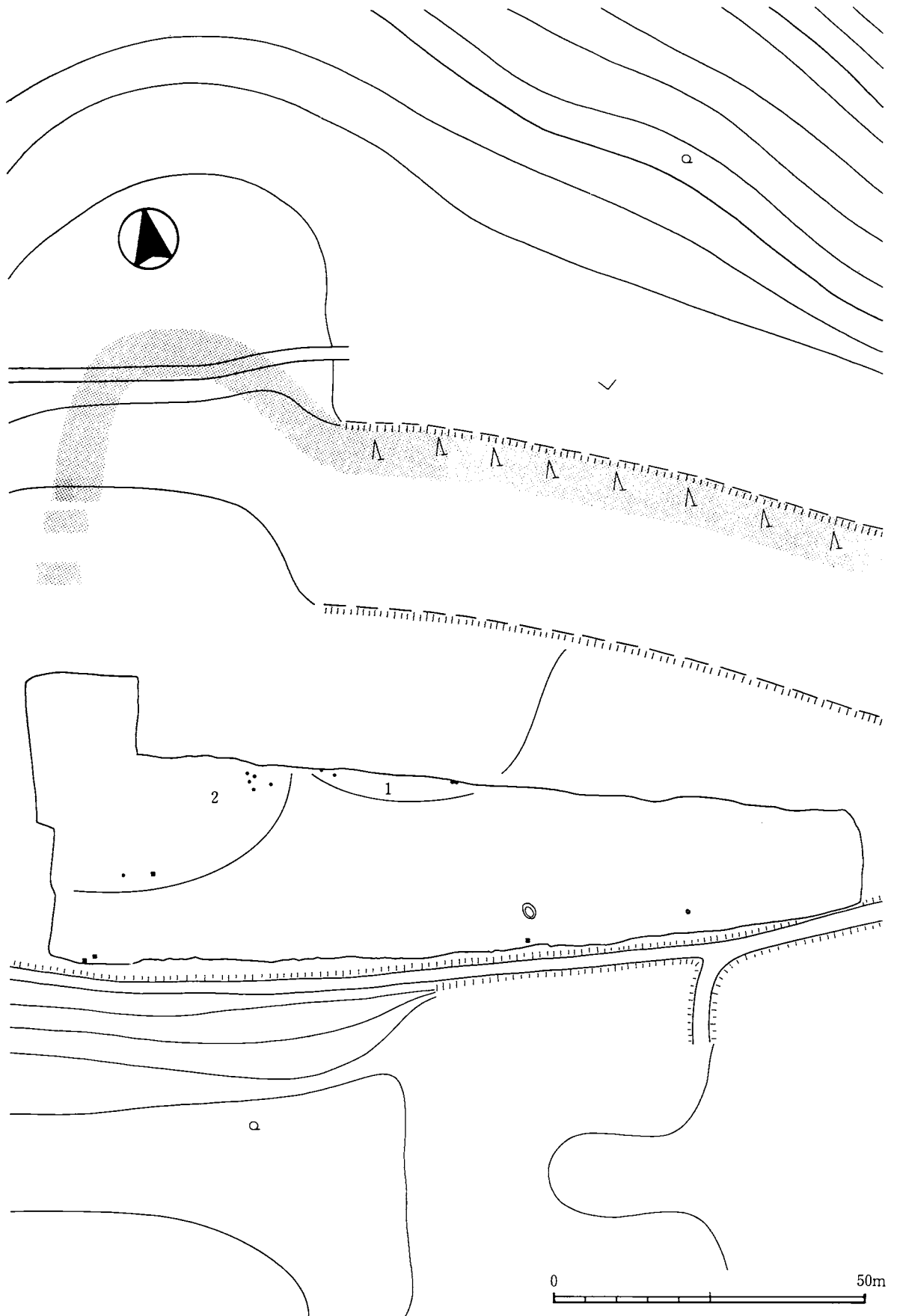
条痕は、表面と裏面口縁部にある。表面は横方向の条痕が中心であるが、一部に斜め方向のものもみられるようである。裏面口縁部には、横方向の条痕である。

#### 条痕土器3(第178・179図10)

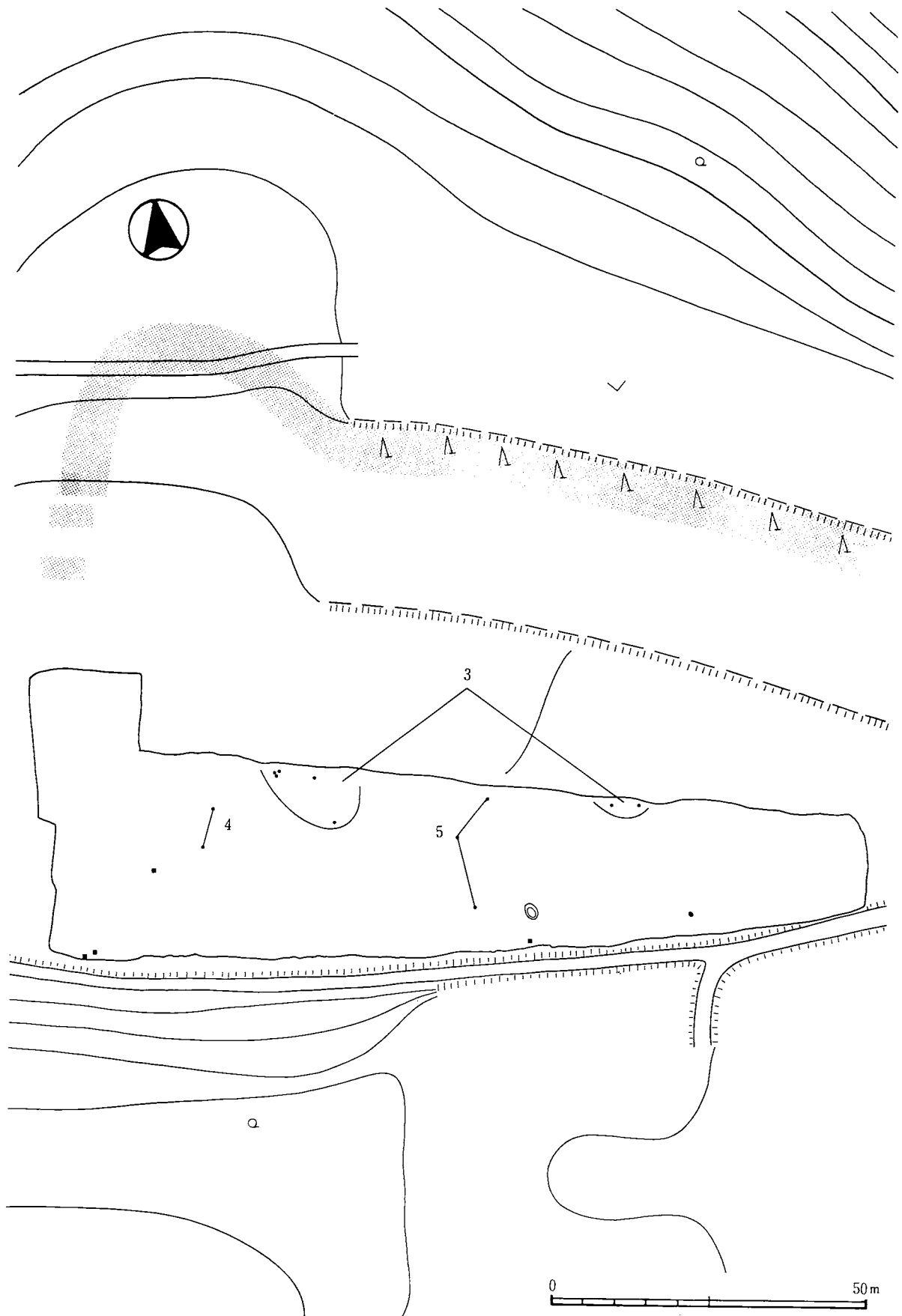
資料は7点あり、いずれも接合している。胴部で



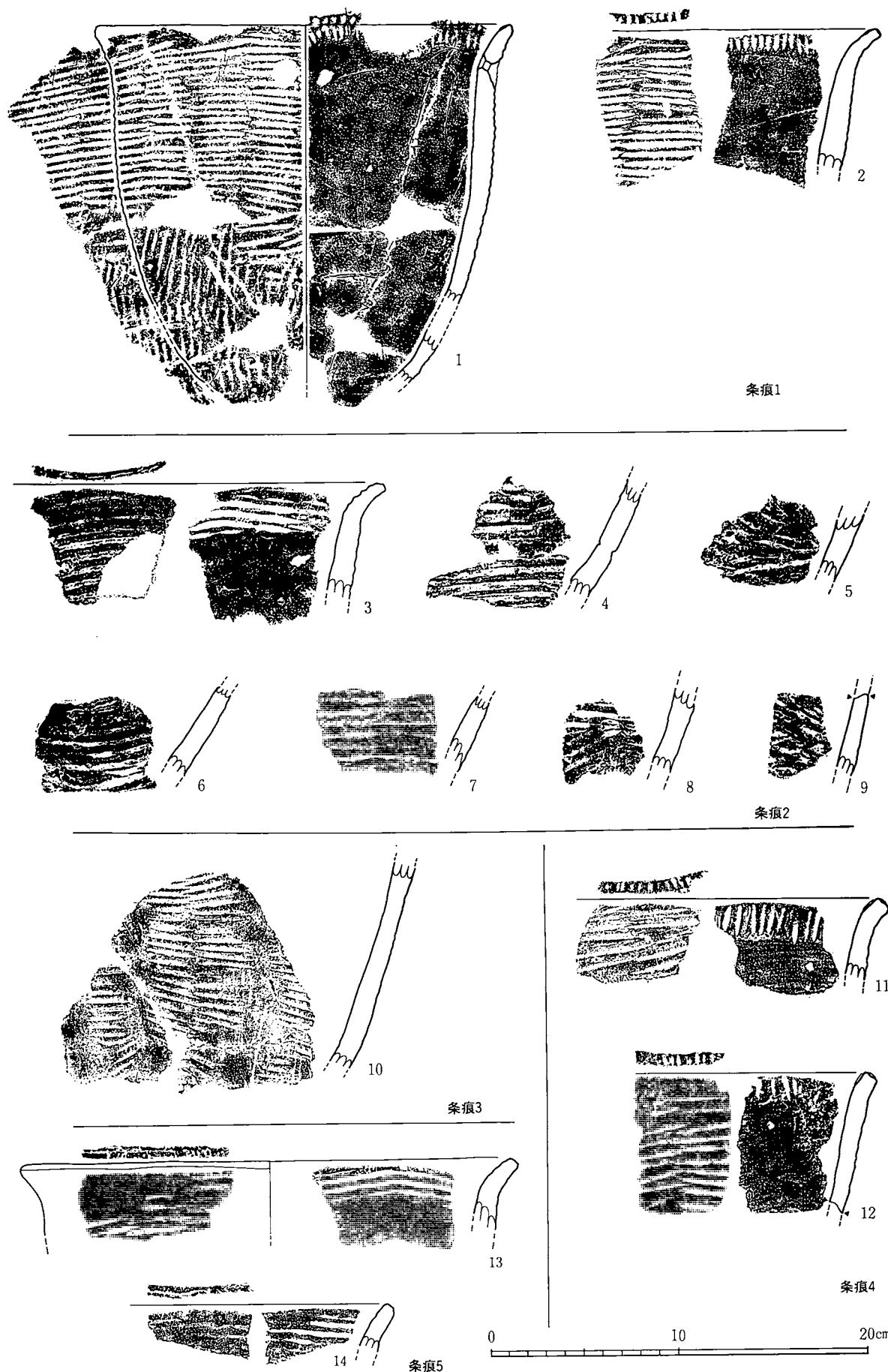
第176図 条痕土器分布図



第177図 条痕土器1・2分布図



第178図 条痕土器3~5分布図



第179図 条痕土器1~5実測図

ある。

分布は、調査区の中央部の中央にある。

条痕は、横方向である。

**条痕土器 4 (第178・179図11・12)**

破片は、2点である。いずれも口縁部の破片で、その端部はわずかに外反している。

分布は、調査区の西側にある。

表面には、横位の条痕がある。口唇部は、刻目状である。裏面口縁部には、原体条痕状の文様で、縦位の条痕が観察される。

**条痕土器 5 (第178・179図13・14)**

資料は、3点である。いずれも口縁部の破片である。器形全体に関しては、類推不可能であった。

分布は、調査区の中央部にあり、その北端から南側にまで広がっていた。

表面には、横位の条痕がある。また、口唇部には、刻目を意識したような、縦位の条痕が観察される。

裏面口縁部には、横位の条痕が観察される。

**条痕土器 6 (第180・181図1・2)**

同一個体として、2点を認識した。いずれも口縁部で、弱く外反している。復元口径は、19.9cmである。

分布は、調査区の東側、その中央部にある。

表面には、横位の条痕がみられる。口唇部には、刻目状の条痕が観察される。裏面口縁部には、原体条痕状の縦位条痕とその直下に施された刺突文がある。

**条痕土器 7 (第180・181図3・4)**

同一個体として認識した破片は、2点であった。部位は、口縁部である。

分布は、調査区の西側、その北端にある。

表面には、横位の条痕がある。口唇部には、刻目状の条痕が観察される。裏面口縁部には、原体条痕状の縦位条痕がある。

**条痕土器 8 (第180・181図5・6)**

資料は、2点ある。その部位は、胴部である。

分布は、調査区の東側にある。

いずれも横位の条痕が残されている。

**条痕土器 9 (第180・181図7・8)**

同一個体として認識できた破片は、2点である。いずれも胴部である。

分布は、調査区の東側、その北端にある。

いずれも横位の条痕が残されている。

**条痕土器10 (第180・181図9・10)**

資料は、2点で、胴部の破片である。

分布は、調査区の西側、その北端にある。

横位の条痕がみられる。

**条痕土器11 (第180・181図11・12)**

出土点数は2点である。部位は、胴部である。

分布は、調査区の西側にある。

いずれも横位の条痕が残されている。

**条痕土器12 (第180・181図13)**

出土点数は、2点で、接合している。その部位は、胴部である。

分布は、調査区の東側、その北端にみられる。

縦ないし斜め方向の条痕である。

輪積み手法によって製作されている土器である。

その乾燥の単位は、8.4cmであった。

**条痕土器13 (第180・181図14)**

個体識別の結果、3点を同一個体として認識した。胴部の破片である。

分布は、調査区の東側、その北端にあった。

斜めの条痕が観察される。

**条痕土器14 (第180・181図15)**

同一個体として認識できた破片は2点である。胴部の資料である。

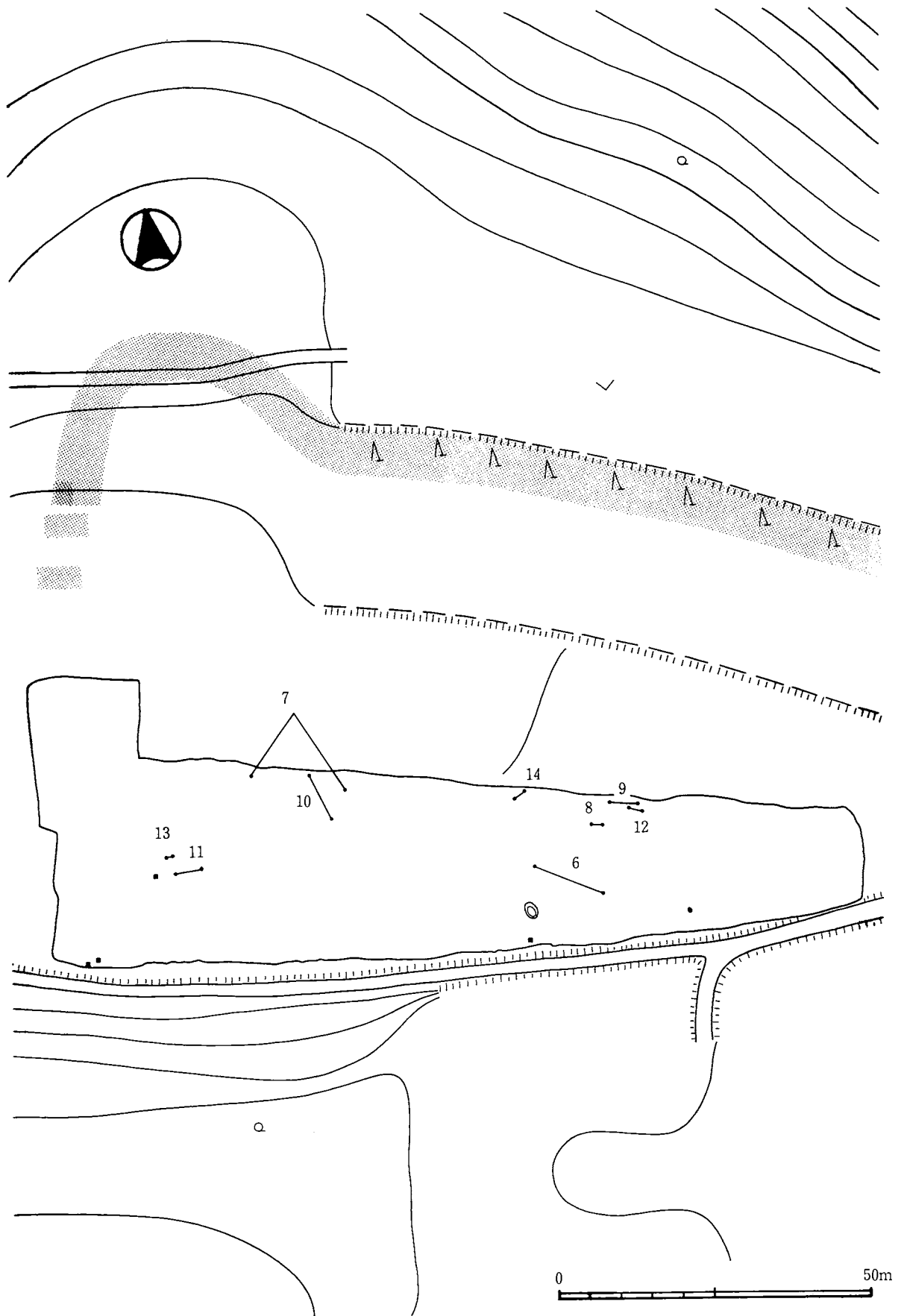
分布は、調査区の中央部、その東側にあり、しかもその北端にある。胴部の破片である。

横位の条痕である。

**その他の破片 (第182図・183図)**

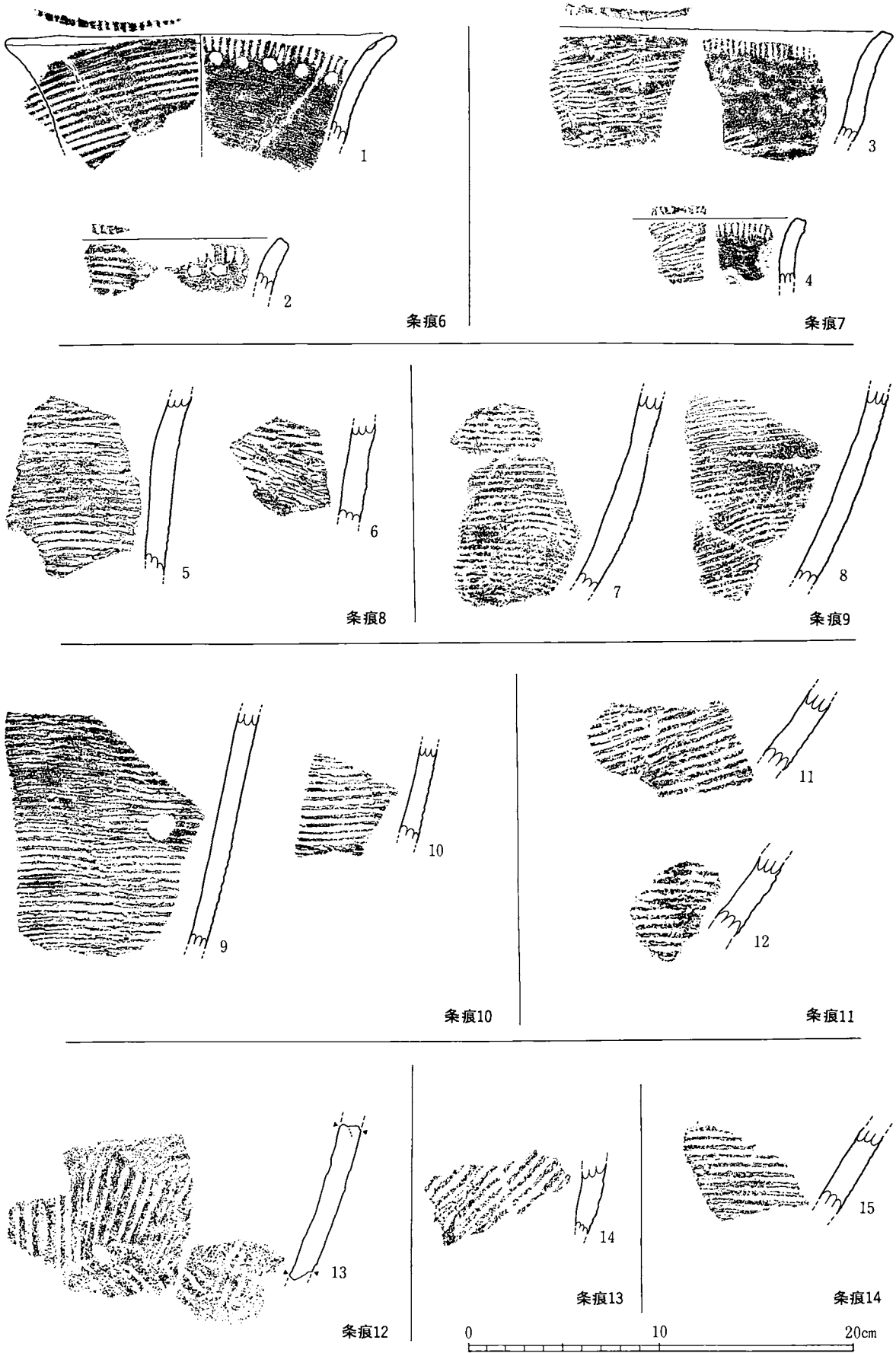
条痕土器では、個体識別を通して、14の個体別資料を認識できた。ただし、それらは、あくまでも出土資料の一部にすぎない。ここでは、こうした識別作業の過程で認識できなかったものについて、その提示をおこなうことにしたい。

第182図1～3は、口縁部の破片である。個別にみていこう。1には、表面に横位の条痕、口唇部に刻目状の条痕、裏面口縁部に原体条痕状の縦位条痕と刺突文がみられる。口縁部が大きく開く器形である。2には、表面に横位の条痕、口唇部に刻目状の条痕、裏面口縁部に縦位条痕がみられる。口縁部の開きは、弱い。3には、表面に横位の条痕、裏面口縁部に縦

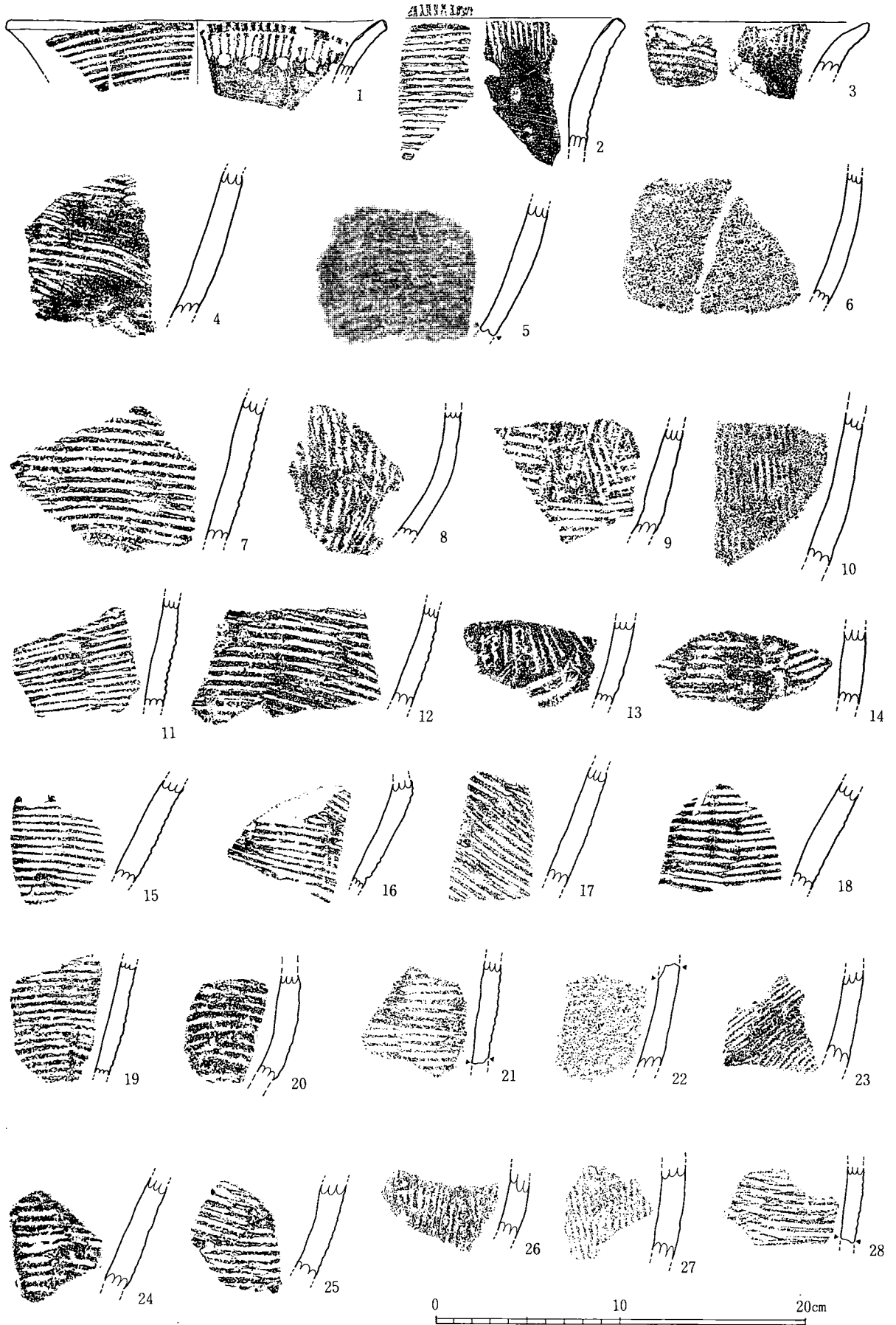


第180図 条痕土器6~14分布図

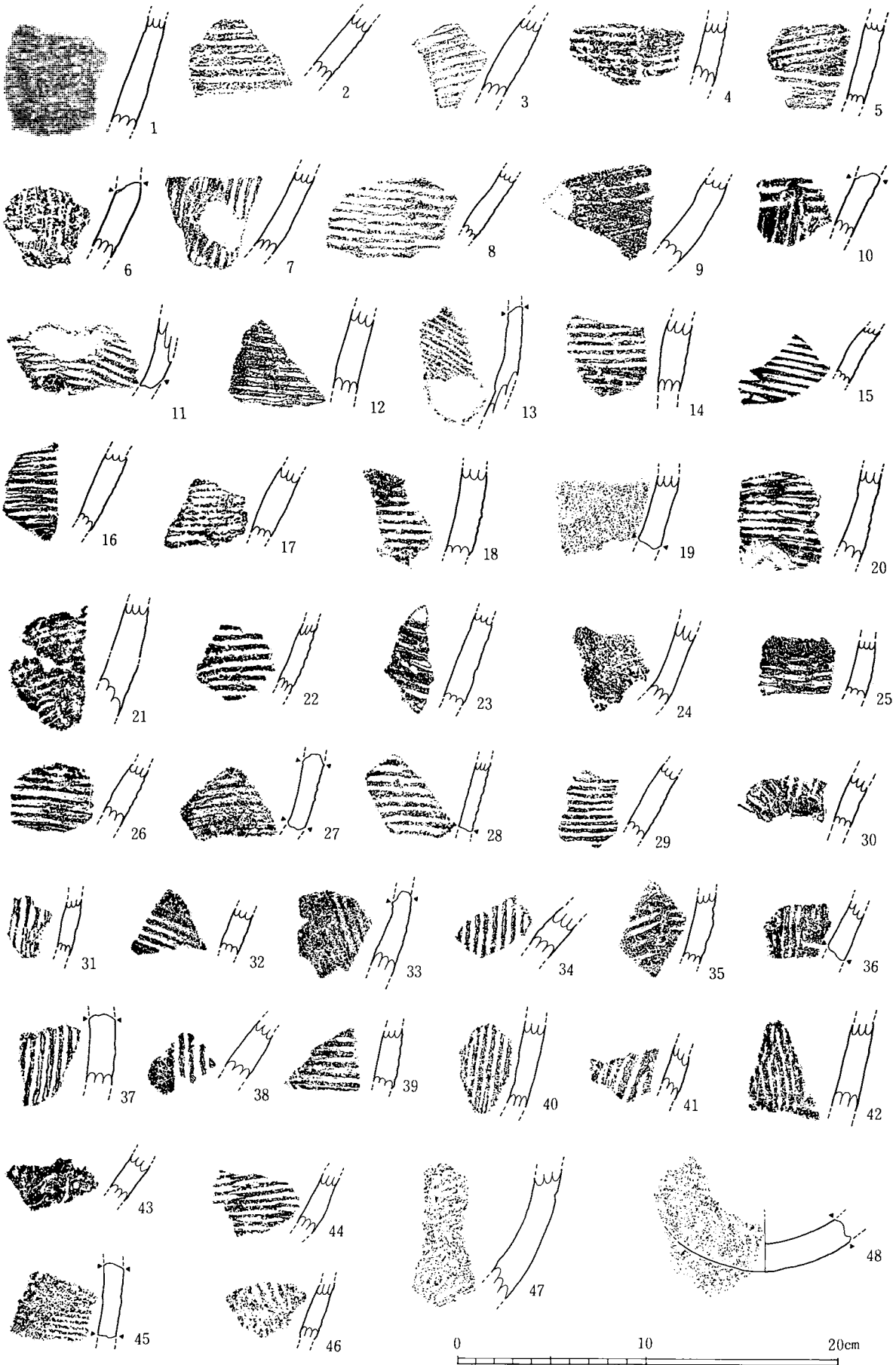




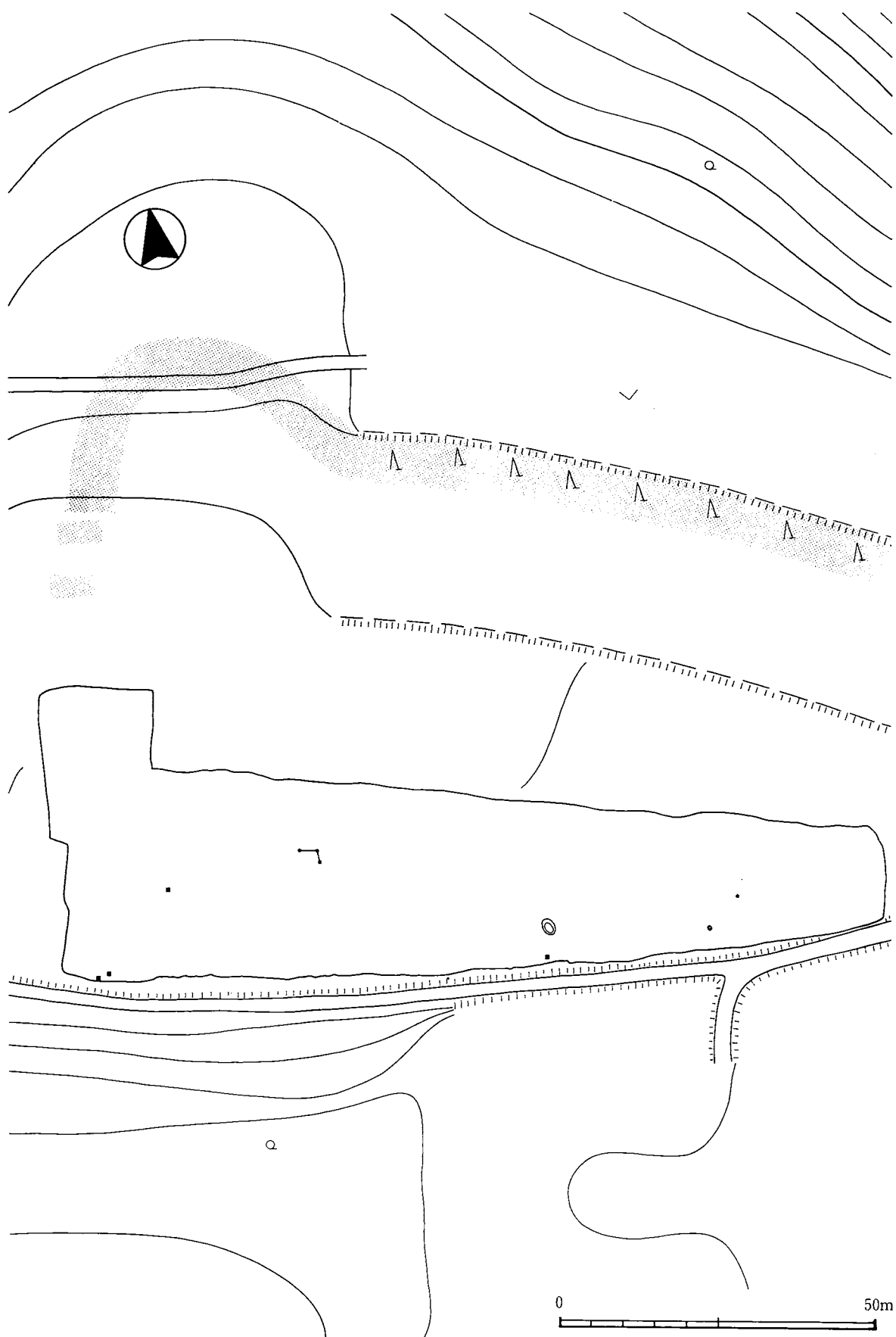
第181図 条痕土器6~14実測図



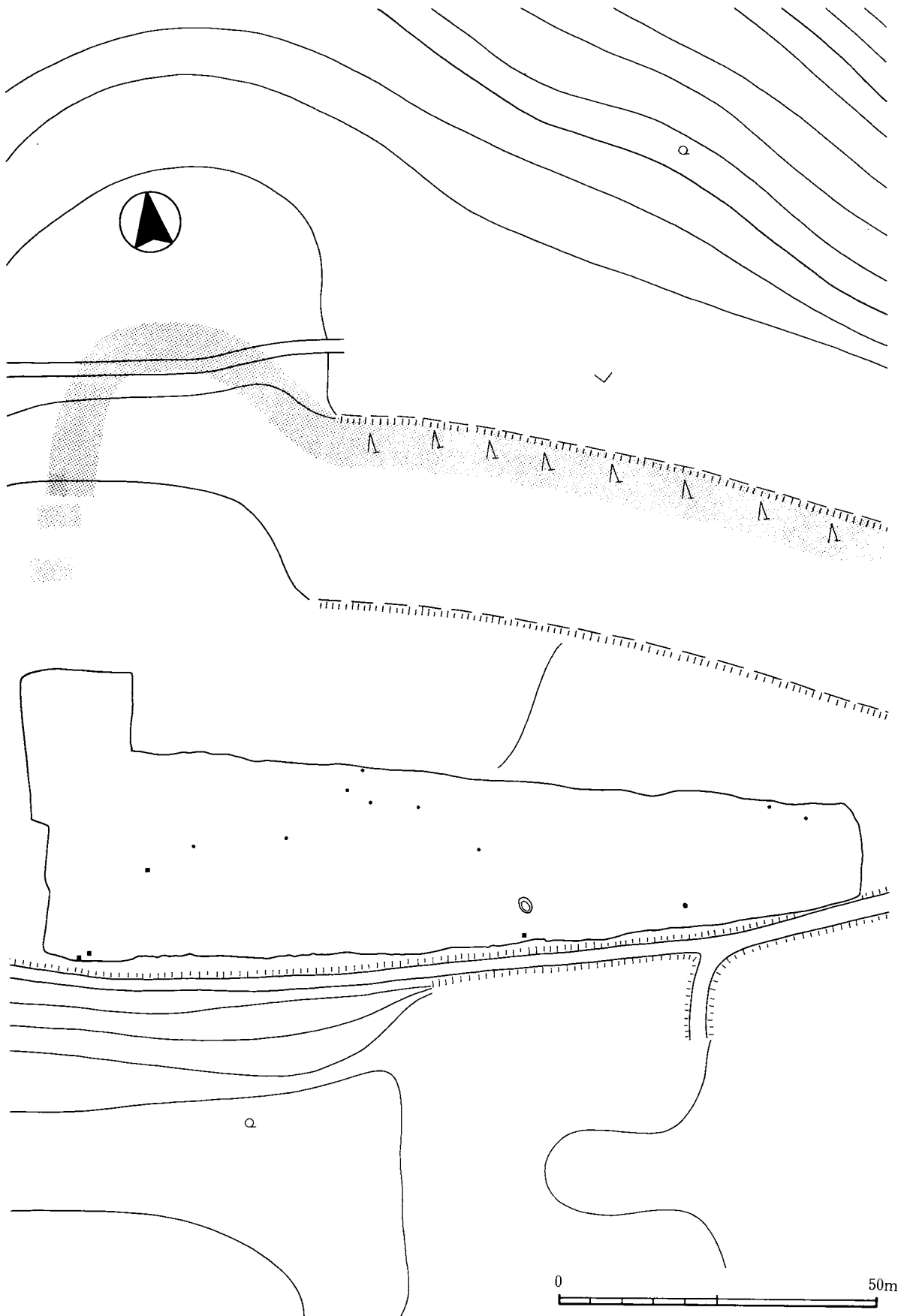
第182図 条痕土器その他実測図



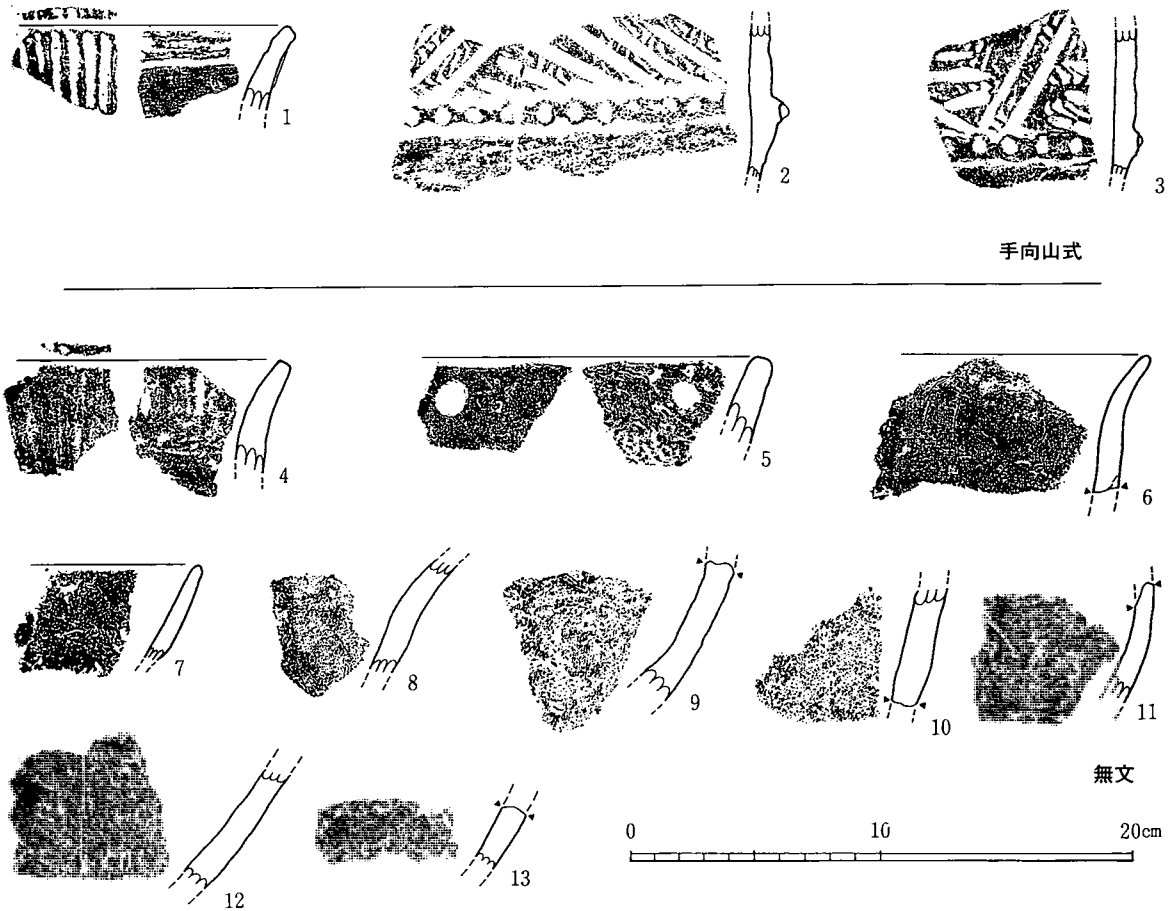
第183図 条痕土器その他実測図



第184図 類「手向山式土器」分布図



第185図 無文土器分布図



第186図 類「手向山式土器」無文土器実測図

位条痕がみられる。口縁部は、大きく外反している。

第182図4～第183図46は、胴部の破片である。これらを型式的に整理するのは難しく、今回の整理時点では、その的確な視点を見出すことはできなかった。

土器製作時における一時的な乾燥の単位を示す痕跡として、胴部では凸形剝離面と凹形剝離面とがセットとなって、一つの破片に残されている資料がある。こうした資料は、ここで提示している中では2点ある。その幅は、3.8cm、4.1cmであった。

底部関係の資料は、第183図47と48である。47は、底部に近い部位で、その形状は、はっきりしないが、おそらく丸底であろう。48は、丸底である。

### ⑤ その他の土器とそれぞれの分布

出土点数が少ない土器を集めてここに提示している。一つは、類「手向山式土器」(第184図・第186図1～3)であり、もう一つは無文土器(第185図・第186図4～13)である。以下、順番に見ていこう。

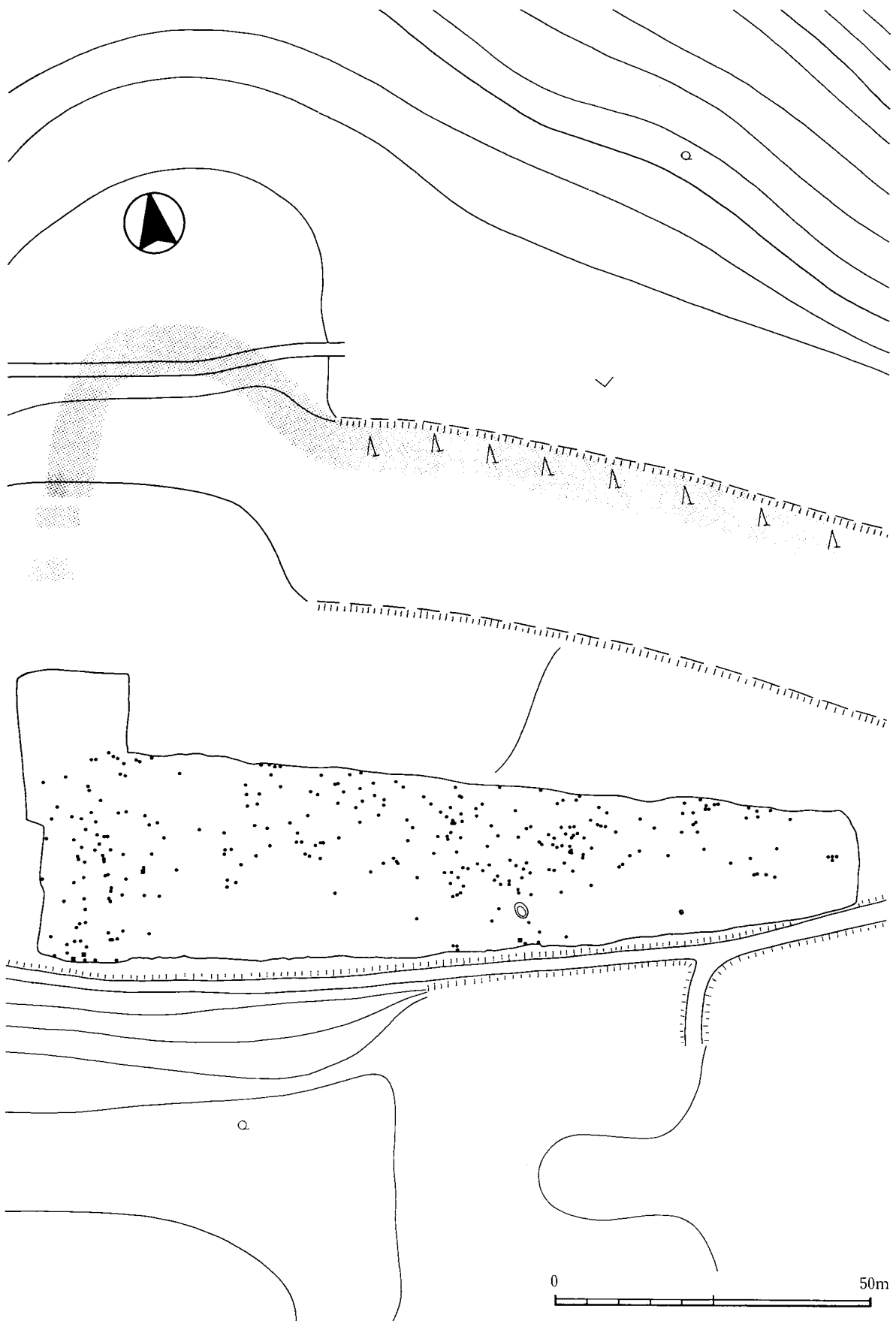
類「手向山式土器」は、3点出土している。1は、

口縁部の資料で、微隆起文が特徴である。調査区の東側に出土地点がある。2と3は、同一個体である。胴部の破片で、刻目の凸帯文とその上位にある沈線文に文様の特徴がある。地文は、山形の押型文である。なお、この資料は、手向山式土器に特有の屈曲した胴部をもっていない。これについては、後ほど言及をする手筈である。出土地点は、調査区の西側である。

無文土器は、調査区の全域から、散発的に出土している。4～7は口縁部で、8～13は胴部である。型式的特徴を見出すことは、出土資料が少なく困難である。

### 3. 石器とその分布

石器関係の資料は、310点が出土した。その内訳は、石鏃11点(4%)、尖頭器1点、尖頭石器6点(2%)、削器14点(5%)、抉入石器1点、石錐1点、楔形石器5点(2%)、打製石斧1点、石錘4点(1



第187図 縄文時代早期石器分布図

第3表 石器組成表

器	種	数量	黒曜石	安山岩	頁岩	砂岩	凝灰岩	チャート
石	鍬	11	4	5	—	—	—	2
尖頭	器	1	—	1	—	—	—	—
尖頭石	器	6	—	4	—	—	—	2
抉入石	器	14	1	13	—	—	—	—
楔形石	錐器	1	—	—	—	—	—	—
打製石	斧	5	2	2	1	—	—	—
有溝砥石	石	1	—	—	1	—	—	—
磨石・敲石	石	4	—	1	—	1	2	—
石皿・台石	石	1	—	—	—	—	1	—
二次加工ある不定形石器	石	14	—	7	—	7	—	—
使用痕ある剥片	石	4	—	4	—	—	—	—
	剥片	10	2	8	—	—	—	—
	剥片	10	6	4	—	—	—	—
石器総数		83	16	50	2	8	3	4
石製品		4	2	—	—	1	—	1
石核		21	6	12	—	—	—	3
剥片・碎片		202						
石器関係資料総数		310						

%)、有溝砥石1点、磨石・敲石14点(5%)、石皿・台石4点(1%)、二次加工ある不定形石器10点(3%)、使用痕ある剥片10点(3%)、石製品4点(1%)、石核21点(7%)、剥片・碎片202点(63%)が出土した。その分布は、調査区全域にわたっている(第187図)。そこで、それぞれの器種ごとに、その分布と特徴について見ていくことにしよう。

#### ① 石鍬(第188図・第190図1~11)

11点が出土した。分布は、調査区の西側と中央部から出土している。その傾向は、西側のものは近接しているが、中央部のものは散在的である。

使用石材では、黒曜石4点、安山岩5点、チャート2点である。重量では、2g以下である。

私は、早期に属する石鍬について、大きく六つの類型に分類したことがあった(木崎1986, 1987)。今回の報告でもこの分類に従って、出土資料を提示しよう。

A I類は、平基式正三角形石鍬である。これに該当する資料は、出土しなかった。

A II類は、凹基式正三角形石鍬である。これに該当するのは3点あった(3・4・8)。石材は、黒曜石1点(8)・安山岩2点(3・4)である。

A III類は、U字状凹基式正三角形石鍬である。これに該当するものは、出土しなかった。

B I類は、平基式二等辺三角形石鍬である。これに該当する資料は1点あった(1)。石材は、黒曜石であった。

B II類は、凹基式二等辺三角形石鍬である。これに該当するものは4点あった(2・5・6・9)。石材は、黒曜石1点(6)・安山岩(5・9)・チャート1点(2)である。

B III類は、U字状凹基式二等辺三角形石鍬である。これに該当するものは1点あった(7)。石材は、チャートである。

以上の他、石鍬の破片として2点が出土している(10・11)。いずれも凹基式である。

#### ② 尖頭器(第190図12)

出土地点は、攪乱された層の中からの出土であったために不明であった。

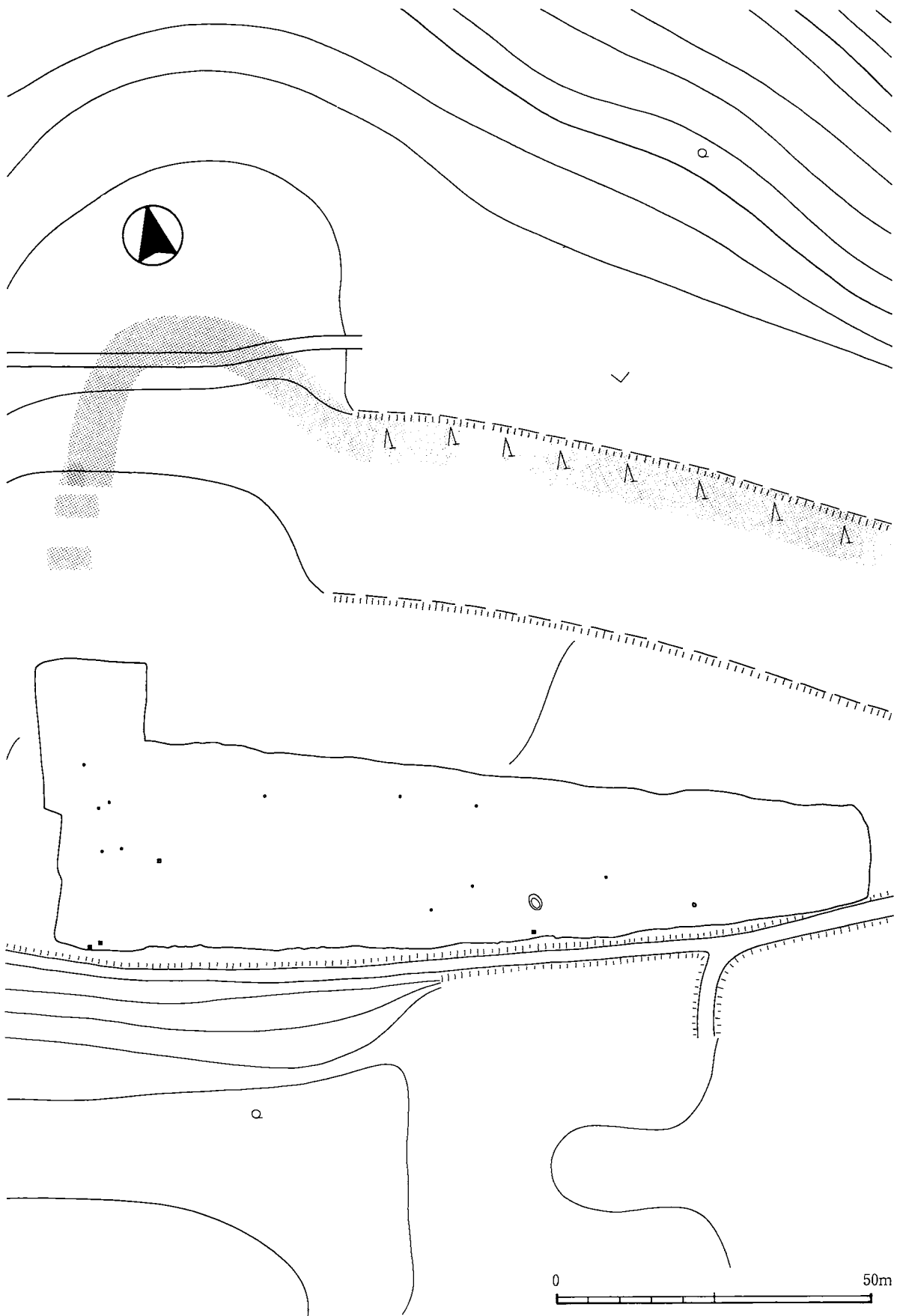
石材は、安山岩である。荒い階段状の調整剥離によって形が仕上げられている。

#### ③ 尖頭石器(第189図・第190図13~18)

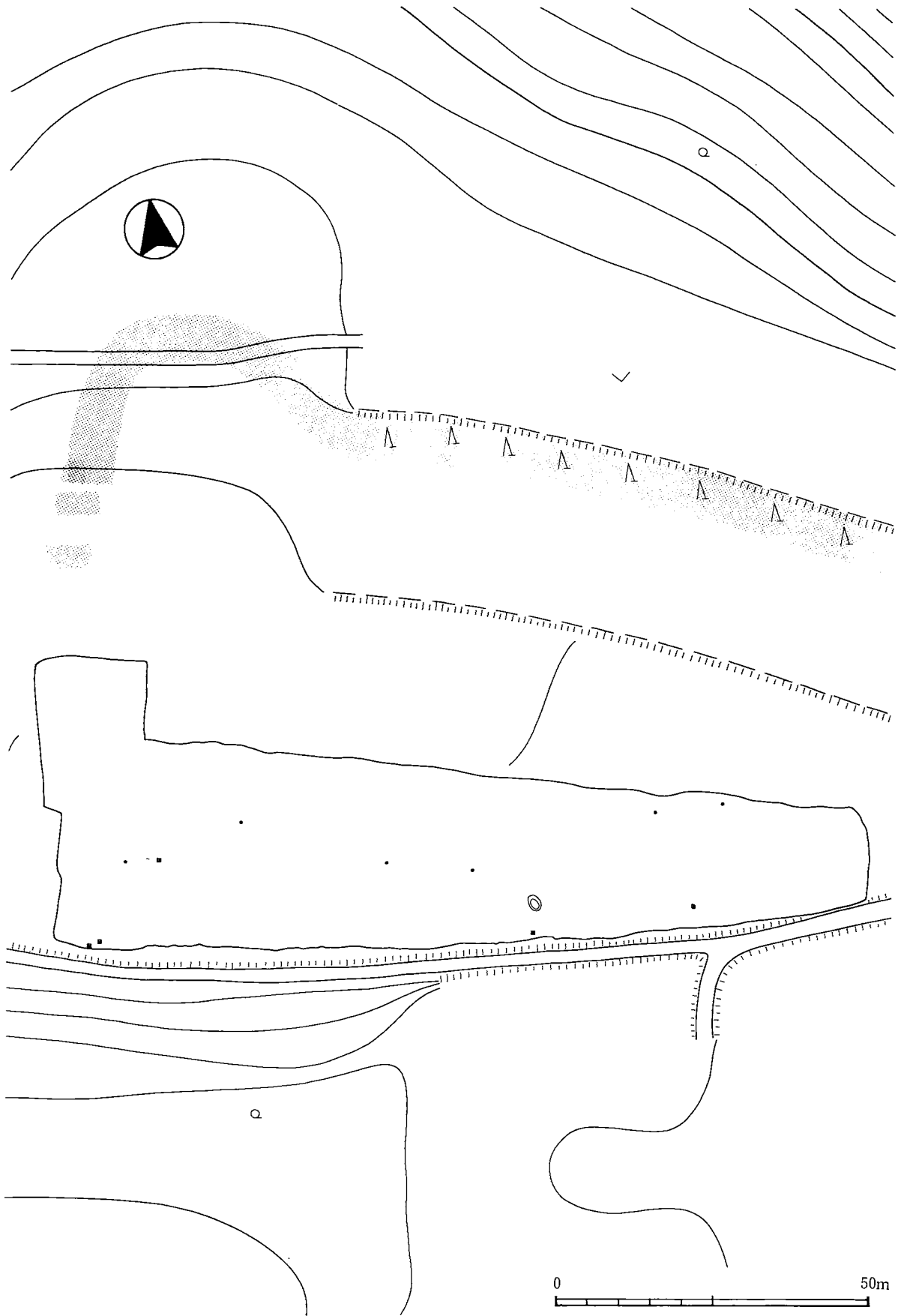
この石器は、石鍬に近い形状をとるが、それに比べて、厚みや重量の点で大型なものを一括している。出土点数は6点で、調査区全域に散在した状況で分布しているようだ。

石材は、安山岩4点、チャート2点である。大きさの点で、小型品(16・17)と大型品(13~15・18)

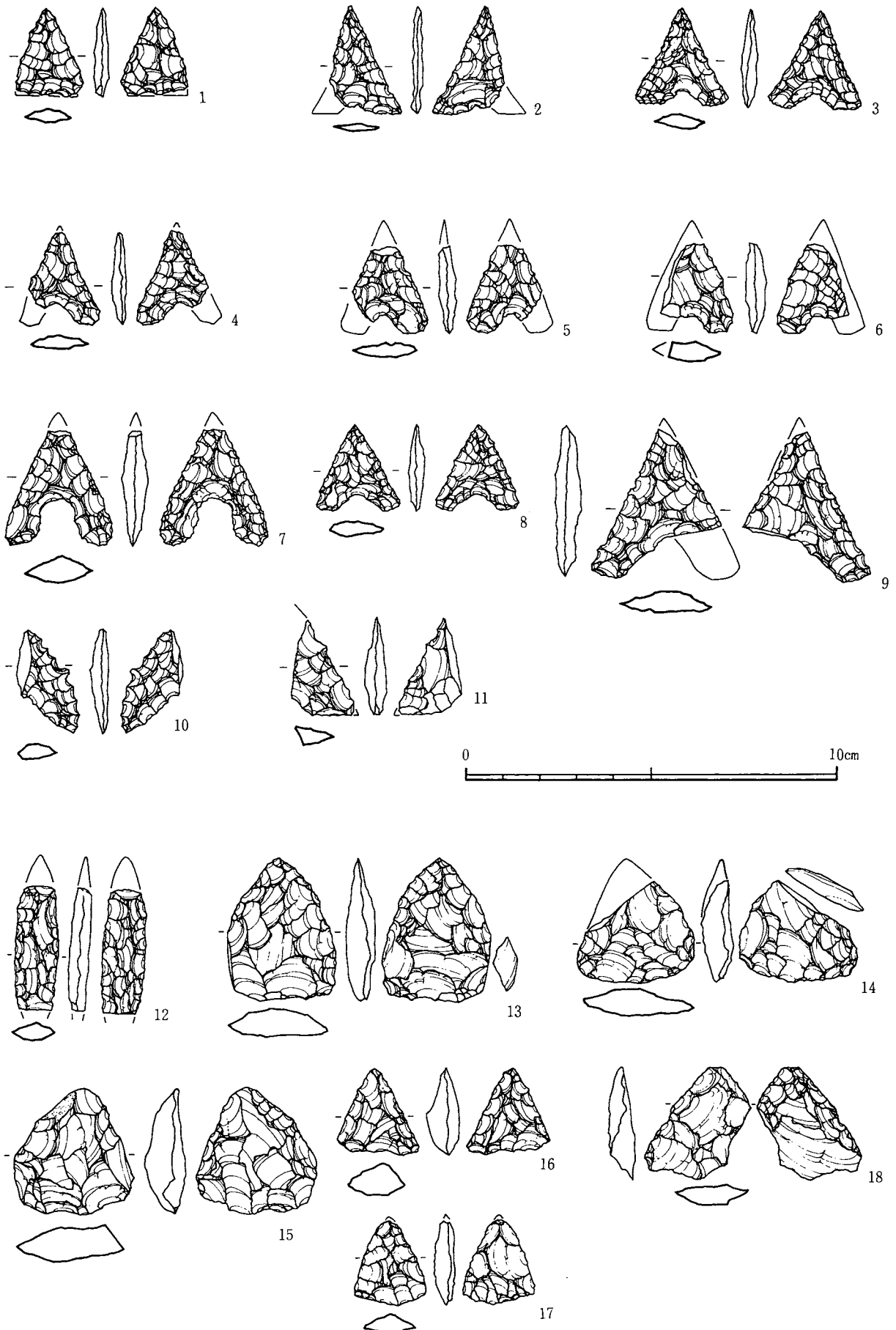




第188図 石鏃分布図



第189図 尖頭石器分布図



第190図 石鏃・尖頭器・尖頭石器実測図

の二つの種類がある。

全体の形状は、二等辺三角形のものと正三角形のものがある。基部の形状は、平基と凸基とがある。重さは、2.5gを最軽量として、もっとも重いものは8.8gであった。

④ 削器(第191図・第193図・第194図1~9)

剥片の側縁部に、連続した加工を施して作られた刃部を持つ石器である。出土点数は、14点である。その分布は、調査区のほぼ全域にわたって広がっているが、中でも西側と中央部に集まる傾向にあるようだ。

つまみ部が作りだされた資料が1点(1)で、その他はつまみ部が存在しない。つまみ部を持たない資料は、さらにその大きさによって、大きく三つに分類される。大型品、中型品、小型品がそれである。大型品は、重量が35gを越えるもので、もっとも重い資料は73.7gである。4点ある。中型品は、10g台から20g台までのものである。8点ある。小型品は、1点ある。黒曜石製である。重さは、1.4gである。

使用剥片の種類は、横長ないし幅広のものがほとんどで、縦長は1例のみであった。また、使用石材は、黒曜石1点の他は、すべて安山岩であった。

⑤ 抉入石器(第192図・第194図10)

刃部に抉入加工による湾入部を持つ石器である。出土点数は、1点で、調査区の中央部、その北端で出土している。

使用石材は、安山岩で、剥片を素材としている。湾入部は、剥片の打面に設定され、表裏両面からの加工によって作り出されている。刃部は、長さ1.2cmで、0.2cmの抉入が認められる。なお、つまみを持つ削器も、この石器に分類することができるかもしれない。ただし、今回は、削器の刃部がしっかりしたものであったために、この石器から除外している。

⑥ 石錐(第195図・第198図1)

出土点数は、1点である。その出土地点は、調査区の西側にある。黒曜石製の幅広剥片を素材として、その打面側左側縁に刃部を設定し、裏面からの調整加工によって尖頭部を作り出している。

⑦ 楔形石器(第196図・第198図2~6)

四角形を平面形の基本として、向かいあった辺の

側縁部に、対向する階段状の剝離痕跡が観察される石器である。出土点数は、5点である。その分布は、調査区の西側と東側に偏在している。

使用石材は、黒曜石2点・安山岩2点・頁岩1点である。

⑧ 打製石斧(第197図・第198図7)

出土点数は、1点である。その出土地点は、調査区の中央部にある。頁岩製で、剥片の形状は不明である。刃部を欠損している。

⑨ 石錘(第199図~第202図)

出土した石錘には、礫石錘と有溝石錘があるので、それぞれの種類ごとに見ていこう。

礫石錘は、1点が出土した。出土地点は、調査区の中央部にある(第199図)。砂岩の偏平な円礫を素材にして、向かいあった二つの側縁に表裏両面からの数回の打撃を加えて作られている。重さ125.9gを測る(第201図1)。

有溝石錘は、3点が出土している。いずれも卵状の安山岩ないし凝灰岩を素材とするもので、幅1~3cmの溝がめぐっている(第201図2~第202図)。出土地点は、いずれも調査区の中央部にあり、近接した場所にあった(第200図)。

⑩ 有溝砥石(第203図・第204図)

偏平な大型の川原石の表面に、数条の溝がみられる砥石である。出土点数は1点で、調査区の中央部で出土している。砂岩製で、その表面に4条、裏面に8条、左側面に2条、右側面2条の溝が観察される。石材は、凝灰岩である。

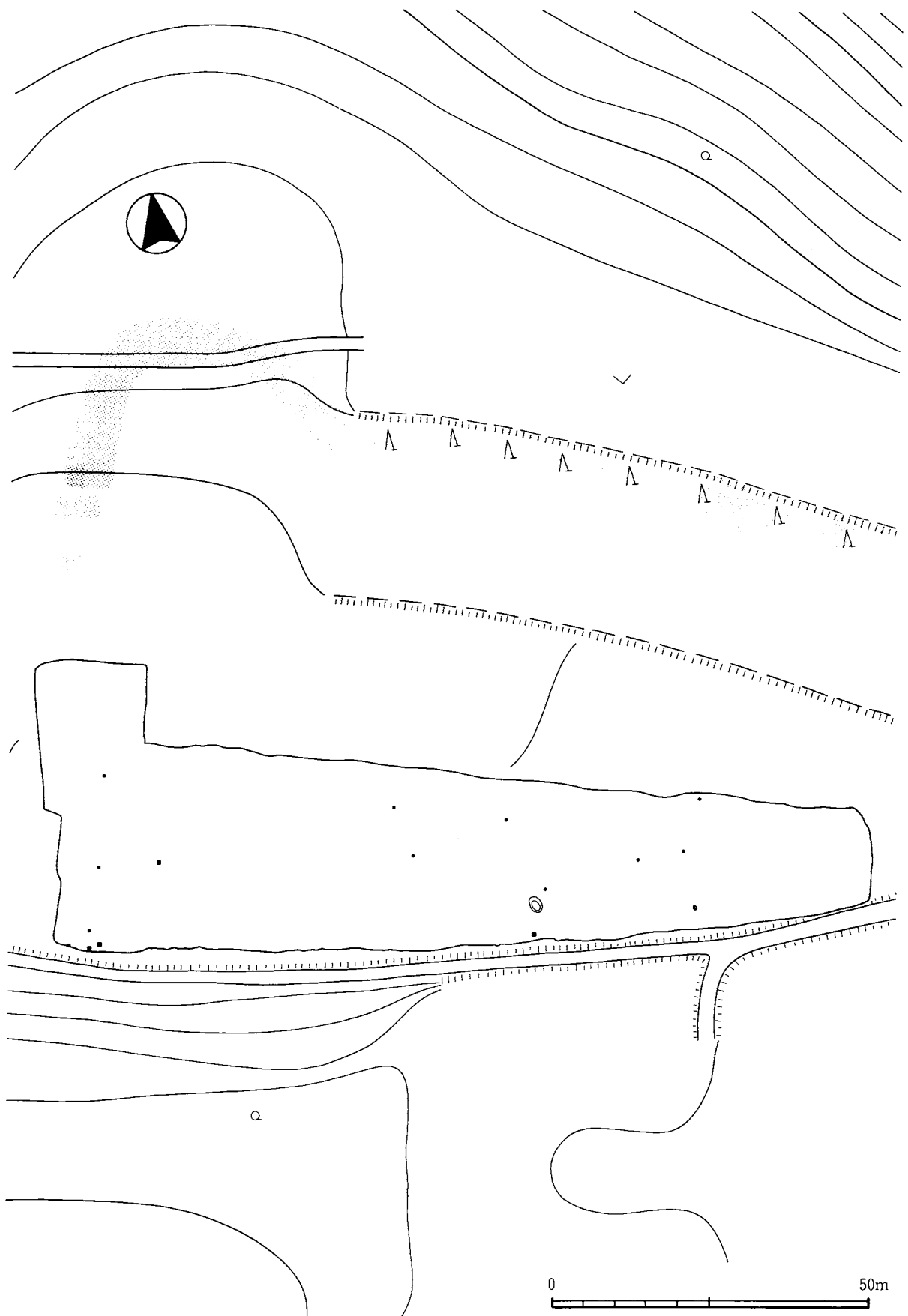
⑪ 磨石・敲石(第205図~第209図)

出土点数は、14点である。その分布は、調査区のほぼ全域にかけて広がっていて、偏在の傾向はみられなかった。

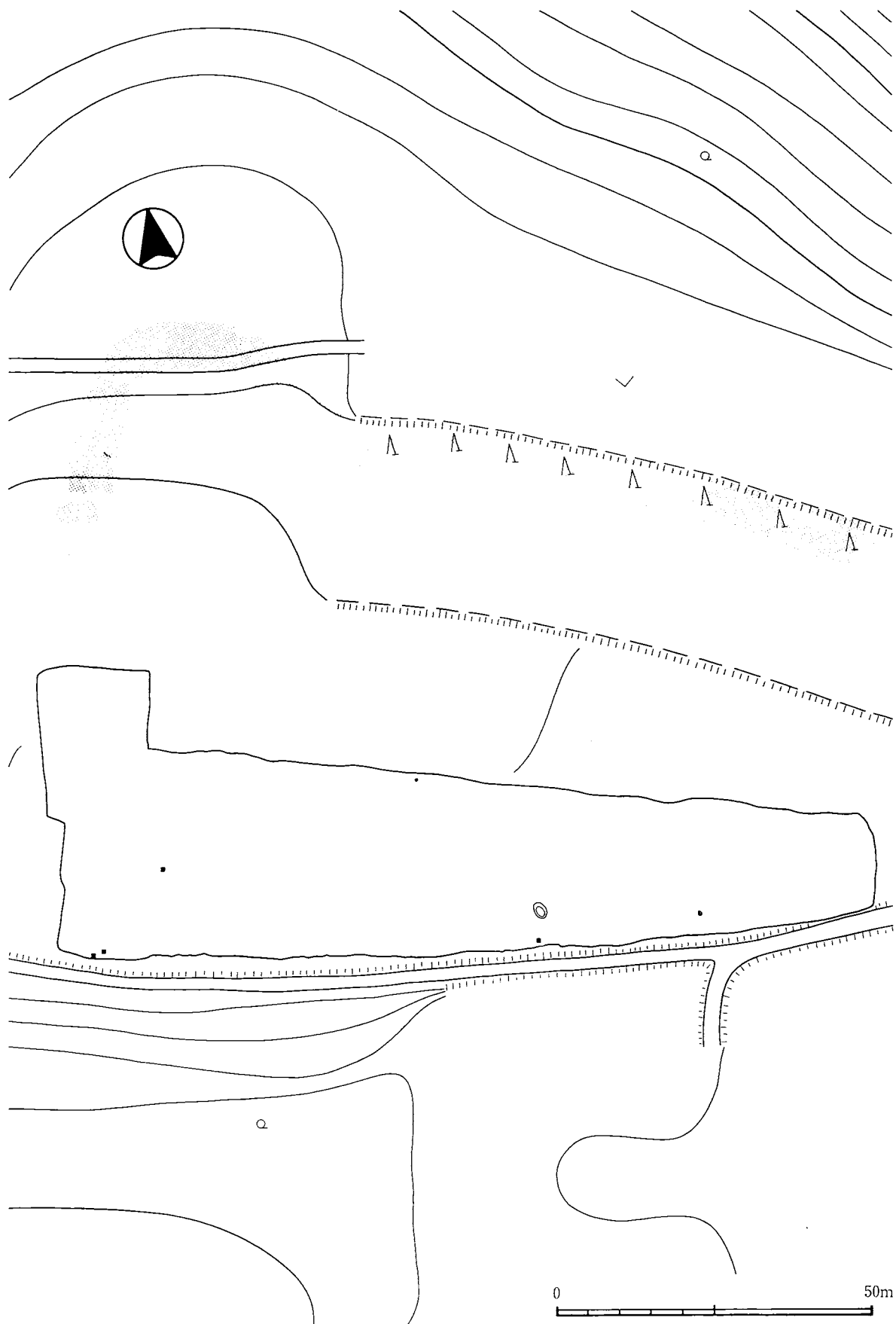
大きく二つに細分される。一つは、円形ないし楕円形の平面形状を呈するもの(第206図~第209図3)で、もう一つは、棒状を呈するもの(第209図4)である。

円形ないし楕円形のもの、13点である。使用石材は、安山岩7点、砂岩6点である。表面ないし側面に敲打痕がみられるものもある。

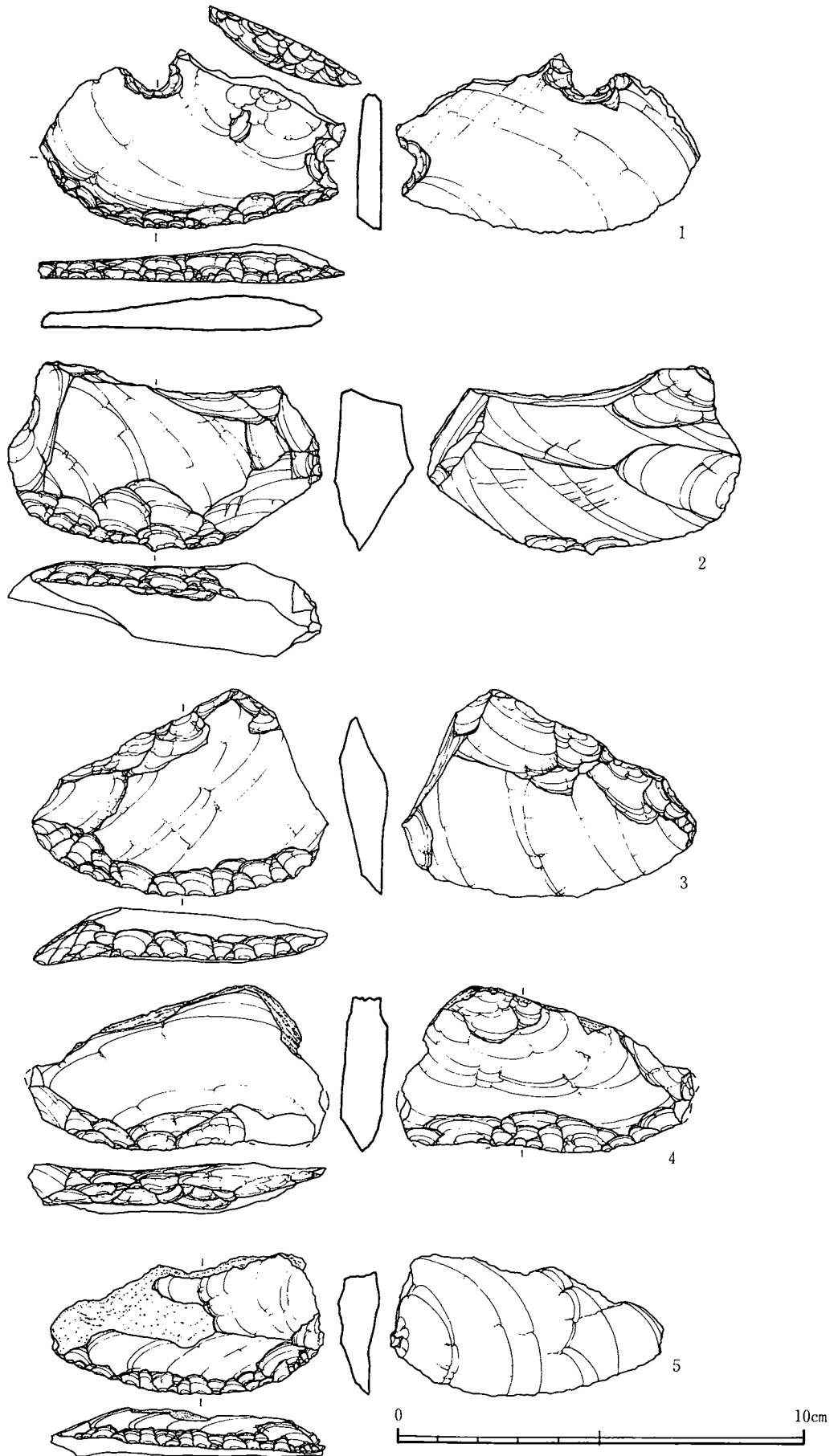
棒状のものは、1点である。左側縁の片端、右側



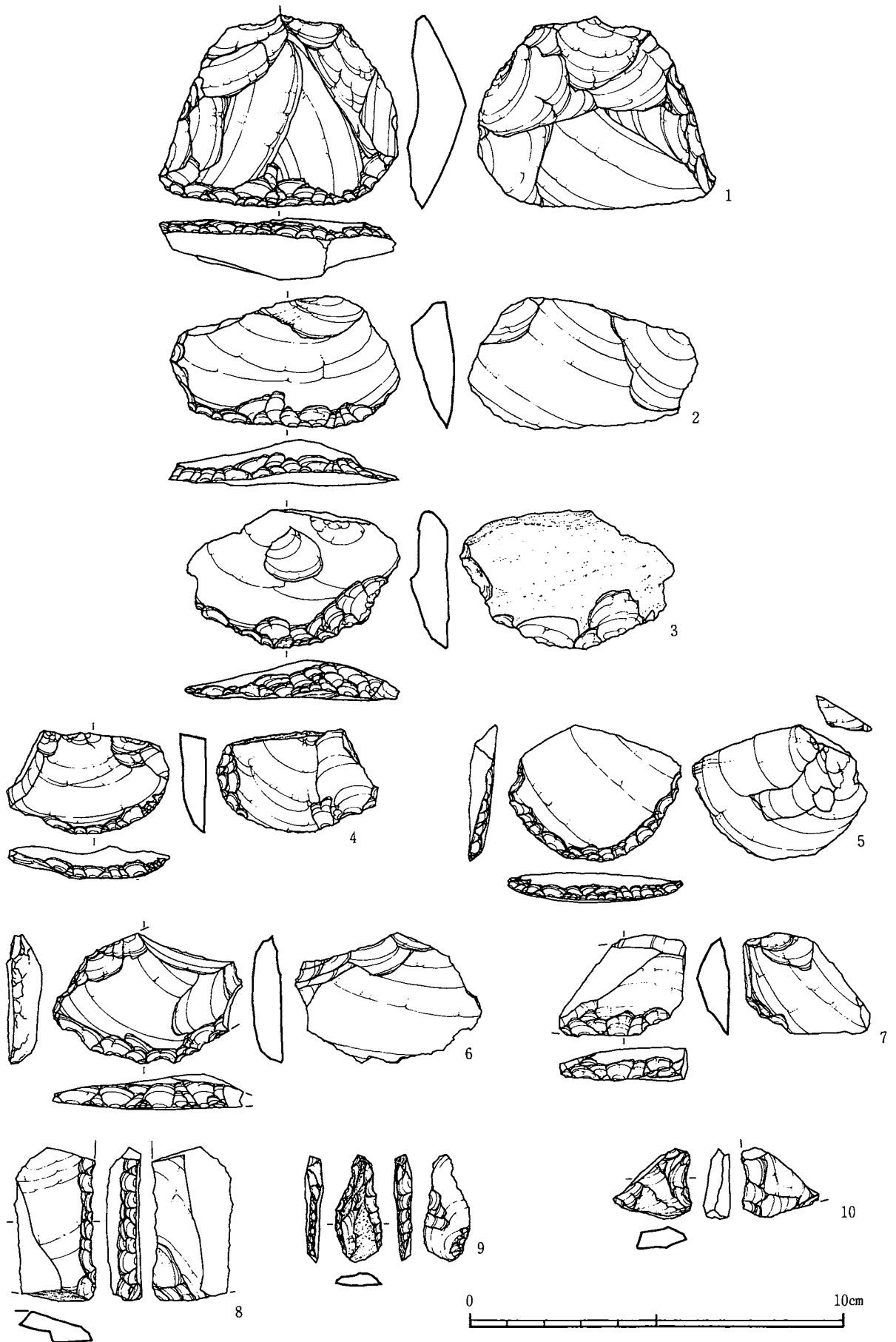
第191図 削器分布図



第192図 挟入石器分布図

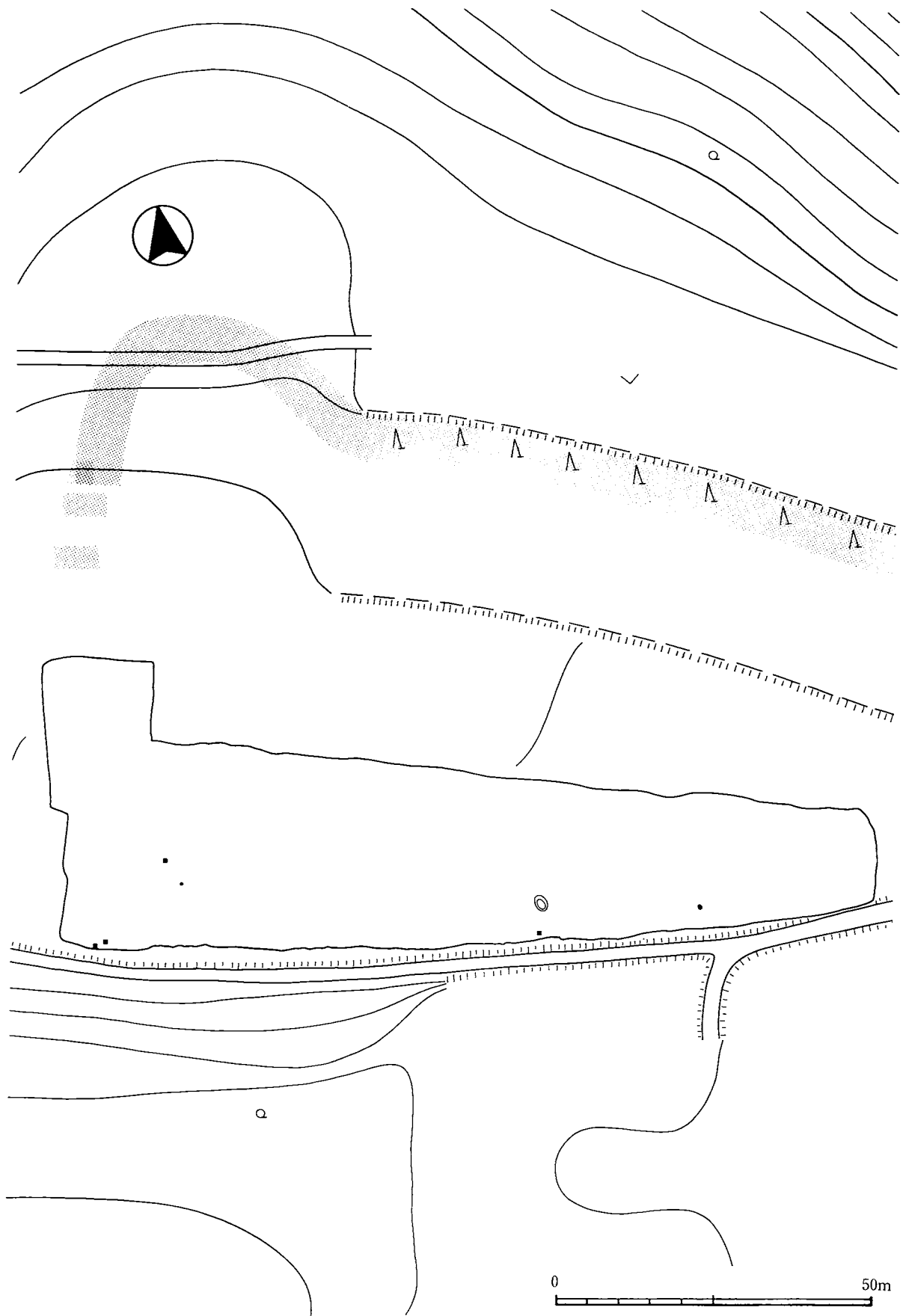


第193図 削器実測図

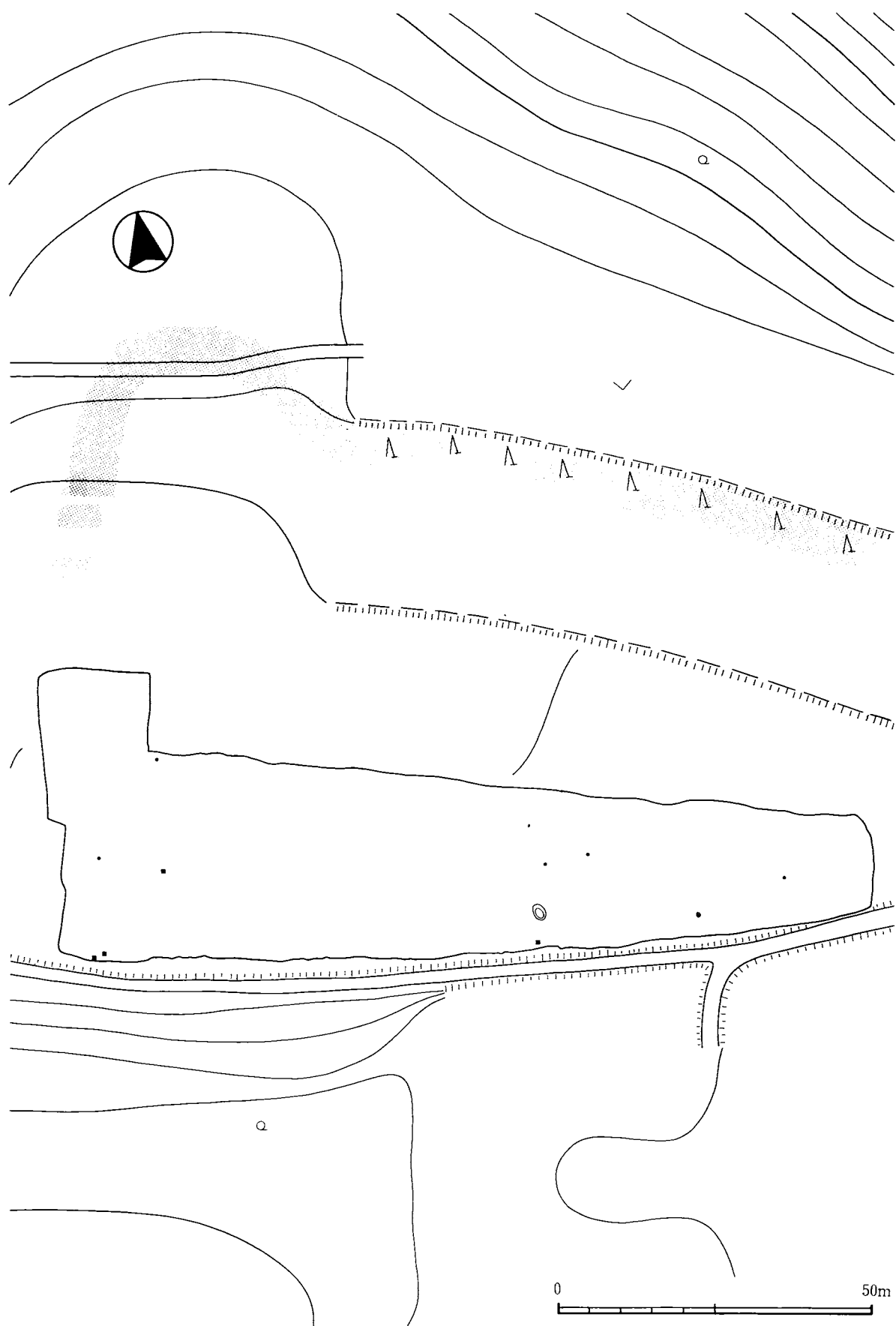


第194図 削器・挟入石器実測図

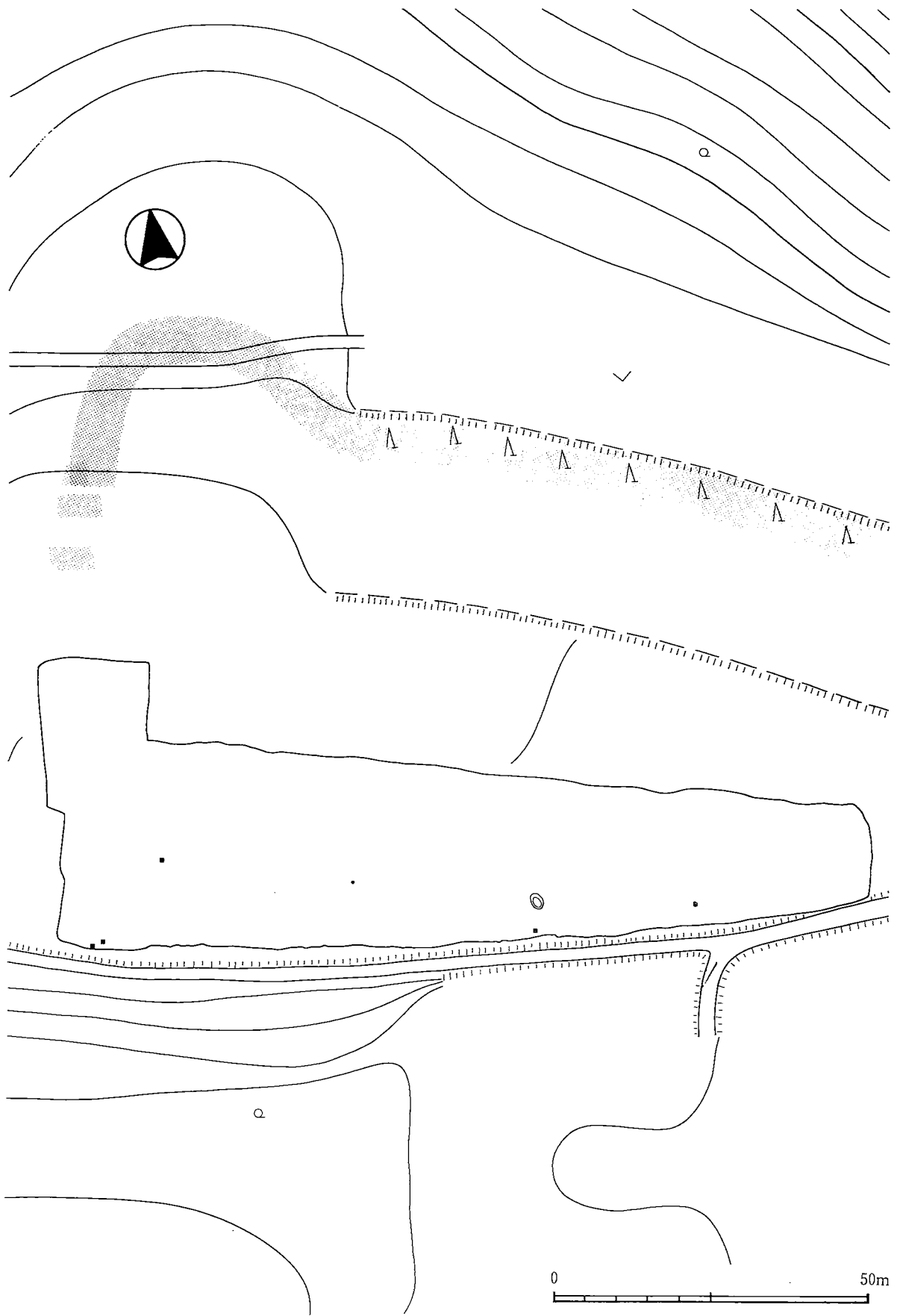




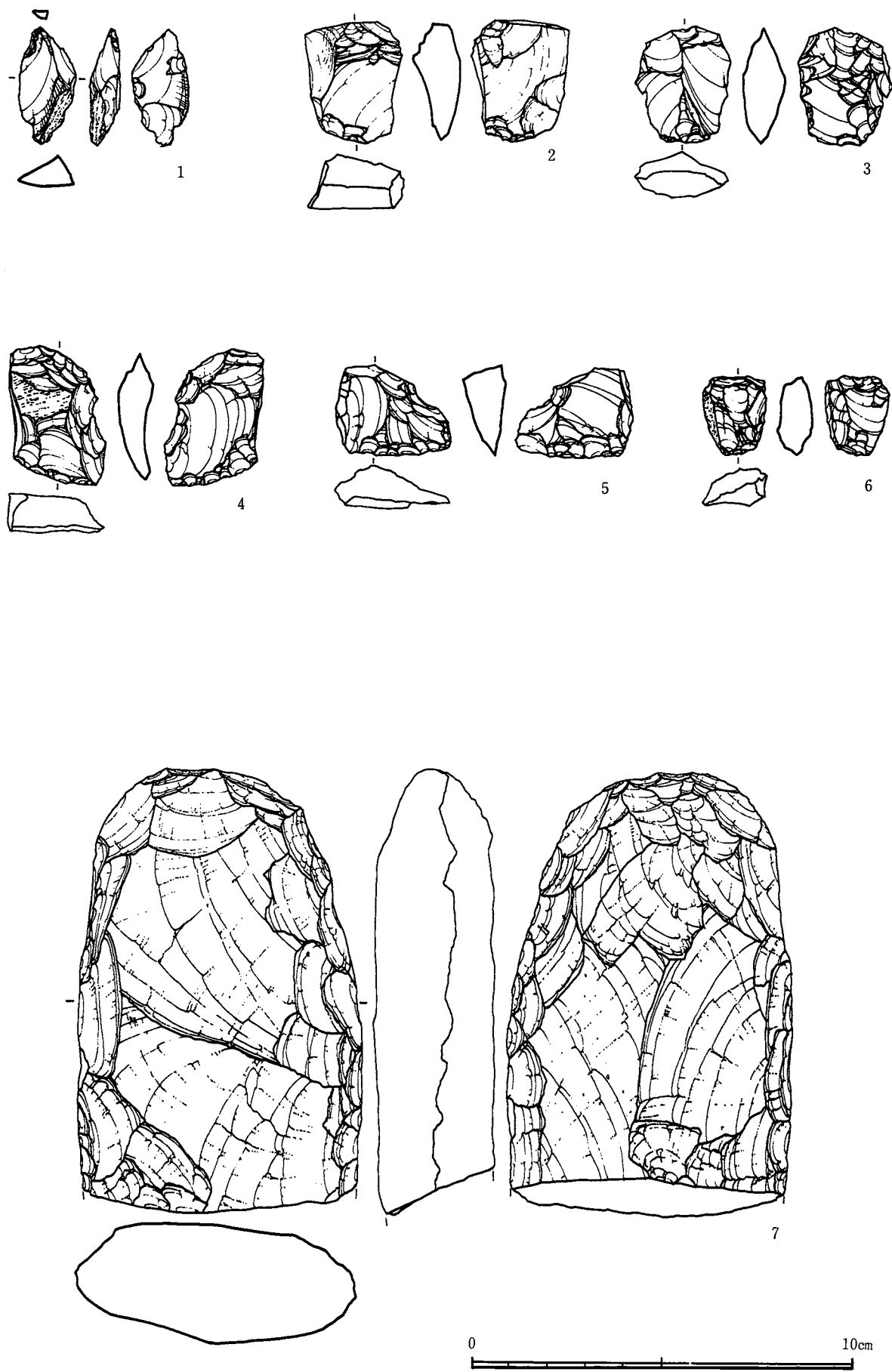
第195図 石錐分布図



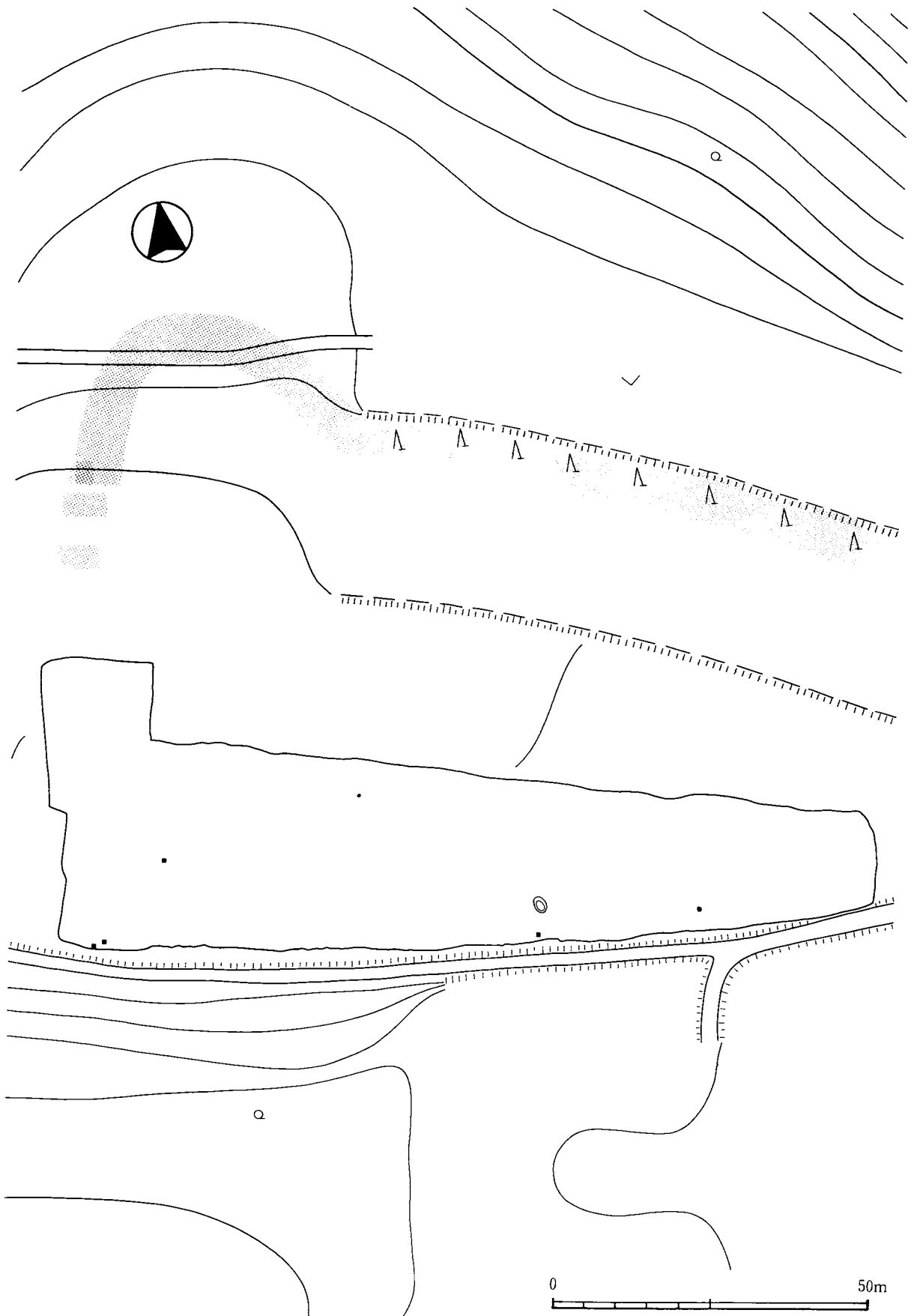
第196図 楔形石器分布図



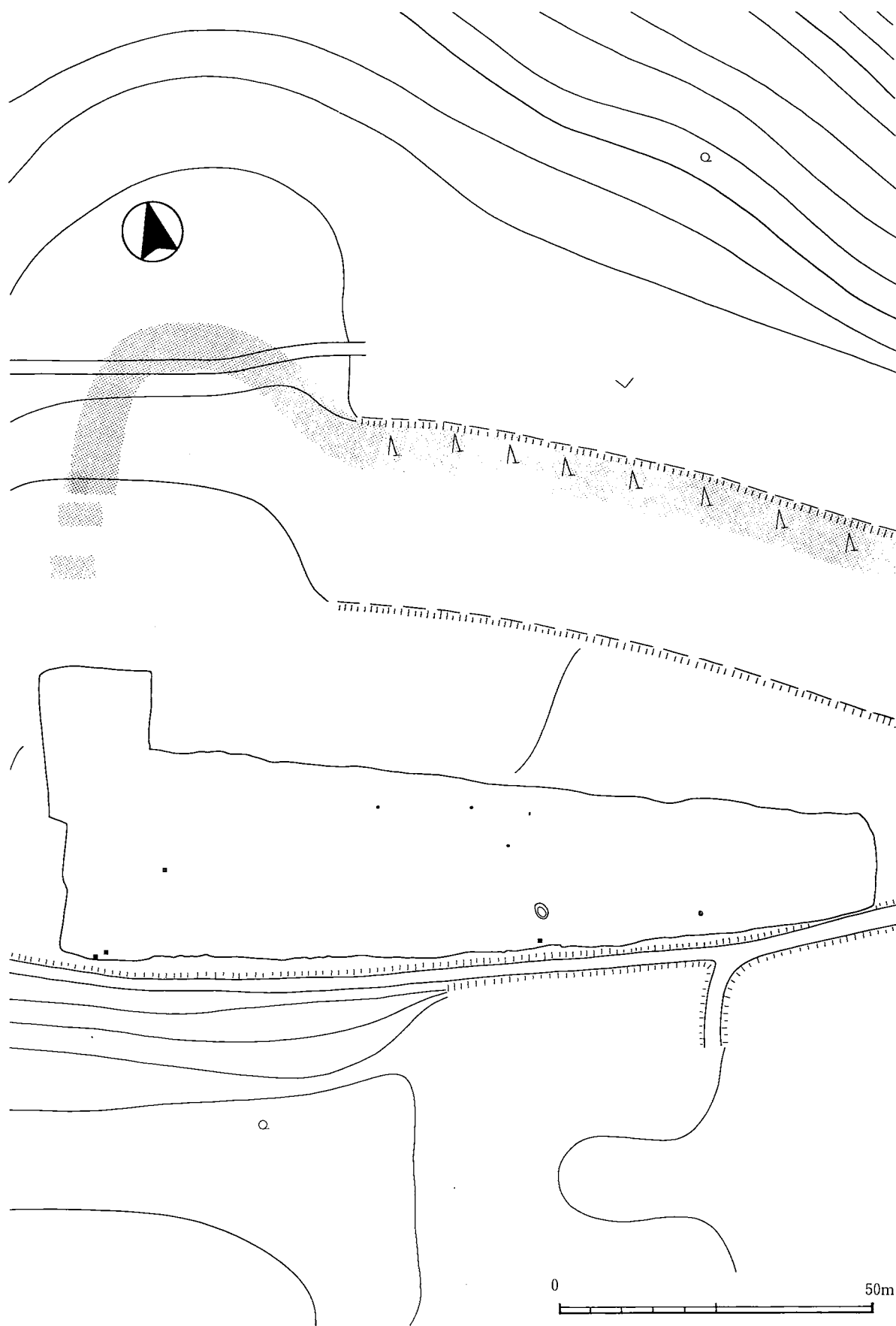
第197図 打製石斧分布図



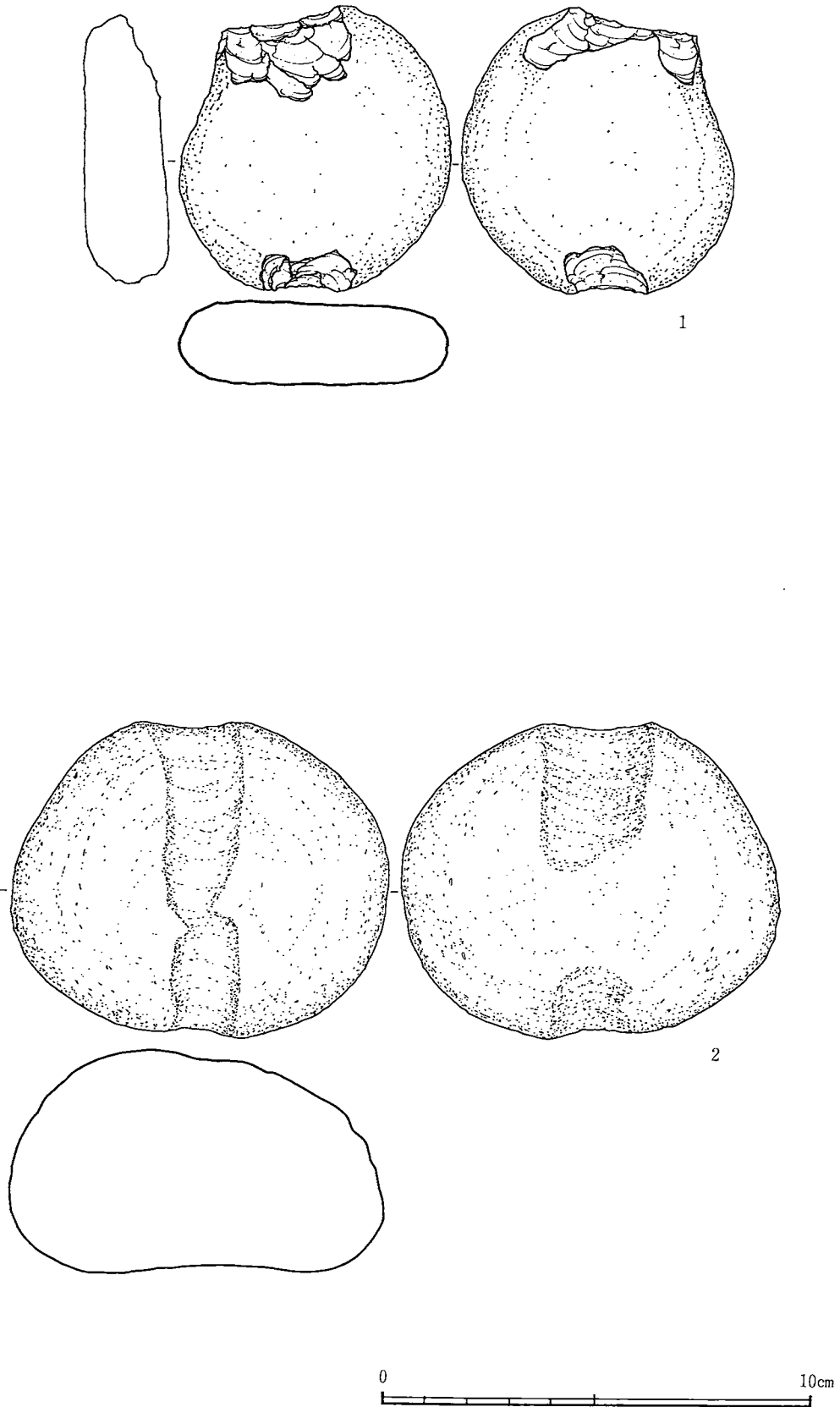
第198図 石錐・楔形石器・打製石斧実測図



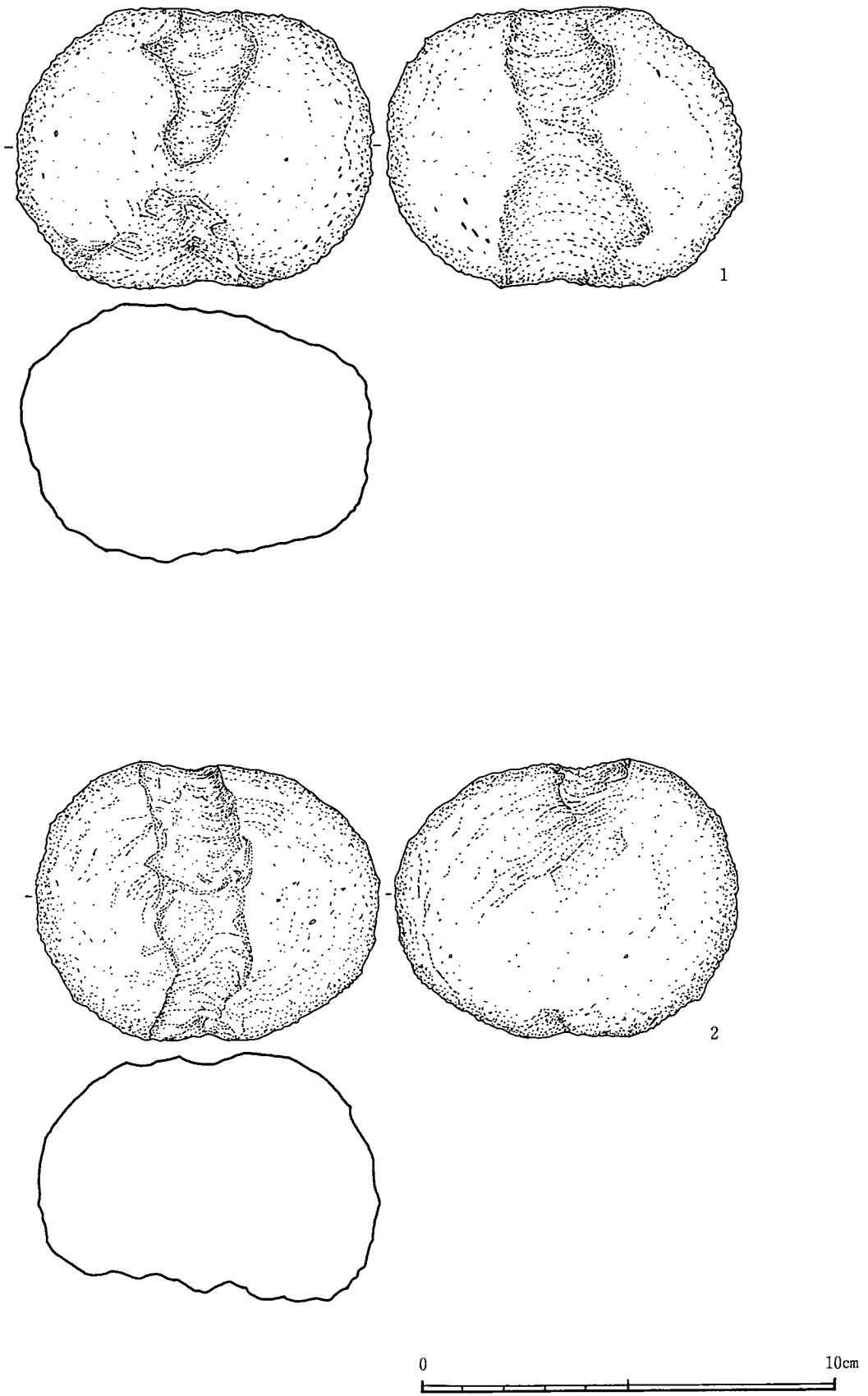
第199図 礫石錘分布図



第200図 有溝石錘分布図

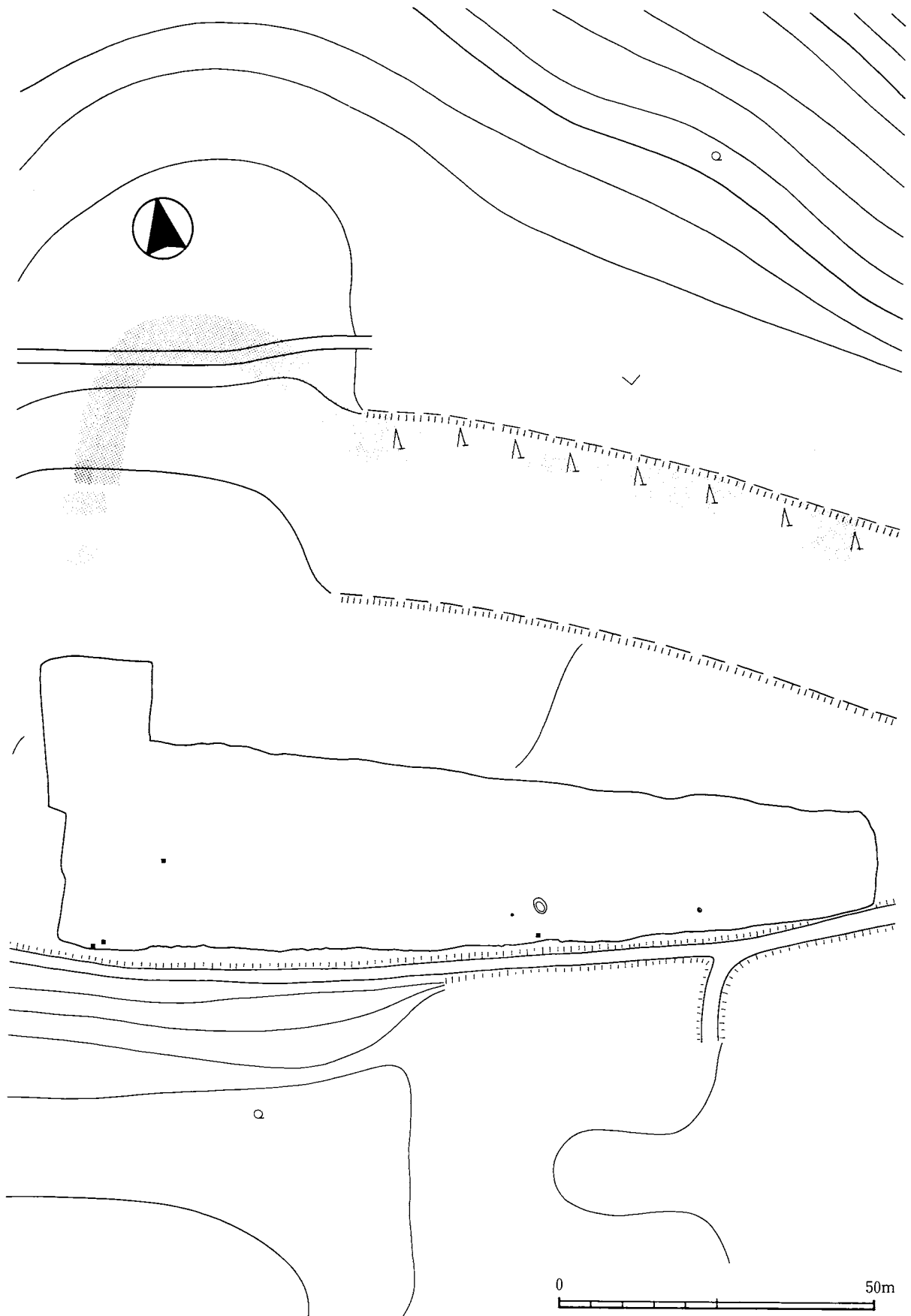


第201図 礫石錘・有溝石錘実測図



第202図 有溝石錘実測図

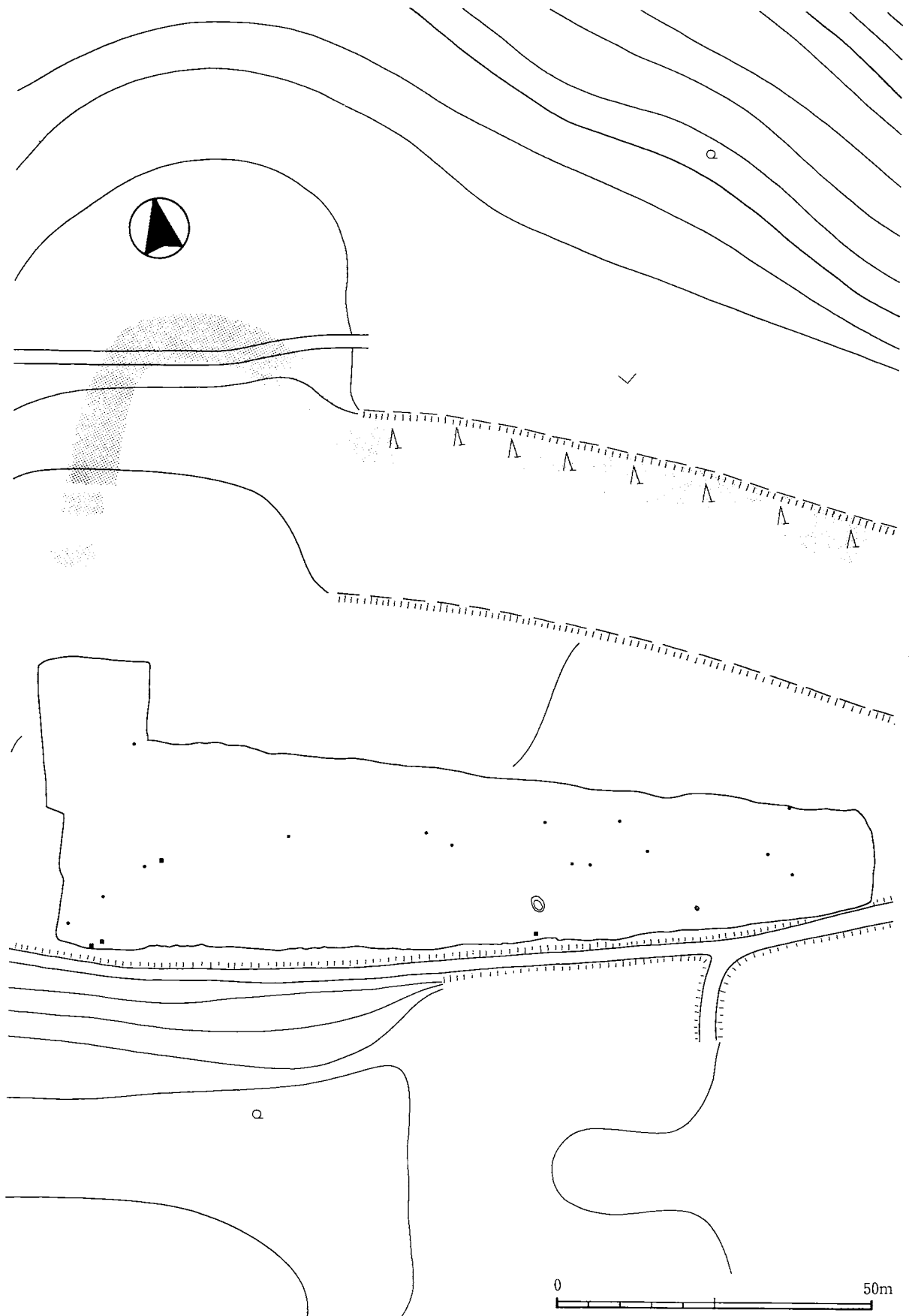




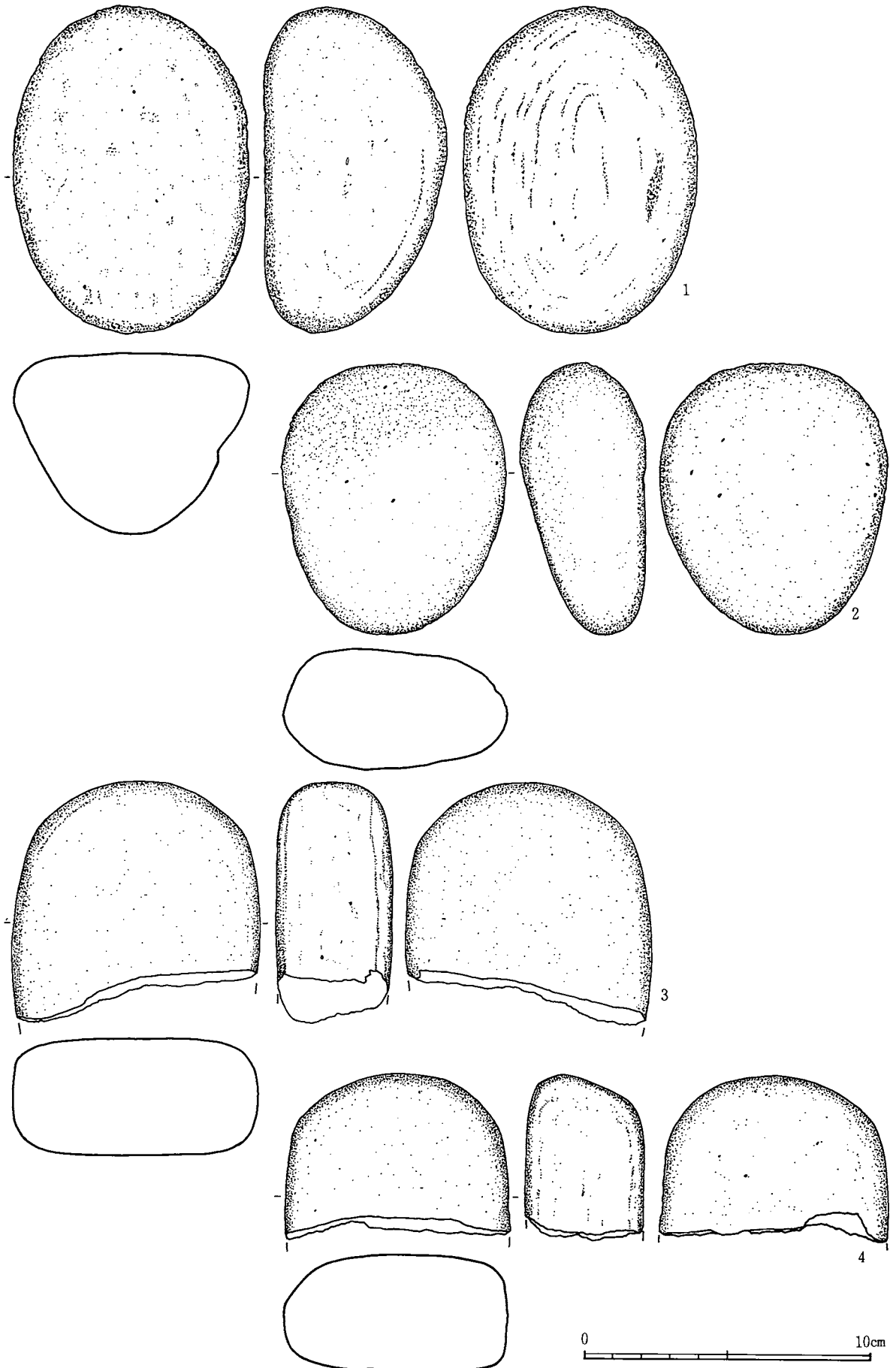
第203図 有溝砥石分布図



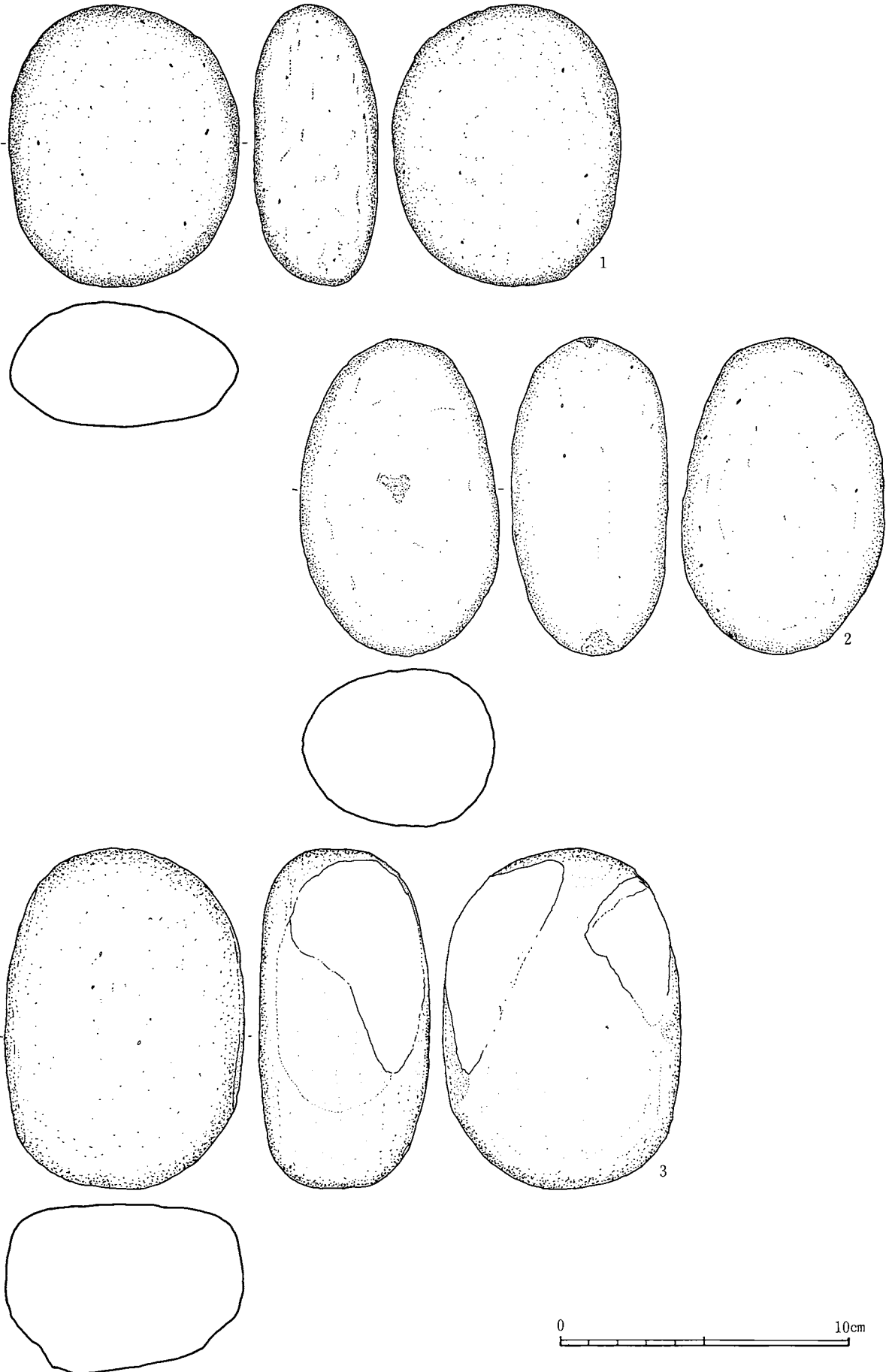
第204図 有溝砥石実測図



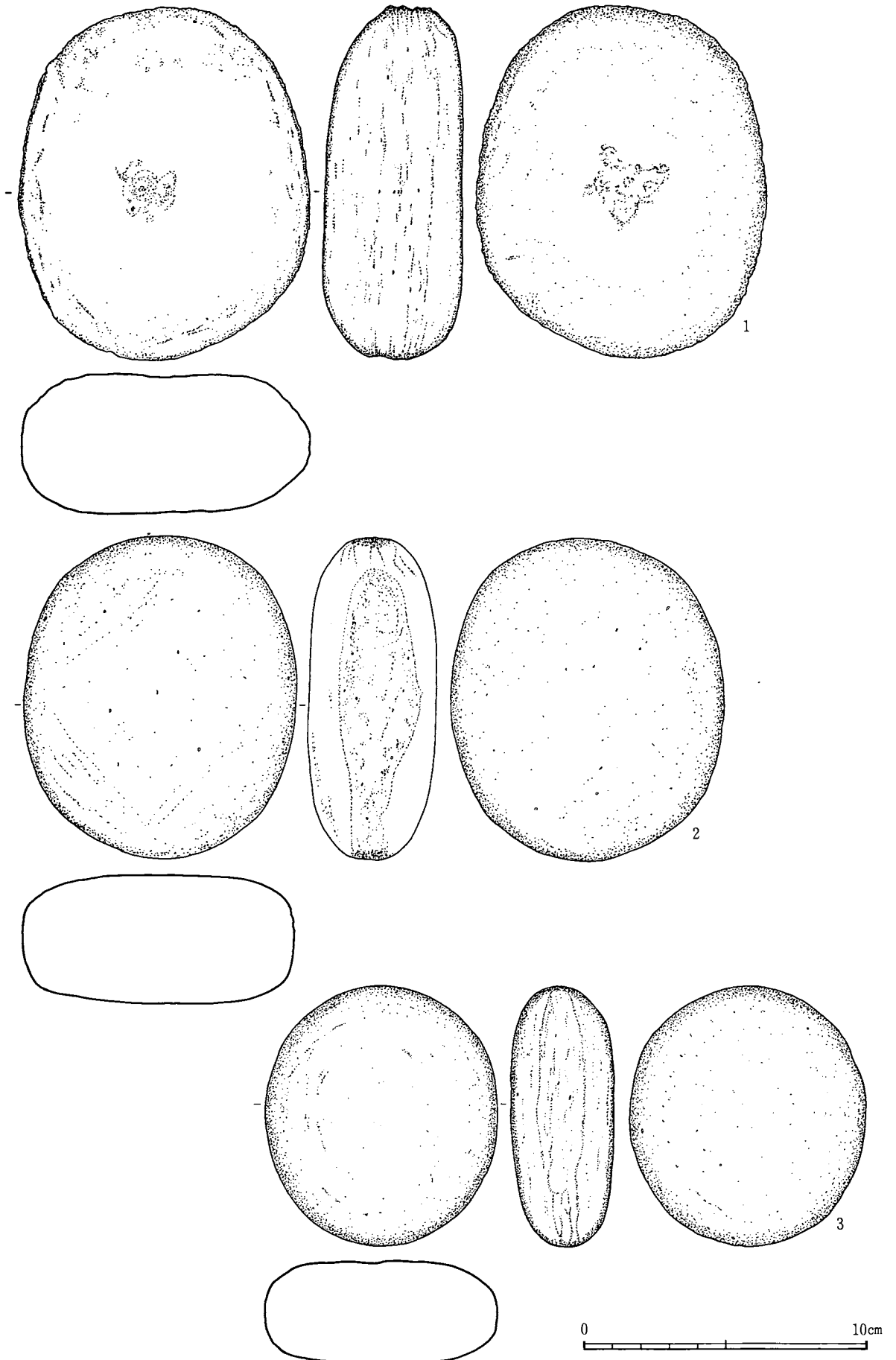
第205図 磨石・敲石分布図



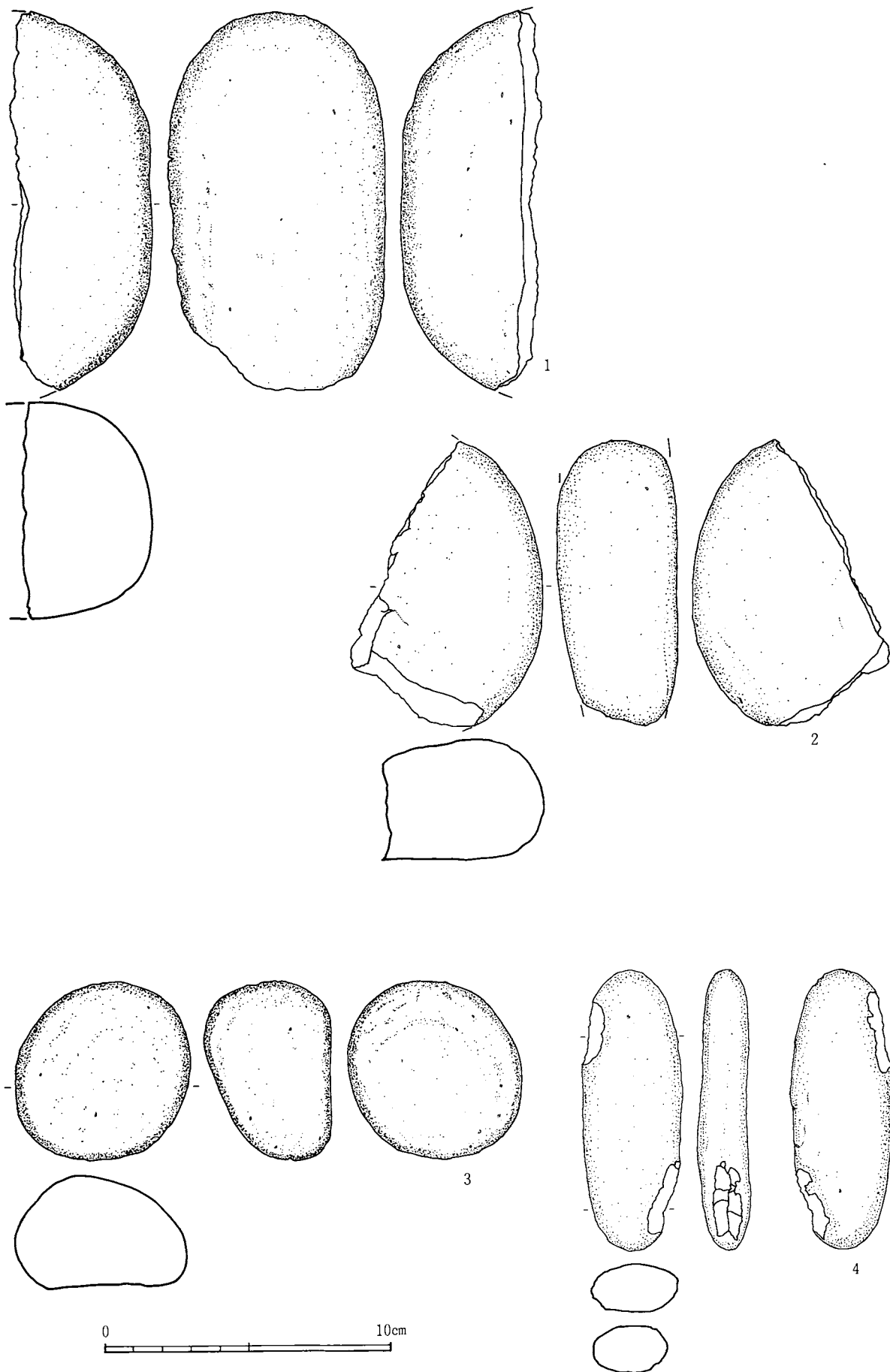
第206図 磨石・敲石実測図



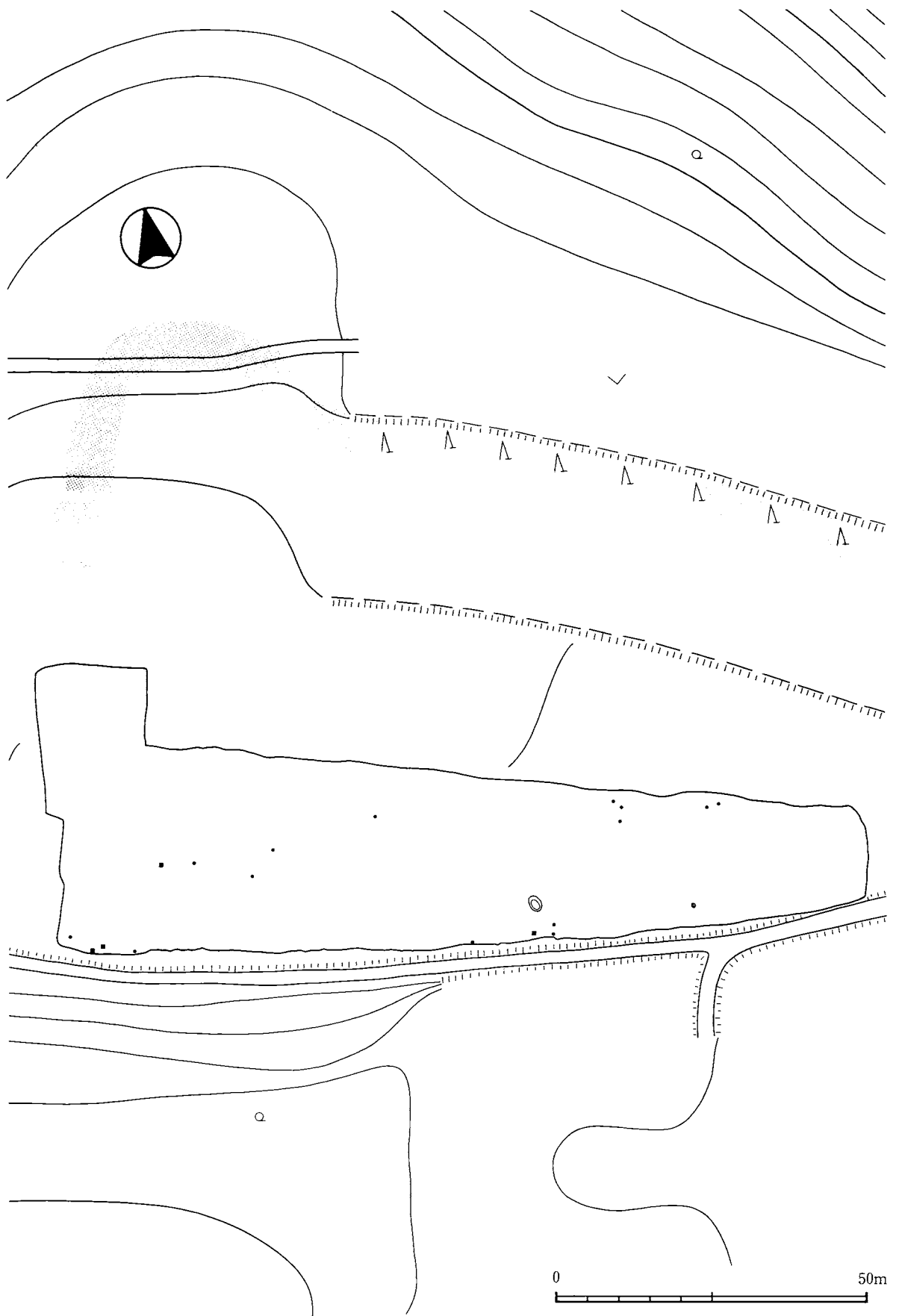
第207図 磨石・敲石実測図



第208図 磨石・敲石実測図

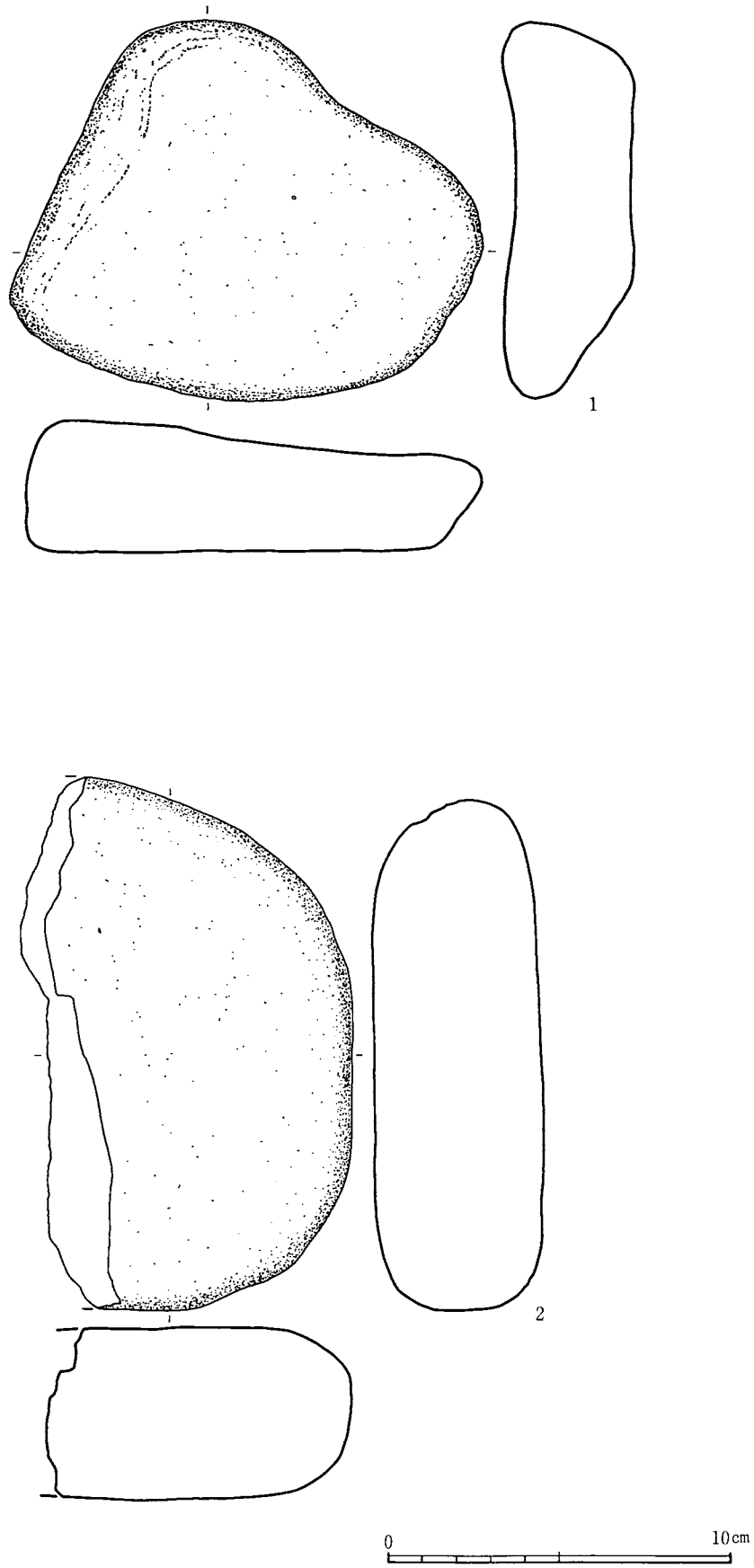


第209図 磨石・敲石実測図

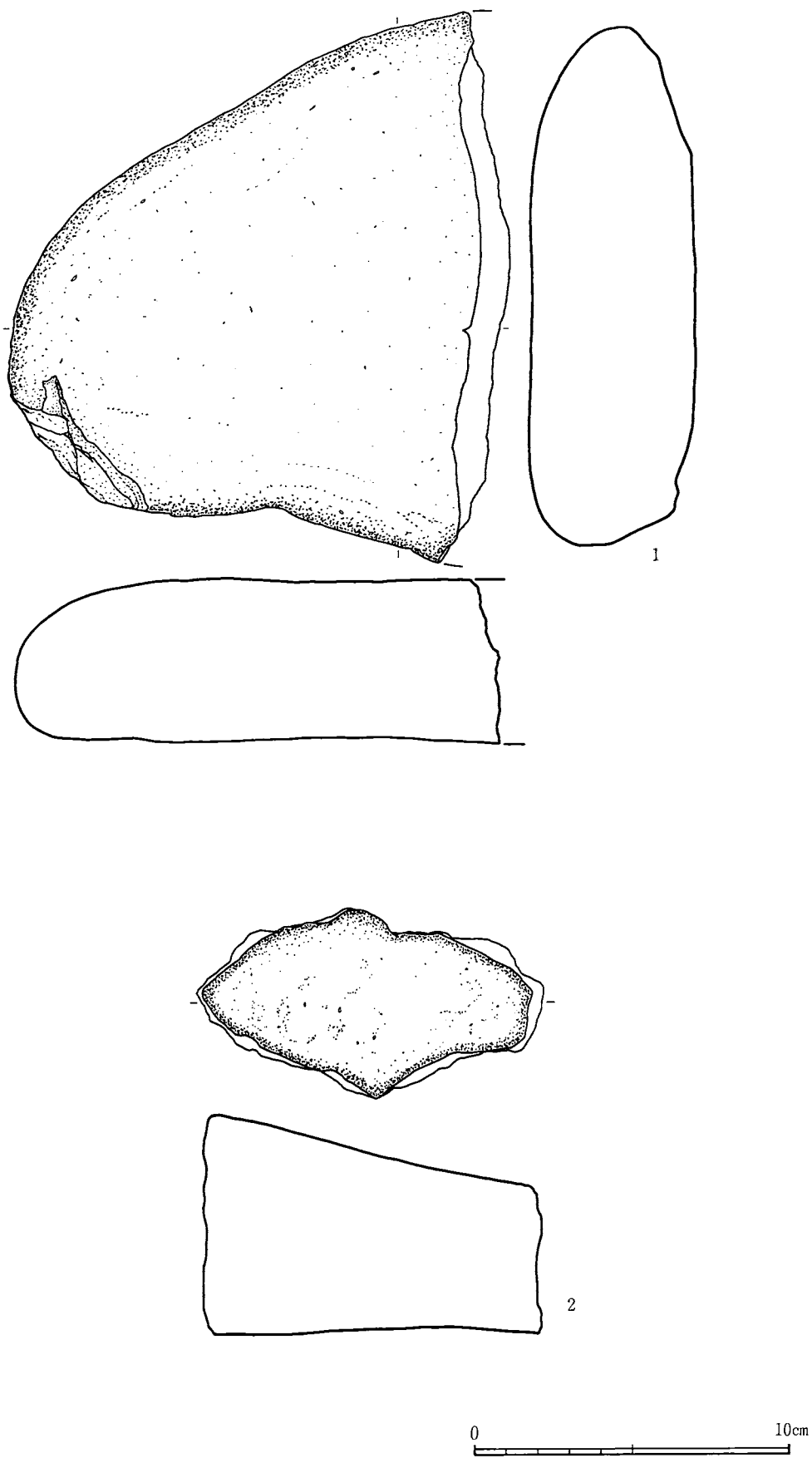


第210図 石皿・台石分布図

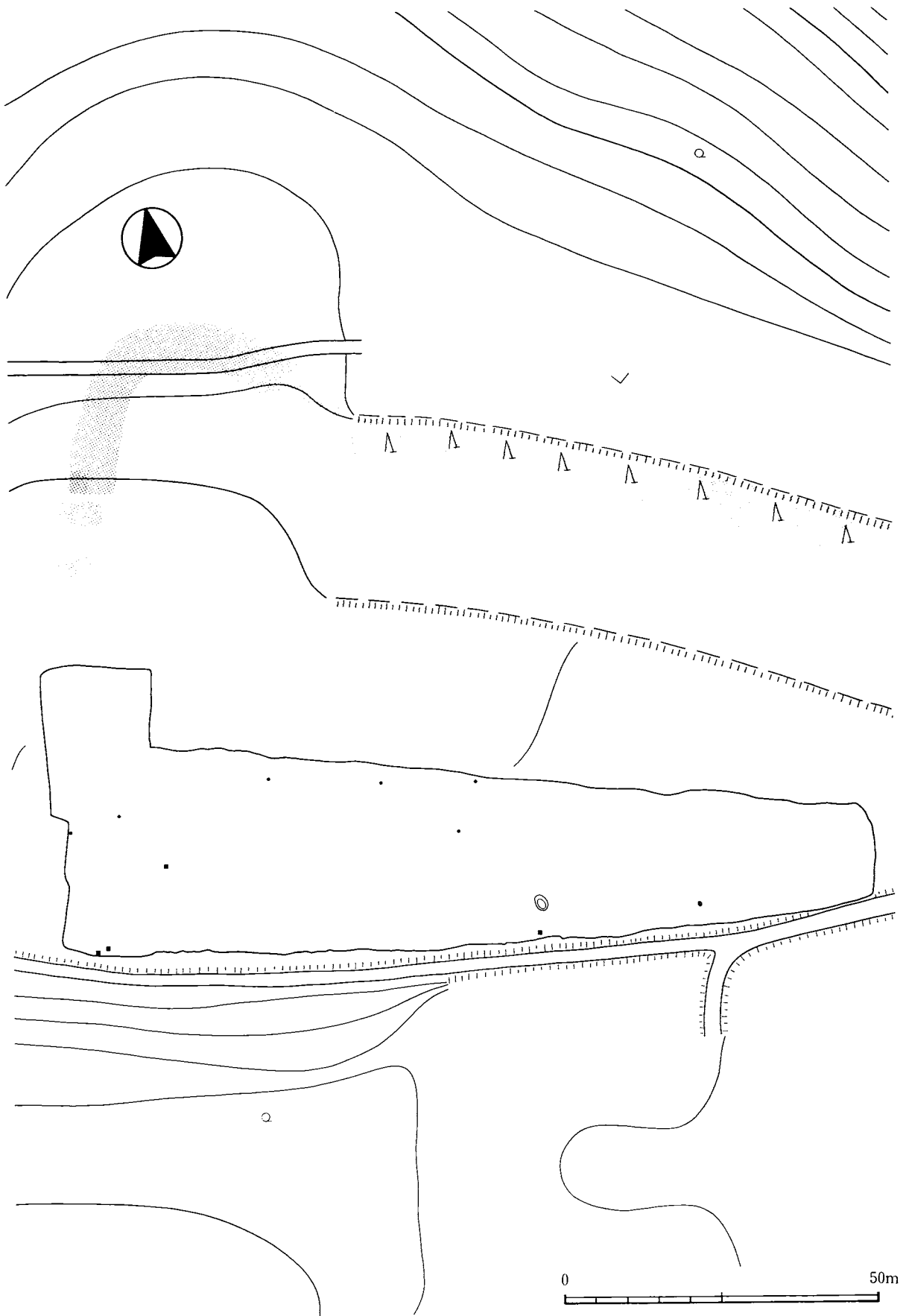




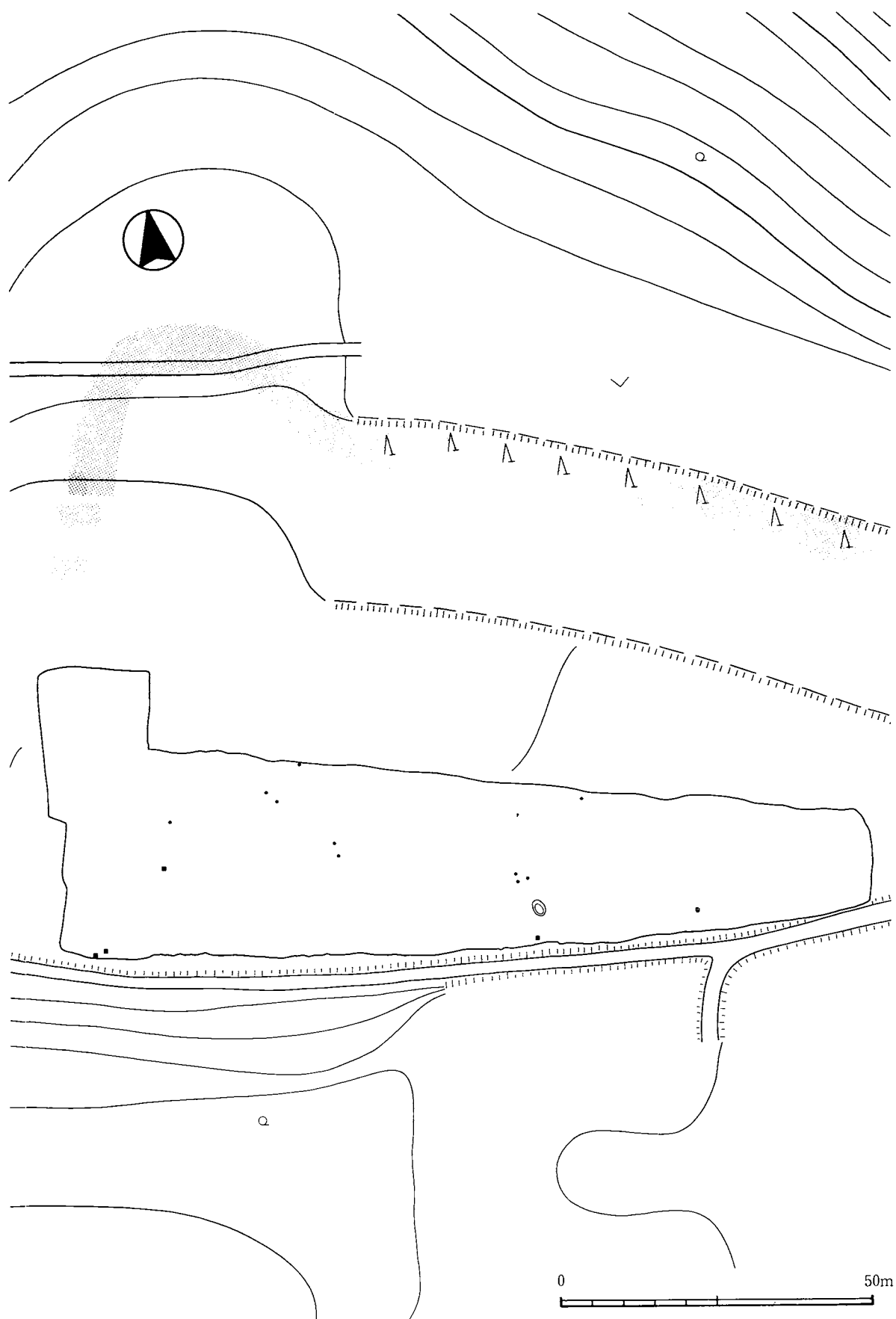
第211図 石皿・台石実測図



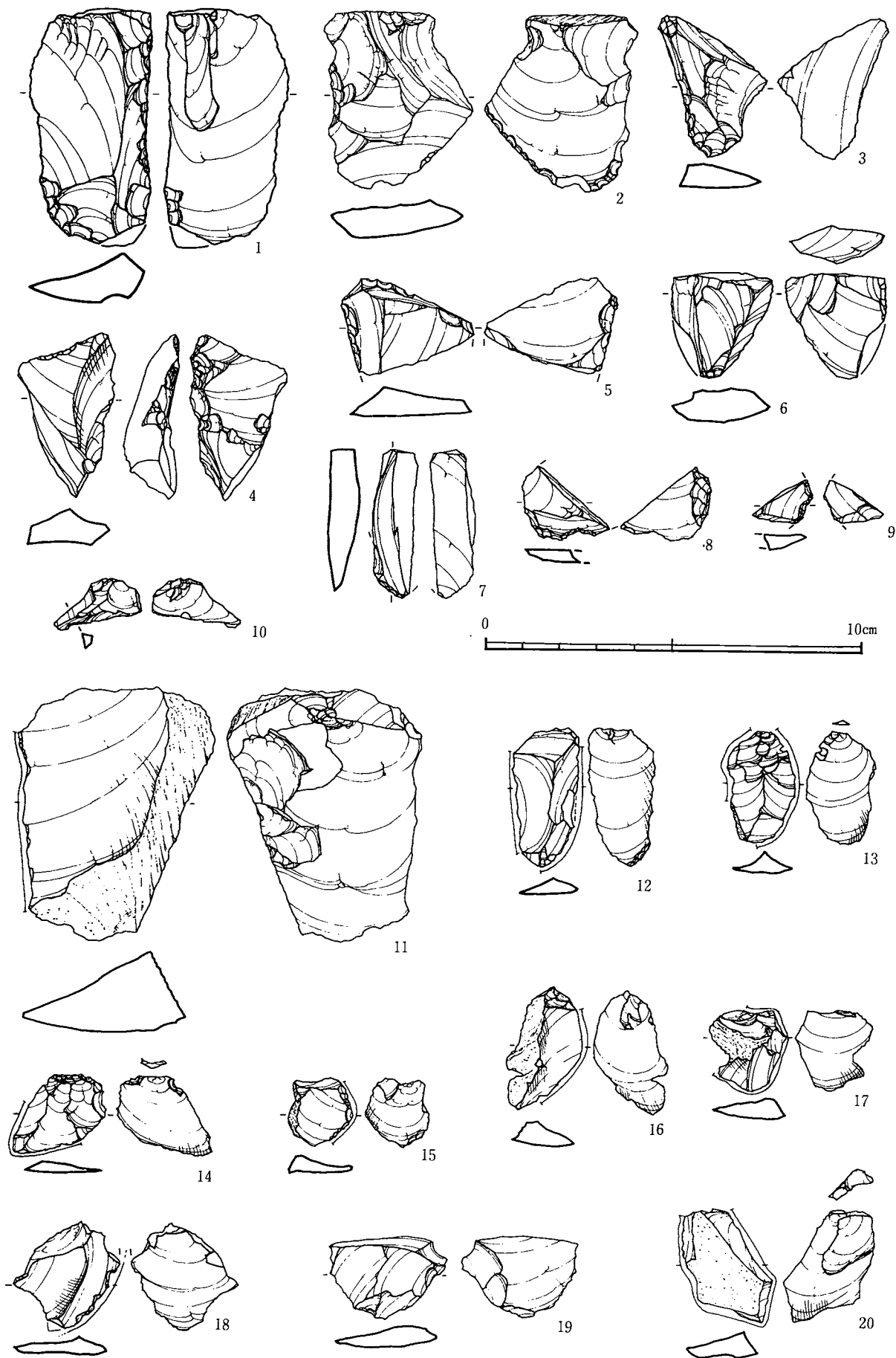
第212図 石皿・台石実測図



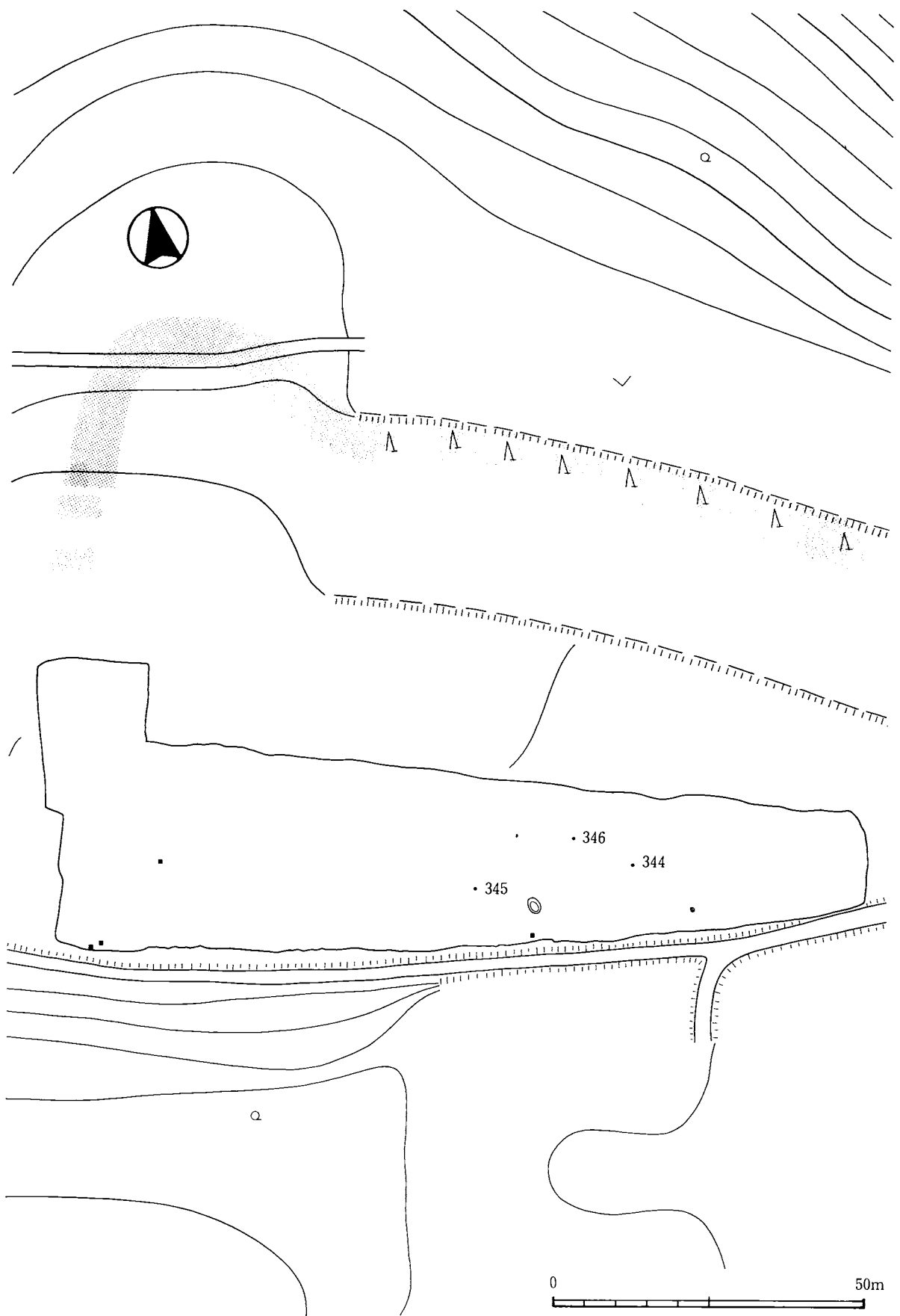
第213図 二次加工ある不定形石器分布図



第214図 使用痕ある剝片分布図



第215図 二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片実測図



第216図 石製品分布図

縁の片端に、敲打の結果、欠損した痕跡が残されている。石材は、砂岩である。

⑫ 石皿・台石 (第210図～第212図)

出土点数は、4点で、調査区の西側と東側に偏在して出土している。

使用石材は、いずれも安山岩である。

⑬ 二次加工ある不定形石器 (第213図・第215図1～10)

剥片の側縁の一部に、連続しない加工を施した石器である。出土点数は、10点である。その出土地点は、調査区の中央部から西側にかけてみられ、東側では1点のみの出土であった。

石材は、黒曜石2点、安山岩8点である。素材となる剥片は、幅広の剥片や横長の剥片が中心であるが、その形状に共通する特徴は見出せない。なお、二次加工とは別に、刃こぼれが観察される資料が存在している。

⑭ 使用痕ある剥片 (第214図・第215図11～20)

剥片の側縁の一部に刃こぼれが観察されるものである。10点が出土した。その分布は、調査区の西側

に偏っている。

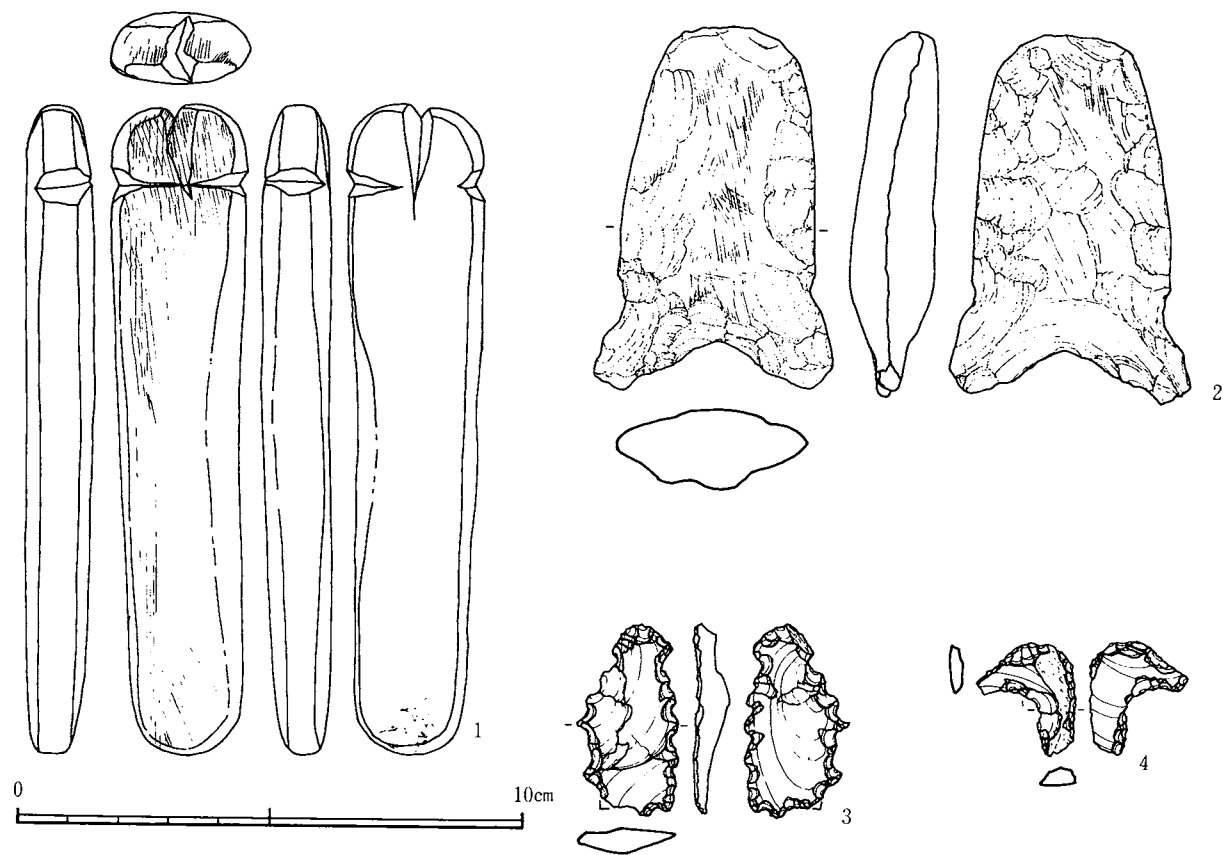
石材は、黒曜石6点、安山岩4点である。剥片の形状は、幅広と縦長である。

⑮ 石製品 (第216図・第217図)

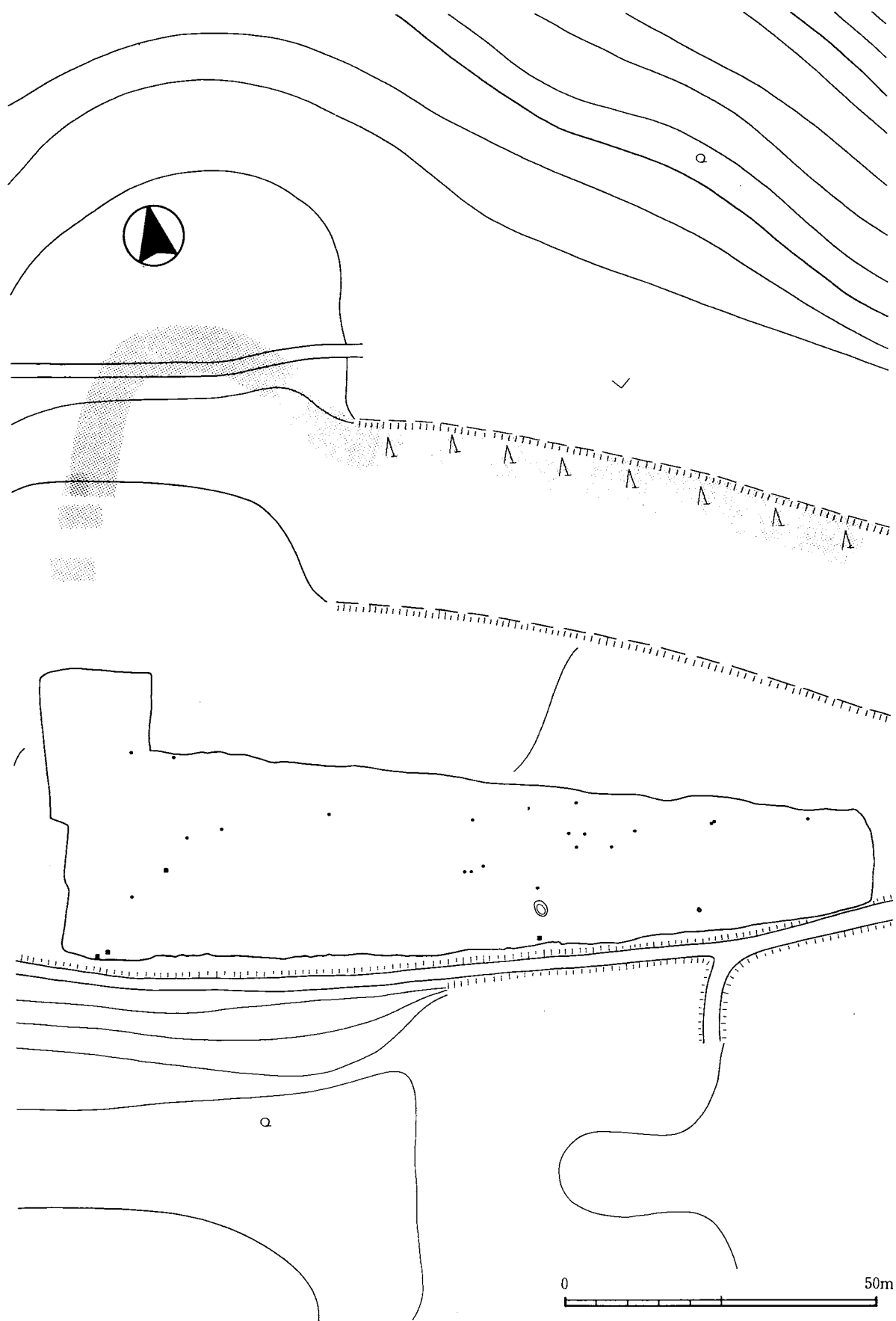
石製品には、男性器形石製品、磨製異形石製品(トロトロ石器)、剥片製異形石製品の三つの種類がある。個別に見ていこう。

男性器形石製品(1)は、1点出土している。出土地点は、調査区の東側にある。棒状で偏平な礫を使い、その先端近くを横位に刻み、また、同じ刻みをその先端部に縦位に入れている。また、縦横の刻み周辺には、斜位の擦痕が観察される。使用石材は砂岩である。

磨製異形石製品(トロトロ石器)(2)は、1点が出土した。その出土位置は、調査区の中央部にある。一端を丸くし、もう一端の両側に角状の突起がつくという形状を呈している。表面の一部には、剥離痕をわずかに残すが、全体は、ていねいな磨きによって、トロトロに仕上げられている。使用石材は、チ

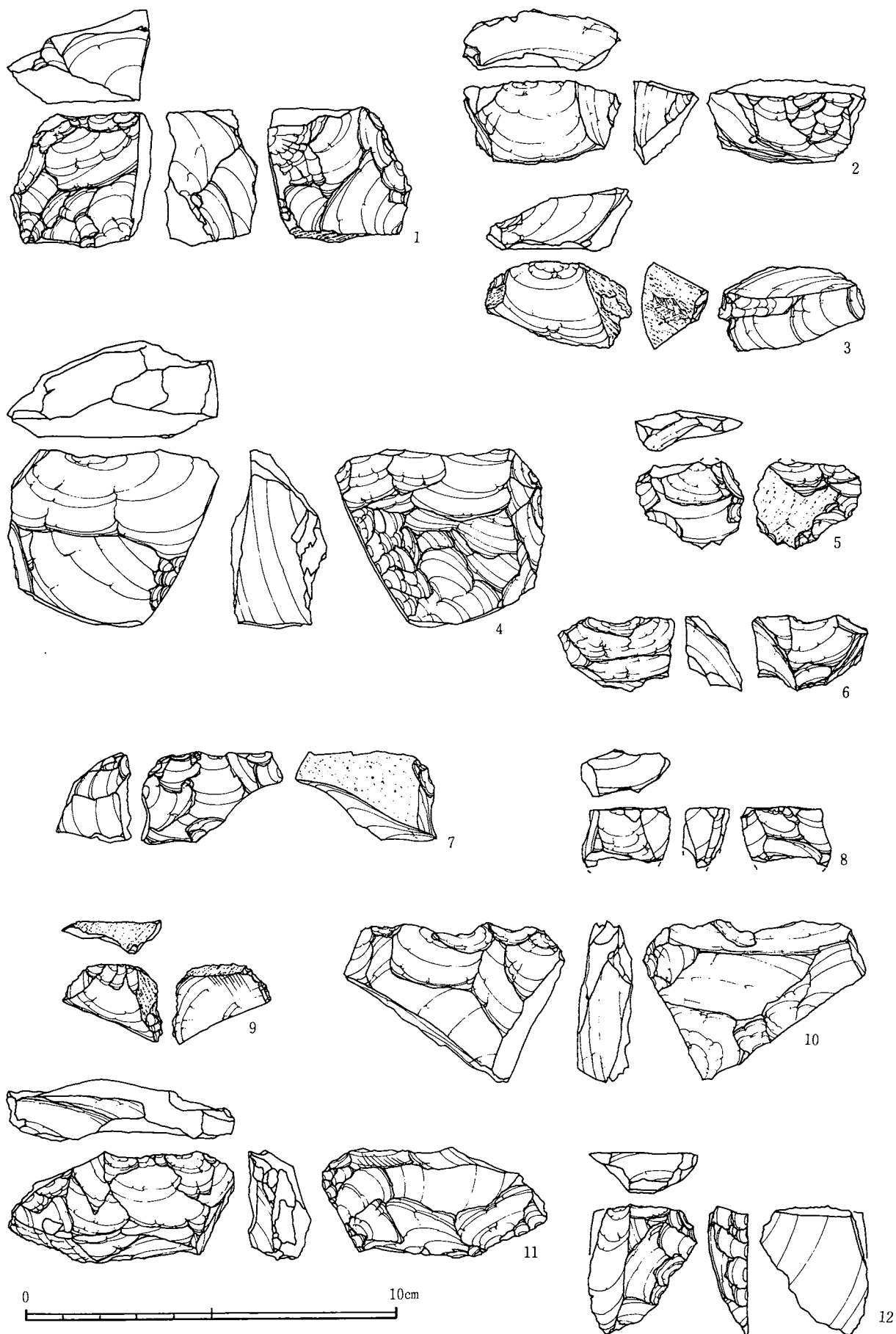


第217図 石製品実測図

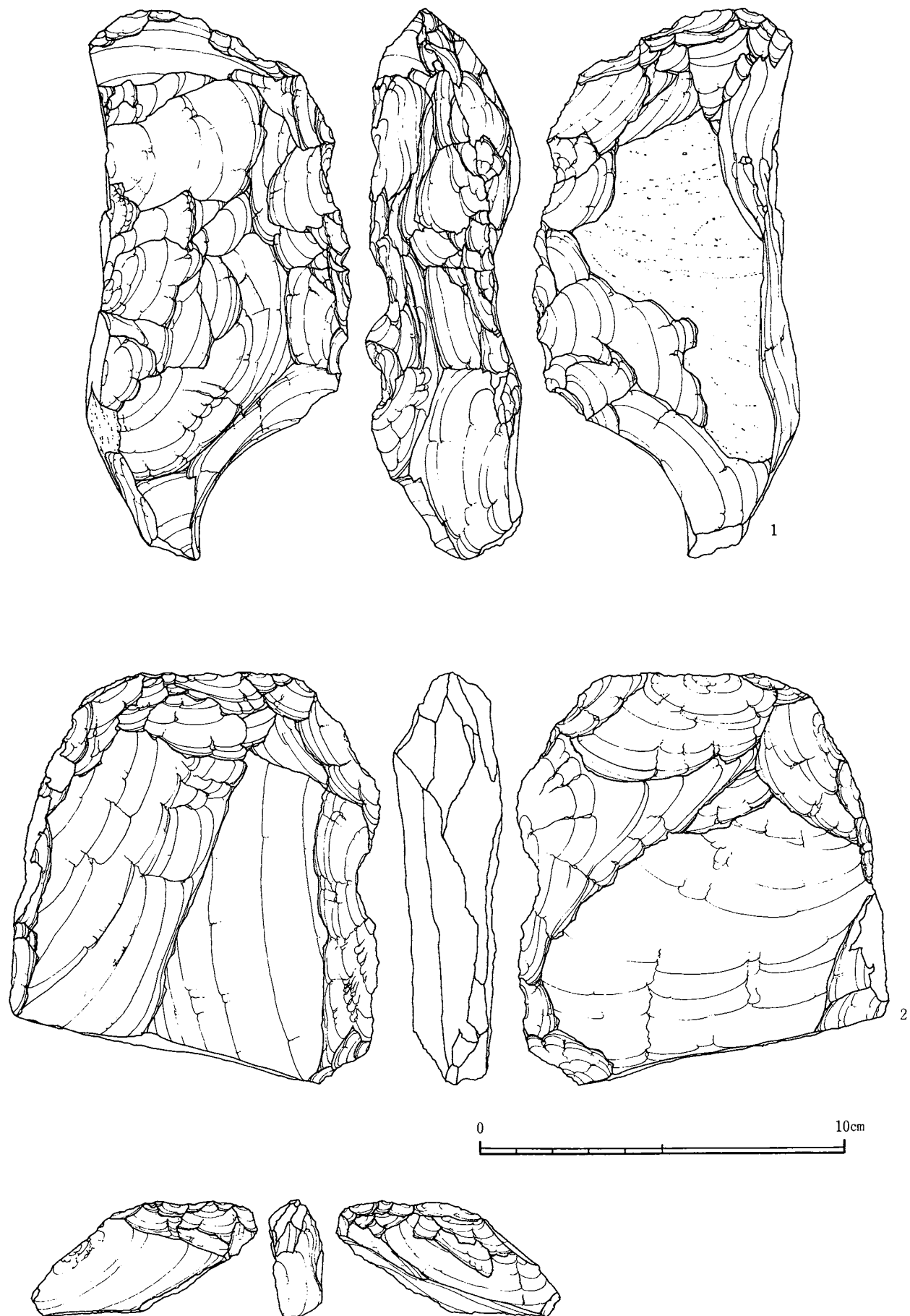


第218図 石核分布図





第219図 石核実測図



第220図 石核実測図

ヤートである。

剥片製異形石製品(3・4)は、2点ある。一つは、剥片の縁辺のほとんどが鋸歯縁となっているもの(3)である。どのような性格のものかは判らないが、何かをかたどったものには違いない。黒曜石製の横長剥片が使われている。もう一つは、剥片の側縁に細かい調整を加えて何かの形に仕上げたもの(4)である。その形から、鳥の頭をかたどったものであろうか。黒曜石製である。

⑩ 石核(第218図～第221図)

いずれも剥片や分割礫を素材としたものである。出土点数は、21点である。分布は、調査区のほぼ全域にわたって認められる。

以下、出土石核を狸谷遺跡での分類(木崎ほか1985)に従って見ていこう。

第1類(第221図1～5)

剥片や分割礫を素材とした石核である。剥片剥離は、打面を石核の縁辺に沿って転移していくもので

ある。その結果、石核の表面には求心的な剥離痕が残される。「柏原型石核」と呼称され(山崎・小畑1983)、縄文時代早期を特徴づける石核である。

第2類(第219図)

偏平な石核である。素材には、剥片と分割礫がある。剥片剥離は、打面の転移を頻繁におこなわないところに特徴がある。したがって、石核原型の形状は、良く保持される。

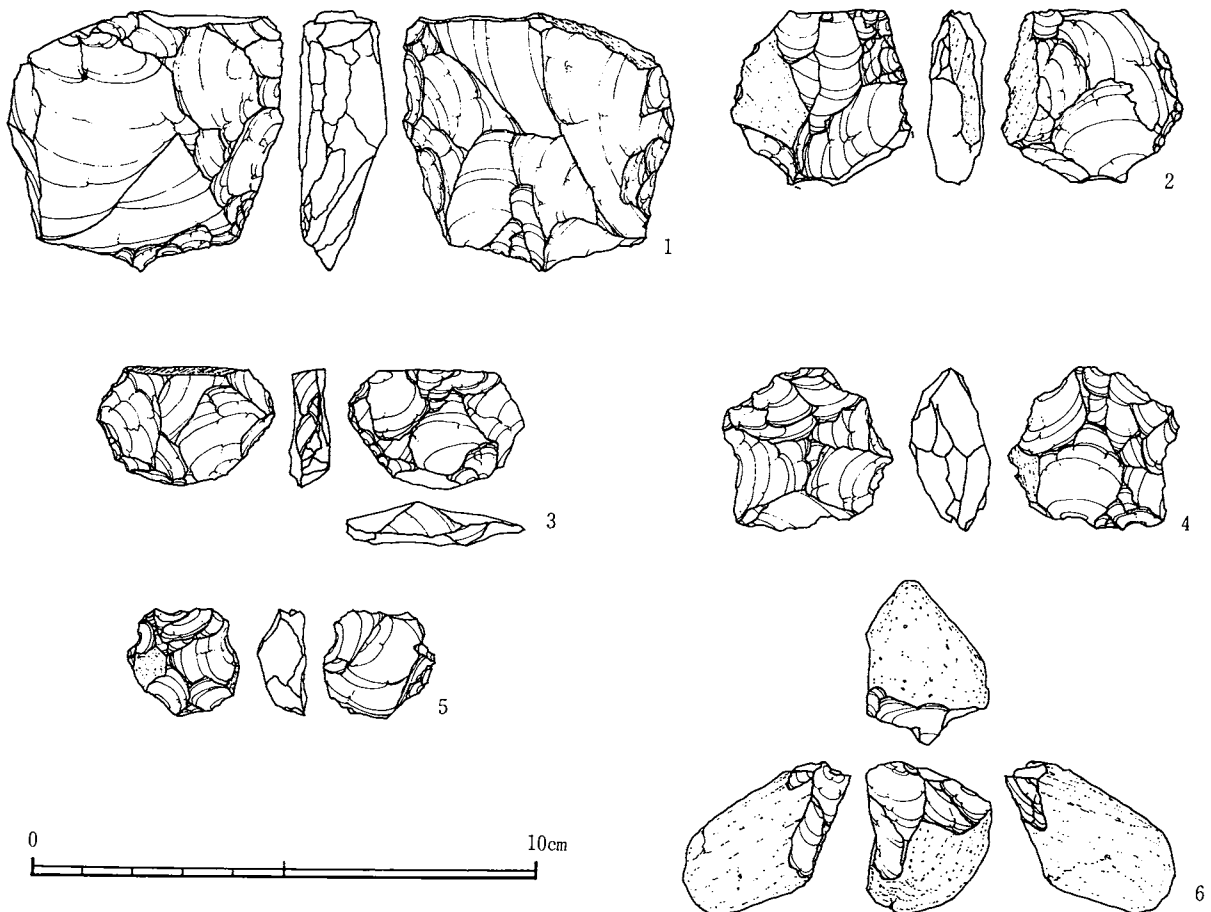
第3類(第220図)

両刃礫器の刃部作出剥離に似た状態で、剥片剥離が進行していく石核である。

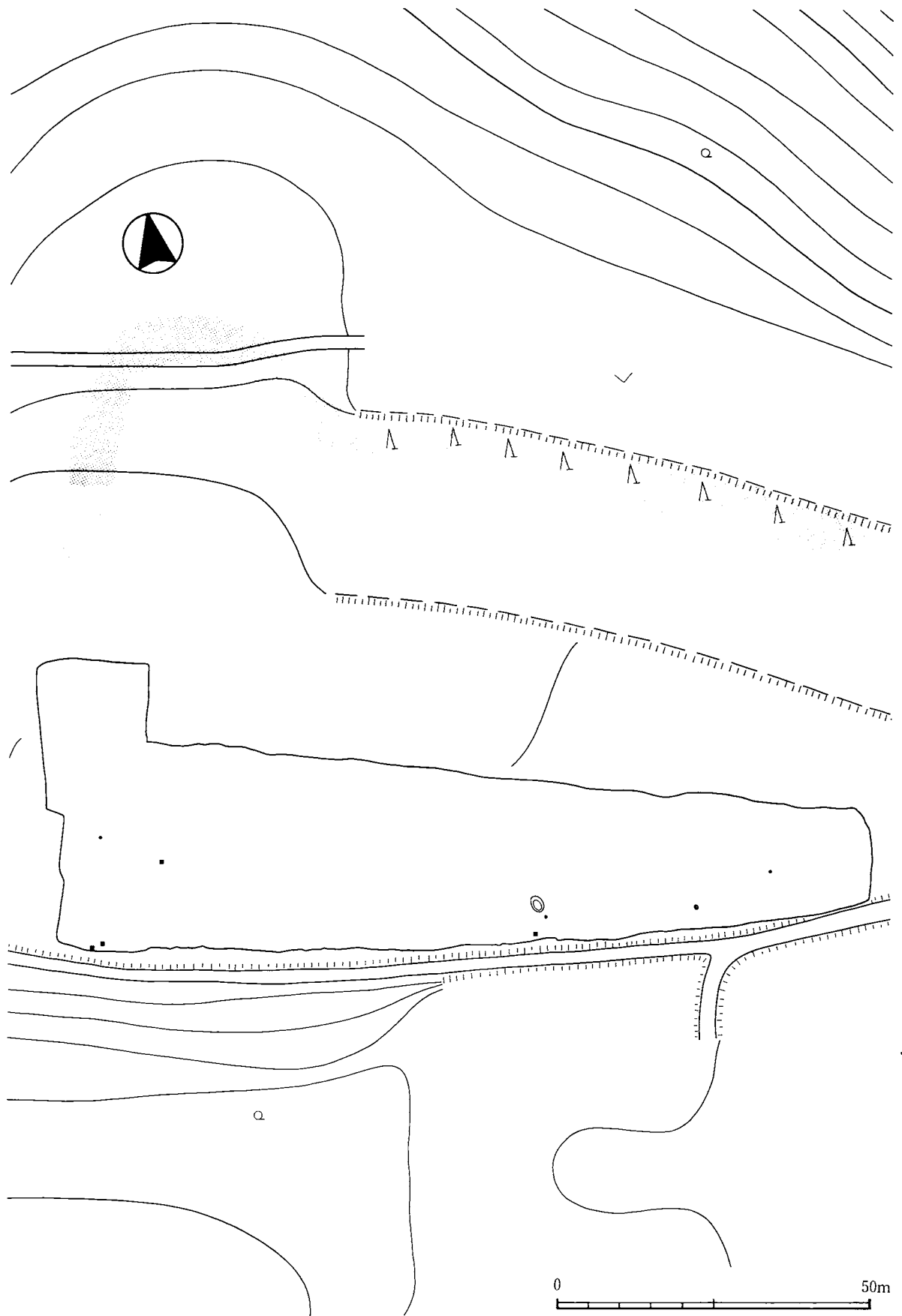
なお、こうした石核の他、礫素材で、打面作出をおこないながら、その面を変えずに剥片剥離を進めていくものもある(第221図6)。

4. 赤変礫とその分布(第222図)

遺跡からは、赤変した礫の出土があった。しかも、その中には削った痕跡を示す資料もあった。こうし



第221図 石核実測図



第222図 赤変礫分布図

たことから、これらを潰して粉末にすれば、ベンガラになりうるのではないかと、調査の段階から注意しておいた資料である。

出土点数は、3点ある。その分布は、調査区の西端・東側・東端にある。

石材は、凝灰岩が中心で、1例、砂岩のものが存在している。赤変の原因は、明確ではないが、自然風化によるものではないかと考えている。ただし、凝灰岩を焼いた結果という可能性が無いわけではなく、今後も注意が必要な資料だと思っている。

## 5. まとめ

無田原遺跡において、その主体的な位置を占める時代、それは縄文時代早期である。ここでは、これまでに報告してきたものを、それぞれの項目別に簡単にまとめなおしておくたい。

【遺構】遺構としては、炉穴2基と集石3基がある。いずれも縄文時代早期の遺跡から一般的に出土する遺構である。炉穴には、大型のものと小型のものがあつた。この二つの遺構は、何か、使用方法や機能を異しているのかもしれない。集石には、掘り込みを持たない配石状のもの、下部構造として掘り込みと配石を持つもの、掘り込みのみが下部構造のもの、という三つの種類がある。これも、使用法や機能を違えたものであろう。

【地形】土器・石器・礫群の分布をみて、調査区の地形的な特徴が見出せた。それは、調査区内に二つの谷部と二つの尾根部が存在していることであつた。遺跡構造を考える上で、注意しておこう。

【土器】格子目文土器、楕円文土器、山形文土器、異種押型文併用土器、押型文・捺糸文併用土器、捺糸文土器、条痕土器、手向山式土器、無文土器があつた。いずれも破片での出土で、完形での出土は無かつた。そこで、整理・報告書作成の段階で、出土した土器片全体の個体識別をおこない、混沌とした土器片の集積を整理しようと試み、格子目文土器3個体、楕円文土器103個体、山形文土器53個体、異種押型文併用土器1個体、押型文・捺糸文併用土器5個体、捺糸文土器28個体、条痕土器14個体を認識できた。ただし、この認識は、2点以上の破片に限つた

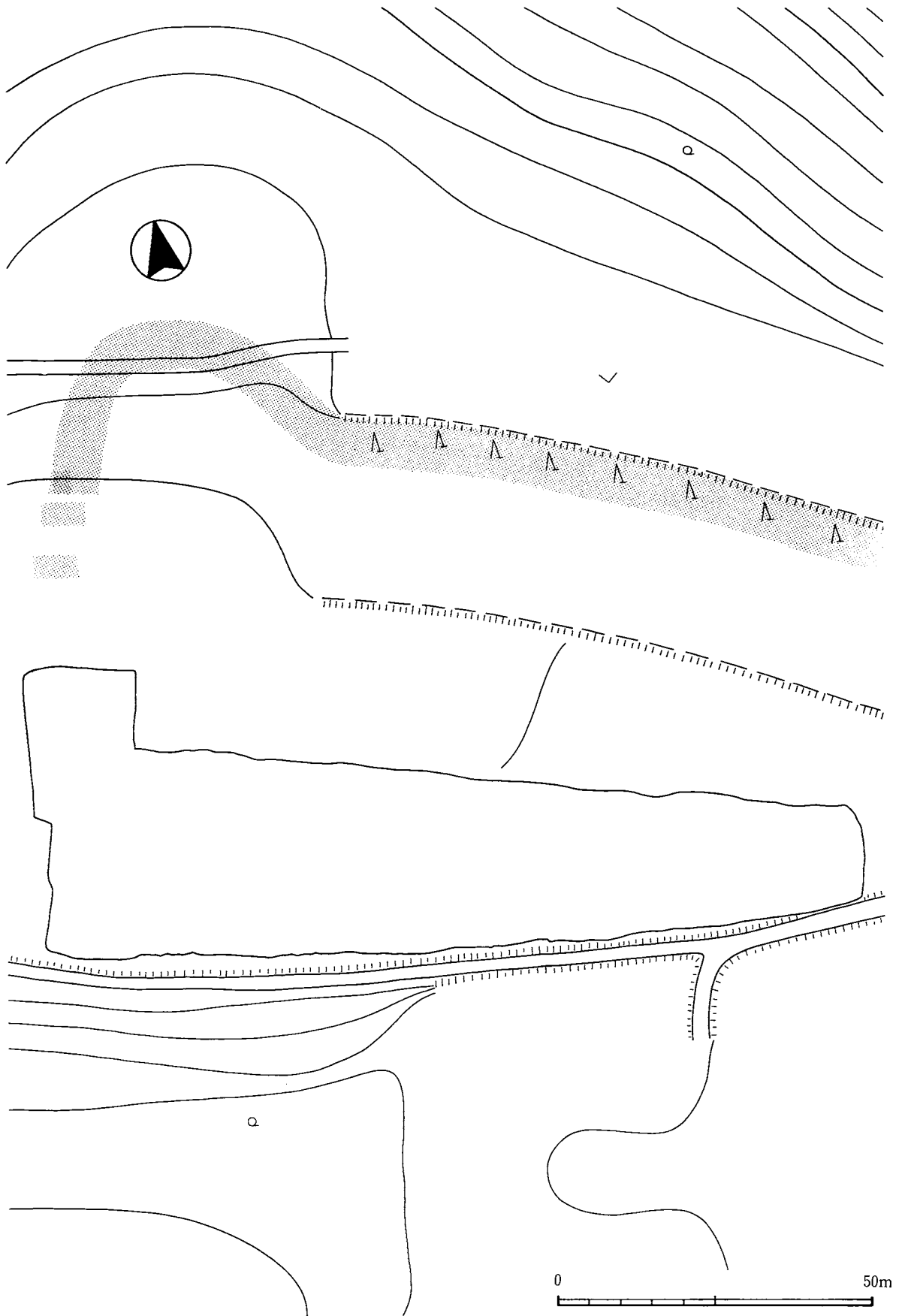
ものであり、1点のみの個体が存在するならば、その数はさらに増えるだろう。なお、土器の型式学的検討については、次の章に譲ろう。

【石器】関係資料は、310点が出土した。その内訳は、石鏃11点、尖頭器1点、尖頭石器6点、削器14点、抉入石器1点、石錐1点、楔形石器5点、打製石斧1点、石錘4点、有溝砥石1点、磨石・敲石14点、石皿・台石4点、二次加工ある不定形石器10点、使用痕ある剥片10点、石製品4点、石核21点、剥片・碎片202点であつた。直接的に狩猟に係る石器は、石鏃・尖頭器・尖頭石器で、18点である。これに対して、植物食に係るものは、磨石・敲石と石皿・台石である。点数は合わせて18点であるが、これらは前者と後者とをセットにして成り立つものであり、基本は石皿・台石の数であろう。そうはいつても、狩猟と植物採取との石器の数を同列に扱うことはできないので、直接的な比較はさけて、無田原遺跡の縄文時代早期の人びとは、両者の食料獲得の方法を持っていたという認識に止めたい。なお、この点については、次章の中で言及することにしよう。この他、赤変礫の出土もあり、ベンガラ作りの可能性を最後に主張しておくたい。

第4表 石器計測表

挿図	No.	器種	石質	長さ(cm)	計幅(cm)	測値 厚さ(cm)	重さ(g)	登録番号
190	1	石 鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.25	0.5	III B-251
	2	"	チャート	1.95	(1.6)	0.2	(0.5)	IV B-15
	3	"	安山岩	1.75	1.65	0.31	0.65	5B-19
	4	"	"	(1.8)	(1.45)	0.27	(0.5)	III C-1
	5	"	"	(2.0)	(1.6)	0.31	(0.7)	4A-9
	6	"	黒曜石	—	—	0.35	(0.7)	III B-229
	7	"	チャート	(2.4)	1.93	0.5	(1.2)	4C-46
	8	"	黒曜石	1.55	1.48	0.29	0.45	5C-28
	9	"	安山岩	(2.9)	(2.6)	0.45	(1.6)	2C-51
	10	"	黒曜石	—	—	—	(0.5)	1B-146
	11	"	安山岩	—	—	—	(0.6)	7B-4
	12	尖頭器	"	—	—	—	—	一括
	13	尖頭石器	"	3.87	2.95	0.8	8.8	4B-33
	14	"	"	—	3.15	0.85	(6.2)	2B-225
	15	"	チャート	3.4	3.25	1.1	11.3	8C-75
	16	"	安山岩	2.3	2.25	0.9	3.2	7C-4
	17	"	"	(2.45)	1.95	0.6	2.5	II C-25
	18	"	チャート	3.0	2.8	0.75	4.5	5B-72
193	1	削器	安山岩	4.4	7.55	0.95	32.6	III B-182
	2	"	"	4.62	7.7	2.35	73.7	4B-489
	3	"	"	5.1	7.75	1.4	42.5	6B-479
	4	"	"	4.1	7.5	1.25	35.7	II B-117
	5	"	"	3.5	6.15	1.25	24.7	7B-30
194	1	"	"	5.2	6.35	1.62	48.1	6B-36
	2	"	"	3.5	6.15	1.25	23.0	10B-48
	3	"	"	3.7	5.75	1.05	22.0	5B-286
	4	"	"	2.75	4.35	0.9	10.5	9C-120
	5	"	"	3.63	4.68	0.78	11.1	4B-194
	6	"	"	—	—	0.95	(16.6)	I B-197
	7	"	"	—	—	—	(8.9)	4C-20
	8	"	"	—	—	—	(9.4)	I B-17
	9	"	黒曜石	2.87	1.25	0.5	1.4	8B-26
	10	抉入石器	安山岩	—	—	—	(2.4)	4C-151
198	1	石錐	黒曜石	3.05	1.5	0.83	2.9	1B-18
	2	楔形石器	安山岩	3.15	2.6	1.45	11.4	III B-12
	3	"	黒曜石	3.05	2.45	1.2	6.4	6B-214
	4	"	頁岩	3.55	2.57	1.0	9.7	9B-11
	5	"	安山岩	2.32	3.1	1.05	6.5	6B-258
	6	"	黒曜石	2.08	1.65	0.98	3.5	1C-131
	7	打製石斧	頁岩	—	—	—	(419.5)	3B-1
201	1	礫石錘	砂岩	6.7	6.4	1.95	125.9	3C-37
	2	有溝石錘	安山岩	7.38	8.85	5.2	419.3	5B-210
202	1	"	凝灰岩	6.72	8.65	6.6	342.4	5C-87
	2	"	"	7.0	8.3	6.12	332.6	4C-160
204	1	有溝砥石	"	21.0	10.4	7.25	1903.5	5A-57
206	1	磨石・敲石	砂岩	11.5	8.25	6.5	711.4	9B-50
	2	"	"	9.5	7.98	4.4	385.6	II B-386
	3	"	安山岩	—	8.65	4.1	(495.3)	5B-115
	4	"	砂岩	—	—	—	(300.8)	II B-312
207	1	"	"	9.85	8.03	4.37	406.5	7B-259
	2	"	"	11.0	7.0	5.4	472.7	4B-158
	3	"	安山岩	11.85	8.35	6.0	942.0	6B-145
208	1	"	砂岩	12.4	10.25	5.05	741.4	II C-66
	2	"	安山岩	11.35	9.6	4.6	816.8	9C-33

挿図	No.	器種	石質	長さ(cm)	計幅(cm)	測値 厚さ(cm)	重さ(g)	登録番号
	3	"	安山岩	9.15	8.3	3.7	452.5	6B-133
209	1	"	"	—	—	(7.6)	(577.7)	7B-135
	2	"	"	—	—	(4.2)	(333.9)	3B-17
	3	"	"	6.22	6.15	4.43	216.9	IVC-63
	4	"	砂岩	9.75	3.5	1.8	85.6	6B-423
211	1	石皿・台石	安山岩	11.1	13.9	4.0	736.8	7B-252
	2	"	"	(15.55)	—	(5.05)	(1302.8)	8B-70
212	1	"	"	—	—	(5.4)	(1902.7)	IC-31
	2	"	"	—	—	—	(513.0)	1B-57
215	1	二次加工ある不定形石器	"	6.35	3.3	1.3	24.8	2C-69
	2	"	"	4.72	4.05	1.17	19.4	IIIB-136
	3	"	"	3.7	2.9	0.7	5.8	10B-80
	4	"	黒曜石	4.4	2.6	1.42	9.1	4C-119
	5	"	安山岩	—	—	—	(6.8)	5C-163
	6	"	"	—	—	—	(6.5)	1B-155
	7	"	"	—	—	—	(4.1)	1B-279
	8	"	"	—	—	—	(1.5)	IIIB-309
	9	"	"	—	—	—	(0.5)	1B-5
	10	"	黒曜石	1.35	2.35	0.55	1.0	5B-382
	11	使用痕ある剥片	安山岩	6.7	5.22	2.5	68.3	2C-61
	12	"	"	3.64	1.8	0.52	2.7	1B-132
	13	"	黒曜石	2.95	1.8	0.7	2.2	3C-151
	14	"	"	2.07	2.45	0.4	1.1	6B-74
	15	"	安山岩	1.78	1.75	0.58	1.3	6B-64
	16	"	黒曜石	3.25	2.0	0.76	2.2	6B-57
	17	"	"	2.1	2.0	0.6	1.8	6C-102
	18	"	"	—	—	—	(4.1)	3B-90
	19	"	安山岩	—	—	—	(3.7)	2C-73
	20	"	黒曜石	3.0	2.4	0.87	3.7	3B-54
217	1	男性器形石製品	砂岩	12.85	2.7	1.35	76.0	7B-29
	2	磨製異形石製品	チャート	7.25	4.8	1.65	61.2	5B-20
	3	剥片製石製品	黒曜石	3.8	2.02	0.73	3.0	1C-130
	4	"	"	2.27	1.93	0.6	1.02	6B-472
219	1	石核	安山岩	3.6	3.9	2.48	37.4	7B-236
	2	"	チャート	2.25	4.25	1.72	16.3	8B-93
	3	"	黒曜石	2.32	3.95	1.79	9.9	5B-319
	4	"	安山岩	4.78	5.72	2.6	71.5	6B-30
	5	"	黒曜石	(2.4)	2.88	1.1	(4.8)	6C-121
	6	"	安山岩	2.02	3.12	1.5	7.3	7B-151
	7	"	黒曜石	2.45	3.83	2.0	11.4	9B-79
	8	"	安山岩	—	2.07	1.25	(4.6)	II C-127
	9	"	黒曜石	2.1	2.65	8.6	3.0	IV C-12
	10	"	安山岩	4.3	6.02	1.5	33.5	5B-30
	11	"	"	3.0	6.16	1.65	28.2	2B-402
	12	"	"	3.55	2.9	1.09	9.1	1B-289
220	1	"	"	15.0	7.35	4.4	427.0	6B-343
	2	"	"	11.3	10.25	3.08	43.78	3C-8
	3	"	"	—	—	1.5	(27.4)	8B-94
221	1	"	"	5.45	5.12	1.7	47.7	9B-1
	2	"	チャート	3.2	3.35	1.55	12.7	6B-328
	3	"	安山岩	2.35	3.5	0.83	6.8	1C-136
	4	"	チャート	3.2	3.35	1.55	12.7	6B-328
	5	"	黒曜石	2.13	2.2	0.98	3.8	5B-73
	6	"	"	3.04	2.45	3.3	19.7	5B-142



第223図 弥生時代前期資料分布図



## 第4節 弥生時代前期の遺物

### 1. 遺物の出土層位と位置

弥生時代前期の資料としては、甕形土器と石製品とがあった。その出土層位は、第III層である明褐色土層にあたる(第6図)。

出土地点は、調査区の西側の南端と東側にあった(第223)。出土資料は少なく、本来の生活遺構は、南側の大津町側に埋蔵されているはずである。

### 2. 弥生時代前期の資料(第224図)

関係資料は、先に述べておいたように甕形土器と石製品である。

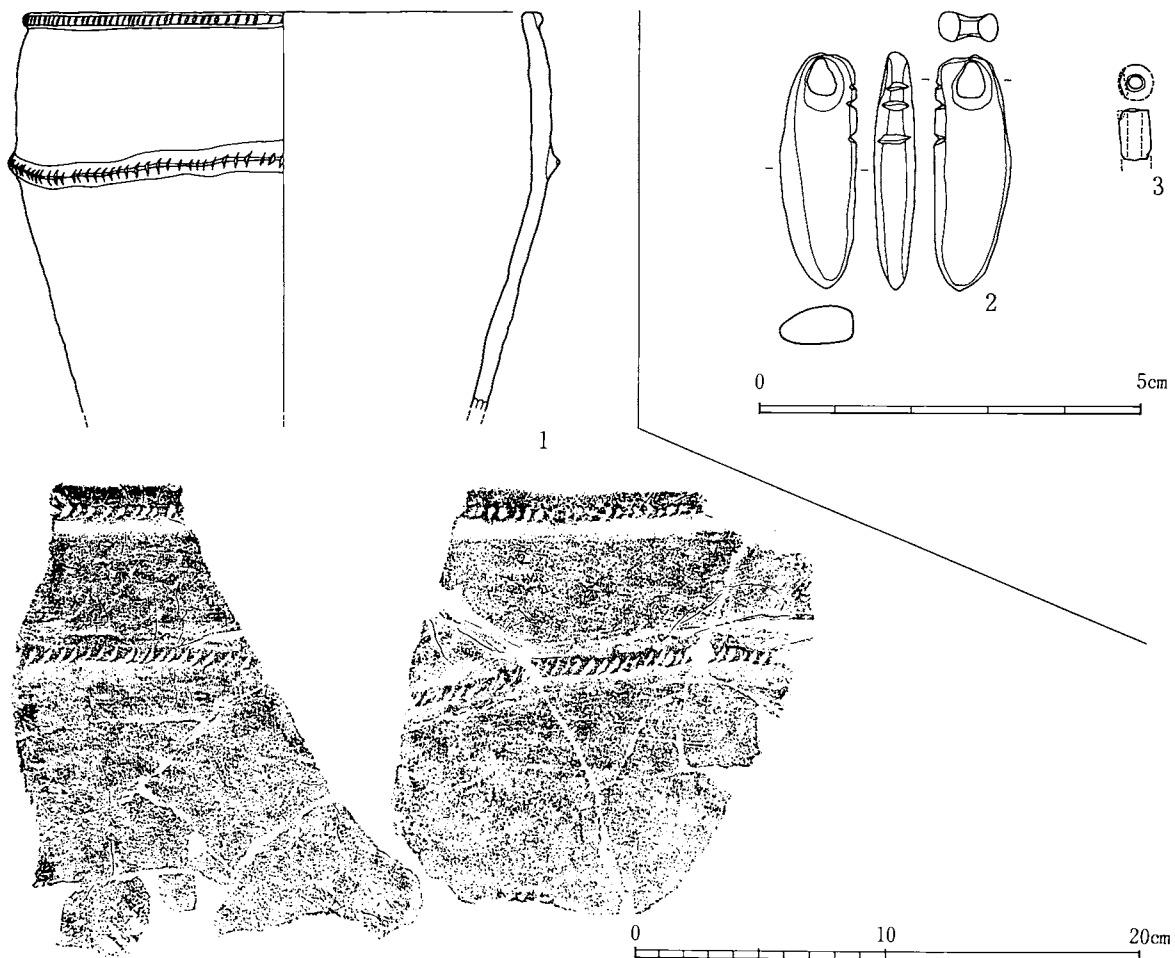
甕形土器は、すべて同一個体である。出土地点は、調査区西側の南端と東側にある(第223図)。復元口径は、19.5cm、現状での器高は、15.8cmである。凸

帯は、口縁端部と胴部上半に付けられている(第224図1)。前期末の亀の甲式の甕形土器であろう。

石製品は、2点(第224図2・3)出土している。垂飾品と管玉である。出土地点は、2点とも近距離にあり、調査区の西端近く、その南端にある(第223図)。明確な遺構からの出土ではなく、包含層調査の際に、発見された。

2は、垂飾品である。長さ3.14cm、幅1.00cm、厚さ0.53cm、重さ2.3gを測る。石材は、滑石製で、その色調は薄い緑色である。長い楕円形を呈し、その一端に紐通しの径0.3~0.5cmを測る孔が穿たれている。穴は、紐擦れによって全体的に磨滅している。片方の側縁には、三つの切り込みが観察される。

3は、管玉の破片である。これも薄い緑色の滑石を利用したものである。計測値は、現状で長さ0.7cm、直径0.4~0.48cm、孔の直径0.2cm、重さ0.2g。



第224図 弥生時代前期土器・石製品実測図



## 第IV章 総 括

### 1. 縄文時代早期の集落構成について

無田原遺跡の調査では、2基の炉穴、3基の集石が確認された。また、集落の構造を知る上で重要な、土器・石器・礫の集積分布も確認している。ここでは、こうした発掘資料を基に、縄文時代早期の集落を考えることを眼目として、調査成果を総括していくことにしよう。なお、検討の過程で、史跡「無田原遺跡」の調査成果も何らかの形で援用していきたい。

無田原遺跡の中で、今回調査した場所は、その北端に近い所で、地形がしだいに谷に下っていくという、地形的な変換点付近にある。したがって、地形的な特徴をかなりの精度で類推できるだろう。それを裏付けるように遺物分布には、極めて興味ある偏在傾向がある。

遺物の出土状況は、調査区の中で西端の北側に迫り出し、その後南側に後退し、中央部付近ではしだいに北側に迫り出して来、そして東側になるにしたがい北側に後退するという、規則的な波状を呈している(第225図)。これは、第III章でも記しているように、当時の旧地形を暗示しているものであろう。つまり、遺物分布が南側に迫り出している部分は谷部であり、北側に後退しているものは尾根部ではないだろうか。このように、本来の旧地形がその後削平を受けて、低い部分の遺物はより多く残され、高い部分のものはより多く削り取られたのである。しかも、遺物の遺存状態から、調査区西側の谷が深く南側に強く入り込み、調査区中央部の谷は浅く入り込みも弱い状況が見て取れる。

こうした地形的な特徴から遺構の分布をみてみよう。そうすれば、その位置の特徴を読み取れる。それは、遺構の位置が遺物の分布の臨界付近にあるということである。しかし、これは、以後の削平の結果によるもので、尾根部に存在していた遺構がすべて消滅したことに起因しているのかもしれない、見かけの分布ということになる。ただし、過去に調査された地点(それは史跡「無田原遺跡」であるが)が、調査区中央部の浅い谷の頭にあたっているというこ

と、また、尾根部の遺物分布の臨界付近には全く遺構が存在していないということも注意しておく必要がある。つまり、現状で見られる遺構の分布も何か意味が有るのかもしれない。

確認された炉穴や集石は、すべて遺物分布の臨界付近にあり、しかも西側の谷付近と中央部の谷付近に存在していた。さらに史跡「無田原遺跡」は、中央部の谷頭にあり、ここで確認された遺構は、中央部の谷付近に存在する炉穴2基と集石1基と密接に関係するものといえる。さらに、土器・石器・礫の分布を見てみると、中央部の谷に密な集中傾向が見て取れることは、集落の様子を復元する際に、とても重要な事実だろう。

そこで、あえて無田原遺跡の集落構成を考えてみよう。ただし、調査地区に限られた範囲であり、しかも削平の度合いが大きいことから、あくまでも推定の域をでないものではある(第225図)。

縄文時代早期の集落は、二つの谷と尾根とが交互に入り組む地形の中に営まれていた。集落作りのための大規模な地形改変をしない当時であって、この地形的特徴は、人びとが集落内をレイアウトする際にも大きな要素となっていた筈である。現に、炉穴や集石など、集落内の厨房施設は、谷最上部から谷頭上の平坦面にかけて設けられていた。つまり、火を使う生活は、風を集約することによって、その効果を効率的に引き出すことのできる場所で行われていたのである。

これに対して、居住の空間は、どこにあるのだろうか。残念ながら、今回の調査では竪穴式住居跡を確認することができなかったが、これまでの事例(高橋1988)からすれば、この遺跡にもそうした遺構の存在を想定しなければならないだろう。そうであるならば、もっとも可能性が高い場所として、尾根を挙げることができる。かつて私が熊本県山江村狸谷遺跡で復元したような、厨房空間と居住空間、そしてその間にある広場という集落構成を、ここ無田原遺跡の中でも考えるならば、その位置は広場を介し

## 1. 縄文時代早期の集落構成について

て厨房空間の対岸に想定しなければならない。そうならば、尾根上でもその中心部ではなく、どちらかに偏った場所かもしれない。

こうした集落構成が、実はこの遺跡の中に幾つか見られるのである。それは、調査区の谷部ごとに見られる厨房施設によって窺い知ることができる。すなわち、調査区の西端の厨房施設であり、中央部のそれ、そして、調査区外でその東側の道路切通し南面にみられる炉穴の断面である。つまり、無田原遺跡では、最低でも三つの厨房空間が残されているのである。これを三つの集落構成の集合と見てみよう。ここで問題は、この集合を同時併存とみるのか、時期を異にすると見るかである。仮に、同時併存とみるならば、複数の集団が一つの空間に居住していると解釈しなければならないし、仮に、異なる時期ならば、集落の漸次的な移動ということを考えなければならない。これについては、結論を急ぐ必要はないが、遺物の分布が遺跡全面にみられるということからすれば、集落の漸次的な移動がもっとも可能性が高い解釈であろう。つまり、生活廃棄物の集積が元の生活空間や北斜面で繰り返された結果、広い範

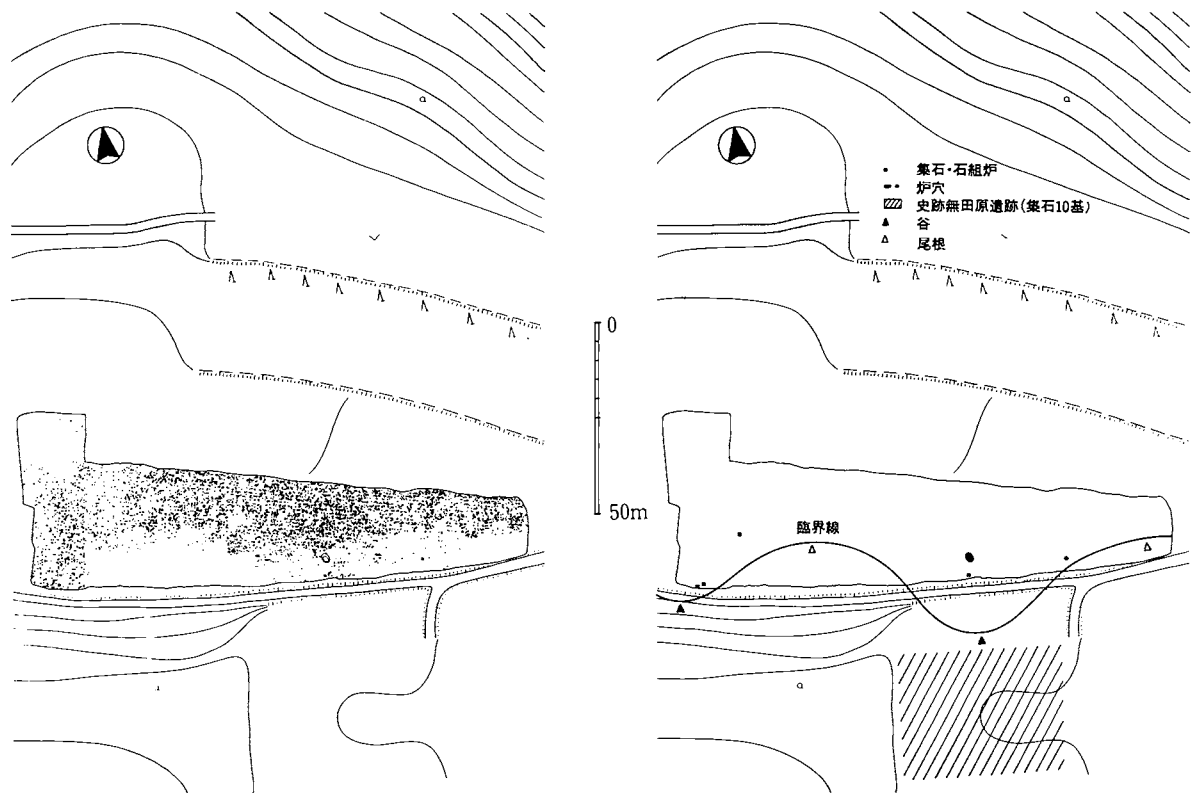
囲の遺物・礫分布が形成されたとする方が容易に理解できるのである。

以上のように、無田原遺跡の集落構成について、私は、次のような認識をおこなった。

1. 炉穴や集石など、集落内の厨房施設は、谷最上部から谷頭上の平坦面にかけて設けられていた。
2. 集落全体については、他の遺跡での調査例から考えて、厨房空間と居住空間、そしてその間にある広場というレイアウトが考えやすい。
3. 遺跡の中に、三つ以上の集落単位が見出せる。
4. これは、集落の漸次的な移動を考えることがもっとも理解しやすい。

## 2. 沈目式土器と石清水式土器—中九州西部押型文土器編年に関する予察—

無田原遺跡では、多量の押型文土器が出土した。その種類は、単純なもので格子目文・楕円文・山形文、この他に交錯したものではそれぞれの文様の併用や異なる文様との併用がある。ここでは、こうした土器群を、型式学的に整理し、編年研究が遅れている中九州西部における押型文土器編年への見通し



第225図 縄文時代早期集落のモデル(無田原遺跡)

を立てようとするところに主眼がある。そのキーワードは、「沈目式土器・石清水式土器の設定」である。

無田原遺跡で出土した押型文土器をみてみると、幾つかの型式的特徴をそれぞれの文様帯の中で見出すことができる。文様ごとに整理してみよう。

#### 〔胴部上半—口縁部周辺〕

表面の文様の特徴の一つとして、口縁部周辺の施文方向があるので、これを対象にした型式学的分類をおこなう。

##### 格子目文土器

- I 横位施文の土器。
- II 縦位施文の土器。

##### 楕円文土器

- I 横位施文の土器。
- II 縦位施文の土器。

##### 山形文土器

- I 横位施文の土器。
- II 縦位施文の土器。

なお、表面に複数の文様帯がみられる土器がある。その中では、胴部下半と胴部上半に分割される土器がもっとも多い。この場合、口縁部の施文方向に直行するのが胴下半の方向である。

#### 〔口縁部裏面〕

##### 格子目文土器

- A 原体条痕を持つ土器。
- B 横位の格子目文が施された土器。

##### 楕円文土器

- A 原体条痕を持つ土器。
- B 横位の楕円文が施された土器。
- C 無文の土器。

##### 山形文土器

- A 原体条痕を持つ土器。
- B 横位の山形文が施された土器。
- C 無文の土器。

こうした縦割りの土器裏面文様の特徴を、横割りにして型式学的に整理すれば、それぞれの文様の土器は、A、B、Cという種類にまとめなおすことができる。

#### 〔その他の型式的特徴〕

上記二点の他、もう一つの型式的特徴がある。

それは、表面にみられる磨り消し手法である。そこで、これも分類要素の一つとして採用し、施される土器をa、されない土器をbとしよう。

上記三点の型式的特徴を基にして、無田原遺跡出土の押型文土器を分類してみれば、七つの類型にまとめることができる。

一つ目は、口縁部表面周辺が横位施文(I)、裏面が原体条痕(A)、表面に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これをI A b類の土器としよう。格子目文土器2、楕円文土器第86図10・12・13・16・17・19、山形文土器第136図18・19がこれにあたる。

二つ目は、口縁部表面周辺が横位施文(I)、裏面が横位施文(B)、表面に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これをI B b類の土器としよう。楕円文土器28, 39, 41, 42, 56, 第84図8・13・17・18・28・31, 第85図3・10・15・16・20~22・24・26・29・30・34, 山形文土器5, 10, 11, 第134図1~5がこれにあたる。各類型の中でも、比較的出土点数が多い類型である。

三つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II)、裏面が原体条痕(A)、表面に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これをII A b類の土器としよう。楕円文土器13, 17, 第86図11・14・15・18, 山形文土器18がこれにあたる。

四つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II)、裏面が横位条痕(B)、表面に磨り消し手法がみられる(a)土器である。これをII B a類の土器としよう。格子目文土器1と山形文土器6, 第83図18がある。

五つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II)、裏面が横位施文(B)、表面に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これをII B b類の土器とする。楕円文土器1, 3, 5, 10~12, 15, 16, 18, 30, 33, 52, 54, 55, 72~74, 76, 79, 97, 第82図1~5, 7~第83図17, 第84図1~7, 9~12, 14~16, 19~17, 29, 30, 第85図1・2・4~9, 11~14・17~19・23・25・27・28・31~33・35と山形文土器1~4, 7, 9, 12~14, 16, 17, 19~23, 第86図1~9, 第134図6~第136図15がある。無田原遺跡出土の土器の中で、もっとも出土点数が多い類型である。

六つ目は、口縁部表面周辺が横位施文(I)、裏面が無文(C)の土器である。これをIC類の土器としよう。楕円文土器第86図21・22・25、山形文土器第136図20～24がある。

七つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II)、裏面が無文(C)の土器である。これをIIC類の土器としよう。楕円文土器第86図23・25、山形文土器第136図25～31がある。

以上のように、無田原遺跡出土の押型文土器は、IAb類・IBb類・IIAb類・IIBa類・IIBb類・IC類・IIC類という類型に細分される。こうした細分を基にして、次に型式学的検討をおこないたい。

器形からみてみよう。出土した土器の口縁は、ほとんどのものが外反している。また、底部形態は、出土点数が少なく、その実態が判らないが、出土している資料は、丸底が中心で、平底を窺わせる資料も一部存在する。このように、無田原遺跡出土の押型文土器は、口縁が外反する丸底の土器が中心で、一部平底も存在する、という整理が可能である。

次に、表面の文様施文方向をみてみよう。無田原遺跡出土の押型文土器の特徴は、施文方向を違える二つ以上の文様帯に区分可能なことである。また、資料の中には横位施文と縦位施文とを組み合わせたものまで存在する。つまり、中九州東部(大分県)で行われている、土器表面の施文方向を型式表徴の一つとみなした編年研究は、無田原遺跡周辺では不可能だということである。

裏面の文様では、原体条痕と横位施文、そして無文がある。これらをまとめれば、一つにIAb類・IIAb類、一つにIBb類・IIBb類・IIBa類、もう一つにIC類・IIC類として整理できる。先に、表面の施文方向については型式表徴に成りえないことを述べたが、裏面文様では土器間に交錯した状況が見られず、整然とした整理が可能である。従って、これを型式表徴の一つと見なし、それぞれを型式学的に独立した集団としたい。なお、出土土器の数を見てみると、IIBb類がもっとも多く、次にIBb類がくることから、無田原遺跡の押型文土器では、IIBb類とIBb類が主体的で、その他の土器は客

体的であることが判ろう(第226図)。

では、型式学的検討を加えたそれぞれの土器類型は、さて中九州西部の早期編年の中でどの位置にあるのだろうか。次の検討課題としてみよう。

中九州西部では、幾つかの早期遺跡が調査されている。その中で、無田原遺跡近くでは大津町瀬田裏遺跡と同町中後迫遺跡の調査報告書が刊行され、その様相を知ることができる。そこで、ここで出土した土器群について、型式学的検討を加えたいと思う。

瀬田裏遺跡出土の押型文土器は、以下の五類に分類される(第227図)。I類土器は、直口した口縁部で、胴部も直線的である。文様は横位施文の押型文で、表面全面と裏面口縁部に見られるが、中には表面口縁部直下に無文帯が見られるものも存在する。底部は、尖底である。II類は、裏面口縁部に原体条痕と横位施文押型文を併用した文様帯が存在する土器である。胴部から口縁部へと直線的にのびていく。底部は、尖底である。III類は、原体条痕と、横位施文の押型文や撚糸文を併用した文様帯が裏面口縁部に存在する土器である。しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部に特徴がある。尖底と平底の二者が存在する。壺形を呈する注口土器の一部がこの類型に属する。IV類は、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部の土器である。裏面口縁部の文様からaとbの二つに細分される。IVa類は短い原体条痕で、IVb類は横位施文の押型文や撚糸文である。尖底・丸底・平底がある。V類は、裏面口縁部に長く太い原体条痕がみられる土器である。器形は、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部である。底部は、明確ではないが、平底と尖底(注口土器)が存在するだろう。

中後迫遺跡では、出土した押型文土器を四類に分類できる(第227図)。I類土器は、表面と裏面口縁部に施文される土器で、胴部から口縁部へ直線的に開くという器形をとる。底部は、尖底であろう。II類は、裏面口縁部の文様帯に原体条痕と横位施文押型文を施される。尖底から胴部、そして口縁部へと直線的に開いていく。III類は、原体条痕と、横位施文の押型文や撚糸文が裏面口縁部に施される土器である。器形は、しゃくれながら外反する口縁部と丸

みを帯びる胴部に特徴がある。尖底と平底がある。IV類は、しゃくれた外反口縁と丸みを帯びる胴部の土器である。裏面口縁部の文様からaとbの二つに細分される。IV a類は短い原体条痕で、IV b類は横位施文の押型文や捺糸文である。丸底と平底があるようだ。

以上、二つの遺跡の押型文土器を検討してきたので、今度はそれぞれの遺跡で分類されたそれぞれの類型を、その型式表徴を基にして比較してみよう。そうすれば、瀬田裏遺跡I類と中後迫遺跡I類、瀬田裏遺跡II類と中後迫遺跡II類、瀬田裏遺跡III類と中後迫遺跡III類、瀬田裏遺跡IV a類と中後迫遺跡IV a類、瀬田裏遺跡IV b類と中後迫遺跡IV b類という対応関係が見て取れる。そこで、この二つの遺跡で対応させた各類型の土器を、それぞれI類・II類・III類・IV a類・IV b類・V類と呼ぶことにしよう(第227図)。では、このI類からV類の土器は、それぞれの様な型式的関係にあるのだろうか。そこで、洞穴遺跡の調査成果を援用することによって、押型文土器編年研究が進んでいる中九州東部(大分県)との型式学的な比較をおこないたいと思う。

中九州東部での押型文土器編年は、「①川原田式→②稲荷山式→③早水台式→④下菅生B式→⑤田村式→⑥ヤトコロ式」である。その型式的特徴を組列化すれば、「①直口口縁・尖底・表裏面横位帯状施文→②直口口縁・尖底・表裏面横位施文→③直口口縁・尖底・表面横位施文で裏面原体条痕+横位施文→④外反口縁・尖底・表面縦位施文で裏面原体条痕(短い)+横位施文→⑤外反口縁・丸底・表面縦位施文で裏面原体条痕(長大)→⑥外反口縁・平底・表面縦位施文・裏面横位施文」ということになる。こうして整理した結果を参考にして、瀬田裏遺跡と中後迫遺跡で認識した各類型の土器をそれぞれの土器型式に対比していこう。


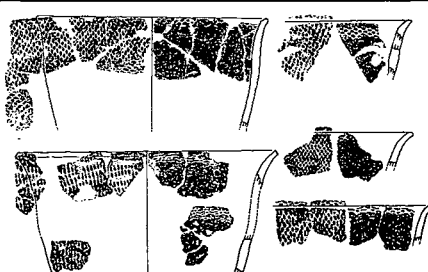


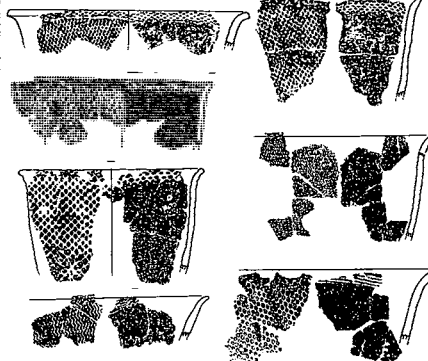

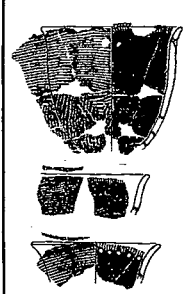

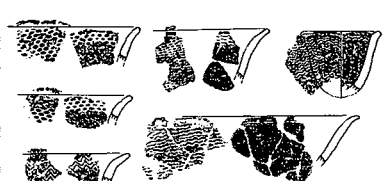


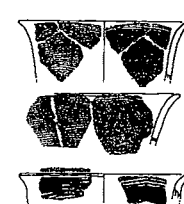
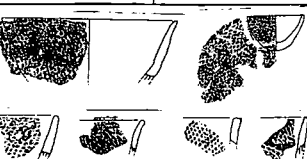
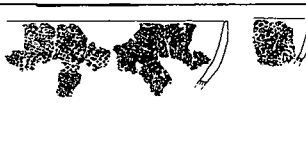

I類土器は、直口口縁で尖底という器形をとり、表面と裏面口縁部に押型文が施される土器である。この特徴から、稲荷山式土器に近い土器であることが判る。II類土器は、裏面口縁部の原体条痕と横位施文押型文と直口口縁、そして、尖底という特徴がある。このことから、早水台式土器に対応する土器

のようだ。第III類は、原体条痕と横位施文押型文が裏面口縁部に施される土器で、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部という器形に特徴がある。これは、下菅生B式土器に見られる特徴である。IV類は、しゃくれた外反口縁と丸みを帯びる胴部の土器で、裏面口縁部の文様が、短い原体条痕(IV a)と横位施文押型文(IV b)がある。この特徴を示す土器型式は、中九州東部では見当たらず、中九州西部独特の土器型式の一つとして注意が必要である。おそらく、下菅生B式土器の裏面口縁部文様である原体条痕と横位施文押型文がそれぞれ独立した結果の土器であろうから、下菅生B式土器の次の段階以降ということになる。V類は、裏面口縁部に長く太い原体条痕がみられる土器で、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部という器形をとる。これは田村式土器の特徴である。したがって、編年的には下菅生B式土器の後に置かれるIV類とV類とは、時期的に一時併存するはずである。

以上、中九州東部の土器型式と瀬田裏遺跡と中後迫遺跡で認識した各類型とを対比してきた。その結果、この両遺跡には、稲荷山式土器以降の各土器型式が見られることが判り、しかも「I類→II類→III類→IV類・V類」という変遷を示すことが類推できた。また、現状で見るかぎり、中九州西部では川原田式土器に対応する土器は見つかっていないので、中九州西部での押型文土器の使用開始は、稲荷山式土器の段階ということも明らかになった。こうした結果を踏まえて、再び、無田原遺跡の土器に立ち戻り、その位置付けを考えてみたい。

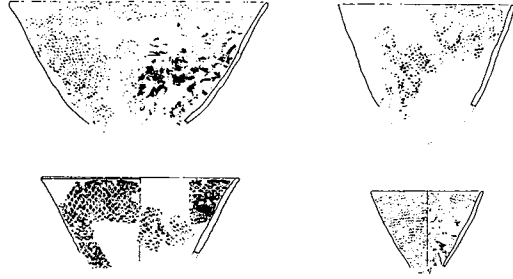

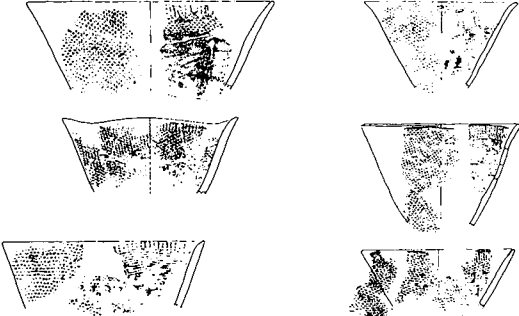
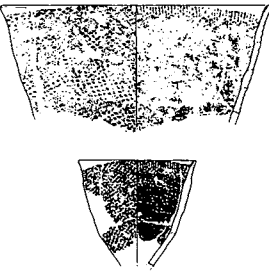
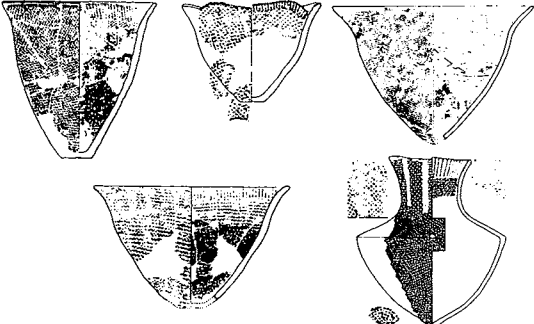

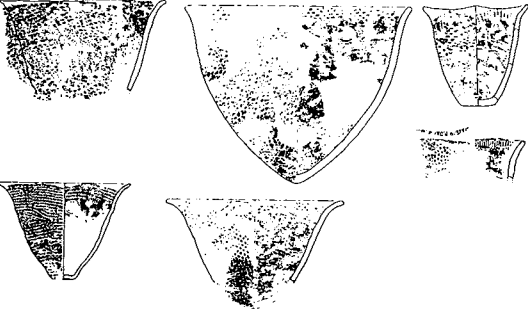
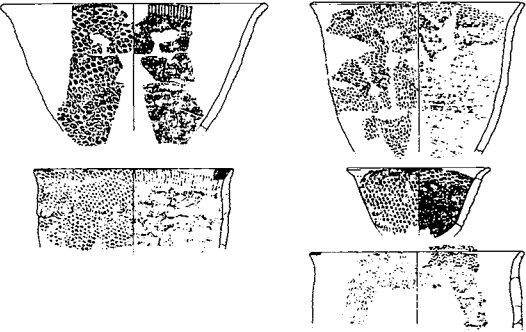

無田原遺跡では、I A b類・II A b類とI B b類・II B b類・II B a類、そしてI C類・II C類という三つの群に整理される押型文土器が出土している。一部を除けばほとんどのものが外反する口縁で、頸部がわずかにくびれ、胴部では丸みを持つという器形である。裏面口縁部の文様は、原体条痕(A)と横位施文押型文(B)が中心である。つまり、これは、上記してきたI類からV類の中のIV a類やIV b類の特徴なのである。しかも、裏面口縁部文様からは、IV a類とI A b類・II A b類が、IV b類とI B b類・II B b類・II B a類がそれぞれ対応するので

2. 沈目式土器と石清水式土器

	捺糸文・条痕	押型文		捺糸文・条痕
		A	B	
口縁縦位施文				
縦横複合				
口縁横位施文			 沈目式土器  石清水式土器 	
裏面口縁無文				
その他				

第226図 無田原遺跡出土押型文土器の諸類型



瀬田裏遺跡		中後迫遺跡
	I 類 土 器	
	II 類 土 器	
	III 類 土 器	
	IV 類 土 器	
	V 類 土 器	

第227図 瀬田裏遺跡・中後迫遺跡出土押型文土器の類型

2. 沈目式土器と石清水式土器

ある。ここによろやく、無田原遺跡出土の押型文土器が、瀬田裏・中後迫の両遺跡のIV類の段階、すなわち中九州東部編年の中で田村式土器以降という編年的位置が明らかにできた。

こうした結果を受けて、最後に中九州西部の押型文土器の編年を予察してみよう。

先にも述べておいたが、これまでのところ、中九州西部では帯状施文押型文土器の出土例が無い。したがって、本地域における押型文土器の最古型式は稲荷山式土器であるようだ。つまり、本地域へ最初に伝わった押型文土器は、稲荷山式土器であった可能性が高いのである。そして、本地域では、しばらくの間、中九州東部の型式変遷の動態に連動する形で、早水台式土器そして下菅生B式土器に対応する土器が使われていった。しかし、こうした中九州東

部に連動した型式変遷とはいっても、それぞれの土器の特徴が完全に合致するというわけではない。それは、土器表面の施文方向に違いがあるからだ。例えば、中九州東部の土器は、稲荷山式土器と早水台式土器が横位施文、下菅生B式土器は縦位施文という厳格な施文原理が存在するのに対して、西部では両者が存在したり、また同一器面の中で併用されているものまである。つまり、こうした状況を周辺地域における施文原理の曖昧化からくる地域性として認識すれば、別に器面の施文方向を中九州西部での型式表徴としなくてもいいことが判る。したがって、今回は、器形や裏面口縁部文様を型式表徴として採用し、その動態を中九州東部との対比の中で明らかにしようとしたのである。その結果、中九州西部にあっても、「稲荷山式→早水台式→下菅生B式」とい



第228図 沈目式土器(左)と石清水式土器(右)の標式土器

う型式変遷を認め、その型式名を準用することがより実態にあった方法と判断した。

さて、次の時期、田村式土器の段階は、どうか。私は、この段階になって初めて、中九州西部の独自性が出てくると考えた。それは、瀬田裏遺跡や中後迫遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類の存在から、そう判断したのである。そうはいつても、瀬田裏遺跡では、V類とした土器、田村式土器が出土しているのも事実である。ただし、その出土の仕方は、あくまでも客体的であり、IV類土器の状況とは大きく異なっている。これは、すなわち、中九州西部においては田村式土器が一つの時期を代表する存在でなく、あくまでも移入系の土器であることを示しているのではないかと考えたのだ。要するに、瀬田裏遺跡や中後迫遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類が中九州西部の独自の土器であり、この時期に東部方面から田村式土器が移入してきたということであろう。ここに、瀬田裏遺跡や中後迫遺跡のIV a類とIV b類や無田原遺跡のI A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類を対象として、新たな土器型式を中九州西部地域に設定する必要が出てきた。

そこで、思い浮かぶのが、石清水式土器(小林1936)や沈目式土器(小林1957, 三島1965, 乙益1967)という土器型式である。これらが、先に提起した「新たな土器型式」になりえないか、みてる必要があるだろう。

「沈目式土器」は、小林久雄氏が設定した土器型式である。小林氏は、城南町沈目周辺で採集した資料を1934年～1939年に紹介し、その後、1957年に型式名を活字で公表した。また、三島格氏は、「城南町史」(1957)の中で、「器形は、底部が平底をなし、口縁がやや外反し、器面に山形・穀粒文(楕円文)・格子目文・条痕文の押捺が施されたもの」という説明をおこなった。そこで、小林氏によって提示された土器の実測図を検討してみよう。多くのものが外反する口縁で、裏面には原体条痕のみのものと押型文横位施文のみのものがあることがわかる(第228図)。この特徴は、瀬田裏遺跡や中後迫遺跡IV a類と

IV b類や無田原遺跡I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類と合致する。つまり、古くに設定された「沈目式土器」の存在が、「新たな土器型式」として、にわかに浮かび上がるのである。

次に、「沈目式土器」と共に、古くに設定された土器型式の「石清水式土器」をみてみよう。高田素次氏が1935年に人吉市石清水遺跡で発見し、小林久雄氏が1939年に紹介した土器である。「口縁に近く環行する横直線がある外は、口縁より底部に至るまで一面に山形連続文が施され、内面にも口縁に近い部分に同種文様が附せられ」、「形態は稍大きな深鉢形で口縁は外曲し、胴部には上下二箇所膨みがあり、底部は平底で上げ底になつてゐる」という説明があった。提示された土器の実測図では、上下二箇所が膨らんだ円筒形の土器であるが、近年、松舟博満氏によって復元がおこなわれ、その結果、膨らんだ胴部、ややしまった頸部と外反する口縁部という器形であることが判った(第228図)。文様は、表面で縦に近い斜位山形文、裏面口縁部で横位山形文である。器形と裏面口縁部の施文状況をみれば、これも瀬田裏遺跡や中後迫遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類に近似することが判る。ただし、底部が上げ底であり、押型文が間のびしている点からは、手向山式土器に近い特徴も備えていることには注意が必要である。

以上のように、各型式設定時点で提示されていた資料とその説明を勘案すれば、今回、「新たな土器型式の設定」を意識させた、瀬田裏遺跡や中後迫遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類は、上記二つの土器型式に近似していることが判る。そこで、この二つをもって、下菅生B式土器の次にくる土器型式と認めよう。しかも、石清水式土器は、その文様の特徴や上げ底をなす平底という点で、手向山式土器に近い型式的特徴を示しており、沈目式土器よりも後出の土器型式と考えて差し支えないだろう。なお、今回報告した無田原遺跡では、沈目式土器の他、石清水式土器に属する資料も出土している。例えば、器形が明確なものは格子目文土器1のみであるが、この他に原体の彫り込みが浅く、間のびした文様の土

### 3. 石器組成から見る食物獲得活動の特徴

第5表 早期前半編年表

	中九州東部	中九州西部	南九州西部
早期前半	政所式	中原式	前平式
	川原田式		
	稲荷山式	稲荷山式	
	早水台式	早水台式	知覧式
	下菅生B式	下菅生B式	吉田式 倉園B式
	田村式	沈目式	石坂式 下剝峰式 (押型文土器)
	ヤトコロ式	石清水式	手向山式 桑ノ丸式
	大分県編年	木崎編年(1995)	新東編年(1992)

器がそれにあたろう。また、類手向山式土器として第III章で報告している屈曲胴部を持たない土器も、この型式に属するものであろう。

このように、中九州西部地域の押型文土器は、「稲荷山式→早水台式→下菅生B式→沈目式土器→石清水式土器」という変遷を示すことが判った。これを編年表として提示し、併せて、中九州東部と南九州西部との編年対比を試みている(第5表)。

なお、ここでは言及しなかった土器として、撚糸文土器・条痕土器・無文土器がある。こうした土器もまた、型式学的研究をおこなうことによって、編年的な検討が可能となろう。ただし、今回は時間的な制約があって、ここまで検討範囲を広げられなかった。そうはいつても、こうした問題を解決することが、編年研究が遅れている中九州西部地域の現状を打破することでもある。今後、こうした方面までも検討の対象にする機会が必要であろう。

### 3. 石器組成から見る食物獲得活動の特徴

無田原遺跡における縄文時代早期の石器組成についてみてみよう。関係資料310点の中、石鏃11点、尖頭器1点、尖頭石器6点、削器14点、抉入石器1点、石錐1点、楔形石器5点、打製石斧1点、石錘4点、有溝砥石1点、磨石・敲石14点、石皿・台石4点、

二次加工ある不定形石器10点、使用痕ある剥片10点、石製品4点、石核21点、剥片・碎片202点という内訳であった。これをそれぞれの活動の種類ごとに区分してみたい。

狩猟・漁撈具は、石鏃、尖頭器、尖頭石器、石錘がそれである。出土点数は22点で、石器の中に占める割合は27%で、狩猟具のみでは22%である。

植物食処理具は、磨石・敲石と石皿・台石である。出土点数は18点で、石器の中では22%という割合である。

解体・工作具は、豊富である。その該当石器には、削器、抉入石器、石錐、楔形石器、打製石斧、有溝砥石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片がある。出土点数は43点で、石器組成の中に占める割合は、51%である。なお、こうした石器も、その用途別にさらに区分されるかもしれない。例えば、解体調理と工作は、その区分原理としてもっとも考え易いものである。ただし、ここではそこまで突っ込んだ検討をする訳ではないので、一括して処理している。

祭祀関係の道具は石製品である。4点が出土している。

さて、無田原遺跡での生産活動を問題にする時、狩猟・漁撈活動と植物食獲得活動の比率を石器組成

の中から読み取ろうとすることが良く行われている(米倉1984, 柴畑1991)。おそらく、通常の遺跡では、こうした分析をおこなわざるを得ないだろうが、問題も多いことを認識しなければならない。

一つ目は、狩猟・漁撈具を使用する場と、植物食加工具を使用する場が異なっているということである。つまり、本来、集落内で使用されるものと、集落外で使用されるものを、集落遺跡内で比較するには問題が多いということである。また、併せて、一つの石鎌と一つの磨石・敲石とでは、使用回数が異なることである。従って、出土数の比較にはこの問題点も認識しておこなう必要がある。

二つ目は、通常の遺跡に残された石器のみでは、植物食獲得活動の多様性を認識できないことである。つまり、磨石・敲石や石皿・台石は、堅果類の処理に使われるだけであり、植物食の対象はもっとも多様なはずである。要するに、集落内から出土する植物食関係の石器は、当時の植物食のほんの一面を表しているにすぎないということである。

以上の問題点を認識した上で、これからの検討をおこなっていくことにしよう。

無田原遺跡では、出土石器点数は少ないが、多様な種類の石器が出土している。その活動別の集約は、前記しているとおりだが、その中で、狩猟・漁撈活動具と植物食処理具を問題にしてみよう。そうすれば、それぞれ27% (狩猟のみでは22%) と22%というように、お互いが拮抗した関係で存在していることがわかる。

次に、近隣の遺跡をみてみよう。

大津町中後迫遺跡では、狩猟・漁撈具と植物食処理具とが石器組成の中で占める比率は、それぞれ46%と43%である。いずれの道具も石器組成内では数値として高いデータであるが、二次加工ある不定形石器や使用痕ある剥片が含まれていない関係からだろう。同町瀬田裏遺跡では、はっきりした数量のデータが示されていないので、出土点数で比較しておこう。それぞれ331点と259点である。明確な比較は、このとおり定かでないが、無田原遺跡や中後迫遺跡と同じ傾向の可能性が高い。益城町櫛島遺跡では、それぞれ22%と17%である。いずれも狩猟(・

漁撈) 具が植物処理具をわずかに上回るが、ほぼ拮抗するという、無田原遺跡でみられるような傾向を見て取ることができるようだ。

次に、調査が進んでいる熊本県南部の人吉盆地に目を転じてみよう。山江村狸谷遺跡では、狩猟(・漁撈) 具が24%、植物食処理具46%である。同村大丸・藤ノ迫遺跡では、27%と41%である。人吉市白鳥平A遺跡では、16%と71%である。同市白鳥平B遺跡では、20%と40%である。また、同市天道ヶ尾遺跡では、12%と44%である。このように、人吉盆地の遺跡では、軒並み、植物食処理具が狩猟(・漁撈) 具を倍以上上回る出土率を示している。つまり、無田原遺跡周辺での石器組成とは大きく異なる様相なのである。

では、無田原遺跡周辺の石器組成と人吉盆地の石器組成とが異なる様相を呈しているのは、なぜなのだろうか。この問題が整理できれば、無田原遺跡での人びとの生活における、食物獲得活動の特徴が明らかにできるかもしれないし、そうでなくとも、ある程度の子察が可能かもしれない。

無田原遺跡では、狩猟・漁撈具が植物食処理具をわずかに上回ってはいるが、ほぼ拮抗した比率で存在していた。これは、表面的にはこの両者が背景となった食物獲得活動が平均的に行われていたという理解に結びつきそうである。ただし、問題は、先に指摘しておいたように、それぞれの道具を使用する場が異なったり、それぞれの石器では使用回数が違っているということである。こうした点を勘案すれば、集落外で使用され、しかも石器一個の使用回数が少ない道具—石鎌については、現有の比率よりも少し膨らませて考える必要があろう。つまり、無田原遺跡での狩猟・漁撈具と植物食処理具との比率は、 $27+a\%$  (狩猟のみでは22%) 対22%ということである。要するに、無田原遺跡での食物獲得は、狩猟・漁撈が中心であったということになろうか。ただし、問題点でも指摘しておいたように、植物食の一面しか示されていない道具でもあるので、厳密には、狩猟・漁撈活動が堅果類採集活動に勝っていたという表現が適切である。そして、無田原遺跡周辺の遺跡では、同じ石器組成の特徴を持っていることから、こ

#### 4. 無田原遺跡の石製品が語るもの

の地域一帯では、上記した表現の生活がおこなわれていたことを予想させてくれるだろう。

これに対して、人吉盆地の遺跡では、狩猟・漁撈具と植物食処理具の比率で、植物食処理具の方が倍以上の出現率である。これを無田原遺跡の石器組成で検討したような方法で考えてみると、狸谷遺跡では $24+\alpha\%$ 対 $46\%$ 、大丸・藤ノ迫遺跡では $27+\alpha\%$ 対 $41\%$ 、白鳥平A遺跡では $16+\alpha\%$ 対 $71\%$ 、白鳥平B遺跡では $20+\alpha\%$ 対 $40\%$ 、そして、天道ヶ尾遺跡では $12+\alpha\%$ 対 $44\%$ という比率関係である。つまり、白鳥平A遺跡を除けば、二つの活動は見かけよりも拮抗した状況にあるようだ。つまり、人吉盆地内での食物獲得活動は、狩猟（・漁撈）活動と堅果類採集活動とを並立させた形態のものであった可能性が高い。

以上のように、可能性として、無田原遺跡周辺では狩猟・漁撈活動が堅果類採集活動を凌いでいた生活形態であったのに対して、人吉盆地内では狩猟（・漁撈）活動と堅果類採集活動とを並立させた生活形態であった。仮に、こうした想定が可能であるとするならば、この二つの生活形態の差は、何に起因しているのだろうか。三つの起因要素を考えてみたい。

一つに、人吉盆地内の遺跡では、より定住性の強い集団が生活を営んでいた可能性が高いだろう。それは、堅果類採集活動の割合が高いという点からそういえようし、石皿・台石の出土量の多さもこのことを傍証しているようである。これに対して、無田原遺跡では、堅果類採集活動の割合が低く、必然的に遊動性が高いということが考えられようか。

二つに、季節的に生活圏が変更された可能性がある。例えば、人吉盆地では、狩猟活動や堅果類採集・処理活動といった秋から冬までの活動が行われる遺跡が多く、無田原遺跡周辺では狩猟・漁撈といったように冬から春にかけての活動がおこなわれていたというのである。中九州西部における当時の人びとの生活圏がどれくらいの範囲にあったかは現時点では判らないが、数10kmという単位で、生活圏の変更を季節的な移動としておこなっていた、その結果の可能性もある。

三つは、植生の違いが考えられよう。安田喜憲氏復元による9000年前の植生図（安田1980, 1982）を

参考にすれば、無田原遺跡周辺は冷温帯落葉広葉樹林と照葉樹林との境付近で、人吉盆地は冷温帯落葉広葉樹林の中にあっていた。

冷温帯落葉広葉樹林が広がっていた人吉盆地に住んでいた人びとは、クルミ・トチノキ・ハシバミ・ミズナラなどの堅果類が多く採集できた。また、その森林帯の南限でもあり、暖温帯落葉広葉樹林のコナラ・クリなども見られたかもしれない。つまり、当時の人吉盆地は、植物質食料の宝庫であった。これに対して、無田原遺跡周辺は、冷温帯落葉広葉樹林と照葉樹林の境付近にあるという関係上、木の実の採れ高は人吉盆地内よりも少なかったはずである。堅果類採集活動が低調な生活形態を示す無田原遺跡周辺と、狩猟（・漁撈）活動と堅果類採集活動とを並立させた生活形態の人吉盆地とは、こうした植生の違いを反映していたのかもしれない。

要するに、無田原遺跡の石器組成を通して当時の人びとの食物獲得活動の特徴は、上記した三つの起因要素を絡めることによって理解できるだろう。ここでは、そういう可能性を想定しておきたい。

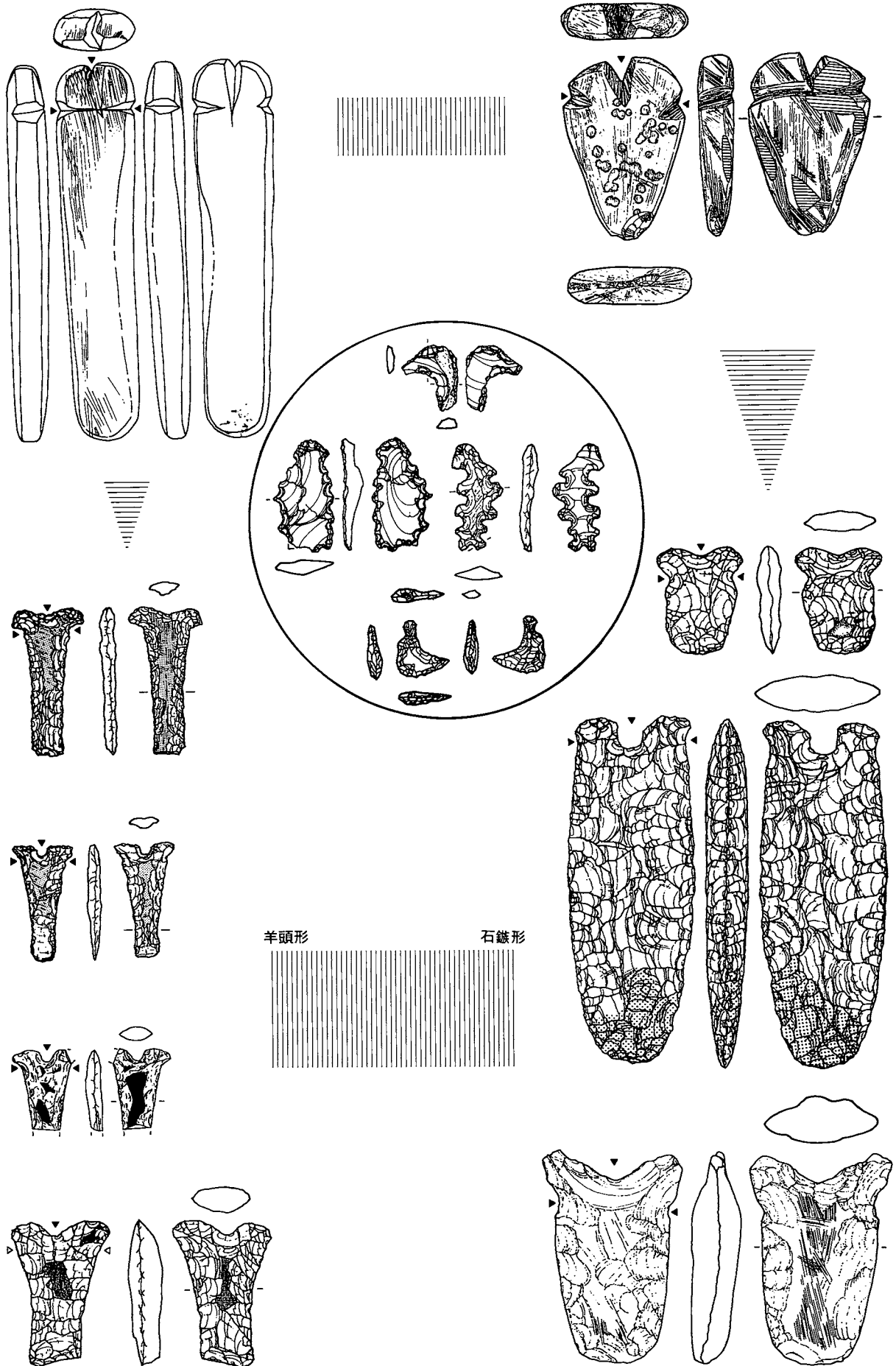
#### 4. 無田原遺跡の石製品が語るもの—縄文時代早期の祭祀行為の一側面—

仮に、前項で述べたように、冬から春にかけての生活空間として無田原遺跡があったとするならば、今回出土した石製品には、当時の祭祀の一側面を語らせることができるだろう。

無田原遺跡では、4点の石製品が出土している。その種類は、男性器形石製品、磨製異形石製品、剥片製異形石製品であった。再度、これらの資料をとり上げてみよう。

男性器形石製品は、文字通り、男性の性器をかたどった石製品である。棒状の扁平な砂岩礫を使用し、その先端近くに横位の刻みを巡らし、同じ刻みを先端に縦位に入れた作りである。その形から、非日常品であり、しかも祭祀に関係する物と推定される。

ところで、これに類した石製品を出した遺跡が無田原遺跡の近くにある。それは、大津町瀬田裏遺跡である。ここでは、無田原遺跡のものよりも幅広く寸詰まりであるが、その作りではよく類似している。



第229圖 男性器形石製品・磨製異形石製品・剝片製異形石製品

#### 4. 無田原遺跡の石製品が語るもの

しかもこの遺跡では、18点に及ぶ磨製異形石製品も一緒に出土している。この様相は、出土数や形態的多様性を除けば、磨製異形石製品が出土した無田原遺跡と同じであった。

磨製異形石製品は、「トロトロ石器」とか「異形局部磨製石器」とか「異形部分磨製石器」とか呼ばれるものである。形状の特徴は、角状の突起を持つ「脚部」と尖らない「先端部」にある。なお、突起状の「脚」作り出しには、素材の長軸上の一端とその両側縁とに施される抉入加工を特徴とする。分布は西日本を中心にひろがり、押型文土器の段階という限られた時期の物であることが明らかになっている（岡本1983）。ただし、その機能は不明で、何らかの加工具であるという認識が一般的である。

さて、ここで問題にしたいのは、男性器形石製品と磨製異形石製品との形状的類似性である。例えば、瀬田裏遺跡の男性器形石製品は、石鏃形の磨製異形石製品と類似性があり、無田原遺跡の男性器形石製品は、瀬田裏遺跡で出土した羊頭形の磨製異形石製品と類似性があるようだ（第229図）。そして、その形状的類似性は、それぞれの石製品の製作技術によって導き出されている。例えば、磨製異形石製品では、特徴となる「脚部」作り出しの為に、長軸上の一端とその両側縁に抉入加工が施され、男性器形石製品では上端と両側縁の上端近くにV字状の削り込みが施されて作られている。つまり、二つの石製品とも、一端とその両側縁に抉り入りが加えられているのである。その結果、それぞれのシルエットが類似するようになるのだろう。

このことから、私は、この二つの石製品が実は同じ性格のものであった、ということをも主張したいのである。つまり、これまで、トロトロ石器と愛称される磨製異形石製品は、男性器形石製品と同じものであり、男性器をかたどった祭祀具であったと推定するのである。

では、この石器は、どのような祭祀に使われた道具だったのだろうか。それを想像することはなかなか困難な事であるが、それら二つの石製品が、男性器をデフォルメしたものであることから、男性にかかわる祭祀に使われていた可能性がもっとも高いと

想像される。さらに、男性が関与する活動を考えてみれば、狩猟活動が挙げられる。すなわち、男性器形石製品や磨製異形石製品は、狩猟活動にかかわる祭祀具として使用されていたのではなかろうかと、私は考えたいのである。仮に、こうした想像が許されるとするならば、遺跡から一緒に出土している、剥片製異形石製品も、鳥か獣の頭をかたどったものや鋸歯状に加工して何かを表現したものであり、男性器形石製品や磨製異形石製品とセットとなる祭祀具ということになるだろうか。

先に、無田原遺跡は、冬から春にかけての生活空間だったのではないかと想像した。こうした想像と、前記してきた男性器形石製品・磨製異形石製品、並びに剥片製異形石製品を使った祭祀とを考え併せれば、この狩猟祭祀が冬から春にかけて行われていたことが推定できるし、冬の終わり、春先に狩猟を終える頃の祭祀であったと想像できそうだ。

次に、男性器形石製品・石鏃形や羊頭形の磨製異形石製品という多様性を県内遺跡の出土例ごとに整理してみよう。県内では、舞ノ原遺跡・中後迫遺跡・柿迫遺跡・山口遺跡・無田原遺跡・瀬田裏遺跡・摺尾遺跡・狸谷遺跡で検出されている。無田原遺跡では、男性器形石製品と石鏃形の磨製異形石製品が出土している。瀬田裏遺跡では男性器形石製品・石鏃形や羊頭形の磨製異形石製品が出土している。そして、他の遺跡では、すべて石鏃形の磨製異形石製品である。

では、こうした様相の違いが遺跡毎にどうして現れるのだろうか。これを理解するためには、様相の時間的な変遷を想定することがもっとも容易な方法であろう。つまり、原型となったものがあり、以後デフォルメの度合いを増しながら移り変わっていくという想定である。こうした想定に従う時、男性器形石製品を使って行われていたもの（無田原遺跡・瀬田裏遺跡）が、その後、石鏃形や羊頭形の磨製異形石製品に変容し（瀬田裏遺跡）、さらに石鏃形の磨製異形石製品に収斂していく（その他の遺跡）という祭祀行為の変容過程がもっとも考え易い。

こうした変容過程を通して、全国的なレベルで考えてみれば、県外のすべてが石鏃形の磨製異形石製



品に収斂していった段階のものであることが判る。とすれば、中九州西部地域の阿蘇外輪山西麓で行われていた男性器形石製品を使った祭祀行為が、この地域で変容しつつ、しだいに九州一円、さらには東方へと伝えられていった可能性も否定できない。まさにそれは、縄文時代早期の後半期に次々におこった南九州土器文化の九州外流出現象の一波と連動したものであったはずである。

以上、無田原遺跡で出土した男性器形石製品と磨製異形石製品を通して、その祭祀行為の実際、その時期的な変容過程と他地域への拡大という観点で想像してきた。祭祀遺物があまり多くない縄文時代早期にあって、今回出土した資料は貴重であり、その意味を考えることは重要な作業でもある。また、西日本を中心にして広がっている磨製異形石製品（トロトロ石器）をそうした観点で見て、その出自を中九州西部地域の阿蘇外輪山西麓に求めたことも、初めての試みではないかと思う。こうしたことについては、さらに資料の積み上げが必要だし、特に出自問題は、土器編年の地域外対比が不可欠な作業として残されている。そういう意味では、今回の解釈は、今後の課題としての一つの見通しを述べたにすぎない。

## 参 考 文 献

- 岩永哲夫 1988 「九州東南部における縄文早期遺跡の概観——出土土器を中心にして——」『宮崎県総合博物館研究紀要』No.13
- 岡本東三 1983 「トトロ石器考」『人間・遺跡・遺物——わが考古学論集1』
- 緒方 勉 1975 「櫛島遺跡」『久保遺跡』所収 熊本県教育委員会
- 緒方 勉 1992 『瀬田裏遺跡調査報告資料I』 熊本県大津町教育委員会
- 乙益重隆 1967 「九州西北部」『日本の考古学』II縄文時代
- 賀川光夫 1967 「九州東南部」『日本の考古学』II縄文時代
- 木崎康弘・隈昭志・中原由子 1986 『大丸・藤ノ迫遺跡』 熊本県教育委員会
- 木崎康弘・隈昭志 1987 『狸谷遺跡』 熊本県教育委員会
- 小林久雄 1934 「所謂楕円捺型文土器に就いて」『考古学』第5巻第6号
- 小林久雄 1939 「九州の縄文土器」『先史学・人類学講座』11
- 小林久雄 1957 「沈日式土器」『城南町公民館報』第23号
- 小林久雄 1967 『九州縄文土器の研究』
- 後藤一重ほか 1981 「下菅生B式遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡VI』大分県竹田市教育委員会
- 坂本嘉弘 1973 「縄文時代の発展」『大分県史』
- 新東晃一 1992 「島嶼の縄文早期土器の様相」『南九州縄文通信』No.6
- 縄文研究会編 1984 『九州の押型文土器——地名表・拓影編』
- 多々良友博ほか 1984 『金立開拓遺跡』 佐賀県教育委員会
- 高橋信武 1988 「縄文時代の集落——九州における研究の現状」『おおいた考古』第1集
- 高田素次 1986 『しらがね帖』
- 橋 昌信 1984 『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学
- 富田鉦一 1988 「原始・古代」『大津町史』熊本県大津町
- 西住欣一郎 1990 『天道ヶ尾遺跡』熊本県教育委員会
- 古森政次・島津義昭 1994 『ワクト石遺跡』熊本県教育委員会
- 永松幸男 1984 「押型文土器にみられる様相の変化について」『古文化談叢』第13集
- 松村道博・勢田広行・瀬丸敬二 1978 『中後迫遺跡調査報告書』中後迫遺跡調査団
- 三島 格 1965 「原始」『城南町史』熊本県城南町
- 御堂島 正・上本進二 1987 「遺物の水平・垂直移動——周水河作用の影響に関する実験的研究——」『神奈川考古』第23号
- 宮坂孝宏 1983 『白鳥平A遺跡』熊本県教育委員会
- 宮坂孝宏 1984 『白鳥平B遺跡』熊本県教育委員会
- 安田喜憲 1980 『環境考古学事始 日本列島の二万年』
- 安田喜憲 1982 「気候変動」『縄文文化の研究』1 縄文人とその環境
- 山崎純男・小畑弘己 1983 『柏原遺跡群I』福岡市教育委員会
- 山崎純男・平川祐介 1986 「九州の押型文土器」『考古学ジャーナル』第267号
- 米倉秀紀 1983 「縄文時代早期の生業と集団活動」『文学部論叢』第13号 熊本大学
- 柴畑光博 1991 「南九州における鬼界カルデラ爆発後の遺跡」『南九州縄文通信』No.5
- 柴畑光博・上田耕・雨宮瑞生 1994 「貝殻円筒形土器と押型紋土器の関係——宮崎・鹿児島両県における出土状況の検討——」『南九州縄文通信』No.7

## 報告書抄録

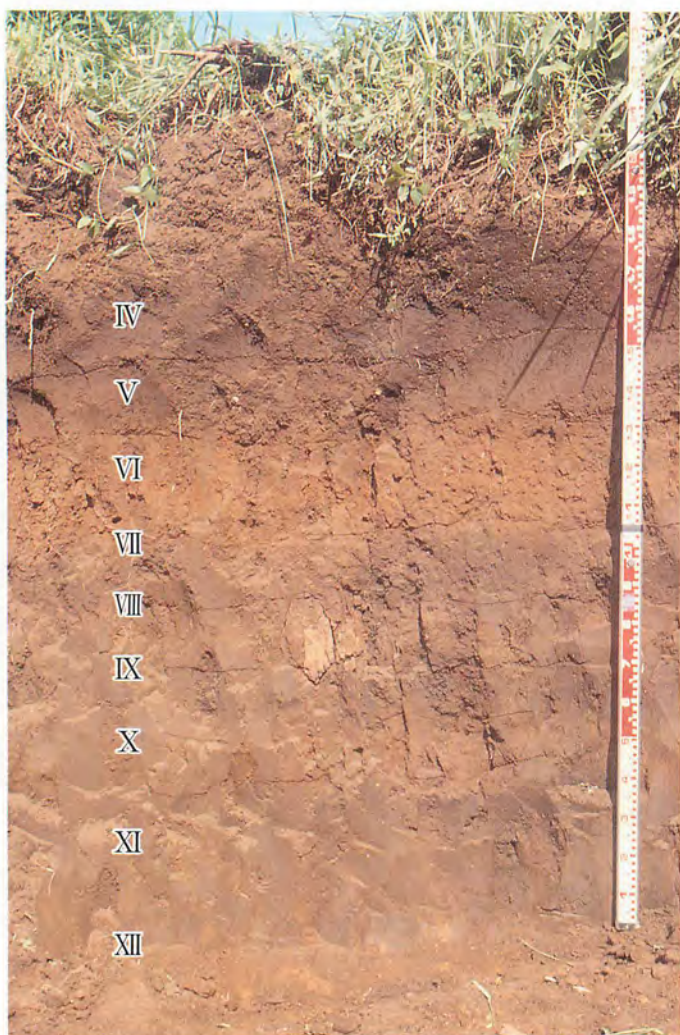
ふりがな	むたばるいせき							
書名	無田原遺跡							
副書名	県営農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ号	第148集							
編著者名	木崎康弘							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号							
発行年月日	1995年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
無田原遺跡	菊池郡旭志 村麓馬糞塚	434027		32° 55'31"	130° 52'58"	198707  198803	5,000 m <sup>2</sup>	農業関連
主な時代	種別	主な遺構	主な土器	主な石器他		特記事項		
先土器時代 縄文時代草創期 早期	集落 集落 集落	炉穴2・集石3	爪形文土器 押型文土器他	剥片・碎片2  石鏃・尖頭器他 石製品		熊本県北部では、初めての資料  石製品として、男性器形石製品や磨 製異形石製品などが出土したが、こ れを使用した当時の祭祀行為の復 元が可能となった。		
弥生時代前期	集落		土器	石製品2				

# 圖 版









1. 土層堆積状況



2. 先土器時代の調査状況



図版 3



1. 1号集石



2. 1号集石



3. 1号炉穴検出状況





1. 1号炉穴土层断面



2. 2号炉穴检出状况



3. 2号炉穴烧土露出状况





1. 調査風景

2. 遺物出土状況





1. 遺物出土状況
2. 調査区から阿蘇外輪山をのぞむ

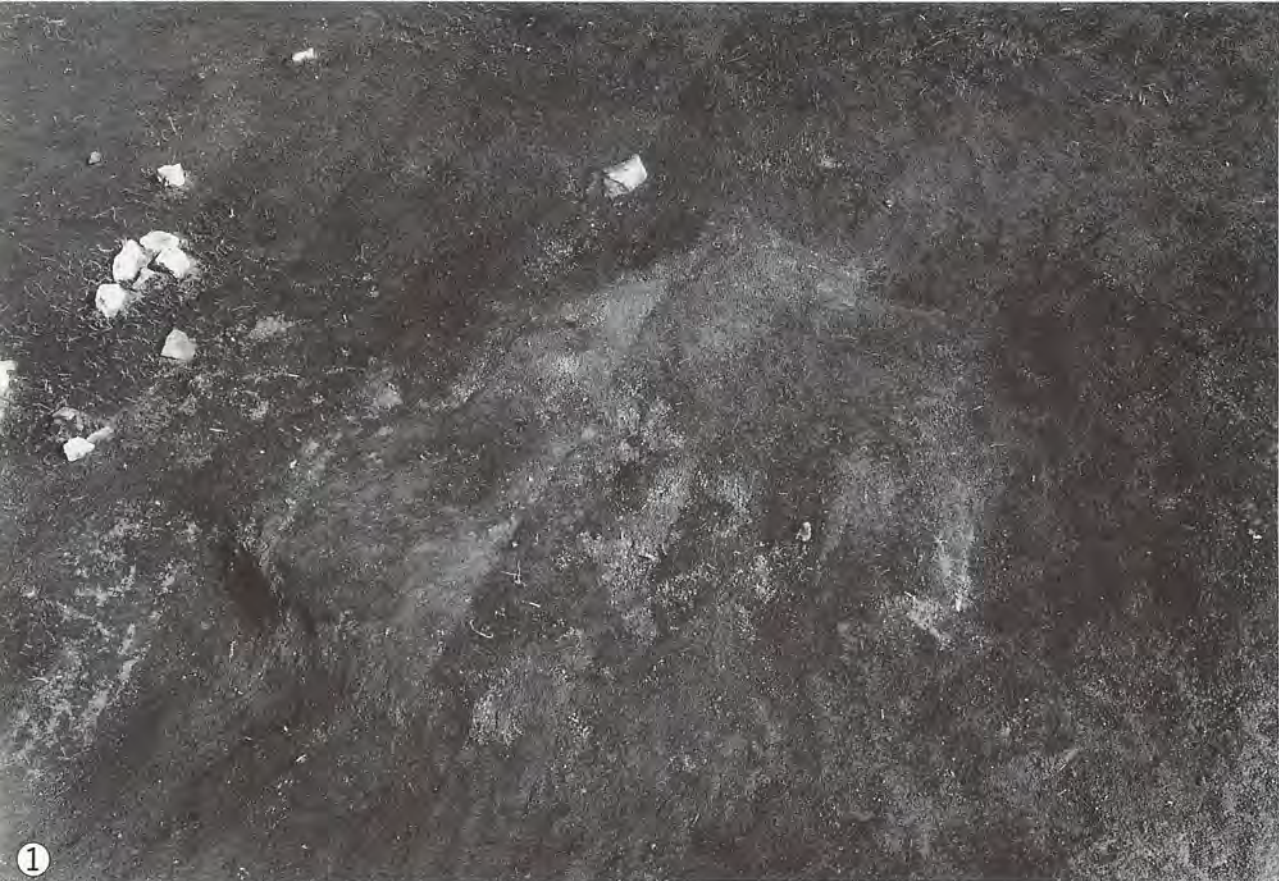


図版 7



1. 調査区から阿蘇外輪山をのぞむ
2. 1号炉穴完掘状況（東から）





1. 2号炉穴検出状況

2. 2号炉穴焼土面露出状況





1. 2号炉穴完掘状況（東から）
2. 2号炉穴完掘状況（北から）

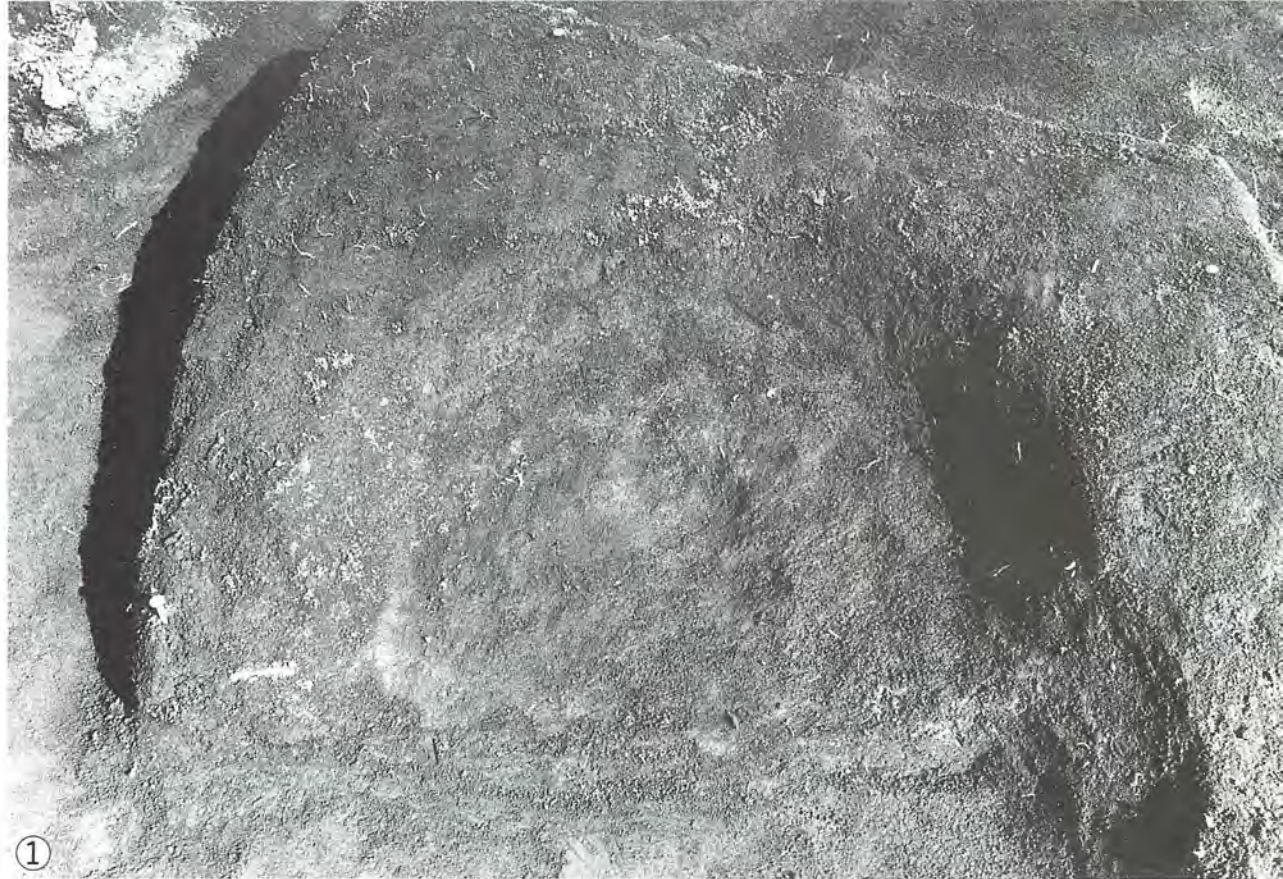




1. 2号集石

2. 2号集石





1. 2号集石下部土坑（東から）
2. 2号集石下部土坑（南から）





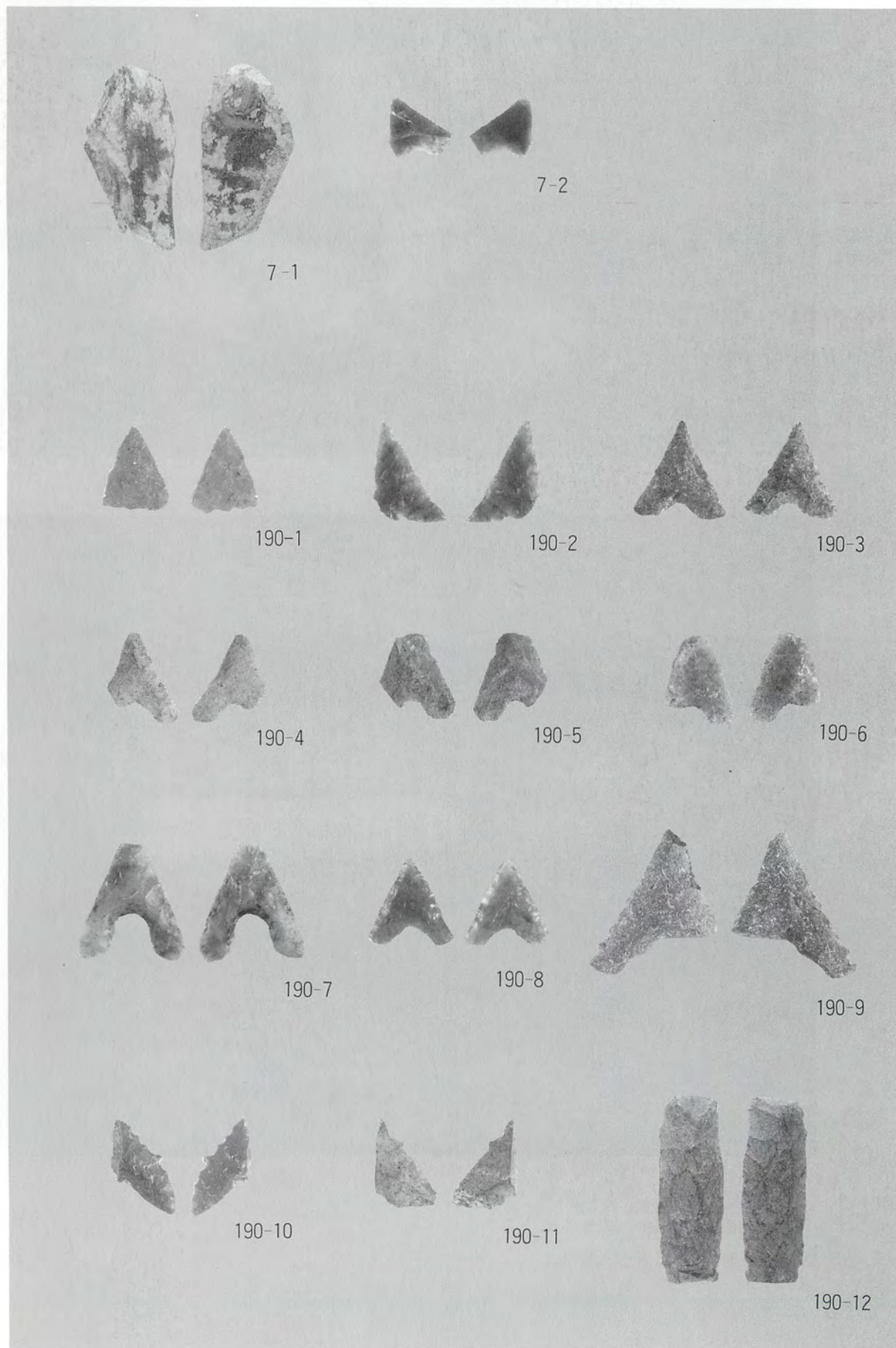
1. 3号集石（石組炉）検出状況
2. 3号集石（石組炉）本体

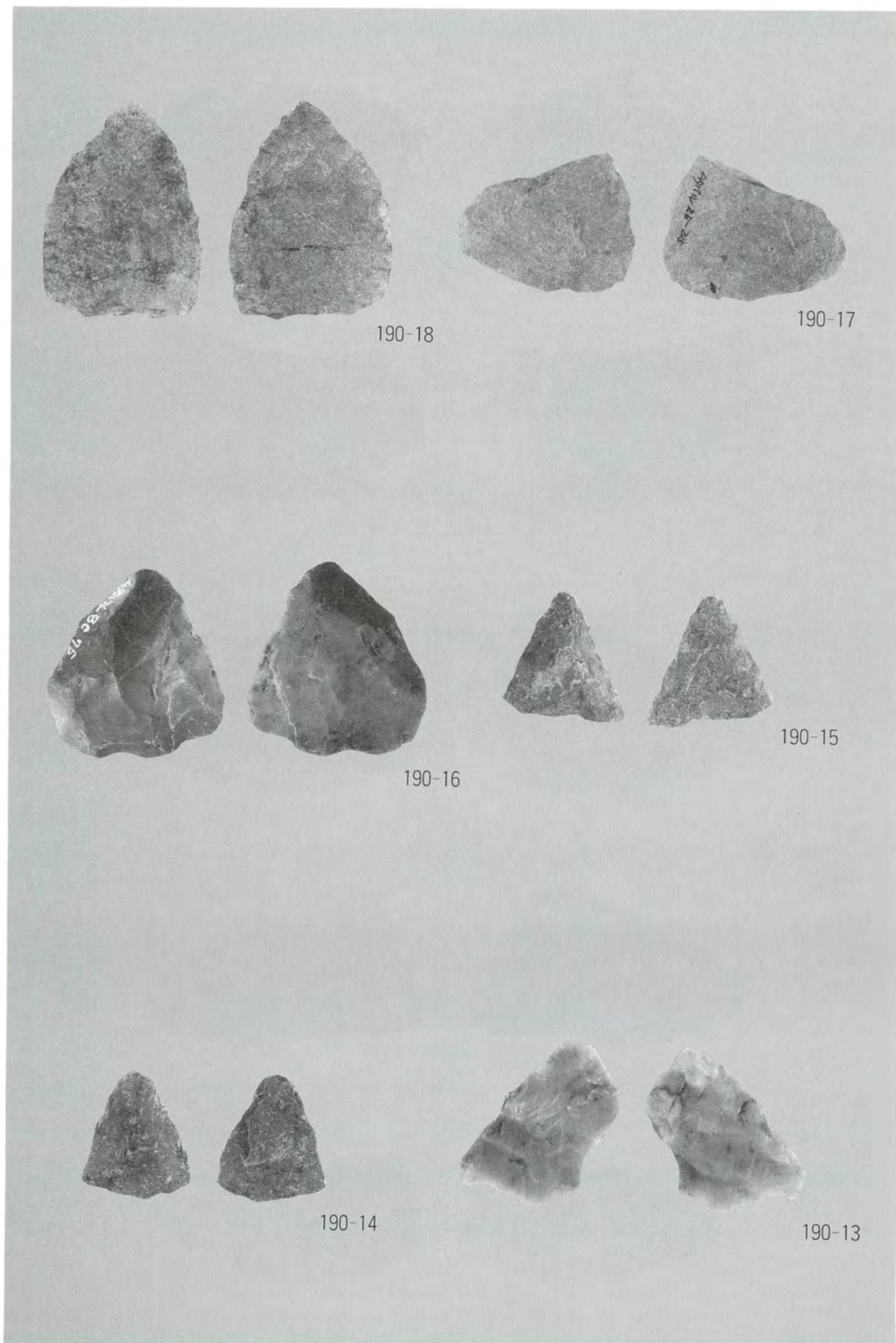




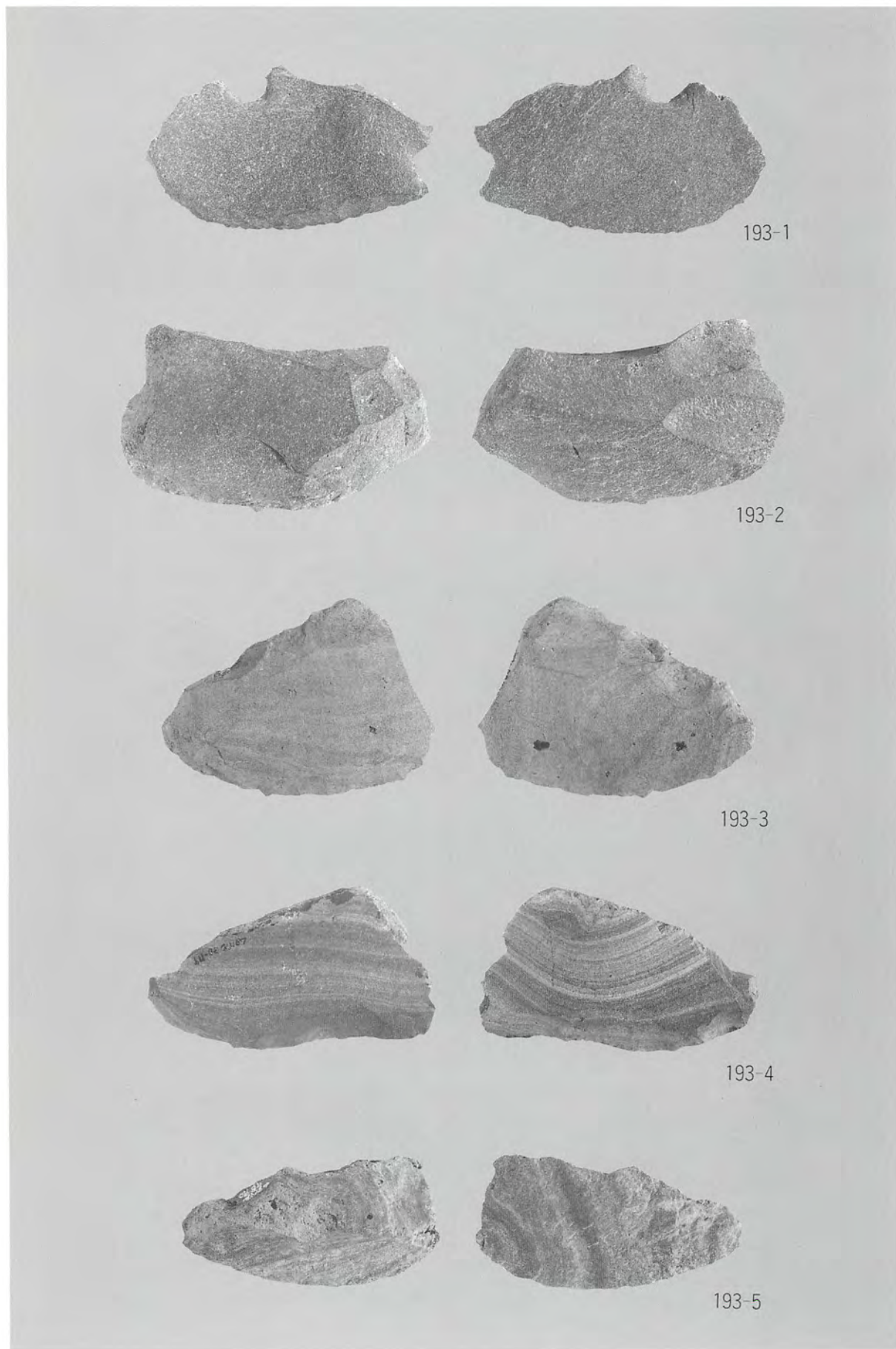
1. 3号集石（石組炉）本体
2. 男性器形石製品出土状況

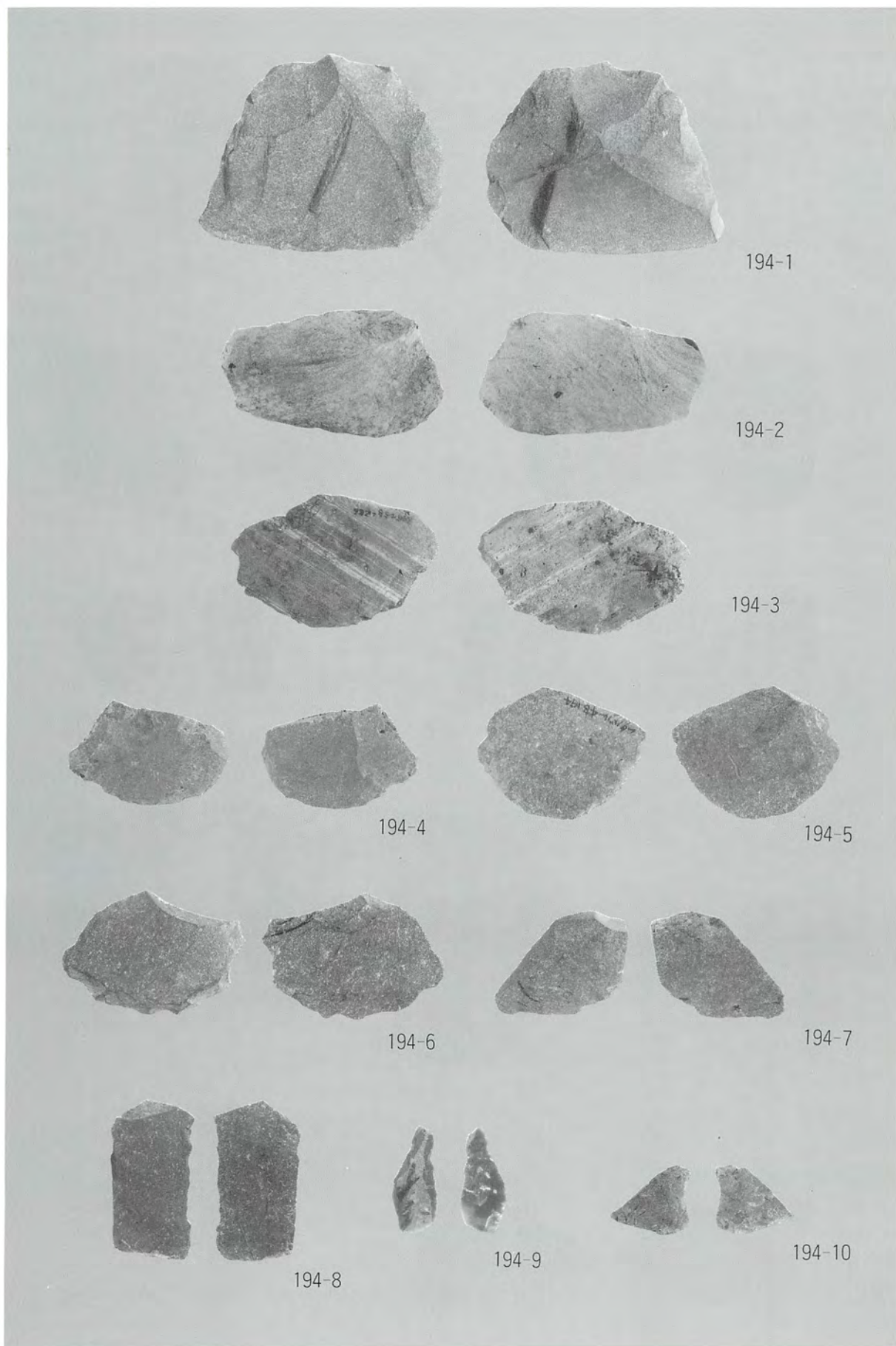




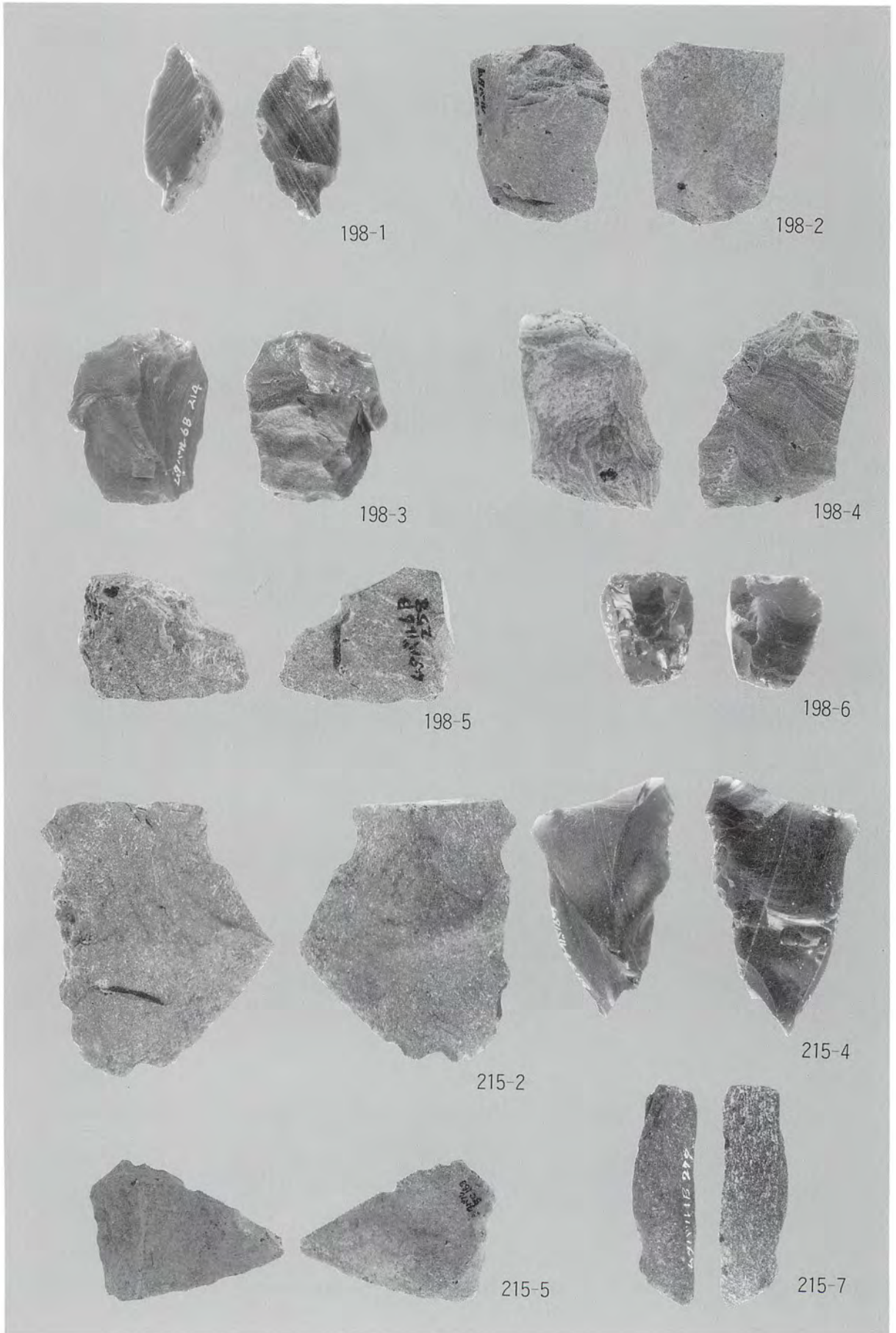




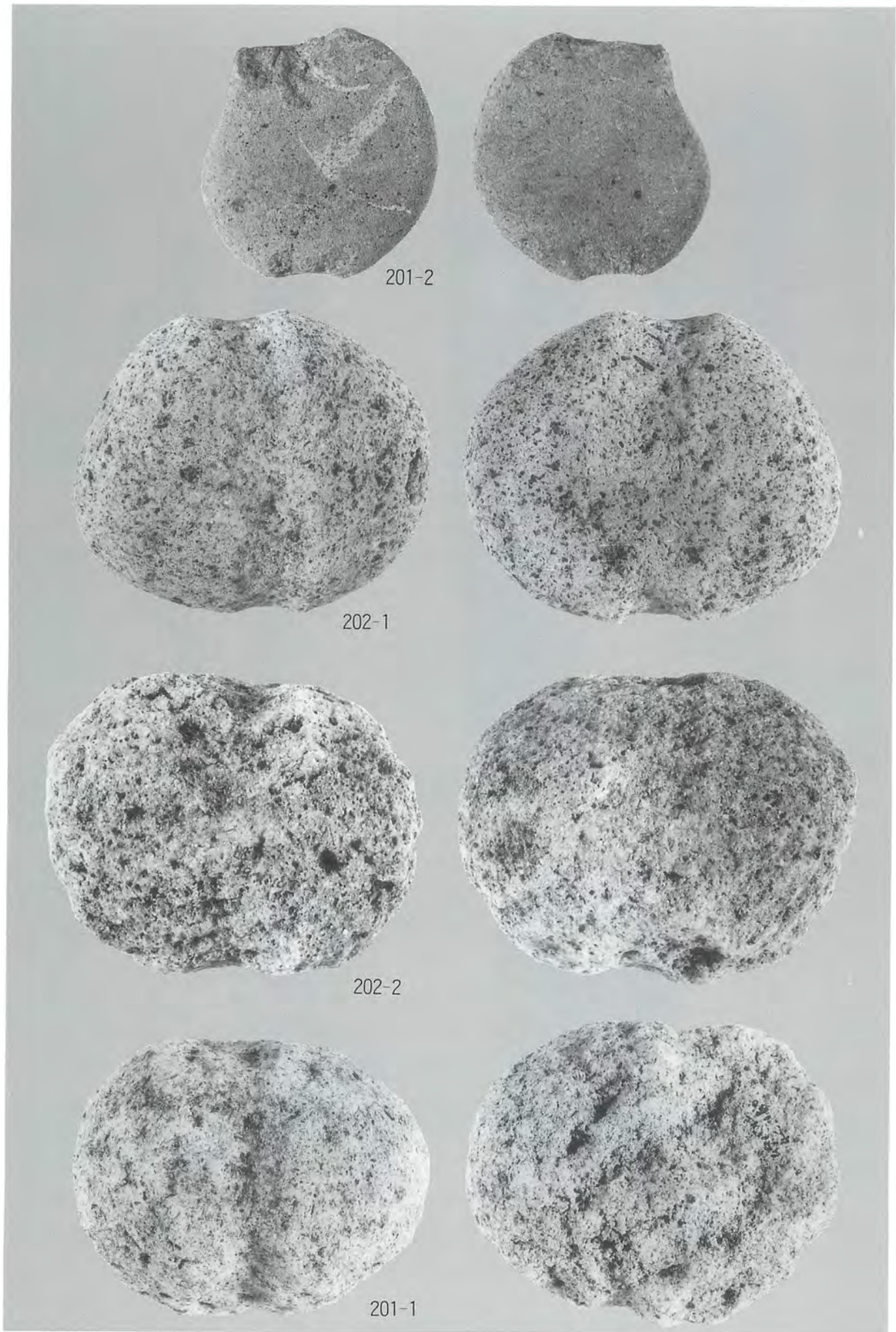




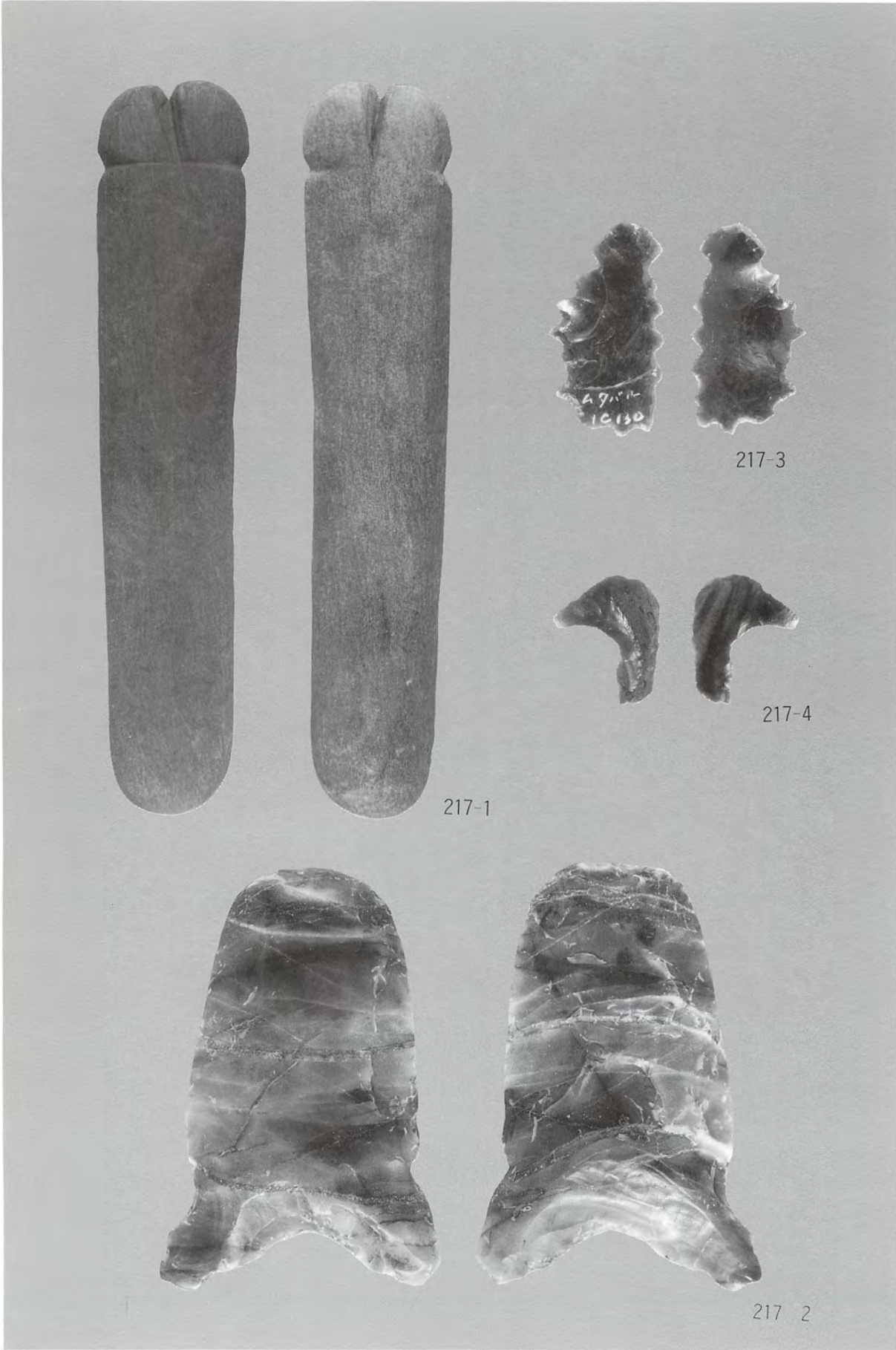












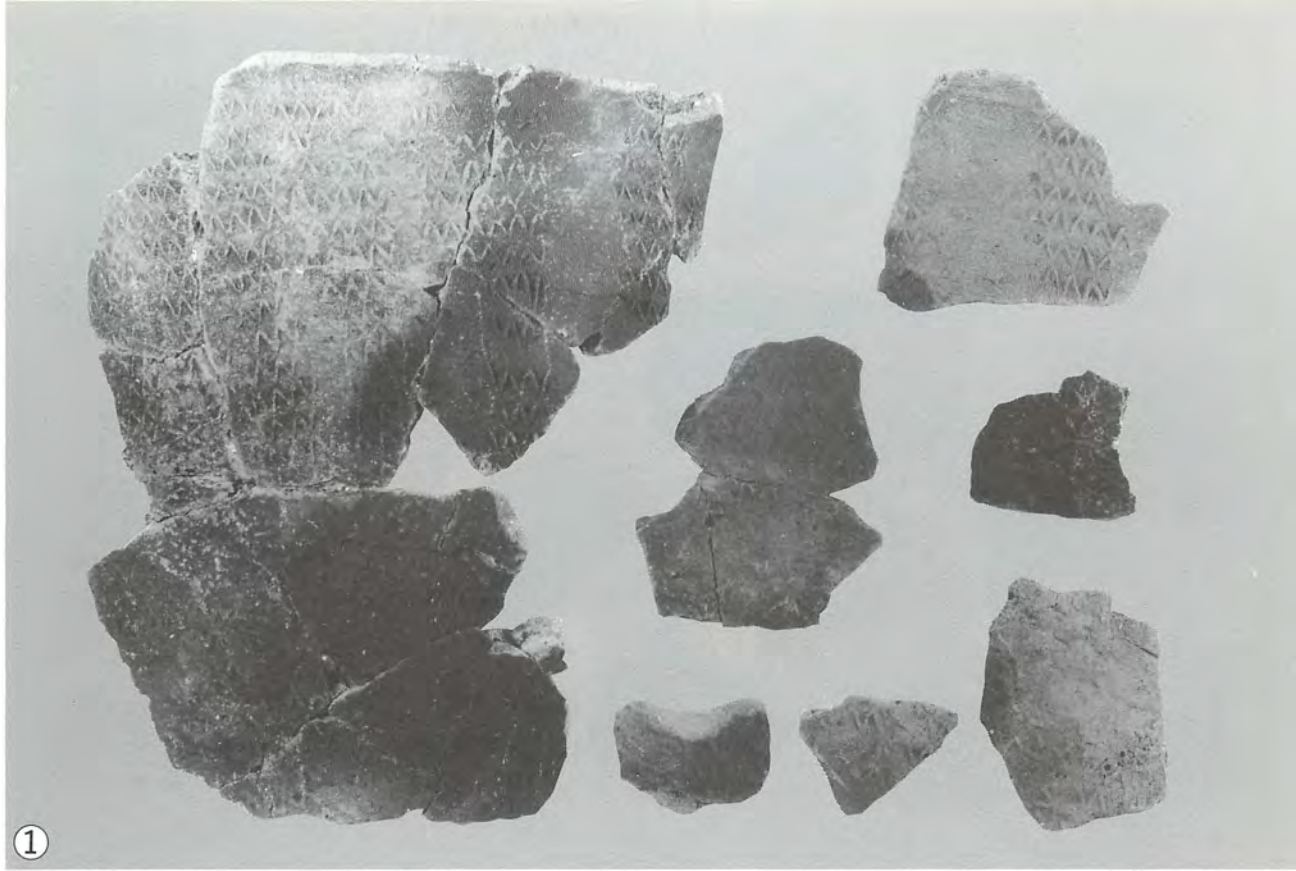
217-1

217-3

217-4

217-2

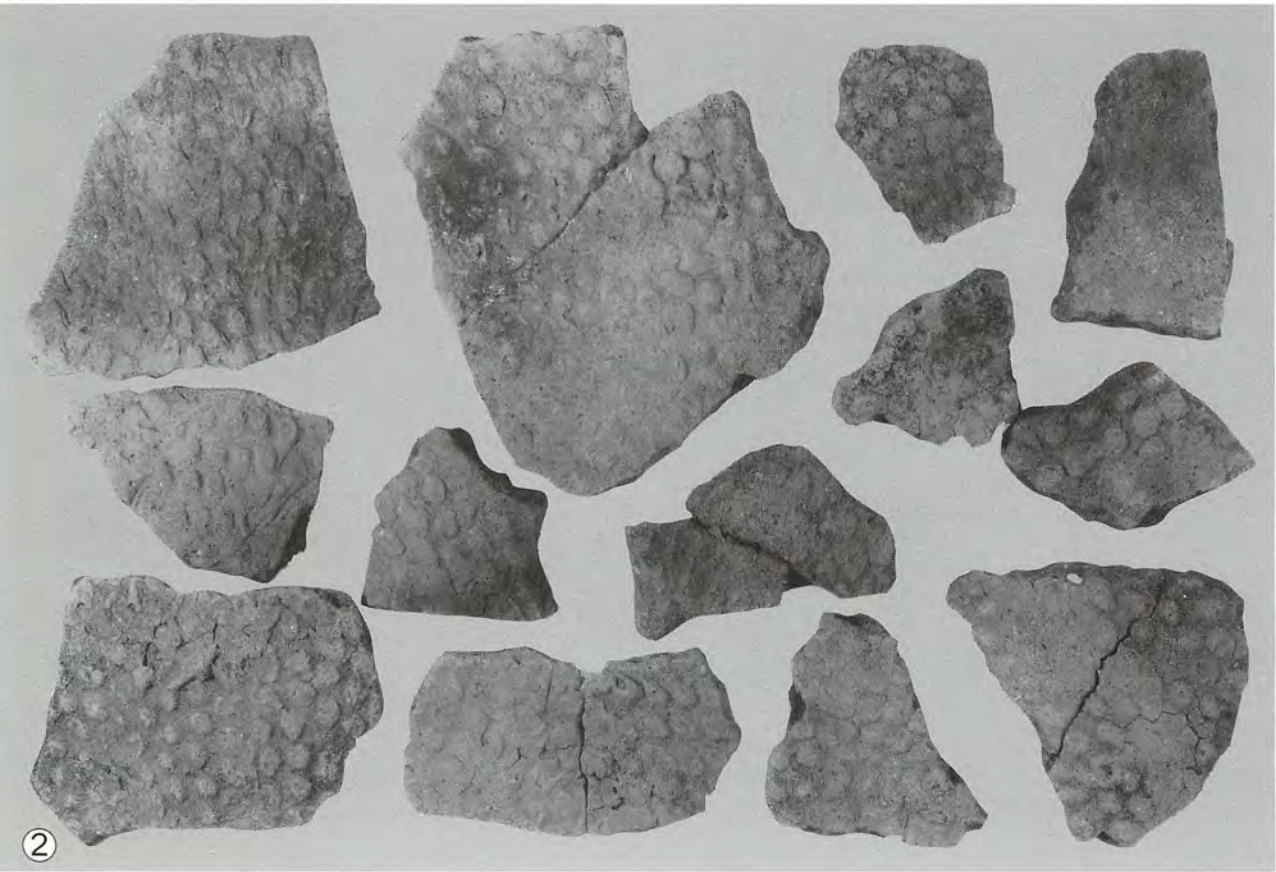
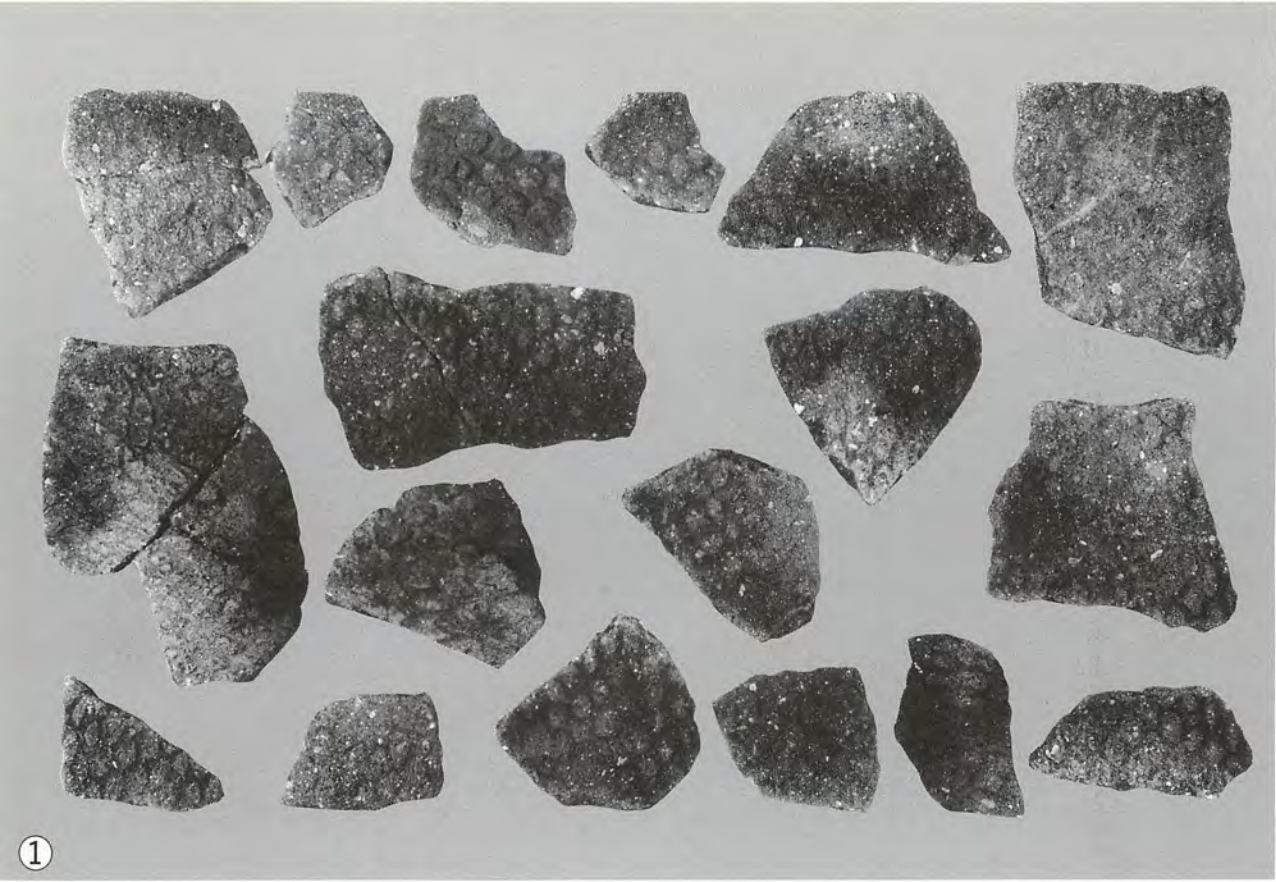




1. 格子目文土器 1

2. 楕円文土器 1

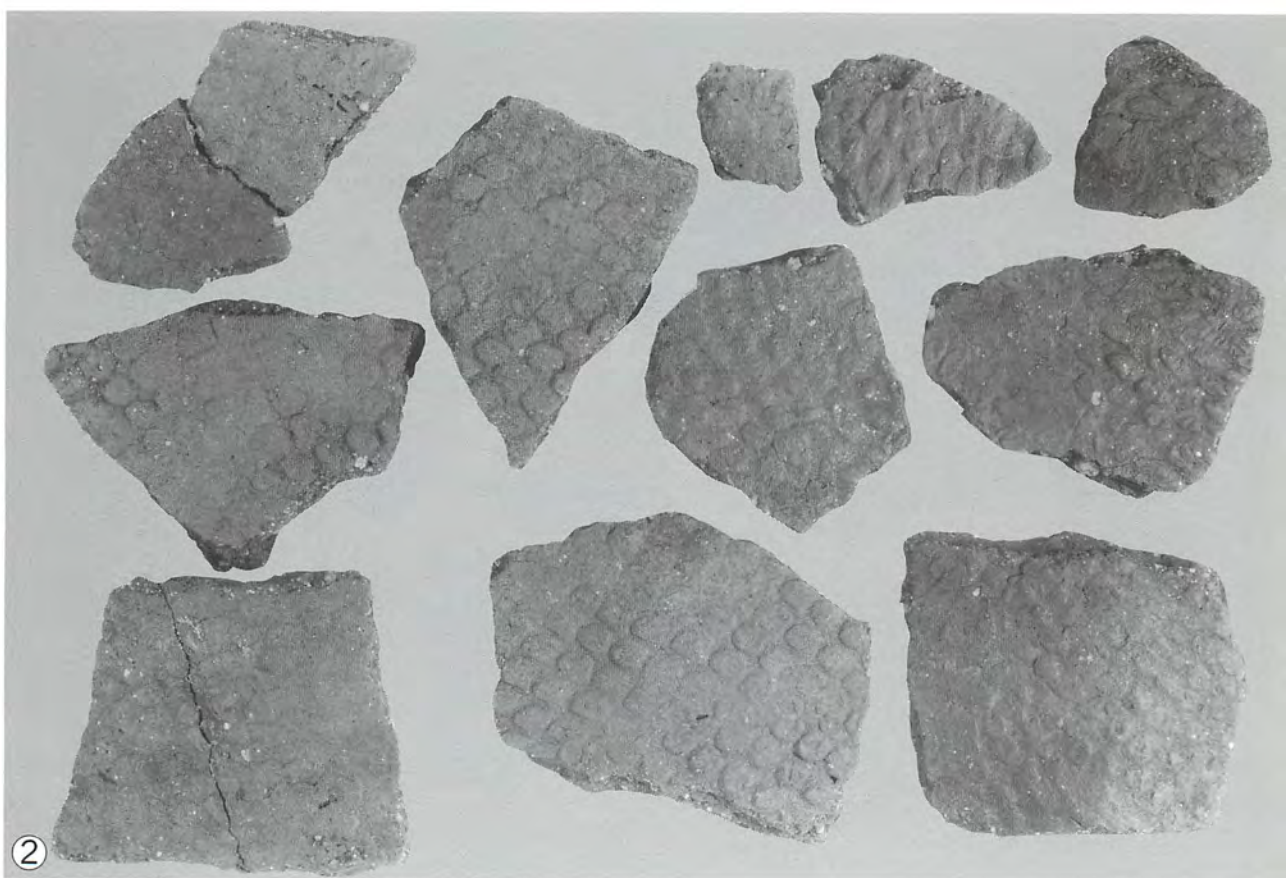




1. 精円文土器 3

2. 精円文土器 4

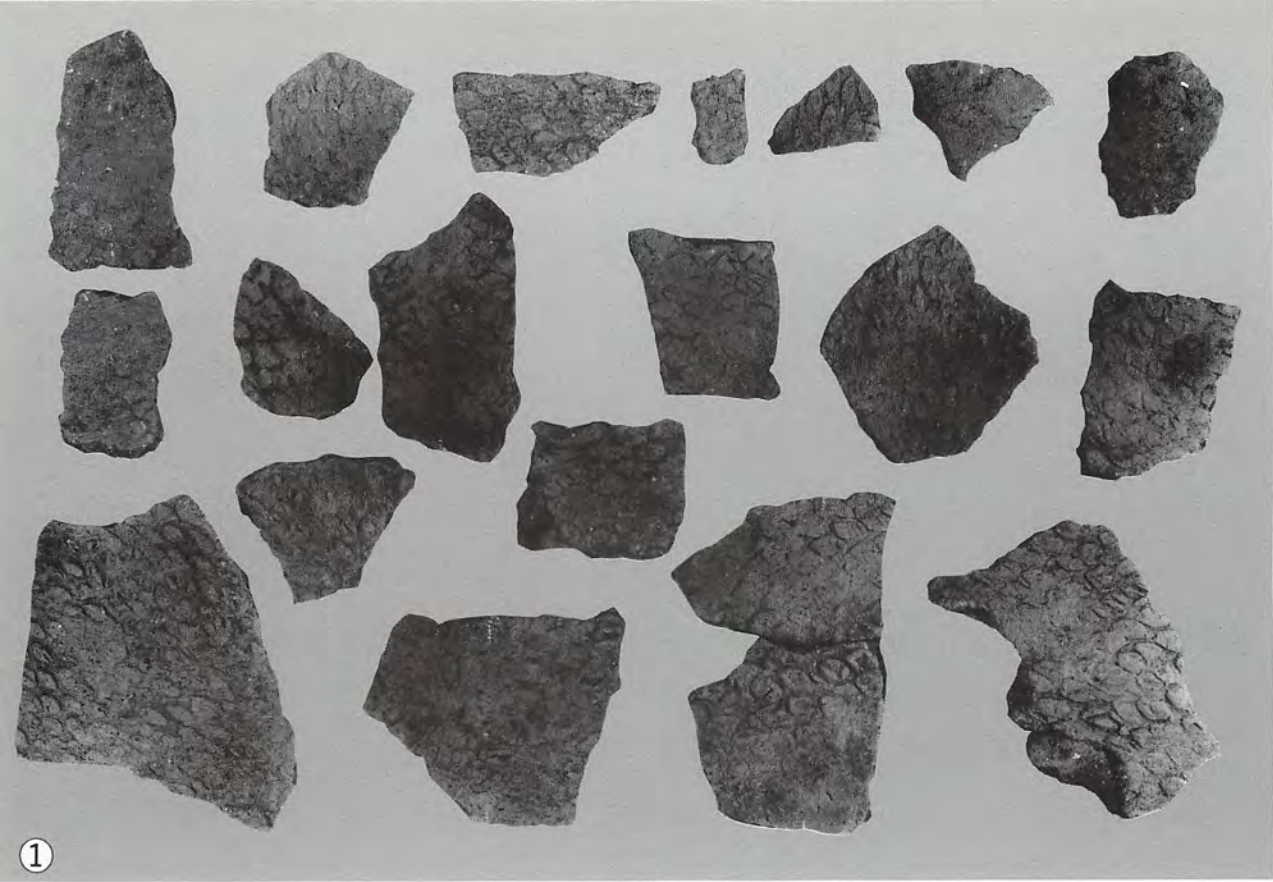




1. 橢円文土器 5

2. 橢円文土器 6





1. 精円文土器 7

2. 精円文土器 8





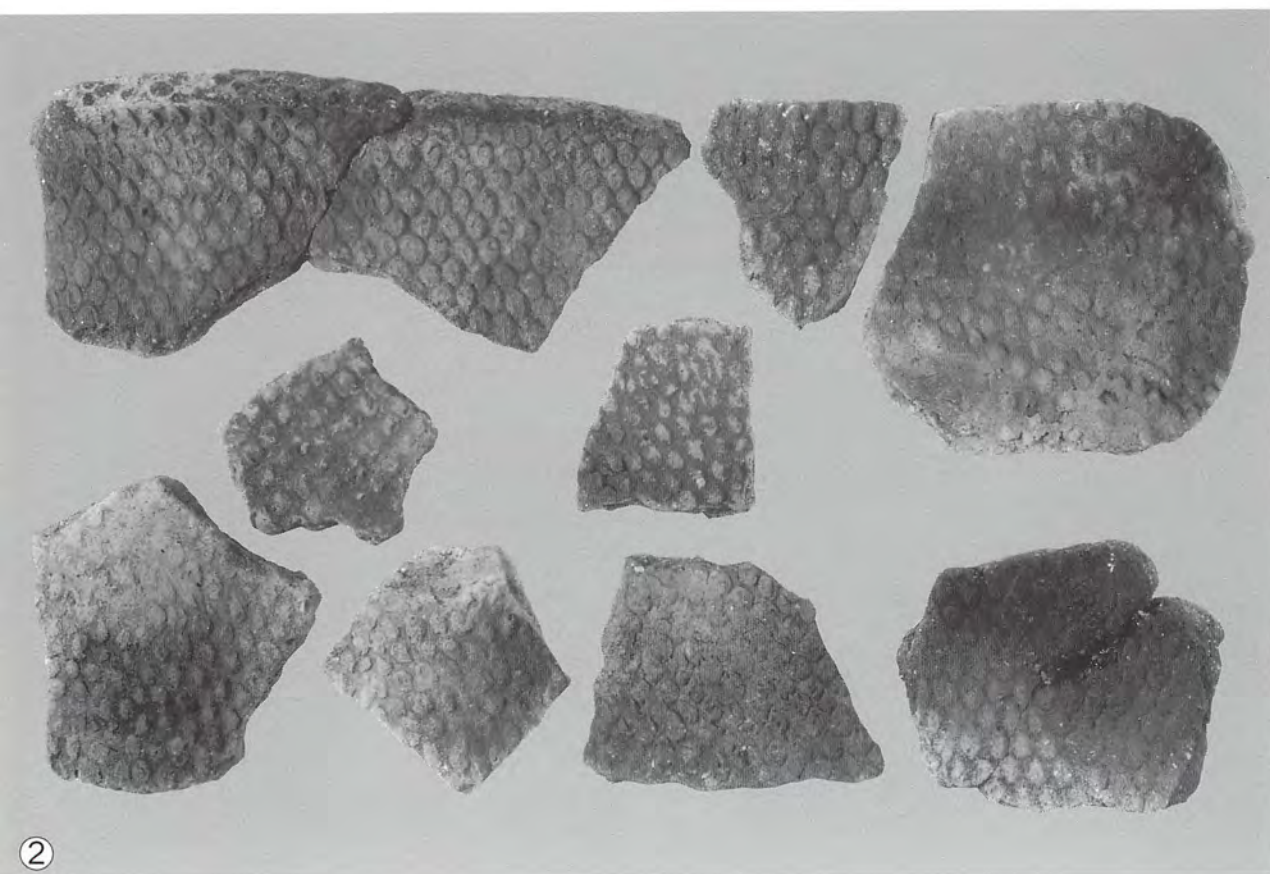
1. 精円文土器 9

2. 精円文土器 10



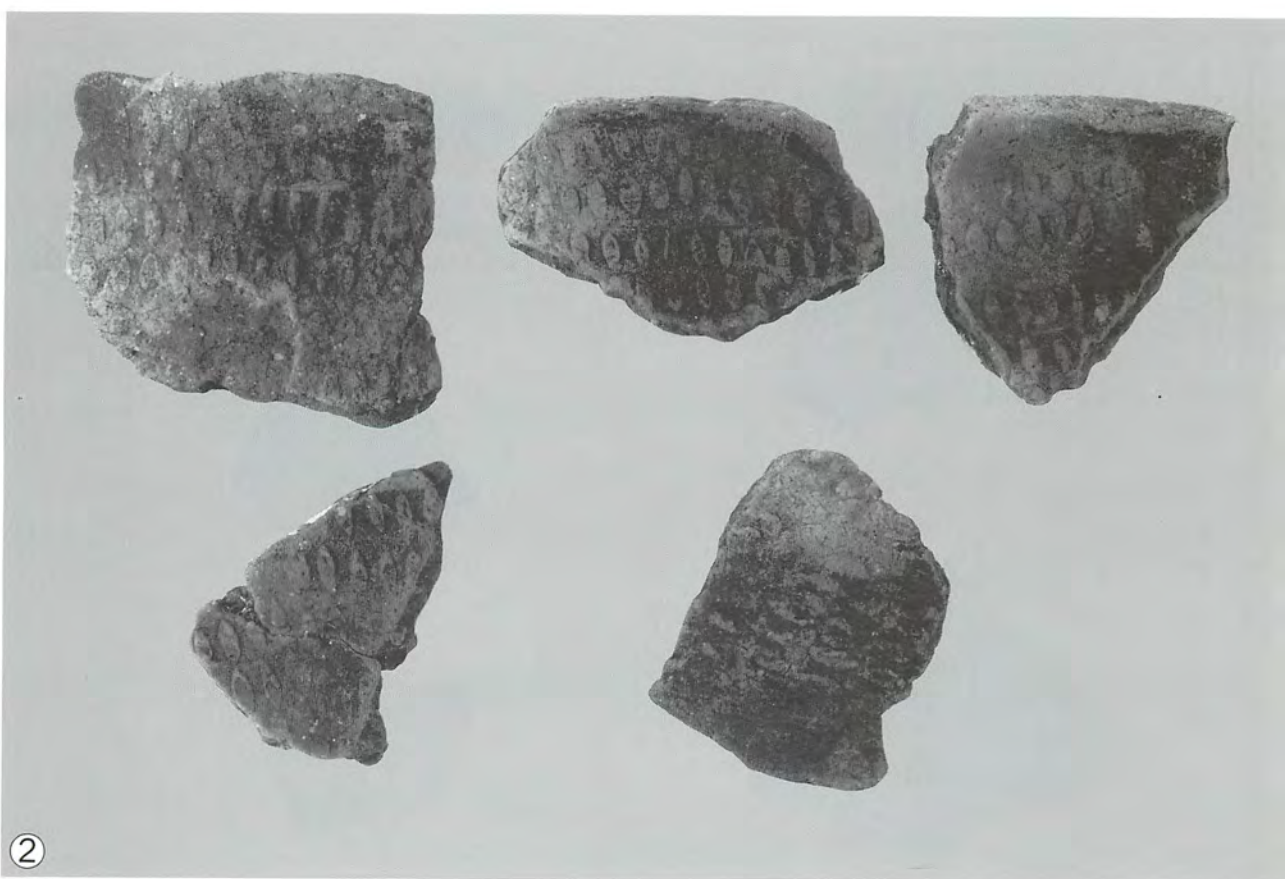
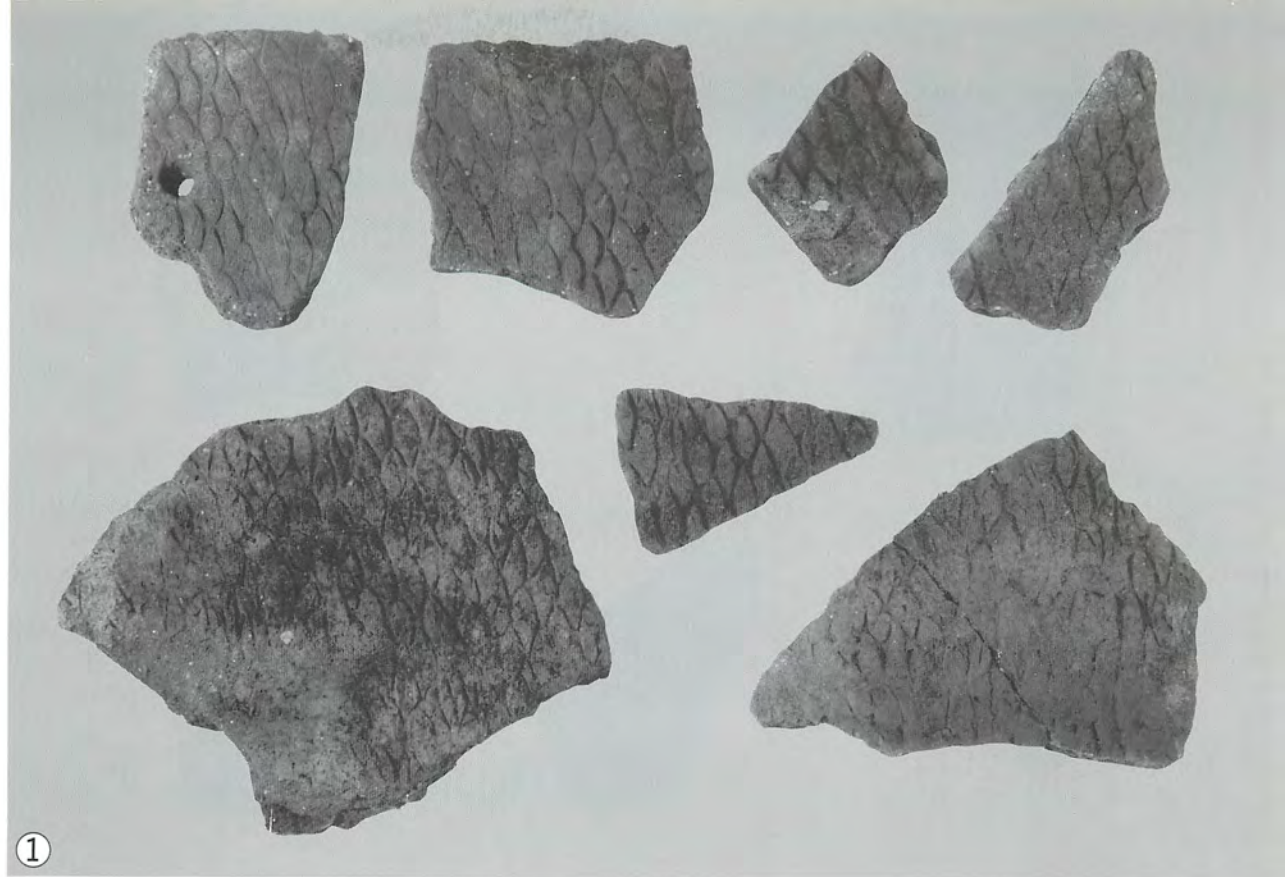


①



②

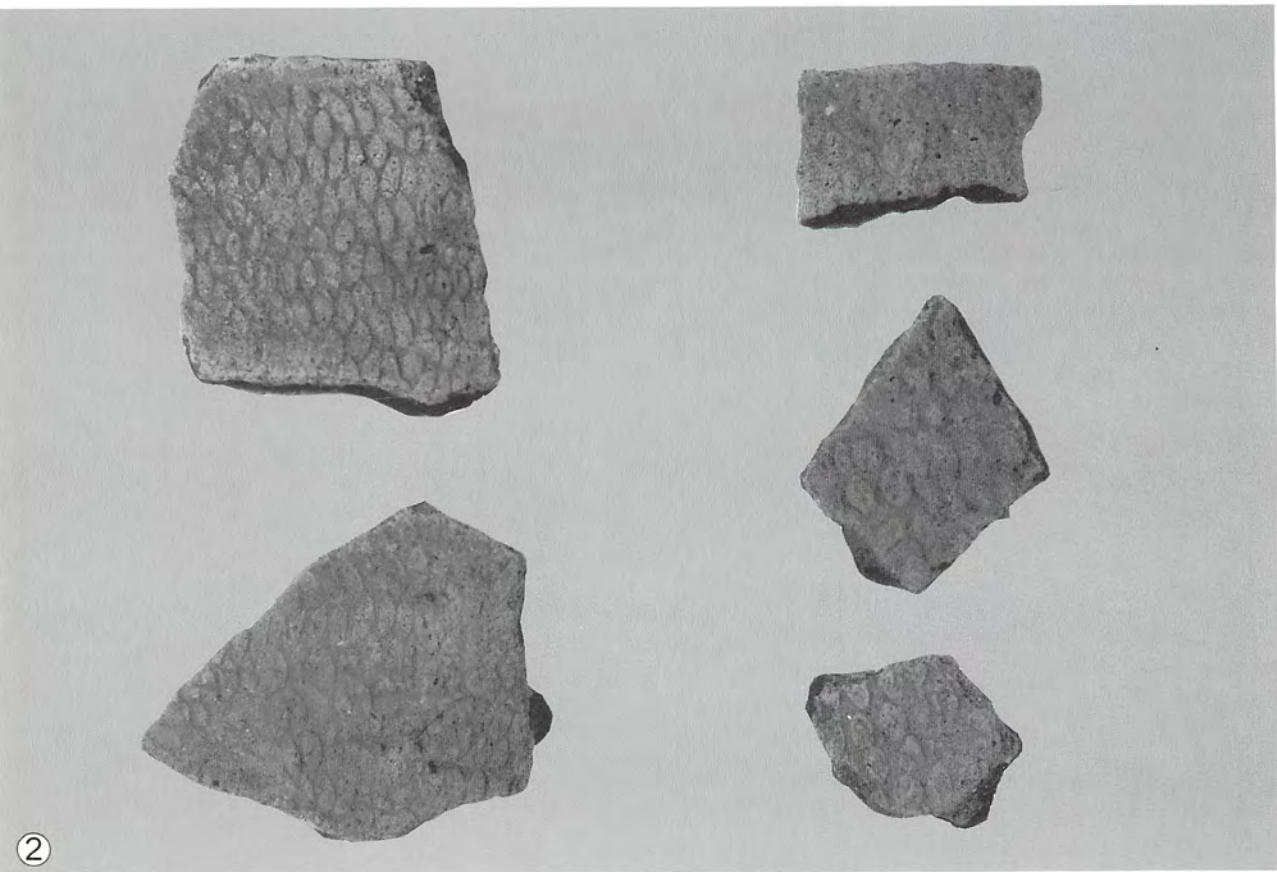
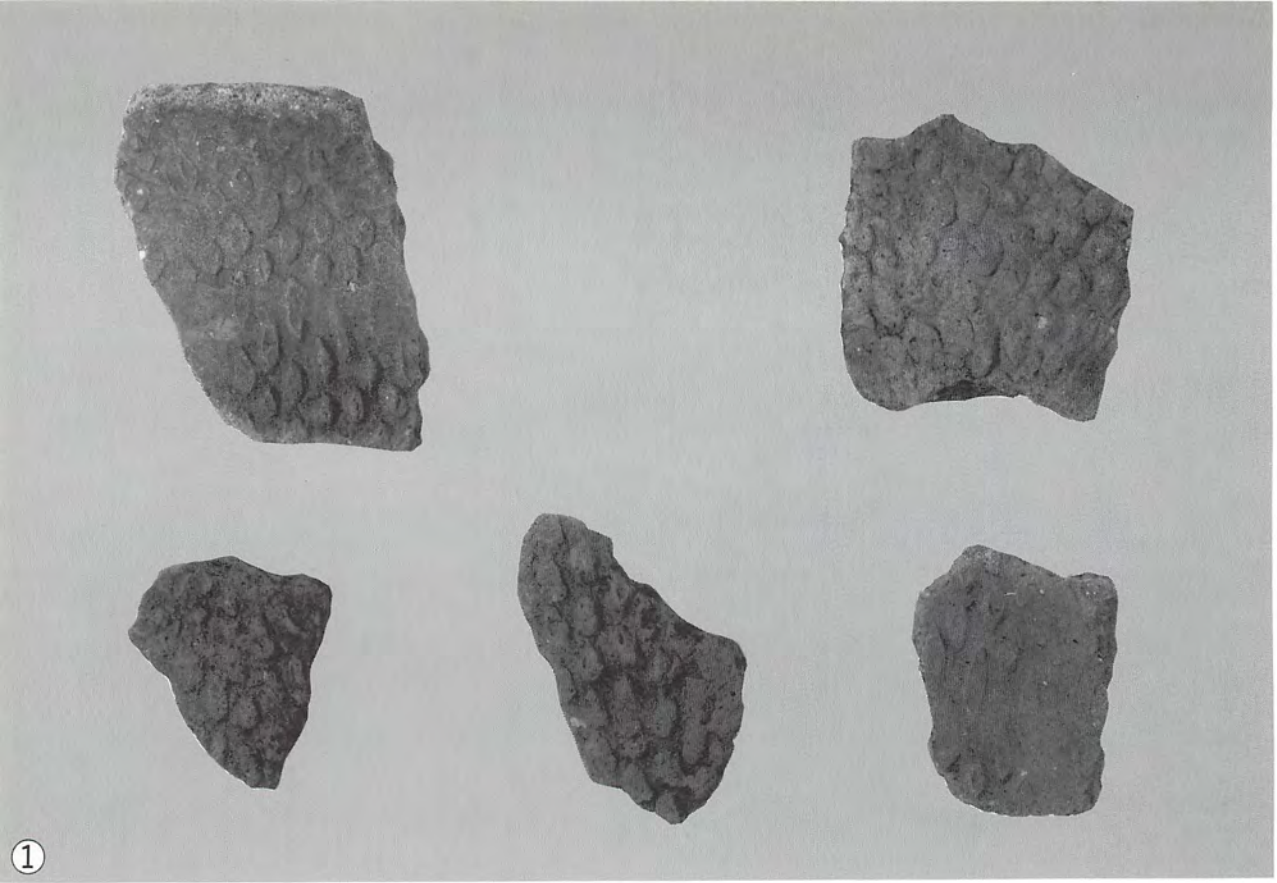
1. 精円文土器11
2. 精円文土器12



1. 菱文土器13

2. 菱文土器14

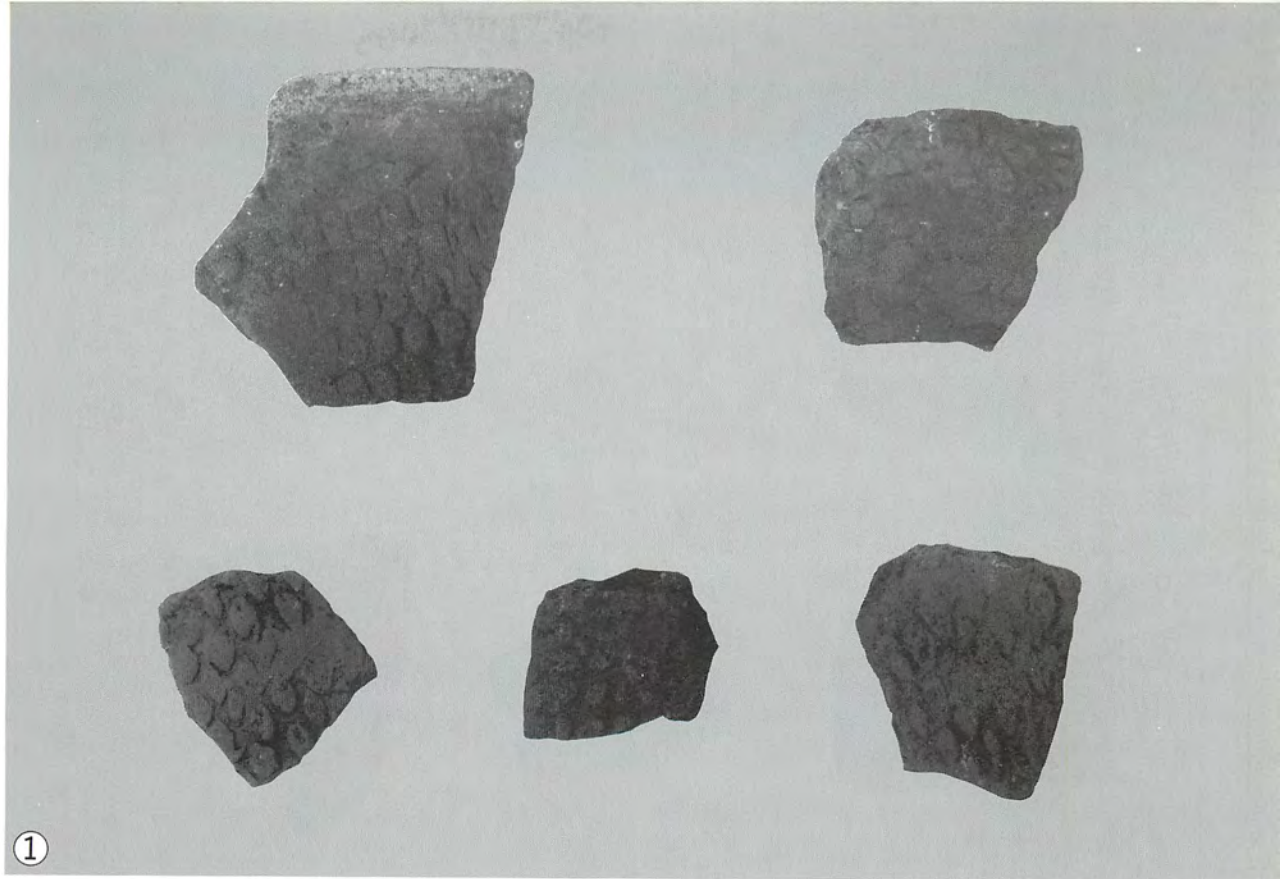




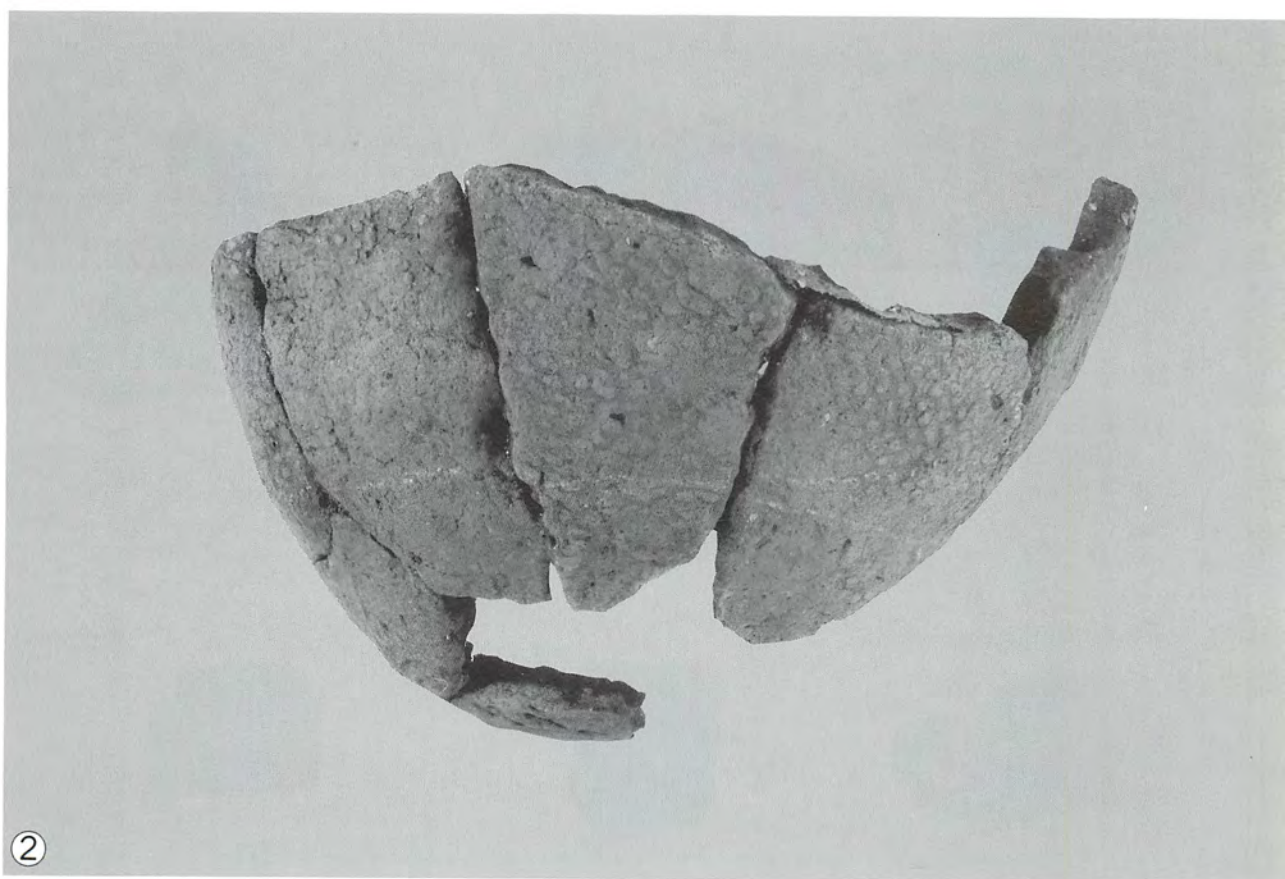
1. 精円文土器16

2. 精円文土器17



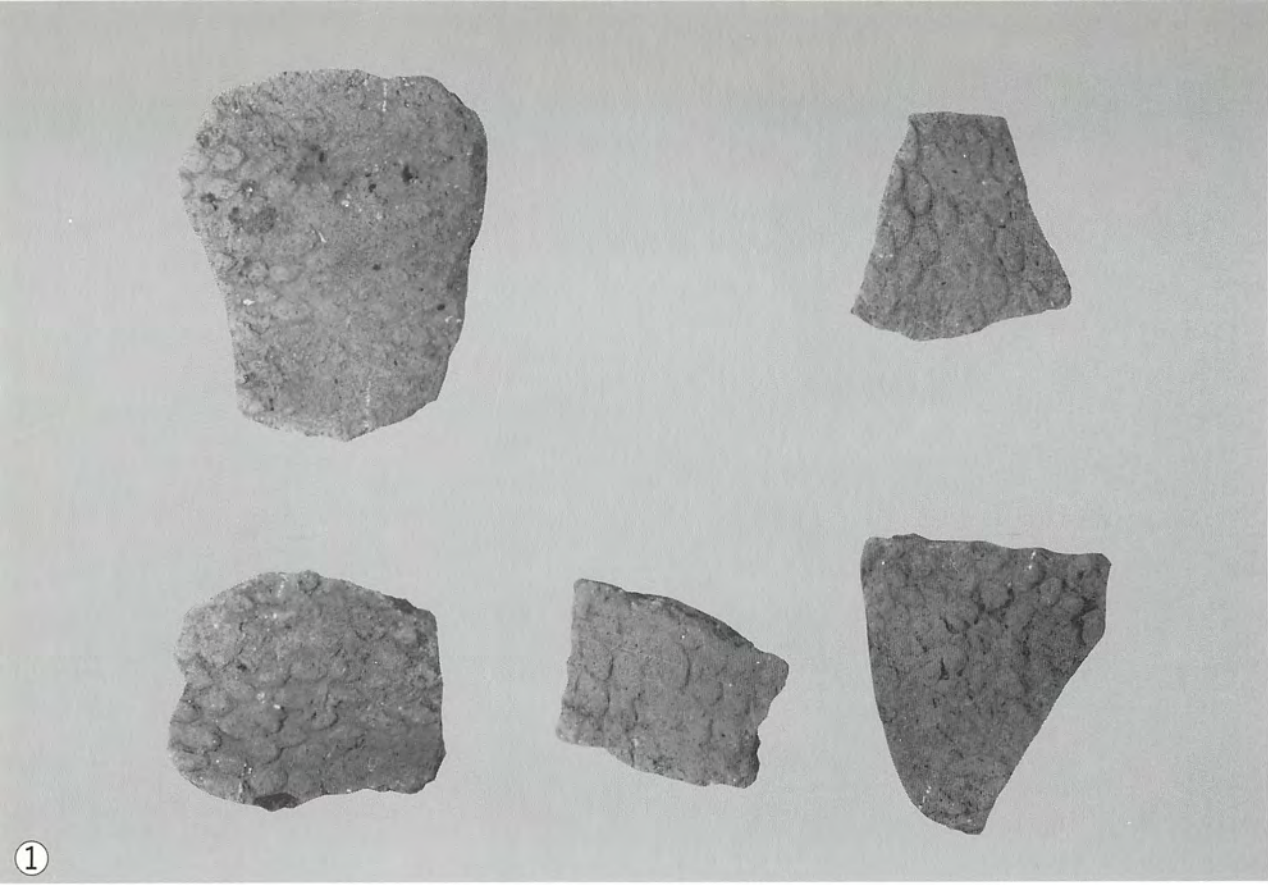


①

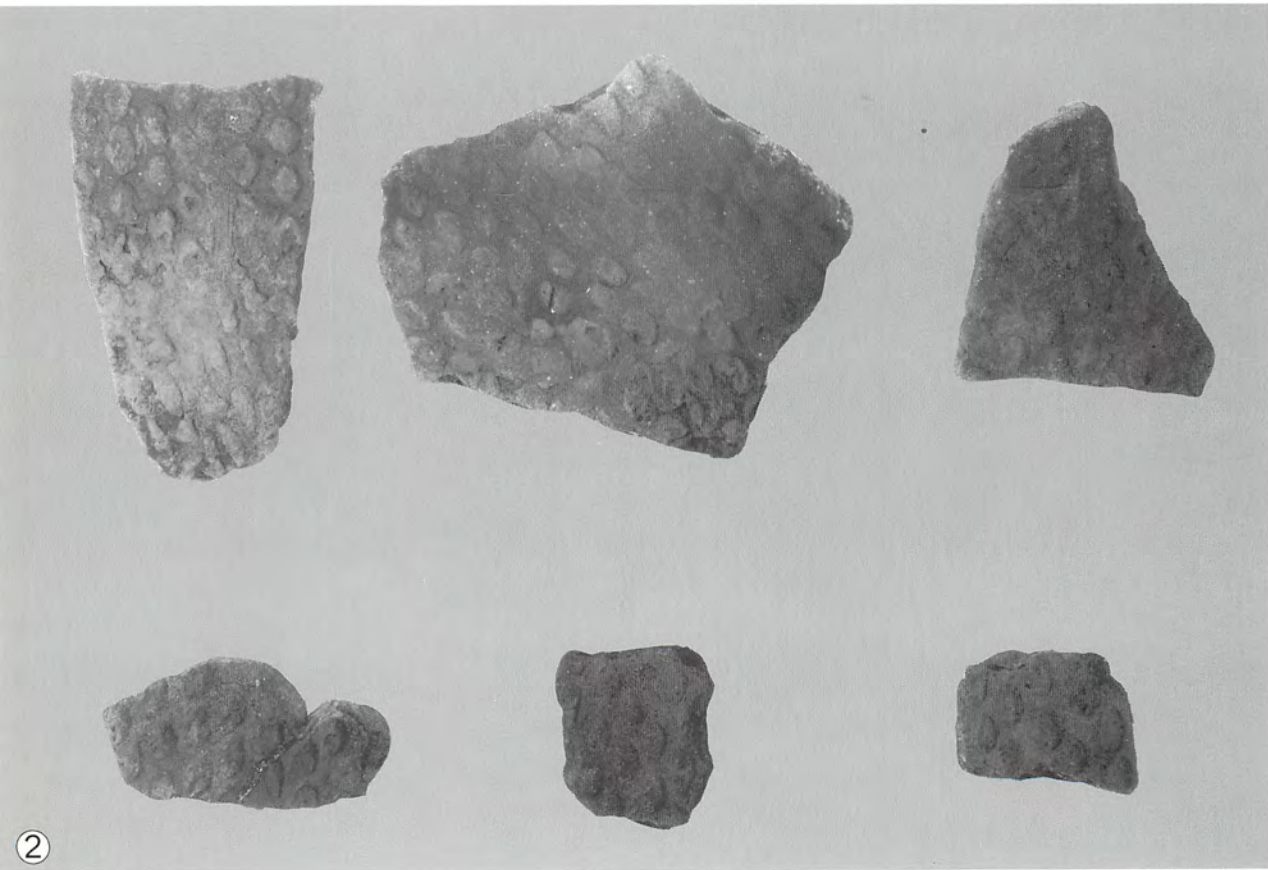


②

1. 橢円文土器18
2. 橢円文土器19



①

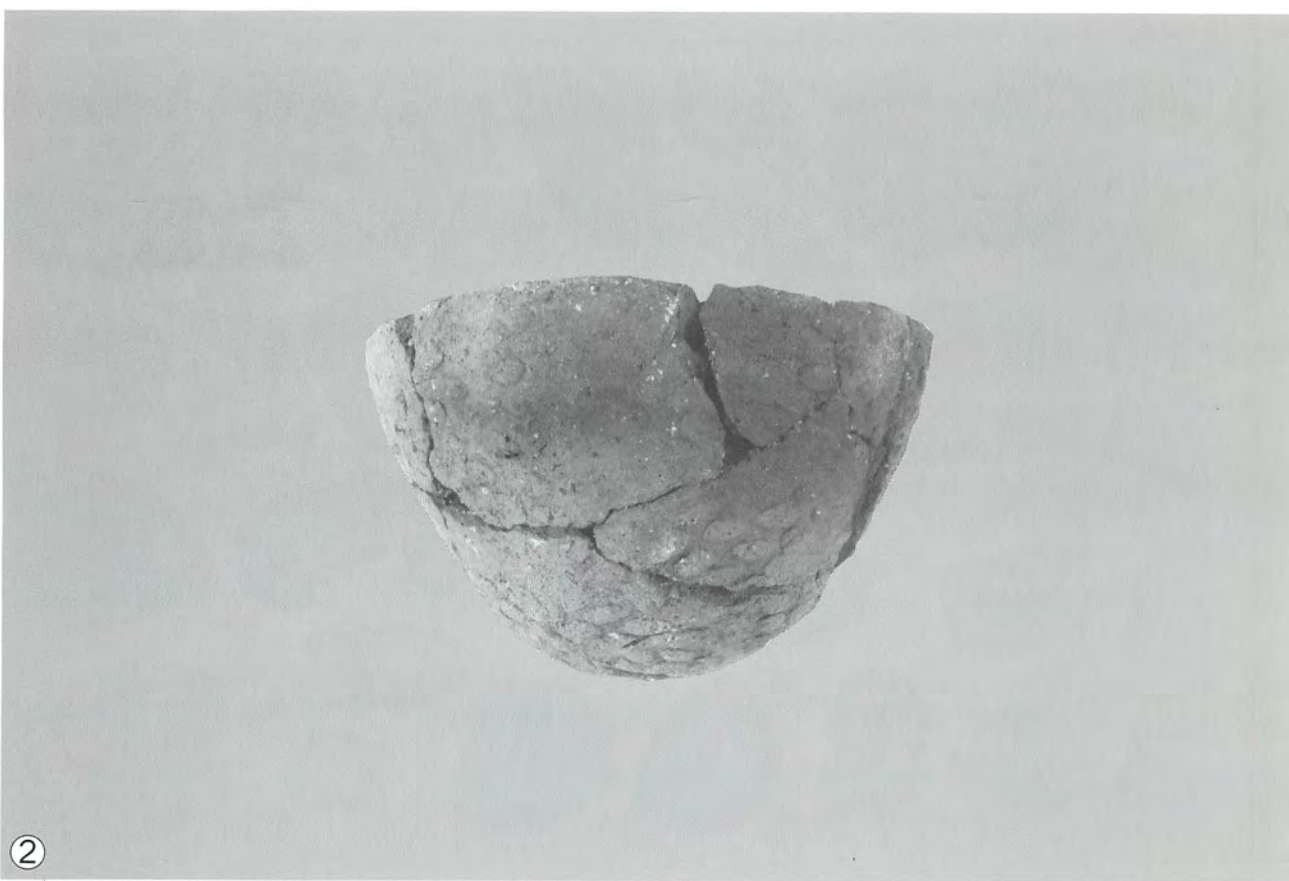


②

1. 橢円文土器21

2. 橢円文土器23





1. 橢円文土器28

2. 橢円文土器第86図22



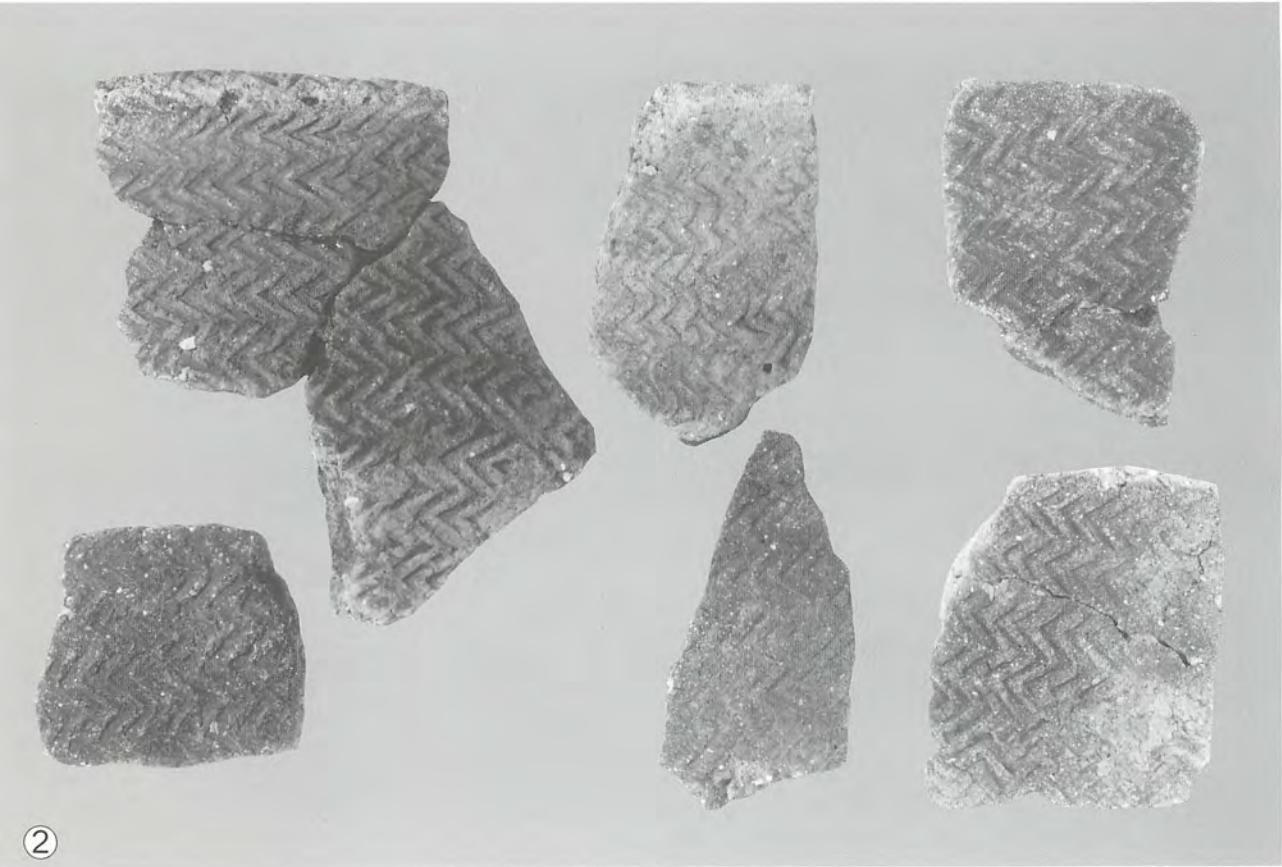
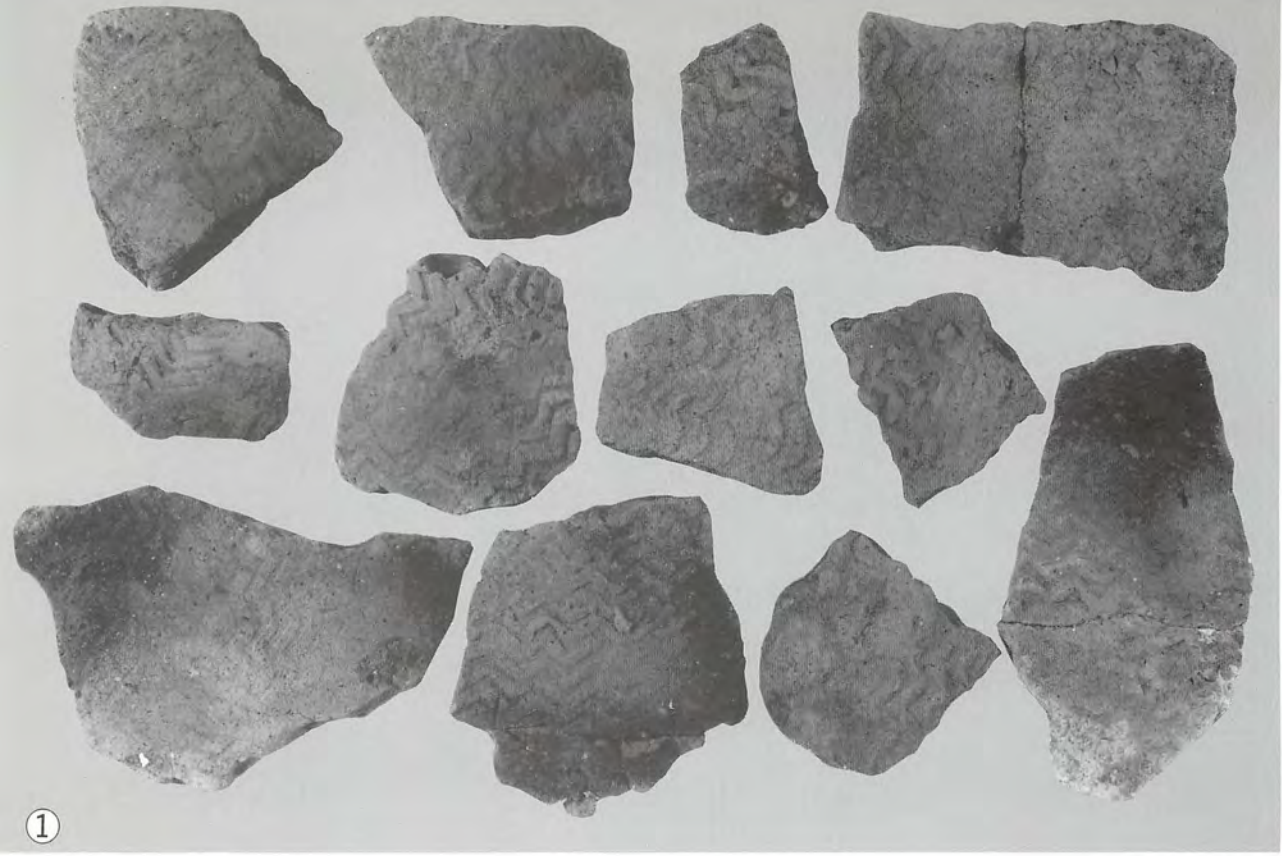
1. 山形文土器 1  
2. 山形文土器 2





1. 山形文土器 3

2. 山形文土器 4



1. 山形文土器 5

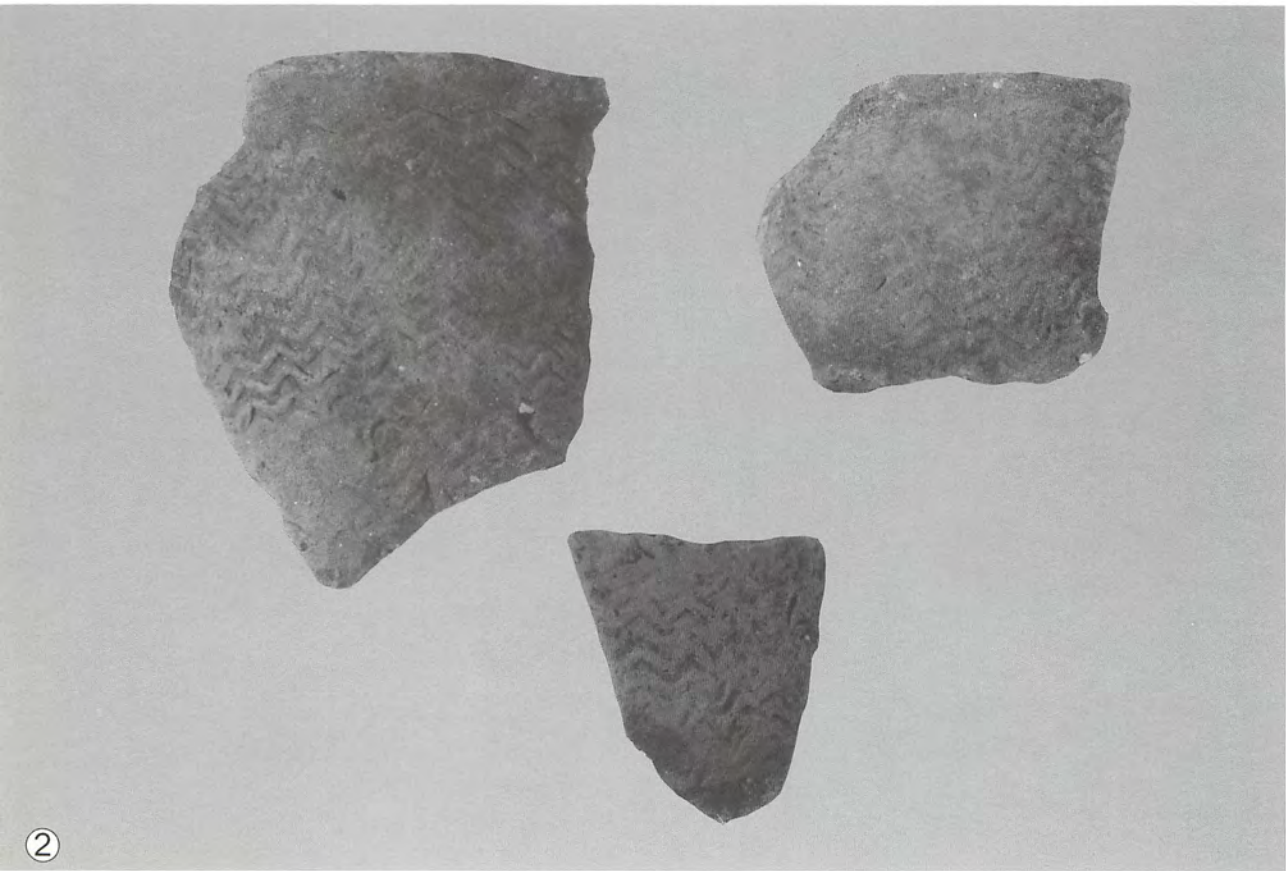
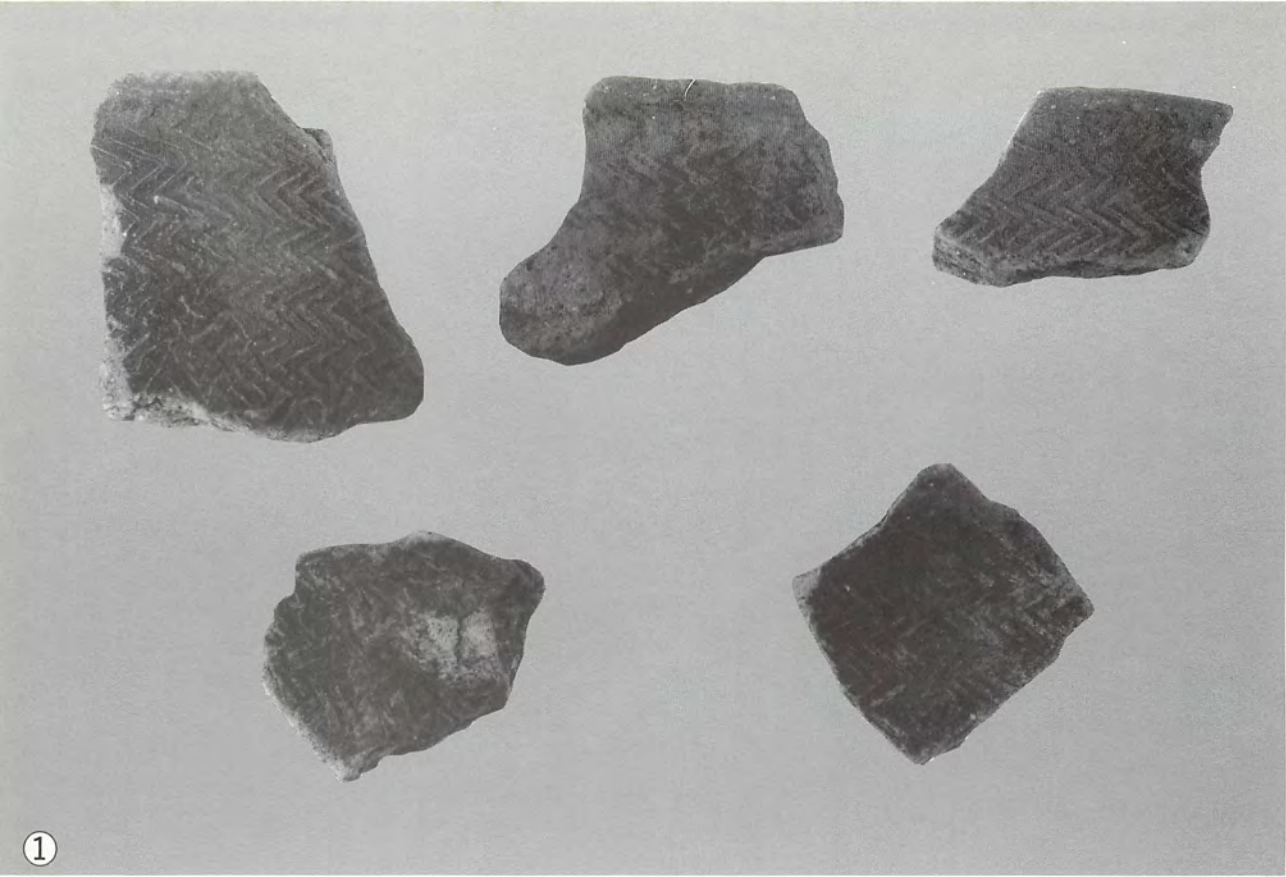
2. 山形文土器 6





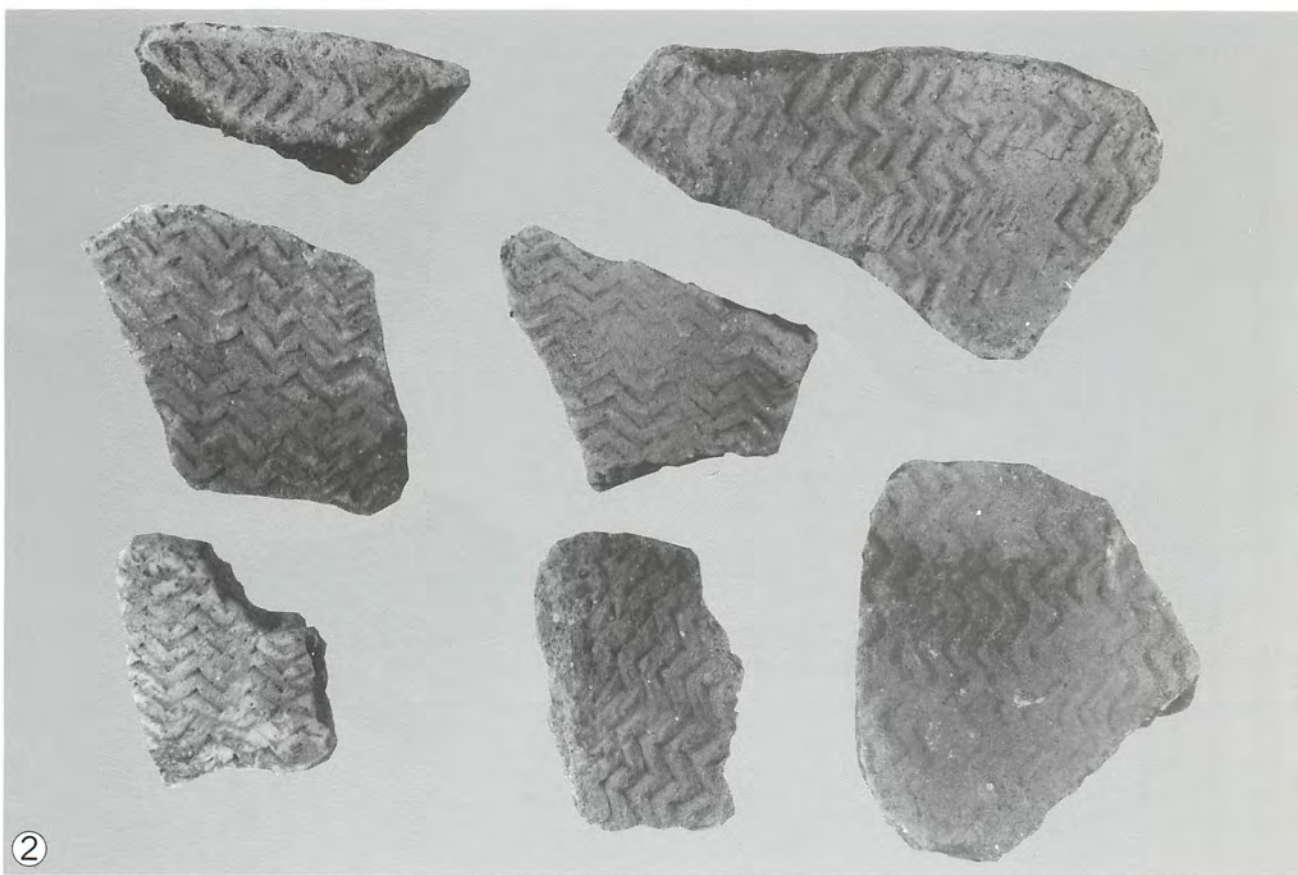
1. 山形文土器 7

2. 山形文土器 8



1. 山形文土器 9  
2. 山形文土器 10



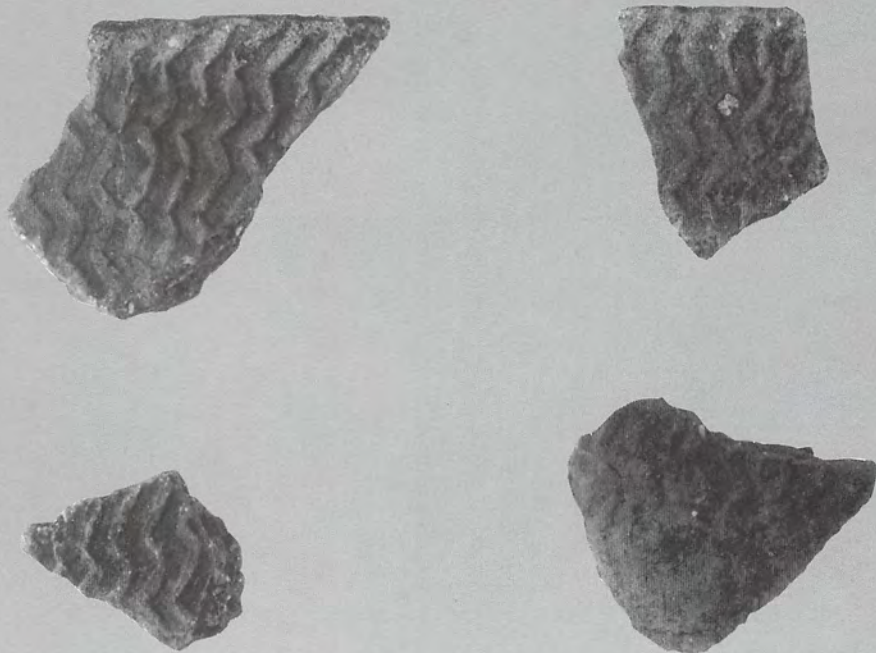


1. 山形文土器11

2. 山形文土器12



①



②

1. 山形文土器13

2. 山形文土器17





1. 山形文土器23

2. 押型文・撚糸文併用土器 1



①

1. その他の押型文・撚糸文併用土器

熊本県文化財調査報告 第148集

**無 田 原 遺 跡**

---

平成7年3月31日

編集 熊本県教育委員会  
発行

印刷 敷島印刷株式会社

〒861-41 熊本市近見町15-1

---





この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 148 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：無田原遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日